

千葉急行線内埋蔵文化財 発掘調査報告書 I

わしやつ 遺跡・かんのおんづか 遺跡・やまのかみ 遺跡
鷺谷津遺跡・観音塚遺跡・山ノ神遺跡
おおもり 遺跡・あらかち 遺跡
大森第一遺跡・荒立遺跡

1983

千葉急行電鉄株式会社
財団法人 千葉県文化財センター

千葉急行線内埋蔵文化財 発掘調査報告書 I

わし やつ かん のん づか やま の かみ
鷺谷津遺跡・観音塚遺跡・山ノ神遺跡
おおもり あらだち
大森第一遺跡・荒立遺跡

1983

千葉急行電鉄株式会社
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県では、半島性の脱却をめざして交通網の整備が急務となっております。その一環として千葉急行計画が具体化し、その建設が進められております。本線は、京成電鉄千葉駅を起点として小湊鉄道海士有木駅を結ぶ全長 19 km の鉄道線で、住宅・都市整備公団によって造成工事が進められている千葉東南部ニュータウン、市原千原台ニュータウンをはじめ辰巳台団地、国分寺台ニュータウンとを結ぶ鉄道線であります。建設予定地域は御承知のとおり、古くから遺跡の存在が知られているところであり、このため千葉県教育委員会は、路線内の遺跡の分布調査を実施し、その取扱いについて日本鉄道建設公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。

その結果、鉄道建設という公共性から、建設地内に所在する遺跡についてはやむを得ず記録保存の措置をとることとなり、千葉県教育委員会の依頼で、当千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになりました。調査は昭和 53 年度からはじめられ、現在までに 11 遺跡が調査終了しております。

このたび、これらのうち昭和 53 年度調査分、5 遺跡について整理事業が終了し、本報告書刊行のはこびとなりました。本書には、縄文時代から奈良・平安時代にいたるまでの遺構、遺物を収録してありますが、特に観音塚遺跡における鍛冶工房跡の発見は集落内での鉄製品の生産、再生産が行われたことを示す貴重なものです。

本書が学術的な資料としてはもとより、教育資料としてもまた、文化財保護思想の涵養のためにも広く一般の方々に活用されることを望んでやみません。

最後に発掘調査開始から今日に至るまで調査に御理解をいただいた日本鉄道建設公団並びに千葉急行電鉄株式会社の御協力と、千葉県教育庁文化課をはじめ関係諸機関の御指導、助言に感謝の意を表するとともに、酷寒、酷暑の中で調査に従事された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和 59 年 3 月

財団法人千葉県文化財センター
理事長 今 井 正

例 言

1. 本書は、千葉急行電鉄株式会社による千葉急行線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に所収される内容は、昭和53年度に調査が行われた鷲谷津遺跡・観音塚遺跡・山ノ神遺跡・大森第一遺跡・荒立遺跡の発掘調査報告書であるが、観音塚遺跡については昭和54年度の調査分も含んでいる。
3. 発掘調査は、千葉急行電鉄株式会社の依頼と、千葉県教育庁文化課の要請と指導を得て、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
4. 発掘調査は、調査部長 西野 元(昭和53年度)、班長 岡川宏道(昭和53年度)の指導の下に、調査研究員 森 尚登・相京邦彦が担当した。
5. 整理作業は、調査部長 西野 元(昭和53年度)、同 白石竹雄、部長補佐 山田友治(昭和54年度)、同 栗本佳弘(昭和55年度)、同 中山吉秀(昭和56年度)、同 天野 努(昭和57年度)、同 根本 弘、班長 堀部昭夫(昭和54、55年度)、同 三森俊彦(昭和56年～)の指導の下に下記の調査研究員が担当した。
昭和53年度 森 尚登、相京邦彦
昭和54年度 相京邦彦、高橋博文、白石 浩
昭和55年度 相京邦彦、高橋博文
昭和56年度 相京邦彦、柳 晃
昭和57年度 相京邦彦、田井知二、海老原充
昭和58年度 相京邦彦
6. 本書の執筆は、白石竹雄、根本 弘、三森俊彦の助言のもとに相京邦彦が執筆した。
7. 本書の編集は、白石竹雄、根本 弘の助言のもとに三森俊彦の指導で、相京邦彦が行った。
8. 発掘調査に際しては、千葉県教育庁文化課・千葉市教育委員会・千葉急行電鉄株式会社、および故斎藤 均氏をはじめ多くの調査補助員、地元の方々の協力を得た。記して感謝の意を表す次第です。

凡 例

- 1 本書の遺構番号は、現場作業において使用した番号をできるだけ使用したが、欠番などにより多少変更したのものもある。その場合、() 内に調査時の番号を併記した。
- 2 航空写真、遺構写真の一部は斎藤博明氏の手をわずらわしたものがある。
- 3 本書における遺構・遺物の実測図は、特別の記載のないかぎり、下記のとおり縮尺を統一した。

遺構

住居跡	平面図・土層断面図・遺構断面図・遺物出土状況図	1/80
	カマド	1/40
	炉	1/20
	柱穴	1/40
掘立柱建物跡	平面図・土層断面図・遺構断面図	1/80
土壌	平面図・土層断面図・遺構断面図	1/40
溝状遺構	平面図・土層断面図	1/80
集石遺構	平面図	1/80
包含層		1/40
土塁		1/400
遺跡地形図		1/1,000
遺構配置図・グリッド配置図・トレンチ設定図		1/1,000

遺物

土器	1/4
土製品・石製品・鉄製品・石器・古銭	1/2
拓影図	1/3

- 4 住居跡の柱穴番号は、原則として時計回りとし、主柱穴から付した。
- 5 住居跡の大きさは壁上端を、同じく面積は周溝側床上端を計測点とした。
- 6 住居跡内覆土・カマド内土層の説明については省略したものもある。
- 7 住居跡の深さは、住居跡検出面から床面までを計測した。
- 8 住居跡の壁に関する資料は、東・南・西・北の順に、または北-南、西-東の順としている。
- 9 遺物の出土状況図と接合関係は、可能なかぎり図示したが、一部省略したものもある。カマド内出土のものについては省略し、表の備考欄に記載した。

- 10 土師器・須恵器の別は断面のスクリントーンで区別した。土師質須恵器については、須恵器に含めている。
- 11 方位は国家座標を基準とし、カマドの構築されている壁と直交する軸とのなす角度を計測した。
- 12 調査は、細長い調査区となるため、基本的な方法としては、一辺 20 m の大グリッドを設定し、その中に一辺 2 m の小グリッドを設定する方法をとることとした。また、大グリッドの設定については、路線の調査であることから調査区内の路線中心杭のうち 2 点をえらび、2 点を通る直線を基準として、両側に 10 m ずつ振り、路線の起点に近い中心杭を基準として大グリッドをつくる方法をとった。なお、大グリッド・小グリッドの呼称については、特に統一をしていない。
- 13 本書の第 1 図については、国土地理院発行の 1 : 50,000 地形図・千葉 (千葉 15 号) を使用した。

目 次

序 文
例 言
凡 例

目次（本文・挿図・図版・表）

第I章 序 説	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第II章 鷺谷津遺跡の調査	6
第1節 遺跡の位置と環境	6
第2節 調査の方法と経過	6
第3節 検出された遺構と遺物	14
第4節 小 結	73
第III章 観音塚遺跡の調査	77
第1節 遺跡の位置と環境	77
第2節 調査の方法と経過	77
第3節 検出された遺構と遺物	77
第4節 小 結	170
第IV章 山ノ神遺跡の調査	174
第1節 遺跡の位置と環境	174
第2節 調査の方法と経過	174
第3節 検出された遺構と遺物	174
第4節 小 結	194
第V章 大森第一遺跡の調査	196
第1節 遺跡の位置と環境	196

第2節 調査の方法と経過	196
第3節 検出された遺構と遺物	203
第4節 小 結	225
第VI章 荒立（新立）遺跡の調査	227
第1節 遺跡の位置と環境	227
第2節 調査の方法と経過	227
第3節 検出された遺構と遺物	227
第4節 小 結	234
第VII章 ま と め	236

挿 図 目 次

第1図	千葉急行線内関係遺跡位置図… 2	第31図	007号住居跡遺物出土状況図 …35
——鷺谷津遺跡——			
第2図	鷺谷津遺跡周辺地形図 ……7	第32図	007号住居跡カマド実測図 ……35
第3図	区設定図・プレグリット配置図 9	第33図	007号住居跡出土遺物実測図 …36
第4図	鷺谷津遺跡土層柱状図 ……10	第34図	008号住居跡実測図 ……38
第5図	遺構配置図 ……11	第35図	008号住居跡遺物出土状況図 …39
第6図	遺構配置図・公共座標関係図 …13	第36図	008号住居跡カマド実測図 ……39
第7図	001号住居跡実測図 ……14	第37図	008号住居跡出土遺物実測図 …40
第8図	001号住居跡遺物出土状況図 …15	第38図	009号住居跡実測図 ……42
第9図	001号住居跡カマド実測図 ……15	第39図	009号住居跡遺物出土状況図 …43
第10図	001号住居跡出土遺物実測図 …16	第40図	009号住居跡カマド実測図 ……43
第11図	002号住居跡実測図 ……18	第41図	009号住居跡出土遺物実測図 …44
第12図	002号住居跡遺物出土状況図 …19	第42図	010号住居跡実測図 ……45
第13図	002号住居跡カマド実測図 ……19	第43図	010号住居跡遺物出土状況図 …46
第14図	002号住居跡出土遺物実測図 …20	第44図	010号住居跡カマド実測図 ……46
第15図	003号住居跡実測図 ……20	第45図	010号住居跡出土遺物実測図 …47
第16図	003号住居跡カマド実測図 ……21	第46図	011号住居跡実測図 ……48
第17図	004号住居跡実測図 ……22	第47図	011号住居跡遺物出土状況図 …49
第18図	004号住居跡遺物出土状況図 …23	第48図	011号住居跡カマド実測図 ……49
第19図	004号住居跡カマド実測図 ……23	第49図	011号住居跡出土遺物実測図 …50
第20図	004号住居跡出土遺物実測図 …23	第50図	012号住居跡実測図 ……50
第21図	005号住居跡実測図 ……24	第51図	012号住居跡遺物出土状況図 …51
第22図	005号住居跡遺物出土状況図 …25	第52図	012号住居跡カマド実測図 ……51
第23図	005号住居跡カマド実測図 ……25	第53図	012号住居跡出土遺物実測図 …52
第24図	005号住居跡出土遺物実測図(1) 26	第54図	013号住居跡・001号溝実測図…53
第25図	005号住居跡出土遺物実測図(2) 28	第55図	013号住居跡遺物出土状況図 …54
第26図	006号住居跡実測図 ……30	第56図	013号住居跡カマド実測図 ……55
第27図	006号住居跡遺物出土状況図 …31	第57図	013号住居跡出土遺物実測図(1) 56
第28図	006号住居跡カマド実測図 ……31	第58図	013号住居跡出土遺物実測図(2) 57
第29図	006号住居跡出土遺物実測図 …32	第59図	014号住居跡実測図 ……58
第30図	007号住居跡実測図 ……34	第60図	014号住居跡遺物出土状況図 …59
		第61図	014号住居跡カマド実測図 ……59

第62図	014号住居跡出土遺物実測図	60	第87図	001号住居跡カマド実測図	84
第63図	015(17)号住居跡実測図	61	第88図	001号住居跡出土遺物実測図	85
第64図	015(17)号住居跡カマド実測図	61	第89図	002号住居跡カマド実測図	87
第65図	016(18)号住居跡実測図	62	第90図	002号住居跡出土遺物実測図	87
第66図	016(18)号住居跡遺物出土 状況図	63	第91図	003(05)・004(06)・005(08)・ 006(09)・007(10)号住居跡・ 鍛冶跡実測図・土層断面図	88
第67図	016(18)号住居跡カマド実測図	63	第92図	003(05)号住居跡実測図	89
第68図	016(18)号住居跡出土遺物 実測図	64	第93図	003(05)号住居跡遺物出土 状況図	90
第69図	017(19)号住居跡実測図	65	第94図	003(05)号住居跡カマド実測図	90
第70図	017(19)号住居跡遺物出土 状況図	66	第95図	003(05)号住居跡出土遺物 実測図	91
第71図	017(19)号住居跡カマド実測図	66	第96図	004(06)号住居跡実測図	92
第72図	017(19)号住居跡出土遺物 実測図	67	第97図	004(06)号住居跡遺物出土 状況図	93
第73図	鷺谷津遺跡出土鉄製品実測図	67	第98図	004(06)号住居跡カマド実測図	93
第74図	001号土壙実測図・遺物出土 状況図	69	第99図	004(06)号住居跡出土遺物 実測図	94
第75図	001号土壙出土遺物実測図	69	第100図	005(08)号住居跡実測図	95
第76図	002・003・004号土壙実測図	70	第101図	005(08)号住居跡遺物出土 状況図	95
第77図	鷺谷津遺跡古銭出土状況図	71	第102図	005(08)号住居跡カマド実測図	96
第78図	鷺谷津遺跡出土古銭拓影図	71	第103図	005(08)号住居跡出土遺物 実測図	97
第79図	鷺谷津遺跡出土縄文式土器 拓影図	73	第104図	006(09)号住居跡実測図	98
——観音塚遺跡——					
第80図	観音塚遺跡周辺地形図	78	第105図	006(09)号住居跡遺物出土 状況図	99
第81図	区設定図・プレグリット配置図	79	第106図	006(09)号住居跡出土遺物 実測図	100
第82図	観音塚遺跡土層柱状図	80	第107図	007(10)号住居跡実測図	103
第83図	遺構配置図・公共座標関係図	81	第108図	007(10)号住居跡遺物出土 状況図	104
第84図	遺構配置図	82			
第85図	001・002号住居跡実測図	83			
第86図	001・002号住居跡遺物出土 状況図	84			

第109図	007(10)号住居跡カマド実測図	104	第129図	013(27)・014(28)号住居跡 実測図	124
第110図	007(10)号住居跡出土遺物 実測図	105	第130図	013(27)号住居跡遺物出土 状況図	125
第111図	008(12)号住居跡実測図	107	第131図	013(27)号住居跡カマド実測図	125
第112図	008(12)号住居跡柱穴土層 断面図	107	第132図	013(27)号住居跡出土遺物 実測図	126
第113図	008(12)号住居跡遺物出土 状況図	108	第133図	015(29)号住居跡実測図	127
第114図	008(12)号住居跡カマド実測図	109	第134図	015(29)号住居跡遺物出土 状況図	128
第115図	008(12)号住居跡出土遺物 実測図	110	第135図	015(29)号住居跡カマド実測図	128
第116図	009(20)・010(21)号住居跡 実測図	112	第136図	015(29)号住居跡出土遺物 実測図	129
第117図	009(20)号住居跡遺物出土 状況図	113	第137図	016(30)号住居跡実測図	131
第118図	009(20)号住居跡カマド実測図	114	第138図	016(30)号住居跡遺物出土 状況図	132
第119図	009(20)号住居跡出土遺物 実測図	115	第139図	016(30)号住居跡カマド実測図	132
第120図	010(21)号住居跡遺物出土 状況図	118	第140図	016(30)号住居跡出土遺物 実測図	133
第121図	010(21)号住居跡出土遺物 実測図	118	第141図	017(31)号住居跡実測図	134
第122図	011(25)号住居跡実測図	119	第142図	017(31)号住居跡遺物出土 状況図	134
第123図	011(25)号住居跡遺物出土 状況図	119	第143図	017(31)号住居跡出土遺物 実測図	135
第124図	011(25)号住居跡出土遺物 実測図	120	第144図	018(40)号住居跡実測図	136
第125図	012(26)号住居跡実測図	121	第145図	018(40)号住居跡遺物出土 状況図	137
第126図	02(26)号住居跡遺物出土 状況図	122	第146図	018(40)号住居跡カマド実測図	137
第127図	012(26)号住居跡カマド実測図	122	第147図	018(40)号住居跡出土遺物 実測図	138
第128図	012(26)号住居跡出土遺物 実測図	123	第148図	019(42)号住居跡実測図	140
			第149図	019(42)号住居跡遺物出土 状況図	141

第150図	019(42)号住居跡カマド実測図	141
第151図	019(42)号住居跡出土遺物 実測図	142
第152図	鍛冶跡(07)実測図	145
第153図	鍛冶炉実測図	146
第154図	鍛冶跡(07)出土遺物実測図	146
第155図	観音塚遺跡出土鉄製品 実測図(1)	148
第156図	観音塚遺跡出土鉄製品 実測図(2)	150
第157図	観音塚遺跡出土鉄製品 実測図(3)	152
第158図	観音塚遺跡出土瓦実測図	154
第159図	001(05)号土壙実測図	155
第160図	001(05)号土壙出土遺物実測図	156
第161図	002(06)号土壙実測図	157
第162図	002(06)号土壙出土遺物実測図	157
第163図	003(10)号土壙実測図	158
第164図	004(01)・005(04)・006(03)・ 007(14)・008(13)号土壙実測図	159
第165図	009(15)・010(08)・011(12)・ 012(02)号土壙実測図	161
第166図	013号土壙実測図	162
第167図	005(04)・008(13)・010(08)号 土壙出土遺物実測図	163
第168図	観音塚遺跡表採遺物実測図 (土器・石器)	165
第169図	観音塚遺跡表採遺物 実測図(埴埴)	166
第170図	観音塚遺跡出土遺物 実測図(羽口)	167
第171図	観音塚遺跡表採遺物実測図 (埴形滓)	169

——山ノ神遺跡——

第172図	山ノ神遺跡周辺地形図	175
第173図	区設定図・プレグリット配置図	177
第174図	山ノ神遺跡土層柱状図	178
第175図	遺構配置図・公共座標関係図	178
第176図	遺構配置図	179
第177図	001号住居跡実測図	181
第178図	001号住居跡遺物出土状況図	182
第179図	001号住居跡カマド実測図	182
第180図	001号住居跡出土遺物実測図	183
第181図	002号住居跡実測図	184
第182図	002号住居跡カマド実測図	184
第183図	003号住居跡実測図	185
第184図	003号住居跡遺物出土状況図	186
第185図	003号住居跡カマド実測図	186
第186図	003号住居跡出土遺物実測図	187
第187図	001・002(02)・003号土壙実測図	189
第188図	002(02)号土壙出土遺物実測図	190
第189図	004号土壙実測図	191
第190図	包含層遺物出土状況図	192
第191図	集石遺構実測図	193
第192図	山ノ神遺跡表採遺物実測図	193
第193図	山ノ神遺跡出土土器片錘	194

——大森第一遺跡——

第194図	大森第一遺跡周辺地形図	197
第195図	区設定図・プレグリット配置図	199
第196図	遺構配置図・公共座標関係図	200
第197図	遺構配置図	201
第198図	土壙実測図	204
第199図	001号住居跡実測図	205
第200図	001号住居跡遺物出土状況図	206
第201図	001号住居跡カマド実測図	206
第202図	001号住居跡出土遺物実測図	207

第203図	002号住居跡実測図	208
第204図	002号住居跡遺物出土状況図	209
第205図	002号住居跡カマド実測図	209
第206図	002号住居跡出土遺物実測図	210
第207図	003号住居跡実測図・遺物出土 状況図	211
第208図	003号住居跡炉実測図	211
第209図	003号住居跡出土遺物実測図	211
第210図	004号住居跡実測図	212
第211図	004号住居跡遺物出土状況図	213
第212図	004号住居跡カマド実測図	213
第213図	004号住居跡出土遺物実測図	214
第214図	005号住居跡実測図	216
第215図	005号住居跡遺物出土状況図	217
第216図	005号住居跡カマド実測図	217
第217図	005号住居跡出土遺物実測図	218
第218図	006号住居跡・001号土壌実測図	219

第219図	006号住居跡カマド実測図	219
第220図	007号住居跡実測図	221
第221図	007号住居跡カマド実測図	221
第222図	001号掘立柱建物跡実測図	222
第223図	001号溝実測図	223
第224図	002号土壌実測図	223
第225図	大森第一遺跡表採遺物実測図	224
第226図	大森第一遺跡出土縄文式土器 拓影図	225

——荒立遺跡——

第227図	遺構配置図・トレンチ配置図	228
第228図	荒立遺跡周辺地形図	229
第229図	001号住居跡実測図	231
第230図	001号住居跡遺物出土状況図	232
第231図	001号住居跡カマド実測図	232
第232図	001号住居跡出土遺物実測図	233

表 目 次

——鷺谷津遺跡——

第1表	001号住居跡出土遺物表	17
第2表	002号住居跡出土遺物表	21
第3表	004号住居跡出土遺物表	22
第4表	005号住居跡出土遺物表	27
第5表	006号住居跡出土遺物表	33
第6表	007号住居跡出土遺物表	37
第7表	008号住居跡出土遺物表	41
第8表	009号住居跡出土遺物表	44
第9表	010号住居跡出土遺物表	47
第10表	011号住居跡出土遺物表	50
第11表	012号住居跡出土遺物表	52
第12表	013号住居跡出土遺物表	55
第13表	014号住居跡出土遺物表	60

第14表	016号住居跡出土遺物表	64
第15表	017号住居跡出土遺物表	67
第16表	鷺谷津遺跡出土鉄製品	68
第17表	001号土壌出土遺物表	70
第18表	鷺谷津遺跡出土古銭	72

——観音塚遺跡——

第19表	001号住居跡出土遺物表	86
第20表	002号住居跡出土遺物表	87
第21表	003(005)号住居跡出土遺物表	91
第22表	004(006)号住居跡出土遺物表	94
第23表	005(008)号住居跡出土遺物表	96
第24表	006(009)号住居跡出土遺物表	101
第25表	007(010)号住居跡出土遺物表	105
第26表	008(012)号住居跡出土遺物表	108

第27表	009(020)号住居跡出土遺物表	116
第28表	010(021)号住居跡出土遺物表	118
第29表	011(025)号住居跡出土遺物表	120
第30表	012(026)号住居跡出土遺物表	123
第31表	013(027)号住居跡出土遺物表	126
第32表	015(029)号住居跡出土遺物表	130
第33表	016(030)号住居跡出土遺物表	133
第34表	017(031)号住居跡出土遺物表	135
第35表	018(040)号住居跡出土遺物表	139
第36表	019(042)号住居跡出土遺物表	143
第37表	鍛冶(007)跡出土遺物表	147
第38表	観音塚遺跡出土鉄製品	147
第39表	観音塚遺跡出土鉄製品	151
第40表	観音塚遺跡出土鉄製品	153
第41表	出土瓦	154
第42表	001(05)号土壙出土遺物表	155
第43表	002(06)号土壙出土遺物表	158
第44表	土壙出土遺物表	163

第45表	表採遺物(土製品・石製品)	164
第46表	表採遺物(埴塼)	166
第47表	羽口表	168
第48表	埴形滓表	168

——山ノ神遺跡——

第49表	001号住居跡出土遺物表	183
第50表	003号住居跡出土遺物表	187
第51表	002号土壙出土遺物表	191
第52表	表採遺物表	192

——大森第一遺跡——

第53表	001号住居跡出土遺物表	207
第54表	002号住居跡出土遺物表	210
第55表	003号住居跡出土遺物表	210
第56表	004号住居跡出土遺物表	215
第57表	005号住居跡出土遺物表	218
第58表	表採遺物表	224

——荒立遺跡——

第59表	001号住居跡出土遺物表	234
------	--------------	-----

図 版 目 次

——鷺谷津遺跡——

図版 1	遺跡航空写真
図版 2	1. 遺跡遠景(南側水田面から) 2. 焼夷弾破片検出状況 3. 焼夷弾破片
図版 3	1. 001号住居跡全景 2. 001号住居跡カマド(調査前) 3. 001号住居跡カマド(調査後) 4. 001号住居跡紡錘車出土状況
図版 4	1. 002・003号住居跡全景 2. 002号住居跡カマド(調査前) 3. 003号住居跡カマド(調査後)

図版 5	1. 004号住居跡全景 2. 004号住居跡カマド(調査前) 3. 004号住居跡カマド(調査後) 4. 004号住居跡遺物出土状況
図版 6	1. 005号住居跡全景 2. 005号住居跡遺物出土状況 3. 005号住居跡カマド内遺物出土状況
図版 7	1. 006号住居跡全景 2. 006号住居跡遺物(8)出土状況 3. 006号住居跡カマド(調査後)
図版 8	1. 007号住居跡全景

2. 007号住居跡カマド内遺物出土状況
3. 007号住居跡カマド(調査前)
4. 007号住居跡カマド側遺物出土状況
5. 007号住居跡遺物出土状況
- 図版9 1. 008号住居跡全景
2. 008号住居跡遺物出土状況
3. 008号住居跡カマド内支脚出土状況
- 図版10 1. 009号住居跡全景
2. 009号住居跡カマド(調査後)
3. 009号住居跡土層断面
- 図版11 1. 010号住居跡全景
2. 010号住居跡カマド(調査後)
3. 010号住居跡カマド(調査前)
- 図版12 1. 011号住居跡全景
2. 011号住居跡カマド(調査前)
3. 011号住居跡カマド内土層断面
4. 011号住居跡土層断面
- 図版13 1. 012号住居跡全景
2. 012号住居跡遺物(5)出土状況
3. 012号住居跡遺物(6)出土状況
4. 012号住居跡遺物(4)出土状況
5. 012号住居跡カマド(調査前)
- 図版14 1. 013号住居跡, 001号溝全景
2. 013号住居跡遺物出土状況
3. 013号住居跡カマド側遺物出土状況
4. 013号住居跡遺物出土状況
5. 013号住居跡カマド(調査後)
- 図版15 1. 014号住居跡全景
2. 014号住居跡カマド(調査前)
3. 014号住居跡カマド土層断面
- 図版16 1. 015号住居跡全景
2. 015号住居跡カマド(調査後)
3. 015号住居跡カマド(調査前)
4. 015号住居跡土層断面
- 図版17 1. 016号住居跡全景
2. 017号住居跡全景
- 図版18 1. 001号土壙全景
2. 001号土壙遺物出土状況
3. 001号土壙遺物出土状況
4. 002・003・004号土壙全景
- 図版19 001・002・004号住居跡出土遺物
- 図版20 005号住居跡出土遺物
- 図版21 005・006号住居跡出土遺物
- 図版22 007・008号住居跡出土遺物
- 図版23 008・009・010・012号住居跡出土遺物
- 図版24 013号住居跡出土遺物
- 図版25 014・016・017号住居跡・001号土壙出土遺物
- 図版26 1. 鷺谷津遺跡出土鉄製品
2. 鷺谷津遺跡出土縄文式土器
- 観音塚遺跡——
- 図版27 1. 遺跡遠景(調査前)
2. 遺跡遠景(調査後)
- 図版28 1. 001・002号住居跡全景
2. 001号住居跡遺物出土状況
3. 002号住居跡カマド(調査後)
- 図版29 1. 003・004・005・006・007号住居跡, 鍛冶跡全景
2. 005号住居跡カマド(土層断面)
3. 006号住居跡遺物出土状況
- 図版30 1. 008号住居跡全景

2. 008号住居跡遺物出土状況
 3. 008号住居跡遺物出土状況
 4. 008号住居跡遺物出土状況
 5. 008号住居跡カマド内遺物出土状況
- 図版31 1. 009・010号住居跡全景
 2. 009号住居跡カマド(調査前)
 3. 009号住居跡カマド土層断面
 4. 009号住居跡遺物出土状況
- 図版32 1. 011号住居跡遺物出土状況
 2. 012号住居跡全景
- 図版33 1. 013・014号住居跡全景
 2. 015号住居跡全景
- 図版34 1. 016・017号住居跡全景
 2. 018号住居跡全景
- 図版35 1. 019号住居跡全景
 2. 001号土壙全景
 3. 001号土壙遺物出土状況
- 図版36 観音塚遺跡出土鉄製品
- 図版37 1. 観音塚遺跡出土鉄製品
 2. 作業風景
- 図版38 1. 002号土壙遺物出土状況
 2. 003号土壙全景
 3. 004号土壙土層断面
 4. 005号土壙土層断面
 5. 007号土壙土層断面
 6. 010号土壙土層断面
 7. 013号土壙全景
- 図版39 001・002・003・004号住居跡出土遺物
- 図版40 005・006号住居跡出土遺物
- 図版41 007・008号住居跡出土遺物
- 図版42 009号住居跡出土遺物
- 図版43 010・011・012・013・015号住居跡出土遺物
- 図版44 015・016・017・018号住居跡出土遺物
- 図版45 018・019号住居跡出土遺物
- 図版46 鍛冶跡, 瓦, 001・002号土壙出土遺物
- 図版47 観音塚遺跡出土遺物・埴塼
- 図版48 羽口・埴形滓
- 図版49 1. 鍛冶跡(調査前)
 2. 鍛冶跡(調査中)
 3. 鍛冶跡(調査後)
 4. 鍛冶跡取り上げ作業
 5. 鍛冶跡取り上げ作業
- 山ノ神遺跡——
- 図版50 遺跡航空写真
- 図版51 1. 001号住居跡全景
 2. 002号住居跡全景
- 図版52 1. 003号住居跡全景
 2. 003号住居跡遺物出土状況
 3. 003号住居跡土層断面
 4. 003号住居跡カマド(調査後)
- 図版53 1. 001号土壙土層断面
 2. 002号土壙土層断面
 3. 003号土壙土層断面
 4. 004号土壙土層断面
- 図版54 1. 集石遺構全景
 2. 包含層遺物出土状況
- 図版55 001・003号住居跡, 表採遺物
- 図版56 1. 002号土壙出土遺物
 2. 遺跡近景(調査前)
- 大森第一遺跡——
- 図版57 遺跡航空写真(1)

- 図版58 遺跡航空写真(2)
- 図版59 1. 塚全景(削平後)
2. 土塁土層断面
- 図版60 1. 001号住居跡全景
2. 001号住居跡遺物出土状況
3. 001号住居跡遺物出土状況
4. 001号住居跡カマド(調査前)
- 図版61 1. 002号住居跡全景
2. 002号住居跡カマド(調査前)
3. 002号住居跡カマド土層断面
- 図版62 1. 003号住居跡全景
2. 003号住居跡炉・遺物出土状況
3. 003号住居跡炉土層断面
- 図版63 1. 004号住居跡全景
2. 004号住居跡カマド(調査後)
3. 004号住居跡カマド袖内部遺物出土状況
4. 004号住居跡カマド袖内部遺物出土状況
- 図版64 1. 005号住居跡全景
2. 005号住居跡遺物出土状況
3. 005号住居跡遺物出土状況
4. 005号住居跡カマド(調査後)
- 図版65 1. 006号住居跡・001号土壇全景
2. 001号土壇土層断面
3. 006号住居跡カマド(調査前)
4. 006号住居跡カマド土層断面
- 図版66 1. 007号住居跡全景
2. 007号住居跡カマド(調査前)
3. 007号住居跡カマド土層断面
4. 007号住居跡カマド土層断面
- 図版67 1. 001号掘立柱建物跡全景
2. 001号掘立柱建物跡柱穴土層断面
3. 001号掘立柱建物跡柱穴土層断面
4. 001号掘立柱建物跡柱穴土層断面
- 図版68 1. 001号溝土層断面(A-A')
2. 001号溝土層断面(B-B')
3. 002号土壇全景
- 図版69 001・003・004・005号住居跡出土遺物
- 図版70 1. 表採遺物・住居跡出土鉄製品
2. 大森第一遺跡出土縄文式土器
- 荒立遺跡——
- 図版71 遺跡遠景(試掘調査中)
- 図版72 1. 001号住居跡全景
2. 001号住居跡遺物出土状況
3. 001号住居跡遺物出土状況
4. 001号住居跡カマド(調査後)
- 図版73 001号住居跡出土遺物

附図 千葉急行線内遺跡位置図

第 I 章 序 説

第 1 節 発掘調査に至る経緯

千葉急行電鉄線は、京成千葉駅を起点として小湊鉄道海士有木（あまありき）に至る延長 19 km の路線である。この沿線には、住宅・都市整備公団により造成が進められ、当センターが調査を行っている千葉・市原ニュータウンが所在している。さらに、辰巳台ニュータウン・国分寺台ニュータウンがあり、これらニュータウンの通勤・通学等の旅客需要に対するために計画されたものである。

昭和 32 年 12 月、小湊鉄道株式会社により計画がたてられたが建設が進展しなかったため、昭和 47 年 3 月の首都圏整備委員会による鉄道整備計画の一環として早期建設が進められることになった。昭和 48 年 2 月京成電鉄株式会社・小湊鉄道株式会社をはじめとして、千葉県、千葉市、市原市、住宅・都市整備公団の出資により千葉急行電鉄株式会社が発立された。建設計画は第一期と第二期に区分して立てられ、第一期は京成千葉駅から千原台間の 11.3 km とされ、昭和 52 年 8 月、運輸大臣から緊急に整備を要する路線として鉄道建設公団に工事実施計画の指示がなされた。

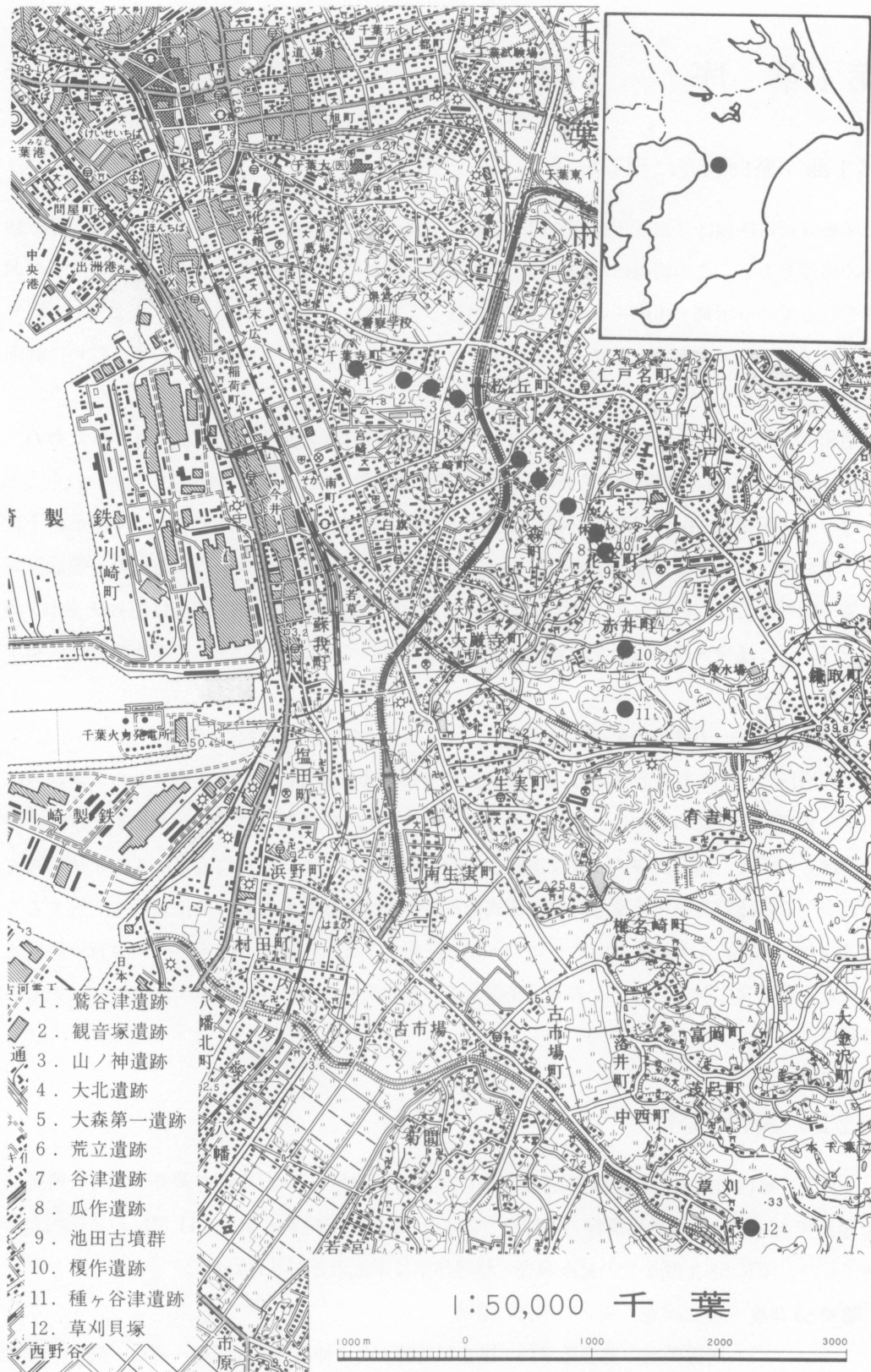
建設予定地は、千葉市の東南部に位置し、古墳時代・奈良・平安時代の遺跡をはじめとして、多くの遺跡の所在が知られている。千葉県教育委員会は千葉急行電鉄株式会社からの路線内に所在する埋蔵文化財の有無についての照会にもとづき、現地踏査を行い、記録保存の必要な遺跡 8 ヶ所と、確認調査の必要な遺跡 2 ヶ所を確認した。この結果にもとづき、千葉県教育委員会と鉄道建設公団・千葉急行電鉄株式会社との間で協議がもたれ、発掘調査を実施することとなり、財団法人千葉県文化財センターが指定をうけた。昭和 53 年 4 月、千葉急行電鉄株式会社と千葉県文化財センターとの間で発掘調査の委託契約が締結され調査のはこびとなったものである。

第 2 節 調査の経過

千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査は昭和 53 年度から開始された。当初の調査予定対象遺跡は 10 遺跡であったが、新発見遺跡の追加などにより 12 遺跡が対象となり、11 遺跡の発掘調査が終了した。昭和 58 年度までの発掘調査・整理作業は下記のとおり行われた。

昭和 53 年度 確認調査 荒立（新立）遺跡

発掘調査 鷲谷津遺跡・観音塚遺跡・山ノ神遺跡・大森第一遺跡・荒立（新立）遺跡



第1図 千葉急行線内関係遺跡位置図

- 昭和 54 年度** 確認調査 種ヶ谷津遺跡
発掘調査 観音塚遺跡・大北遺跡・谷津遺跡
- 昭和 55 年度** 整理作業 昭和 53・54 年度発掘調査分の一部
- 昭和 56 年度** 確認調査 瓜作遺跡
発掘調査 瓜作遺跡・池田古墳群・種ヶ谷津遺跡
整理作業 瓜作遺跡・池田古墳群・種ヶ谷津遺跡の一部
- 昭和 57 年度** (下半期事業)
発掘調査 草刈貝塚
整理作業 谷津遺跡・池田古墳群・瓜作遺跡・種ヶ谷津遺跡の一部
- 昭和 58 年度** 整理作業 昭和 53 年度調査分の報告書刊行

昭和 53 年度

新規事業として 4 月 1 日付けで、財団法人千葉県文化財センターと千葉急行電鉄株式会社との間で委託契約がとりかわされた。調査対象総面積は 15,290 m²である。発掘調査は現地事務所を千葉市大森町 534 に設置し、現場作業は 5 月から開始した。当該年度に調査した遺跡はつぎのとおりである。

No.	遺跡コード	調査時No.	遺跡名	面積	所在地
1.	201-007	No. 2 遺跡	鷲谷津遺跡	3,800 m ²	千葉市千葉寺町 767 他
2.	201-008	No. 3 遺跡	観音塚遺跡	1,100 m ²	千葉市千葉寺町 720-8 他
3.	201-009	No. 4 遺跡	山ノ神遺跡	3,400 m ²	千葉市宮崎町 668-2 他
5.	201-006	No. 6 遺跡	大森第一遺跡	3,590 m ²	千葉市大森町 463-1 他
6.	201-005	No. 7 遺跡	荒立遺跡	3,400 m ²	千葉市大森町 514-13 他

調査部長 西野 元
班長 岡川宏道
調査研究員 森 尚登
調査研究員 相京邦彦

観音塚遺跡・大森第一遺跡は当初の調査面積に追加分が加わり、下記の調査研究員が協力して実施した。

調査研究員 清藤一順
調査研究員 谷 旬
調査研究員 高橋博文

昭和 54 年度

継続事業として 4 月 2 日付けで委託契約を締結し、調査を実施した。観音塚遺跡の継続調査

を含め、調査対象遺跡 6 遺跡、調査対象総面積は 21,100 m²であった。しかし、用地未買収地があり、変更契約を行い 4 遺跡 13,200 m²の調査を実施した。調査遺跡は下記のとおりである。

No.	遺跡コード	調査時No.	遺跡名	面積	所在地
3.	201-008	No.3 遺跡	観音塚遺跡	200 m ²	千葉市千葉寺町 767 他
5.	201-012	No.5 遺跡	大北遺跡	7,000 m ²	千葉市宮崎町 711 他
8.	201-010	No.8 遺跡	谷津遺跡	5,000 m ²	千葉市花輪町 340 他
11.	201-015	No.11 遺跡	種ヶ谷津遺跡	7,000 m ²	(うち 1,000 m ² の確認調査) 千葉市生実町 2668-3 他

調査部長 白石竹雄
 調査部長補佐 山田友治
 班長 堀部昭夫
 調査研究員 相京邦彦
 調査研究員 高橋博文
 調査研究員 白石 浩

昭和 55 年度

継続事業として 4 月 1 日付けで委託契約を締結し、整理作業を実施した。整理作業のみのため、遺物・図面等を本部へ運搬して作業が行われた。整理対象遺跡は下記のとおりである。

昭和 53 年度発掘調査分 鷲谷津遺跡・観音塚遺跡・山ノ神遺跡・大森第一遺跡・荒立遺跡
 昭和 54 年度発掘調査分 観音塚遺跡・大北遺跡・谷津遺跡・種ヶ谷津遺跡

調査部長 白石竹雄
 調査部長補佐 栗本佳弘
 班長 堀部昭夫
 調査研究員 相京邦彦
 調査研究員 高橋博文 (11 月 18 日より)

昭和 56 年度

継続事業として 4 月 1 日付けで委託契約を締結し、現場事務所に再び遺物・図面等を運搬して調査を実施した。2 遺跡 7,000 m²が当初の調査対象であったが、新規追加の遺跡が加わり 3 遺跡 11,500 m²を調査した。発掘調査・整理作業は下記のとおりである。

発掘調査

No.	遺跡コード	調査時No.	遺跡名	面積	所在地
8	201-023	新規追加	瓜作遺跡	3,250 m ²	千葉市花輪町 303-2 他
9.	201-013	No.9 遺跡	池田古墳群	900 m ²	千葉市花輪町 124-3 他
		No.9-1 遺跡	”(追加分)	1,250 m ²	千葉市花輪町 124-5 他

11. 201-015 No.11 遺跡 種ヶ谷津遺跡 6,100 m² 千葉市生実町 2,668-3 他
整理作業

発掘調査と並行して上記3遺跡の基礎整理作業を実施した。

調査部長 白石竹雄
調査部長補佐 中山吉秀
班長 三森俊彦
調査研究員 相京邦彦
調査研究員 柳 晃

昭和 57 年度

継続事業として4月1日付けで委託契約を締結し、発掘調査を10月1日より開始した。当初の調査対象面積は2,900 m²であったが、隣接地の調査が追加されて、最終的には4,315 m²が発掘対象面積となった。発掘調査・整理作業は下記のとおりである。

発掘調査

No.	遺跡コード	調査時名称	遺跡名	面積	所在地
12.	219-019	草刈貝塚	草刈貝塚	2,900 m ²	市原市草刈字扉谷津 1,315-1-他
12.	219-019	代替地	草刈貝塚	1,415 m ²	同上

整理作業

昭和 54 年度発掘調査分 谷津遺跡

昭和 56 年度発掘調査分 池田古墳群（含む追加分）・瓜作遺跡・種ヶ谷津遺跡

調査部長 白石竹雄
調査部長補佐 天野 努
班長 三森俊彦
主任調査研究員 相京邦彦
調査研究員 田井知二
調査研究員 海老原充

昭和 58 年度

継続事業として4月1日付けで委託契約を締結し調査を実施した。整理作業の対象遺跡は下記のとおりである。

昭和 53 年度発掘調査分 報告書刊行
昭和 54 年度発掘調査分 大北遺跡・谷津遺跡
昭和 56 年度発掘調査分 瓜作遺跡・池田古墳群（含む追加分）
昭和 57 年度発掘調査分 草刈貝塚の基礎整理

以上が発掘調査・整理作業の年度別概要であり、現在も作業は進行中である。

第II章 鷺谷津遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と環境

鷺谷津遺跡は、千葉市千葉寺町 767 番地先に所在する。下総台地が東京湾と接する本地域は、あたかも樹枝状に発達した小支谷が形成され、複雑な地形を呈している。これら小支谷のうちには、都川・村田川とその支流によって形成されたもののほかに、直接東京湾に接するものの 2 者がみられる。下総台地はこのような小支谷のために複雑に開析をうけて東京湾と接しており、そこには弥生時代以降、生産の場となったと推察される広大な沖積平野が形成されている。小支谷はそれら沖積平野とともに生産の場として利用されていたものと推察される。

都川から南方へ約 2 km、村田川から北方へ約 5 km の地点に、和銅 2 年の縁起をもつ千葉寺観音があり、その南側に開析している谷を通称千葉寺谷と呼んでいる。千葉寺谷も両岸に小支谷を形成している。鷺谷津遺跡はその支谷に南面する台地上に立地している。台地と水田面との比高差は約 10 m で、台地上の標高は約 22 m である。鷺谷津遺跡の立地する台地は南側を支谷により開析しているとともに、西・東とともに小支谷により開析され、一種の小舌状台地を呈しており、その先端に位置している。近年までこの地域は自然を多く残していたが、昨今の宅地開発ブームにより急激に変化しつつある。

第2節 調査の方法と経過

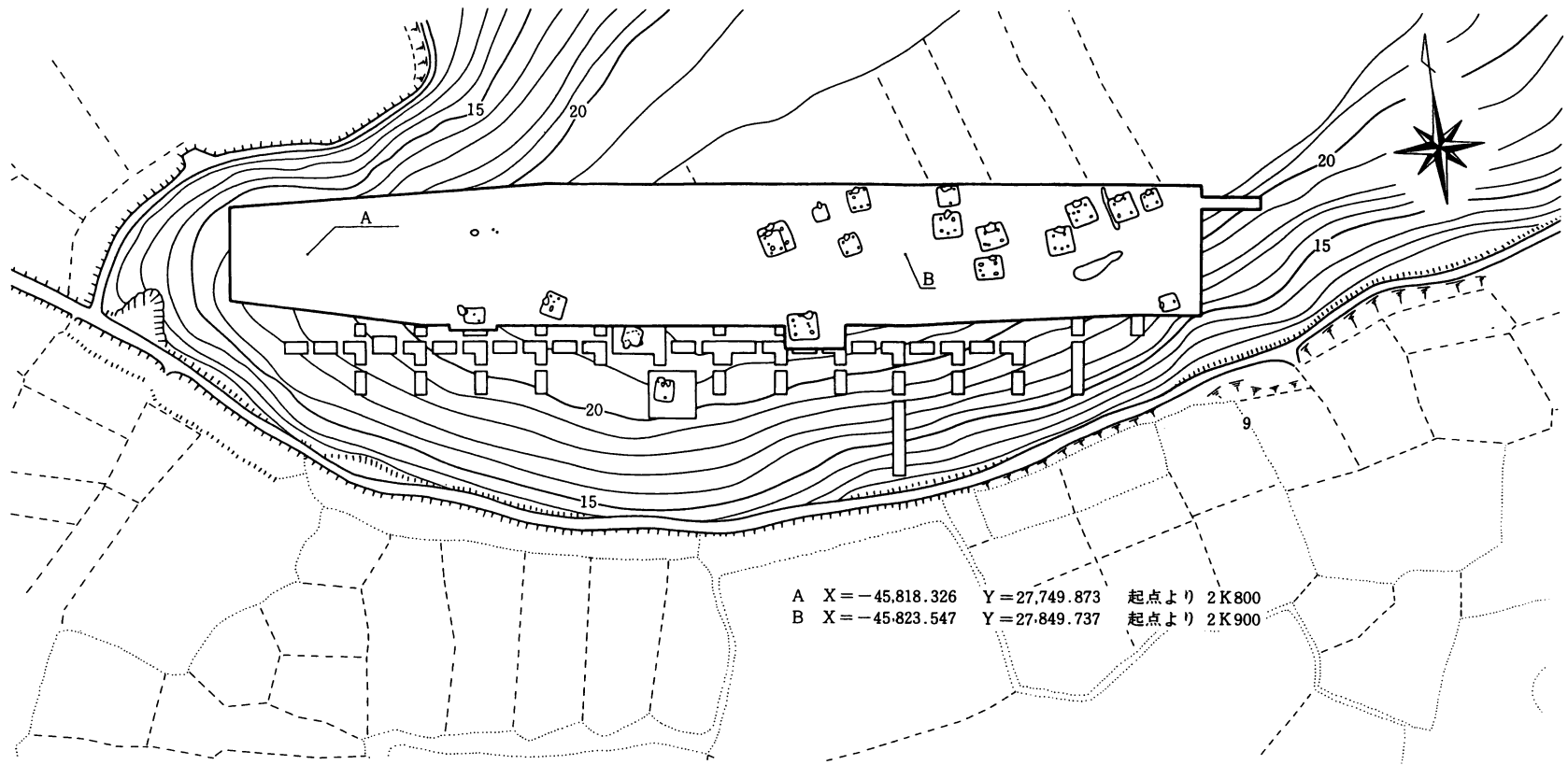
(1) グリッドの設定

鷺谷津遺跡は、起点から 2 k 800 m を A 点、同じく 2 k 900 m を B 点として、凡例 12 の方法で大グリッド及び小グリッドを設定した。各グリッドの呼称は第 3・6 図のとおりとした。

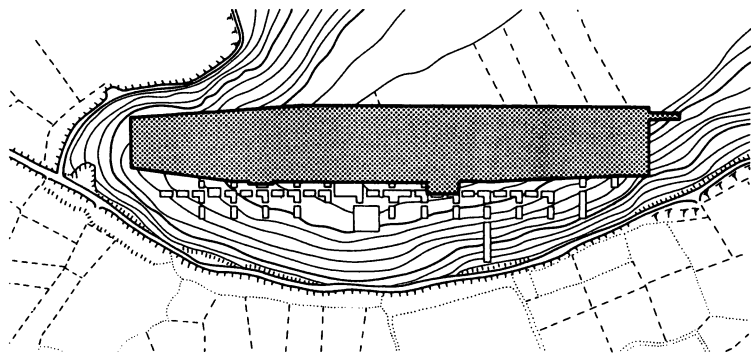
(2) 調査の経過

発掘調査は昭和 53 年 8 月 22 から 11 月 30 日まで実施した。調査区には進入路がなく、資材の搬入はすべて人手によるという状況であった。8 月 29 日からはトレンチの試掘に入り、9 月下旬には土地を借上げて仮進入路をつくった。10 月 3 日に、2 D-21・31 区より焼夷弾の破片がみつき、翌 4 日には作業を中止して、千葉中央署の係官によって処理した。この焼夷弾は 1945 年 6 月 9 日に行われた空襲によるものと推定されている。

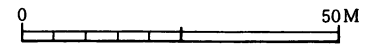
それ以後の調査は順調に進み、堅穴住居跡 17 軒、土壇 4 基、溝 1 条を調査し、その後に先土器時代に関してグリッド調査を行った。11 月中には現地作業を終了し、12 月 4 日に千葉県教育委員会文化課担当者による終了確認が行われ、すべての作業が終了した。



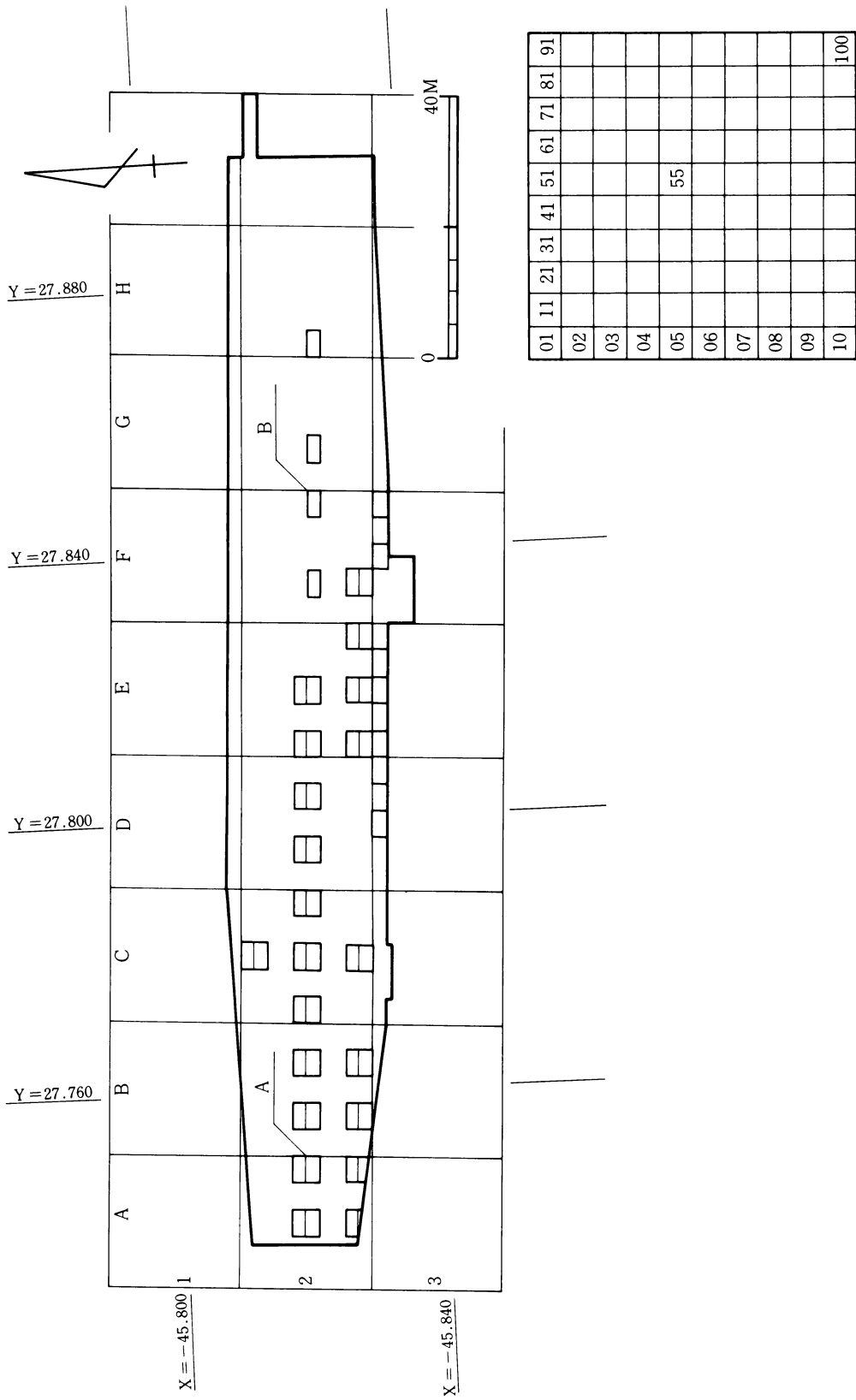
A X=-45.818.326 Y=27.749.873 起点より 2K800
 B X=-45.823.547 Y=27.849.737 起点より 2K900



■ 千葉県文化財センター調査
 □ 千葉市教育委員会調査



第2図 鷺谷遺跡調査区・周辺地形図 (1/1,000)



第3図 区設定図・プレグリッド配置図

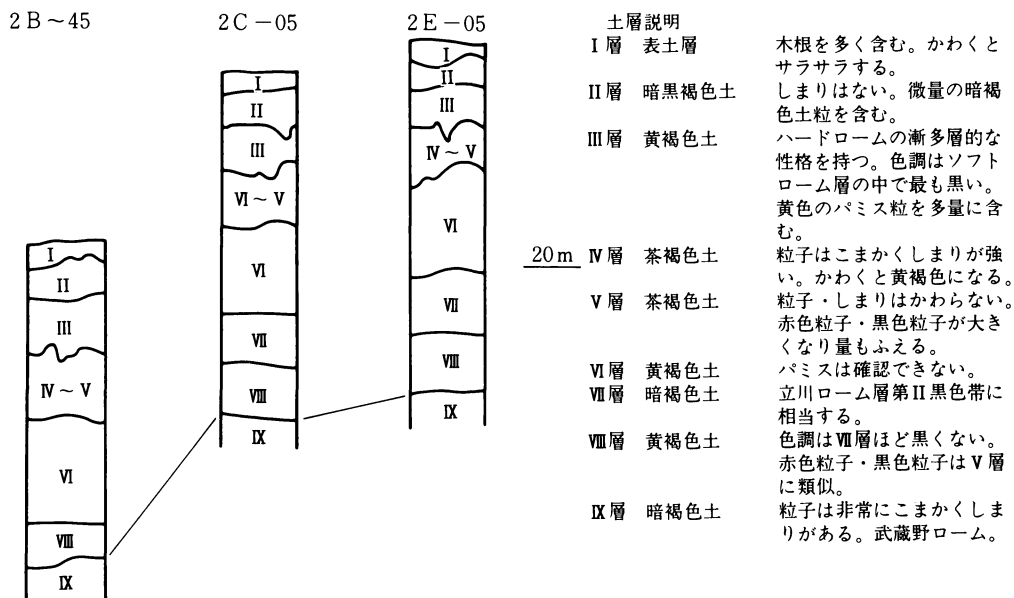
(3) 先土器時代の調査 (第3・4図)

遺構の調査と並行して、先土器時代の調査を開始した。安全対策の上から、一辺が4 mの正方形を基準グリットとして、深さが1.5 mを越えた場合に等分して一方を掘り下げることにした。全面積3,800 m²に対して4×4 mのグリットを約25個入れることができた。これは10%の確認率である。しかし、武蔵野ローム面まで4×4 mのグリットがすべて掘られたわけではなく、その率は5%以下になることはいうまでもない。

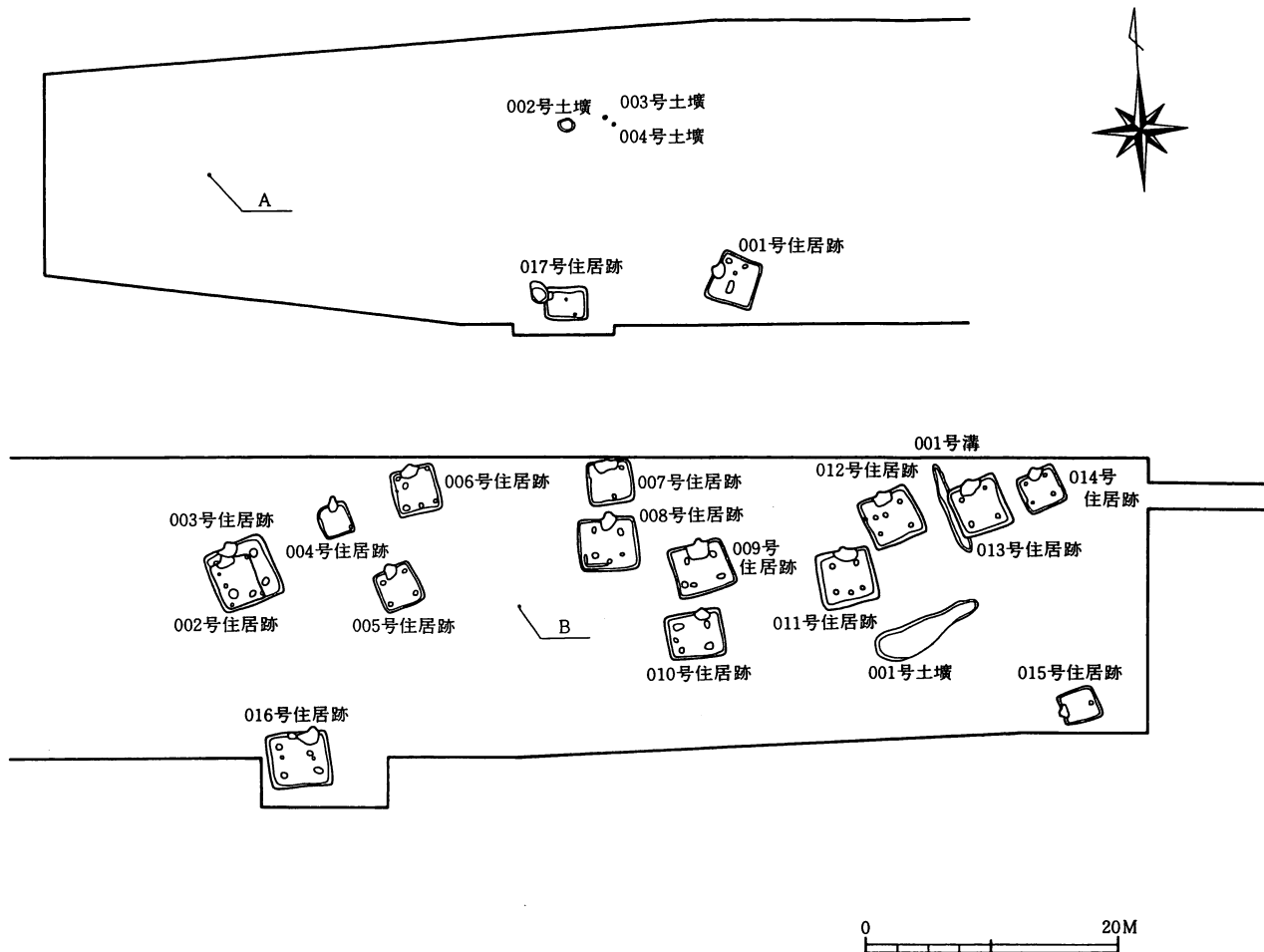
土層の説明に対して我々は当時センターで基準・標準呼称として認識されていた星谷津遺跡の土層分類に従うこととし、第II黒色帯(VII層)及び武蔵野ロームをその分類基準層とした。

台地上では星谷津遺跡にほぼ相当する土層をすべて確認できたが、台地斜面においては第VII層は確認されなかった。石器等遺物もまったく検出されなかった。

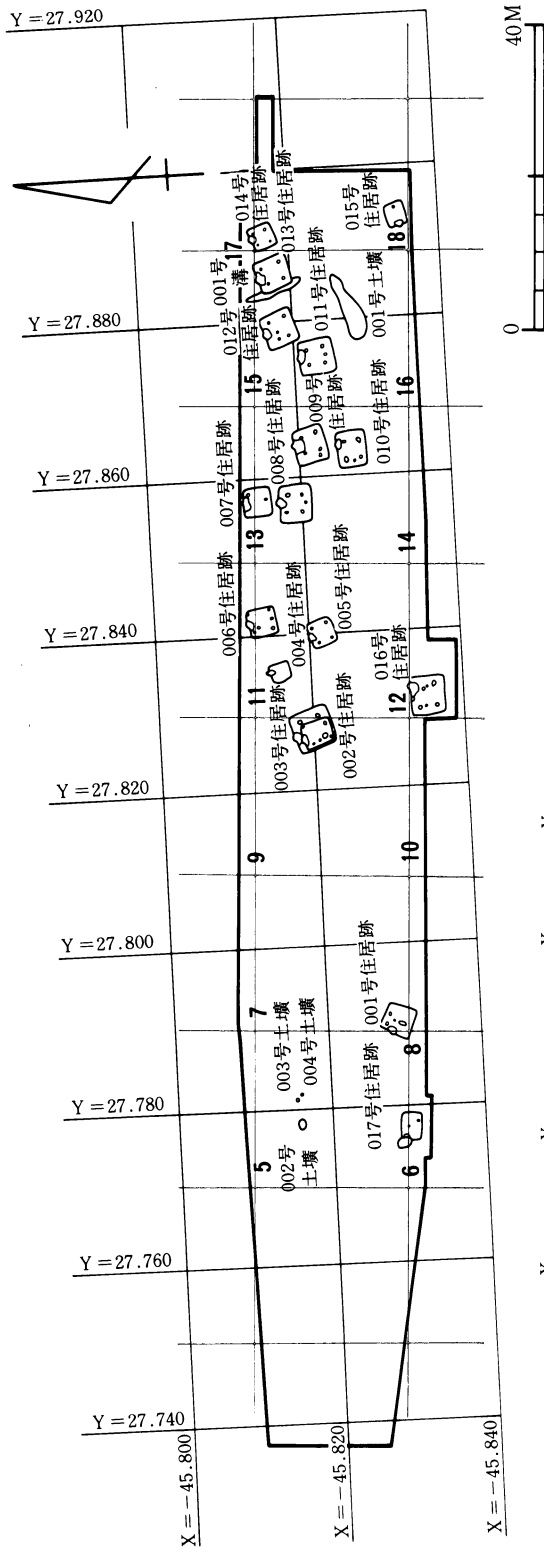
遺跡は東京湾に面する樹支状支谷の先端部に位置しており、このことから、土層についても北総台地に所在する星谷津遺跡の分類を基準とすることについては、調査担当者も危惧の念をいただいていたことは当然である。特に武蔵野ロームの認識については、昨今の研究では、色調による分類はむずかしいとも聞き及んでいる。調査から5年を経た現在において、それを現地でも再確認することは不可能である。そこで当時において認識し得た土層分類をそのまま記載したものであることを明記しておきたい。なお、本報告書の土層分類に関してはすべてにこれらのことが該当する。



第4図 鷺谷津遺跡土層柱状図



第5図 遺構配置図(1/500)



第 6 図 遺構配置図・公共座標関係図

	X	Y	X	Y
5	-45.809.384	27.770.368	12	-45.832.489 27.829.242
6	-45.829.356	27.769.324	13	-45.813.561 27.850.259
7	-45.810.428	27.790.341	14	-45.833.533 27.849.215
8	-45.830.400	27.789.297	15	-45.814.605 27.870.232
9	-45.811.472	27.810.313	16	-45.834.577 27.869.188
10	-45.831.444	27.809.269	17	-45.815.649 27.890.204
11	-45.812.517	27.830.286	18	-45.835.621 27.889.160

第3節 検出された遺構と遺物

本遺跡で調査された遺構は、竪穴住居跡 17 軒、土塋 4 基、溝 1 条であった。遺構の分布は、西側に土塋が、東側に竪穴住居跡が多く検出された。調査区内の比高差は約 7 m である。

(1) 竪穴住居跡

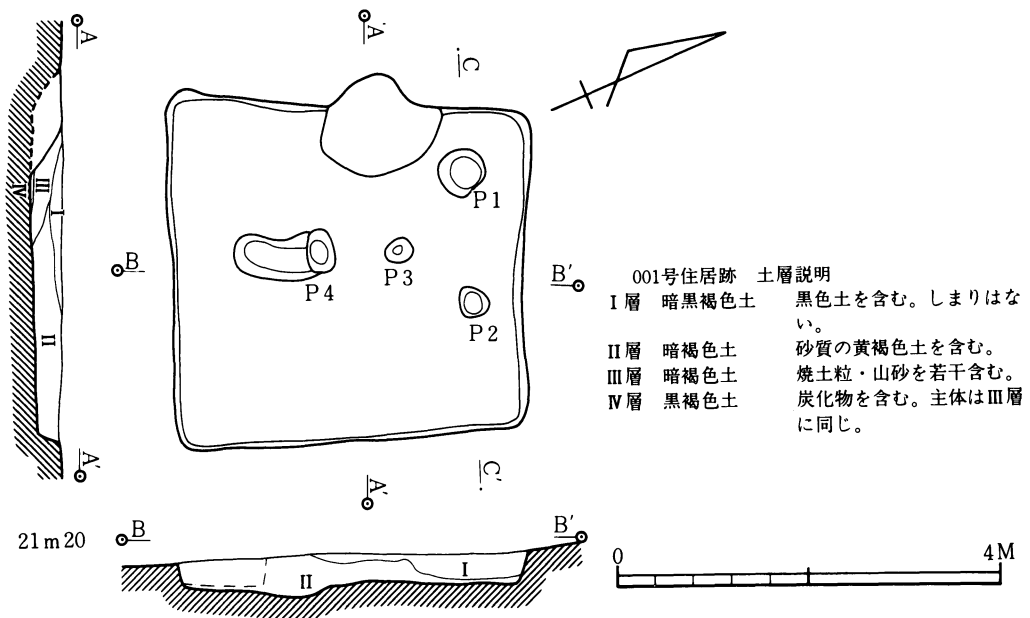
001号住居跡 (第7～10図)

2 D区から検出調査された。主軸方位はN-64°-Wである。住居跡内覆土は、カマド手前部分をのぞき2層に分けられる。黄褐色土粒を全体に含みしまりはない。

平面形は、3.50×3.85 mで、西辺がやや広がる形状を呈す。床面積は、3.92×3.48mで約13.5 m²である。壁高は検出面から床面までが各々41, 29, 27, 30 cmである。床面の標高は約20.7 mである。壁溝は検出されなかった。柱穴は4本検出された。P-4にはIV層が流れ込んでおり、住居跡が廃棄された時点では他の床面に比して一段下がっていたと思われる。遺物の出土状況は第8図のとおりであり、住居跡中央部から出土している。

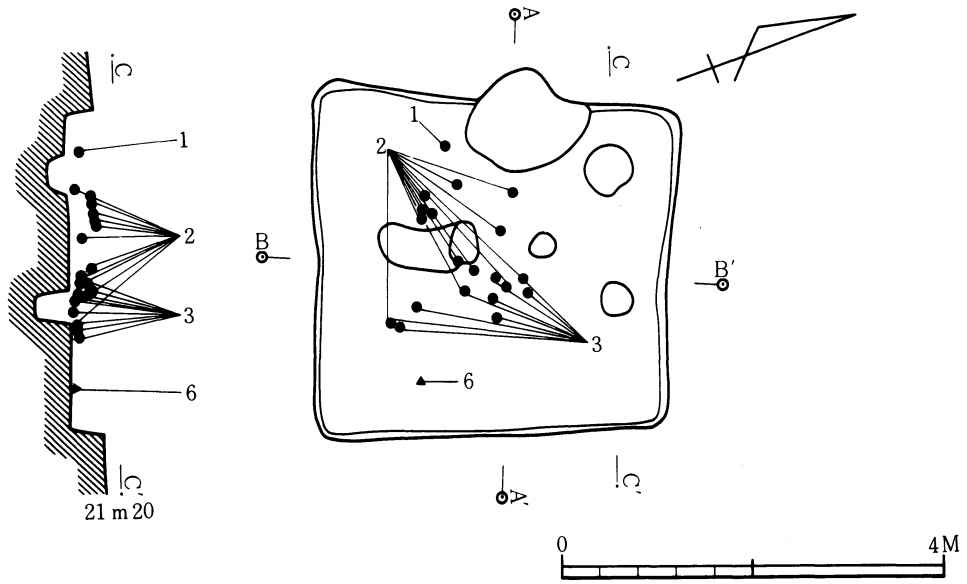
カマドは、北壁中央やや東側に寄って構築されている。残存状態は良好である。掘込み幅55 cm、奥行き30 cmを計る。天井部はカマド内へくずれおちており、内部には焼土が約15 cmの厚さで堆積している。カマド内から4の小型壺が出土した。

図示できた土器は5個体である。1は最大径を胴上部にもち底部に向ってすぼまる。2は最大径を胴中央部にもち底部も丸味をもち1とは対照的である。3はゆるやかに外反する頸部をもち、胴部も丸味をおびる。4はカマド内から出土した。5は小型甕である。口縁に横ナデを

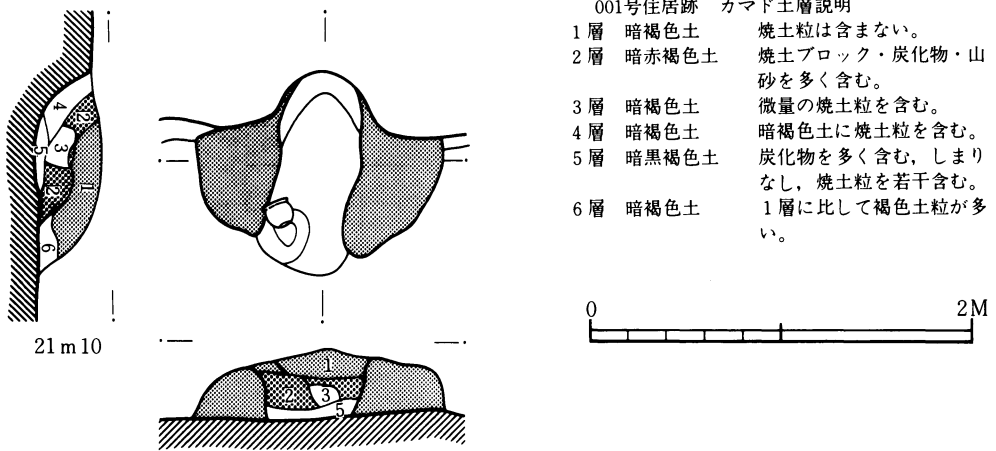


第7図 001号住居跡実測図

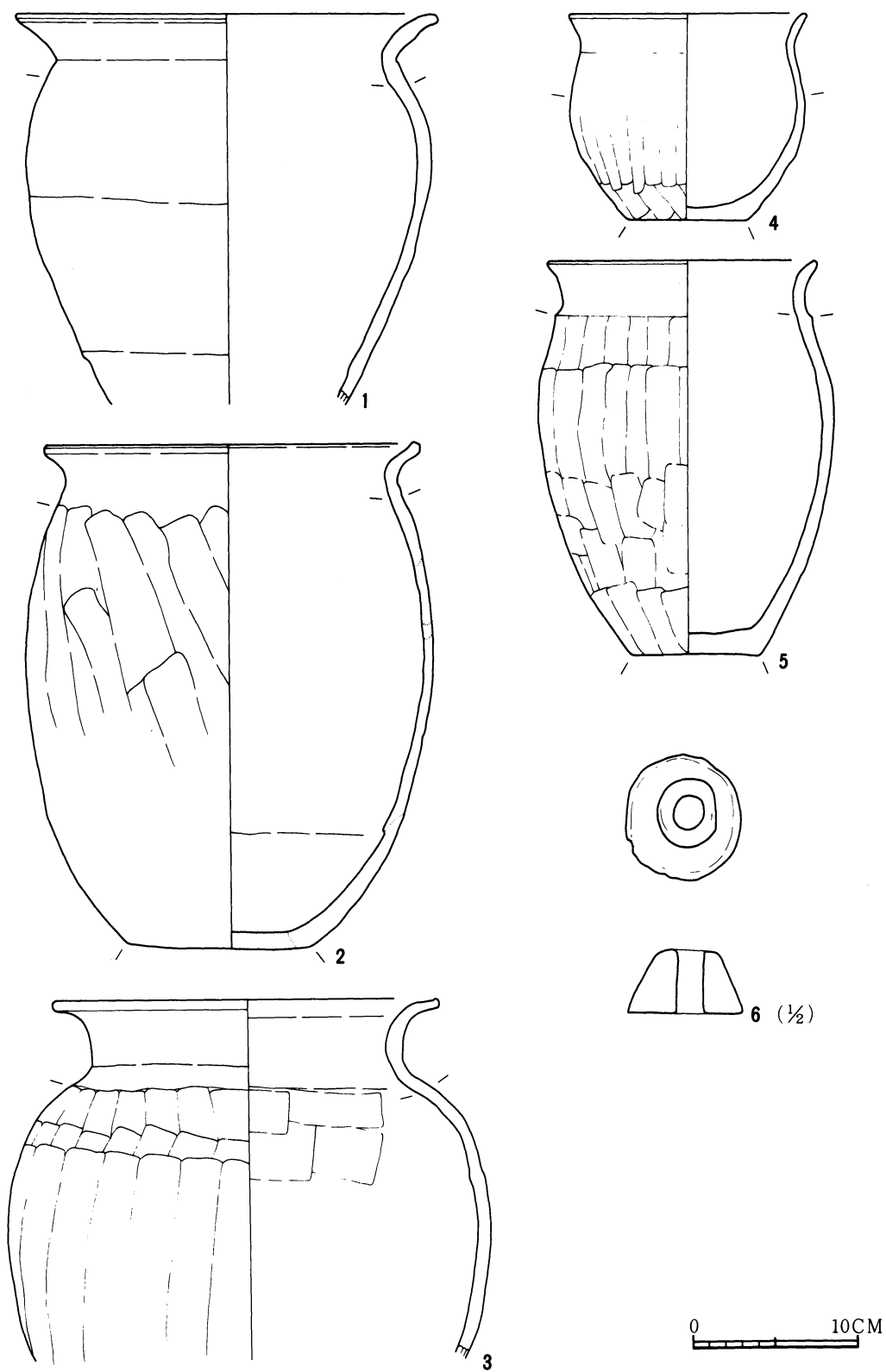
加えており、胴部との境に綾をのこす。6は滑石製紡錘車である。床面直上で出土した。丁寧な作りで、全体に丸味をもつ。



第8図 001号住居跡遺物出土状況図



第9図 001号住居跡カマド実測図



第10图 001号住居跡出土遺物実測図

第 1 表 001号住居跡出土遺物表 (第 8・10図)

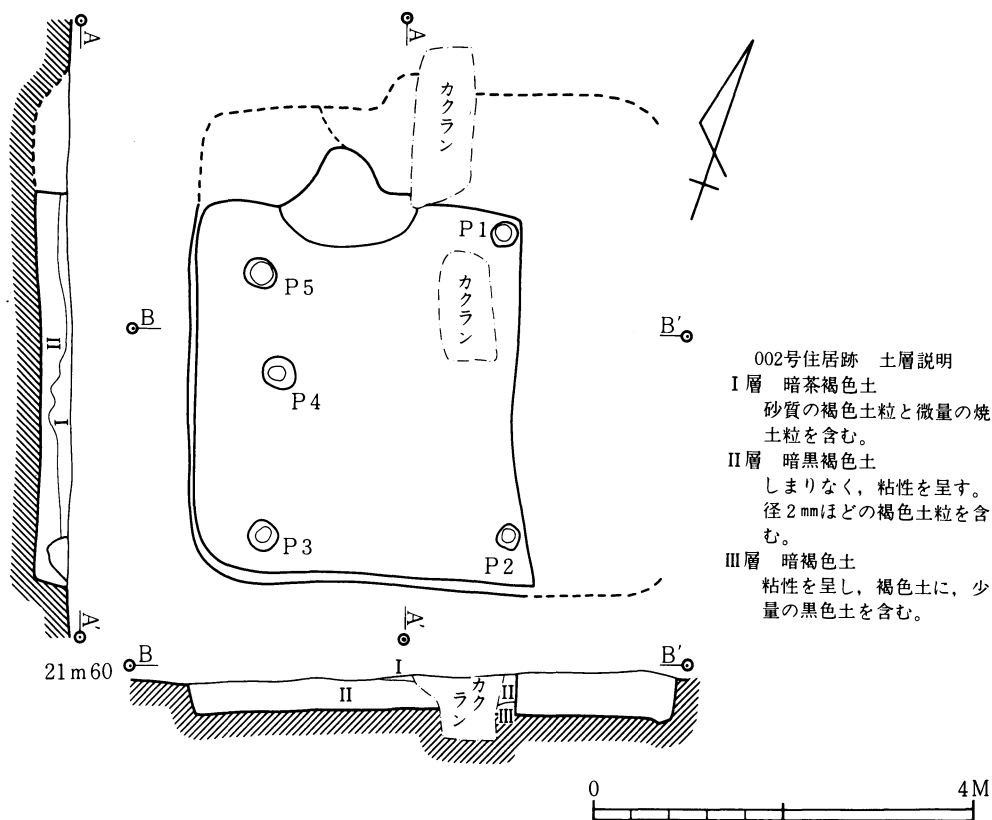
() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備 考 (接合関係)
1	甕	口縁部3/4 胴部1/2	25.6 — 残23.5	胴部外面タテヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。胴部中央に粘土帯接合痕がみられる。	暗褐色	砂粒を多く含む。内外面に剝離が多い。24。
2	甕	胴部1/2	23.0 11.5 30.0	胴部タテヘラケズリ、のちナデ。胴部下半ヨコヘラケズリ。底部周縁ヨコナデ。内面ナデ。口縁部ヨコナデ。口唇部は若干つまみ上げ状を呈す。	暗褐色 煤付着	細砂粒を含む。01, 02, 03, 08, 30, 32, 41, 55, 57, 63, 72, 74, 75, 78, 79, 80, 82。
3	壺	口縁～胴部 1/2	23.5 — 残21.5	胴部タテヘラケズリ。胴部中位部分的にヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面上部ヨコヘラケズリ、下部ナデ。胴上位に稜をもつ。	明褐色	細砂粒を含む。55, 43, 77, 61, 69, 42, 41, 62, 63, 40, 73。
4	小型甕	口縁部1/2を 欠く	(14.3) 7.1 12.5	胴部中位タテヘラケズリ、下位右下りヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面ナデ。	暗黒茶色	砂質。81。カマド内出土。
5	甕	口縁部1/2 胴部上半2/3	16.8 7.8 23.2	外面タテヘラケズリ。底部周縁ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面ナデ。胴部は4段のヘラケズリを施す。	黒褐色	砂粒を多く含むが緻密。52。
6	紡錘車	完形 石製品	上1.8 下3.4 高1.8	外面は丁寧なみがき。孔は全体に比して大きい。	暗青灰色	56。滑石製

002号住居跡 (第 11～14 図)

2 E区から検出調査された。003号住居跡と切り合い関係にある。主軸方位はN-19°-Wである。住居跡内覆土は3層に分けられる。褐色土粒を含み、短期間での埋没が推察される。

平面形は、3.45×4.00 mで、細長い方形を呈す。床面積は3.92×3.48 mで約13.6 m²を計る。床面は003号住居跡と同一レベルである。床面の標高は、約21.2 mである。周溝は検出されなかった。柱穴はP-1, P-2, P-3, P-5が主柱穴と思われる。P-5の性格は不明である。深さは、P-1からそれぞれ42, 17, 12, 14, 21 cmである。P-1は他の柱穴にくらべ4倍もの深さであり、住居跡隅に位置している。図化できた遺物は3点あるが、3は基準点測量を行った際に表採したものであり、本住居跡に伴うか否か不明である。他の遺物はほぼ床面から出土している。



第11図 002号住居跡実測図

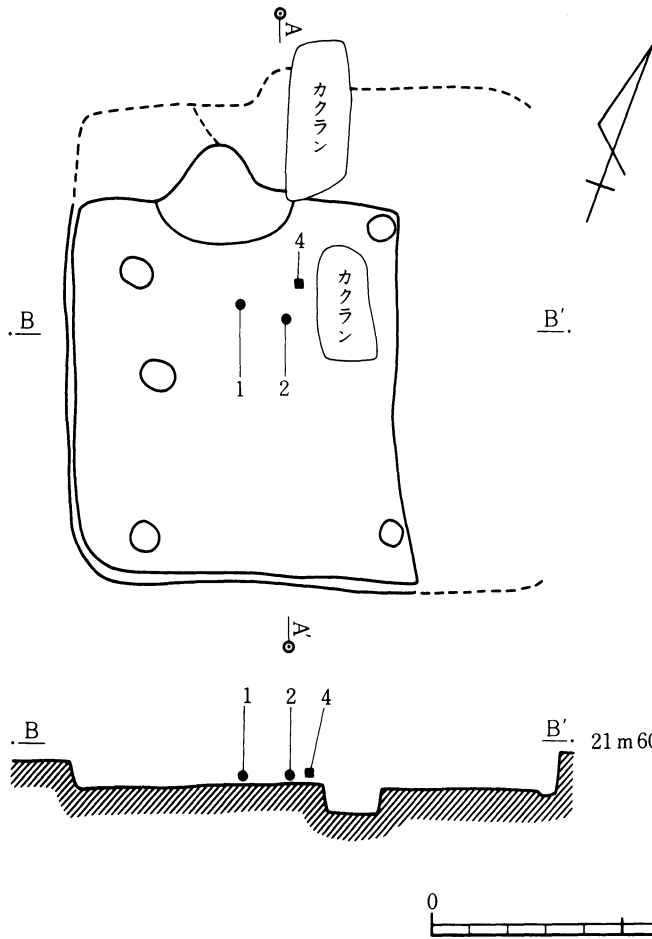
カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅約60cm、奥行き52cmを計る。カマド内堆積土は天井部がそのままの状態に崩落した状況を呈している。

003号住居跡 (第15～16図)

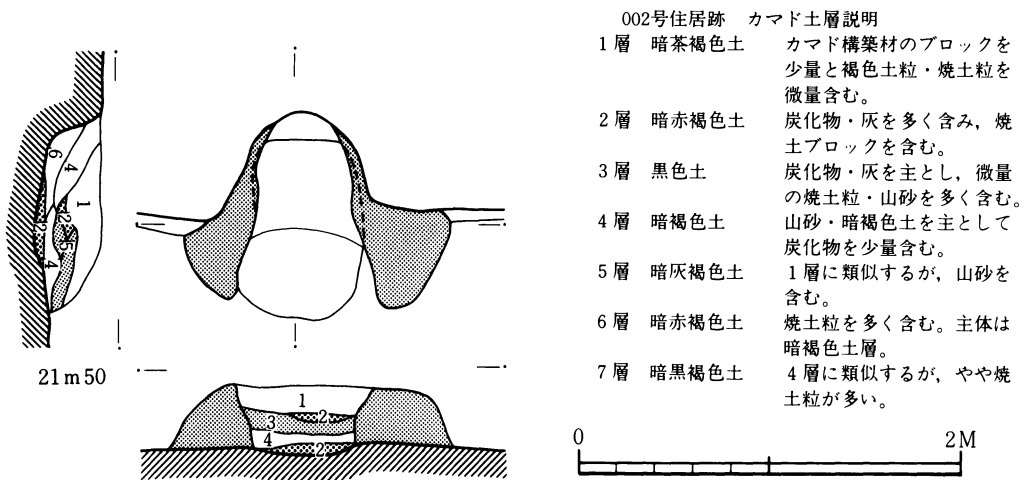
002号跡と重複している。主軸方位はN-21°-Wである。住居跡内覆土は5層が確認できたが、002号跡が重複しているために不明瞭である。

平面形は、5.13×5.15mでほぼ正方形を呈す。床面積は4.6×4.56mで約21m²を計る。壁高はそれぞれ43、36、47、48cmである。床面の標高は、約21.2mである。周溝は全周しており、幅12～17cm、深さ5～9cmを計る。柱穴は5本検出された。深さはそれぞれ54、63、59、68cmを計る。主柱穴はP-1、P-2、P-3、P-4と思われる。図化できる遺物は検出されなかった。床面はあまりしまりがないが、柱穴の間は若干踏みかためられている。張り床がされているが、張床下掘り形には特別な土壌・落ち込みは検出されなかった。

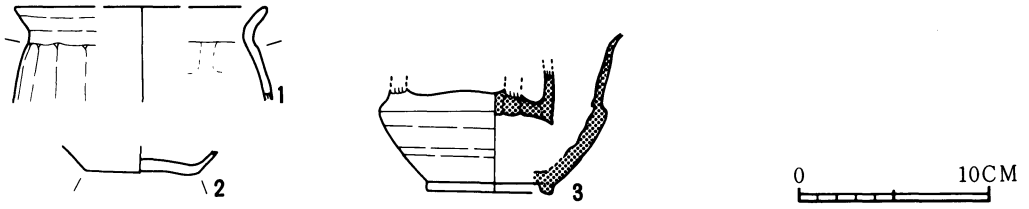
カマドは、北壁中央に構築されているが、右半分は耕作にともなう攪乱をうけている。掘込み幅約1m、奥行き約50cmを計る。カマド内土層は9層に分けられる。天井部は崩落してブロック状に落ち込んでいる。



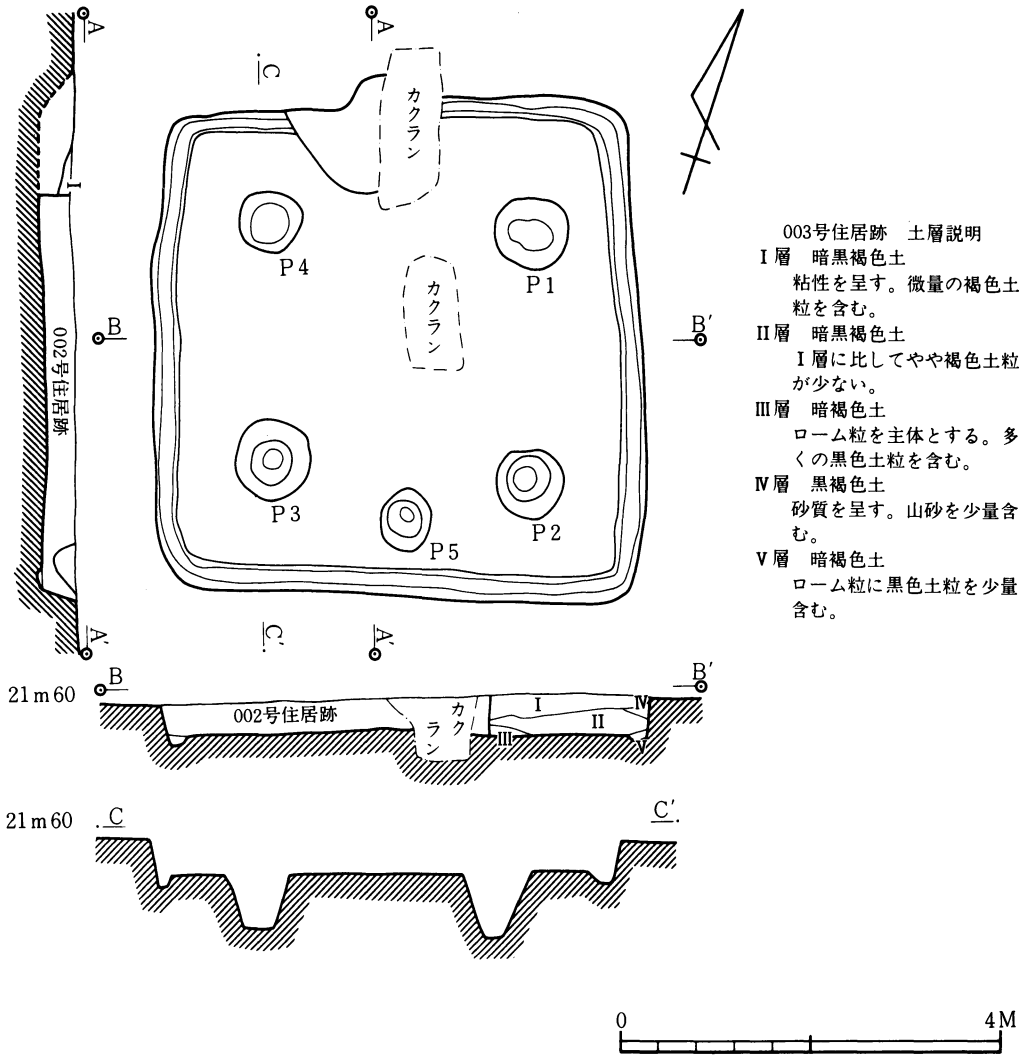
第12図 002号住居跡遺物出土状況図



第13図 002号住居跡カマド実測図



第14図 002号住居跡出土遺物実測図

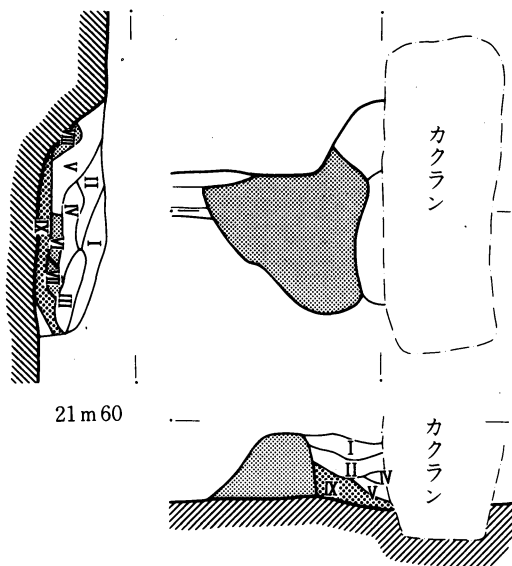


第15図 003号住居跡実測図

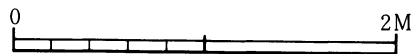
第2表 002号住居跡出土遺物表 (第12・14図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	小型甕	口縁部1/4	(13.0) — 残5.0	外面タテヘラケズリ。内面オサエ。 口縁ヨコナデ。	暗褐色 煤附着	石英粒を含む。00。
2	坏	底部のみ	— 5.8 残1.3	内外面ヨコナデ。底部は糸切ののち ヘラ整形。	暗赤褐色	緻密で良好。09。
3	平瓶	把手と口縁 部の一部を 欠く	— 6.65 5.1	底部糸切。張付け高台。	灰褐色	須恵器。砂粒を含むが 良好。01。 伴出は不確実。
4	鉄鏃	第73-1	長5.4	第16表参照。		07。



- 003号住居跡 カマド土層説明
- 1層 暗褐色土 褐色土粒を含む。002号住居跡の覆土と思われる。
 - 2層 暗褐色土 少量の焼土粒・炭化物を含む。
 - 3層 暗褐色土 焼土粒はほとんどなく、炭化物を多く含む。
 - 4層 暗褐色土 生焼け気味のローム粒を含む。
 - 5層 暗茶褐色土 焼土ブロック・焼土粒を含む。
 - 6層 灰褐色土 山砂を主体とし、褐色土を含む。
 - 7層 灰褐色土 カマド構築材。
 - 8層 灰褐色土 6層に近いが、やや褐色土と炭化物を含む。
 - 9層 暗赤褐色土 炭化物・焼土粒・山砂を多く含む。



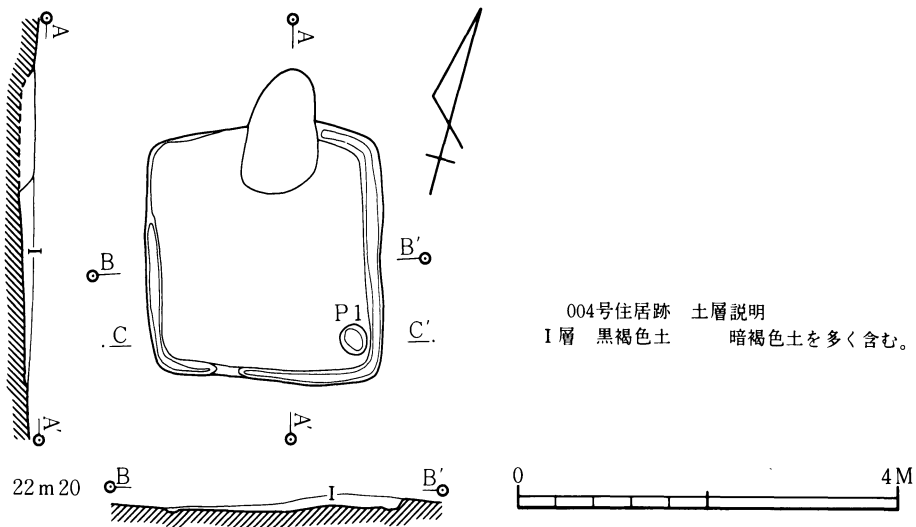
第16図 003号住居跡カマド実測図

004号住居跡 (第17~20図)

2 F区より検出調査された。主軸方位はN-17°-Wである。掘込みは浅くかろうじて検出された。住居跡内覆土は1層のみで黒褐色土粒を多く含んでいる。

平面形は、2.42×2.80 m でほぼ正方形を呈す。床面積は、2.42×2.1 m で約5.08 m²を計る。床面の標高は、約21.9 mである。周溝は北東壁と南壁の一部及びカマド下をのぞきめぐる。幅約18 cm、深さ3~4 cmである。柱穴は1本検出され、深さは10 cmである。遺物は1点が図化できた。床面は部分的にかたく踏みかためられている。

カマドは、北壁中央に構築されている。ほそ長く、カマド内覆土は2層に分けられる。焼土が約5 cmの厚さで堆積している。

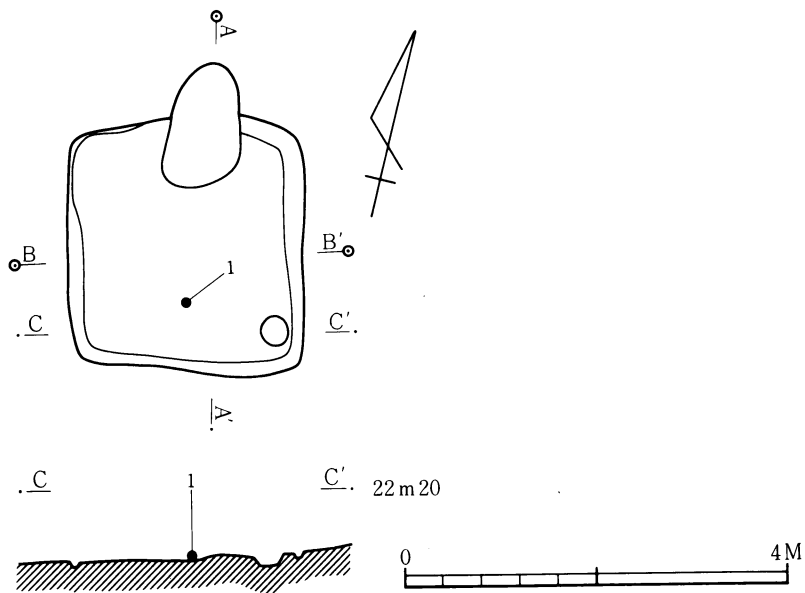


第17図 004号住居跡実測図

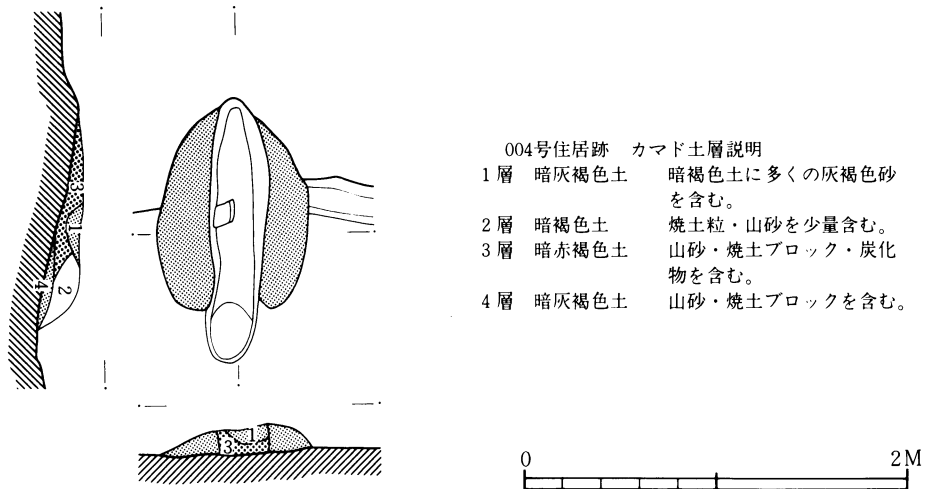
第3表 004号住居跡出土遺物表 (第18・20図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	底部と口縁	12.7 4.8 3.8	底部静止糸切り。	暗赤褐色	砂粒を多く含む。内外面の剝離多い。09, 11。



第18図 004号住居跡遺物出土状況図



第19図 004号住居跡カマド実測図



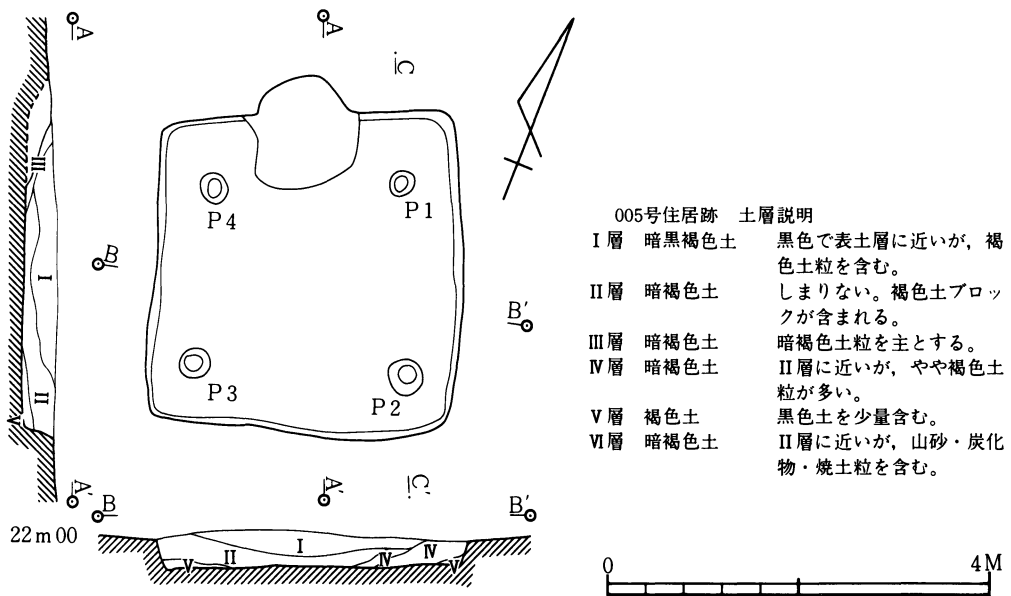
第20図 004号住居跡出土遺物実測図

005号住居跡 (第21~25図)

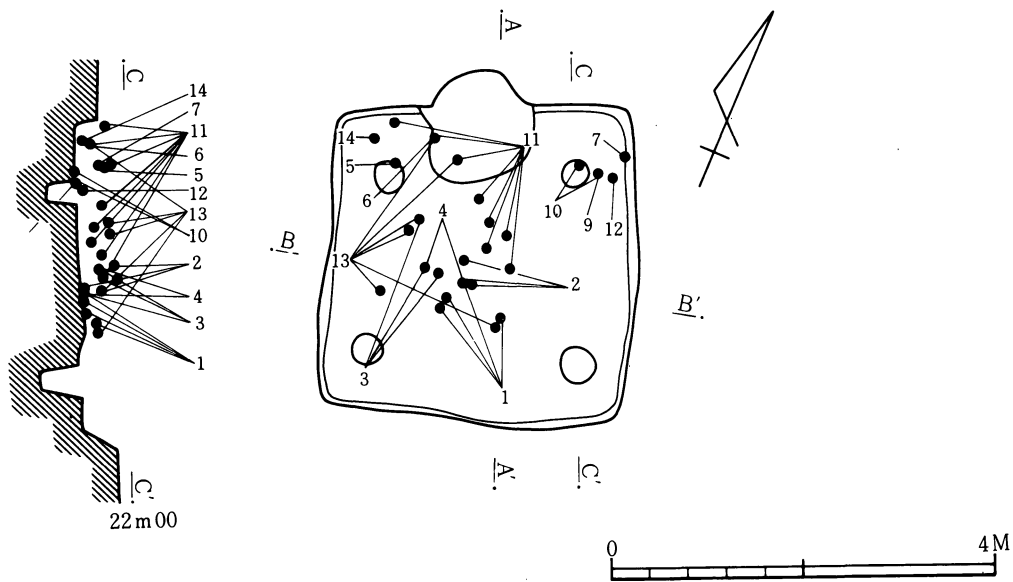
2 F区から検出調査された。主軸方位はN-25°-Wである。住居跡内覆土は6層に分けられ、所謂レンズ状堆積をしている。

平面形は、3.15×3.20 mでほぼ正方形を呈す。床面積は、3.05×3 mで約9.15 m²を計る。壁高はそれぞれ28, 31, 31, 19 cmである。床面の標高は、約21.5 mである。周溝はない。柱穴は4本検出され、全て主柱穴と思われる。多量の遺物が出土した。それらの多くがカマドの両脇から出土しており、特に床にふせた状況をしていた。また4・8の土器はカマド内から出土し、8の甕はカマドにかけた状態で出土している。

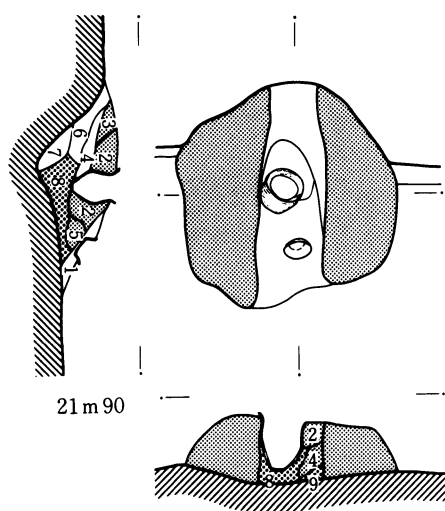
カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅約1 m、奥行き35 cmを計る。カマド内堆積土は9層に分けられたが、基本土層は4層に分けられた。



第21図 005号住居跡実測図

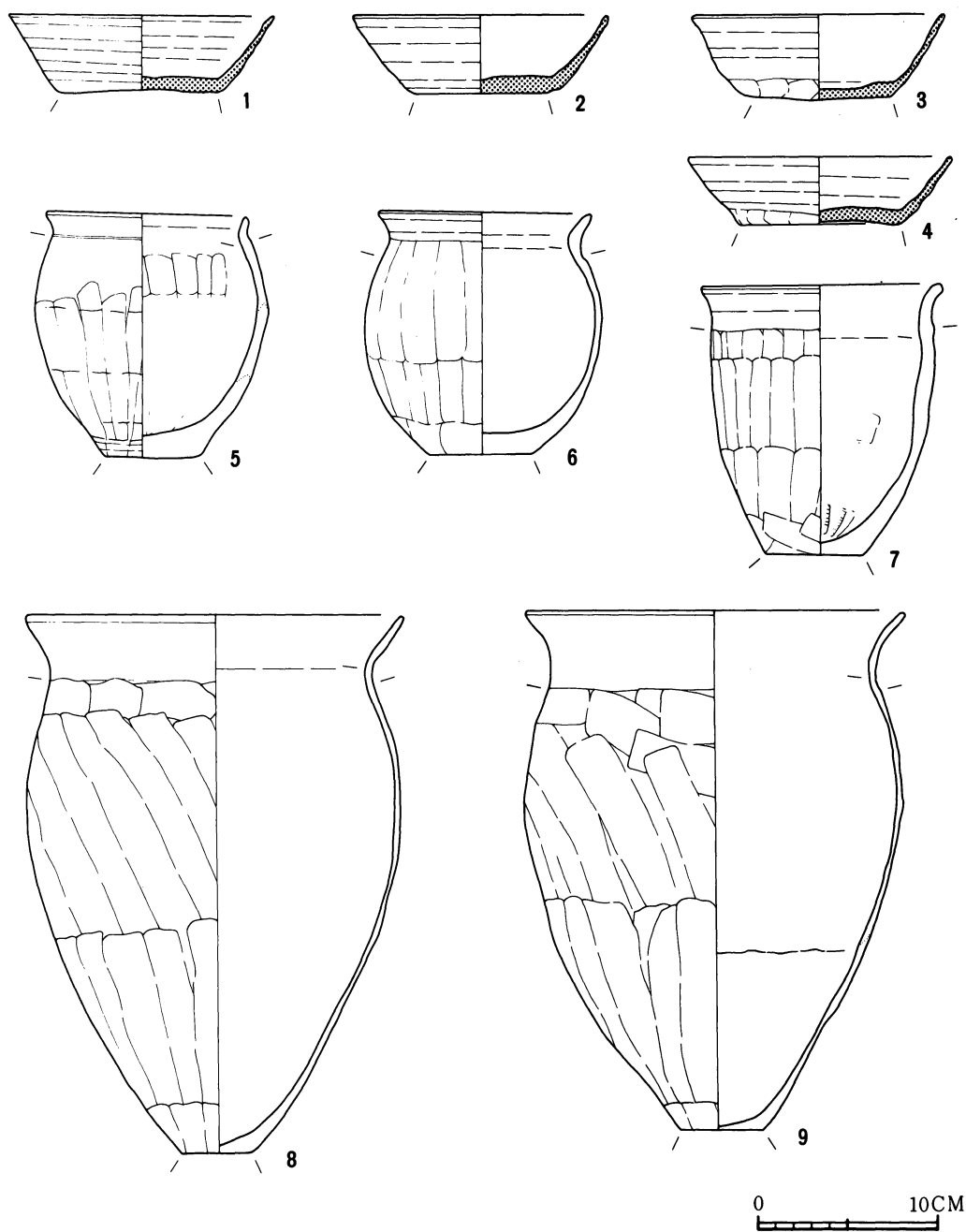


第22図 005号住居跡遺物出土状況図



- 005号住居跡 カマド土層説明
- | | | |
|----|-------|---------------------------|
| 1層 | 暗灰褐色土 | 山砂を多く含み、焼土粒を微量含む。 |
| 2層 | 灰赤褐色土 | 山砂を多く含み、赤褐色砂を含む。 |
| 3層 | 灰褐色土 | 山砂に微量の暗褐色土粒を含む。 |
| 4層 | 灰赤褐色土 | 2層に類似するが、焼土粒をやや多く含む。 |
| 5層 | 灰褐色土 | 山砂を主として、少量の暗褐色土・焼土粒を多く含む。 |
| 6層 | 暗赤褐色土 | 山砂を主として、焼土粒・炭化物を多く含む。 |
| 7層 | 暗褐色土 | 暗褐色土に、少量の灰・山砂を含む。 |
| 8層 | 暗黒褐色土 | 灰を主として、炭化物・焼土粒を多く含む。 |
| 9層 | 暗黒褐色土 | 8層に類似、山砂を多量に含む。 |

第23図 005号住居跡カマド実測図

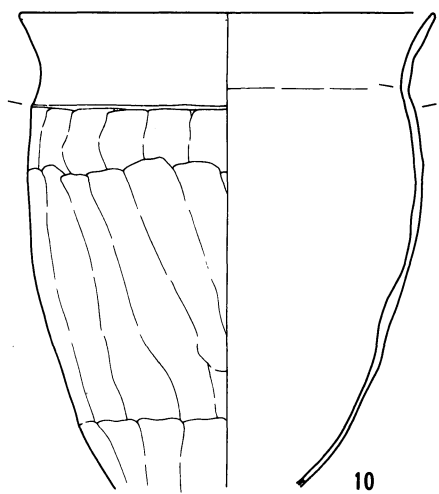


第24图 005号住居跡出土遺物実測図(1)

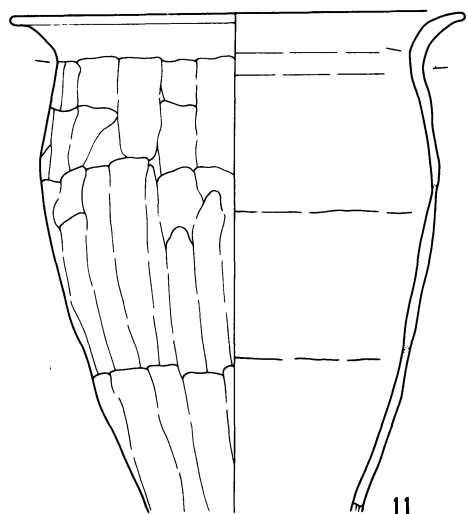
第4表 005号住居跡出土遺物表 (第22図~25図)

() 復元

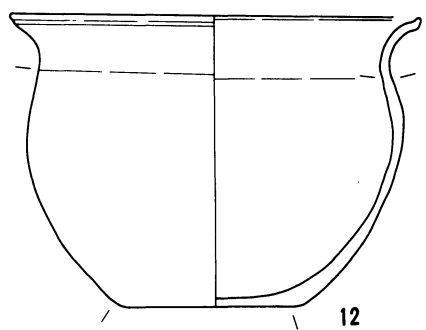
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	ほぼ完形 口縁一部欠 く。	14.8 8.5 4.3	紐積み。底面へラケズリ。内外面 ヨコナデ。	暗青灰色	22, 17, 21, 32。
2	坏	口縁一部を 欠く。	9.4 7.4 4.3	紐積み。内外面ヨコナデ。底部静 止へラ切り。	暗灰色	緻密で良好。31, 32, 35, 42。
3	坏	体部1/5を欠 く。	14.0 7.6 4.9	紐積み、内外面ヨコナデ。底部周囲 へラケズリ。底部静止へラケズリ。	灰褐色	砂粒を多く含む。少量 の雲母を含む。33, 13, 18, 34。
4	坏	口縁の一部 及び底部の 一部を欠 く。	14.7 9.0 4.8	紐積み。回転ナデ。底部周囲ヨコ へラケズリ。底部回転へラ切り。		砂質。34, 32, カマド 内出土。
5	小型甕	完形	11.1 5.4 13.3	紐積み。外面胴上位ナデ。中位タテ へラケズリ。下位タテへラケズリ。 底部周囲ヨコへラケズリ。内面胴上 部ヨコへラケズリのちオサエ。底部 へラケズリ。	暗褐色	緻密ではないが良好。 28。
6	小型甕	完形	11.8 5.8 13.4	外面胴部タテへラケズリ。最下位ヨ コへラケズリ。口縁部ヨコナデ。内 面ナデ。	暗茶褐色 胴部に煤 付着	砂粒を多く含むが良 好。46, 39, 42, 44。
7	小型甕	完形	13.4 5.5 14.9	外面・胴部上位・中位・下位タテへ ラケズリ。底部周囲右下りへラケズ リ。内面、へラナデ。のち、全面ナ デ。口縁部、ヨコナデ。	暗黒褐色	石英粒及び雲母片を含 む。01。
8	甕	口縁の一部 及び胴上位	21.0 4.8 29.5	紐積み。外面4段のへラケズリ。上 部は右から左へへラケズリ。中部下 から上へへラケズリ。下部左から右 へへラケズリ。	明褐色	緻密で良好。器厚、う すく、へラケズリを加 える。底部周囲に焼け た砂付着。44。カマド 内出土。
9	甕	完形。(底部 調査中欠 く)	21.2 4.7 28.2	紐積み。外面3段のへラケズリ。内 面ナデ。底部へラ切り。口縁ヨコナ デ。	明褐色	砂質だが良好。27。



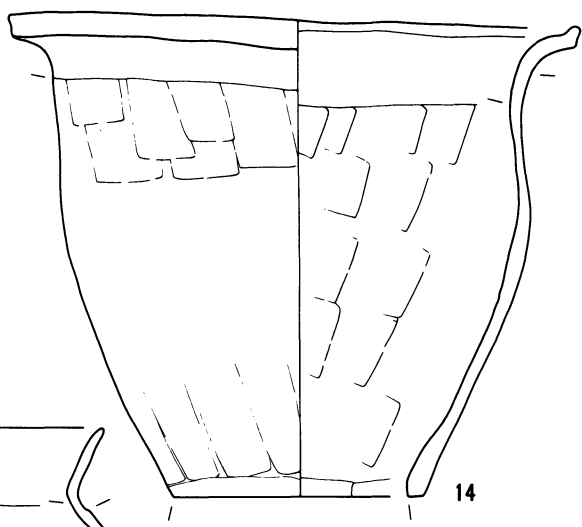
10



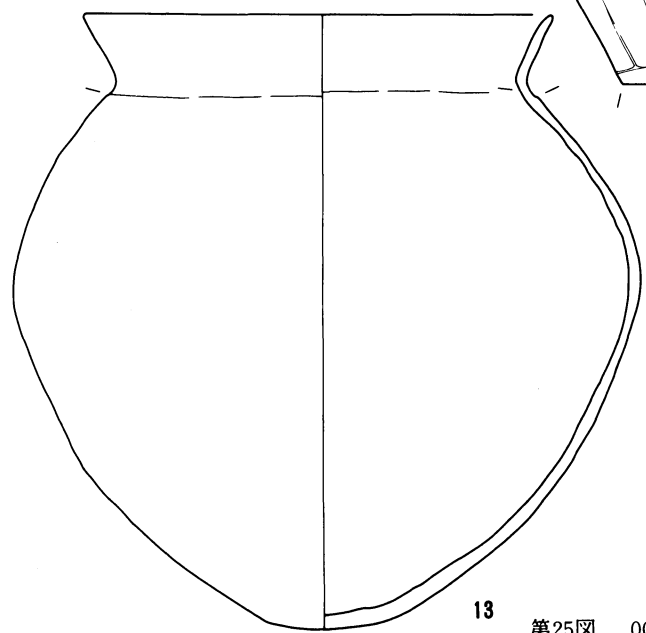
11



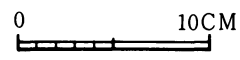
12



14



13



第25図 005号住居跡出土遺物実測図(2)

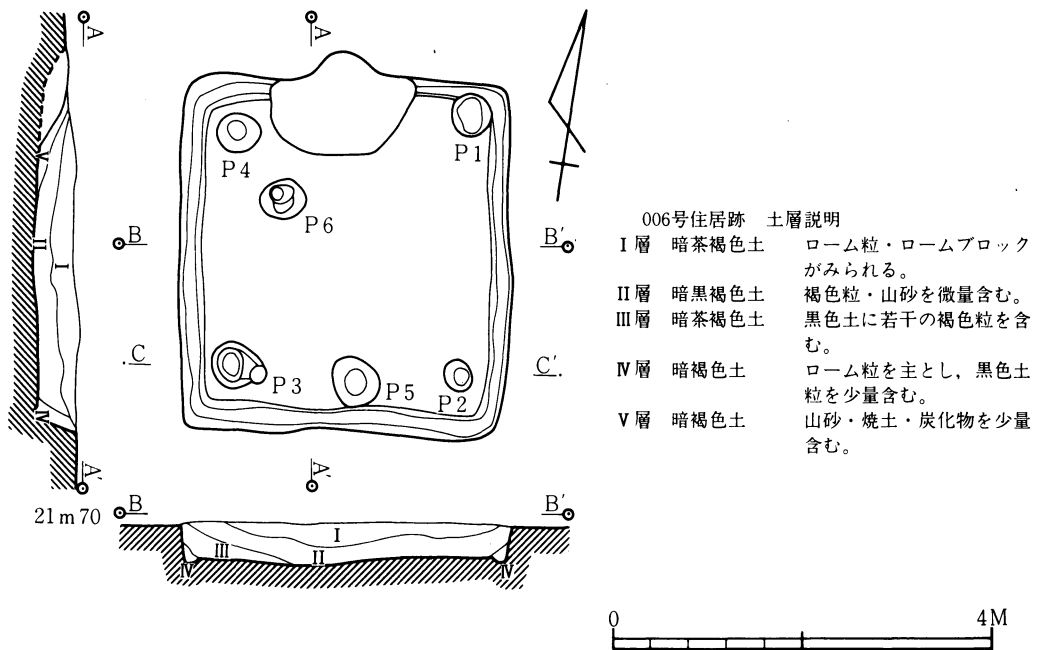
10	甕	胴部1/2と底部欠く。	21.4 — 残24.2	紐積み。外面3段のヘラケズリ。内面ナデ。口縁ヨコナデ。	暗黒褐色 スス付着	砂粒を多く含むが良好。27, 29。
11	甕	底部を欠く。	23.9 — 残26.1	紐積み。外面タテヘラケズリ。底部周囲のみ方向が異なる。内面ナデ。口縁ヨコナデ。	暗茶褐色	緻密で良好。38, 05, 06, 07, 08, 24, 39, 41, 42。
12	鉢	完形。口縁一部を欠く。	21.2 9.5 14.8	紐積み。内外面ナデ。口縁ヨコナデ。底部ヘラ整形。	暗褐色	良好。26。
13	甕	口縁一部及び胴部一部を欠く。	24.4 5.3 31.3	紐積み。外面ヨコ、タテヘラケズリ。底部丸底に近くヘラケズリ。内面ナデ。器面ははだあれがみられる。口縁ヨコナデ。	暗褐色	砂質だが良好。39, 12, 13, 14, 24。
14	甕	底部周辺一部欠く。	39.7 13.0 24.0	紐積み。外面下部ヘラケズリ、のちナデ。口縁部ヨコナデ。内面ヨコヘラケズリ。底部周囲ヨコヘラケズリ。	暗褐色	細砂を含むが良好。30。

006号住居跡 (第26~29図)

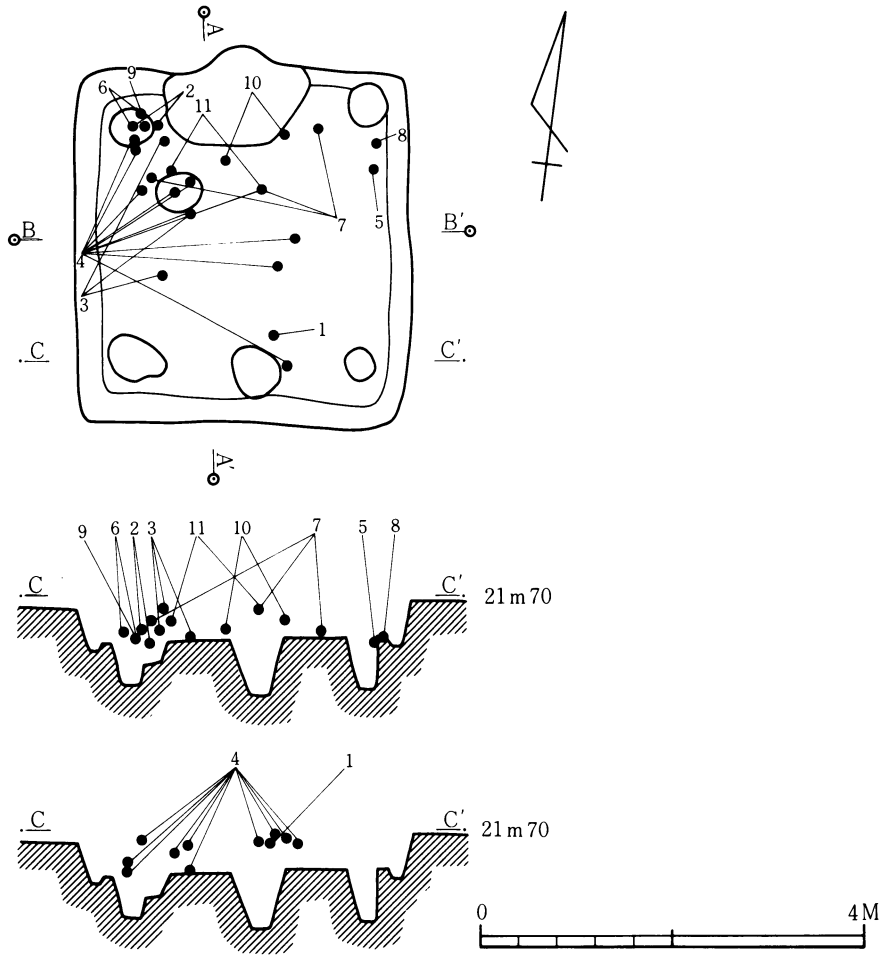
1 F・2 F区にかけて検出調査された。主軸方位はN-8°-Wである。住居跡内覆土は4層に分けられ、全体にロームブロック及びローム粒を含む。

平面形は、3.57×3.50 mでほぼ正方形を呈す。床面積は、3.22×3.10 mで9.98 m²を計る。壁高はそれぞれ31, 36, 40, 25 cmである。床面の標高は、約21.2 mである。周溝は全周しており、幅は22, 28, 30, 25 cmで、深さは5, 6, 6, 6 cmである。柱穴は6本確認された。P-1, P-2, P-3, P-4が主柱穴と思われる。P-6は補助柱であろう。P-5は入口の施設にともなう柱穴と思われる。遺物はカマドの両側から多く検出された。特にカマド右側からは8の小型甕形土器が出土した。

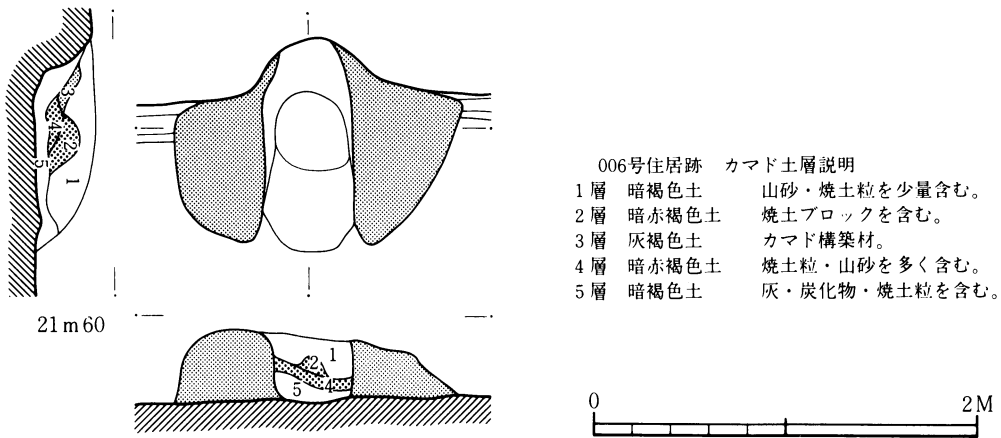
カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅45 cm、奥行き28 cmを計る。天井部のカマド構築材はすでに流出しており、焼土層のみ残存していた。



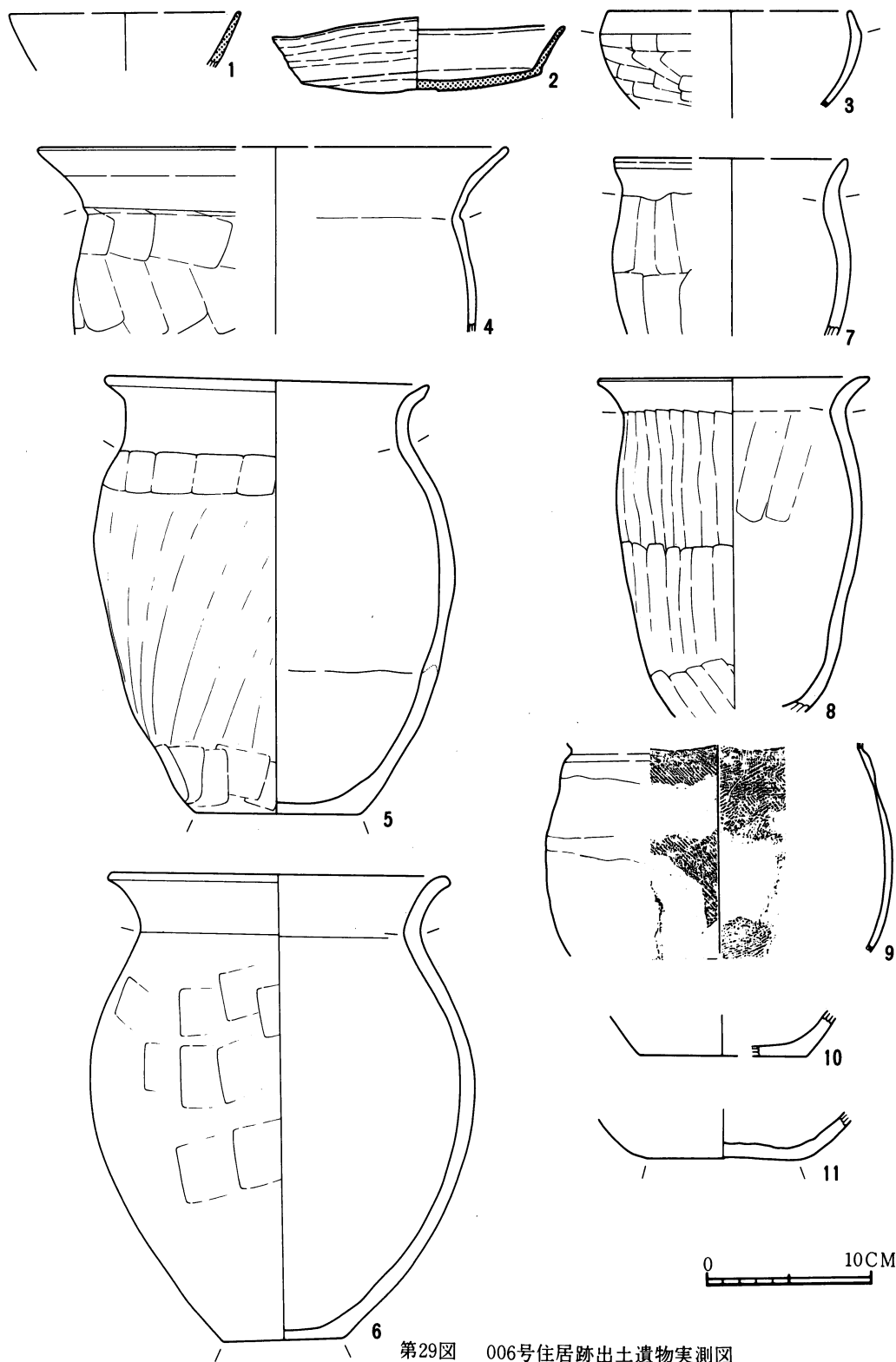
第26図 006号住居跡実測図



第27図 006号住居跡遺物出土状況図



第28図 006号住居跡カマド実測図



第29图 006号住居跡出土遺物実測図

第5表 006号住居跡出土遺物表 (第27・29図)

() 復元

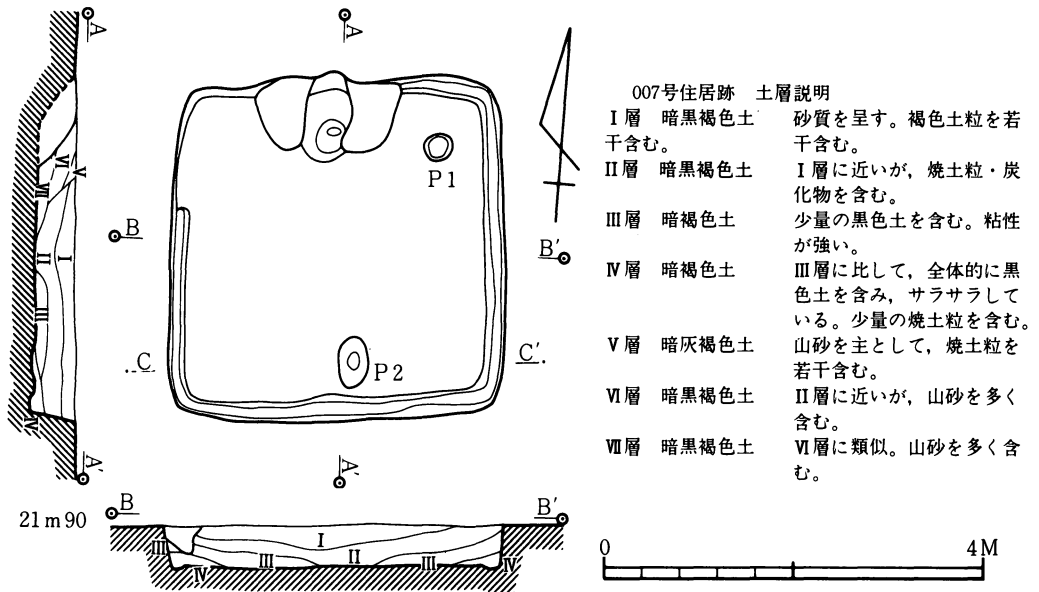
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	口縁1/4	14.0 — 残3.5	内、外面ヨコナデ	青灰色	砂粒を微量含むが良好。須恵器。03。
2	坏	口縁部一部	18.0 14.8 4.7	紐積み。回転台ヨコナデ。回転ヘラ切り。内面自然釉あり。宝珠の剝離痕あり。	灰褐色	砂を含む。ゆがみあり。須恵器。52, 31。
3	埴	口縁部1/3	(14.5) — 6.0	外面ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	暗褐色	胎土は緻密。18, 30, 42, 64。
4	甕	口縁1/4	(28.5) — 残11.0	紐積み。体部ヘラ切り。口縁部ヨコナデ。内面胴部ナデ。	暗赤褐色	砂質。06, 27, 13, 42, 49, 54, 64, 05, 25, 32, 02。
5	甕	口縁、胴部の一部、底部中央欠く。	20.8 10.0 25.3	外面ヘラケズリ。のち底部周辺ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	内外面褐色 煤付着	緻密で良好。外面一部黒斑あり。08。
6	甕	口縁部一部欠く。	20.5 7.2 22.3	紐積み。外面ヨコヘラケズリ。後ナデ。内面ナデ。口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	暗赤褐色	径2mmほどの石英粒を含むが良好。51, 53。
7	小形壺	口縁部。胴部1/4。胴部中位以下を欠く。	(14.2) — 残10.7	紐積み。外面胴上部タテヘラケズリ。胴部中位ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面ヨコヘラケズリ。	暗褐色	砂質。10, 13, 26。
8	甕	底部を欠く。	16.3 7.7 残20.0	紐積み。外面上。中部タテヘラケズリ。下部右下りヘラケズリ。内面ナデ。上位のみタテヘラナデ。	暗褐色	全体にあらいが、砂粒は含まない。表面に磨減多い。63。
9	甕	胴部1/5	— — 残12.0	紐積み。内外面ともにハケ状工具による整形。二次焼成をうけている。	暗褐色	51。
10	壺	1/2 1/2	— 10.0 —	底部周辺ヨコヘラケズリ。	暗褐色	良好。14, 15。
11	壺	底部	— 9.0 残3.0	全体磨減しており不明。	暗褐色	細粒だが不良。64, 13, 28。

007号住居跡 (第30~33図)

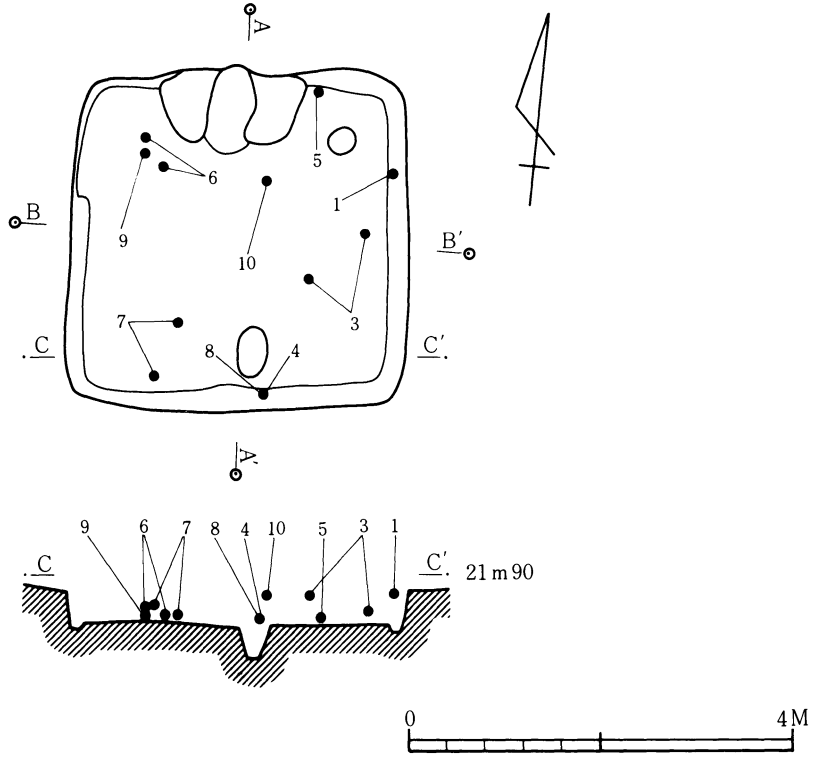
1G・2G区にかけて検出調査された。主軸方位はN-7°-Wである。覆土は7層に分けられるが、基本土層は4層に分けられる。粒性があり、炭化物を微量含んでいる。

平面形は、3.48×3.50mでほぼ正方形を呈す。各壁はやや丸みをおびる。床面積は、3.08×3.12mで約9.6㎡を計る。壁高はそれぞれ43, 42, 44, 36cmである。床面の標高は、約21.4mである。周溝は西壁から北壁の一部をのぞき全周する。幅は22, 18, 28, 18cmで、深さは7, 7, 3, 6cmを計る。柱穴は2本検出された。P-2は入口にともなう柱穴であろう。遺物は壁に近い範囲で出土した。11の甕はカマド内から出土している。

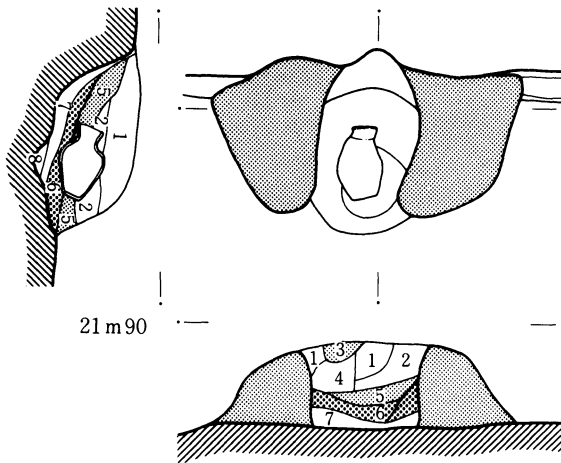
カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅50cm, 奥行き12cmを計る。カマド内堆積土は5層に分けられる。天井部構築材も認められる。



第30図 007号住居跡実測図

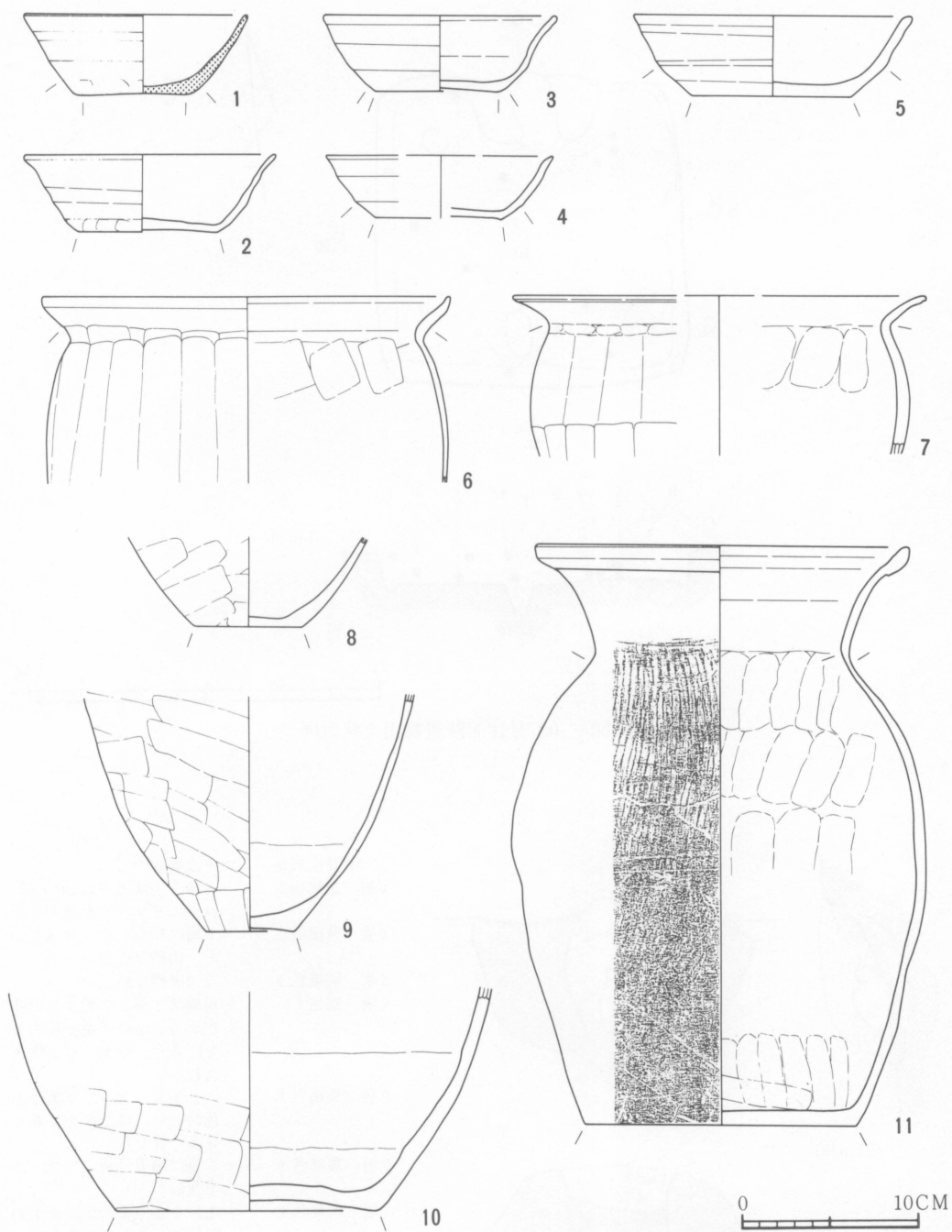


第31図 007号住居跡遺物出土状況図



- 007号住居跡 カマド土層説明
- | | | |
|----|-------|--|
| 1層 | 黄褐色土 | 山砂を主体とする。焼土粒・ロームブロックを若干含む。 |
| 2層 | 黄褐色土 | 1層に類似。やや黒味がかかる。山砂は少ない。 |
| 3層 | 灰褐色土 | カマド構築材。 |
| 4層 | 褐色土 | 色調は1層・2層より赤味がかかる。山砂・焼土粒を多量に含む。焼土ブロックを含む。 |
| 5層 | 黒褐色土 | 灰を多量に含み、色調は黒色に近い。焼土粒を1層より多く含む。 |
| 6層 | 黒褐色土 | 5層に類似。焼土ブロックを含む。 |
| 7層 | 黒褐色土 | 山砂を多く含むが、少量の炭化物・焼土粒を含む。 |
| 8層 | 暗赤褐色土 | 山砂を主として、微量の炭化物を含む。 |

第32図 007号住居跡カマド実測図



第33图 007号住居跡出土遺物実測図

第6表 007号住居跡出土遺物表 (第31~33図)

() 復元

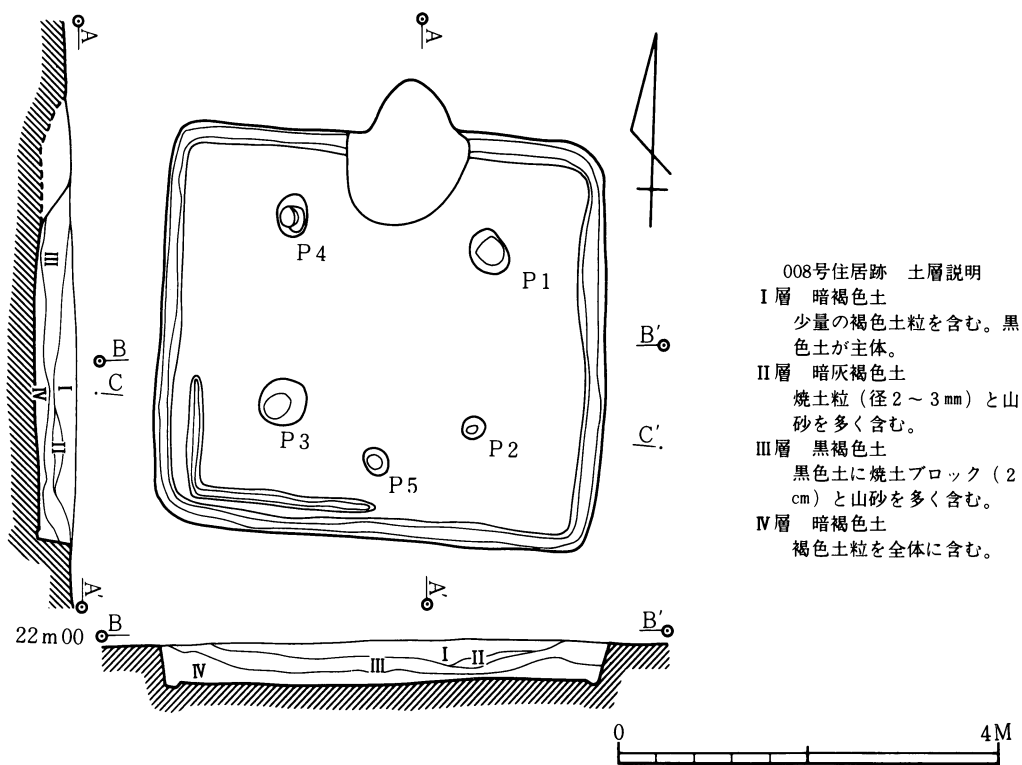
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	体部1/2を欠く。	12.6 6.2 4.4	紐積み。回転台ヨコナデ。底部静止ヘラケズリ。周囲ヨコヘラケズリ。	暗灰色	砂質。須恵質。24, 59。
2	坏	体部1/4を欠く。	14.4 7.9 4.4	外面底部周囲ヨコヘラケズリ。内外面ヨコナデ。底部回転ヘラケズリ。	明褐色	精製されて良好。43。
3	坏	ほぼ完形	13.0 7.4 4.3	紐積み。底部回転ヘラケズリ。体部ヨコナデ。	暗褐色	砂質良好。32, 03, 42, 44。
4	坏	口縁1/4を欠く。	(13.2) 7.0 3.6	紐積み。回転ナデ。底部静止ヘラケズリ。底部周囲ヘラケズリ。	暗黒褐色	石英粒を含む良好。43, 25, 58。
5	坏	1/3	15.6 8.8 4.9	紐積み。回転台使用。外面底部周囲回転ヨコヘラケズリ。内面ヘラミガキ?。底部糸切り。のち周囲ヘラ整形。	暗黒褐色	精製されて良好。26。
6	甕	口縁1/2	23.0 — 残10.0	紐積み。外面胴部タテヘラケズリ。内面胴上位ヨコヘラケズリ。中位ナデ。口縁部ヨコナデ。	暗黒褐色	細粒砂を含む。39, 38, 44。
7	甕	1/4	(23.4) — 残9.0	紐積み。外面胴部タテヘラケズリ。口縁部オサエ。内面指頭オサエ、のちナデ。口縁部ヨコナデ。	暗黒褐色	砂粒を含む。13, 05, 43, 41。
8	甕	底部	— 6.0 残5.0	外面ヨコヘラケズリ。内面ヘラケズリ、のちナデ。	暗褐色	普通。25, 45, 46。
9	甕	胴部1/3	— 4.9 残13.0	紐積み。外面胴下位タテヘラケズリ。中位右下りヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内面ナデ。	暗褐色	良好。54, 37。
10	甕	底部と胴下位の一部分。	— 14.4 残12.4	紐積み。ヨコヘラケズリ胴部上位ナデ。内面ヨコナデ。底部回転ヘラ切り。	暗赤褐色	2mmほどの砂粒を多く含む不良。56, 02, 34, 44。
11	甕	1/2	21.4 15.4 32.4	紐積み。外面タタキ、内面オサエ。口縁部ヨコナデ。底部周囲ナデ。	暗黒褐色	良好。内外面磨減多い。48。カマド内出土。須恵質。

008号住居跡 (第34~37図)

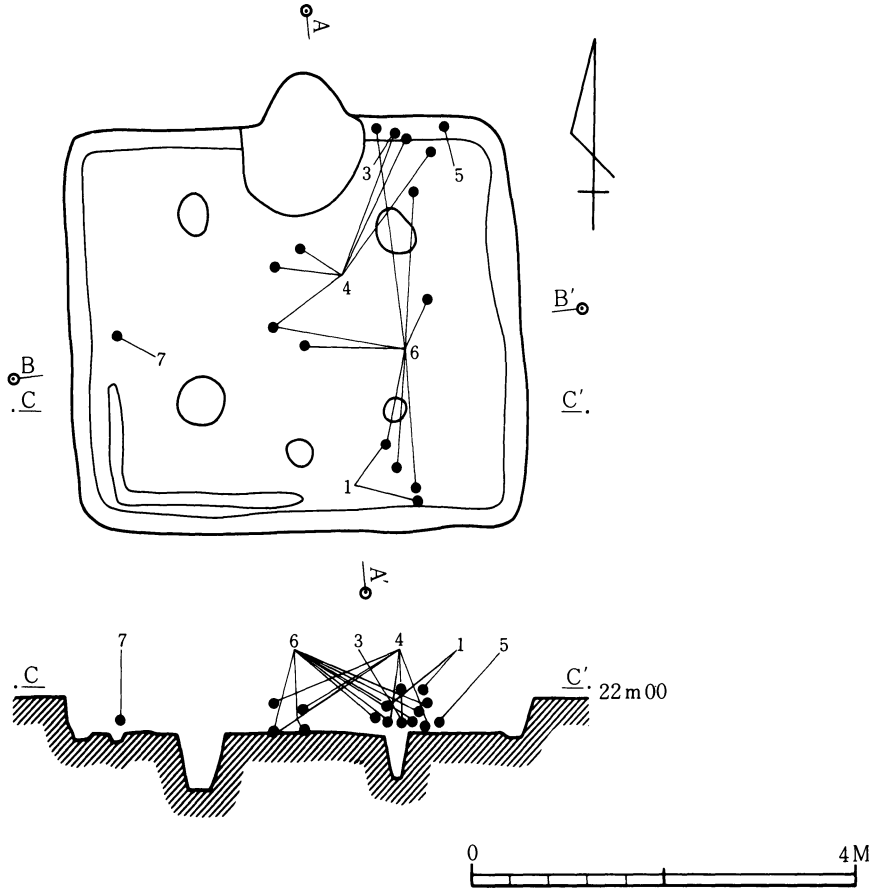
2 G区より検出調査された。主軸方位はN-2°-Wである。住居跡内覆土は4層に分けられ一般的な堆積状態を示す。全体に焼土粒・山砂を含む。

平面形は、4.22×4.58 mで、多少横に長い形状を呈している。床面積は、3.78×4.20 mで約15.8 m²を計る。住居跡内の南・西隅に周溝様の溝がめぐる。こほ溝は床面の確認段階で同時に検出された。壁高はそれぞれ44, 41, 44, 29 cmを計る。床面の標高は、約21.4 mである。周溝は全周する。幅は20, 16, 18, 16 cmで、深さは4, 5, 3, 11 cmである。柱穴は5本検出された。P-1, P-2, P-3, P-4が支柱穴で、P-5は入口施設に伴うものであろう。深さはそれぞれ50, 28, 55, 45, 30 cmである。遺物は5の甕がカマド右側からふせられた状態で出土した。2の環はカマド内より出土した。

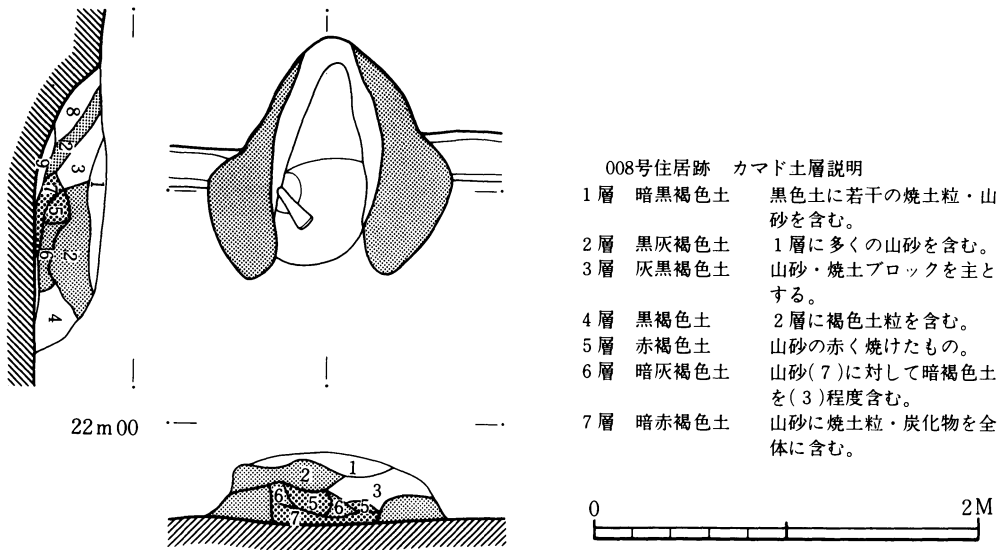
カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅90 cm, 奥行き52 cmを計る。カマド内堆積土は7層に分けられる。天井部は前のめりに崩落した状況を示しており、カマド内部からは土製支脚が出土した。



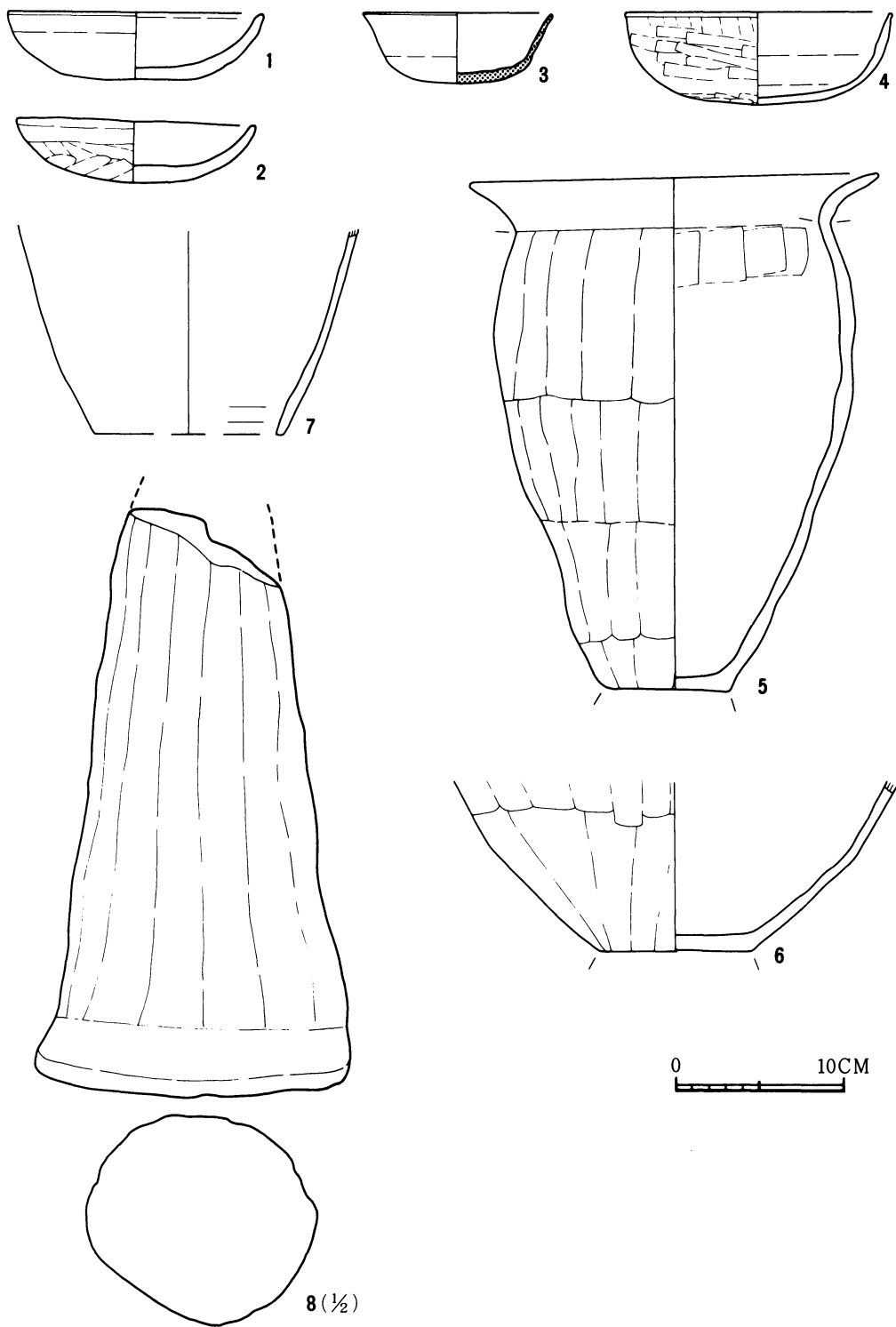
第34図 008号住居跡実測図



第35図 008号住居跡遺物出土状況図



第36図 008号住居跡カマド実測図



第37图 008号住居跡出土遺物実測図

第7表 008号住居跡出土遺物表 (第35~37図)

() 復元

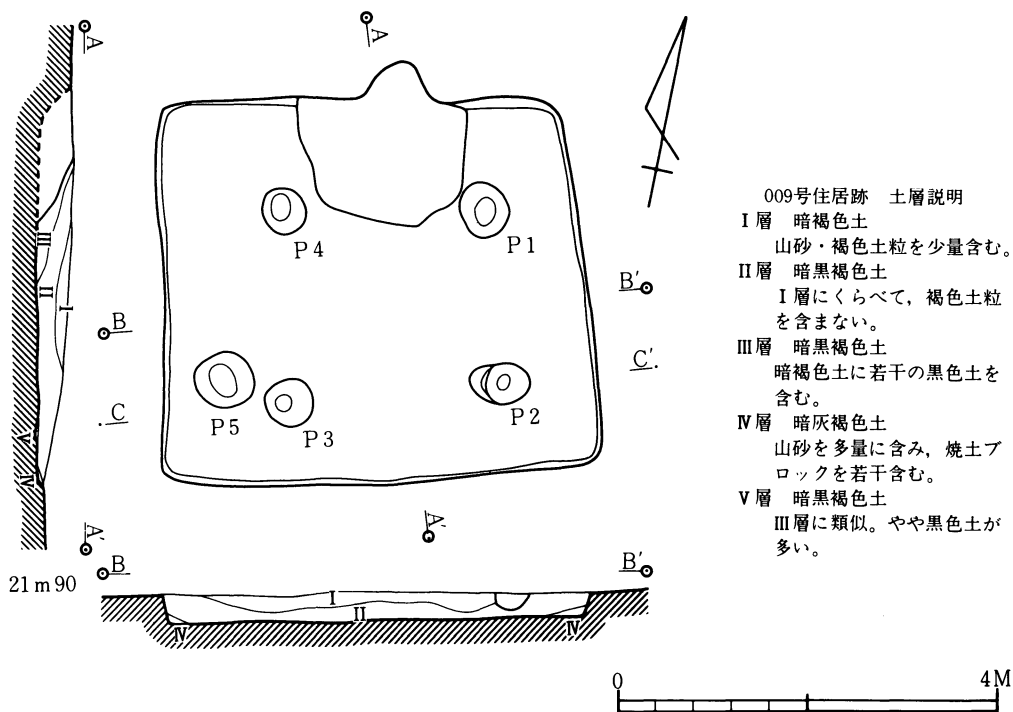
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/3	15.1 7.8 4.0	外面体部ヨコヘラケズリ。のちナデ。 口縁部内外面ヨコナデ。内面ナデ。	暗黒褐色	精製されており良好。 17, 21。
2	坏	口縁一部欠 く。	14.3 — 3.6	紐積み。外面ヘラケズリ。口縁部及 び内面ナデ。	暗褐色	緻密。52。カマド内出 土。
3	坏	ほぼ完形	11.6 — 4.1	体部ヘラケズリ。のちナデ。口縁部 及び内面ヨコナデ。	白灰褐色	小砂粒を含む良好。須 恵質。34。
4	塊	ほぼ完形	16.0 — 5.5	口縁内面ヨコナデ。外面胴部ヨコヘ ラケズリ。のち右下りナデ。底部ヨ コヘラケズリ。	明褐色	精製良好。37, 08, 11, 36, 38, 42。
5	甕	ほぼ完形	24.2 7.2 29.8	紐積み。器内に凹凸あり。外面タテ ヘラ切り四段。内面上位ヨコヘラナ デ。下位ナデ。口縁部ナデ。	暗黒褐色	径2~3mmの砂粒を含 む。焼成不良でしまり なし。39。
6	壺	底部及び胴 一部	— 9.0 残9.7	紐積み。外面胴部中位タテヘラケズ リ。下位左下りヘラケズリ。内面ナ デ。底部ヘラ整形。	暗黒褐色	良好。31, 17, 18, 20, 24, 42, 44, 48。
7	甌	1/3	— 11.0 残11.8	外面タテヘラナデ。底部周囲ヨコナ デ。	暗褐色	良好。38, 40, 44。
8	支脚	完形。 土製品。	下9.3 上5.0 高16.8	全体にもろいが、しっかりしたつく り。	暗褐色	砂質、焼成良好。カマ ド内出土。49。

009号住居跡 (第38~41図)

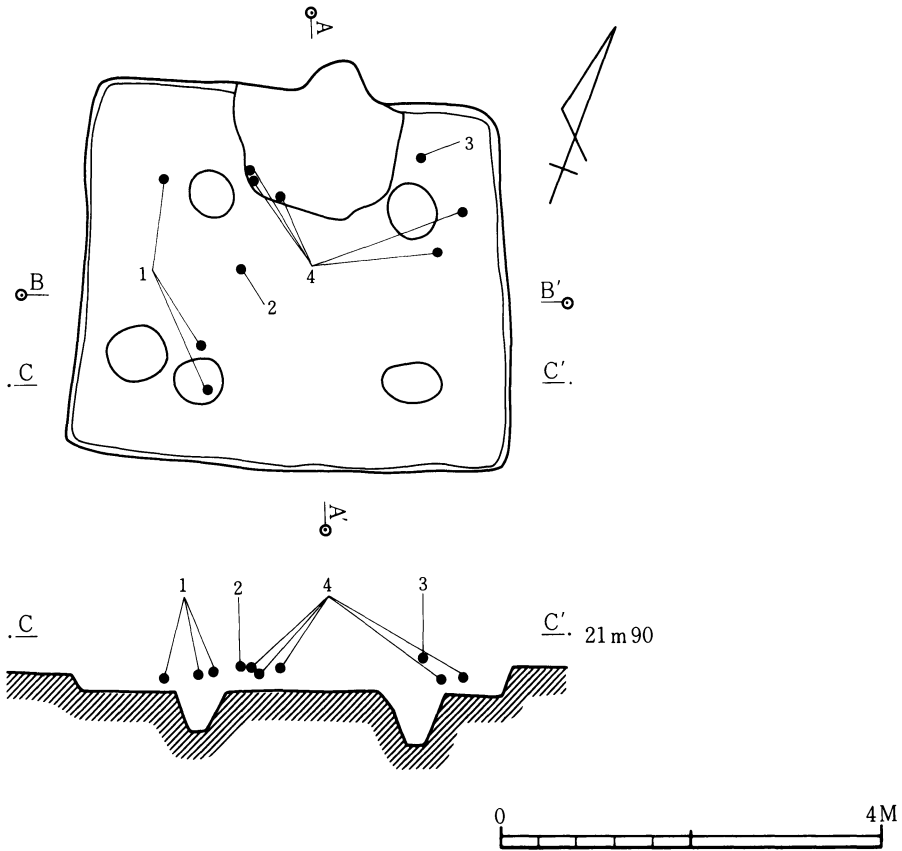
2 G区で検出調査された。主軸方位はN-13°-Wである。住居跡内覆土は5層に分けられるが、基本土層は3層に分けられる。

平面形は、4.00×4.35 mで、多少横に長い形状を呈す。床面積は、3.85×4.30 mで約16.5 m²を計る。壁高はそれぞれ29, 4, 17, 36 cmである。床面の標高は、約21.4 mである。周溝は検出されなかった。柱穴は5本検出され、P-1, P-2, P-3, P-4が主柱穴と思われる。遺物はカマドの両側から出土しているが、完形品はなかった。

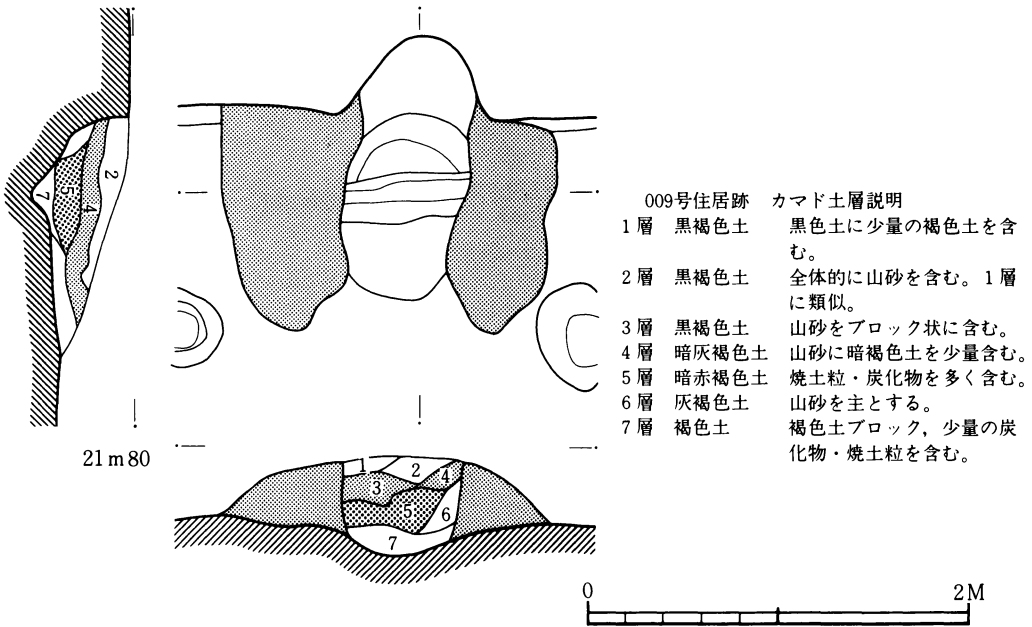
カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅80 cm, 奥行き42 cmを計る。カマド内堆積土は7層に分けられる。天井部はそのまま崩落した状態であった。



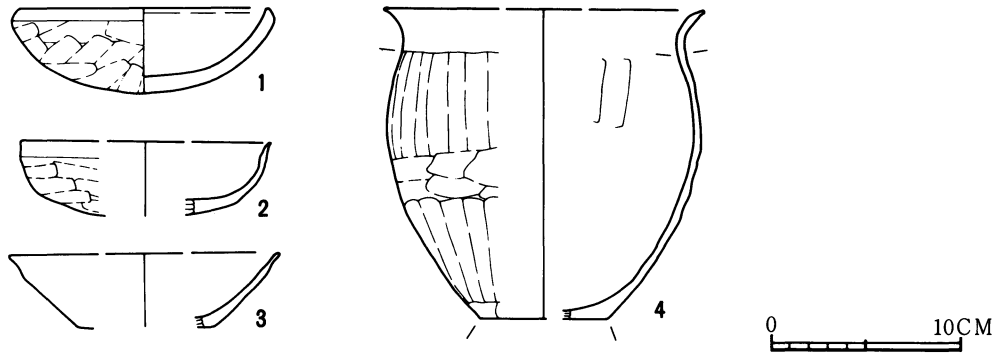
第38図 009号住居跡実測図



第39図 009号住居跡遺物出土状況図



第40図 009号住居跡カマド実測図



第41図 009号住居跡出土遺物実測図

第8表 009号住居跡出土遺物表 (第39・41図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	碗	1/2	12.8 — 4.5	紐積み。底部ヘラケズリ。のち口縁から体部内面ナデ。体部内面ヘラミガキ。	明褐色	砂質だが普通。05, 20, 23。
2	碗	1/3	(13.0) — 残3.9	紐積み。外面ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	暗褐色	良好。09, 41。
3	坏	1/3	(14.0) (7.0) 残3.9	底部回転ヘラケズリ。内外面ヨコナデ。	暗黒褐色 煤付着	良好。30。
4	小型甕	1/2	(15.9) (5.8) 16.2	紐積み。外面胴部上位タテヘラケズリ(上→下)、中位ヨコヘラケズリ(左→右)、下位タテヘラケズリ(下→上)、底部タテヘラケズリ(左→右)、内面ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。	暗茶褐色	砂粒を多く含むが良好。14, 11, 29, 34, 41, 40。

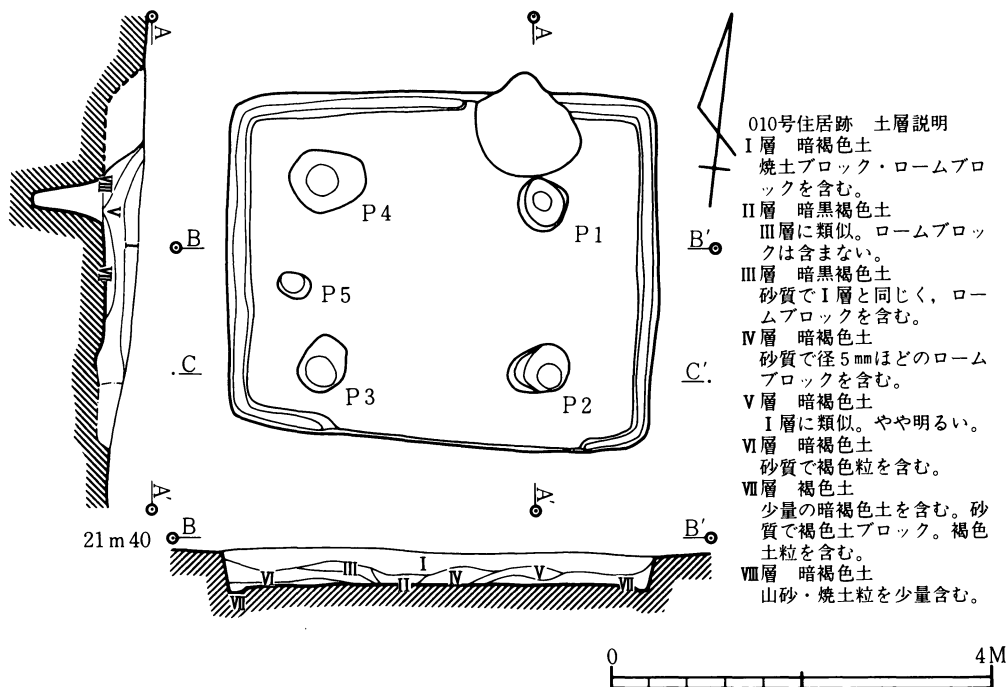
010号住居跡 (第42~45図)

2G区で検出調査された。主軸方位はN-7°-Wである。住居跡内覆土は8層に分けられたが、基本土層は5層に分けられる。

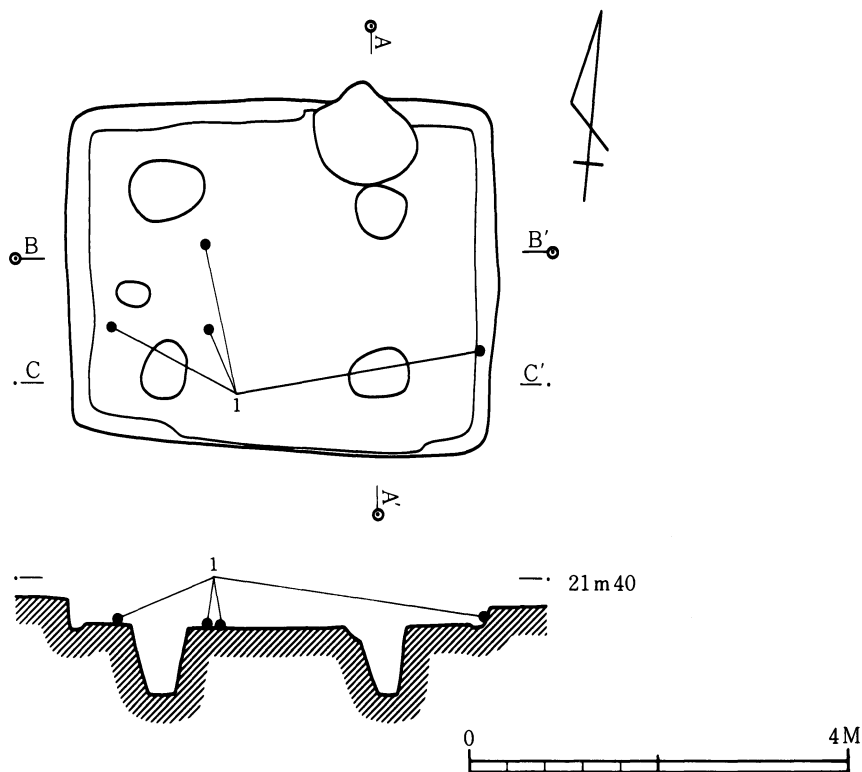
平面形は、3.64×4.50mで、横に長い形状を呈する。床面積は、3.32×4.00mで13.28㎡を計る。壁高はそれぞれ33, 14, 36, 41cmを計る。床面の標高は、約20.9mである。周溝はカマド部分と南壁中央部をのぞきめぐる。幅は24, 20, 25, 23cmで、深さは3, 0, 2, 3, 6cmである。柱穴は5本検出された。P-1, P-2, P-3, P-4が主柱穴で、P-5は補助柱と思われる。深さはそれぞれ75, 72, 70, 89, 26cmである。P-5は26cmで浅く入口施設にともなう柱穴であろう。遺物は2点が図化できた。

カマドは、北壁に構築されているが、中央より左側に寄っており、P-1と接するほどである。掘込み幅58cm, 奥行き34cmを計る。カマド内堆積土は7層に分けられた。天井部の遺存状態は悪く、原状をとどめていなかった。

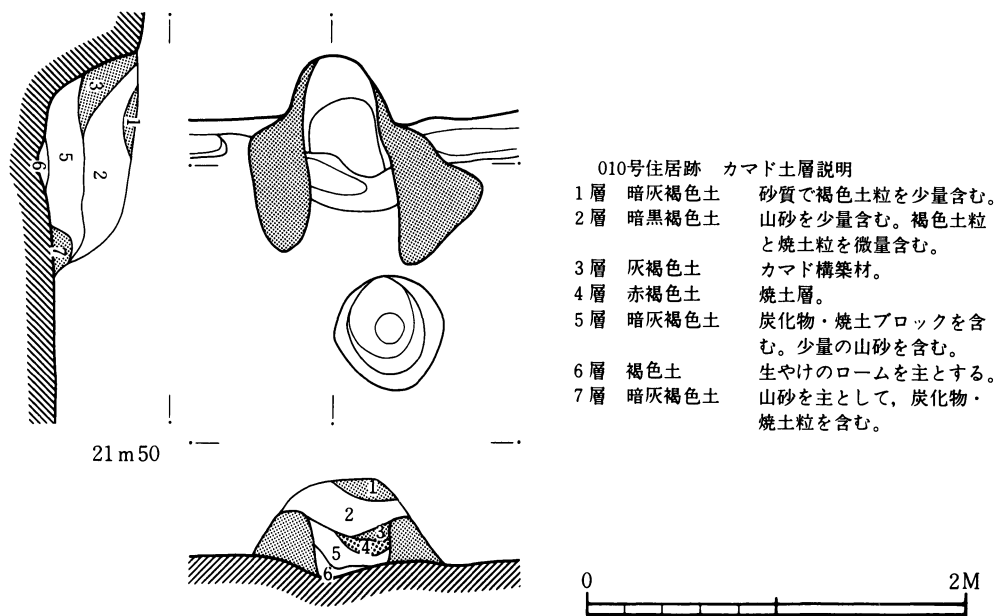
P-1とカマドは前述したとおり、ほぼ接するほど近くから検出された。このことから、P-1とカマドとは同時には使用されなかったと思われる。



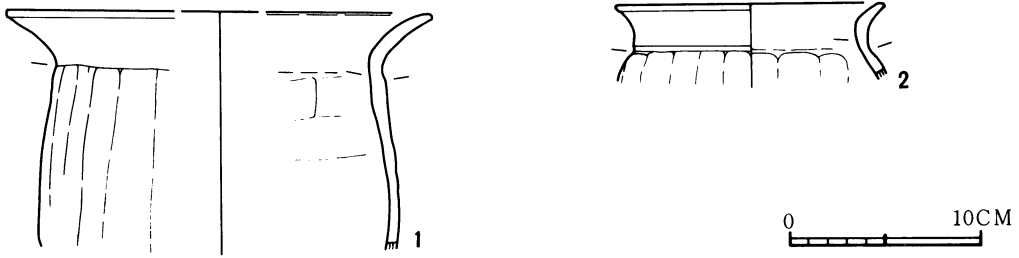
第42図 010号住居跡実測図



第43図 010号住居跡遺物出土状況図



第44図 010号住居跡カマド実測図



第45図 010号住居跡出土遺物実測図

第9表 010号住居跡出土遺物表 (第43・45図)

() 復元

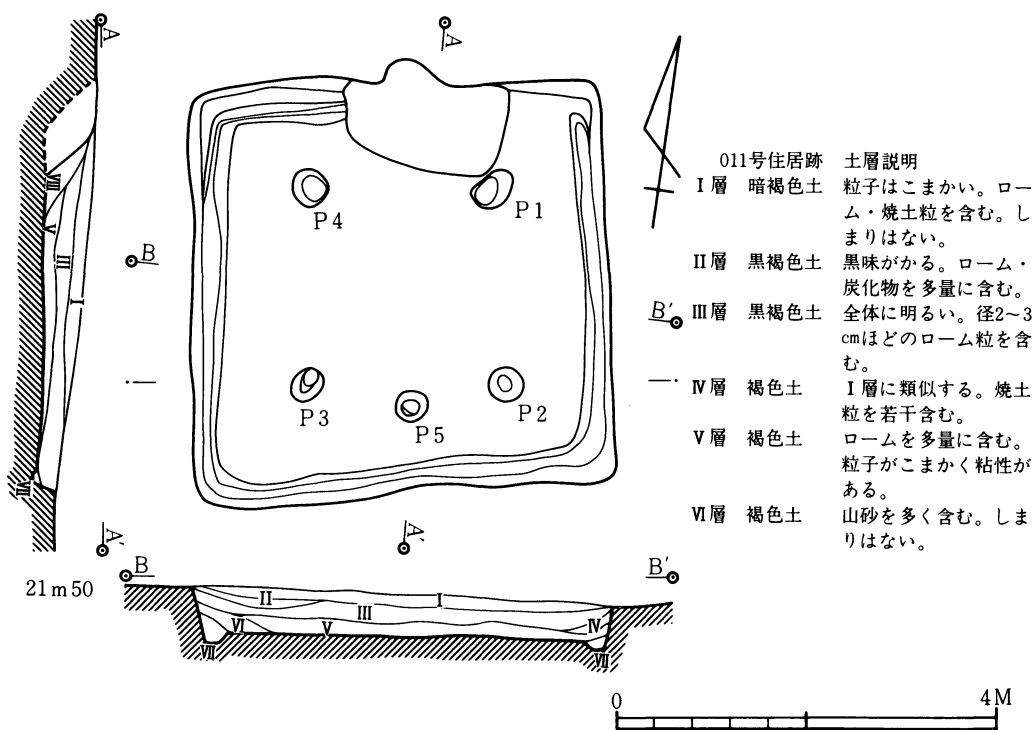
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	甕	1/4	(12.1) — 残12.8	外面胴部タテヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面ヨコヘラケズリ。	明褐色 外面煤付着	砂粒を含むやや不良。 14, 07, 23, 25。
2	小型壺	口縁部のみ	14.2 14.2 残4.4	外面タテヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	暗茶褐色	

011号住居跡 (第46~49図)

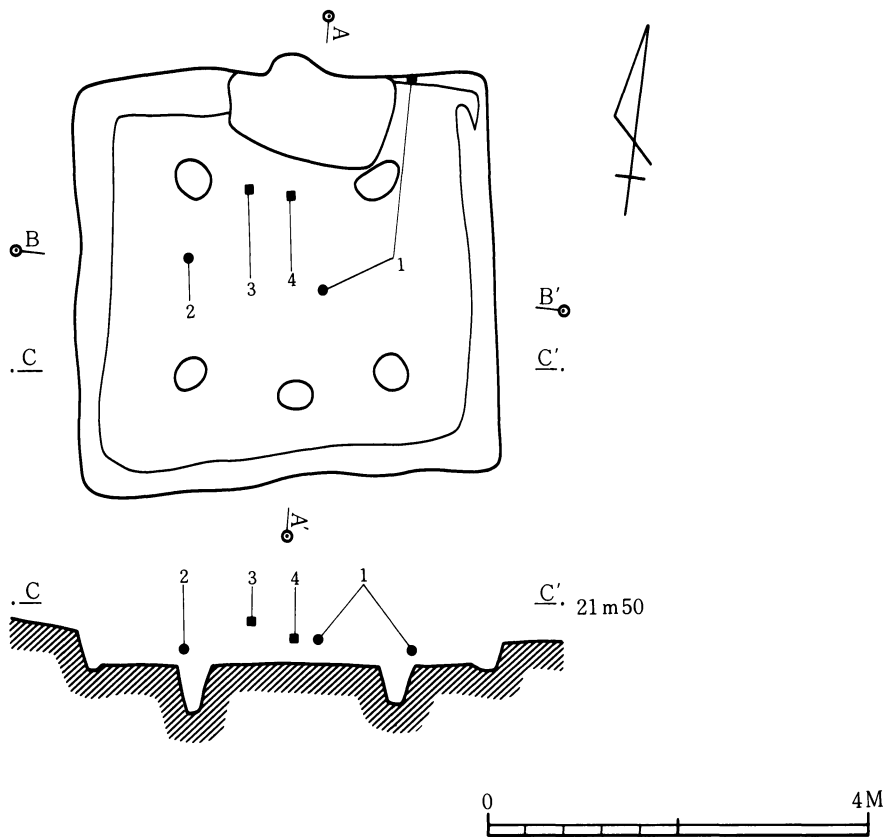
2H区より検出された。主軸方位はN-8°-Wである。住居跡内覆土は6層に分けられた。全体にローム粒を含む土質で、粘性にとんでいる。

平面形は、4.38×4.36mで、若干ゆがんでいるがほぼ正方形を呈する。床面積は、3.6×3.76mで13.5㎡を計る。壁高はそれぞれ50, 31, 45, 61cmを計る。床面の標高は、約20.9mである。周溝は北東隅をのぞき全周する。幅は18, 8, 24, 32cmで、深さは3, 6, 6, 7cmである。柱穴は5本検出された。P-1, P-2, P-3, P-4は主柱穴である。深さはそれぞれ36, 40, 39, 33, 30cmであった。遺物は2点が図化できたが、床面より浮いて出土している。

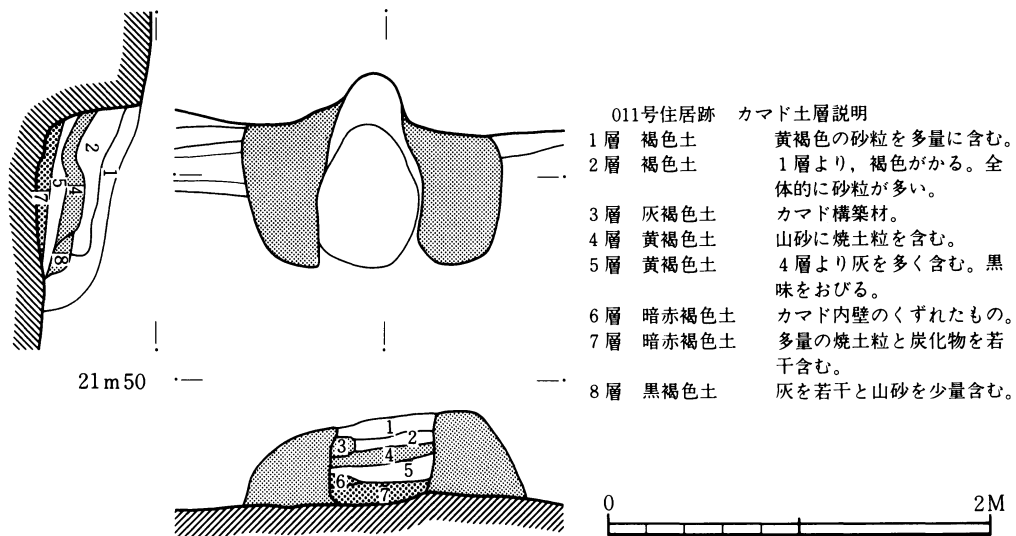
カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅72cm, 奥行き26cmを計る。カマド内堆積土は8層に分けられ、天井部がそのまま崩落した状況を示している。



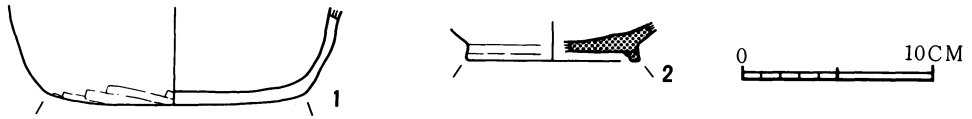
第46図 011号住居跡実測図



第47図 011号住居跡遺物出土状況図



第48図 011号住居跡カマド実測図

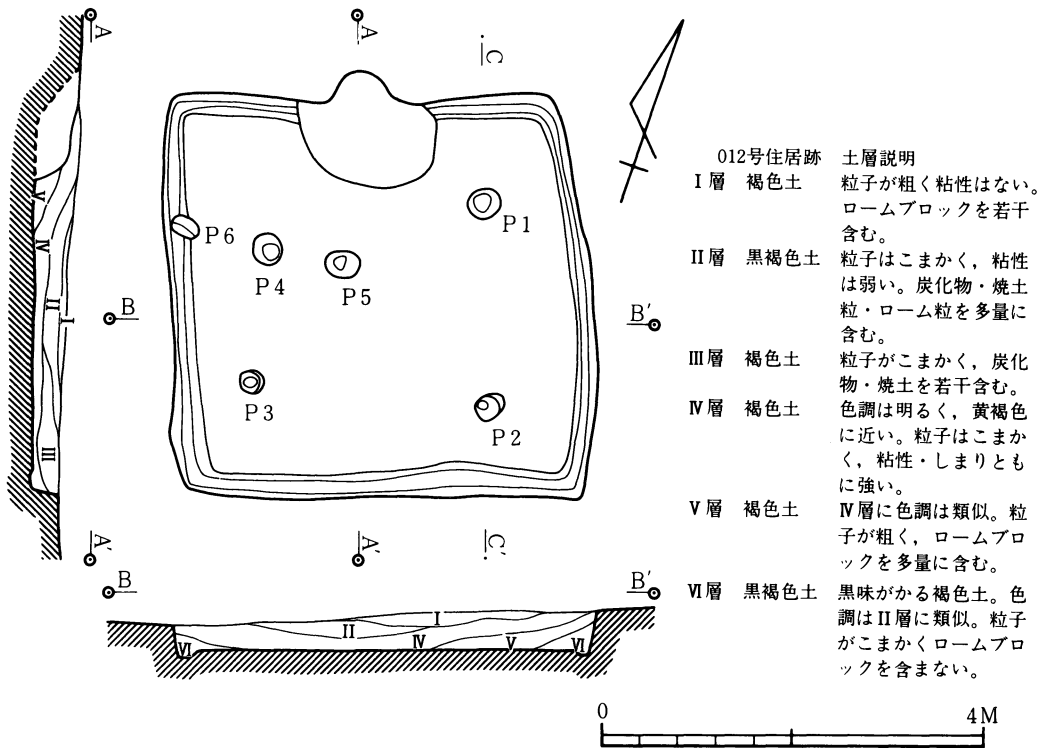


第49図 011号住居跡出土遺物実測図

第10表 011号住居跡出土遺物表 (第47・49・73図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	埴	1/5	— 13.8 残5.2	紐積み。外面タテヘラケズリ。のちヨコミガキ。底部周囲ヨコヘラケズリ。底部ヘラケズリ。のちミガキ。内面ヨコミガキ。	暗赤褐色	精製で良好。123, 128。
2	高台付 坏	1/5	— (9.2) 残2.3	紐積み。内面ヘラケズリ。外面ヨコナデ。	青灰色	石英粒を含む。須恵器。102。
3	釘?	第73-2	鉄製品	第16表参照		52, 385。
4	紡錘車	第73-3	鉄製品	第16表参照		51, 561。

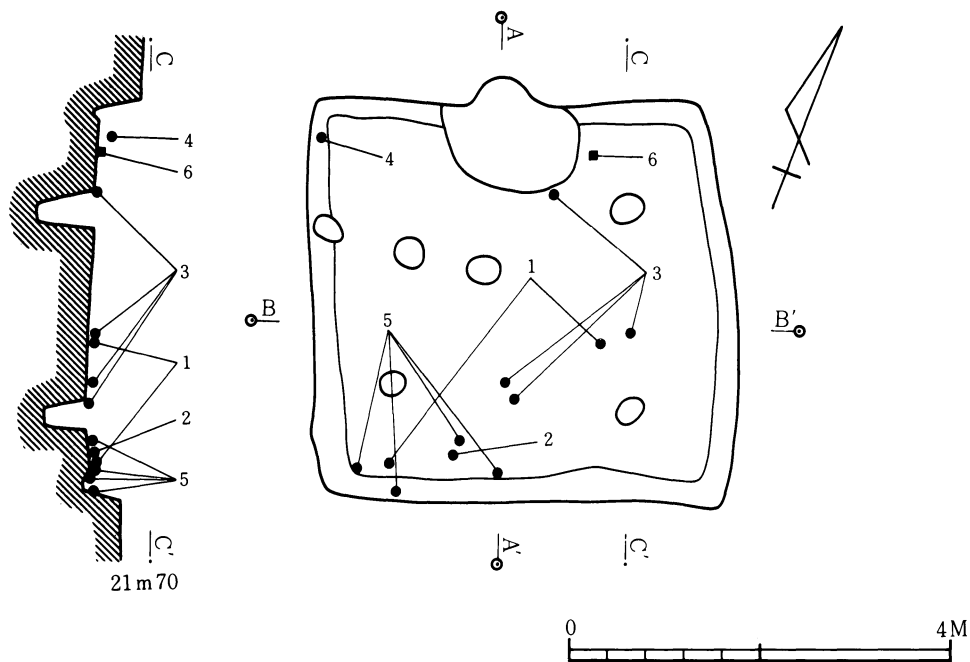


第50図 012号住居跡実測図

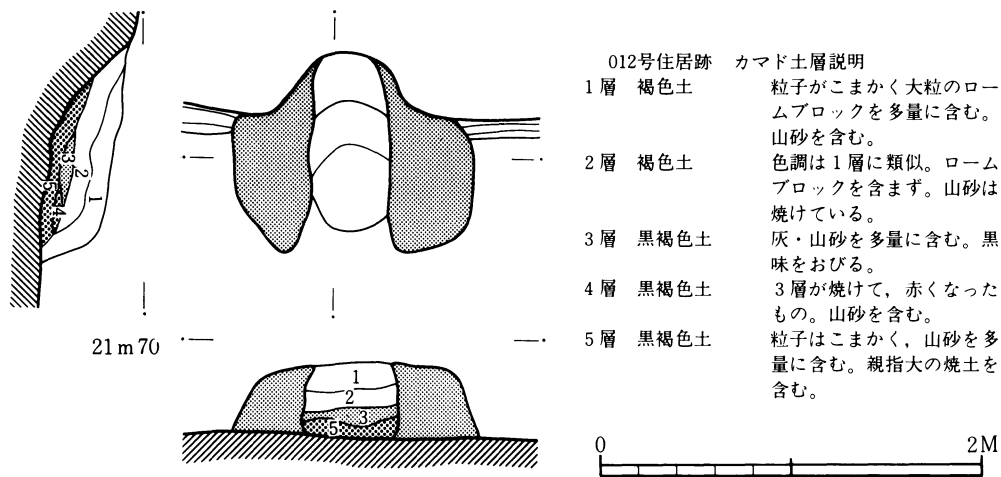
012号住居跡 (第50~53図)

2H区から検出調査された。主軸方位はN-20°-Wである。住居跡内覆土は6層に分けられる。ロームブロック・ローム粒を全体に含み、色調も明るい。

平面形は、4.44×4.8mで、ほぼ正方形を呈している。床面積は、3.52×3.97mで約14㎡を計る。壁高はそれぞれ45, 33, 22, 25cmを計る。床面の標高は、約21.1mである。周溝はカ



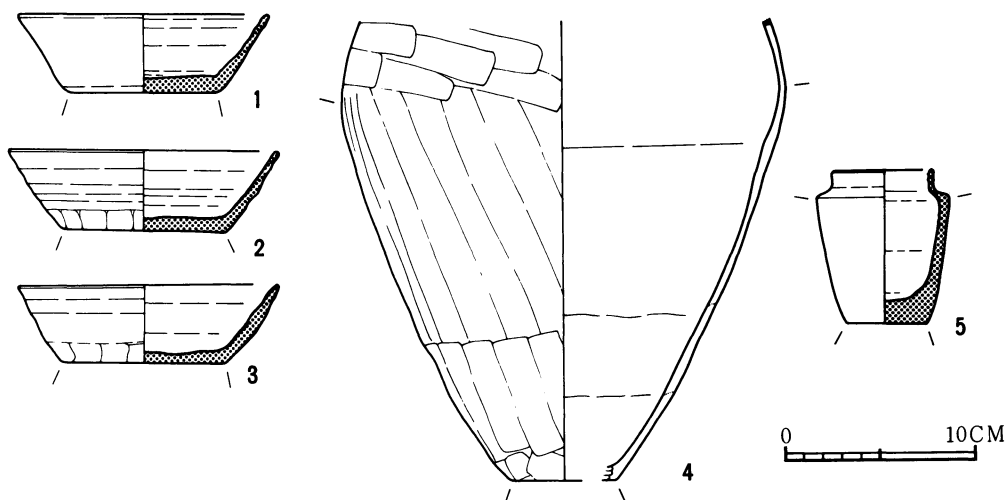
第51図 012号住居跡遺物出土状況図



第52図 012号住居跡カマド実測図

マド部分をのぞき全周しており、幅もほぼ一定している。幅は14, 22, 18, 18 cmで、深さは3, 7, 7, 5 cmであった。柱穴は7本検出された。P-1, P-2, P-3, P-4は支柱穴と思われる。P-5, P-6は補助柱と思われるが、P-5については明確な根拠はない。遺物は5点が図化できた。

カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅80 cm, 奥行き30 cmを計る。カマド内堆積土は5層に分けられる。水平に近い堆積状態で、カマドが廃棄されて早い時期に埋没されたものと推察される。



第53図 012号住居跡出土遺物実測図

第11表 012号住居跡出土遺物表 (第51・53・73図)

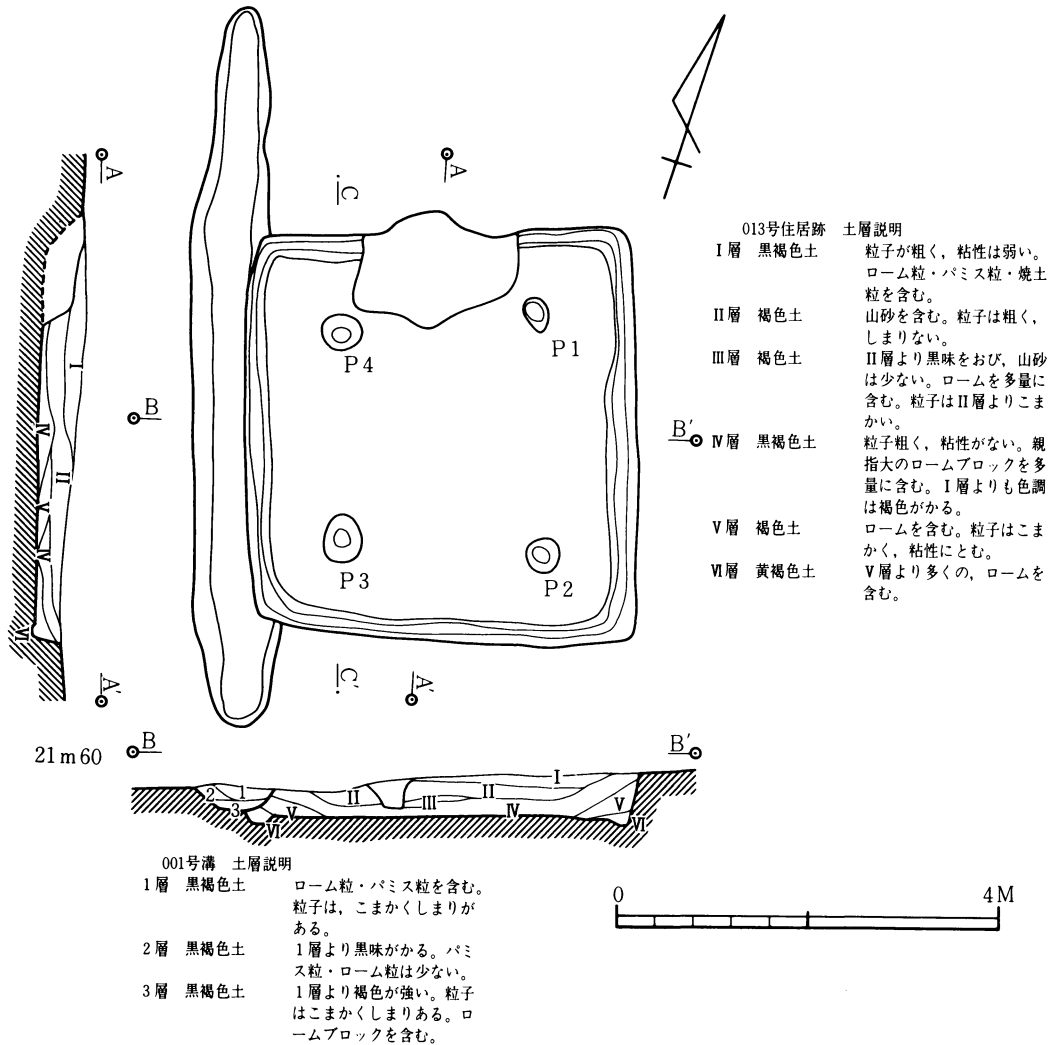
() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/2	13.0 7.6 4.0	内外ヨコナデ、底部周囲ヘラケズリ。	暗灰色	普通。須恵器。51, 24。
2	坏	口縁1/3。底部完形。	14.0 8.8 4.2	紐積み。ヨコナデ。底部回転ヘラ切り。底部周囲。	灰褐色	径3 mmほどの石英粒含む。砂質で不良。66。
3	坏	4/5	13.6 8.2 3.9	内外ヨコナデ。底部周囲ヨコヘラケズリ。底部ヘラ切り。	暗灰色	石英粒多い。須恵器。59, 25, 54, 57。

4	甕	胴部1/3	— 5.4 残23.5	紐積み。外面3段ヘラケズリ。上段ヨコヘラケズリ。中段タテヘラケズリ。底部周囲タテヘラケズリ。内面ヨコナデ。	暗茶褐色	精製良好。68, 01, 69。
5	小形壺	ほぼ完形。	5.3 4.3 7.8	紐積み。内外面回転ナデ。底部粘土紐成形。	黒灰色	砂粒を含むが良質。須恵器。61, 62, 63, 64。
6	刀子	第73-4	鉄製品	第16表参照		

013号住居跡・001号溝 (第54~58図)

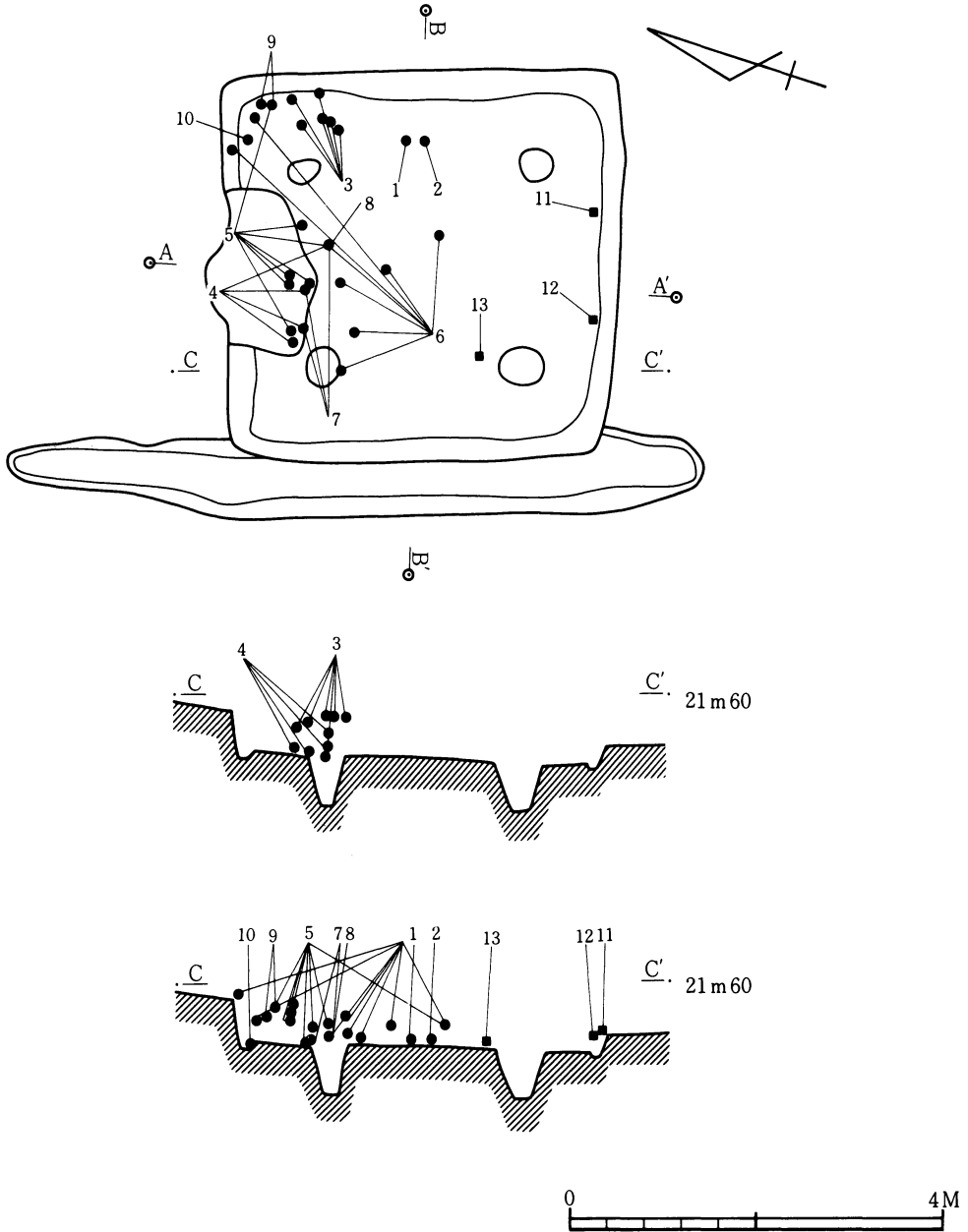
1H・2H区にかけて検出調査された。主軸方位はN-20°-Wである。住居跡内覆土は6層



第54図 013号住居跡・001号溝実測図

に分けられるが、基本土層は3層に分けられる。001号溝は、住居跡を切って掘られている。覆土は3層に分けられる。

平面形は、西壁の上部を001号溝によって切られているが、4.20×2.10mを計り、ほぼ正方形を呈している。床面積は、4.24×3.56mで約15㎡を計る。壁高はそれぞれ53, 27, 13, 44cmを計る。床面の標高は、約20.9mである。周高はカマドの部分のをのぎ全周している。幅は20, 18, 20, 20cmで、深さは3, 2, 10, 4cmである。柱穴は4本検出された。深さはそれぞれ

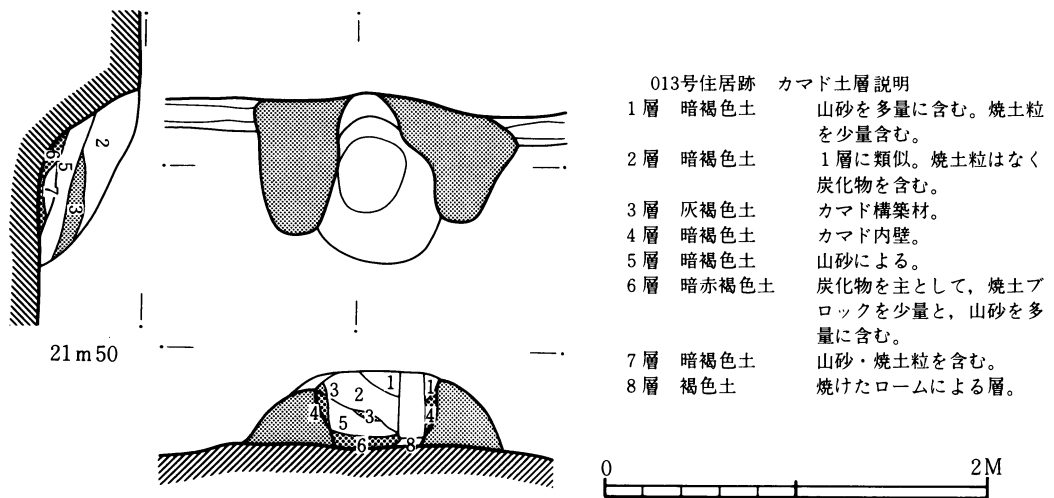


第55図 013号住居跡遺物出土状況図

れ 55, 48, 54, 51 cmである。遺物は多量に出土したが、床面より浮いているものが多く住居跡に供伴するものは少ない。しかし、鎌が3個検出されていることや出土遺物の多いことから、他の住居跡とくらべてややおもむきを異にしている。

カマドは、北壁中央に構築されていた。カマド内堆積土は8層に分けられたが、基本土層は4層に分けられる。

001号溝は、長さ7.42m、幅0.84mを計る。覆土は3層に分けられる。013号住居跡を切っている。性格は不明。

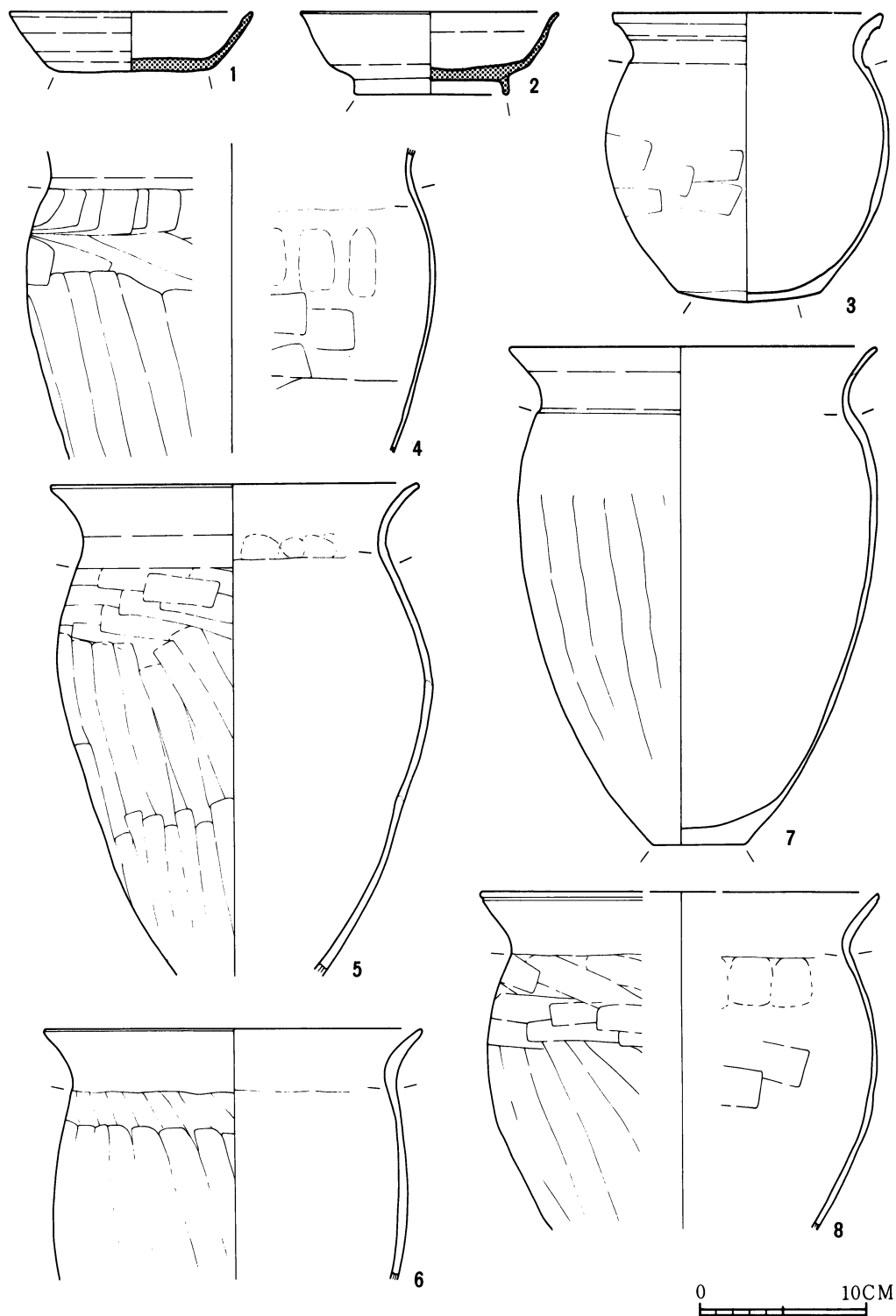


第56図 013号住居跡カマド実測図

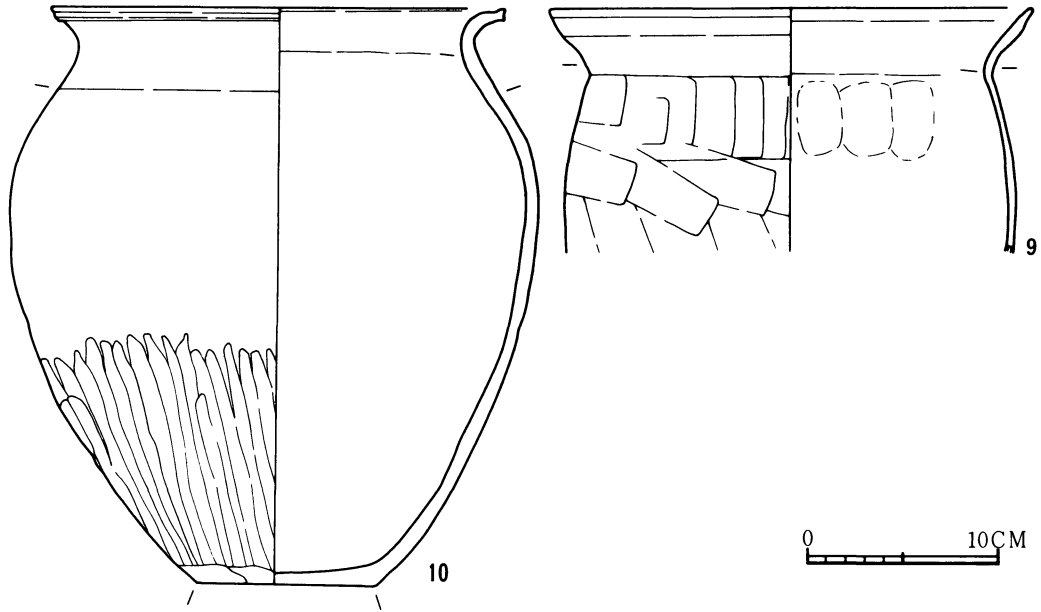
第12表 013号住居跡出土遺物表 (第55・57～58・73図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	口縁の一部を欠く。	14.5 9.3 3.5	紐積み。回転ヨコナデ。底部糸切り。のち粘土張付けて整形。	灰褐色	石英粒多く含む。普通。須恵器。表面は磨滅している。124。
2	高台付坏	体部2/3	15.7 9.3 4.9	体部紐積み。底部回転ヘラケズリ。張付け高台。周囲ヨコナデ。	暗灰色	長石粒を含む。表面は磨滅している。
3	小型	胴部1/2。口縁部を欠く。	9.0 8.6 16.5	紐積み。底部ヘラナデ整形。胴部中位ヨコヘラケズリ。上・下位ナデ。内面全面ナデ。	暗茶褐色 底部に炭化物附着	砂粒を多く含む。123, 26, 28, 31, 27, 42。



第57图 013号住居跡出土遺物実測図(1)



第58図 013号住居跡出土遺物実測図(2)

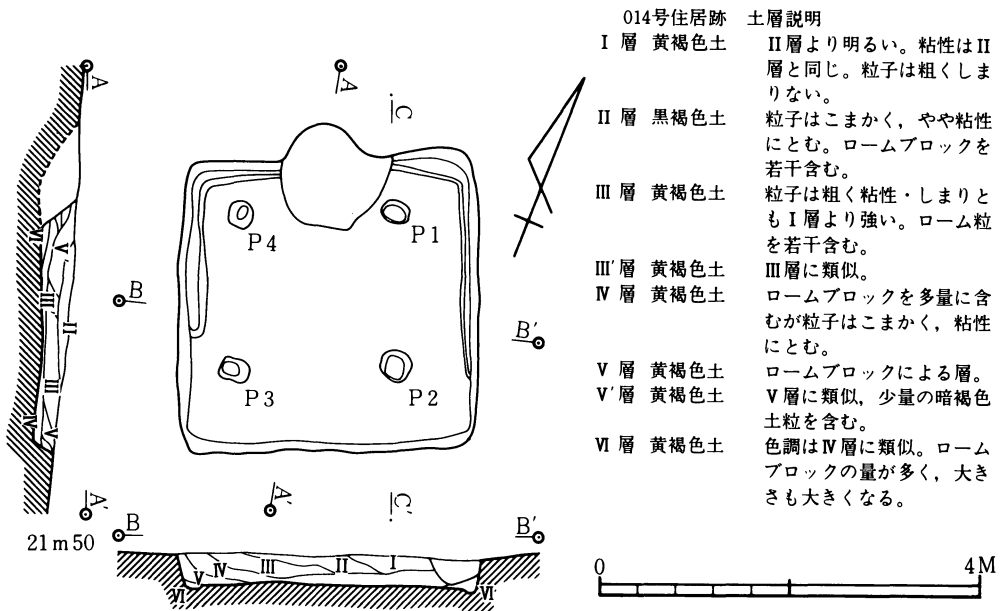
4	甕	1/2	— 頸21.4 残18.4	紐積み。外面胴上位ヨコヘラケズリ。中位右下りヘラケズリ。下位タテヘラケズリ。内面口縁ヨコナデ。胴部上位オサエ。下位ヨコヘラナデ。	明褐色	砂質良好。132, 11, 10, 3, 128, 129, 133。
5	甕	底部及び胴部の一部を欠く。	21.9 (5.5) 残28.5	紐積み。外面胴部上部ヨコヘラケズリ。中位左上りヘラケズリ。下位右下りタテヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面ナデ。	暗褐色	砂粒を含むが良好。68, 05, 08, 10, 75, 11, 4, 115, 133, 136, 138, 129。
6	甕	口縁部から胴部上位全形	22.5 — 14.5	紐積み。外面左下りヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。内面ナデ。口縁部・胴部にヘラオサエの痕跡がみられる。	暗褐色	砂を多く含む。胴部下半煤付着。134, 77, 94, 129, 70, 135, 136, 05, 14。
7	甕	胴一部欠く。	22.0 5.5 29.0	紐積み。外面タテヘラケズリ。内面ナデ。口縁部ヨコナデ。	暗黒褐色	砂質。磨滅多い。132, 11, 103, 129, 133。
8	甕	口縁部1/4。胴部上位一部。	(23.8) — 残19.5	紐積み。胴部外面上・中位ヨコヘラケズリ。下位タテヘラケズリ。内面上位オサエ。下位ヨコヘラケズリ。ナデ。口縁部ヨコナデ。	暗褐色	砂粒を多く含むが良好。129。
9	甕	口縁1/5	25.0 — 13.1	紐積み。外面上位ヨコヘラケズリ。中位右下りヘラケズリ。内面・口縁部ヨコナデ。胴部ナデ・オサエ。	暗褐色	砂質だが普通。67, 68。

10	甕	ほぼ完形。 口縁の一部 を欠く。	23.4 9.2 29.8	紐積み。外面ナデ。のちミガキ・胴 部下位タテミガキ。底部ヨコナデ。 内面ナデ。口縁部ヨコナデ。	明褐色	粒子があらくやや不良。 底部に木葉痕がある。 111。
11	鎌	第73-5	鉄製品	第16表参照		
12	鎌	第73-6	鉄製品	第16表参照		
13	鎌	第73-7	鉄製品	第16表参照		

014号住居跡 (第59~62図)

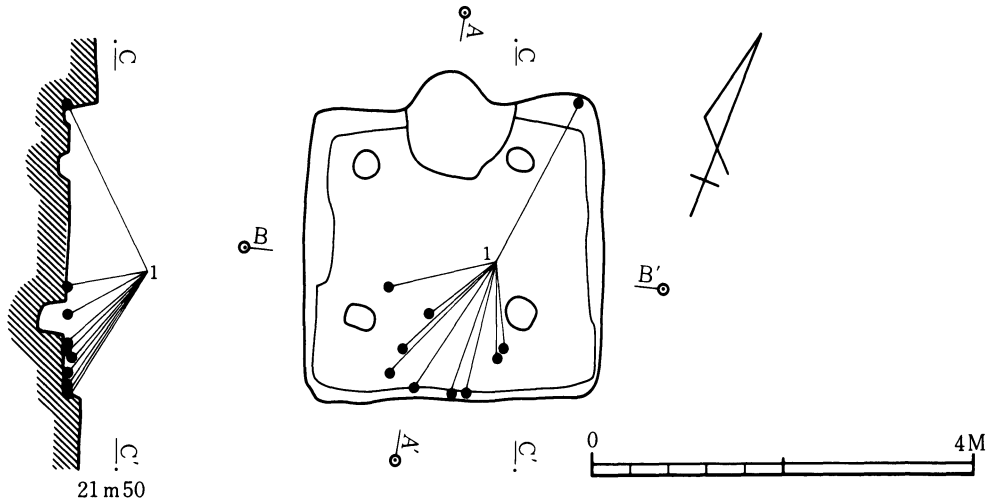
1 I・2 I区から検出調査された。主軸方位はN-26°-Wである。住居跡内覆土は8層に分けられるが、基本土層は6層に分けられる。全体にロームブロックを含み、やや粘性を呈している。

平面形は、3.04×3.16 mを計り、ほぼ正方形を呈する。床面積は、2.76×2.64 mで約7.3 m²を計る。壁高はそれぞれ31, 19, 36, 34 cmを計る。床面の標高は、約21 mである。周溝は南壁部分と東・西壁の一部分をのぞきめぐる。幅は10, 0, 24, 8 cmで、深さは5, 0, 4, 7 cmである。柱穴は4本検出され、すべて主柱穴と思われる。深さは10, 29, 14, 28 cmでばらつきがみられる。図化できた遺物は1点のみであった。ほとんどの破片が南壁ちかくの床面で検出され、1片のみが北東隅で検出されている。

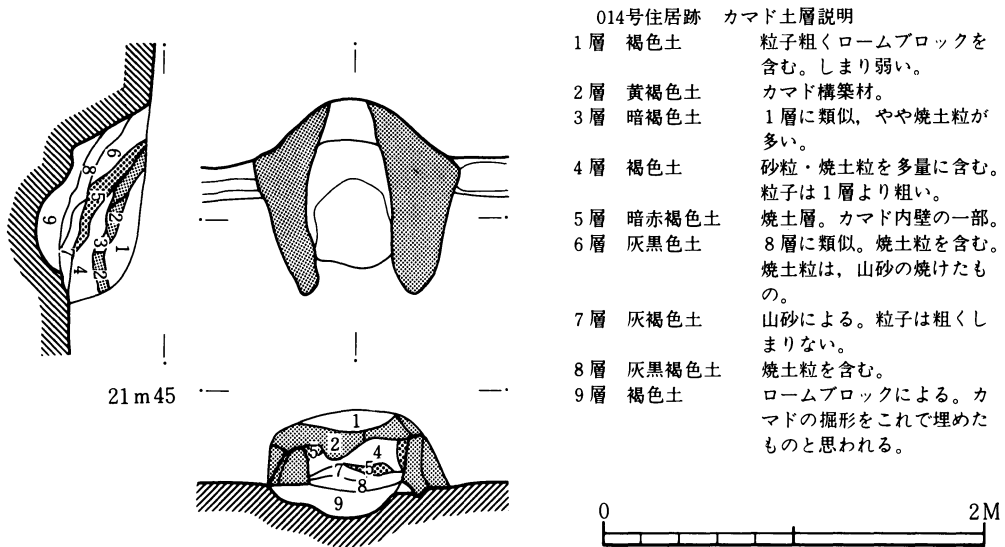


第59図 014号住居跡実測図

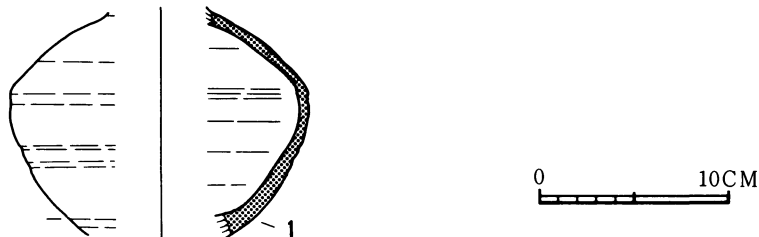
カマドは、北壁中央に構築されていた。掘込み幅 94 cm，奥行き 26 cm を計る。カマド内堆積土は 9 層に分けられたが，基本土層は 5 層に分けられた。天井部はほぼそのままで崩落しており，遺存状態は良好である。又，火床下には土壙状の落ち込みがあり，土壙を埋めてカマドを構築している。本遺跡では特異な構造である。



第60図 014号住居跡遺物出土状況図



第61図 014号住居跡カマド実測図



第62図 014号住居跡出土遺物実測図

第13表 014号住居跡出土遺物表 (第60・62図)

() 復元

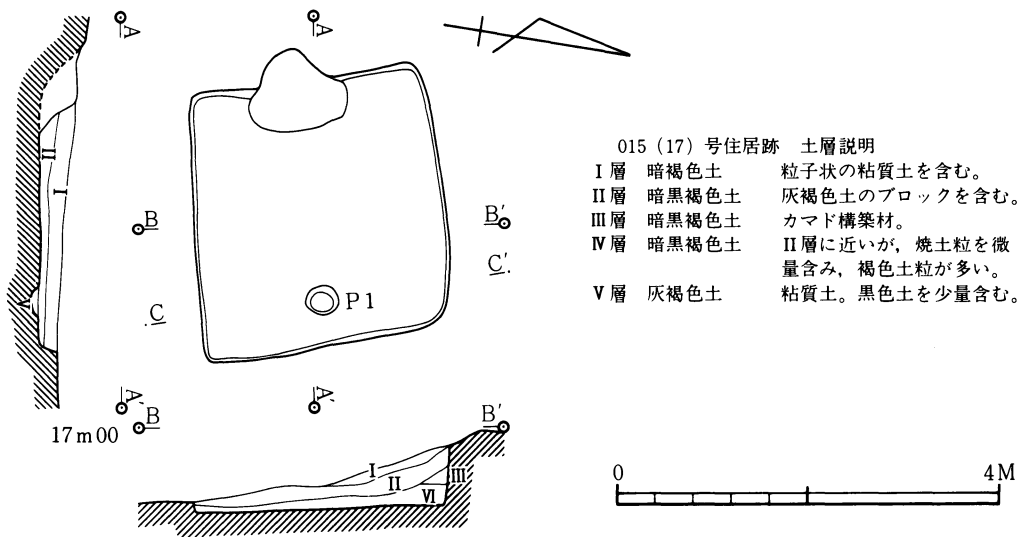
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	長頸	底部・頸部 以上を欠 く。	頸 5.5 7.0 残12.0	成形不明。内外面回転ナデ。底部周 囲のみヨコヘラケズリ。	青灰色	精製され良好。自然彩 あり。須恵器。01, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20。

015 (017) 号住居跡 (第63・64図)

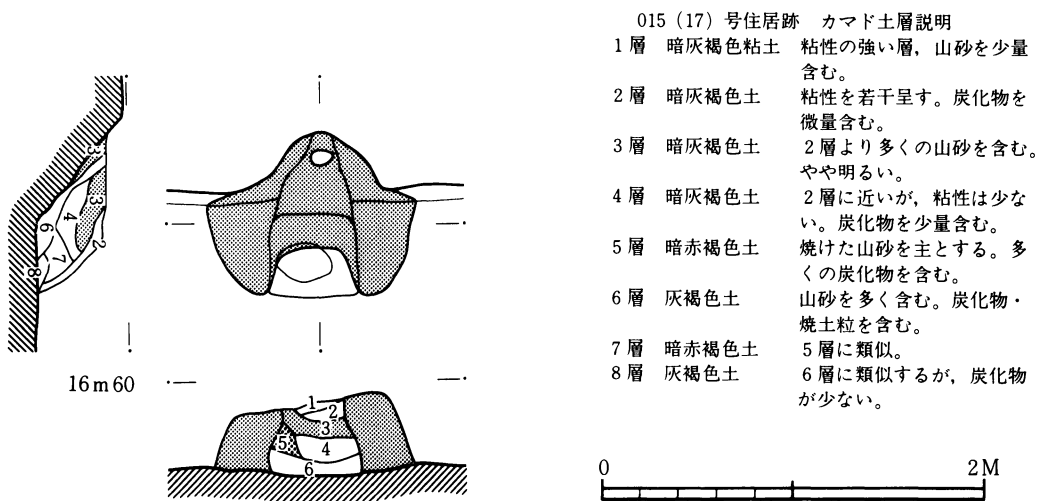
2 I 区より検出調査された。調査時は 017 号住居跡と呼称していたが、整理作業の段階で 015 号住居跡と変更した。遺物の注記などはすべて旧番号を使用している。調査区で最も低位で検出された。主軸方位は N-108°-W である。住居跡内覆土は 5 層に分けられるが、基本土層は 4 層に分けられる。全体に粘性が強い。

平面形は、2.8×2.64 m で、多少ゆがんでいるが正方形を呈する。床面積は、2.64×2.52 m で約 6.7 m² を計る。壁高はそれぞれ 71, 25, 9, 35 cm である。床面の標高は、約 16.2 m である。周溝は検出されなかった。柱穴は 1 本検出された。深さは 9 cm を計る。図化可能な遺物はなかった。

カマドは、西壁中央に構築されている。掘込み幅 70 cm, 奥行き 35 cm である。天井の一部と袖部分は原状をとどめている。カマド内堆積土は 8 層に分けられるが、基本土層は 4 層に分けられる。



第63図 015 (17) 号住居跡実測図



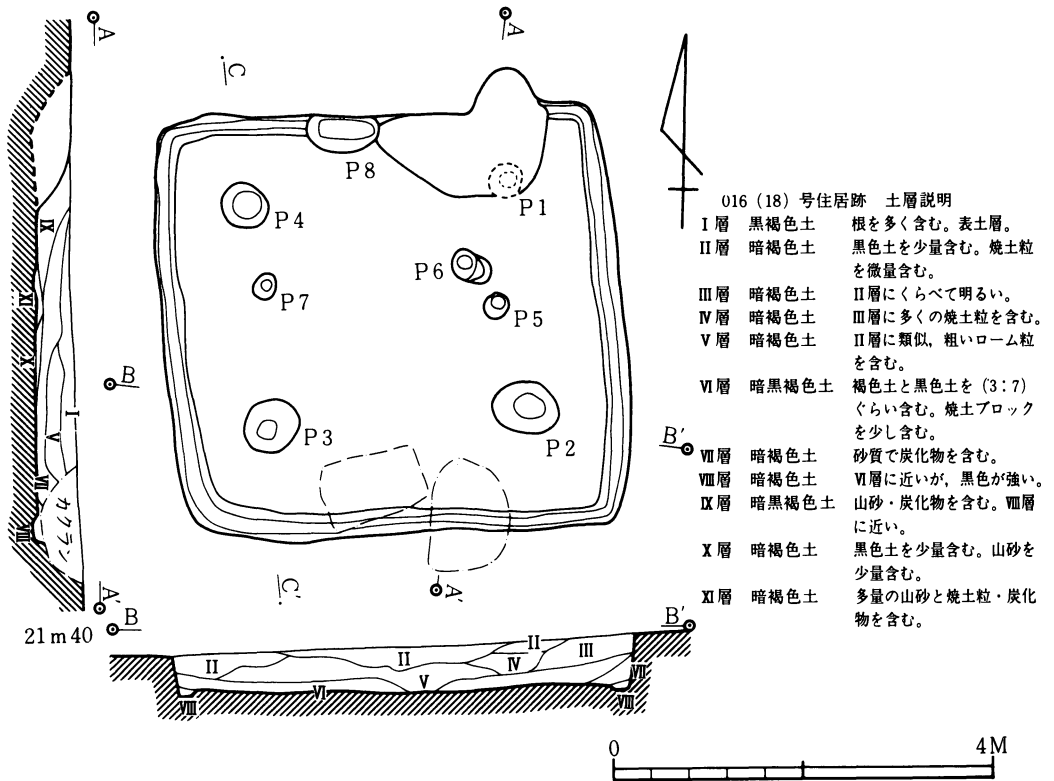
第64図 015 (17) 号住居跡カマド実測図

016号(018)号住居跡 (第65~68図)

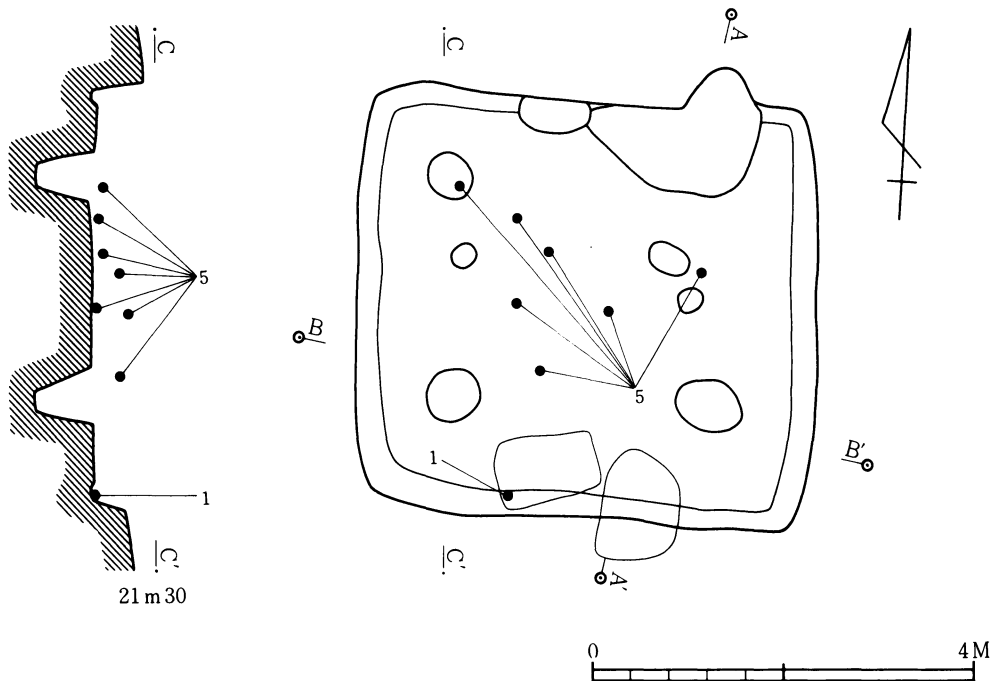
3 F区より検出調査された。主軸方位はN-4°-Wである。住居跡内覆土は11層に分けられたが、基本土層は6層に分けられる。南壁に攪乱がみられるが床面までは達していない。

平面形は4.32×4.82mで、若干横に長い形状を呈す。床面積は、3.90×4.28mで約16.7㎡を計る。壁高はそれぞれ40, 35, 50, 57cmである。床面の標高は、約20.7mである。周溝はカマドIの構築されている部分をのぞき全周する。幅は18, 16, 20, 16cmで、深さ3, 6, 5, 2cmである。柱穴は8本検出されたが後述のごとく建替えが行なわれており、同時に使用されていたものではない。P-1, P-2, P-3, P-4, P-6, P-7が古い段階の住居跡に伴い、P-2, P-3, P-4, P-5, P-8が新しい段階の住居跡に伴うものと思われる。深さはそれぞれ55, 62, 57, 69, 17, 32, 32, 31cmである。P-2・3・4はP-1にくらべて新旧にわたり使用されたために多少掘り方が大きくなっており、建替えをうらづけている。P-8は横に長い形状を呈する。遺物の遺存状態はわなかった。

カマドは、北壁中央のやや右よりに構築されていた。住居跡の建替えにともないカマドも新たにつくられていた。カマドIは掘込み幅55cm, 奥行き10cmほどで煙道部の立ち上り角度は急である。カマド内堆積土は4層に分けられる。カマドIIは掘込み幅1m, 奥行き70cmで大型である。カマド内堆積土は11層に分けられるが、基本土層は6層に分けられる。双方のカマド



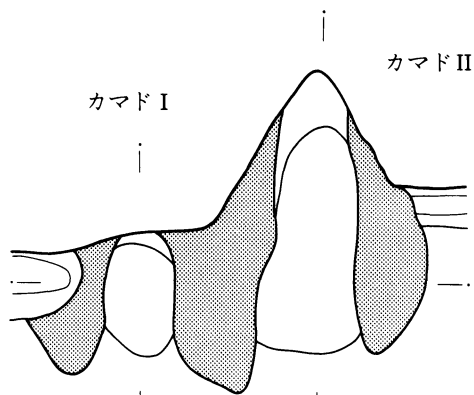
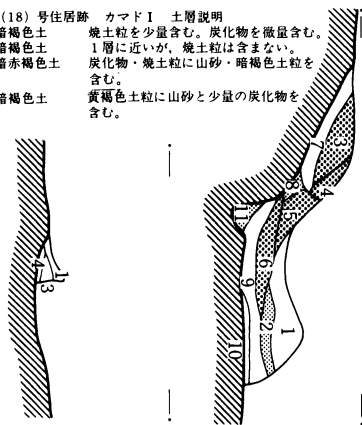
第65図 016 (18)号住居跡実測図



第66図 016 (18) 号住居跡遺物出土状況図

016 (18) 号住居跡 カマド I 土層説明

- 1層 暗褐色土 焼土粒を少量含む。炭化物を微量含む。
- 2層 暗褐色土 1層に近いが、焼土粒は含まない。
- 3層 暗赤褐色土 炭化物・焼土粒に山砂・暗褐色土粒を含む。
- 4層 暗褐色土 黄褐色土粒に山砂と少量の炭化物を含む。

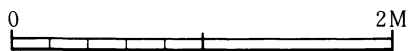
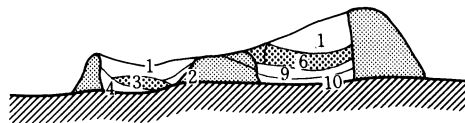


カマド II

カマド I

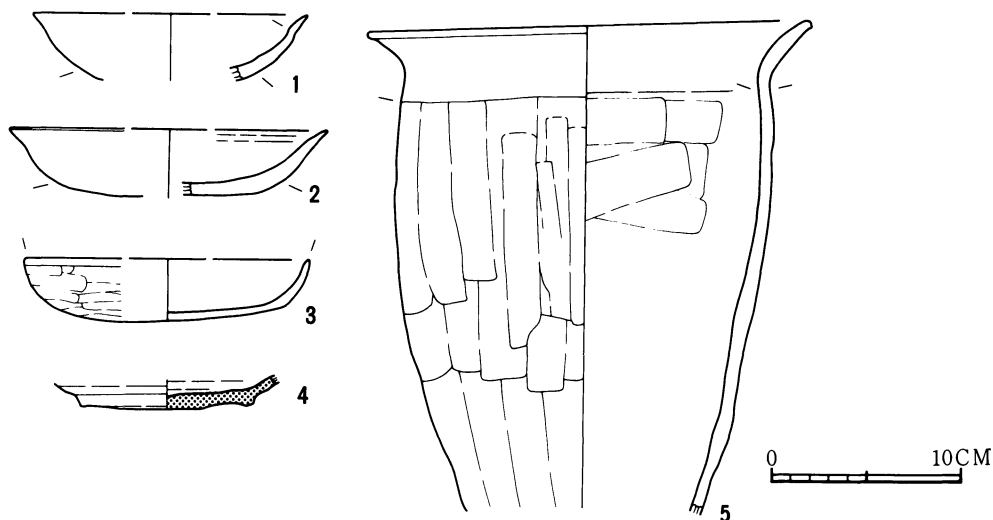
21 m 30

- カマド II 土層説明
- 1層 暗灰褐色土 多量の山砂と少量の暗褐色土・焼土を含む。
 - 2層 灰黒褐色土 山砂を主とし少量の焼土・炭化物を含む。
 - 3層 暗赤褐色焼土 焼土ブロックを多く含む。
 - 4層 暗赤褐色土 焼土を主体とする。炭化物は微量。
 - 5層 暗赤褐色土 4層に近いが、山砂を含む。
 - 6層 暗赤褐色土 山砂の焼けたものに、多量の焼土粒・炭化物を含む。
 - 7層 黒褐色土 ローム粒・山砂を主として、炭化物を多量に含む。
 - 8層 灰褐色土 カマド構築材。
 - 9層 灰褐色土 多量の炭化物により、黒色が強い。
 - 10層 黒色土 炭化物・山砂による。
 - 11層 暗赤褐色土 山砂に少量の黒色土を含む。



第67図 016 (18) 号住居跡カマド実測図

は袖の一方を共有している。カマド I は P-8 によって一部が破壊されており、双方のカマドが同時に使用されたものではない。袖もカマド I にくらべて II は大きく、煙道の立上り角度にも極端な差がみられるという相違点がある。



第68図 016(18)号住居跡出土遺物実測図

第14表 016号住居跡出土遺物表 (第66・68図)

() 復元

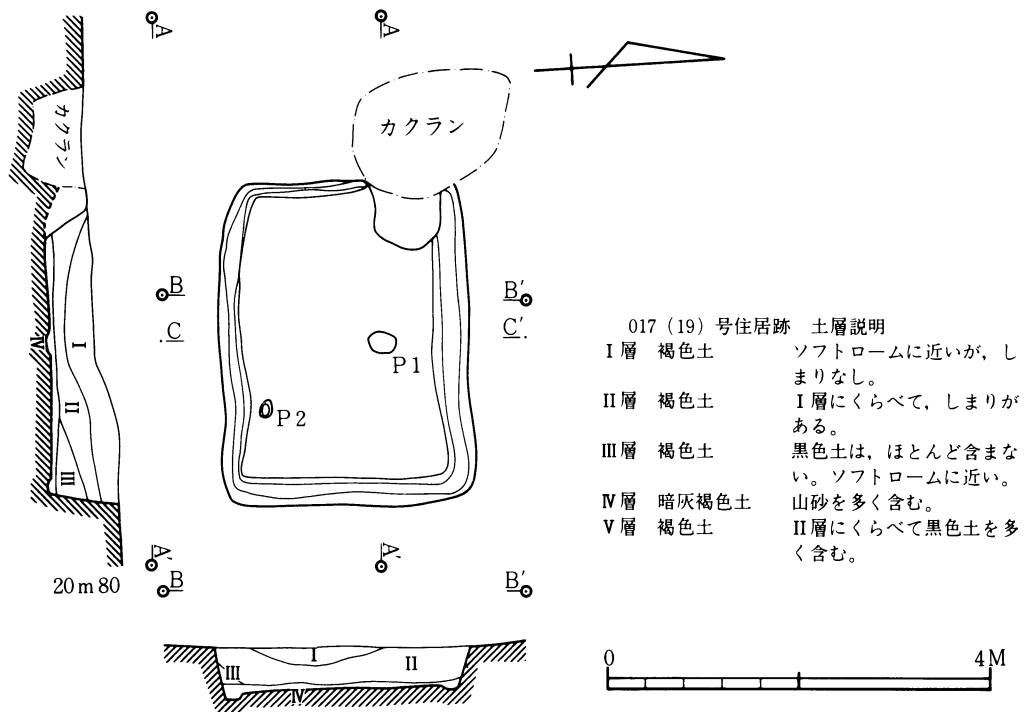
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/4	(14.5) — 残3.4	紐積み。外面へラケズリ、のちナデ。 内面ミガキ。	内外面黒色。 底部明褐色。	良好。30。
2	坏	1/3	(16.8) — 4.2	底部をのぞき全面ナデ、のちミガキ。 外面剝離あり。	暗褐色	精製されて良好。49, 41, 44, 47。カマド内 出土。
3	坏	1/3	(15.0) — 3.3	紐積み。底部へラケズリ。口縁部ヨ コナデ。内面へラミガキ、内面・底 部にへラケズリ時についたオサエ痕 跡がみられる。	暗褐色	精製されており良好。 45, 40。カマド内出土。
4	坏	底部のみ	— 9.0 残1.6	削り出し高台?内外面ナデ。	暗灰青色	須恵器。00。
5	甕	底部及び底 部周辺を欠 く。	23.2 — 残25.7	紐積み。外面タテへラケズリ。巾に 広狭あり。内面上位ヨコへラケズ リ。下位ナデ。口縁部ヨコナデ。	暗黒褐色	砂粒を含むが良好。31, 33, 03, 04, 08, 11, 20, 40, 49。

017 (019) 号住居跡 (第69~72図)

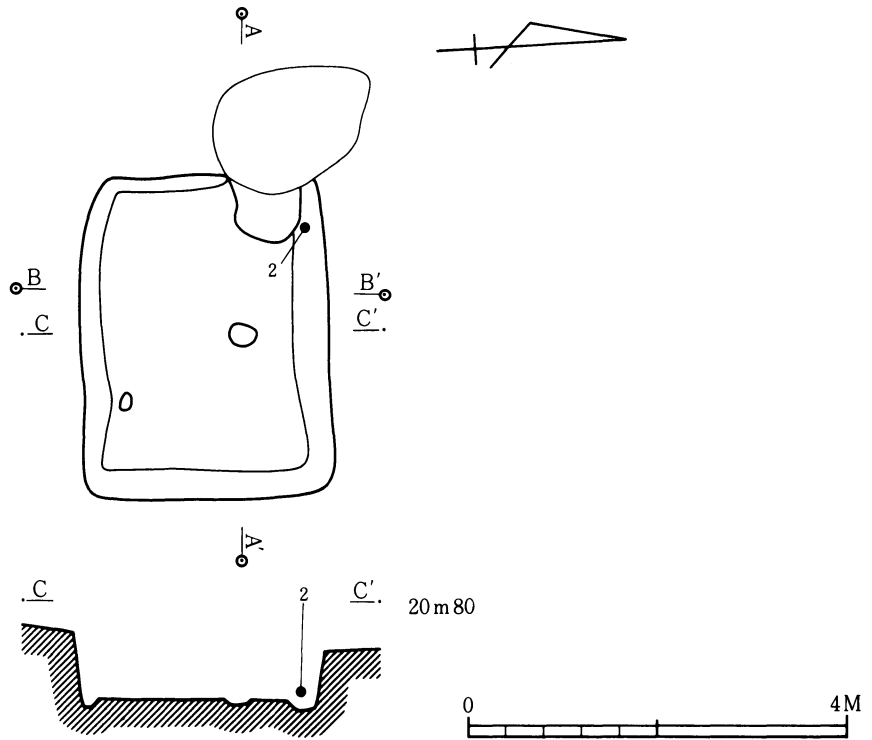
2C・3C区より検出調査された。主軸方位はN-89°-Wである。住居跡内覆土は5層に分けられるが、基本土層は4層に分けられる。カマドの煙道部は攪乱をうけており残存しない。

平面形は、3.34×2.62 mで、縦に長い形状を呈する。床面積は、2.86×2 mで約5.72 m²を計る。壁高はそれぞれ68, 77, 46, 50 cmである。床面の標高は、約19.8 mである。周溝はカマド部分をのぞき全周する。幅16, 14, 10, 30 cmで一定していない。深さは6, 4, 4, 10 cmである。柱穴は2本検出された。遺物は少なく図化できたのは2点のみだった。

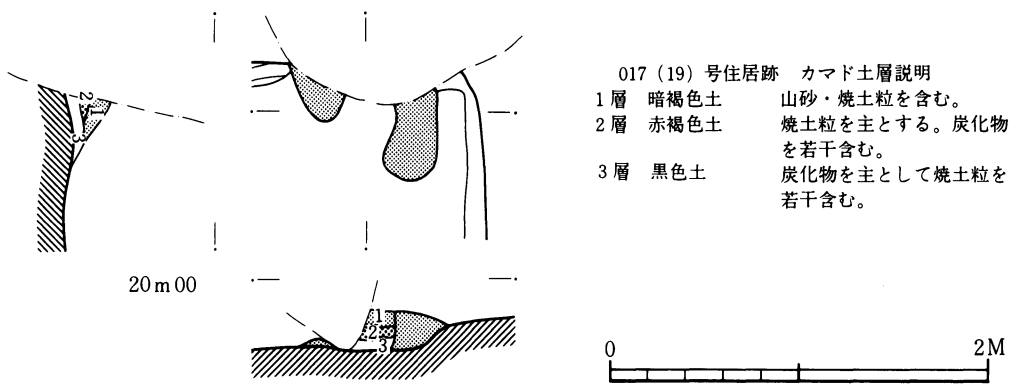
カマドは、西壁右隅に構築されていた。前述したとおり煙道部は攪乱をうけており全形は不明である。カマド内堆積土は3層に分けられた。



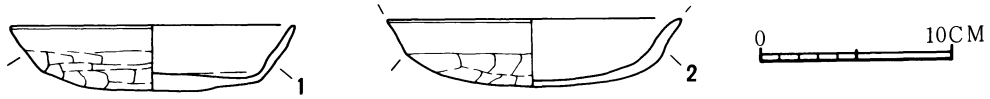
第69図 017 (19) 号住居跡実測図



第70図 017 (19) 号住居跡遺物出土状況図



第71図 017 (19) 号住居跡カマド実測図

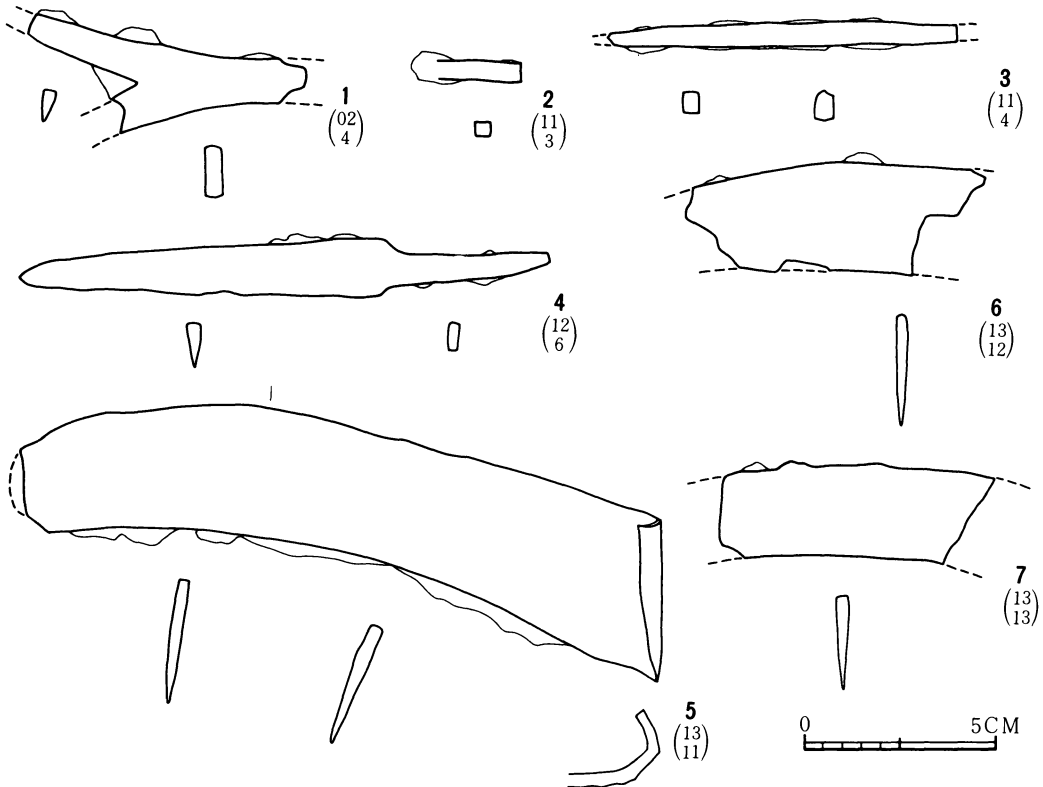


第72図 017(19)号住居跡出土遺物実測図

第15表 017号住居跡出土遺物表 (第70・72図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	盤	ほぼ完形	15.0 — 3.5	成形不明。底部外面へラケズリ。のち、静止へラケズリ。底部周囲へラケズリ。体部ヨコナデ。内面ナデ。	暗褐色	灯明皿的な用途か？右左口縁部にタール状物質附着。01。
2	盤	完形	15.5 — 3.5	外面体部へラケズリ。内面ミガキ。口縁ヨコナデ。内面底部に剝離がみられる。	暗褐色	良好。04。



第73図 鷺谷津遺跡出土鉄製品実測図 (出土住居跡遺物番号)

第16表 鷺谷津遺跡出土鉄製品 (第73図)

挿図 番号	出土住居 (番号)	製品名	遺存度	計測値 (cm)			形 状	備考
				長さ	幅	厚さ		
1	002号 (4)	鉄鋏	両端を欠く。	7.2	1.4	0.4	雁股式鉄鋏、両端を欠くがしっかりした造り。	07。
2	011号 (3)	釘?	両端を欠く。	2.1	0.5	0.4	釘または紡錘車の軸と思われる。	52。
3	011号	紡錘車	軸のみ	9.2	0.5	0.8	紡錘車の軸と思われる。	51。
4	012号 (6)	刀子	ほぼ完形	13.9	身1.2 茎0.7	0.3 0.2	中央で半折。切先は丸味をおびている。	65。
5	013号 (11)	鎌	刃先端及び基部を欠く。	7.8	2.8	0.3	先端を若干欠く。腐蝕が多くもろい。	113。
6	013号 (12)	鎌	刃部及び基部を欠く。	7.0	2.4	0.4	両端を欠く。	112。
7	013号 (13)	鎌	刃先端を欠く。	17.0	3.2	0.3	両端を欠く。	111。

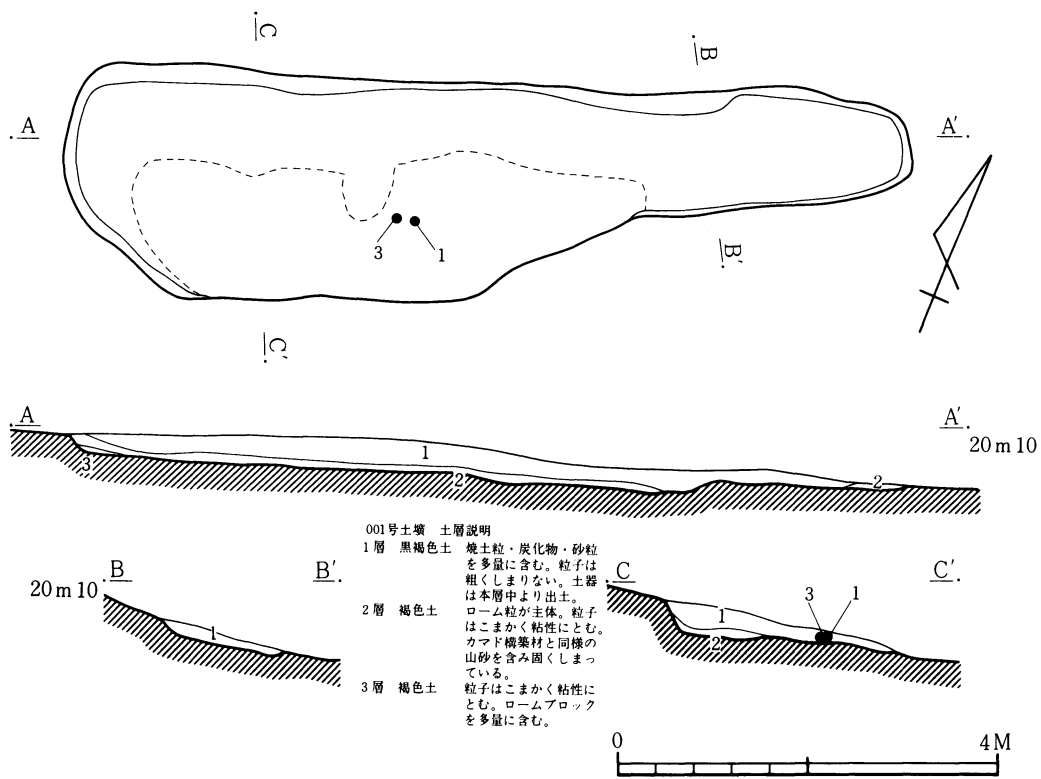
(2) 土壇

001号土壇 (第74・75)

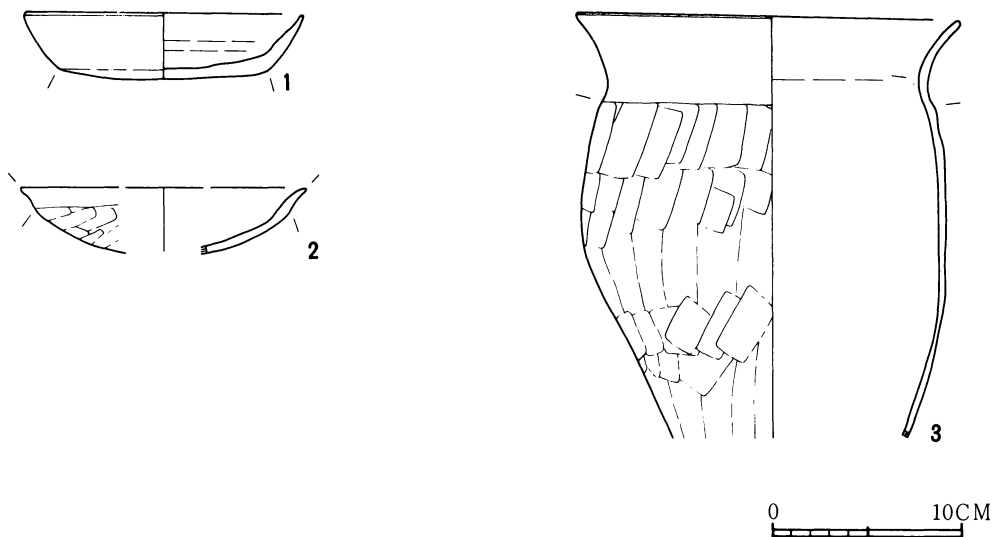
2H区から検出調査された。調査段階では性格不明の遺構としていた。土器焼成窯としての可能性があるが、類例はみあたらない。

調査区内の台地上平坦面から斜面に移行する位置に、コンターと長軸をほぼ一致して構築されていた。台地上側の掘込みは明確に検出されたが、斜面側は削平されており明確でない。

平面形は、長軸が8.84 m、短軸は最大が2.36 m、最小が1.28 mである。検出面から底面までは約40 cmである。第74図の破線内には山砂・焼土が多量にみられ、図化できた土器もこの範囲から出土している。遺構内覆土は3層に分けられ、全体に山砂、焼土を含んでいるが、壁に近い部分は若干山砂・焼土が少なくなっている。床面にはかなりの凹凸がみられ、しまりも少ない。床面には白色粘土塊がいくつかみられ、東側が向ってゆるやかな傾斜を示す。東側が若干高くなる。断面B-B'は斜面と同様に傾斜しており、C-C'とは異なっている。山砂・焼



第74図 001号土壙実測図・遺物出土状況図



第75図 001号土壙出土遺物実測図

土の検出状況等から、西側と東側では土壌の使用に関して、性格が異なっているようにも考えられる。床面の標高は約 19.7 m である。遺物は前述のとおり出土状態を示し、土器の内部には山砂・焼土が入っていた。横につぶれた状態であった。

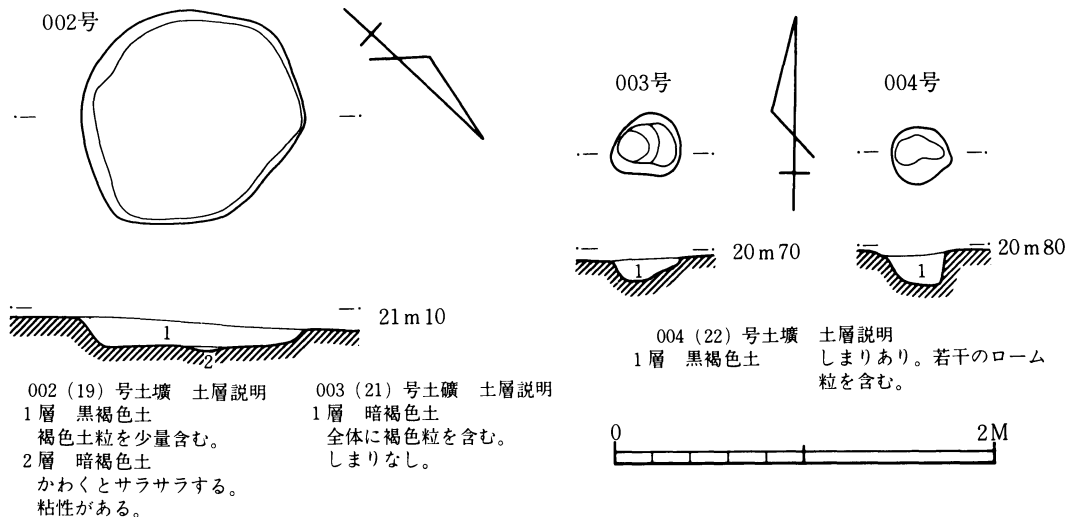
第17表 001号土壌出土遺物表 (第74・75図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	盤	完形	14.8 11.0 3.5	紐積み。ヨコナデ。内外面ともに磨減多い。	赤味のつよい褐色	良好。二次焼成強く詳細は不明。01。
2	盤	口縁1/4	(15.0) — 残3.4	底部外面へラケズリ。口縁ヨコナデ。内面へラミガキ。	暗褐色	精製されており良好。04。
3	甕	底部及び、胴部の一部を欠く。	20.2 — 残21.8	紐積み。外面胴上位ヨコへラケズリ。中位タテへラケズリ。中位から下位はタテ・右下りへラケズリ。内面ナデ。口縁部ヨコナデ。	明茶褐色	砂粒を多く含むが良好。01。

002号土壌 (第76図)

2 C区で検出調査された。長径 1.18 m, 短径 1.1 m, 深さ 0.2 m を計る。覆土は 2 層に分けられるが、2 層は土壌中央部だけに検出され、その部分だけが若干くぼんでいる。褐色土粒を少量含む、2 層はかわくとサラサラする。遺物は検出されなかった。



第76図 002・003・004号土壌実測図

003号土壌 (第75図)

2C区で検出調査された。長径0.4m, 短径0.35m, 深さ0.15mを計る。覆土は1層のみで褐色土粒を多く含む。

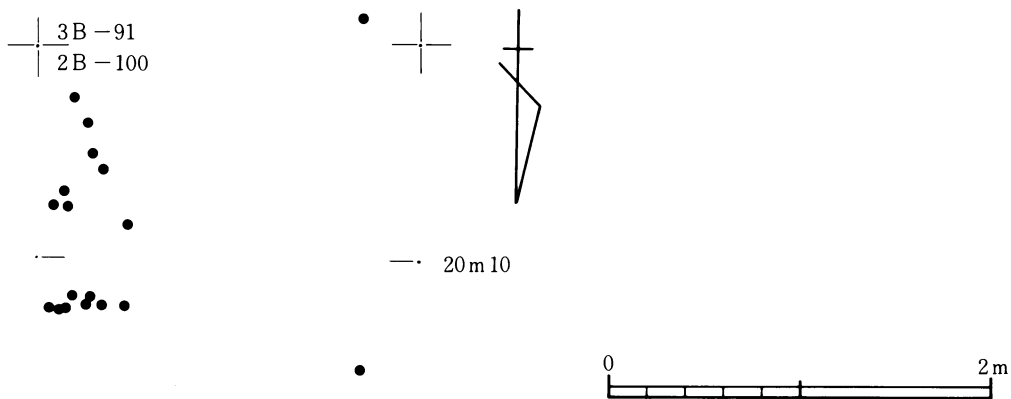
004号土壌 (第75図)

2C区で検出調査された。長径0.35m, 短径0.28m, 深さ0.16mを計る。覆土は1層のみでローム粒を多く含む。

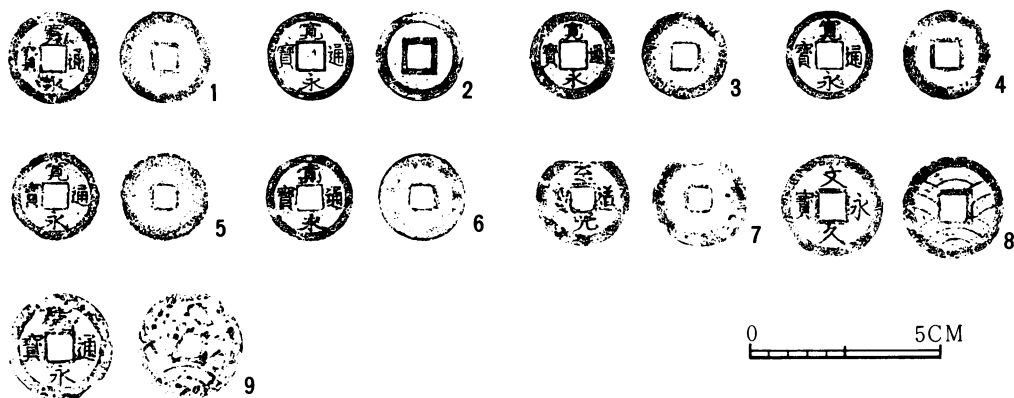
(3) その他の遺構と遺物 (第77・78・79図)

古銭 (第77・78図)

2B-100を中心に寛永通宝・至元通宝・文久通宝が9枚出土した。至元通宝をのぞき遺存状態は良好であった。これら古銭が伴う遺構は確認されなかった。しかし、017号住居跡と重複している土壌などから、出土した古銭はかつてこの台地が墓地として使用された時に埋葬されたものと考えられよう。



第77図 鷺谷津遺跡古銭出土状況図



第78図 鷺谷津遺跡出土古銭拓影図

第18表 鷲谷津遺跡出土古銭 (第77・78図)

挿図番号	種類	遺存度	形状	備考
1	寛永通宝	完存	手ずれなく遺存状態は良好。	00。
2	"	"	"	2B100、02。
3	"	"	"	2B100、07。
4	"	"	"	2B100、06。
5	"	"	"	2B100、01。
6	"	"	"	2B100、04。
7	至元通宝	一部欠く。	上部の一部を欠く。全体に手ずれ?がみられる。	2B100、08。
8	文久永宝	完存	裏面に波文がみられる。	2B100、09。
9	寛永通宝	"	"	3B91、05。

縄文式土器 (第79図)

A・B・C区で、トレンチ調査中に出土したものである。土器片の数量は少なく、全形をうかがえるものはなかった。該当する遺構も検出されなかった。

A類 (1～2)

縄文を施す土器片で、すべて口縁部の破片である。1・2ともに口唇部が肥厚し、外反する。1は、口縁部内側がゆるやかに外反し、口唇部ちかくで再び外反する。口唇部外面には縄文原体による圧痕がみられる。外面は、原体Lの縄文が施文されている。2は、口縁部内部が口唇部にほぼ直線的に移行し、口唇部は外側が若干肥厚する。口唇部外面には縄文原体による圧痕がみられる。外面は、縄文が施文されている。

B類 (3～4)

撚糸文を施す土器片ですべて口縁部破片である。3・4ともに口唇部は内・外方へ肥厚する。3は、内外面とも横方向の削痕がみられる。口唇部は丸味をおびるが、内側には雑な削痕がみられる。外面には撚糸文が施されているが間隔が広い。4は、内面に左上りの削痕がみられ、外面には横方向の指頭による擦痕がみられ、撚糸文を消している。

C類 (8)

口縁部の破片である。外面は丁寧に整形を加えているのにたいして、内面は荒れている。口唇部は外方に肥厚している。口唇部上面は、扁平に整形されており、棒状工具によるキザミが

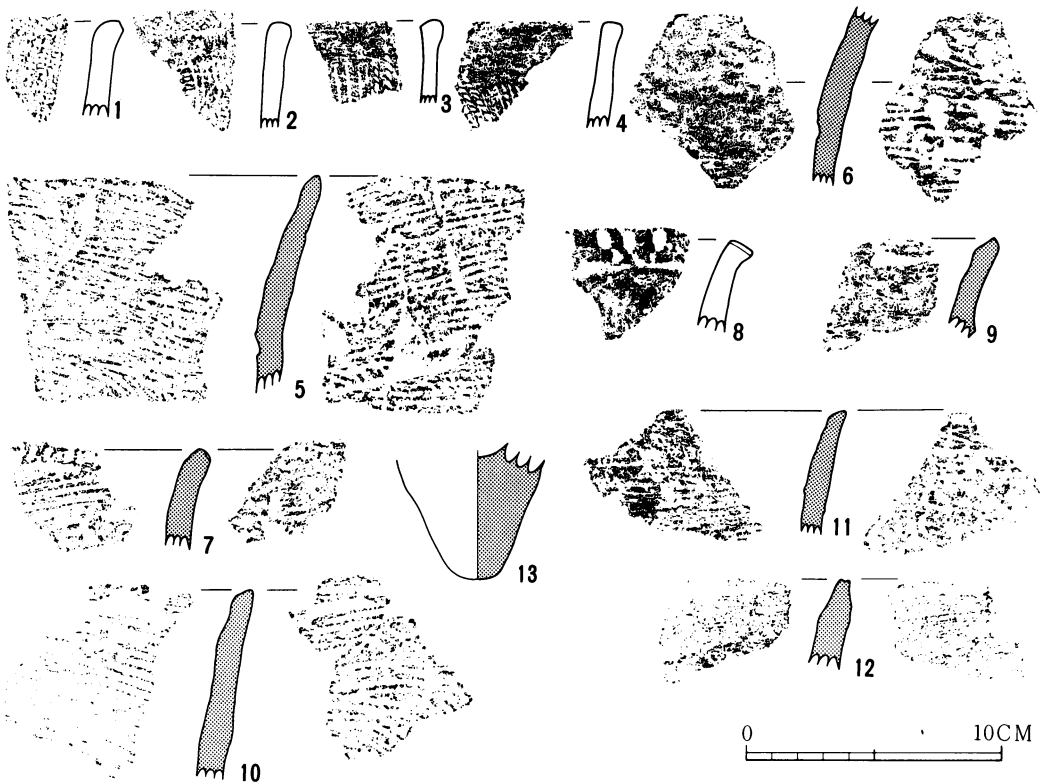
施されている。色調は、暗茶褐色を呈し、繊維は含まれない。

D₁類 (9)

繊維を含むが、条痕文の施されていない土器片である。内外面ともに横方向になでられたあと、指頭による押圧が加えられる。口唇部内側には削りによる面取りが施される。破片の下端に屈曲部の痕跡がみられる。

D₂類 (5～7・10～13)

条痕文を施し、繊維を含む土器片である。5・7・9～12は口縁部片で、口唇部は外方に開き気味のものが多いが、口唇部にキザミ痕をもつもの(6・7)もみられる。12は、口唇部内面に削痕がみられる。6の口唇部はC類(8)に類似する。外面は横方向あるいは斜方向の条痕文を施す。内面は横方向の条痕文を施している。13は、尖底部である。



第79図 鷺谷津遺跡出土縄文式土器拓影図

第4節 小 結

鷺谷津遺跡で検出調査された遺構は、竪穴住居跡 17軒、溝 1条、土壇 4基であった。それ以外に、縄文式土器片と江戸時代末の古銭の出土がみられたが、遺構は検出されなかった。以下に、各時代に分けてまとめとしたい。

縄文時代 遺構は全く検出されなかったが、トレンチ調査中に、A・B・C区の表土層から縄文式土器片が少量出土した。これら土器片については第3節でふれたが、A・B・C・D類に分類が可能で、縄文時代早期に属するものと思われる。

- A類 井草式土器
- B類 稻荷台式土器
- C類 不明
- D類 茅山式土器

以上であるが、C類の帰属時期は明確にはできないが、胎土・施文から早期に属するものと思われる。調査段階では土壌の検出がなされたが、明確に本期に属す遺構は検出されなかった。

奈良・平安時代 本期に該当すると思われる遺構は、堅穴住居跡17軒と001号土壌である。これらすべてが同時に存在していなかったことはいうまでもない。それは、002・003号住居跡が重複していること、016号住居跡で建替えが行なわれたことが、カマドの調査から確認できていることからいえる。また、008号住居跡の床面からは、周溝の痕跡と思われる溝が検出されており、少なくとも008号住居跡においても、建替えが行なわれたことが推察される。これらのことは、少なくとも同一住居跡において建替えを行う必要が生じるぐらいの時間的継続があったことを意味している。実測図を掲載できた遺物は約85個体であった。完形土器は少なく、ほとんどが復元実測であった。住居跡ごとの出土個体数にもバラツキがみられる。そのうえ、003・015号住居跡からは遺物の出土はなく、帰属時期を明確にはなしえなかった。

出土した土器群の器種構成は、土師器では坏・盤・埴・壺・甕形土器、須恵器では坏・高台付坏・長頸壺・叩き目甕形土器であった。これら土器群の帰属する時期の編年的研究は、近年めざましいところであるが、従来の土器編年と絶対年代の間に若干の差がみとめられるという指摘もされている。本節では、これらの研究を参考にして、坏形土器・盤状坏形土器及び甕形土器を基軸として土器群を概観してみたい。17軒の住居跡のうち先述したとおり、003・015号住居跡からの遺物の出土はなく、明確な年代決定の資料を欠いている。また、002号住居跡の出土遺物も伴出関係が不明である。出土した土器群を概観すると、まず高坏形土器の出土がまったくみられないことに気づく。破片もみられないことから上限をある程度かぎることが可能である。次に、土師器足高台付坏形土器と皿形土器がみられないことなどから下限もある程度かぎることができる。上限を8世紀前葉、下限を10世紀前半と考えてよかろう。さて、住居跡と出土遺物の時間的關係である。遺物は床面直上出土土器・覆土内出土土器・カマド内出土土器と区分が必要であることはいうまでもない。生活時の土器をどこに求めるかについては、土器の編年的研究、集落論研究などにとって重要な問題である。住居跡が廃棄されて完全に埋没し、地表にその痕跡を残さないだけの時間的幅をどのくらいにとらえるかによって、資料の取扱いの差がみられる。しかし、それら土器群が示すところの、型式的時間幅を越えるほどの時

間的幅はないものと考えられる。そこで、本節では先述した約 85 個体の土器を、出土した住居跡に基本的には供伴するものとして考えていきたい。

これら土器群を概観してまず盤状坏形土器の存在が目につく。016・017 号住居跡出土遺物がそれである。また、胴の張る甕形土器（001 号住居跡）、半球状坏形土器（008・009 号住居跡）、底部が丸底に近い埴形土器（008・011 号住居跡）などが同一型式内に含まれる住居跡群と思われる。次に、いわゆる「武蔵型甕形土器」を出土した住居跡（005・006・013 号住居跡）があげられる。また、須恵質の坏形土器を出土する住居跡（005・007・012 号住居跡）がある。これらの土器群の様相と倉田氏の編年を参考にすると、次のような住居跡の変遷が考えられよう。

II 期 011・014 号住居跡

III 期 008・016 号住居跡

001・009・010・017 号住居跡・001 号土壇

IV b 期 006・007 号住居跡

V 期 004・005・012・013 号住居跡

これらのうち、008・016 号住居跡は先述したように、建替えがみられることから、構築時期は II 期に入る可能性もある。このように考えると、各期とも平均 4 軒になる。調査範囲がせまく、集落全域を調査していないために、これ以上集落構成についてふれることはできない。II・IV b・V 期は主軸方位をほぼ同一方向にとっていることがわかり、III 期とした住居跡群も、001・017 号住居跡を別にするとやはり主軸方位を同一にとっている。そのうえこの 2 住居跡は他の住居跡からは離れた場所に位置しており、001 号住居跡は周溝をもたず特異な形状を呈しており、017 号住居跡も横長でコーナーにカマドをもちやはり特異な形状を呈している。

土壇 001 号土壇は、長さ 8.84 m、幅 1.28～2.36 m と大型の遺構である。覆土は 2 層に分けられ、山砂・焼土を含んでいた。遺構の形状及び床面の状況から、東・西に別々の遺構が重複している可能性も考えられたが、明確にはできなかつた。かりにそのように考えることが可能ならば、長辺を山側にとる台形を呈するものと考えられる。さて、このような大きさ、形状を呈する遺構についていまだ接したことがない。覆土には焼けた山砂や焼土粒・炭化物を多量に含んでおり、遺構内で火をたいていたことはまちがいない。出土遺物は盤形土器 2、甕形土器 2 の計 4 個体が出土したが、甕形土器の 1 個はもろく実測にたえられなかつた。これら土器も火を受けており、内部に山砂や焼土粒を含んでいた。これらのことを考えると、この遺構が土器焼成に伴うものとも考えることも不可能ではないと思われる。一般的に土師器窯は、二等辺三角形を呈すか、または円形・不整円形を呈すものが多く、長さも 1～2 m のものが最も多い。本遺構においては、複数の遺構の重複と考えれば、それも理解できよう。このことは、盤形土器と甕形土器の間に、年代的な差がみられることとも符合する。鷲谷津遺跡の立地する台地では、この遺構の所在する位置が、土器焼成にとって最適な場所だったのでなかろうか。

002・003・004号土壙は性格の不明な土壙である。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。縄文式土器片の出土範囲内であるが、縄文時代の遺構とは考えられなく、中・近世に属するものではなかろうか。

参考文献

石田広美・松村恵司「山田水呑遺跡」(山田遺跡調査会 1977)

倉田義広「千葉市域における奈良・平安時代の土器について」(『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』史館同人 1983)

第Ⅲ章 観音塚遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と環境

観音塚遺跡は、千葉市千葉寺町720-8番地先に所在する。千葉寺谷によって形成された小舌状台地先端に立地し、鷲谷津遺跡とは小支谷によって劃されている。千葉寺谷から分岐した支谷は、観音塚遺跡の東方約300mで終わり、その台地上方には、No.4大北遺跡が所在する。支谷をはさんだ南東対岸にはNo.3山ノ神遺跡が所在しており、支谷の両岸には各時代にわたり集落が営まれていたことがうかがわれる。調査区は、長さ約100m、幅約20mで、東西に細長い形をしており、北から南へ傾斜する急斜面に立地する。標高は、最高位が約22m、最低位が約18mで、路線幅の中での比高差は約4mである。

第2節 調査の方法と経過

(1) グリットの設定

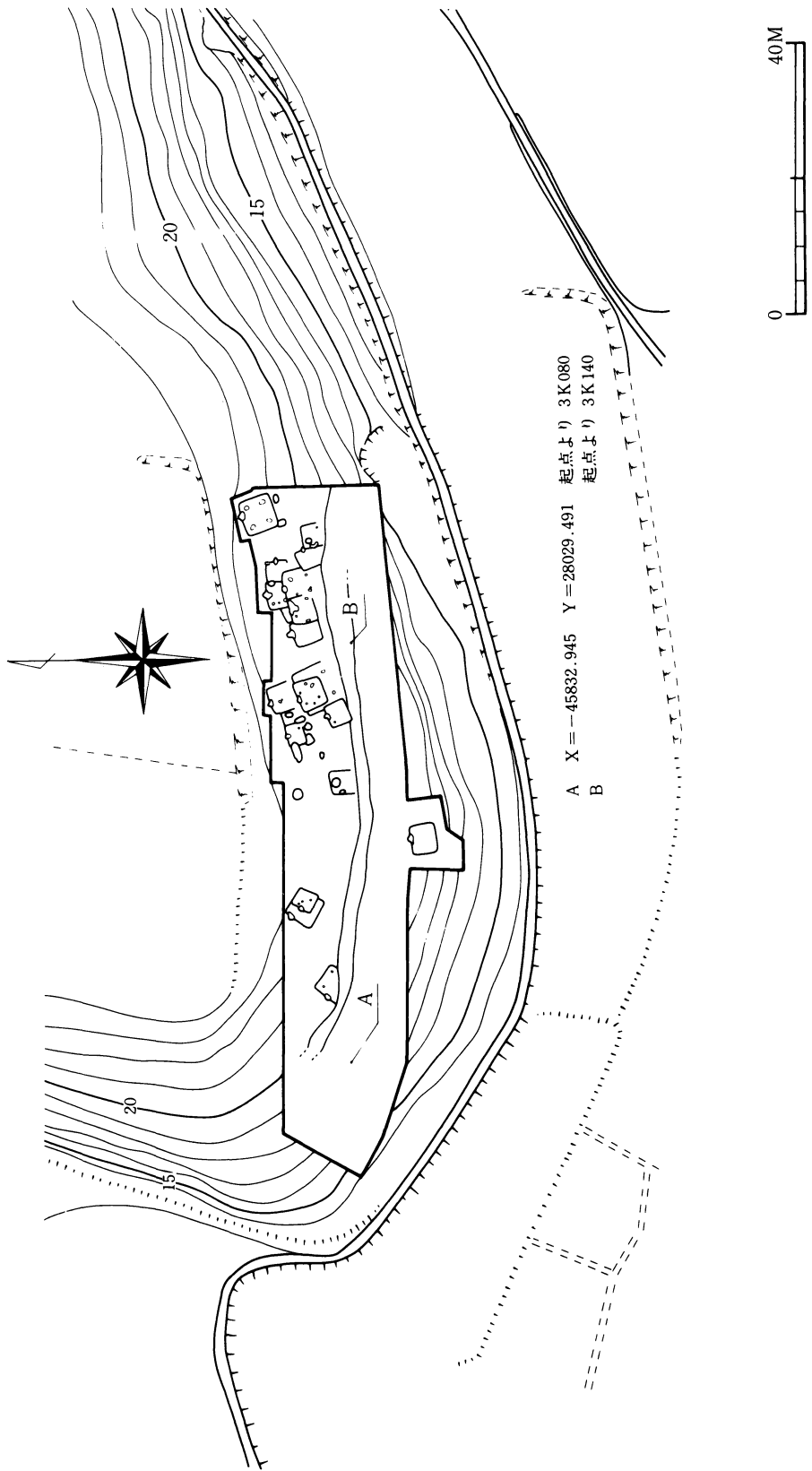
観音塚遺跡は、起点から3k080mをA点、同じく3k160mをB点として、凡例12の方法で、大グリット及び小グリットを設定した。各グリットの呼称は第81図のとおりとした。

(2) 調査の経過

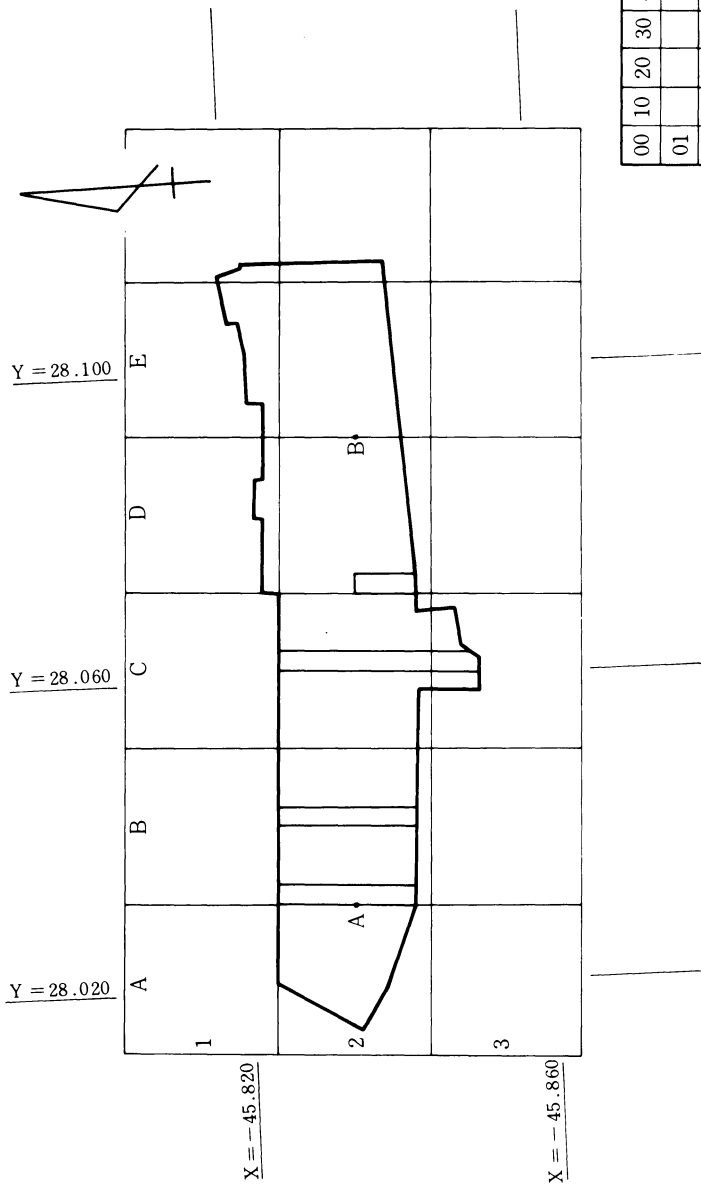
発掘調査は昭和54年2月20日から3月31日まで行い、昭和54年度分として4月30日まで継続して行われた。2月20日から調査区内の草刈りを開始し環境整備を行い、3月1日からトレンチ設定に入った。試掘トレンチは台地の上から下へ調査区を横切る形で入れた。斜面であったため表土は浅く、遺構確認面は不明確であった。トレンチ調査段階から鉄滓の出土がみられたが、製鉄関係遺構の確認はこの段階ではなされなかった。3月8日から遺構の調査を開始した。調査開始以前は斜面であることなど地形上のことから、遺構の検出は少ないと予測していたが、竪穴住居跡19軒、鍛冶跡1軒などが検出された。特に鍛冶跡の調査は、鍛冶炉の遺存が良好であり、なおかつ本地域での鍛冶炉の類例が少ないことなどから切取り保存を行い、当センターで保管している。この間、3月1日から3月15日まで、No.5大森第一遺跡の追加調査が行われたり、観音塚遺跡も200㎡の追加調査が行われたため、調査は次年度の4月まで行われた。

第3節 検出された遺構と遺物

本遺跡で調査された遺構は、竪穴住居跡19軒、鍛冶跡1基、土壇13基であった。遺構は標高20mのコンターを下限として検出されたが、19号住居跡は標高約18mの所から検出された。



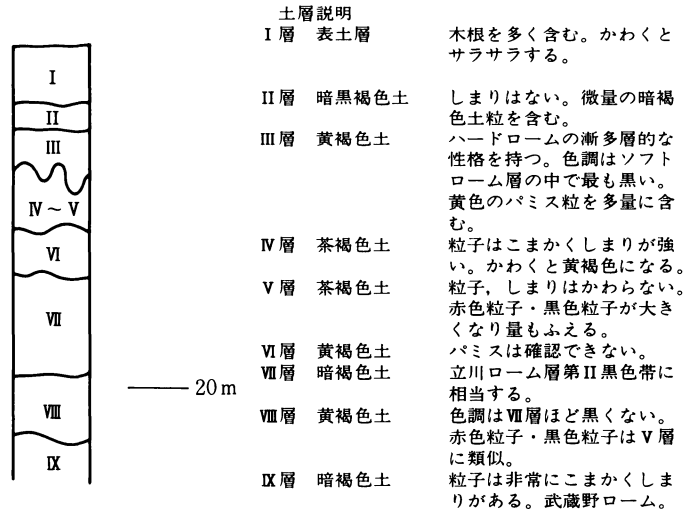
第80図 観音塚遺跡調査区・周辺地形図 (1/1,000)



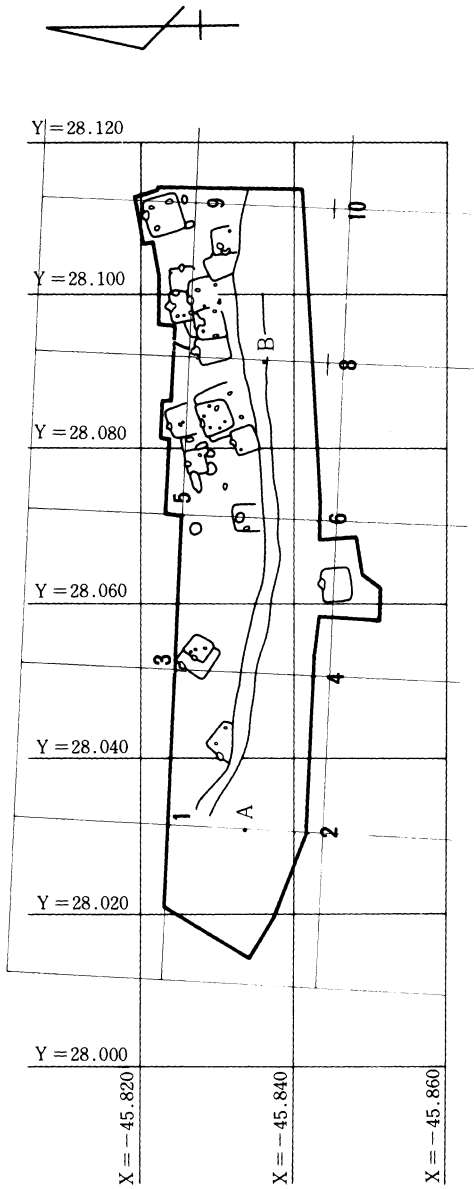
00	10	20	30	40	50	60	70	80	90
01									
02									
03									
04									
05					55				
06									
07									
08									
09									99

第81図 区設定図・プレグリット配置図

また標高 20 m のコンターにほぼ一致して溝が掘られていたが、畑の根切溝と推定される。調査区内の比高差は約 4 m である。

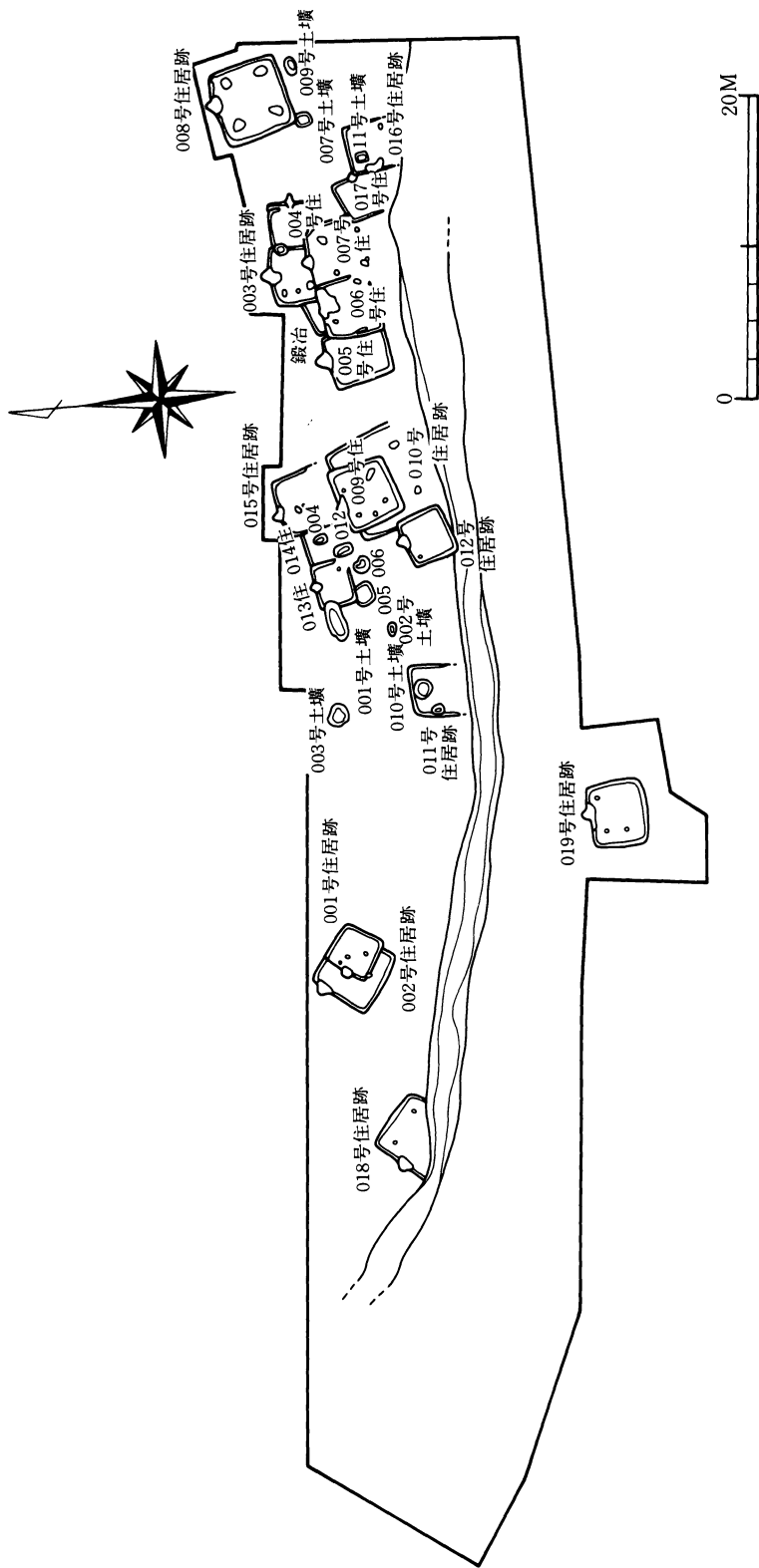


第82図 観音塚遺跡土層柱状図



	X	Y	X	Y
1	-45.822.963	28.030.090	6	-45.843.327
2	-45.840.931	28.029.012	7	-45.826.557
3	-45.824.161	28.050.054	8	-45.844.525
4	-45.842.129	28.048.976	9	-45.827.755
5	-45.825.359	28.070.018	10	-45.845.723
				28.068.940
				28.089.982
				28.088.904
				28.109.946
				28.108.868

第83図 遺構配置図・公共座標関係図



第84図 遺構配置図

(1) 竪穴住居跡

001号住居跡 (第85~88図)

2C区から検出された。主軸方位はN-68°-Wである。住居跡内覆土は4層に分けられた。ロームブロックを多く含む土質であった。

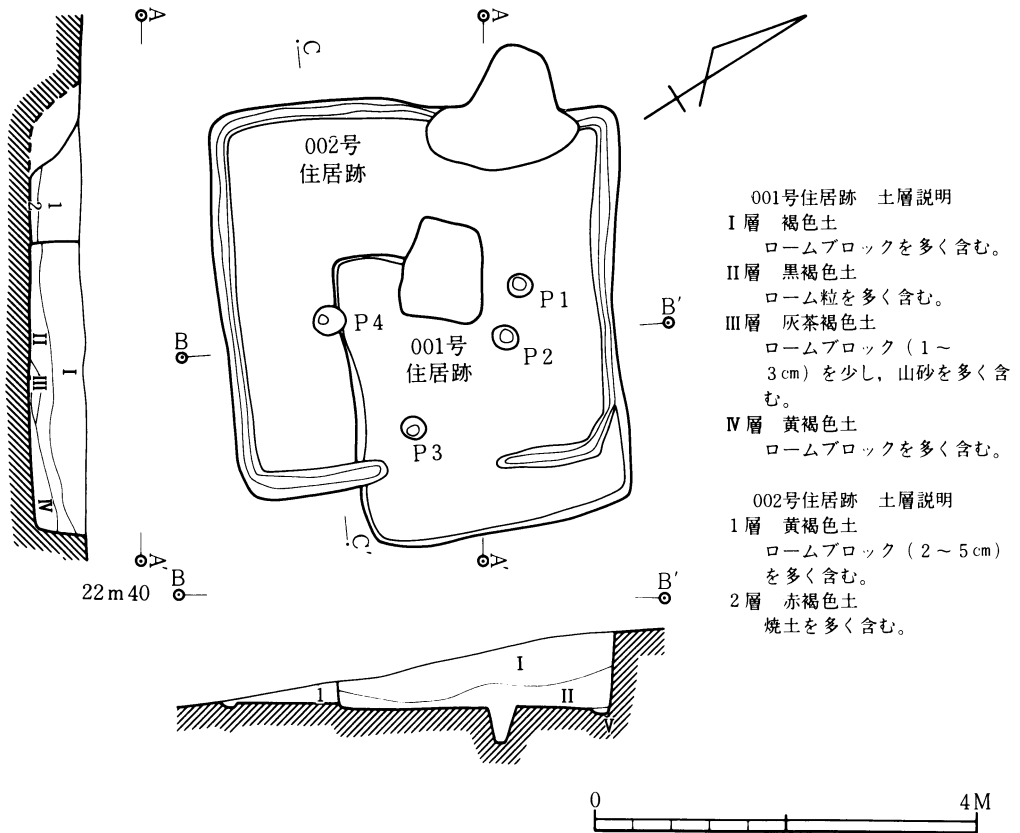
平面形は、2.98×2.8mで、ほぼ正方形を呈す。床面積は、2.84×2.52mで約7.2㎡を計る。002号住居跡と切合関係にあり、001号住居跡が新しい。床面の標高は約21.2mである。周溝は確認されなかった。柱穴は4本検出されたが、001号住居跡に明確に伴う柱穴は不明である。遺物はカマド手前の床面近くから出土している。

カマドは、西壁中央に構築されていた。掘込み幅86cm、奥行き46cmを計る。カマド内堆積土は4層に分けられる。6~8cmの厚さで焼土層がみられた。

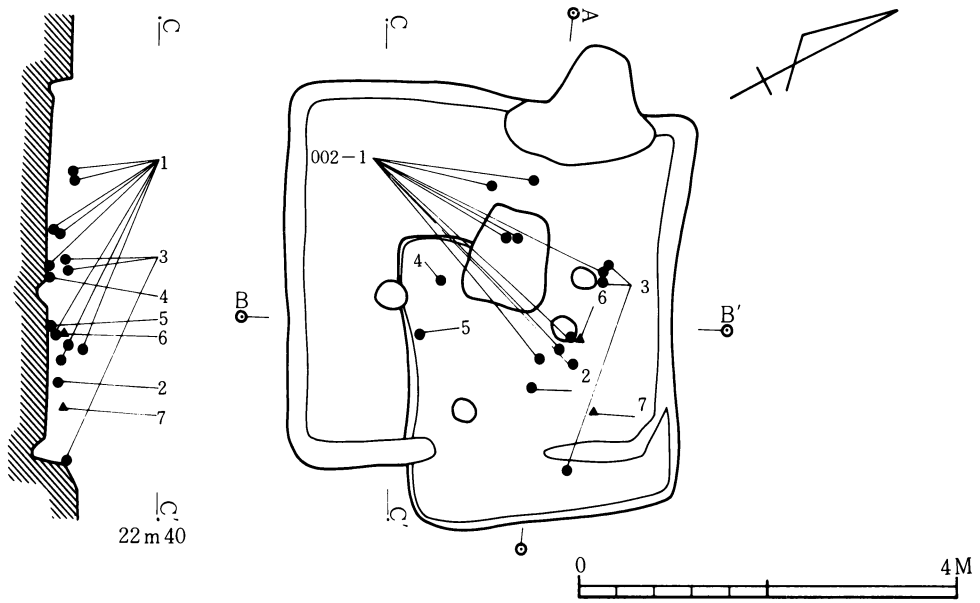
002号住居跡 (第85・86・89・90図)

001号住居跡と切合関係にある。001号住居跡に先行する。住居跡内覆土は2層に分けられた。

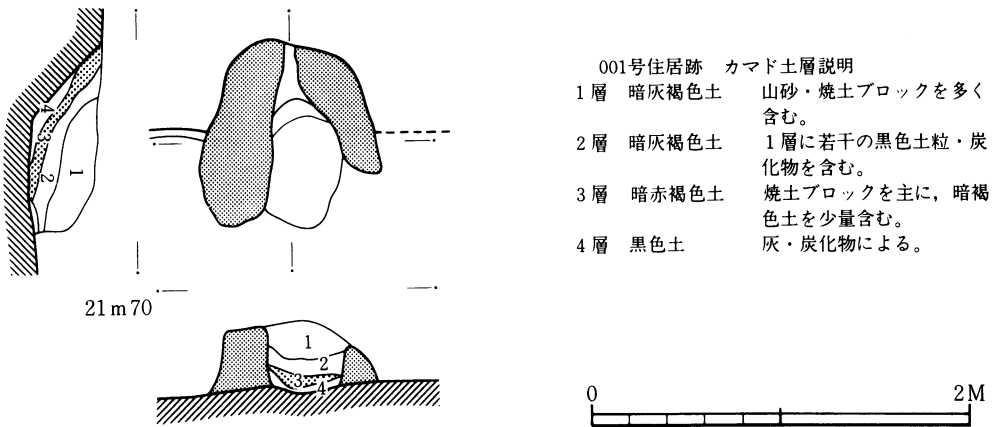
平面形は、4×4.18mで、ほぼ正方形を呈する。床面積は、3.52×3.72mで約13㎡を計る。壁高はそれぞれ81, 64, 2, 6cmである。床面の標高は、約21.25mである。周溝は南壁の中



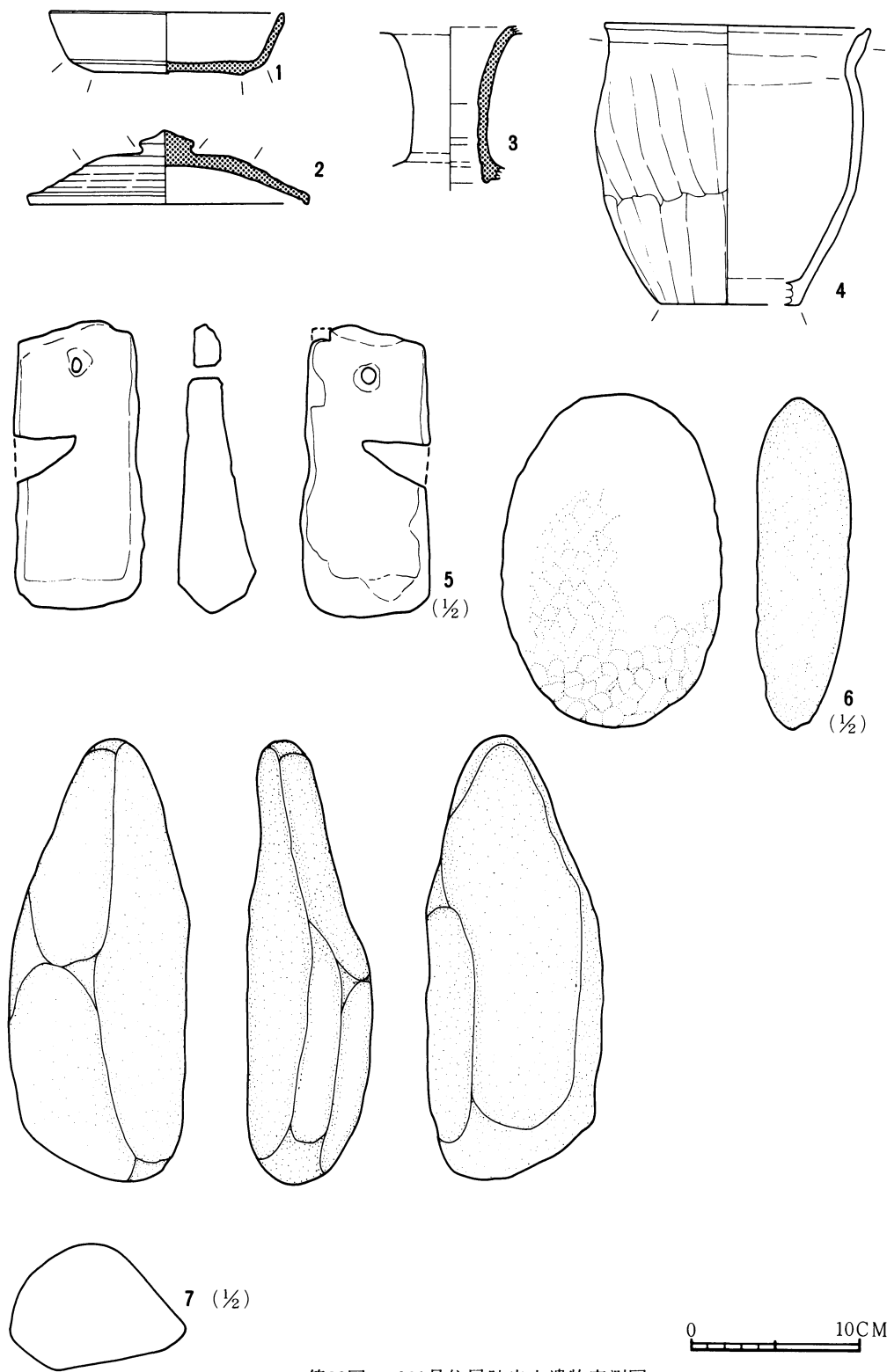
第85図 001・002号住居跡実測図



第86図 001・002号住居跡遺物出土状況図



第87図 001号住居跡カマド実測図



第88図 001号住居跡出土遺物実測図

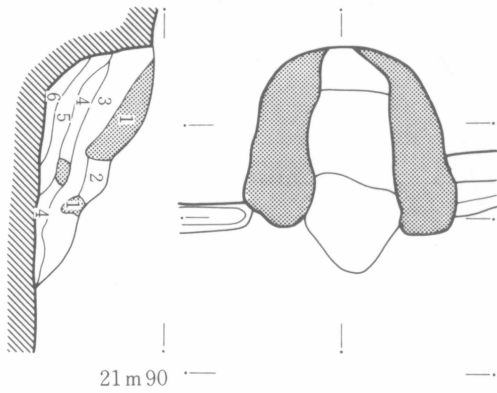
第19表 001号住居跡出土遺物表 (第86・88図)

() 復元

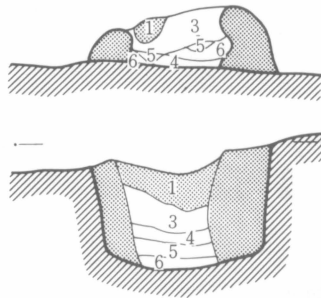
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	底部1/2。 体部1/5	13.8 8.7 3.6	外・内面ヨコナデ。底部周囲回転ヘラケズリ。	暗灰色	精製されており良好。153。カマド内出土。須恵器。
2	蓋	1/4を欠く。	16.2 4.5 7.2	外面ヨコナデ。内面ナデ。	暗青灰色	54。須恵器。
3	長頸壺	頸部	— — 9.2	回転ヨコナデ。上部及び外面に暗緑色の自然釉あり。	暗緑褐色	良好。20, 21, 118, 須恵器。
4	小型壺	底部及び、 胴部の一部 を欠く。	15.7 8.0 16.5	紐積み。口縁部ヨコナデ。外面胴部上位左下りヘラケズリ。胴部中位左上りヘラケズリ。下位上から下ヘラケズリ。胴部上半部分的なヘラミガキ。内面上・中位ヨコナデ。中位下磨減多い。底部ヘラ整形。	暗黄褐色	砂粒を含むが良好。149, 151。カマド内出土。
5	砥石	ほぼ完形	巾上3.4 下3.7 長8.4	3つに分割。砥石面は使用度が多かったと思われ、湾曲している。上部に孔あり。	暗灰褐色	68。
6	敲石	完形	長9.65 厚2.7 巾6.5	全面に使用痕あり。	暗茶褐色	148。
7	砥石	完形	長13.0 巾5.3 厚3.7	自然石をそのまま利用	暗青灰色	

央部とカマド下部分をのぞき全周する。幅は12, 20, 14, 18 cmで、深さは3, 6, 7, 8 cmである。柱穴は001号住居跡とともに4本検出されたが、明確に伴うものはP-2, P-4のみである。図化できる遺物は1点しかなかった。

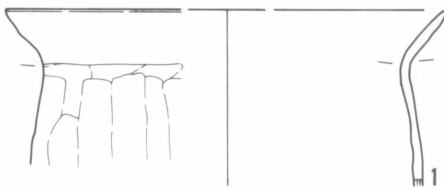
カマドは、北壁中央やや右寄りに構築されていた。掘込み幅1 m, 奥行き約0.7 mを計る。カマド内堆積土は6層に分けられたが、基本土層は4層に分けられる。カマド前面部は崩落していたが、煙道部周辺、袖部の残存状態は良好であった。



- 002号住居跡 カマド土層説明
- 1層 灰褐色土 カマド構築材。
 - 2層 灰褐色土 砂状になったカマド構築材。
 - 3層 暗黒褐色土 山砂を多く含む。
 - 4層 暗黒褐色土 焼けたローム粒を主として炭化物・焼土を多く含む。
 - 5層 黒色土 炭化物を主とする。
 - 6層 暗灰褐色土 焼土粒・炭化物を多く含む。暗黒褐色土を主に焼土ブロックを含む。



第89図 002号住居跡カマド実測図



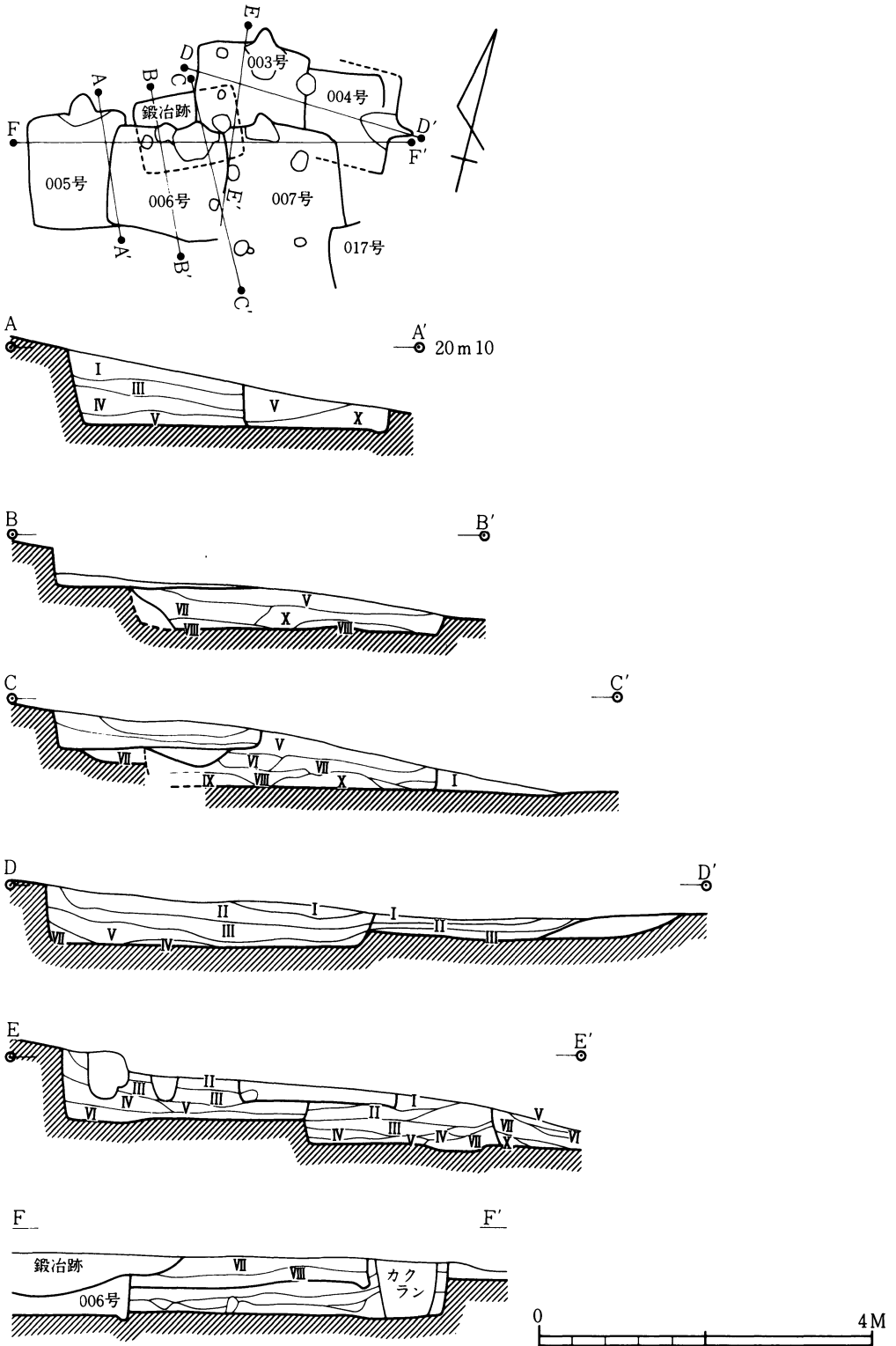
第90図 002号住居跡出土遺物実測図

第20表 002号住居跡出土遺物表 (第86・90図)

() 復元

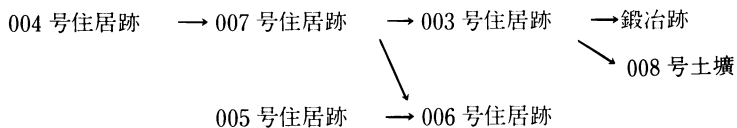
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	甕	口縁部1/2。 胴部以下欠く。	(23.1) — 残8.0	紐積み。外面タテヘラケズリ。上位 ヨコヘラケズリ。内面ナデ。口縁部 ヨコナデ。	暗茶褐色	砂粒を多く含む。142, 12, 26, 30, 38, 87, 147, 124。

003・004・005・006・007号住居跡・鍛冶跡（第91～110・152～154図）



第91図 003・004・005・006・007号住居跡・鍛冶跡実測図・土層断面図

竪穴住居跡5軒，鍛冶跡1基，土壌1基が重複している。調査をすすめた。土層断面の検討の結果，遺構の重複は下記のとおりであった。

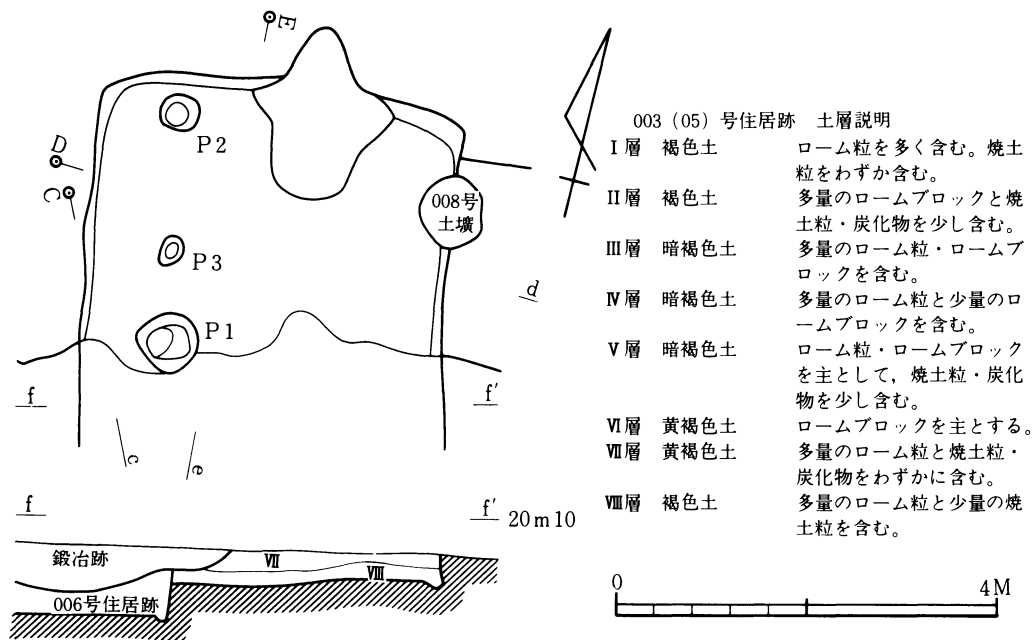


同一住居跡でありながら，土層説明が一致しないものもあったが，修正可能なものをのぞき，しいて修正しなかった。

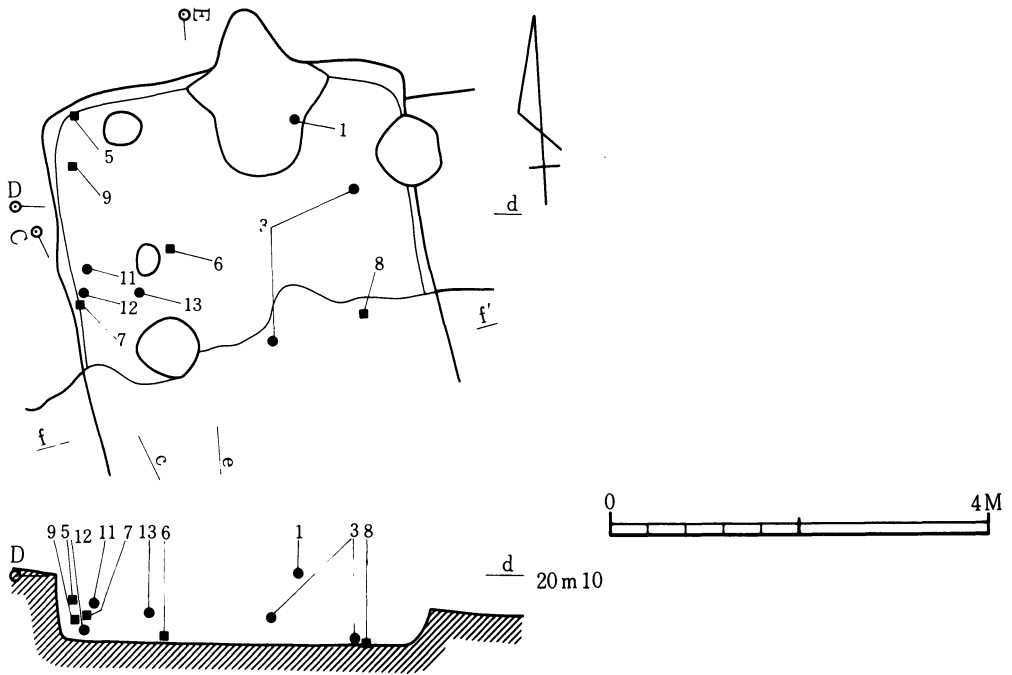
003号住居跡 (第91~95・155・170図)

2 F区で検出調査された。主軸方位はN-5°-Wである。住居跡内覆土は8層に分けられる。ロームブロック・褐色土粒を多く含む。

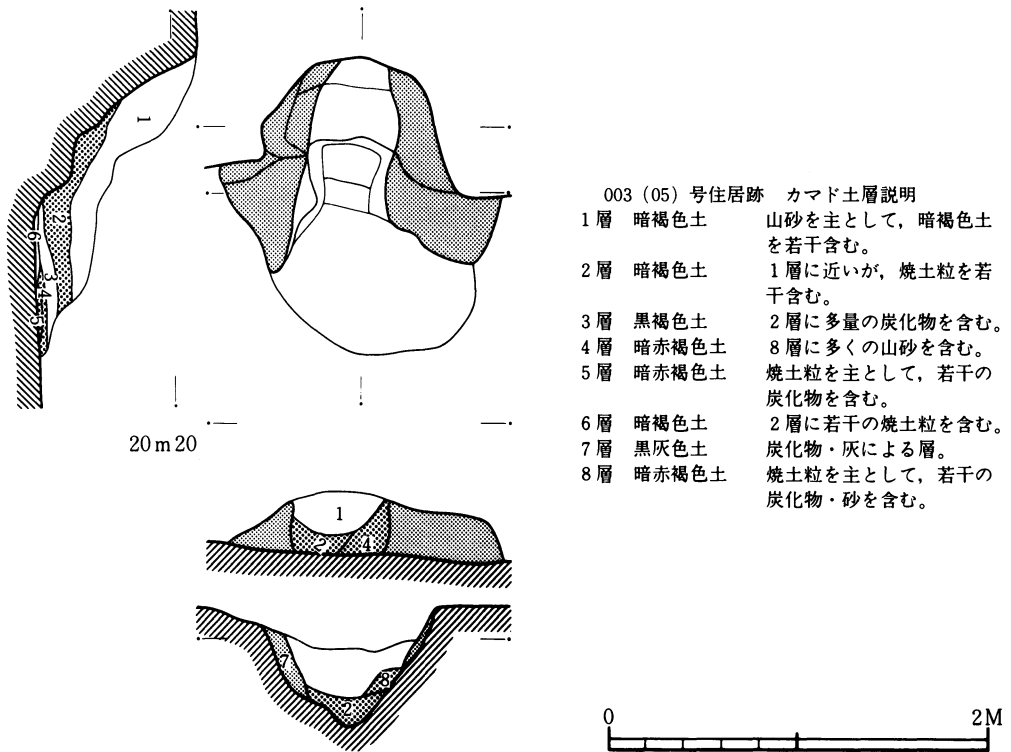
004号住居跡，007号住居跡を切り，鍛冶跡に切られている。平面形は，一辺約4 mほどの正方形を呈すと思われる。壁高は北壁で90 cm，西壁で70 cmであった。東側は004号住居跡確認面から31 cmであった。床面の標高は約19.4 mである。周溝はなかった。柱穴は3本検出された。柱穴の深さはP-1が40 cm，P-2が9 cmであった。柱穴は西側のみで検出され，東側からは検出されなかった。遺物は西壁近くに特に集中してみられる。そのうえ，鉄製品や羽口が出土している。この範囲は鍛冶跡と切り合いを有する位置であり，鍛冶跡にともなう土壌状の施設がこの場所に穿かれており，第170図の7，11，12，13の遺物はその中から出土した可能性が高い。これらの遺物を除外してみると，住居跡内全体から遺物の出土がみられる。2，3



第92図 003 (05)号住居跡実測図



第93図 003 (05) 号住居跡遺物出土状況図



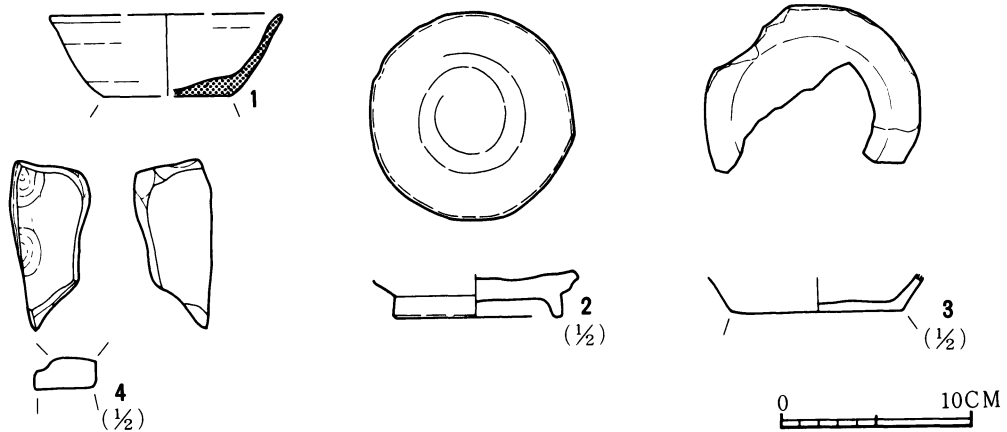
003 (05) 号住居跡 カマド土層説明

- | | | |
|----|-------|-----------------------|
| 1層 | 暗褐色土 | 山砂を主として、暗褐色土を若干含む。 |
| 2層 | 暗褐色土 | 1層に近いが、焼土粒を若干含む。 |
| 3層 | 黒褐色土 | 2層に多量の炭化物を含む。 |
| 4層 | 暗赤褐色土 | 8層に多くの山砂を含む。 |
| 5層 | 暗赤褐色土 | 焼土粒を主として、若干の炭化物を含む。 |
| 6層 | 暗褐色土 | 2層に若干の焼土粒を含む。 |
| 7層 | 黒灰色土 | 炭化物・灰による層。 |
| 8層 | 暗赤褐色土 | 焼土粒を主として、若干の炭化物・砂を含む。 |

第94図 003 (05) 号住居跡カマド実測図

は硯への転用品と思われ、3の土器の内側には墨状の物質の付着がみられる。

カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅1 m、奥行き0.6 mを計る。カマド内堆積土は8層に分けられたが、基本土層は4層に分けられる。煙道部は、火床から外方へ向ってゆるやかに立ち上がり、いったん水平になり、再びゆるやかに立ち上がる。カマド内には10~15 cmの焼土層がみられた。



第95図 003(05)号住居跡出土遺物実測図

第21表 003(005)号住居跡出土遺物表 (第91・93・95・155・170図) () 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/3	(12.2) (6.7) 4.3	底部糸切り。内・外面ヨコナデ。	暗青灰色	緻密で良好。208。須恵器。
2	高台付 坏	坏部を欠 く。	10.6 8.7 残2.2	硯へ転用か?	暗灰褐色	214。須恵質。
3	坏	1/3	11.2 9.0 1.7	底部静止へラケズリ。硯へ転用か?	暗褐色 墨付着	緻密。227, 37。
4	砥石	1/2?	4.3 2.0 0.8	砂岩質の石質。全面砥石面として 使用。	暗灰褐色	174。
5	紡錘車	第155-1	鉄製品	第38表参照		199。

6	刀子	第155-2	鉄製品	第38表参照		11。
7	不明	第155-3	鉄製品	第38表参照		59。
8	鎌	第155-4	鉄製品	第38表参照		215。
9	不明	第155-5	鉄製品	第38表参照		20。
10	刀子	第155-6	鉄製品	第38表参照		99。
11	羽口	第170-1	土製品	第47表参照		51。
12	羽口	第170-2	土製品	第47表参照		57。
13	羽口	第170-4	土製品	第47表参照		53。

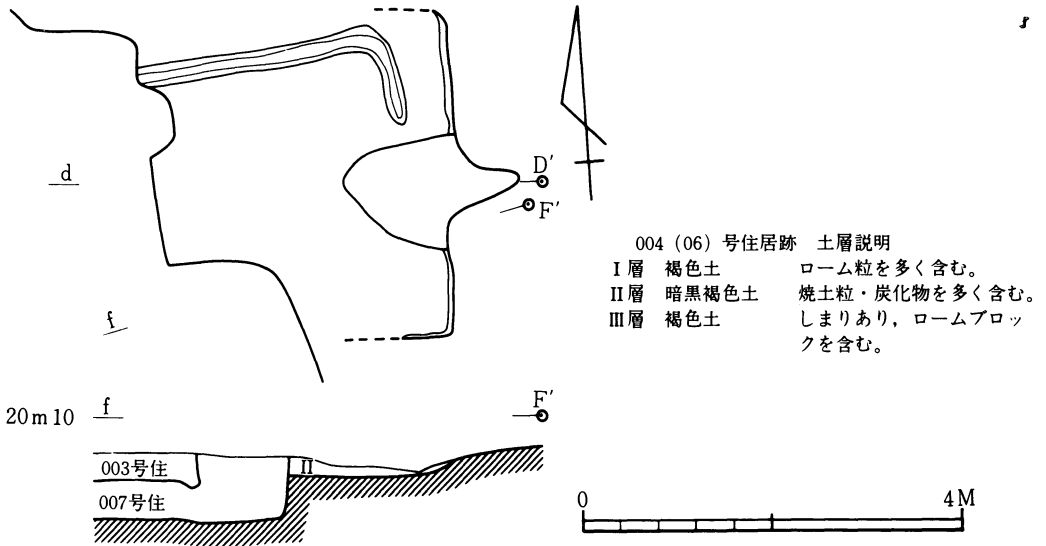
004 (006) 号住居跡 (第91・96~99・156 図)

2 F区より検出調査された。主軸方位はN-92°-Eである。住居跡内覆土は3層に分かれており、ローム粒・焼土粒を含む。

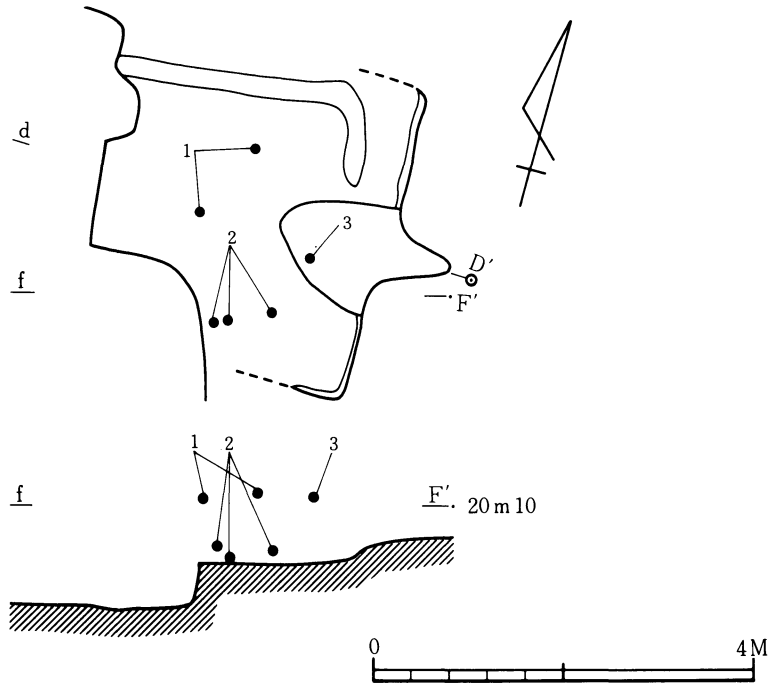
西壁部分を003号住居跡に、南西部分を007号住居跡によって切られている。平面形は、一辺が約3.4mの正方形を呈すものと推定される。壁よりもかなり内側に入った部分に、周溝状の溝がみられる。住居跡の建替によるものかは不明である。床面の標高は、約19.5mである。柱穴は検出されなかった。図化できた遺物は4点であった。

カマドは、東壁中央に構築されていた。掘込み幅65cm、奥行き約55cmを計る。カマド内堆積土は7層に分けられる。

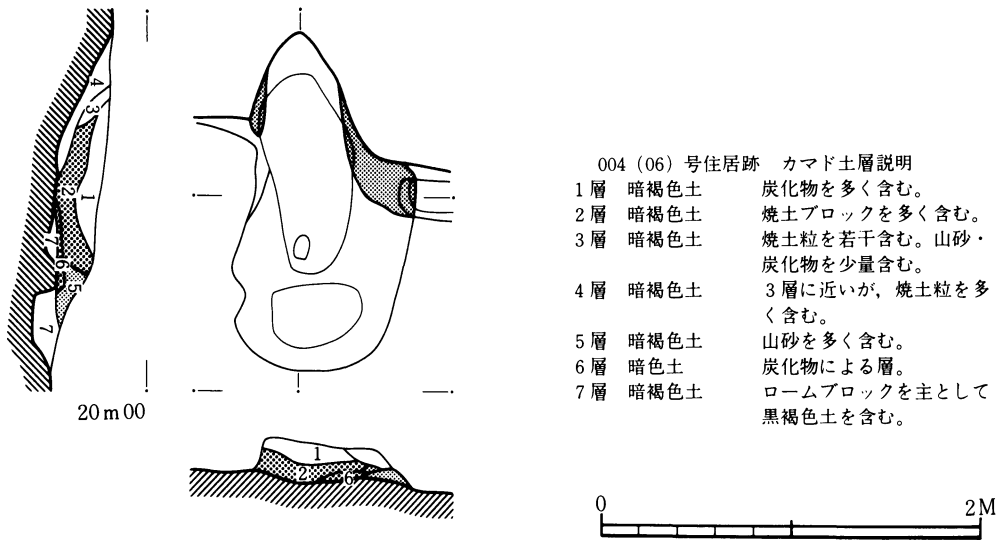
本住居跡は、観音塚遺跡014・017号住居跡とともに東側にカマドをもつ住居跡である。



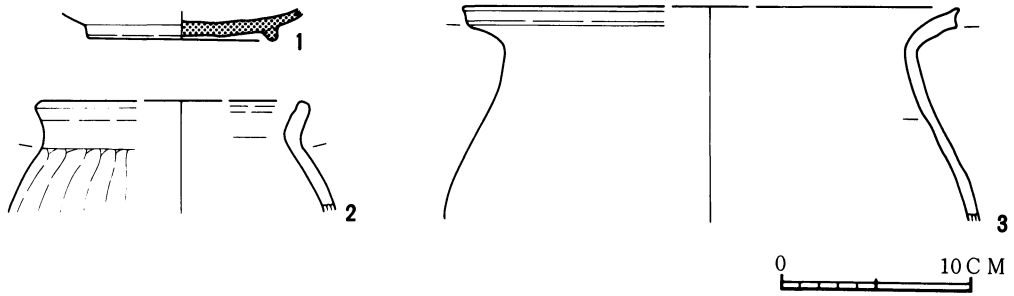
第96図 004 (06) 号住居跡実測図



第97図 004 (06) 号住居跡遺物出土状況図



第98図 004 (06) 号住居跡カマド実測図



第99図 004 (06) 号住居跡出土遺物実測図

第22表 004(006)号住居跡出土遺物表 (第97・99・156図)

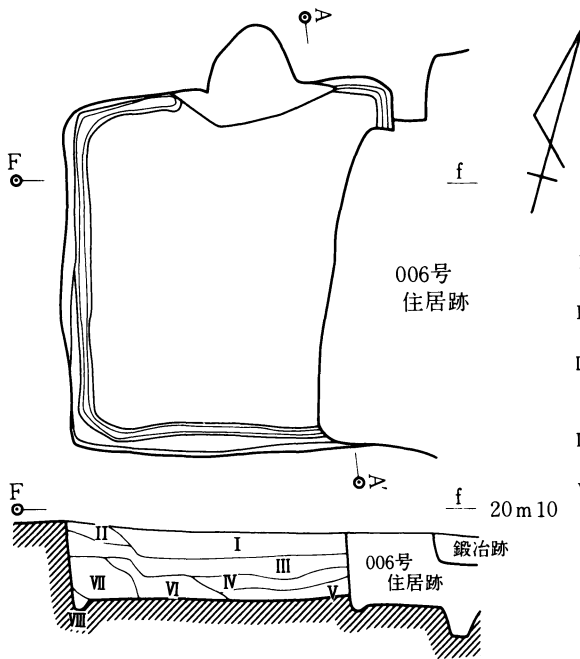
() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	高台付 坏	底部1/2	— 9.7 残1.5	張付け高台。底部回転ヘラ切り。	暗灰褐色	緻密で良好。85, 61。 須恵器。
2	広口甕	口縁部1/3	(14.2) — 5.9	紐積み。外面タテヘラケズリ。内面・ 口縁部ヨコナデ。	暗褐色	良好。06, 05, 09。
3	甕	口縁部1/4	(21.6) — 残11.6	外面全ナデ。内面指頭オサエ。口縁 部ヨコナデ。	暗褐色	砂粒多く雲母片を含む が良好。98。
4	不明	第156-1	鉄製品	第39表参照		32。

005 (008) 号住居跡 (第91・100~103・156図)

2 E区より検出調査された。主軸方位はN-22°-Wである。住居跡内覆土は5層に分けられた。全体にロームブロック・ローム粒を含む。

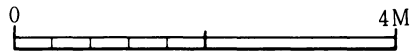
東壁を006号住居跡に切られている。平面形は、3.84×3.5mである。床面積は3.26×3.1mで約10.1㎡を計る。壁高は、東北隅が66cm、南壁が12cm、西壁が80cm、カマド脇が93cmを計り、高低差が最大80cm以上もみられる。床面の標高は約19.15mである。周溝は、カマド部分をのぞきめぐっている。幅は14, 20, 24, 18cmで深さは1, 3, 2, 3cmと浅い。柱穴は検出されなかった。壁高の高低差が80cm以上あること、柱穴が検出されなかったことを考えると、このような位置に構築されている竪穴住居跡の上屋構造は、平地に構築されている竪穴住居跡とは異なるものと考えられよう。遺物は西北隅から多く出土している。出土状況や住居跡の立地から見て、すべてが本住居跡に伴うものとは考えられない。



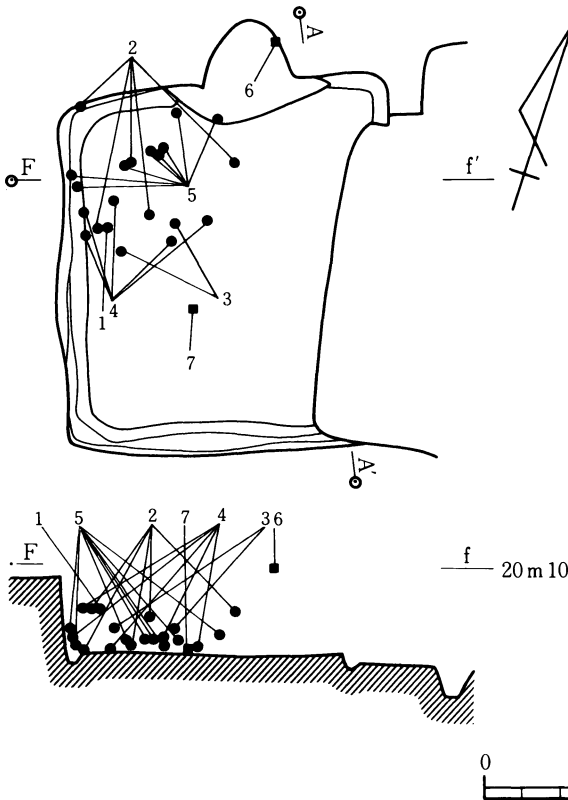
006号
住居跡

005 (08) 号住居跡 土層説明

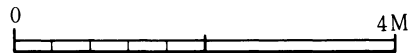
- | | | |
|------|------|--------------------------------|
| I層 | 褐色土 | 焼土粒を含む。ローム粒が多い。 |
| II層 | 明褐色土 | 暗褐色土にロームブロックを多く含む。 |
| III層 | 黄褐色土 | ロームブロック(3~10cm)を多く含む、山砂をわずか含む。 |
| IV層 | 褐色土 | ローム粒(大豆大)を含む。炭化物を少し含む。 |
| V層 | 黄褐色土 | ロームブロック(2~4cm)を多く含む。ローム粒が多い。 |



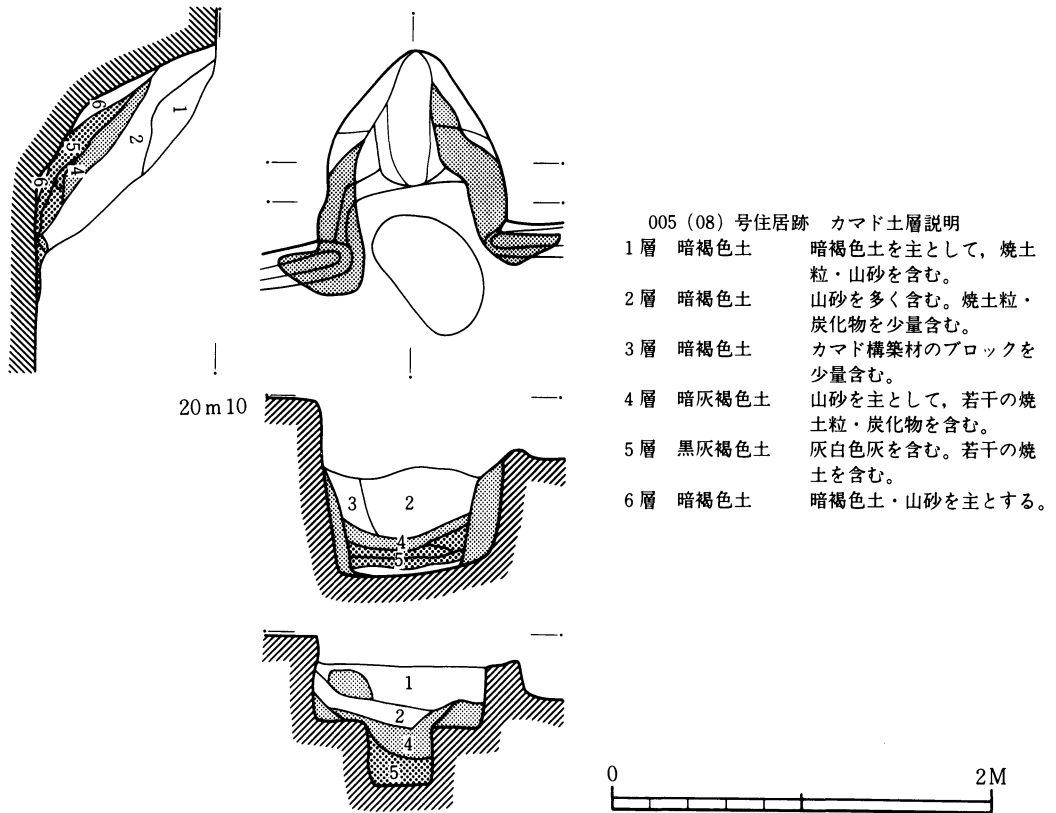
第100図 005 (08) 号住居跡実測図



第101図 005 (08) 号住居跡遺物出土状況図



カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅1 m、奥行き90 cmを計る。煙道部掘り形は、箱形に2段に掘込んでいる。カマド内堆積土は6層に分けられるが、廃棄された早い段階で、天井部の崩落があったものと推察される。



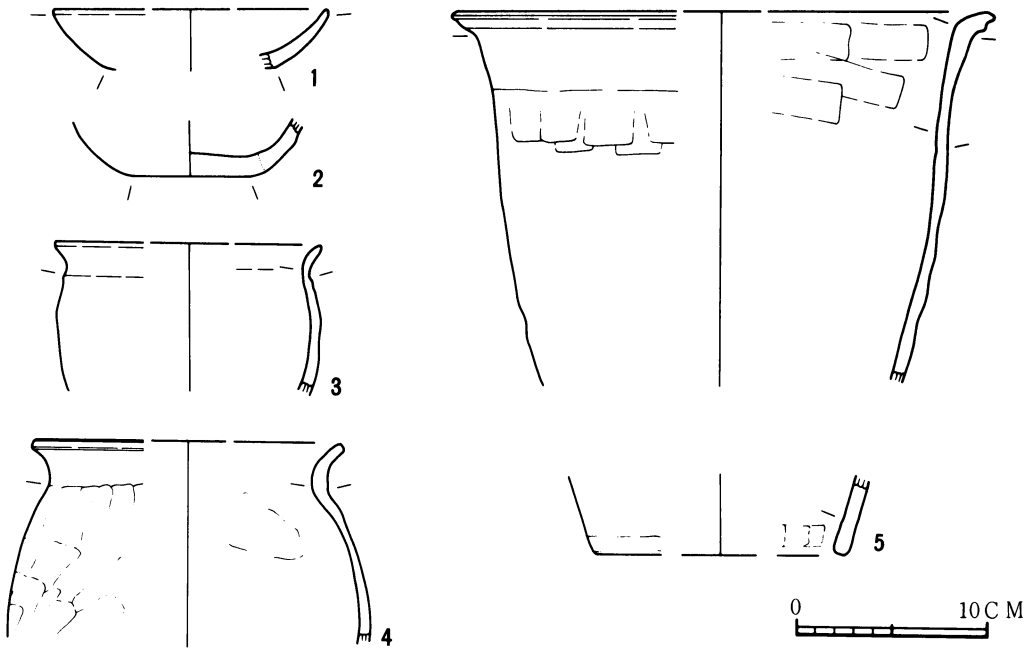
第102図 005 (08) 号住居跡カマド実測図

第23表 005(008)号住居跡出土遺物表 (第101・103・156図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/5	(14.2) (8.7) 残3.1	外面ヨコヘラナデ。内面ナデ。	暗黒褐色	135。
2	壺	底部のみ。	— 6.0 残2.8	紐積み。外・内面ナデ。	暗茶褐色	良好。191, 125, 136, 201, 222。

3	小型甕	1/3	(13.9) — 残7.5	紐積み。外・内面ヨコタテヘラケズリ。のちナデ。口縁ヨコナデ。	暗褐色	砂質。146, 169。
4	小型壺	口縁部1/4。 胴部以下を 欠く。	(16.4) — 残10.1	紐積み。外面タテヘラケズリ。内面 ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	暗黒褐色	石英粒を多く含むが良好。142, 145, 156, 170, 176。
5	甗	口縁部1/5と 底部	(28.2) 13.1 (24.0)	紐積み。外面タテヘラケズリ、のち、 下位ナデ。内面ヨコヘラケズリ、の ち下位ナデ。口縁部ヨコナデ。	暗黄褐色	良好。183, 185, 186, 192, 194, 218, 214, 230。
6	不明	第156-4	鉄製品	第39表参照		107。
7	鉄鋏	第156-5	鉄製品	第39表参照		182。



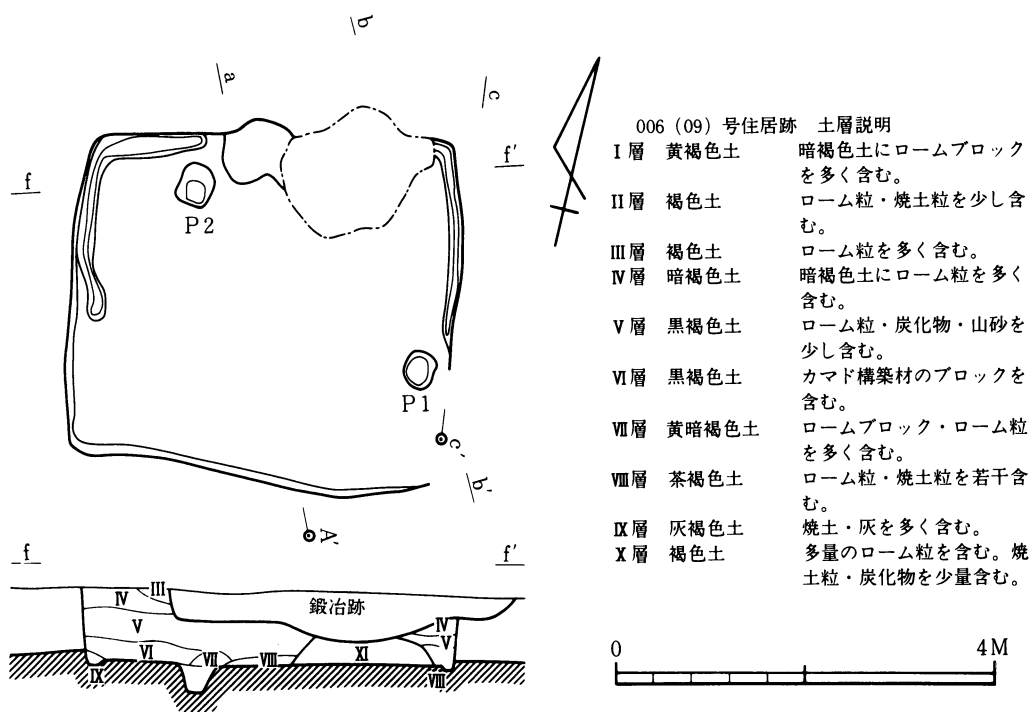
第103図 005 (08) 号住居跡出土遺物実測図

006 (09) 号住居跡 (第 91・104~106・155 図)

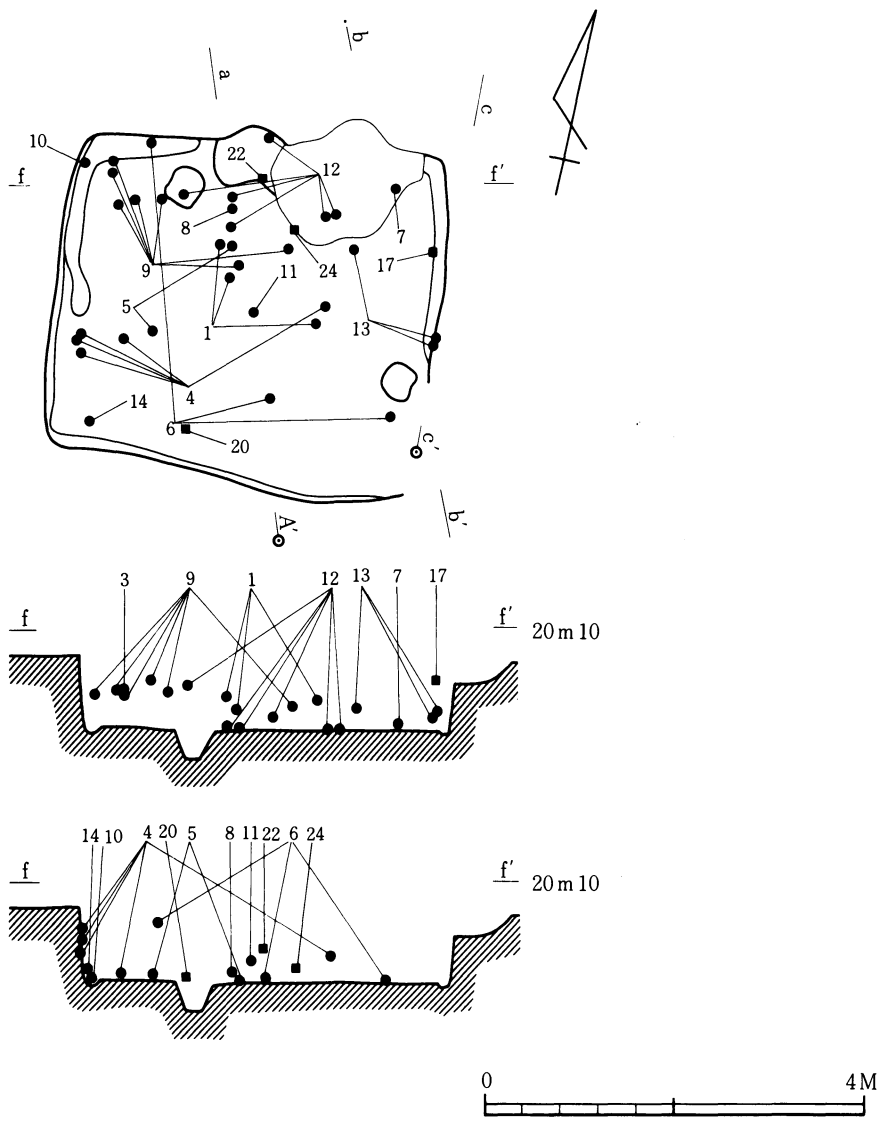
2 E区より検出調査された。主軸方位はN-12°-Wである。住居跡内堆積土は 10 層に分けられた。ローム粒を多く含む。鍛冶跡の「取り上げ保存」を行ったため、カマドの調査はできなかった。005・007 号住居跡を切り、後述の鍛冶跡に切られている。

平面形は、3.36×4.06 m で、横に長い形状を呈す。床面積は、3.1×3.7 m で約 11.47 m²を計る。床面の標高は、約 19.08 m で、005 号住居跡よりも約 12 cm、同じく 007 号住居跡よりも 1 cm 低い。周溝は全周していないが、一部にみられる。幅は約 10~15 cm で、深さは 5~10 cm を計る。柱穴は 2 本検出された。P-1 は深さ 14 cm、P-2 は 18 cm である。床面には若干の凹凸がみられる。遺物は住居跡内覆土全体からみられる。

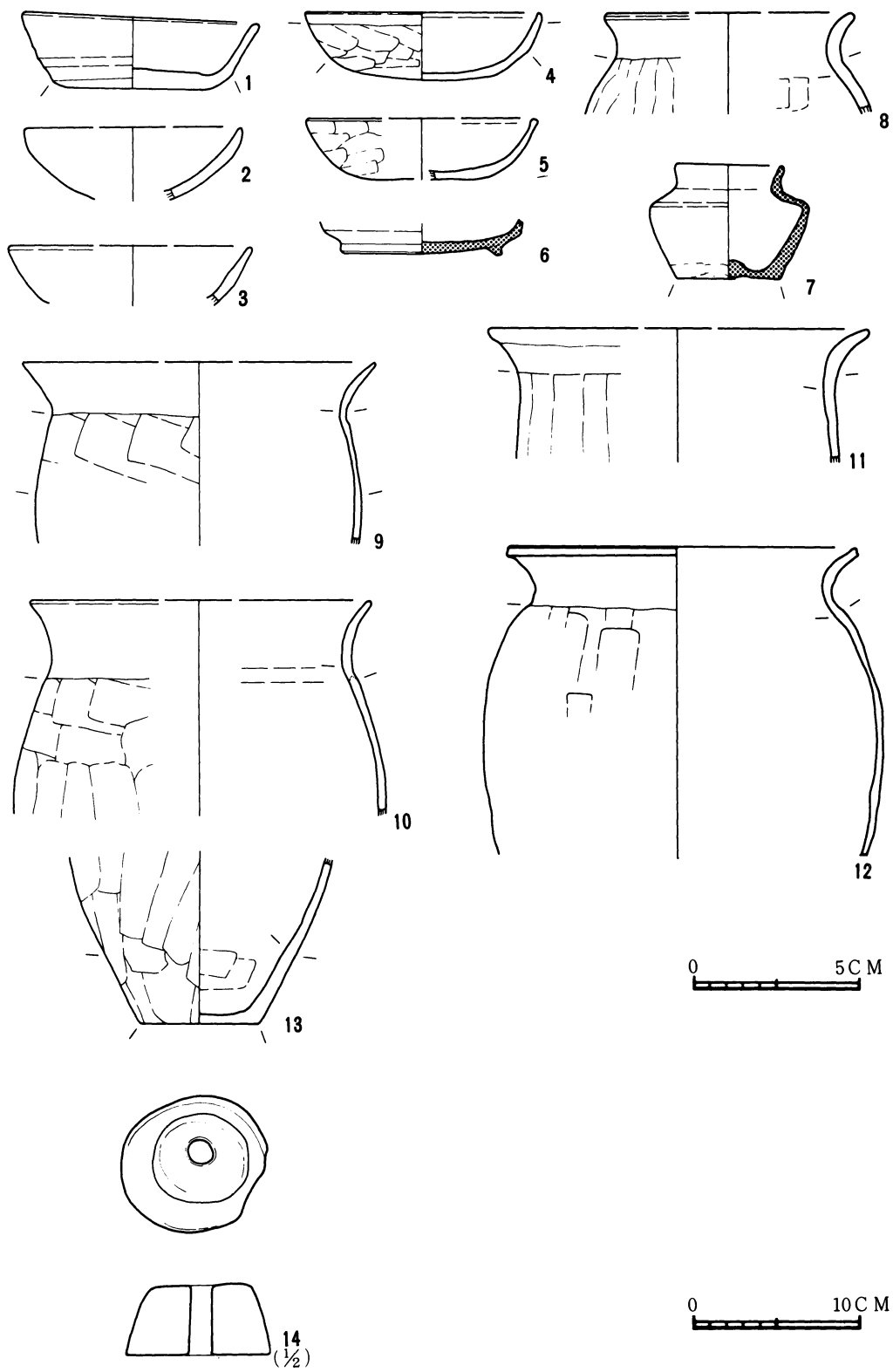
カマドは、北壁中央に構築されている。鍛冶跡の「取り上げ保存」のため調査はできなかったが、掘込み幅 70~80 cm、奥行き 20 cm ほどとおもわれる。住居跡の大きさに比して小さいもののようである。



第104図 006 (09) 号住居跡実測図



第105图 006 (09) 号住居跡遺物出土状況図



第106図 006(09)号住居跡出土遺物実測図

第24表 006(009)号住居跡出土遺物表 (第105・106・155図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	ほぼ完形	14.2 7.9 4.3	紐積み。外面ヨコナデ。内面ナデ。 底部回転ヘラケズリ。底部周囲回転 ヘラケズリ。	白灰色	砂粒を多く含む。須恵 質。145, 237, 239。
2	坏	1/4	(12.9) — 残4.3	外面ナデ, 内面ミガキ。	暗褐色	良好。429。カマド内出 土。表面が磨滅してい る。
3	坏	口縁部1/3	14.4 10.1 3.4	外面ヘラケズリ。のちナデ。	明褐色	緻密で良好。195。表面 が磨滅している。
4	坏	ほぼ完形	14.4 — 4.1	成形不明。底部は粘土板?。外面ヘ ラケズリ、のちミガキ。内面ミガキ。 口縁部ヨコミガキ。	暗褐色 一部黒色	緻密で良好。310, 05, 280, 299, 300。
5	坏	1/2	(14.0) 6.8 3.6	紐積み。外面ヨコヘラケズリ。のち ヨコミガキ。内面ミガキ。	明褐色	緻密で良好。263, 281。
6	高台付 坏	底部3/4	— 9.8 残1.9	紐積み。坏部回転ナデ。底部回転ヘ ラ切り。高台は張り付け。	暗青灰色	良好。須恵器。105, 292。
7	小型壺	完形	6.5 6.8 6.2	ロクロ成形?。底部周囲ヨコヘラケ ズリ。	灰褐色	砂質で石英を含む。須 恵器。439。
8	小型壺	口縁部1/4	(14.7) — 残6.0	成形不明。外面タテヘラケズリ。内 面ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	暗黄褐色	緻密で良好。338, 426。 カマド内出土。
9	甕	口縁部1/4。 胴部上位1/ 2。	(21.0) — 残10.5	紐積み。外面上位ヨコヘラケズリ。 中位右下りヘラケズリ。内面ヨコナ デ。	暗褐色	砂質だが良好。399, 366, 90, 26, 89, 397。
10	甕	口縁部3/4。 胴部上位1/ 2。	(20.5) — 残12.5	紐積み。外面上位右から左ヨコヘラ ケズリ。中位下から上タテヘラケズ リ。内面ヨコヘラナデ。のちナデ。 口縁部ヨコナデ。	暗褐色	石英粒を多く含むが良 好。394, 452。

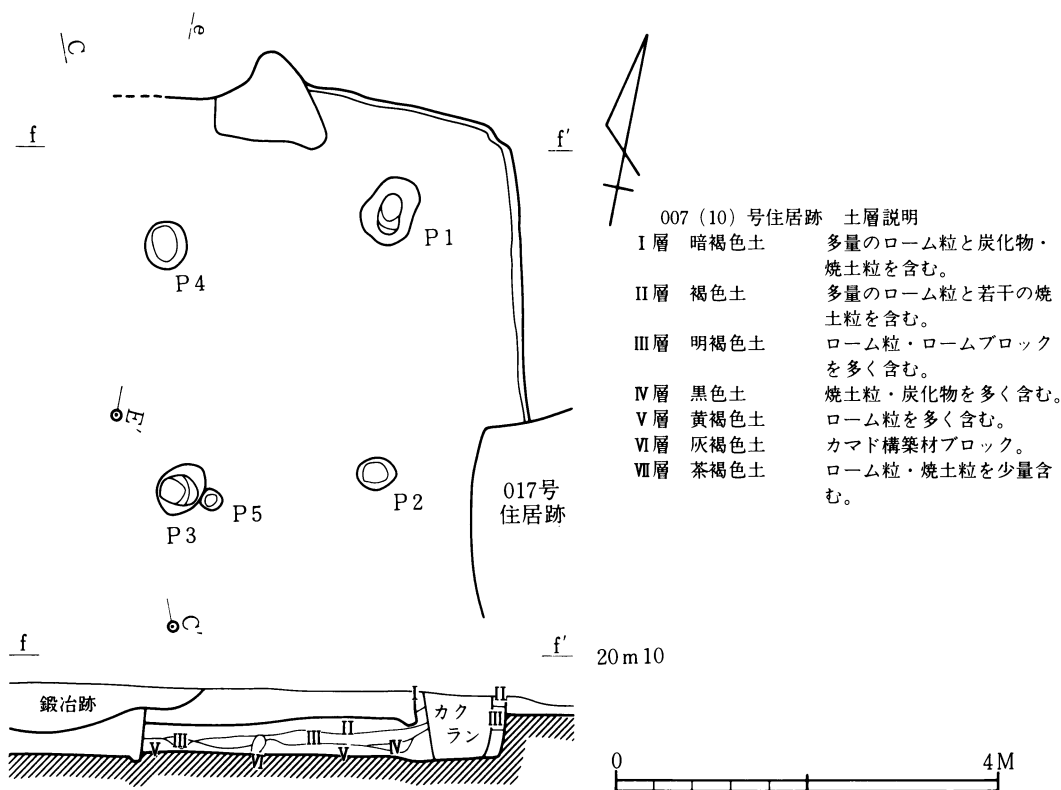
11	甕	口縁部1/4	(23.0) — 残7.7	外面タテヘラケズリ。内面ナデ。口縁部ヨコナデ。	暗褐色	良好。331。
12	甕	口縁完形。胴部一部欠く。	20.8 — 残18.2	紐積み。外面タテヘラケズリ。のちタテヘラナデ。内面ナデ。口縁部ヨコナデ。		精製されており、良好。392, 100, 361, 369, 380, 391, 444, 441。
13	甕	底部4/5。胴部一部。	— 7.0 9.7	紐積み。外面タテヘラケズリ。底部周囲ヨコヘラケズリ。底部静止ヘラケズリ。内面上位ナデ。下位ヨコヘラナデ。底部指頭オサエ。	暗黒褐色	良好。87, 37, 84。
14	紡錘車	ほぼ完形石製品	上2.8 下4.3 高2.1	外面丁寧なつくり。全体に丸味をおびている。		309。
15	不明	第155-7	鉄製品	第38表参照		437。
16	不明	第155-8	鉄製品	第38表参照		273。
17	不明	第155-9	鉄製品	第38表参照		119。
18	不明	第155-10	鉄製品	第38表参照		443。
19	不明	第155-11	鉄製品	第38表参照		440。
20	不明	第155-12	鉄製品	第38表参照		274。
21	不明	第155-13	鉄製品	第38表参照		00。
22	リング状	第155-14	鉄製品	第38表参照		47。
23	鎌	第155-15	鉄製品	第38表参照		449。
24	不明	第155-16	鉄製品	第38表参照		240。
25	不明	第155-17	鉄製品	第38表参照		412。

007 (010) 号住居跡 第 91・107～110・156 図)

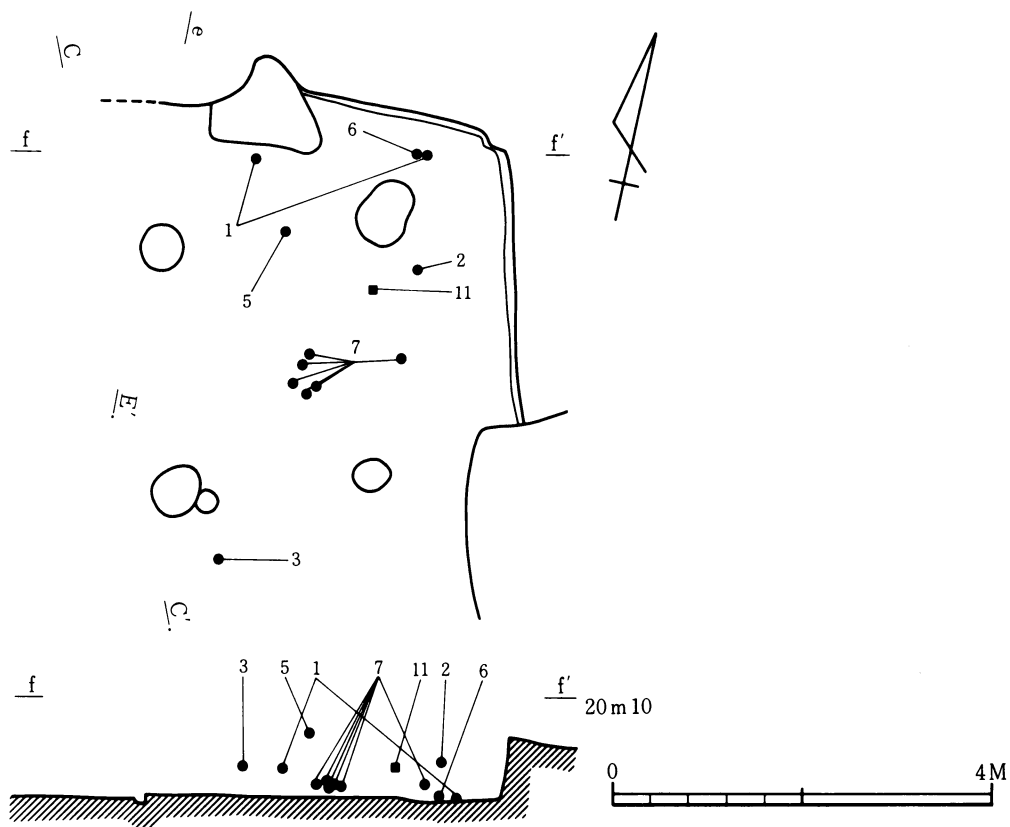
2 E・2 F区より検出調査された。主軸方位はN-16°-Wである。住居跡内覆土は7層に分けられる。ローム粒・炭化物を含む。東北隅に攪乱が入っている。

004号住居跡を切り、003・006号住居跡に切られている。017号住居跡とは平面的には切り合いを有するが、新旧関係は不明である。南壁は検出できなかった。平面形は、一辺が5.5mほどの正方形を呈すものと推定される。床面の標高は、約19mで、004号住居跡よりも約55cm低く、003号住居跡とは約25cmの差がある。周溝は検出されなかった。柱穴は5本検出され、P-1、P-2、P-3、P-4が主柱穴と思われる。深さはそれぞれ64、15、36、43cmである。P-5はP-3の副木的なものであろう。遺物は床面から浮いた状態で出土している。

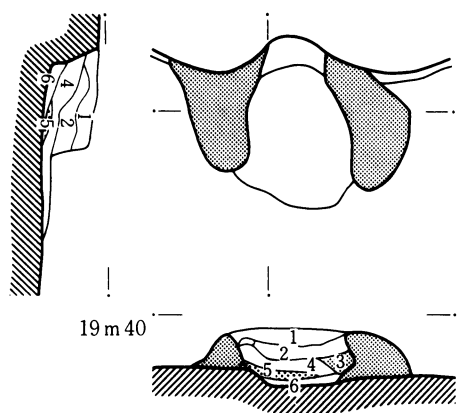
カマドは、北壁中央に構築されている。カマド上部は003号住居跡により削られている。掘込み幅80cm、奥行き20cmを計る。カマド内堆積土は6層に分けられる。煙道の立ち上がりは急である。



第107図 007 (10) 号住居跡実測図



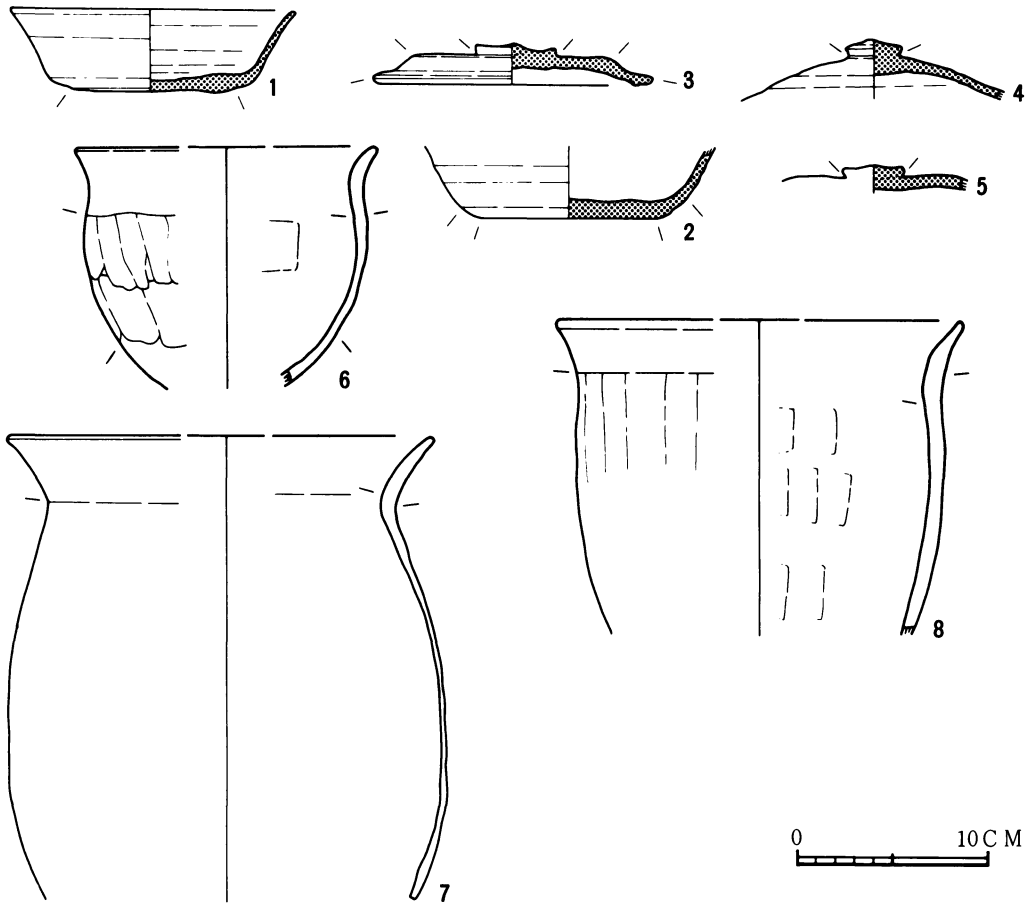
第108図 007 (10) 号住居跡遺物出土状況図



007 (10) 号住居跡 カマド土層説明

- | | | |
|----|-------|---------------------------|
| 1層 | 暗褐色土 | 褐色土粒を若干含む。 |
| 2層 | 暗赤褐色土 | 焼土ブロックを主として、
灰・炭化物を含む。 |
| 3層 | 灰黒色土 | 少量の褐色土・山砂を含む。 |
| 4層 | 灰黒色土 | 灰黒色の灰を主とする。焼
土を若干含む。 |
| 5層 | 暗赤褐色土 | 2層に類似。やや焼土粒が
少ない。 |
| 6層 | 暗褐色土 | ローム粒を主とする。 |

第109図 007 (10) 号住居跡カマド実測図



第110図 007(10)号住居跡出土遺物実測図

第25表 007(010)号住居跡出土遺物表 (第108・110・156図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	2/3	14.8 8.5 4.5	紐積み。外・内面ヨコ回転ナデ。外面底部回転ヘラケズリ。	暗灰色	金雲母を多く含む。砂粒を含む。須恵器。90, 69。
2	坏	1/2	— 6.1 残3.8	紐積み。外・内面回転ナデ。底部回転ヘラ切り。底部周囲回転ヘラケズリ。	暗灰褐色	金雲母片を多く含む。須恵質。165。
3	蓋	口縁部一部 欠く。	14.2 — 2.2	紐積み、のちなデ。体部上面回転ヘラケズリ。	暗黒褐色	雲母片を含む。須恵質。24。

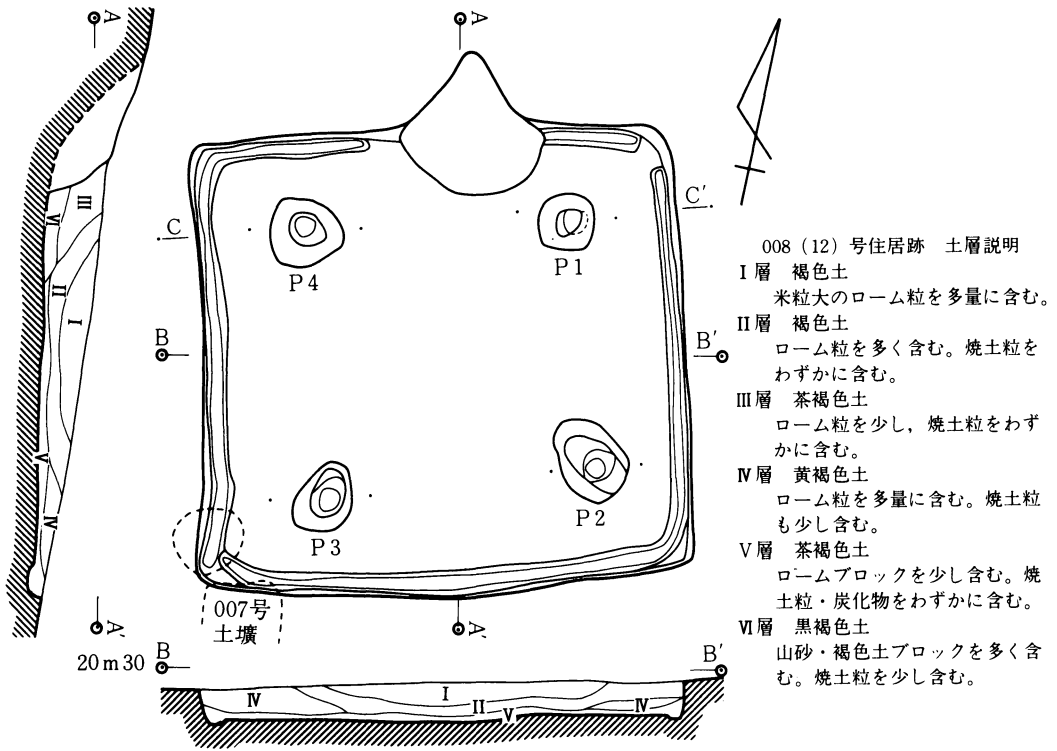
4	蓋	宝珠部分	上2.9 — 3.2	内・外面ヨコナデ。	灰褐色	良好。須恵器。00。
5	蓋	宝珠部分	上4.0 — 高1.7	内・外面ナデ。	暗灰褐色	雲母片を含む。須恵器。44。
6	小型壺	1/3	(15.6) — 残12.3	紐積み。外面上位タテヘラケズリ。中位ヨコヘラケズリ、下位ナデ。内面ヨコヘラケズリ、のちナデ。口縁部ヨコナデ。	暗黒褐色	良好。胴部下位二次焼成あり。89。
7	甕	口縁部1/3。 胴部1/4	(21.0) — 残16.0	紐積み。外面タテヘラケズリ。内面ナデ。口縁ヨコナデ。	暗褐色	砂質だが良好。磨滅多い。14, 13, 17, 25。
8	甕	口縁部。 胴部1/3。	21.0 — 残16.0	紐積み。外面タテヘラケズリ、のちナデ。内面ヨコヘラケズリ、のちナデ。口縁部ヨコナデ。	暗褐色	砂質だが良好。93。カマド内出土。
9	鎌	第156-6	鉄製品	第39表参照		40。

008 (012) 号住居跡 (第111~115・156区)

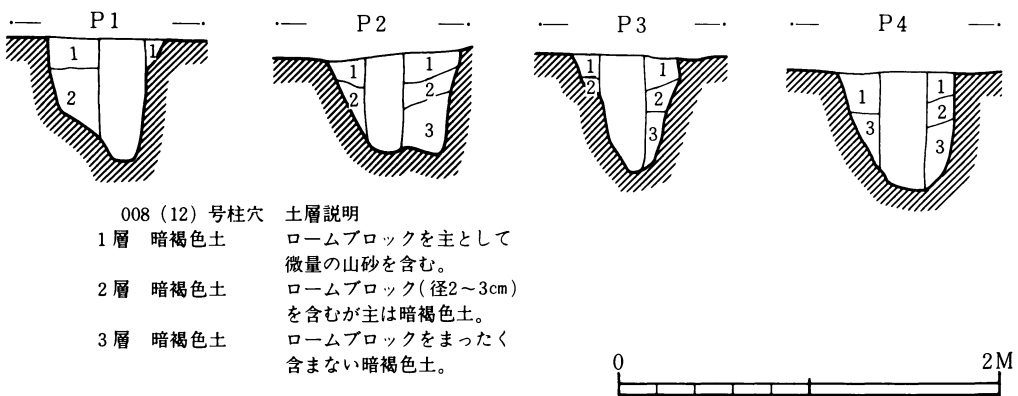
2 F区より検出調査された。主軸方位はN-15°-Wである。住居跡内覆土は6層に分けられる。全体にローム粒を含む。

平面形は、4.76×5.04 mで、やや横に長い形状を呈す。床面積は、4.32×4.56 mで約19.7 m²を計る。壁高はそれぞれ45, 11, 45, 86を計る。床面の標高は、約19.8 cmである。周溝は東北隅及び南西隅とカマド部分をのぞきめぐる。幅はそれぞれ8, 10, 12, 8 cmで、深さは3, 8, 9, 6 cmである。柱穴は4本検出され、すべてが主柱穴と思われる。P-2, P-3は住居跡の中心にむかって多少細長い形状をしている。深さはそれぞれ136, 128, 132, 122 cmを計る。柱穴内の覆土は3層に分けられる。遺物は図化できたものが17点出土したが、床面より10~20 cmほど浮いているものが多かった。16・17の甕形土器はカマド内から出土した。

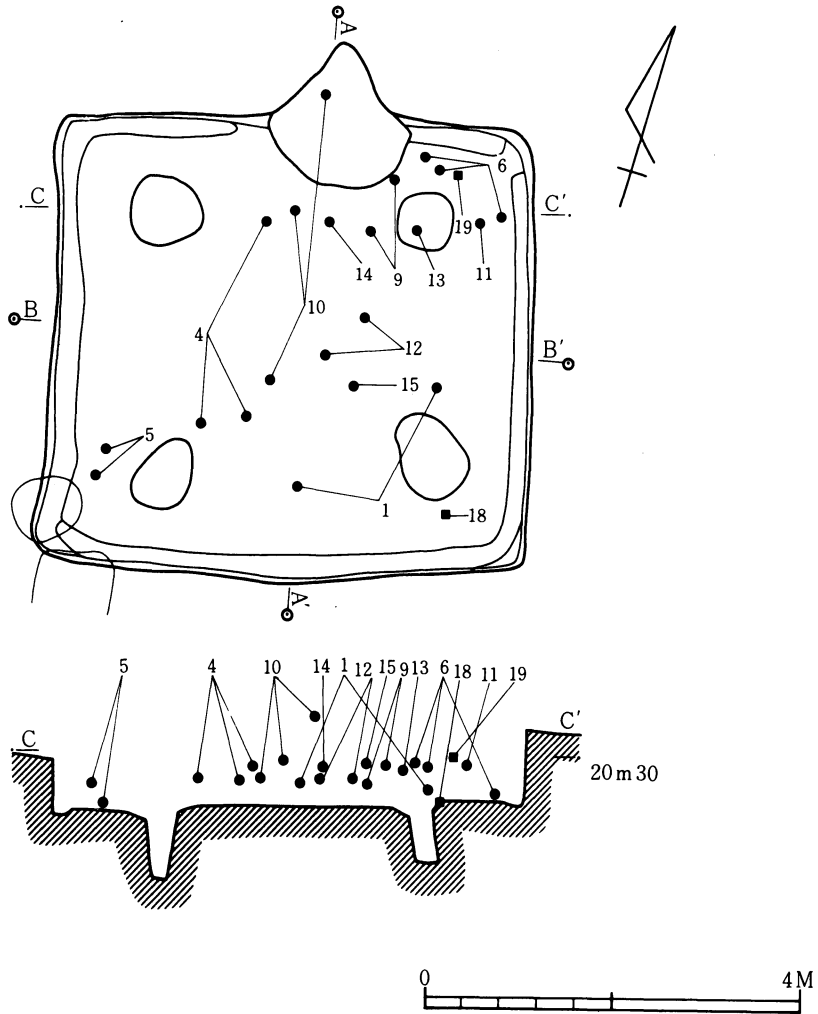
カマドは、北壁中央に構築されていた。掘込み幅80 cm、奥行き68 cmを計る。カマド内堆積土は8層に分けられた。天井部はそのまま崩落した状況を呈しており、廃棄された早い段階で埋没したことが推察される。



第111図 008 (12)号住居跡実測図



第112図 008 (12)号住居跡柱穴土層断面図

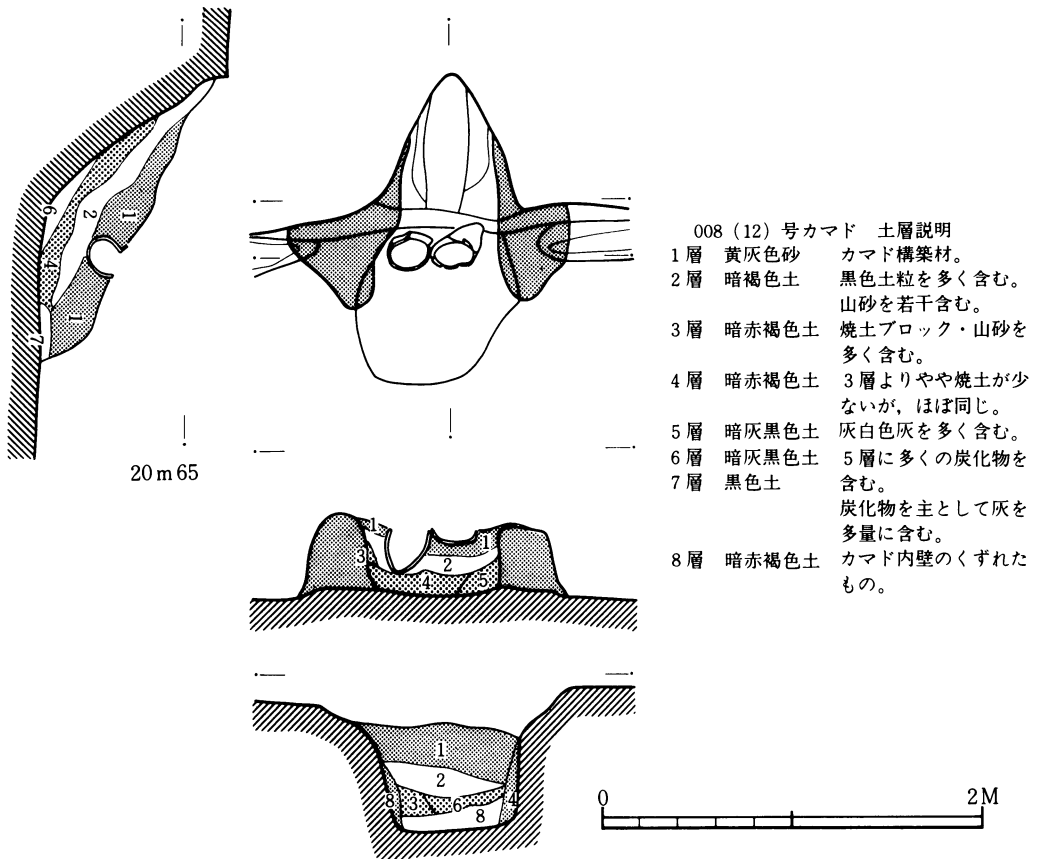


第113図 008(12)号住居跡遺物出土状況図

第26表 008(012)号住居跡出土遺物表 (第113・115・156図)

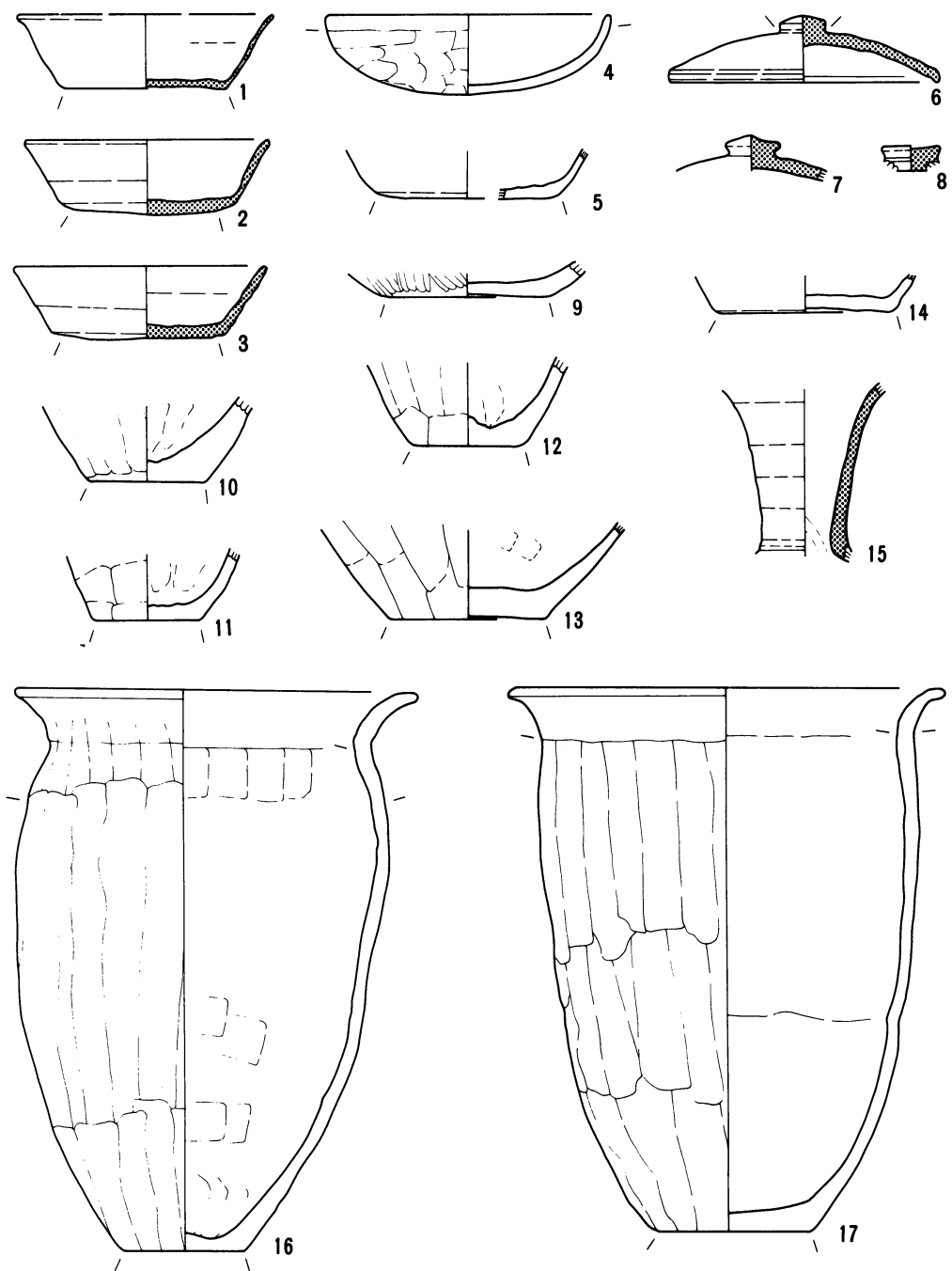
() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/3	(14.2) 9.0 4.2	紐積み。外・内面回転ナデ。底部静止ヘラ切り。	暗灰褐色	良好。須恵器。44, 13。
2	坏	口縁一部欠く。	13.2 7.8 4.1	成形不明(紐積み?)。外面回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。	灰褐色	雲母を含む。須恵器。500。カマド内出土。



第114図 008 (12) 号住居跡カマド実測図

3	坏	口縁一部欠く。	13.9 8.5 4.3	外面回転ナデ。底部静止ヘラ切り。	明灰褐色	精製されており良好。須恵器。458。カマド内出土。
4	坏	3/4	15.7 — 4.4	紐積み。外面ヨコヘラケズリ。内面ミガキ。	明褐色	緻密で良好。61, 53, 86。
5	坏	1/3	— 10.2 残2.7	紐積み。底部ヘラケズリのちヘラ整形。体部内面ヨコナデ。	暗灰褐色	普通。111, 197。
6	蓋	完形	15.2 — 3.7	回転ナデ。	暗青灰色	良好。須恵器。345, 167, 423。
7	蓋	宝珠及び蓋の一部	15.3 — 2.4	外面ヨコナデ。内面ナデ。	暗灰褐色	良好。須恵器。503。

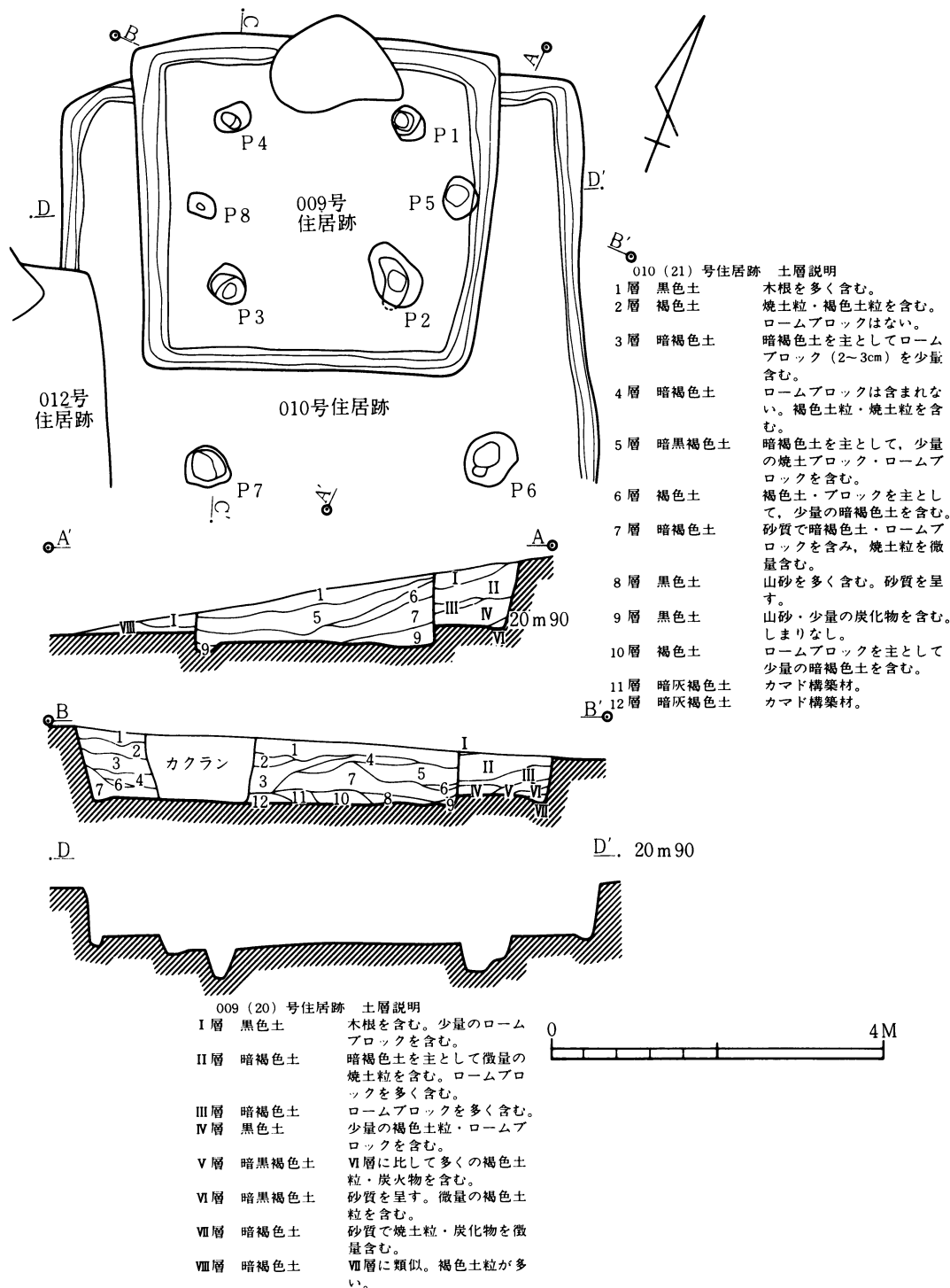


第115图 008(12)号住居跡出土遺物実測図

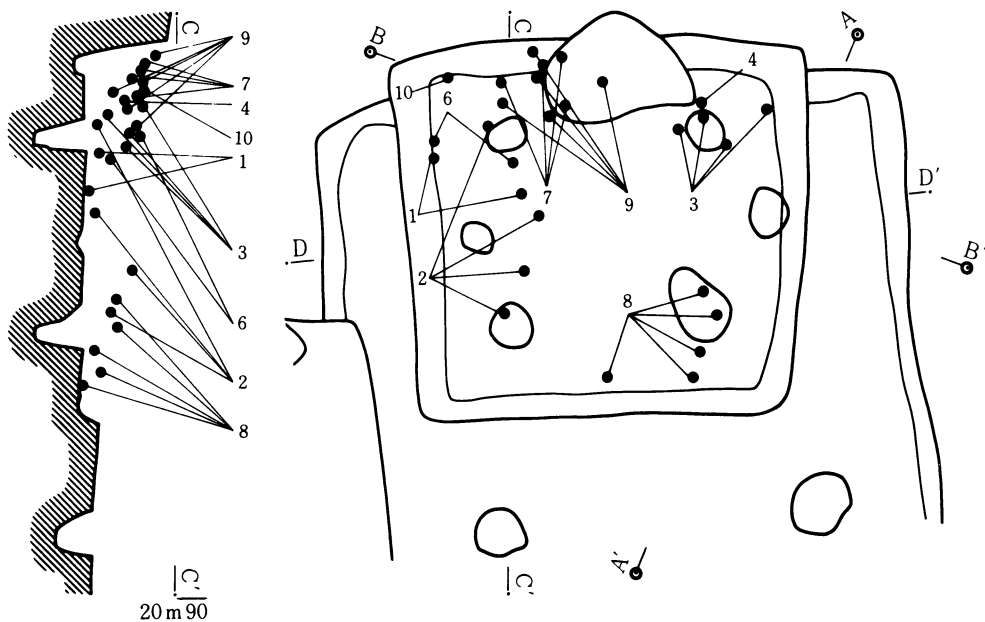
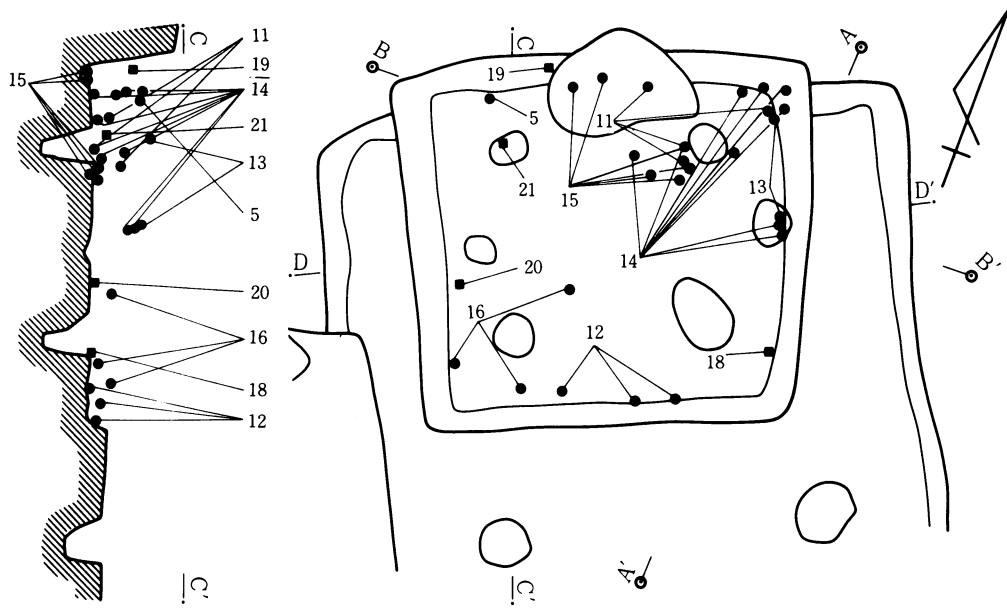
8	蓋	宝珠のみ	— — 1.4	全面ナデ。	明褐色	良好。須恵器。503。
9	壺	底部のみ	— 9.4 —	紐積み。外面タテミガキ。内面ナデ。底部木葉痕あり。	暗黄褐色	良好。344, 212。
10	甕	底部のみ	— 6.3 4.3	外面タテヘラケズリ。内面ヨコヘラケズリ。	暗黒褐色	良好。93, 66, 417。
11	甕	底部のみ	— 5.7 残3.5	紐積み。外面ヨコヘラケズリ。内面ヘラナデ。底部静止ヘラケズリ。	暗褐色	良好。27。
12	甕	底部のみ	— 6.0 残4.5	成形不明。外面タテヘラケズリ。内面ヨコヘラケズリ。底部ヘラケズリ整形。	暗褐色	良好。332, 378。
13	壺	底部のみ	— 8.7 残5.0	紐積み。外面ヘラケズリ。内面ヨコヘラケズリ、のちナデ。底部ヘラ切り、のちヘラ整形。	暗褐色	緻密で良好。37。
14	坏	底部のみ	— 9.7 残2.0	底部巻き上げ。外・内面ナデ。	暗茶褐色	良好。98, 00。
15	長頸壺	頸部	— — 残9.7	巻き上げ。外・内面ヨコナデ。胴部接合部分指頭によるオサエ。	暗灰褐色	良好。須恵器。320。
16	甕	口縁部のほぼ全体と胴部上位1/4を欠く。	22.2 5.6 30.4	紐積み。外面タテヘラケズリ。内面上位ヨコヘラケズリ。中位ヨコヘラケズリ。のちナデ。下位ヨコヘラケズリ。二次焼成を強くうけている。	黒褐色	砂質で不良。659。
17	甕	1/3	24.5 8.9 29.5	紐積み。外面タテヘラケズリ。内面ナデ 口縁部ヨコナデ。二次焼成を付けてもろい。	暗褐色	砂質で不良。459。カマド内出土。
18	鉄釘	第156-7	鉄製品	第39表参照		175。
19	鎌	第156-8	鉄製品	第39表参照		05。

009 (020) 号住居跡 (第 116~119・157 図)

2 E区より検出調査された。主軸方位はN-22°-Wである。住居跡内覆土は12層に分けられる、全体に砂質で、ロームブロックを含む。



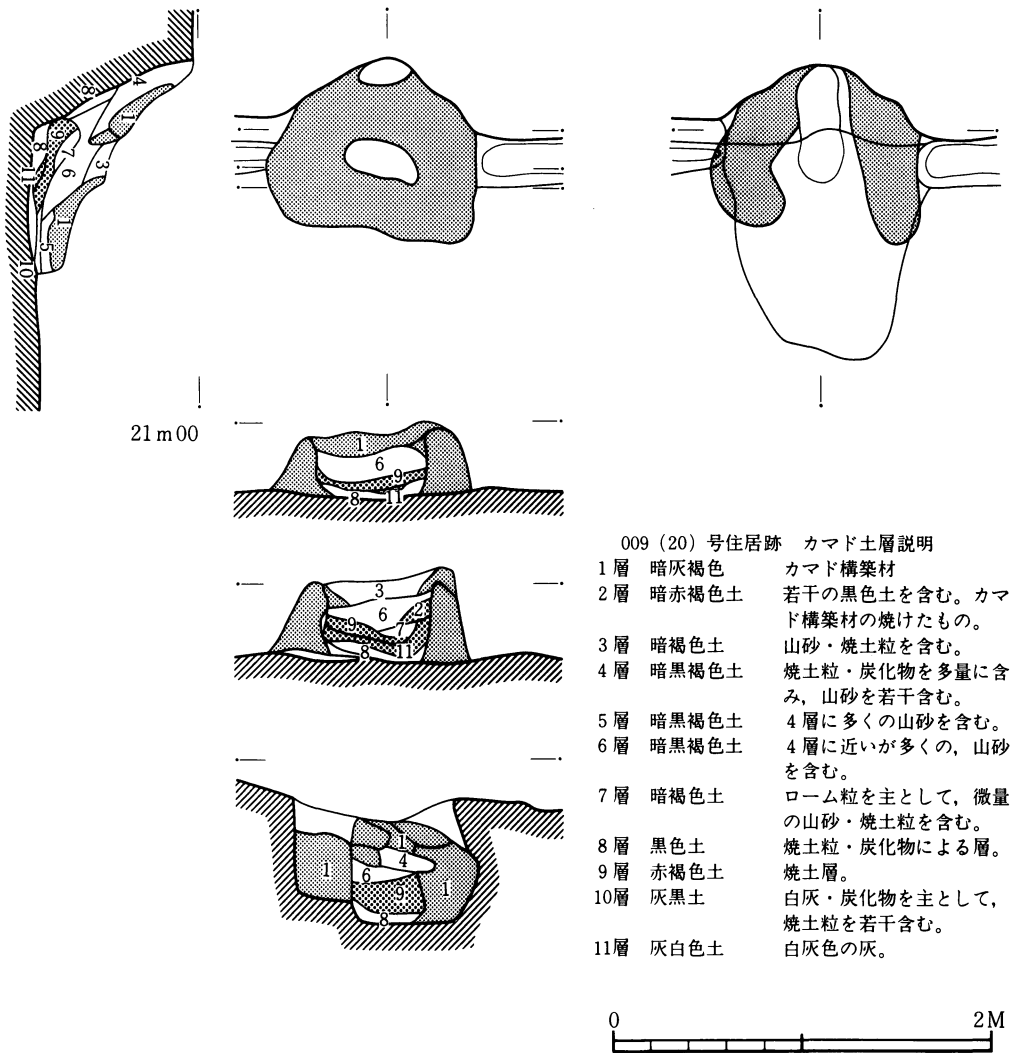
第116図 009 (20)・010 (21) 号住居跡実測図



第117图 009 (20) 号住居跡遺物出土狀況图

010号住居跡を切って構築している。平面形は、3.92×4.2mを計り、ほぼ正方形を呈す。床面積は、3.34×3.62mで約12㎡を計る。壁高は、東北隅が73cm、西北隅が98cmである。床面の標高は、約19.9mである。010号住居跡の床面との差は約10cmほどである。床面は平らでなく凹凸があり、中央部が全体に高くなっている。周溝はカマドの部分のをぞき全周する。幅はそれぞれ20, 16, 24, 18cmで、深さは13, 10, 16, 10cmである。柱穴は4本検出された。P-1, P-2, P-3, P-4がそれで主柱穴である。深さはそれぞれ51, 62, 48, 46cmを計る。遺物は、17点が図化できた。カマドの両脇からの出土が多いが、出土レベル・接合関係を勘案すると、流入によるものが多いと思われる。

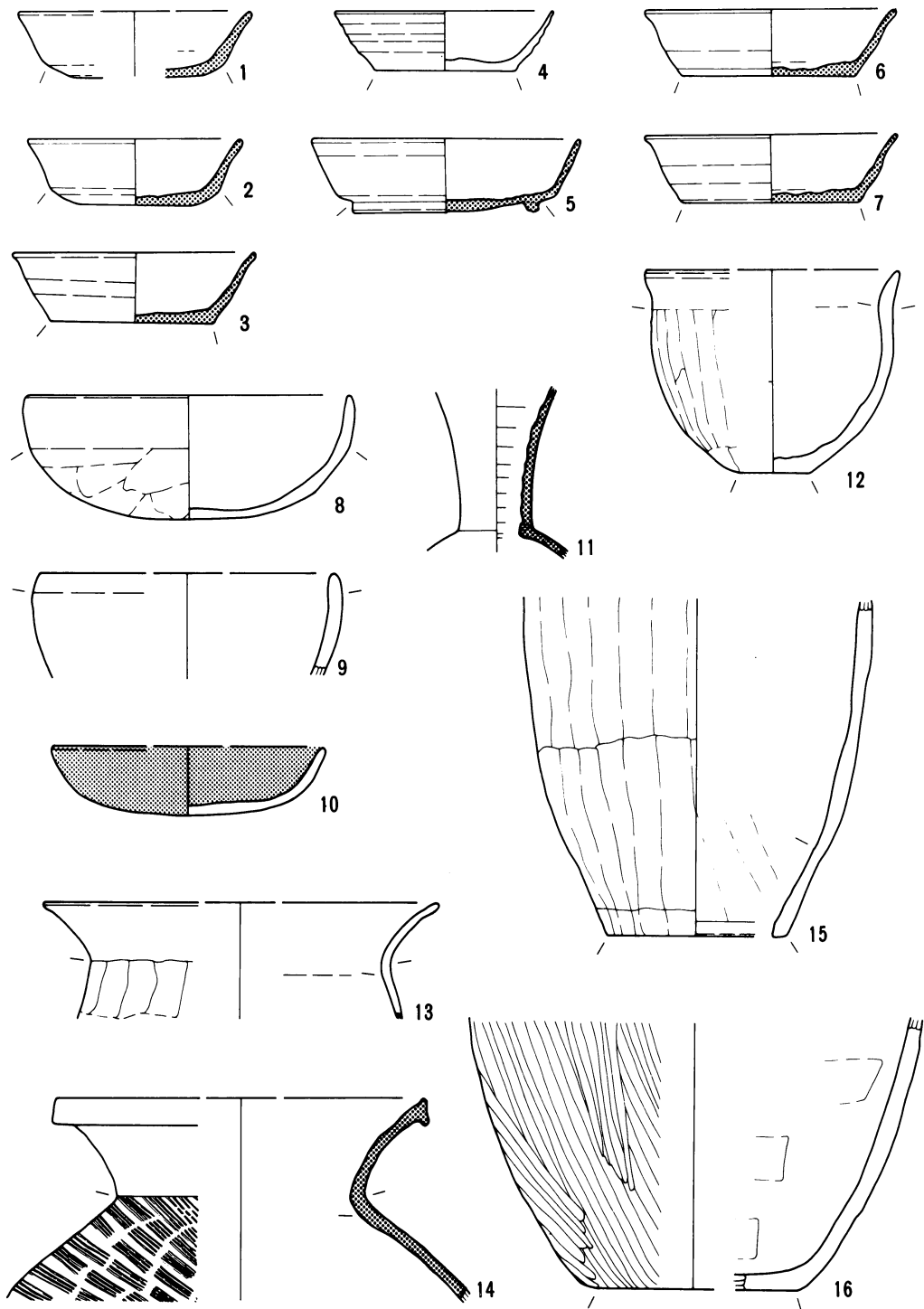
カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅1.05m、奥行き30cmを計る。残存状態は良好である。煙道部及び掛口も残存している。カマド内堆積土は11層に分けられる。煙道部掘り形は、箱形で2段に掘込んでおり、煙道と掘り形の間は山砂で充塞している。



009 (20) 号住居跡 カマド土層説明

- | | | |
|-----|-------|-------------------------|
| 1層 | 暗灰褐色 | カマド構築材 |
| 2層 | 暗赤褐色土 | 若干の黒色土を含む。カマド構築材の焼けたもの。 |
| 3層 | 暗褐色土 | 山砂・焼土粒を含む。 |
| 4層 | 暗黒褐色土 | 焼土粒・炭化物を多量に含み、山砂を若干含む。 |
| 5層 | 暗黒褐色土 | 4層に多くの山砂を含む。 |
| 6層 | 暗黒褐色土 | 4層に近いが多くの、山砂を含む。 |
| 7層 | 暗褐色土 | ローム粒を主として、微量の山砂・焼土粒を含む。 |
| 8層 | 黒色土 | 焼土粒・炭化物による層。 |
| 9層 | 赤褐色土 | 焼土層。 |
| 10層 | 灰黒土 | 白灰・炭化物を主として、焼土粒を若干含む。 |
| 11層 | 灰白色土 | 白灰色の灰。 |

第118図 009 (20) 号住居跡カマド実測図



第119图 009(20)号住居跡出土遺物実測図

第27表 009(020)号住居跡出土遺物表 (第117・119・157図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/3	(13.5) 7.7 3.8	成形不明。外・内面ヨコ回転ナデ。 底部ヨコヘラケズリ。	黒灰色	石英粒を含む。須恵器。 207, 311。
2	坏	1/3	12.4 6.4 3.8	外・内面回転ナデ。底部巻き上げ、 のち回転ヘラ整形。	暗灰褐色	良好。48。須恵器。07, 126, 128。
3	坏	口縁部一部 欠く。 底部中央一 部欠く。	14.1 9.4 4.0	底部紐積み。のちヘラ整形。体部回 転ナデ。	明灰褐色	砂粒を多く含むが良 好。須恵器。330, 03, 09, 12, 14。
4	坏	底部1/2。 体部1/5。	12.7 8.0 3.5	底部巻き上げ。のちヘラ整形。体部 回転ナデ。	暗褐色	やや荒いが良好。15。
5	高台 付坏	1/2	15.5 10.7 4.2	成形不明。外・内面ヨコ回転ナデ。 高台は張り付け。	暗灰褐色	良好。須恵器。361。
6	坏	1/2	14.5 10.0 3.8	底部巻き上げ。のちヘラ整形。外・ 内面ヨコ回転ナデ。	暗灰青色	良好。須恵器。166, 11。
7	坏	1/2	14.6 10.0 3.9	底部巻き上げ。のちヘラ整形。体 部ナデ。	暗灰褐色	砂粒を含む。須恵器。 283, 13, 67, 141。
8	埴	1/3	18.8 — 6.9	成形不明。口縁部ヨコナデ。内面 ナデ、外面ヘラケズリ。	暗褐色 スス付着	良好。226, 21, 22, 23, 100。
9	鉢	1/3	16.7 — 残5.9	紐積み。外面タテヘラナデ。内面ヨ コナデ。口縁部ヨコナデ。	暗黒褐色	砂質だが良好。346, 36, 57, 64, 180。
10	埴	1/4	(15.7) — 3.8	紐積み。外面ヘラケズリ。のちナデ。 内面ナデ。	暗赤褐色	良好。赤彩あり。62。
11	長頸壺	頸部1/2	— — 9.8	巻き上げ。外・内面回転ナデ。肩部・ 頸部の一部に自然釉あり。	暗青灰色	良好。須恵器。298, 32。

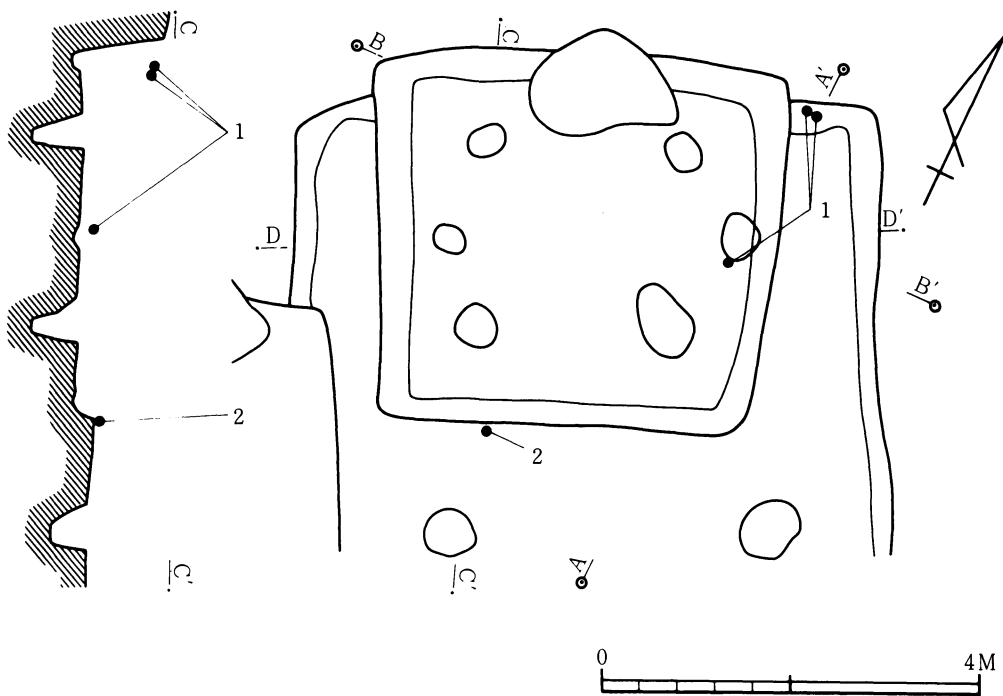
12	小型鉢	1/2	(14.7) 4.0 11.4	紐積み。外面上位タテヘラケズリ。下位ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面ナデ。底部静止ヘラ切り。	暗褐色	砂質だが良好。19, 18, 110, 111。
13	甕	口縁部1/3	(22.7) — 残6.5	紐積み。外面ヨコヘラケズリ。内面ナデ。口縁部ヨコナデ。	暗褐色	砂質だが良好。13, 09, 320。
14	甕	1/4	20.0 — 11.5	紐積み。外面タタキ。内面青海破文。口縁部ヨコナデ。外面自然釉あり。	暗灰青色	良好。須恵器。318, 42, 70, 224, 293, 305, 310, 319, 356。
15	甗	胴部中位より下1/2	— 10.1 19.0	紐積み。外面タテヘラケズリ。内面タテヘラケズリ。のちタテミガキ。下位左下りヘラナデ。のちミガキ。	暗赤褐色	良好。355, 67, 69, 75。
16	壺	胴部下位1/3	— (12.0) 残15.6	紐積み。外面竹管様工具によるミガキ。内面ヨコヘラケズリ。のちナデ。	暗褐色	石英粒を多量に含み砂質だが良好。84, 52, 85。
17	不明	第157-1	鉄製品	第40表参照		205。
18	刀子	第157-2	鉄製品	第40表参照		53。
19	刀子	第157-3	鉄製品	第40表参照		120。
20	刀子	第157-4	鉄製品	第40表参照		268。
21	刀子	第157-5	鉄製品	第40表参照		234。

010 (021) 号住居跡 (第116・120・121 図)

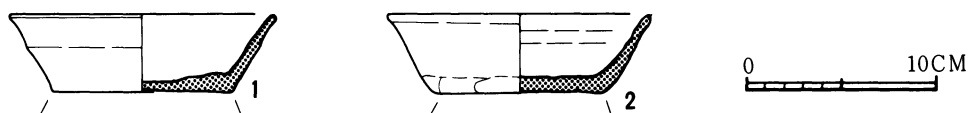
009号住居跡と重複している。主軸方位はN-26°-Wである。南壁は検出されなかった。南西隅を012号住居跡に切られ、カマドは009号住居跡に切られている。住居跡内覆土は8層に分けられる。

平面形は、一辺6mほどで、ほぼ正方形を呈すと思われる。床面積は、約30㎡になると推測される。床面の標高は、約20mで、009号住居跡よりも約10cm高い。周溝は検出された範囲では全周するものと推定される。幅は15~20cmで、深さは5~10cmである。柱穴は4本検出された。P-5, P-6, P-7, P-8の4本で、すべて主柱穴である。深さはそれぞれ33, 50, 34, 34cmを計る。遺物で図化できたものは2点のみであった。

カマドは検出されなかった。北壁中央部分を009号住居跡によって切られているので、この部分に構築されていたものと推定される。



第120図 010(21)号住居跡遺物出土状況図



第121図 010(21)号住居跡出土遺物実測図

第28表 010(021)号住居跡出土遺物表 (第120・121図)

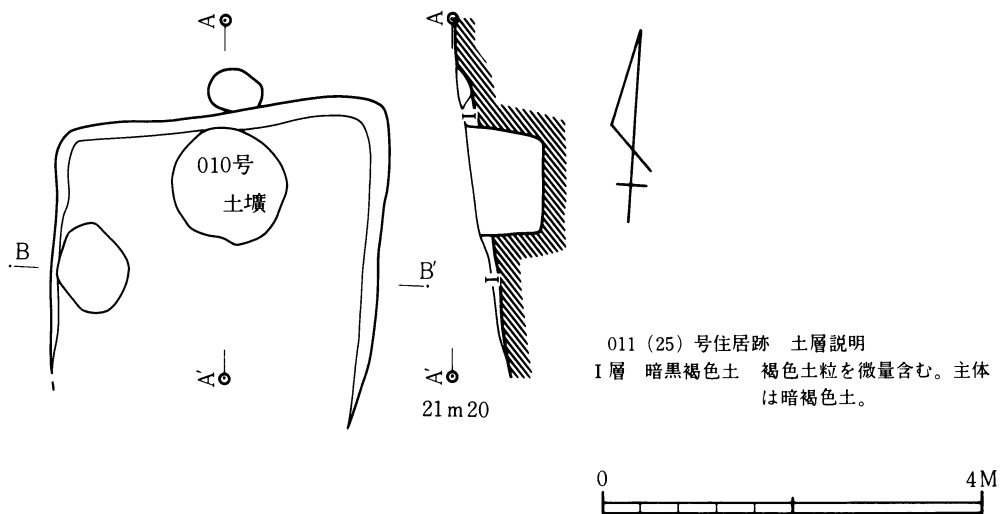
() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/2	14.0 6.4 4.0	底部巻き上げ。回転ヘラ整形。体部 回転ヨコナデ。	暗灰褐色	良好。須恵器。44, 43, 02-06。
2	坏	口縁一部欠 く。	14.0 3.7 4.0	紐積み。外・内面ヨコ回転ナデ。底 部静止ヘラケズリ。底部周囲ヨコヘ ラケズリ。	暗灰褐色	金雲母を多少含む。須 恵器。112。

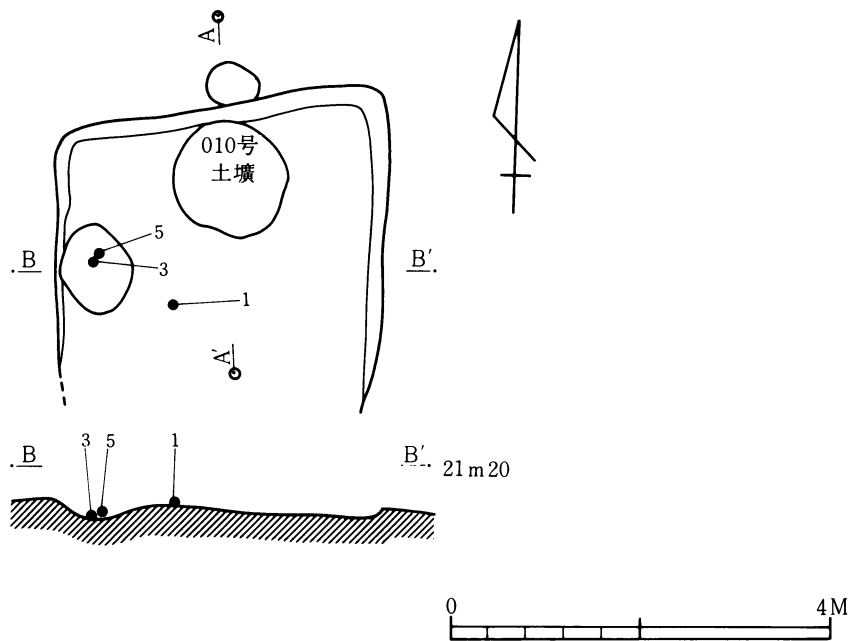
011 (025) 号住居跡 (第 122~124・158 図)

2 D区より検出調査された。主軸方位はN-93°-Wである。住居跡内覆土は1層のみで、褐色土を主体とする。010号土壌と重複している。掘込みが浅く、南側の立ち上がりは検出できなかった。

平面形は、一辺が約3.5mの正方形を呈すと思われる。西壁中央の内側に、深さ20cmの落ち込みがあり、瓦片が出土している。覆土は焼土を含み、カマドの火床部のごとき状況である。

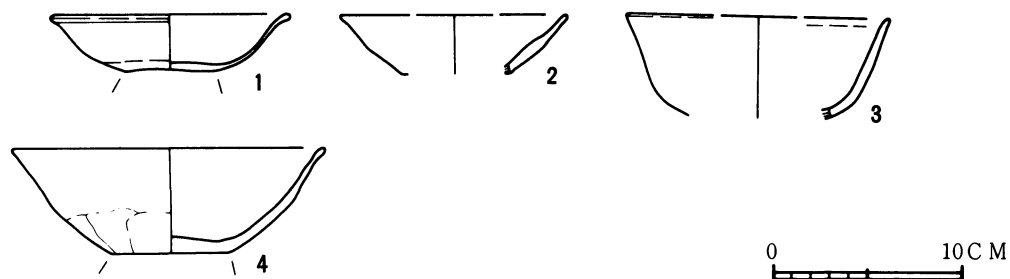


第122図 011 (25) 号住居跡実測図



第123図 011 (25) 号住居跡遺物出土状況図

床面は南側にむかって傾斜しており、一定ではない。一般的な住居跡の様な生活跡とは考えられない。遺物は4点が図化できた。



第124図 011(25)号住居跡出土遺物実測図

第29表 011(025)号住居跡出土遺物表 (第123・124・158図)

() 復元

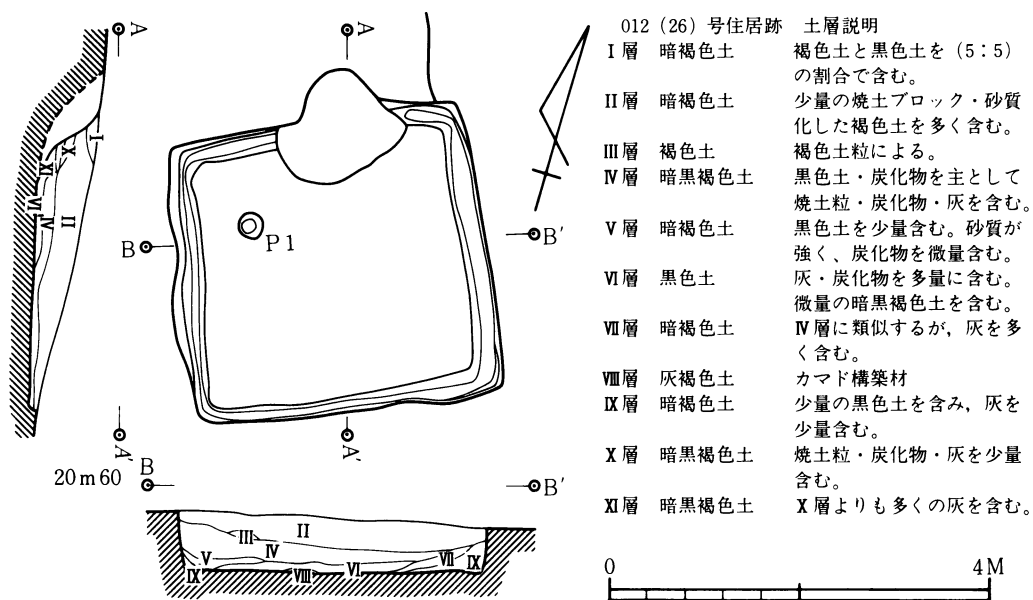
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	完形	12.2 4.8 3.0	外・内面回転ナデ。底部糸切り。底部周囲ヨコヘラケズリ。	暗褐色	良好。01。
2	坏	1/3	(12.1) 5.4 3.1	外面回転ヨコナデ。内面ナデ。底部回転糸切り。全体にゆがみがある。	暗褐色	砂質だが良好。03。
3	坏	1/4	(14.0) 7.0 5.3	外面回転ヨコナデ。内面ミガキ。	暗褐色	良好。02。
4	坏	1/4	16.2 6.3 5.5	成形不明。外面ヨコナデ。下位ヨコヘラケズリ。内面ミガキ。底部静止ヘラケズリ。	暗茶褐色	砂粒を多く含む。03。
5	瓦	第158-1	平瓦	第41表参照		01。

012 (026) 号住居跡(第 125～128・157 図)

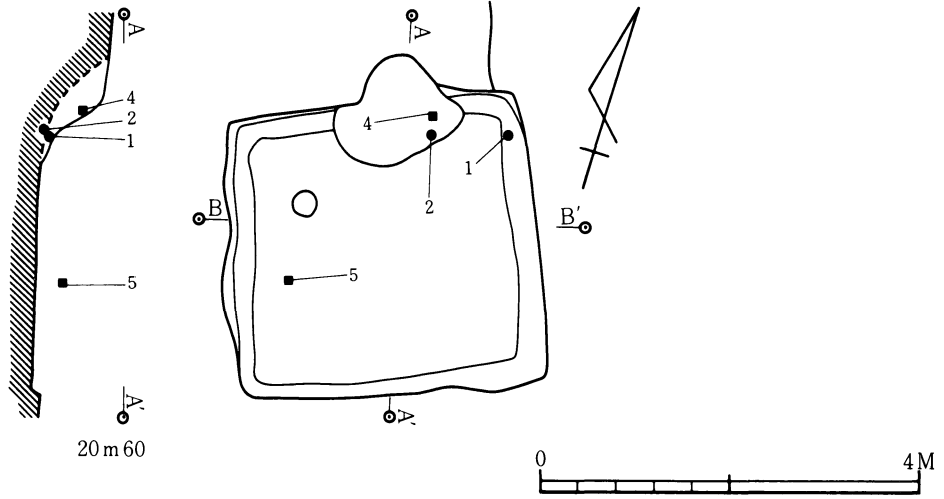
2 E区より検出調査された。主軸方位はN-26°-Wである。住居跡内覆土は 11 層に分けられたが、黒色度が強く、炭化物、焼土粒を多く含む。

東壁が010号住居跡を切っている。平面形は、3.02×3.32 mで、ほぼ正方形を呈す。床面積は、2.6×2.68 mで約7㎡を計る。壁高はカマド脇が約80 cm、南壁が約20 cmである。床面の標高は、約20.1 mを計る。010号住居跡とは約10 cmの差がある。周溝は全周する。幅20～25 cmで、深さは約5 cmを計る。柱穴は1本のみ検出された。深さは、約6 cmで浅い。壁は直線的でなく、雑な掘り形をしている。遺物は少ない。

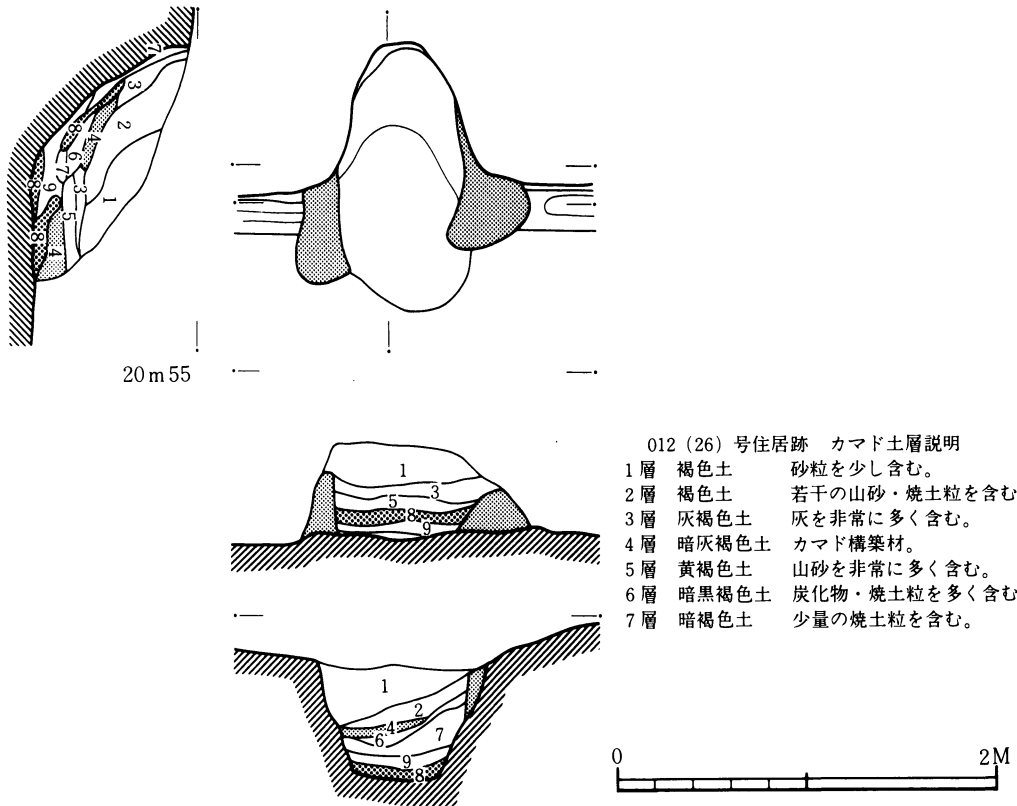
カマドは、北壁中央の若干右寄りに構築されている。掘込み幅約1.1 m、奥行き約0.7 mを計る。カマド内堆積土は7層に分けられた。焼土が約6 cmの厚さに堆積している。



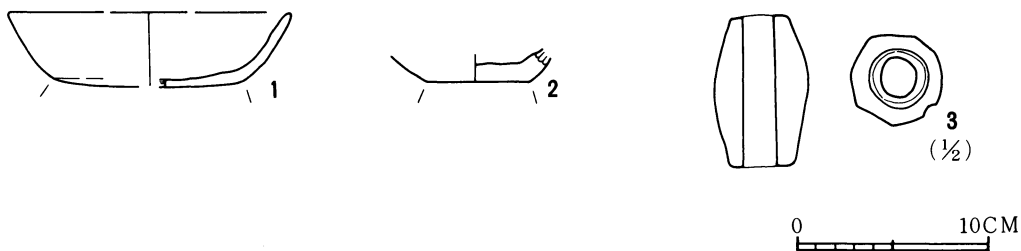
第125図 012 (26) 号住居跡実測図



第126図 012 (26) 号住居跡遺物出土状況図



第127図 012 (26) 号住居跡カマド実測図



第128図 012(26)号住居跡出土遺物実測図

第30表 012(026)号住居跡出土遺物表 (第126・128・157図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/3	(14.6) — 3.9	外・内面ヨコヘラミガキ。外面ヘラケズリ。	暗黄褐色	良好。22。
2	壺	底部のみ	— 5.3 残1.4	巻き上げ。外面ヨコヘラケズリ。内面ナデ。木葉痕あり。	暗黒褐色	砂質だが良好。07。
3	土玉	完形	長 4.0 最大径2.4	丁寧なつくり。外面指頭によるナデ？。	黒褐色	25。
4	不明	第157-6	鉄製品	第40表参照		05。
5	刀子	第157-7	鉄製品	第40表参照		

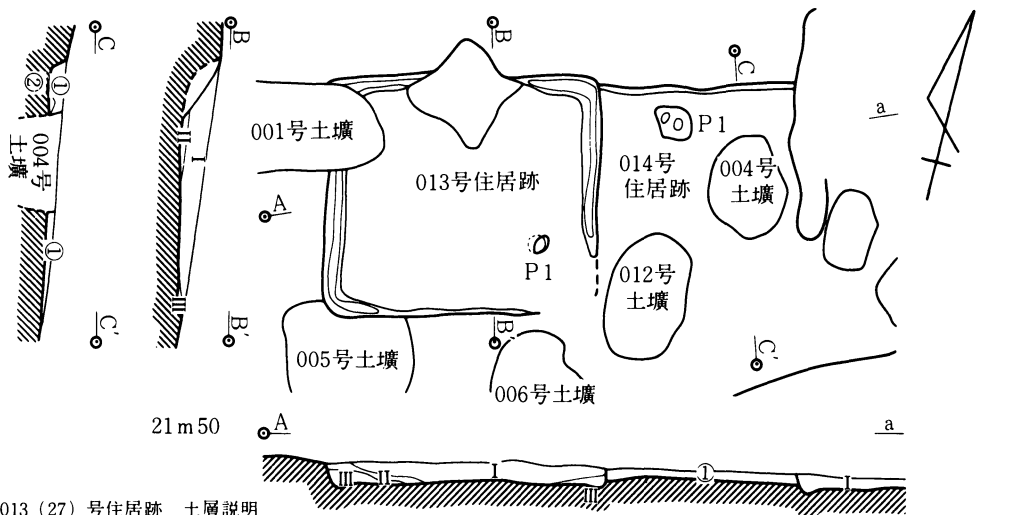
013 (027) 号住居跡 (第 129~132 図)

2 D区より検出調査された。主軸方位はN-15°-Wである。住居跡内覆土は3層に分けられる。全体に褐色土粒を含む。

東壁で014号住居跡と、西壁で001号土壙と、南西隅で005号土壙と切合う。001号土壙よりも先行し、014号住居跡・005号土壙よりも後に構築されている。南東隅の立ち上がりは検出できなかった。

平面形は、2.48×2.84 mで、多少横に長い形状を呈す。床面積は、2.24×2.5 mで約5.6 m²を計る。壁高は、カマド側で31 cm、西壁で22 cmを計る。床面の標高は、約21 mで、014号住居跡とは約10 cmの差がある。周溝は南壁部分をのぞきめぐる。この部分は削平された可能性もある。幅10~15 cm、深さは5~10 cmである。柱穴は1本検出された。深さ約22 cmである。柱穴は住居跡外側から住居跡中央に向って掘られている。遺物は2点図化できた。

カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅約50 cm、奥行き約45 cmを計る。カマド内堆積土は5層に分けられた。



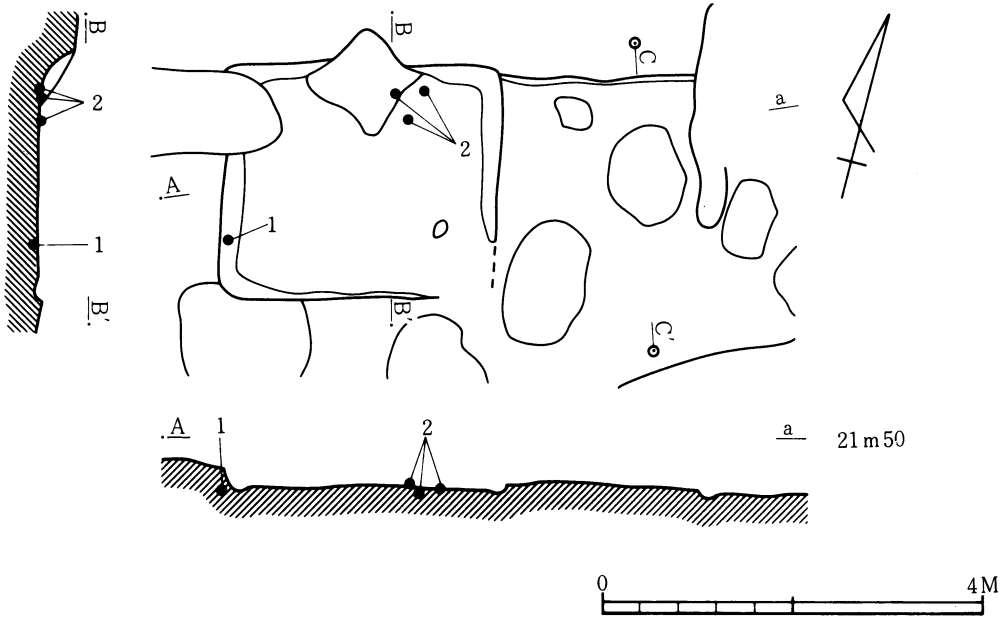
013 (27) 号住居跡 土層説明

- | | | |
|------|-------|--------------------------|
| I層 | 暗黒褐色土 | 褐色土粒を少量含み、カマド砂・焼土粒を微量含む。 |
| II層 | 暗褐色土 | 褐色土粒を主とし、少量の黒色土を含む。 |
| III層 | 褐色土 | ローム粒を主とし、微量の黒色土を含む。 |

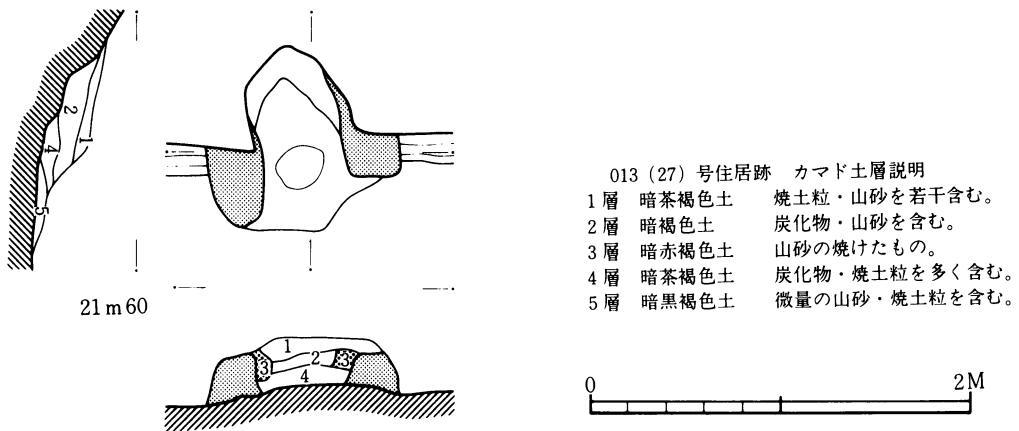
014 (28) 号住居跡 土層説明

- | | | |
|----|------|----------------|
| ①層 | 暗褐色土 | 褐色土に少量の黒色土を含む。 |
|----|------|----------------|

第129図 013(27)・014(28) 号住居跡実測図



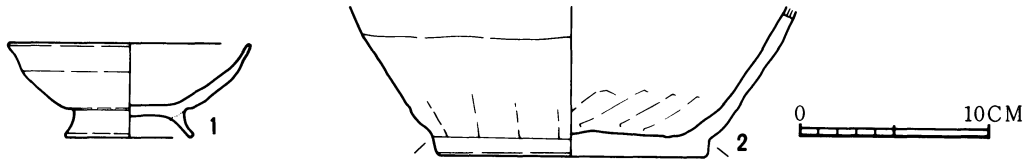
第130図 013 (27) 号住居跡遺物出土状況図



013 (27) 号住居跡 カマド土層説明

- 1層 暗茶褐色土 焼土粒・山砂を若干含む。
- 2層 暗褐色土 炭化物・山砂を含む。
- 3層 暗赤褐色土 山砂の焼けたもの。
- 4層 暗茶褐色土 炭化物・焼土粒を多く含む。
- 5層 暗黒褐色土 微量の山砂・焼土粒を含む。

第131図 013 (27) 号住居跡カマド実測図



第132図 013(27)号住居跡出土遺物実測図

第31表 013(027)号住居跡出土遺物表 (第130・132図)

() 復元

第号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	高台 付坏	体部1/4。 高台部1/2。	12.6 6.5 5.0	紐積み。外面回転ヨコナデ。内面ミ ガキ。輪状の高台張り付け。	暗黒褐色	良好。03。
2	甕	底部及び、 胴部下位。	— 14.3 残7.8	紐積み。外面タテヘラケズリ、のち ナデ。内面上位ナデ。下位ヨコヘラ ナデ。底部ナデ。	暗茶褐色	石英粒を多く含み砂質 で不良。07, 13, 08。

014(028)号住居跡 (第129図)

2 E区より検出調査された。主軸方位は、N-16°-Wである。住居跡内覆土は1層のみが確認できた。褐色土を主体とする土層である。西側を013号住居跡により切られ、東側を015号住居跡によって切られている。住居跡には、004号土壌・012号土壌が重複している。

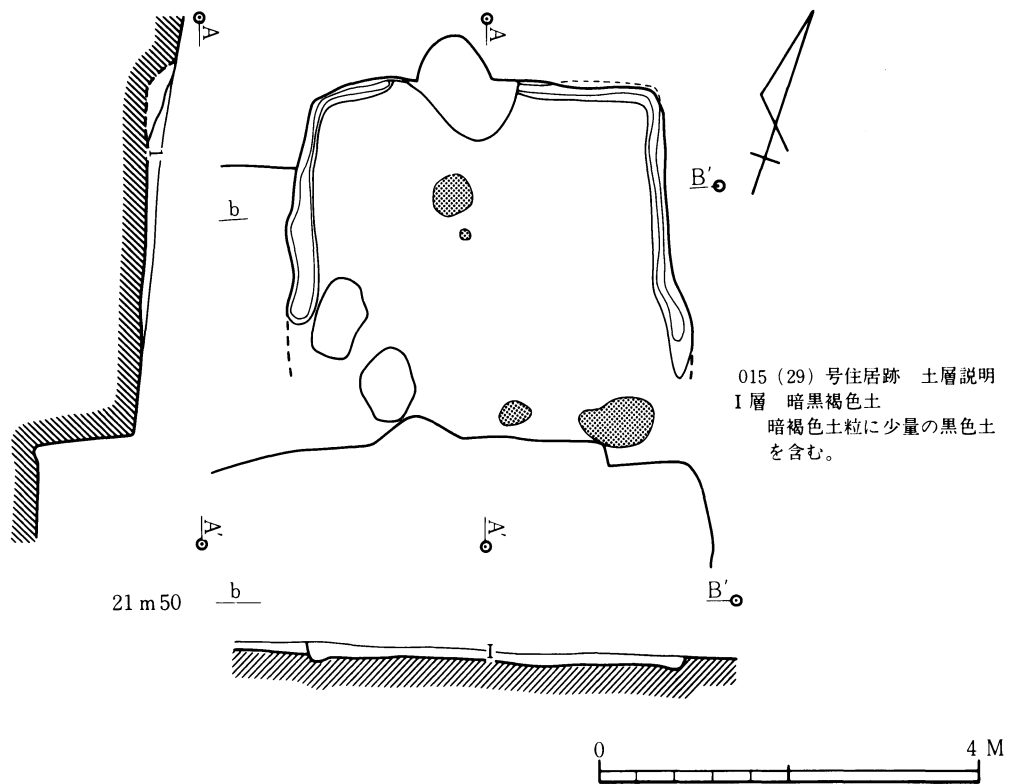
東・西壁と南壁が不明のため形状等は不明である。カマドも検出されなかった。北壁高は約15 cmを計る。床面の標高は、約21.05 mである。床は南に向かって傾斜しており、凹凸がはげしい。周溝は検出されなかった。柱穴は1本検出され、深さは約15 cmである。遺物は出土しなかった。東壁にカマドをもつ住居跡と思われる。

015 (029) 号住居跡 (第 133~136・158 図)

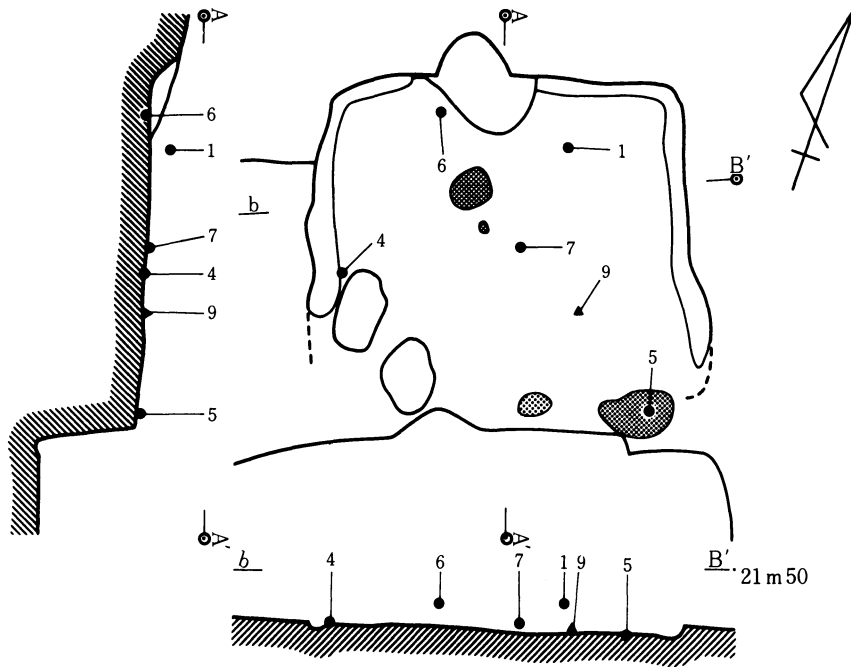
2 E区より検出調査された。主軸方位はN-20°-Wである。住居跡内覆土は1層のみが確認できた。西側を014号住居跡により切られている。南壁の立ち上がりは確認できなかったが、これは009号住居跡によって一部切られている可能性がある。

平面形は、4×4 mのほぼ正方形を呈するものと思われる。床面積は、3.5×3.5 mで約13 m²を計る。床面は水平でなく凹凸がある。床面の4箇所で焼土が充塞された浅いピットが検出された。焼土上面は困くしまっている。鍛冶作業に伴う施設の可能性がある。壁高は東・西・北壁がそれぞれ15, 20, 36 cmである。床面の標高は、約20.9 mで、014号住居跡とは約15 cmの差がある。周溝は、南壁部分とカマド部分をのぞき確認された。幅は10~25 cm, 深さ10~15 cmを計る。柱穴は検出されなかった。遺物は9点が図化できた。8は石製支脚でカマド内から出土した。

カマドは、北壁中央に構築されていた。掘込み幅約58 cm, 奥行き約70 cmを計る。カマド内堆積土は10層に分けられるが、基本土層は7層に分けられる。カマド内から、8の支脚や坏片が出土している。

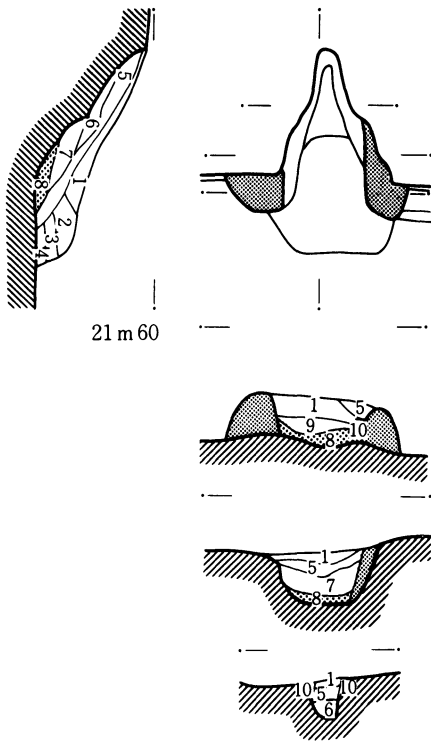


第133図 015 (29) 号住居跡実測図



第134図 015(29)号住居跡
遺物出土状況図

0 4M

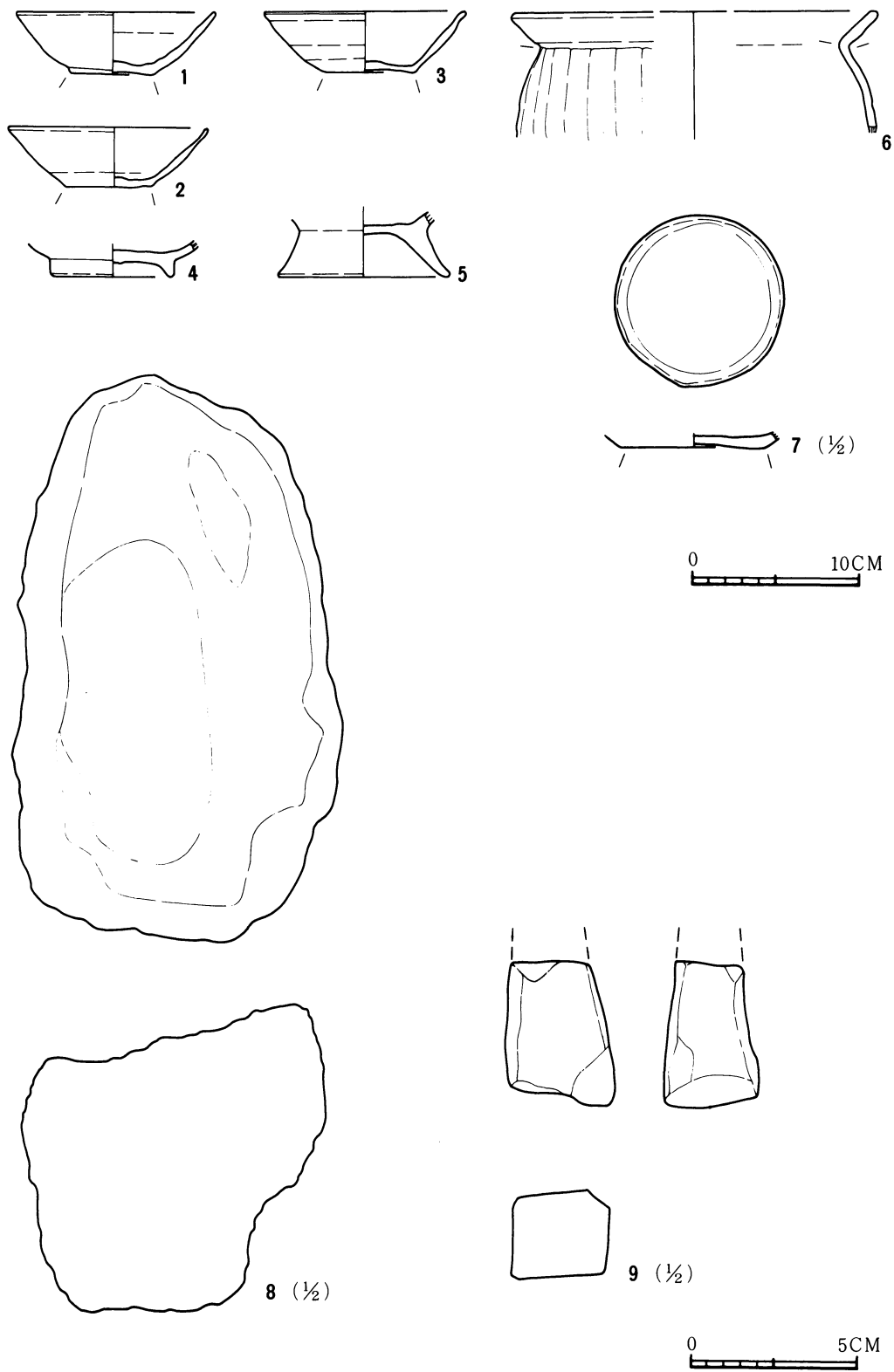


21m 60

- 015(29)号住居跡 カマド土層説明
- | | |
|-----------|-------------------|
| 1層 黄褐色土 | 粘性は弱い。 |
| 2層 褐色土 | 黒色土を少量含み、しまりある。 |
| 3層 褐色土 | 2層よりやや明るい。 |
| 4層 褐色土 | 2層・3層より焼土粒・灰が少ない。 |
| 5層 茶褐色土 | 焼土粒・炭化物を含む。 |
| 6層 褐色土 | ロームブロック・灰を少量含む。 |
| 7層 暗赤褐色土 | 8層に類似。焼土ブロックは少ない。 |
| 8層 赤褐色土 | 焼土粒を多く含む。 |
| 9層 褐色土 | ローム粒・焼土粒を含む。 |
| 10層 暗灰褐色土 | 多量の山砂を含む。焼土は少ない。 |

0 2M

第135図 015(29)号住居跡カマド実測図



第136图 015(29)号住居跡出土遺物実測図

第32表 015(029)号住居跡出土遺物表 (第134・136・158図)

() 復元

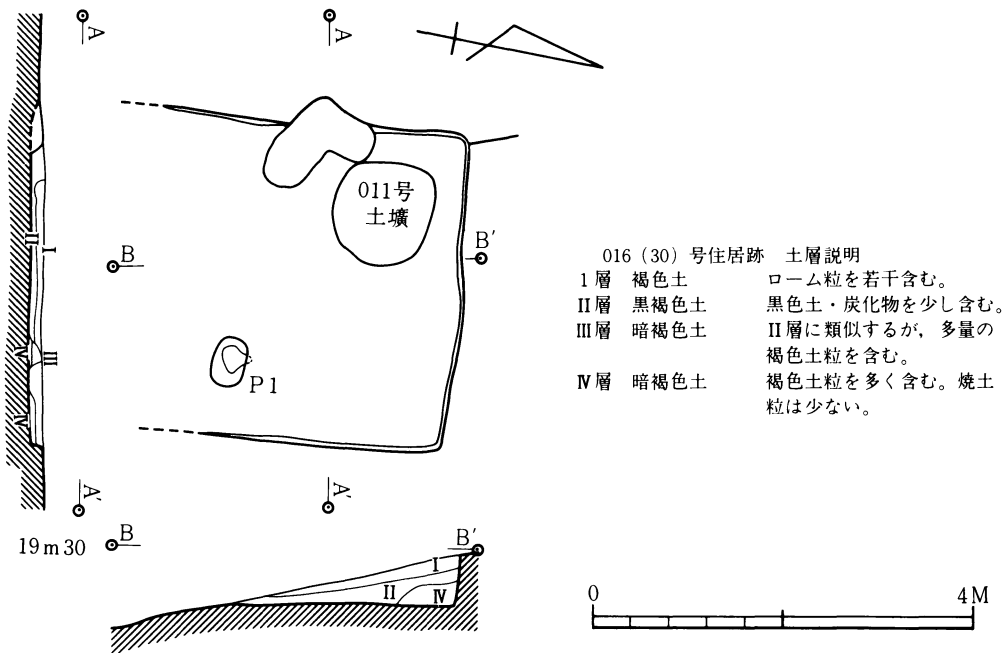
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	体部3/4	11.9 4.9 4.0	紐積み。回転ナデ。底部回転糸切り。	暗褐色	砂質だが良好。42。
2	坏	口縁部一部 欠く。	12.0 5.1 3.6	紐積み。回転ヨコナデ。底部回転糸切り。	暗褐色	良好。63, 56, 57。カマド内出土。
3	坏	1/2	12.2 5.3 3.5	紐積み。外・内面ヨコナデ。底部糸切り。	暗褐色	緻密で良好。66, 52, 57。カマド内出土。
4	高台 付坏	底部のみ	— 7.2 残1.8	紐積み。張り付け高台。外面回転ヨコナデ。	暗黄褐色	良好。50。
5	高台 付坏	脚部のみ	残8.6 10.0 残3.8	脚部と体部を別々に作り接合。外面マメツ多く、調整は不明。	暗茶褐色	砂粒を多く含み不良。18。
6	甕	口縁部1/4	(22.1) — 残7.5	紐積み。外面タテヘラケズリ。内面ヨコヘラケズリ。頸部の稜は明確。口縁部ヨコナデ。	暗茶褐色	良好。48。
7	坏	底部のみ	— 8.2 0.8	外面ナデ。内面は硯へ転用したものと思われる。底部糸切り。	暗茶褐色	良好。43。
8	支脚?	完形 石製品	長16.5 巾 9.2	石製支脚として使用されていたと思われるが、石床の可能性も無視できない。		79。カマド内出土。
9	砥石	1/2	狭2.3 広3.0 長4.2	砂質で4面とも使用。自然石利用。	暗青灰色	
10	瓦	第158-2	平瓦	第41表参照		00。

016 (030) 号住居跡 (第 137~140 図)

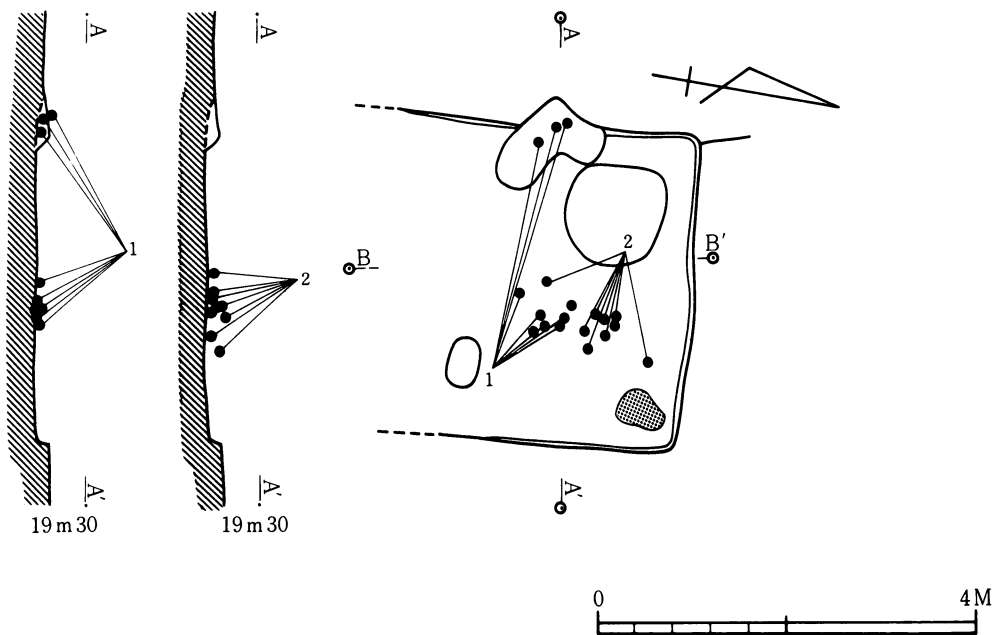
2 F区より検出調査された。主軸方位はN-94°-Wである。住居跡内覆土は4層に分けられた。全体に褐色土粒を含む。南壁は検出されなかった。017号住居跡・011号土壙と重複しており、017号住居跡を切り、011号土壙に切られている。

平面形は、一辺3.3mのほぼ正方形を呈すものと推察される。床面積は、3.3×3.3mで約11㎡を計る。北東隅の床面に焼土がみられ、011号土壙の覆土には焼土粒が認められる。壁高は、北・東・西壁がそれぞれ38, 12, 12cmである。床面の標高は、約18.7mである。周溝は検出されなかった。柱穴は1本のみ検出された。深さ27cmを計る。遺物は2点が図化できた。

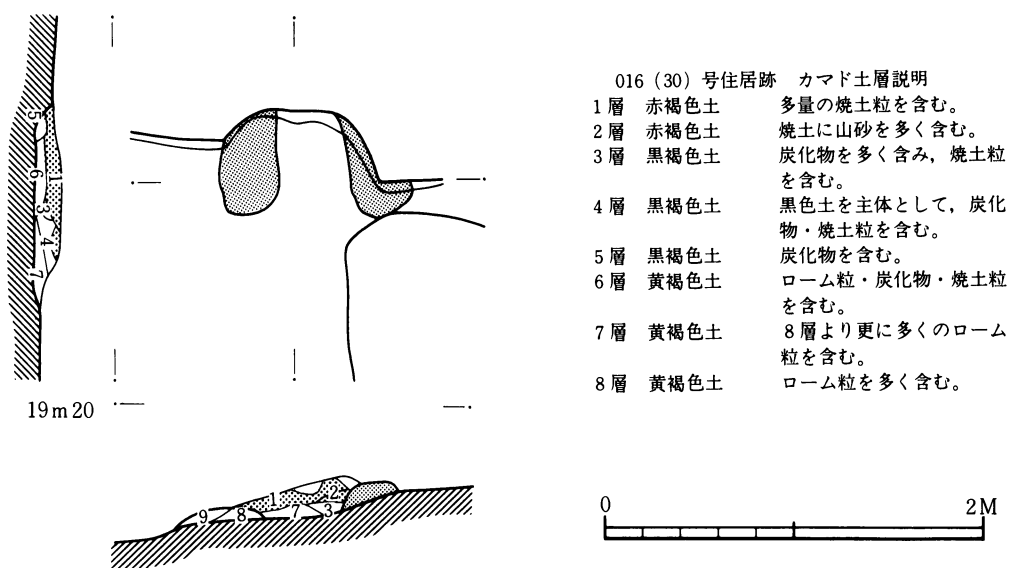
カマドは、西壁中央に構築されていた。掘込み幅約80cm, 奥行き約30cmを計る。カマド内堆積土は8層に分けられた。



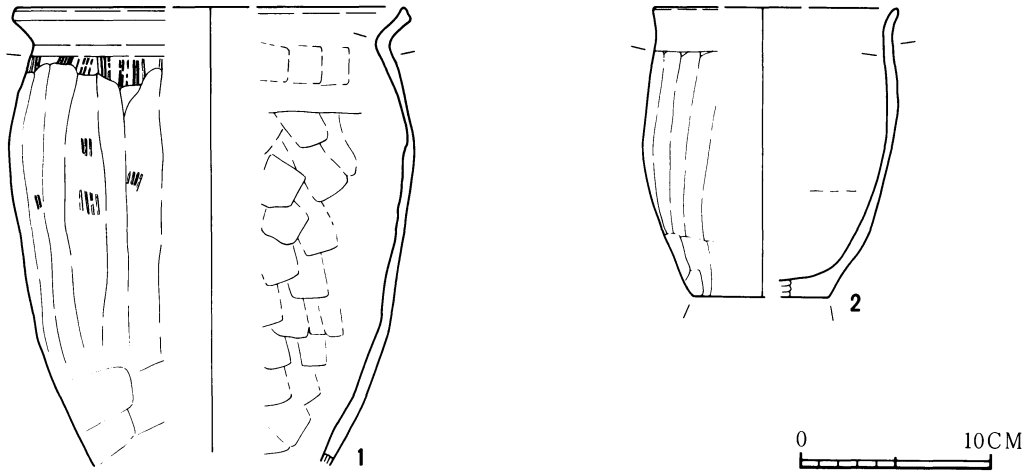
第137図 016 (30) 号住居跡実測図



第138図 016 (30) 号住居跡遺物出土状況図



第139図 016 (30) 号住居跡カマド実測図



第140図 016(30)号住居跡出土遺物実測図

第33表 016(030)号住居跡出土遺物表 (第138・140図)

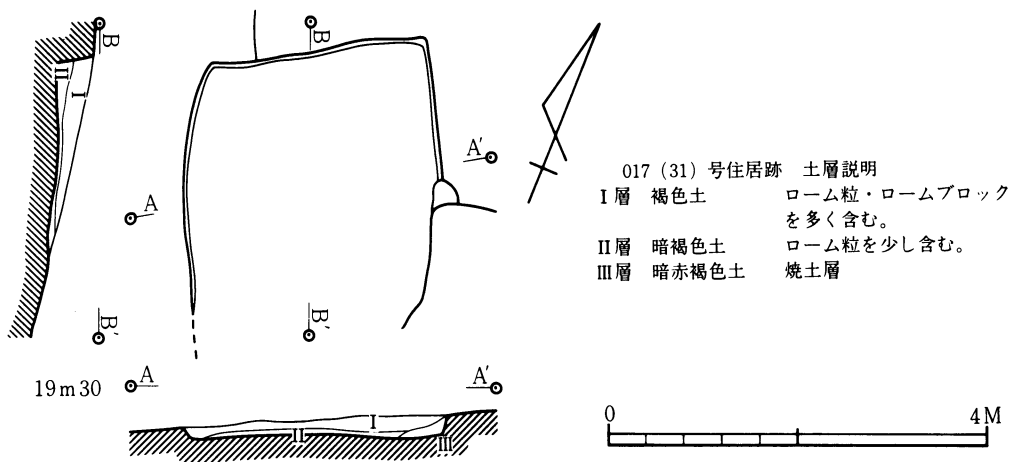
() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	甕	口縁・胴部 1/2	(20.1) — 残24.0	紐積み。外面上位タタキ。のちヘラケズリ。下位ヘラケズリ左下り。内面ヘラケズリ。口縁部ヨコヘラケズリ、のちヨコナデ。	暗茶褐色	砂粒を含むが精製。良好。76, 12, 00, 30, 31, 32, 36, 51, 52, 65, 67, 68, 76, 78, 81。破片の一部はカマド内より出土。
2	小型壺	口縁部1/3。 頸部以下ほぼ 完形。	(12.8) — 15.0	紐積み。外面上位タテヘラケズリ。下位ヨコヘラケズリ。内面ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。二次焼成をうけている。	黒褐色 煤附着	精製されており良好。69, 00, 04, 11, 13, 14, 15, 19, 57, 58, 71。

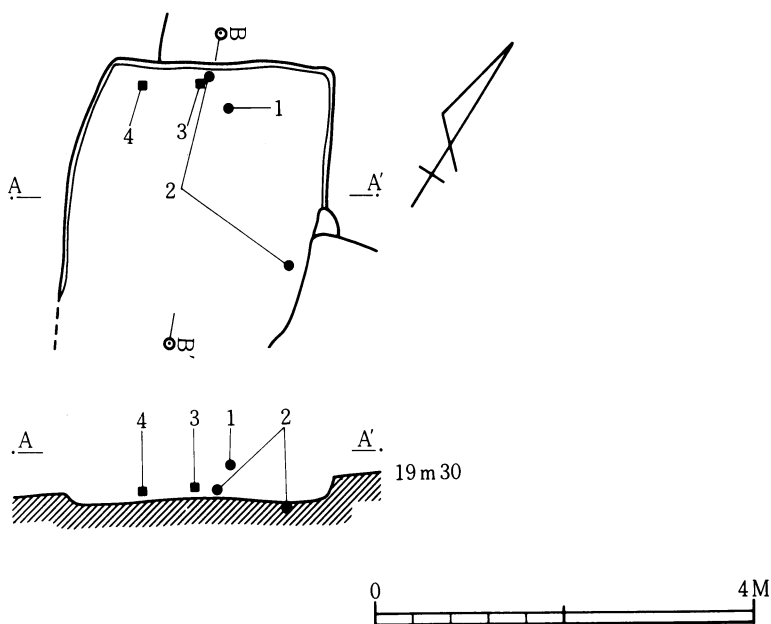
017 (031) 号住居跡 (第 141~143・157 図)

2 F区より検出調査された。主軸方位はN-51°-Wである。住居跡内覆土は3層に分けられた。東南隅を016号住居跡によって切られている。南壁は検出されなかった。

平面形は、一辺が2.7mでやや横に長い形状を呈すと推察される。床面積は、2.6×2.6mで約6.8m²を計る。壁高は、東・西・北壁がそれぞれ25, 12, 42cmである。床面の標高は、約18.8mを計る。周溝や柱穴は検出されなかった。遺物は土器が2点・鉄器2点が図化できた。

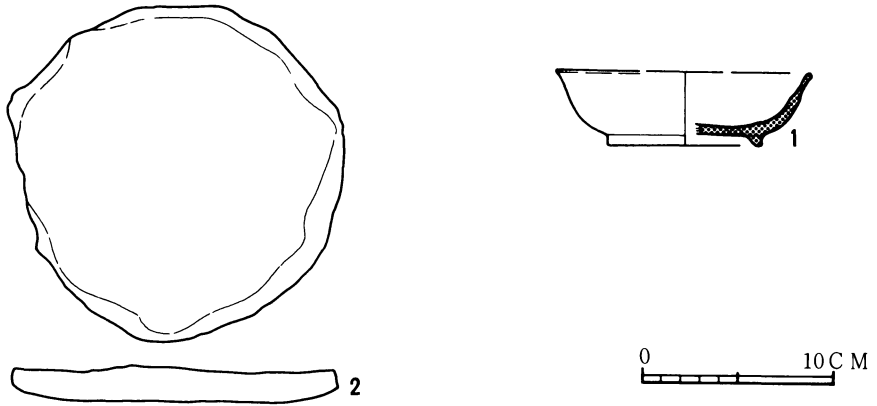


第141図 017 (31) 号住居跡実測図



第142図 017 (31) 号住居跡遺物出土状況図

カマドは、東壁中央に構築されていたが、そのほとんどを 016 号住居跡により切られており、実測等できなかった。



第143図 017(31)号住居跡出土遺物実測図

第34表 017(031)号住居跡出土遺物表 (第142・143・157図) () 復元

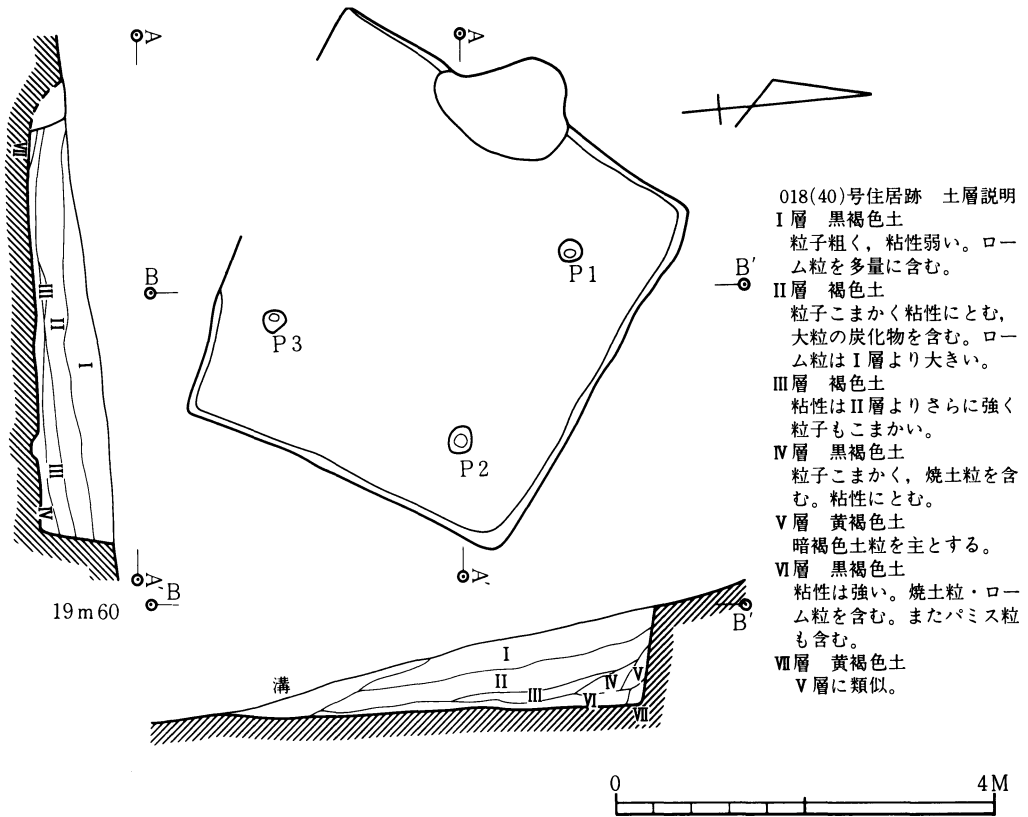
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	高台 付坏	1/5	(13.4) 8.0 3.3	高台張り付け。外・内面回転ヨコナ デ。	青灰色	良好。須恵器。16, 14。
2	坏	底部	— 8.4 —	硯か?。坏底部の転用品。墨らしき ものの付着あり。	暗灰褐色	緻密。須恵器。08。
3	鎌	第157-8	鉄製品	第40表参照		03。
4	鎌	第157-9	鉄製品	第40表参照		02。

018 (040) 号住居跡 (第 144~147 図)

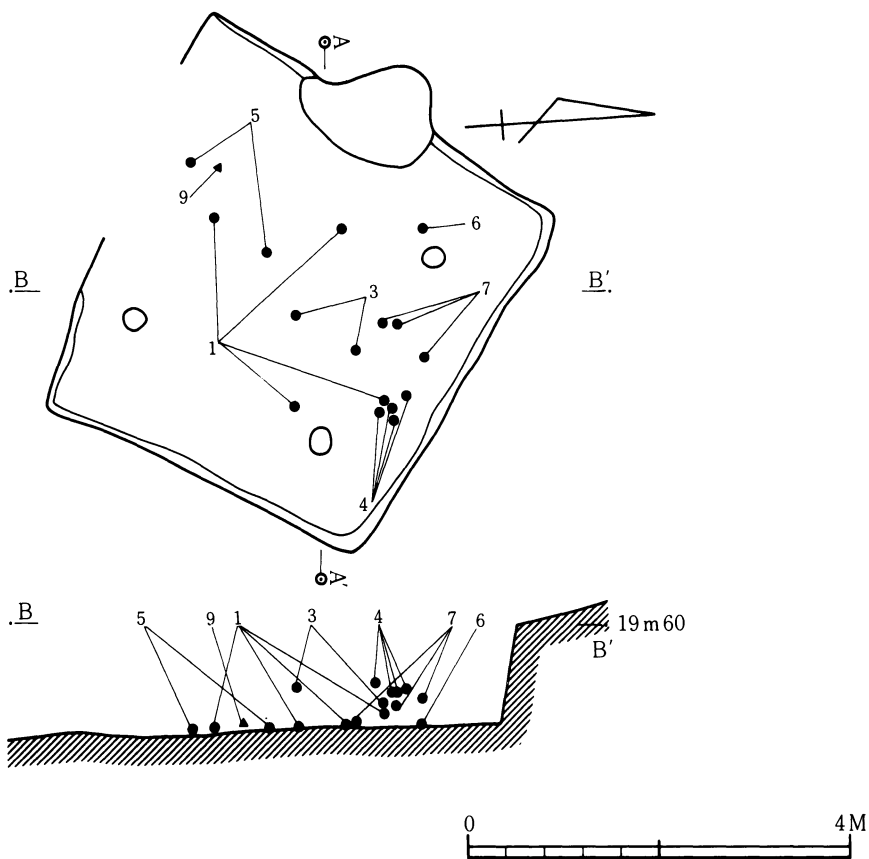
2 C区より検出調査された。主軸方位はN-56°-Wである。住居跡内覆土は7層に分けられた。全体に粒子はこまかく粘性にとむ。南壁を後世の溝によって切られている。

平面形は、4.28×4.28 m でほぼ正方形を呈す。床面積は、4×3.88 m で約 15.5 m²を計る。壁高は、北・東・西壁がそれぞれ 97, 55, 54 cmを計る。床面の標高は、約 18.5 m である。周溝は検出されなかった。柱穴は 3 本検出された。すべて主柱穴と思われる。深さはそれぞれ 32, 21, 32 cmである。遺物は 9 点が図化できた。

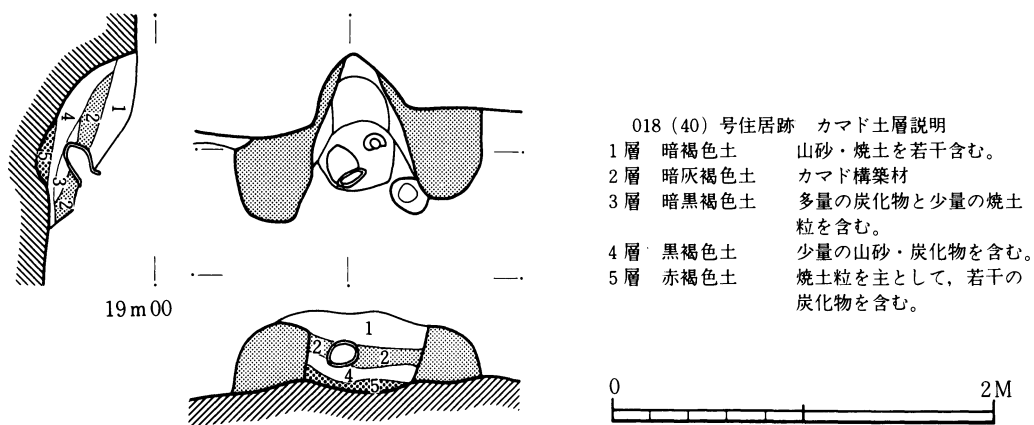
カマドは、西壁中央に構築されている。掘込み幅約 50 cm, 奥行き約 35 cmを計る。カマド内堆積土は 5 層に分けられる。カマド内から 8 の小型壺と 2 の坏が出土した。



第144図 018 (40) 号住居跡実測図



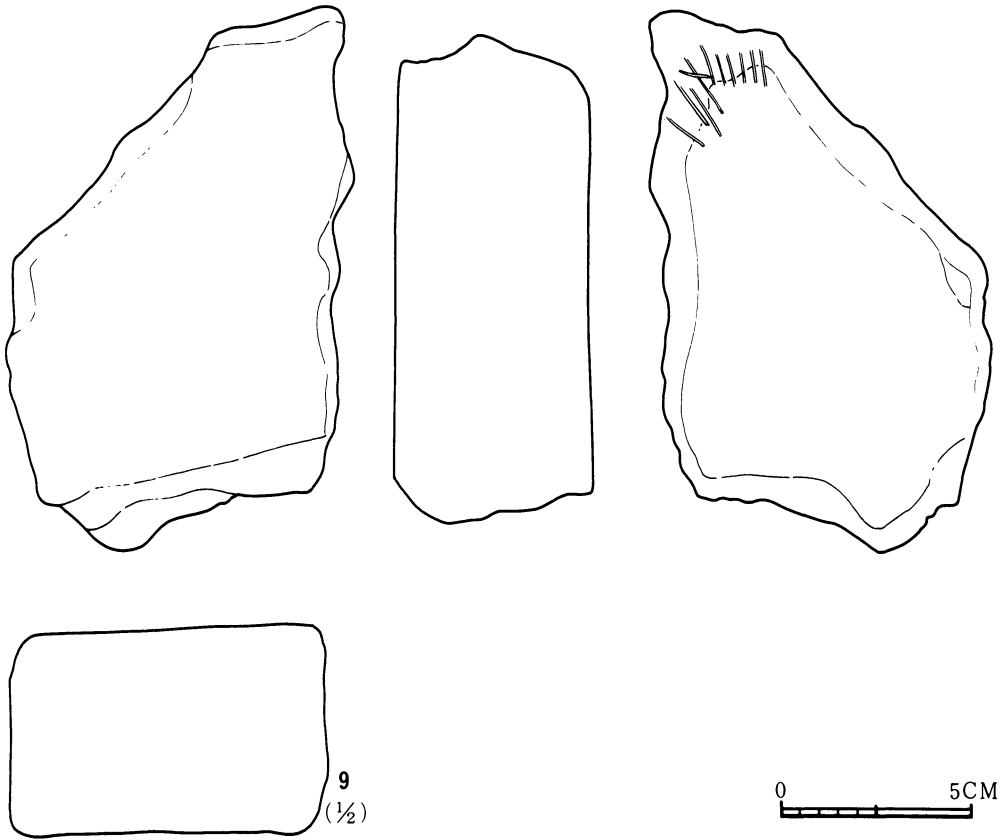
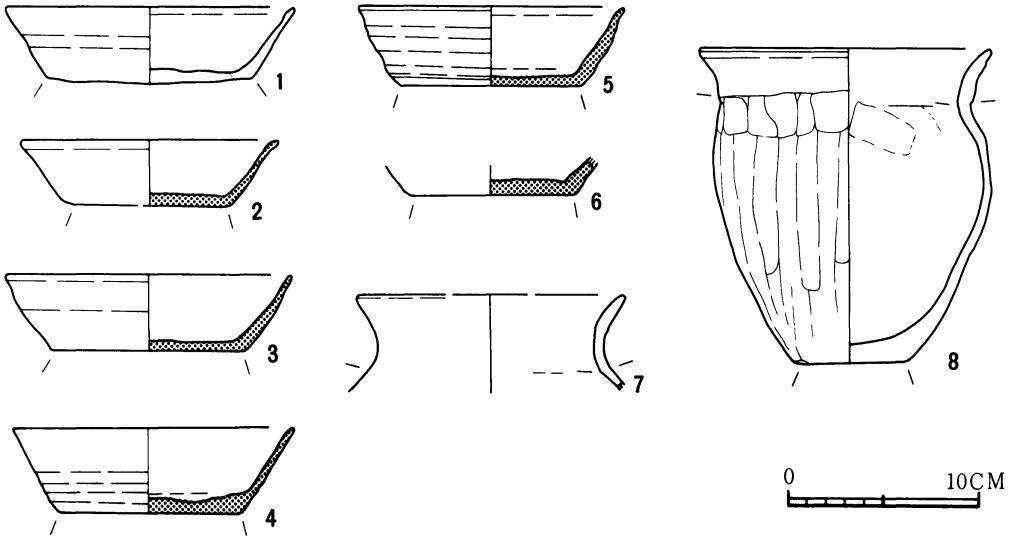
第145図 018(40)号住居跡遺物出土状況図



018(40)号住居跡 カマド土層説明

- 1層 暗褐色土 山砂・焼土を若干含む。
- 2層 暗灰褐色土 カマド構築材
- 3層 暗黒褐色土 多量の炭化物と少量の焼土粒を含む。
- 4層 黒褐色土 少量の山砂・炭化物を含む。
- 5層 赤褐色土 焼土粒を主として、若干の炭化物を含む。

第146図 018(40)号住居跡カマド実測図



第147图 018(40)号住居跡出土遺物実測図

第35表 018(040)号住居跡出土遺物表 (第145~147図)

() 復元

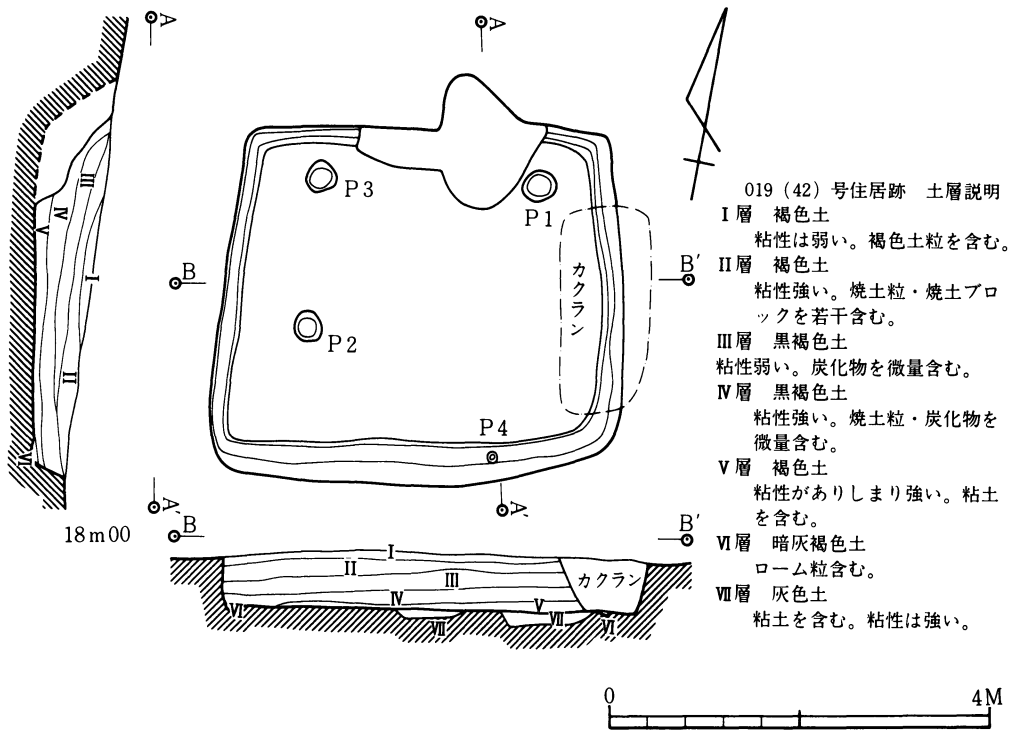
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/2	15.0 10.8 4.0	底部紐積み成形。外・内面ヨコナデ。 底部静止ヘラ整形。	暗黒褐色	雲母片及び砂粒を多く 含むが良好。10, 29。
2	坏	口縁一部欠 く。	13.6 7.9 3.5	成形不明。内・外面回転ナデ整形。 底部静止ヘラ切り。	暗灰色	精製され良好。須恵器。 92, 87, 93。カマド内 出土。
3	坏	1/4	14.9 9.7 3.9	成形不明。外・内面ヨコナデ。底部 回転ヘラ切り。	灰褐色	良好。須恵器。18, 57。
4	坏	1/4	14.2 6.4 4,2	ロクロ成形(?)、底部回転ヘラケズ リ。底部周囲ヨコヘラケズリ。	灰褐色	砂質だが良好。須恵器。 36, 32, 35, 39。
5	坏	底部3/4。 体部1/5	14.5 9.4 4,4	底部紐積み成形。外・内面ヨコナデ。	暗灰褐色	金雲母を若干含む。須 恵質。12, 02。
6	坏	底部のみ	— 8.3 残1.7	底部巻き上げ成形、のち底面ナデ整 形。底部周囲ヘラ整形。外・内面ヨ コナデ。	暗青灰褐 色	石英粒を多く含む。須 恵器。68。
7	小型壺	口縁部1/4	(14.2) — 残4.6	口縁部回転ナデ。内面ヨコケズリ。 外面ナデ。外面に剝離がみられる。	暗褐色	良好。56, 48, 60。
8	小型壺	完形	15.4 5.9 16.4	紐積み。外面タテヘラケズリ。内面 ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	暗黒褐色	砂質で砂粒を含む。86。 カマド内出土。
9	砥石	石製品	巾8.6 長12.5 厚5.0	表裏ともに砥石として使用。鉄器 (?)による擦痕がみられる。		13。

019 (042) 号住居跡 (第 148~151・157 図)

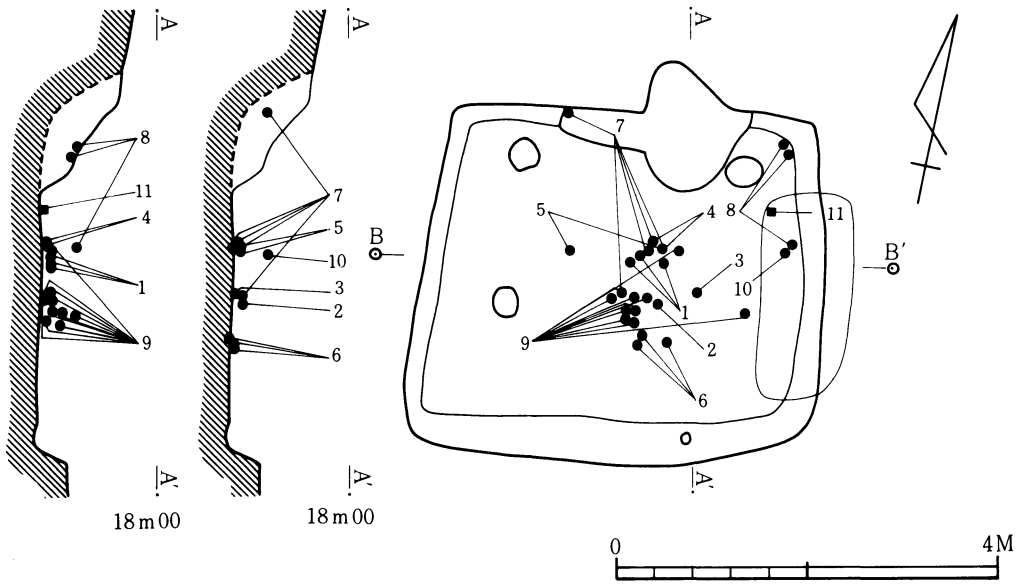
3 D区より検出調査された。主軸方位はN-8°-Wである。住居跡内覆土は7層に分けられる。全体に粘性にとみ、焼土粒を含む。東壁の上部は攪乱をうけている。

平面形は、3.66×4.2 mで多少横に長い形状を呈す。床面積は、3.5×3.7 mで約13 m²を計る。壁高は、東・南・西・北がそれぞれ55, 30, 50, 80 cmを計る。床面の標高は、約17.3 mである。周溝は全周し、幅16~22 cm、深さ5~10 cmを計る。柱穴は4本が検出された。P-1, P-2, P-3は主柱穴と推察される。P-4は補助柱と思われる。遺物は土器が10点、鉄器が1点図化できた。

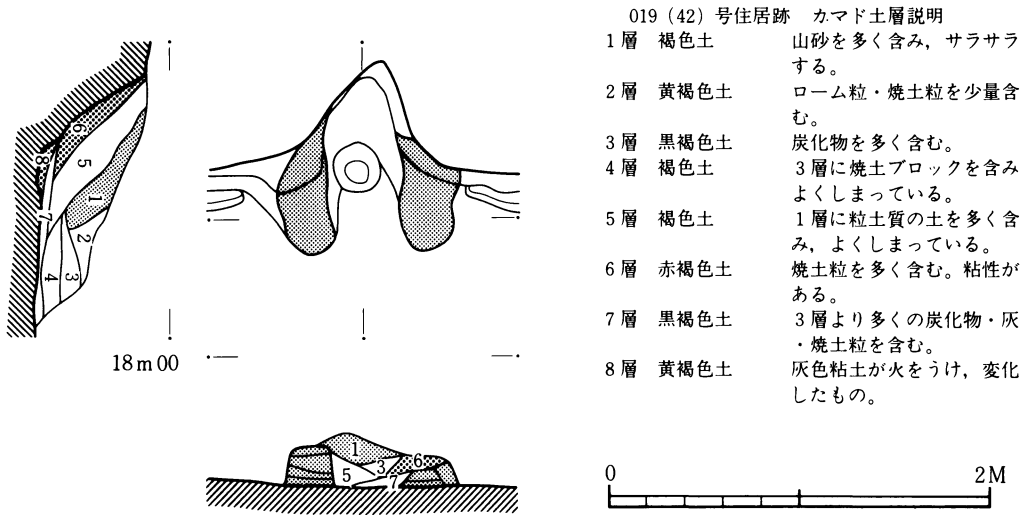
カマドは、北壁中央に構築されていた。掘込み幅約70 cm、奥行き約50 cmを計る。カマド内堆積土は8層に分けられた。基本土層は5層に分けられる。



第148図 019 (42) 号住居跡実測図

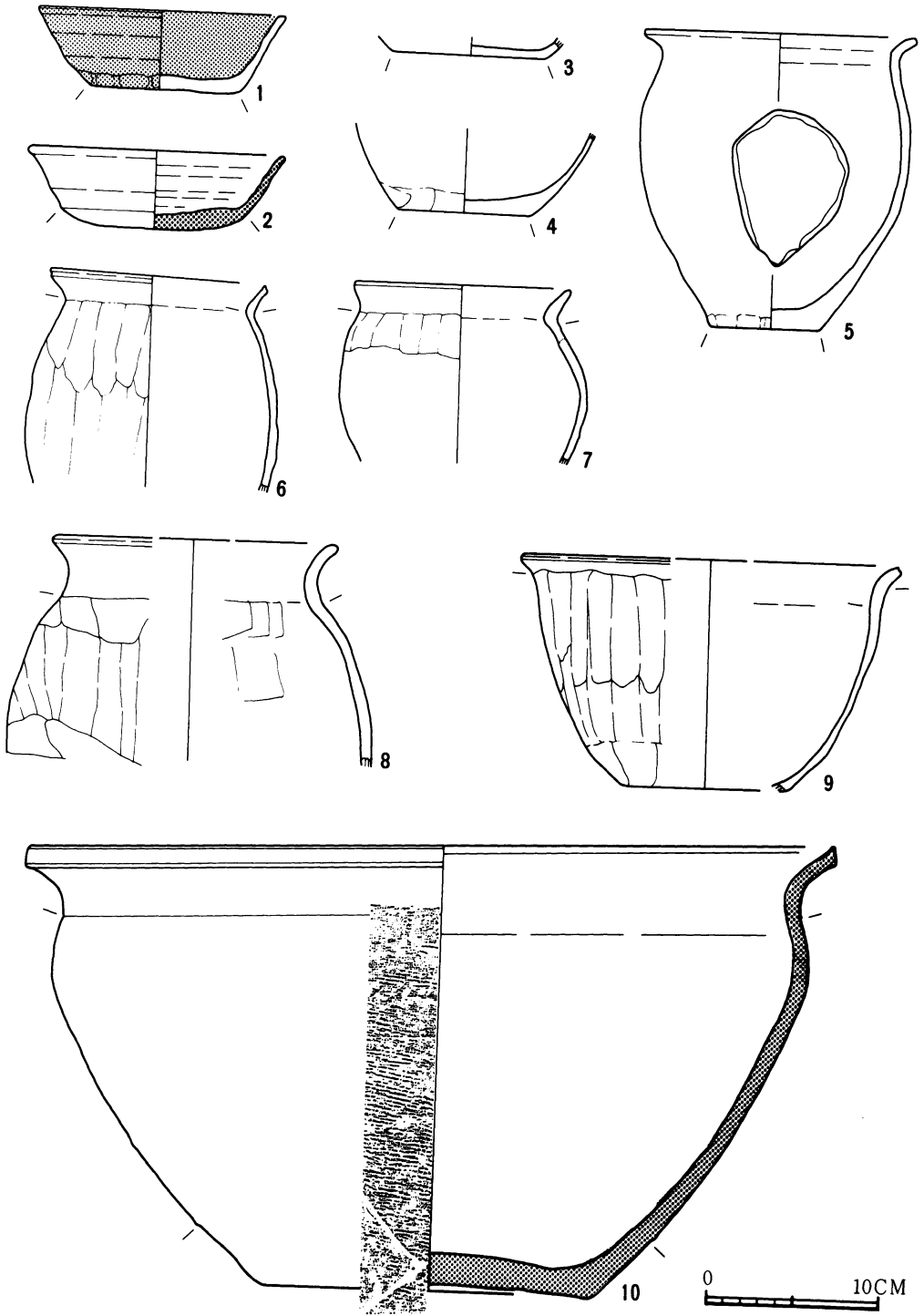


第149図 019(42)号住居跡遺物出土状況図



- 019(42)号住居跡 カマド土層説明
- 1層 褐色土 山砂を多く含み、サラサラする。
 - 2層 黄褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む。
 - 3層 黒褐色土 炭化物を多く含む。
 - 4層 褐色土 3層に焼土ブロックを含みよくしまっている。
 - 5層 褐色土 1層に粒土質の土を多く含み、よくしまっている。
 - 6層 赤褐色土 焼土粒を多く含む。粘性がある。
 - 7層 黒褐色土 3層より多くの炭化物・灰・焼土粒を含む。
 - 8層 黄褐色土 灰色粘土が火をうけ、変化したもの。

第150図 019(42)号住居跡カマド実測図



第151图 019(42)号住居跡出土遺物実測図

第36表 019(042)号住居跡出土遺物表 (第149・151・157図)

() 復元

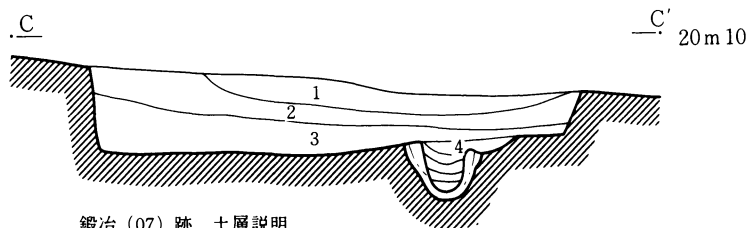
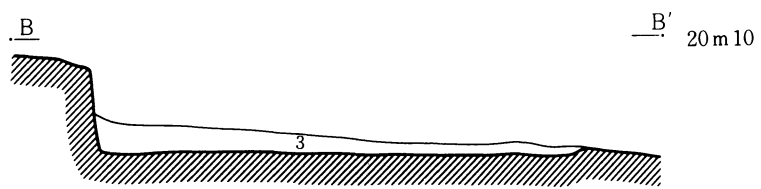
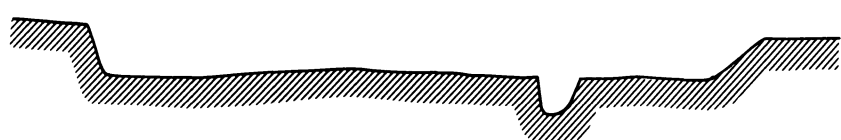
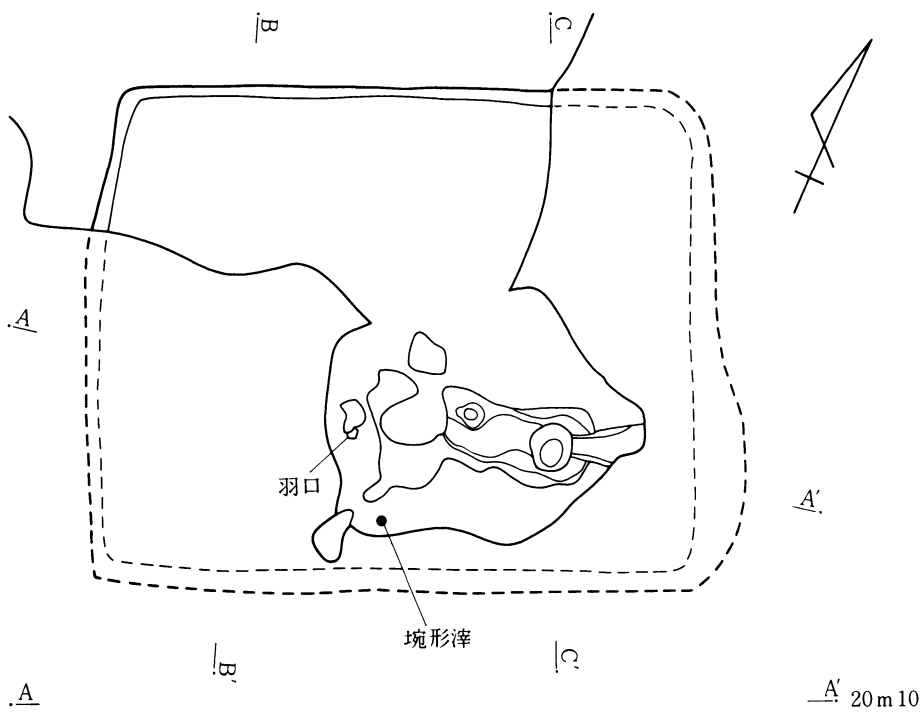
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	底部完形。 体部1/2欠 く。	7.2 9.0 4.5	紐積み。回転ヨコナデ。底部静止ヘ ラケズリ。	明赤褐色	緻密で良好。15, 14, 17。
2	坏	口縁部一部 欠く。	14.7 10.7 4.7	紐積み成形。回転ナデ。底部ヘラケ ズリ。底部にメ印がある。	灰褐色	砂質で精製されており 良好。須恵質。20。
3	坏	底部3/4	— 8.8 残0.8	内外面ナデ。	暗茶褐色	良好。22。
4	小型壺	底部	— 7.4 残4.7	成形不明。外面ヘラケズリ。のちナ デ。内面ナデ。底部周囲ヨコヘラケ ズリ。	暗赤茶褐 色	砂粒を多く含む。73, 74。
5	小型壺	2/3	15.7 6.3 16.9	紐積み。外・内面ナデ。全面磨減多 い。胴中央に焼成後の穿孔がみられ る。	明黄褐色	石英粒を多く含み荒 い。119, 13, 74, 118。
6	小型甕	口縁部完 形。 胴部一部欠 く。	12.3 — 残10.2	紐積み。外面タテヘラケズリ。内面 ナデ。口縁部ヨコナデ。	暗黒褐色	砂質で荒い。29, 00, 23, 28。
7	小型壺	胴部以下欠 く。	12.6 — 残10.5	紐積み。外面タテヘラケズリ。内面 ナデ。口縁部ヨコナデ。外面磨減多 い。	暗黒褐色	砂質で不良。76, 00, 37, 59, 73, 74。
8	壺	口縁部1/3	(16.4) — 残12.3	紐積み。外面ヘラケズリ3段。内面 ヨコヘラケズリ、のちナデ。口縁部 ヨコナデ。	暗褐色	良好。105, 106, 102。
9	鉢(甑) ?	2/3	(21.8) 9.0 残12.8	紐積み。外面タテヘラケズリ。内面 ヨコヘラナデ。口縁部ヨコナデ。底 部周囲ヨコヘラケズリ。	暗赤褐色 煤付着。	石英粒を多く含むが精 製されている。32, 21, 30, 31, 35, 37, 38, 39, 96, 110。
10	広口甕	縁部1/5	(49.2) 25.2 18.9	櫛歯状工具による波状文あり。内面 ササラ状工具による整形。	青灰色	良好。須恵質。101, 114, 113。
11	不明	第157-10	鉄製品	第40表参照		103。

(2) 鍛冶 (007) 跡 (第 91・152~154・156 図)

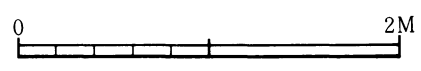
2 E区より検出調査された。主軸方位はN-25°-Eである。鍛冶跡内覆土は4層に分けられる。003・006・007号住居跡の覆土上に構築されており、006号住居跡のカマドのほぼ直上に構築されていた。

調査は、006号住居跡のカマドとして開始した。住居跡群の調査がカマドのみになった頃になると、それまで出土していた鉄滓とは別に、鍛造剥片が多量に出土し、通常のカマドとはおもむきの異なるものと予測されはじめた。カマドの現状把握と袖部の検出及び天井部の残存状態をみるために、土層断面用のベルトを設定して調査をはじめた。その結果、住居跡群の調査段階で検出されていた炭化物及び焼土粒を多量に含む層と、この遺構が関連をもち、同一遺構であることが判明した。

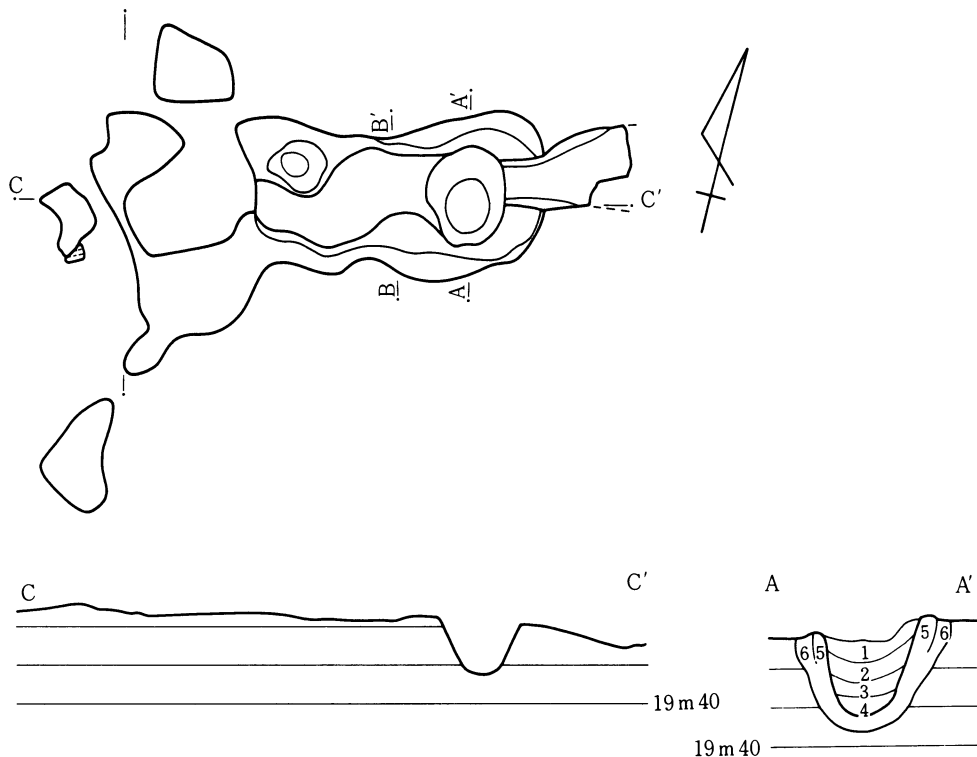
平面形は、土層断面の観察によると、長軸をコンターと同一方向にとり、長さ約3.5~3.8m、短軸約2.2~2.6mの、横に長い形状を呈しているものと推察された。炉跡は中央やや南に0.3×0.4mの炉をもち、西側に送風口と思われる幅0.1~0.2mの溝をもち、東側には炉内部の不用物をかき出すためのかき口と思われる巾0.2mほどの溝を有している。このかき出し口は、土層断面の観察によるとさらに0.7~0.1mほど続いていた。現状の炉跡の長さは2mを測る。送風口は炉の縁に向かって徐々に高まる。炉の両端は0.05mほどの差がある。炉の周囲は赤褐色に焼けており、炉内壁は青灰色になっている。炉内部は4層に分けられ、長さ10mmほどの炭化物と鉄滓片が多量に出土した。炉の覆土は山砂を多量に含んでおり、炉の構築材料と推定された。しかし、かき出し口と推定される部分からの山砂の検出はほとんどなく、炉体とは構造的に差があるものと推定された。一方炉体は、土層断面の観察によると、中央に向かってレンズ状に堆積しており、また、縁が若干床より高くなっていることがわかり、本来は炉縁のやや高い形状になっていたものと推定される。しかし、送風口部分に関しては、木根による攪乱がはげしく本来の形状については不明である。先述したように、炉自体を006号住居跡のカマドと誤認していた関係上、006号住居跡のカマドと炉本体が重複して残存した状況であり、炉周辺の付帯施設はほとんど不明の状況であった。しかし、送風口と推定される部分の一部から、砂や粘土のブロックがあたかも弧をえがくように検出され、それらにかこまれた部分から多量の鍛造剥片と、分析に供した塊形滓が出土した。出土位置は床面推定レベルよりも下位であり、あたかも土壙状の遺構が付設されていたように推定された。この部分はサンプル資料として持ち帰り、水洗したところ、多量の鉄滓片と鍛造剥片が検出されたが、鉄器等の未製品や鍛冶作業に伴う工具類は発見されなかった。送風口の一部と推定される部分からはフイゴ羽口片が出土した。元の形状を残さないほど磨滅しており、使用された頻度がはげしかったことがうかがわれた。ほかに遺物として、土師器片が出土している。



- 鍛冶 (07) 跡 土層説明
- | | |
|---------|----------------------|
| 1層 暗褐色土 | ローム粒を少し含む |
| 2層 褐色土 | ローム粒を多く含む、焼土粒をわずかに含む |
| 3層 茶褐色土 | 2層に類似。焼土粒を少し含む。 |
| 4層 黒色土 | 炭化物を多く含む。鉄滓片を含む。 |



第152図 鍛冶跡 (07) 実測図

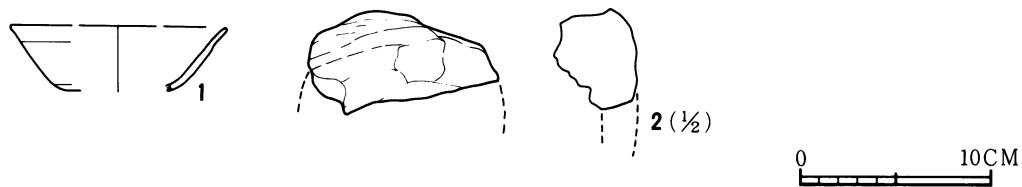


鍛冶 (07) 炉 土層説明

- 1層 暗褐色粘質土 (焼土粒を含む)
- 2層 暗赤褐色土 (焼土粒を含む)
- 3層 黒色土 (炭化物・鉄滓を含む。)
- 4層 暗紅色土
- 5層 暗青灰色土 (環元され青灰色化した黄褐色土)
- 6層 暗赤褐色土 (酸化され赤褐色化した黄褐色砂)



第153図 鍛冶炉実測図



第154図 鍛冶跡 (07) 出土遺物実測図

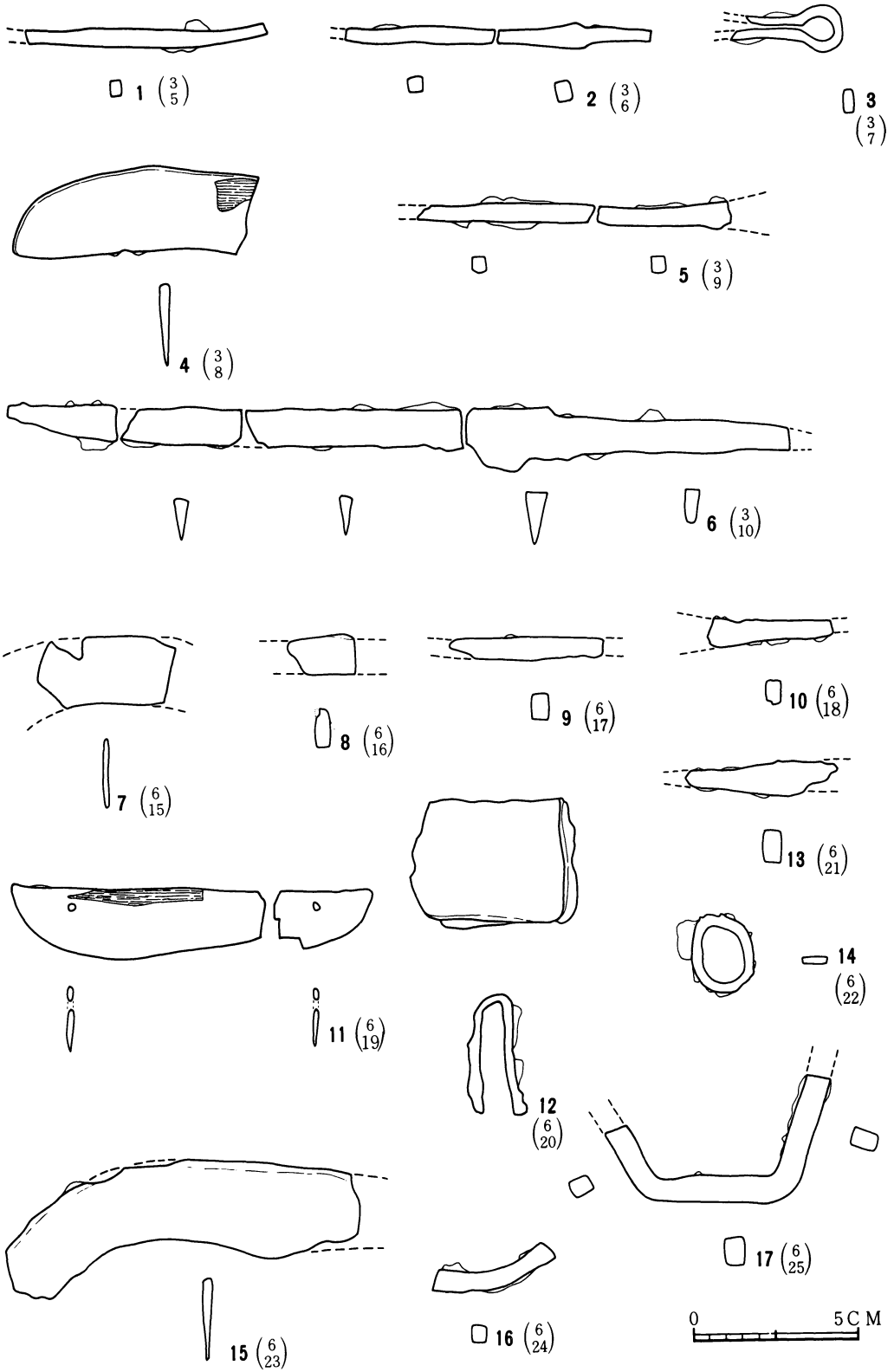
第37表 鍛冶(007) 跡出土遺物表 (第152・154・156図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/3。底部を 欠く。	(11.3) 5.5 残3.3	粘土塊成形?。底部糸切り。	暗褐色	緻密で良好。00。
2	塊形滓	1/3	(径5.5)	塊状を呈す。上面にはサビがふき出 ている。		200。(405)
3	不明	第156-2	鉄製品	第40表参照		200。
4	不明	第156-3	鉄製品	第40表参照		153。

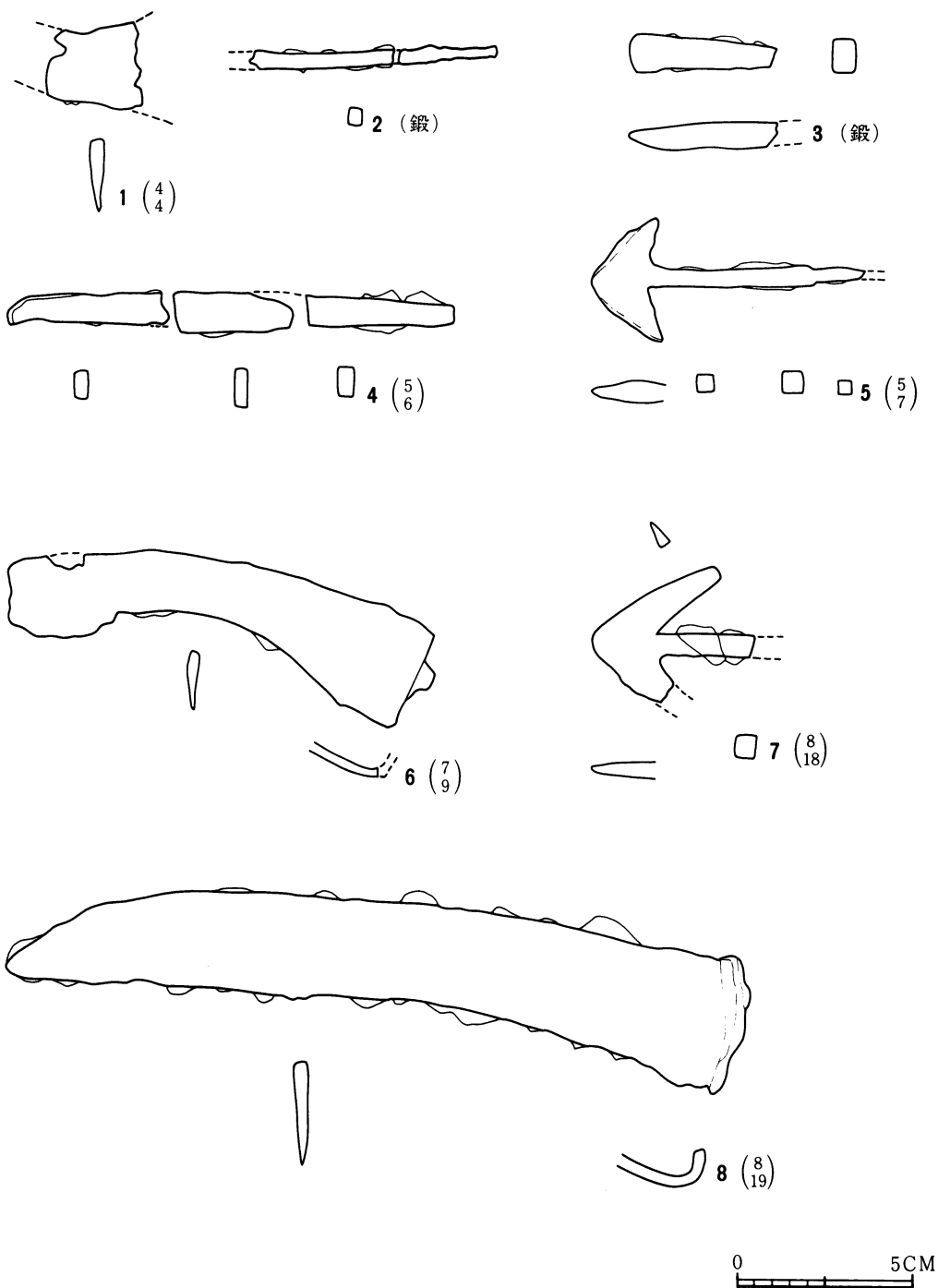
第38表 観音塚遺跡出土鉄製品 (第155図)

挿図 番号	出土住居 (番号)	製品名	遺存度	計測値 (cm)			形 状	備考
				長さ	幅	厚さ		
155 1	003号 (5)	紡錘車	軸のみ	7.3	0.4	0.3	紡錘車の軸部分と思われる。	199。
155 2	003号 (6)	紡錘車	軸のみ	9.3	0.5	0.4	紡錘車の軸と思われる。	11。
155 3	003号 (7)	不明	先端を欠 く。	3.5	0.7	0.3	バネ状を呈す。	
155 4	003号 (8)	鎌	先端部残 存	7.3	2.5	0.3	一部に木質部の残存あり。	215。
155 5	003号 (9)	不明	両端を欠 く。	9.5	0.4	0.4	一方はやや開き気味になる。 紡錘車の軸か?	20。
155 6	003号 (10)	刀子	刃先を欠 く。	23.6	1.1	0.3	4分割している。しっかりし た造り。切先を欠く。	99。
155 7	006号 (15)	不明	両端を欠 く。	4.2	2.0	0.2	厚さ1~2mm。カマド砂中よ り出土。	437。
155 8	006号 (16)	不明	両端を欠 く。	2.3	1.2	0.5	刀子の基部か?	273。



第155図 観音塚遺跡出土鉄製品実測図(1) (出土住居跡 遺物番号)

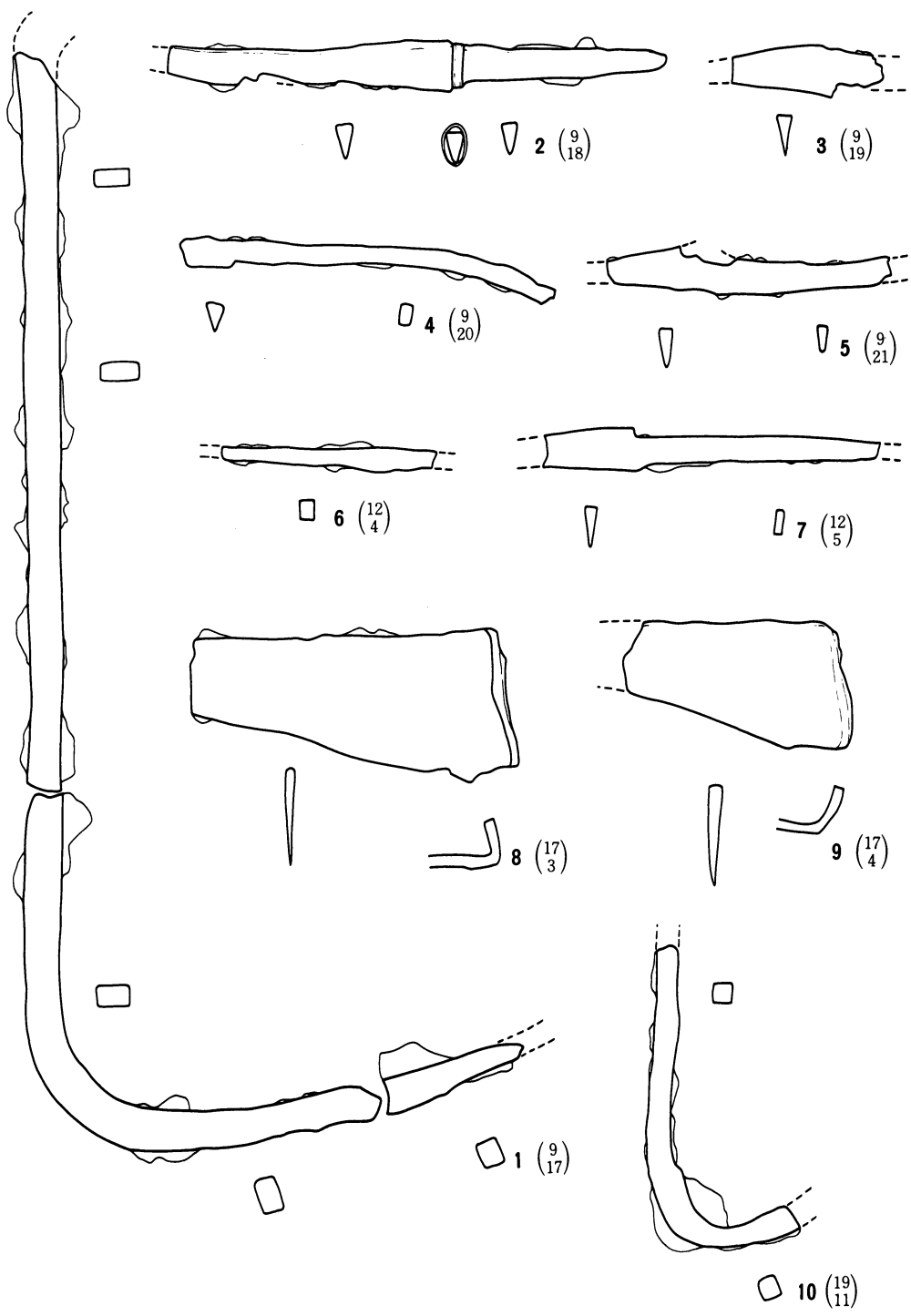
155 9	006号 (17)	不明	両端を欠く。	4.6	0.8	0.5		119。
155 10	006号 (18)	不明	両端を欠く。	3.8	0.9	0.6	カマド灰層中より出土。	443。
155 11	006号 (19)		一部を欠く。	約10.8	1.9	0.2	2片に分割。両片に小孔あり。木質部の一部付着あり。	440。
155 12	006号 (20)	不明	両端を欠く。	4.5	3.6	0.5	半分に折り曲げた形状を呈す。	274。
155 13	006号 (21)	不明	両端を欠く。	4.7	0.9	0.6	一方が細くなる。	00。
155 14	006号 (22)	リング状	ほぼ完形	2.4	1.9	0.3		47。
155 15	006号 (23)	鎌	基部を欠く。	10.7	2.4	0.3	切先及び基部を欠く。刃部はとぎ直しのためか強く湾曲する。	449。
155 16	006号 (24)	不明	両端を欠く。	3.8	0.4	0.4	多少湾曲する。	24。
155 17	006号 (25)	不明	両端を欠く。	10	0.8	0.5	U字形を呈す。用途不明。	412。



第156図 観音塚遺跡出土鉄製品実測図(2) (出土住居跡 遺物番号)

第39表 観音塚遺跡出土鉄製品（第156図）

挿図 番号	出土住居 (番号)	製品名	遺存度	計測値 (cm)			形 状	備考
				長さ	幅	厚さ		
156 1	004号 (4)	不明	両端を欠く。	2.7	2.1	0.3	一方に刃をもつ。性格は不明。	32。
156 2	鍛冶跡 (3)	不明	両端を欠く。	7.1	0.4	0.4	紡錘車の軸か？性格不明。	200。
156 3	鍛冶跡 (4)	不明	一方を欠く。	4.2	1.0	0.7	クサビ状を呈す。	153。
156 4	005号 (6)	不明	両端を欠く。	12.5	1.2	0.4	3分割。先端部分がややねじれている。	107。
156 5	005号 (7)	鉄鉄	基部を欠く。	7.8	根 3.5 筥被0.6	0.6 0.5	基部端を欠く。	182。
156 6	007号 (9)	鎌	両端を欠く。	5.8	2.2	0.3	刃部はとき直しのためか湾曲が強い。	40。
156 7	008号 (18)	鉄鋸	基部を欠く。	4.6	根 3.0 筥被0.6	0.6 0.5	基部端を欠く。	182。
156 6	007号 (9)	鎌	両端を欠く。	5.8	2.2	0.3	刃部はとき直しのためか湾曲が強い。	40。
156 7	008号 (18)	鉄鋸	基部を欠く。	4.6	根 3.0 筥被0.6 茎 -	0.4 0.6 -	基部を欠く。	175。
156 8	008号 (19)	鎌	完形	21.2	2.8	0.4	ほぼ完形。遺存状態も良好。	05。

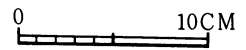
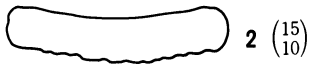
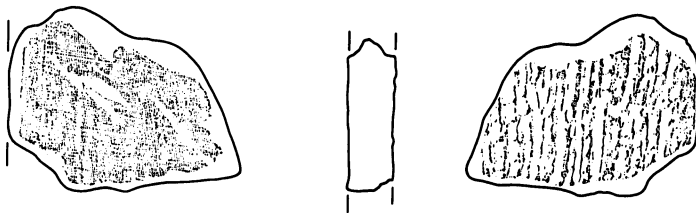
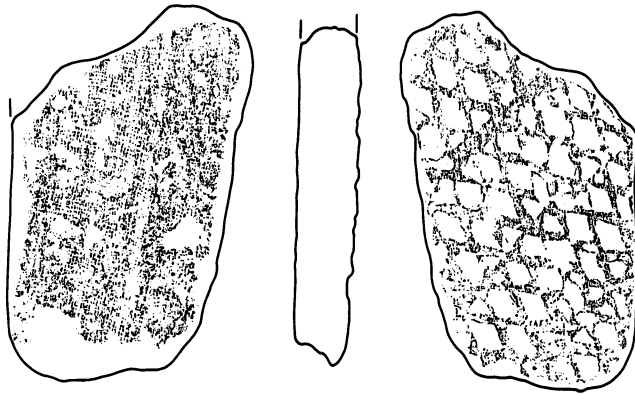


第157図 観音塚遺跡出土鉄製品実測図 (3) (出土住居跡遺物番号)

0 5 CM

第40表 観音塚遺跡出土鉄製品（第157図）

挿図 番号	出土住居 (番号)	製品名	遺存度	計測値 (cm)			形 状	備考
				長さ	幅	厚さ		
157 1	009号 (17)	不明	両端を欠く。	納42.0	1.0	0.5	用途不明。しっかりした作り。	205。
157 2	009号 (18)	刀子	ほぼ完形	14.4	1.0	0.8	刃先を一部欠く。ハバキが残存している。	53。
157 3	009号 (19)	刀子	両端を欠く。	4.3	1.5	0.9	刃部と基部を欠く。	120。
157 4	009号 (20)	刀子	基部の一部を欠く。	11.0 11.0	身0.9 茎0.6	0.5 0.4	刃部を欠く。基部は湾曲する。	268。
157 5	009号 (21)	刀子	先端及び基部を欠く。	8.2	身1.1 茎0.7	0.4 0.3	刃部及び基部を欠く。	234。
157 6	012号 (4)	不明	両端を欠く。	6.2	0.6	0.4	紡錘車の軸か？	05。
157 7	012号 (5)	刀子	刃部及び基部を欠く。	9.6	身1.1 茎0.6	0.3 0.2	刃部及び基部を欠く。	01。
157 8	017号 (13)	鎌	刃部を1/2欠く。	9.2	2.7	0.3	刃部を欠く。	03。
157 9	017号 (4)	鎌	刃部を欠く。	6.3	2.7	0.4	刃部を欠く。	02。
157 10	019号 (11)	不明	両端を欠く。	約 12	0.6	0.6	L字形を呈す。	103。



第158図 観音塚遺跡出土瓦実測図 (出土住居跡 遺物番号)

第41表 出土瓦 (第158図)

() 復元

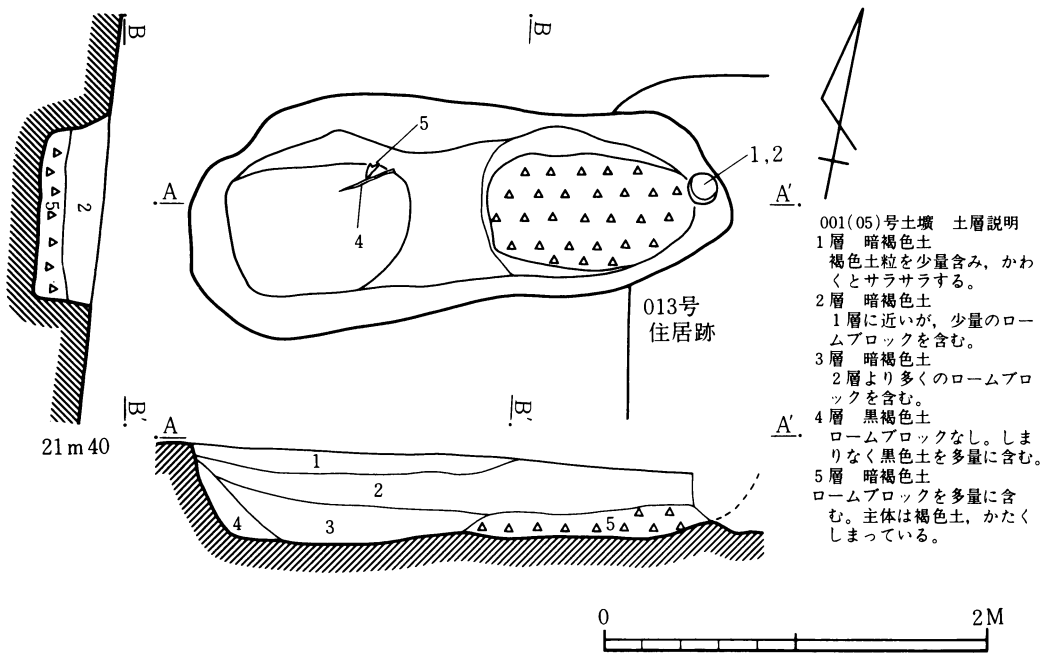
挿図 番号	種類	遺存度	色調	布目(本/3 cm, 縦, 横), その他	備考(出土住居跡)
1	瓦	長25 cm 幅12.5cm	淡褐色	平瓦, 凹面布目(19, 21本) 凸面は格子目	011号住居跡出土。
2	瓦	長 9.3cm 幅11.5cm	淡褐色	平瓦, 凹面布目(19, 17本) 凸面縄目	015号住居跡覆土出土。41。

(3) 土壌

001 (05) 号土壌 (第159~160 図)

2 D区より検出調査された。長軸の主軸方位はN-78°-Wである。013号住居跡を切っている。

平面形は、長軸 2.82 m, 短軸 0.95~1.2 m を計り、西側が若干広い形状を呈す。底面は平坦でなく東・西側に床面をもつ。掘込みの角度は東西壁はゆるやかなのに対して、南北壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土の堆積状態は自然の流入に近い。5層は大型ハマグリを主体として、アサリ・シオフキ・カガミガイを含んだ層で、遺物の1・2は5層と2層の間から、かさねられた状態で出土した。4は小刀, 5は雁股式鉄鏃である。底面の標高は、約 20.85 m である。

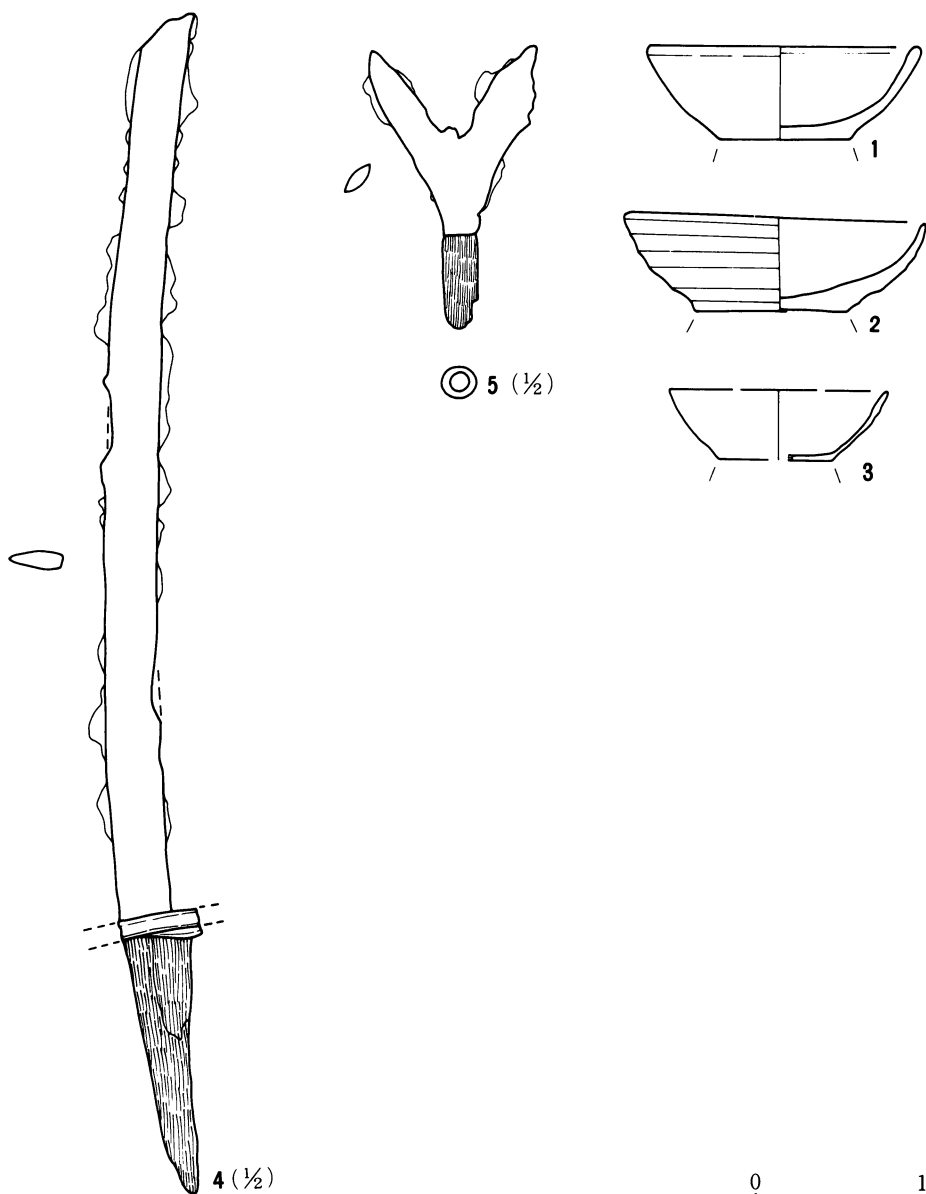


第159図 001 (05) 号土壌実測図

第42表 001(05)号土壌出土遺物表 (第159・160 図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	完形	15.9 7.9 5.0	紐積み。外・内面ヨコ回転ナデ。底部ヘラ切り?。	暗褐色	良好。14。
2	坏	完形	14.0 6.7 4.8	紐積み。外・内面回転ナデ。底部回転糸切り。	暗黄褐色	緻密で良好。14。



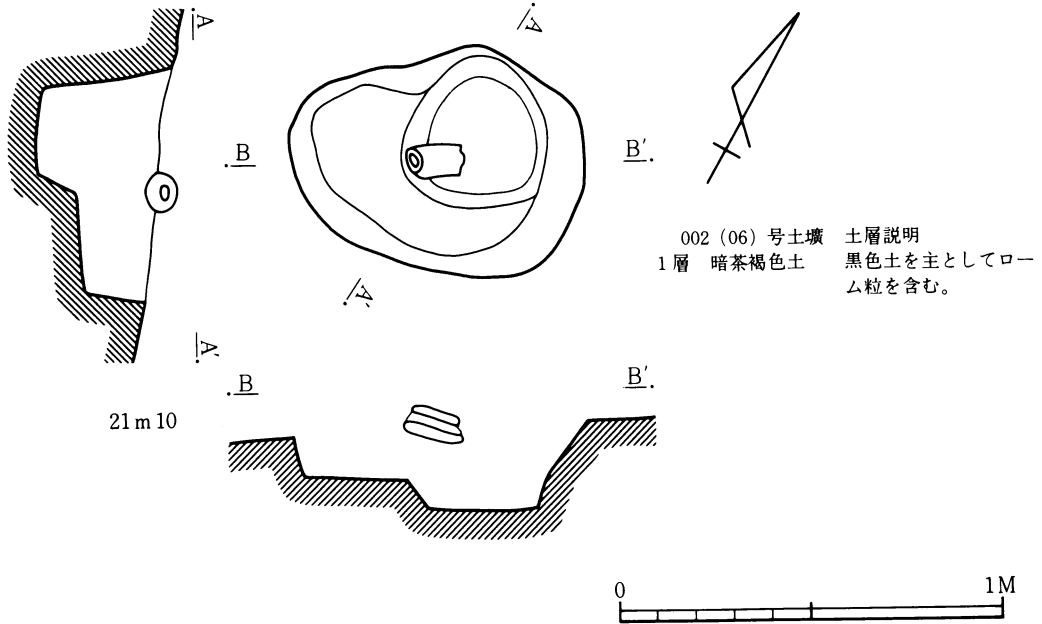
第160図 001 (05) 号土壙出土遺物実測図

3	坏	1/3	(11.4) 5.8 3.6	内・外面ヨコナデ。底部は回転糸切り。	暗褐色	緻密で良好。01。
4	小刀	ほぼ完形	長30.4 幅 1.4 厚 0.5	一部に木質部の付着あり。		02。(432)。
5	鉄鏃	完形	長7.5 幅1.0 厚0.8	茎部に木質部の付着がみられる。雁股式鉄鏃		01。(430)。

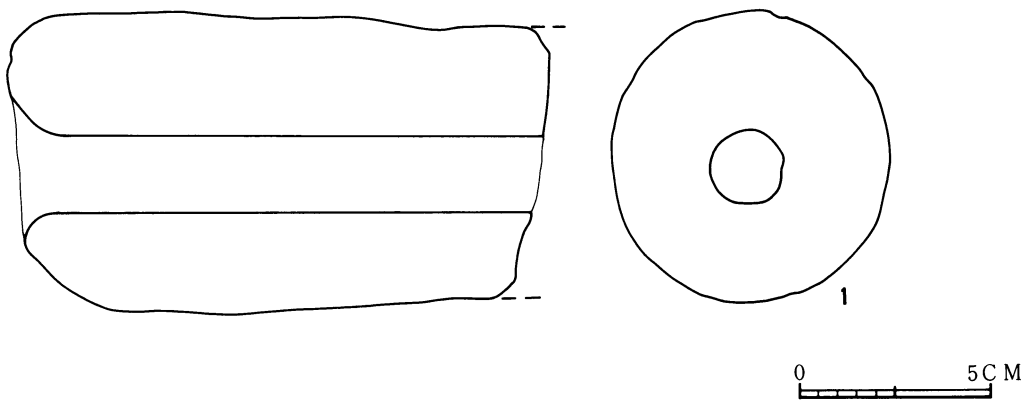
002 (06) 号土壇 (第 161~162 図)

2 D区より検出調査された。土壇内覆土は 1 層が確認できた。焼土粒などは全ったく含まない。遺構検出面で、羽口が出土している。

平面形は、長軸 78 cm、短軸 58 cm、深さ 60 cm を計る。底面は 2 段に掘込まれており、約 15 cm の差がある。土壇の壁や底面には火を受けた痕跡はみられない。羽口は長さ約 150 mm、外径 75 mm × 72 mm、内径 25 mm ほどで、断面は円形を呈す。炉内挿入部分を欠損している。



第161図 002 (06) 号土壇実測図



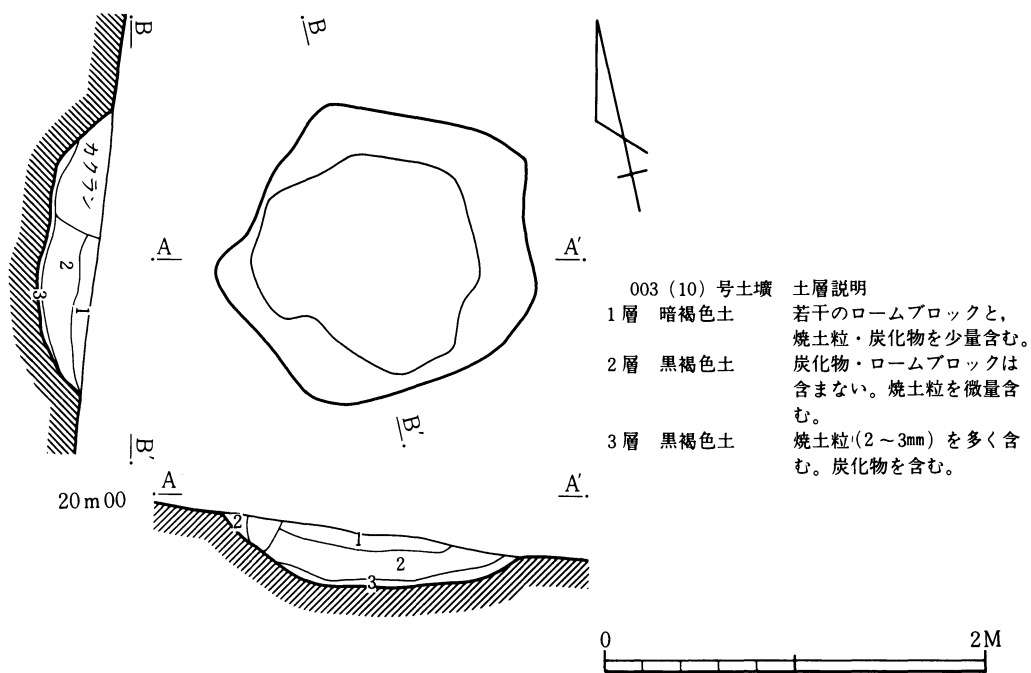
第162図 002 (06) 号土壇出土遺物実測図

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	羽口	一方を欠く。	径 7.3 孔径 1.8 長 13.5	全体に磨滅している。粘土紐成形？ 外面はナデ整形と思われる。胆土は砂を多量に含む。	暗赤褐色	01。焼成良好。全体に磨滅している。

003 (10) 号土壙 (第163図)

2 D区より検出調査された。土壙内覆土は3層に分けられ、全体に黒褐色を呈す。焼土粒・炭化物を全体に含む。

平面形は、径約1.5m、深さ0.3mで、五角形に近い円形を呈す。壁面の中間部分が焼けており、焼土粒・炭化物が多くみられた。遺物の出土はなかった。

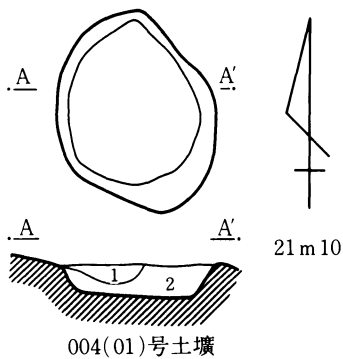


第163図 003 (10) 号土壙実測図

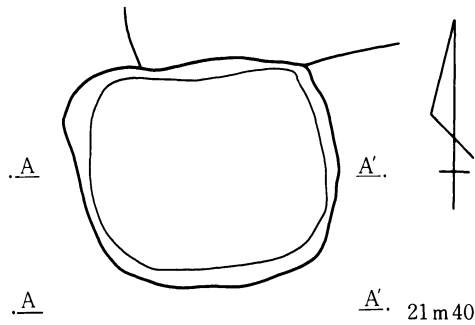
004 (01) 号土壙 (第164図)

014号住居跡と重複しており、住居跡よりも先行すると思われる。土壙内覆土は2層に分けられた。

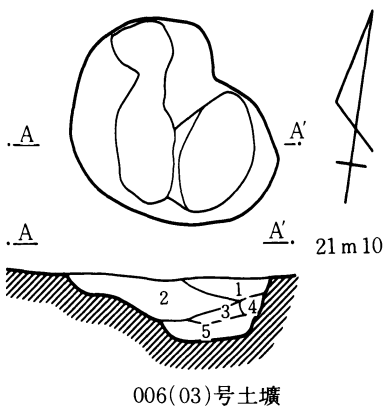
平面形は、1.1×0.8mで、深さ0.2mを計る。底面は平らで、壁はゆるやかに立ち上がる。遺物の出土はなかった。



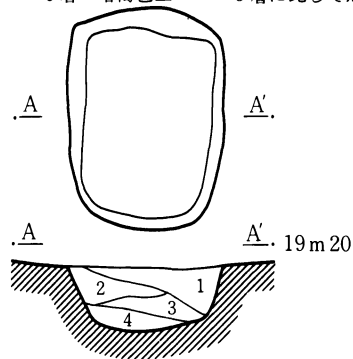
- 004(01)号土壌 土層説明
- 1層 暗褐色土 焼土粒・炭化物を若干含む。しまりなし。
 - 2層 褐色土 ブロック状にローム粒を含む。焼土粒なし。



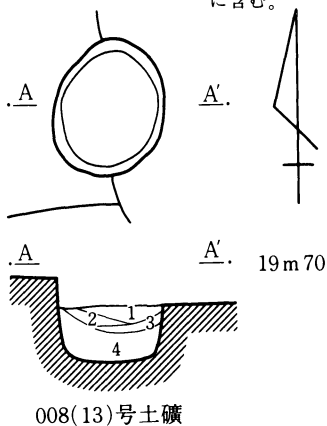
- 005(04)号土壌 土層説明
- 1層 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
 - 2層 黒褐色土 褐色土粒を多く含む。焼土粒を微量含む。
 - 3層 暗褐色土 褐色土粒・ロームブロックを主とし、微量の炭化物を含む。
 - 4層 暗褐色土 3層に比して、多量のロームブロックを含む。
 - 5層 暗褐色土 暗褐色土粒を主とする。
 - 6層 暗褐色土 5層に比して黒色土が多い。



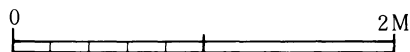
- 006(03)号土壌 土層説明
- 1層 褐色土 ロームブロックを多く含む。
 - 2層 暗褐色土 若干のブロックを含む。
 - 3層 暗褐色土 ローム粒を主とする。
 - 4層 暗褐色土 ロームブロック
 - 5層 暗褐色土 黒色土と褐色土を(3:7)に含む。



- 007(14)号土壌 土層説明
- 1層 黄褐色土 ローム粒を含む。
 - 2層 褐色土 1層よりローム粒が少ない。
 - 3層 褐色土 2層よりやや粘性が強い。
 - 4層 黒褐色土 黒色土粒を多く含む。



- 008(13)号土壌 土層説明
- 1層 褐色土 黒褐色土を主に、ローム粒を含む。
 - 2層 暗赤褐色土 焼土層
 - 3層 黒色土 焼土を主体に炭化物を含む。
 - 4層 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。



第164図 004(01)・005(04)・006(03)・007(14)・008(13)号土壌実測図

005 (04) 号土壌 (第 164・167 図)

013 号住居跡と重複しており、住居跡によって切られている。土壌内覆土は 6 層に分けられる。褐色土粒を多く含む。

平面形は、 1.4×1.2 m、深さ 0.45 m を計る。壁の立ち上がりは直線的である。遺構検出とほぼ同時に坏が出土した。

006 (03) 号土壌 (第 164 図)

013 号住居跡の南側で検出調査された。土壌内覆土は 5 層に分けられた。ロームブロックを多く含む。

平面形は、 1.12×0.85 m、深さ 0.35 m を計る。底面は 2 段に掘込まれている。遺物の出土はなかった。

007 (14) 号土壌 (第 164 図)

008 号住居跡と南西隅で重複しており、住居跡よりも先行する。土壌内覆土は 4 層に分けられる。ローム粒を含み、やや粘性を呈す。

平面形は、 1.15×0.82 m で、深さ 0.35 m を計る。壁はゆるやかに立ち上がる。底面は平らでない。遺物の出土はなかった。

008 (13)号土壌 (第 164・167 図)

003・004 号住居跡と重複しており、両者に切られている。土壌内覆土は 4 層に分けられる。焼土粒・炭化物を多く含む。

平面形は、 0.7×0.55 m で、深さ 0.5 m を計る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。覆土中から坏底部片が出土した。

009 (15) 号土壌 (第 165・167 図)

008 号住居跡の南側から検出調査された。土壌内覆土は 11 層に分けられた。全体に褐色土粒・ロームブロックを含む。

平面形は、 1.4×0.9 m で、深さ 0.55 m を計る。2 段に掘込まれている。11 層を覆土とする土壌に 1～10 層を覆土とする土壌が重複している可能性もある。

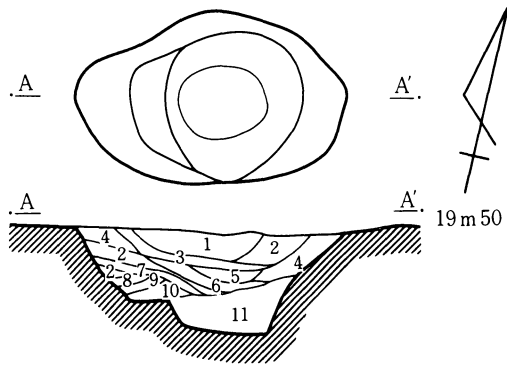
010 (08) 号土壌 (第 165・167 図)

011 号住居跡と重複しており、住居跡を切っている。土壌内覆土は 5 層に分けられる。ロームブロックを多く含む。

平面形は、 1.25×1.2 m で、深さ 0.9 m を計る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は水平である。

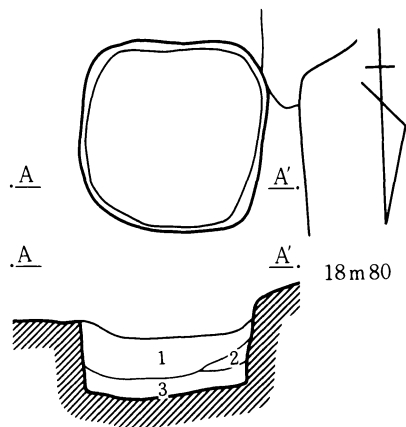
011 (12) 号土壌 (第 165 図)

016 号住居跡と重複しており、住居跡を切っている。土壌内覆土は 3 層に分けられる。焼土粒を微量含む。



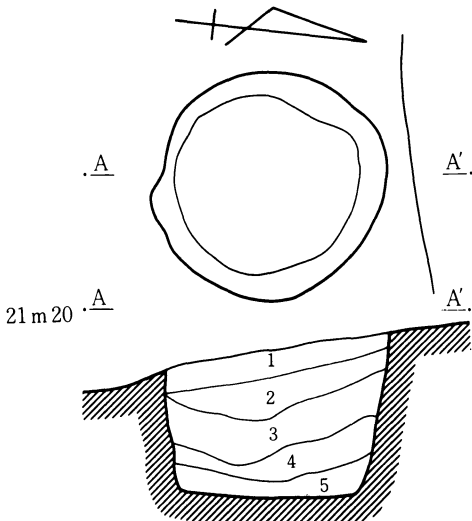
009 (15) 号土壌

- 009 (15) 号土壌 土層説明
- | | |
|----------|----------|
| 1層 暗褐色土 | 7層 黄色土 |
| 2層 暗赤褐色土 | 8層 褐色土 |
| 3層 黒赤褐色土 | 9層 暗黄褐色土 |
| 4層 黄褐色土 | 10層 暗褐色土 |
| 5層 暗褐色土 | 11層 淡褐色土 |
| 6層 暗褐色土 | |



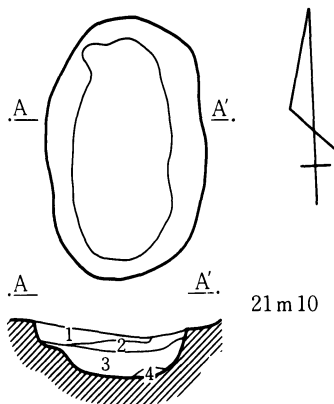
011 (12) 号土壌

- 011 (12) 号土壌 土層説明
- | | |
|---------|------------|
| 1層 暗褐色土 | 焼土粒を微量含む。 |
| 2層 暗褐色土 | ローム粒を若干含む。 |
| 3層 黒褐色土 | 褐色土粒を多く含む。 |



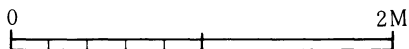
010 (08) 号土壌

- 010 (08) 号土壌 土層説明
- | | |
|---------|-------------------------|
| 1層 暗褐色土 | 褐色土粒を含む。乾燥するとボロボロする。 |
| 2層 暗褐色土 | ロームブロック・褐色土粒を含む。 |
| 3層 黒褐色土 | 黒色土を主にロームブロックを含む。しまりなし。 |
| 4層 | 3層に類似。ロームブロックは含まない。 |
| 5層 黒褐色土 | 4層に類似。黒色土粒を多く含む。 |



012 (02) 号土壌

- 012 (02) 号土壌 土層説明
- | | |
|---------|--------------------|
| 1層 暗褐色土 | ローム粒を若干含むが、しまりはない。 |
| 2層 褐色土 | ロームブロックを主とする。 |
| 3層 暗褐色土 | 黒色土・炭化物・焼土を多く含む。 |
| 4層 褐色土 | ロームブロック。 |



第165図 009(15)・010(08)・011(12)・012(02)号土壌実測図

平面形は、 0.96×0.96 m で、深さ 0.45 m を計る。壁面は垂直に立ち上がる。遺物の出土はなかった。

012 (02) 号土壙 (第 165 図)

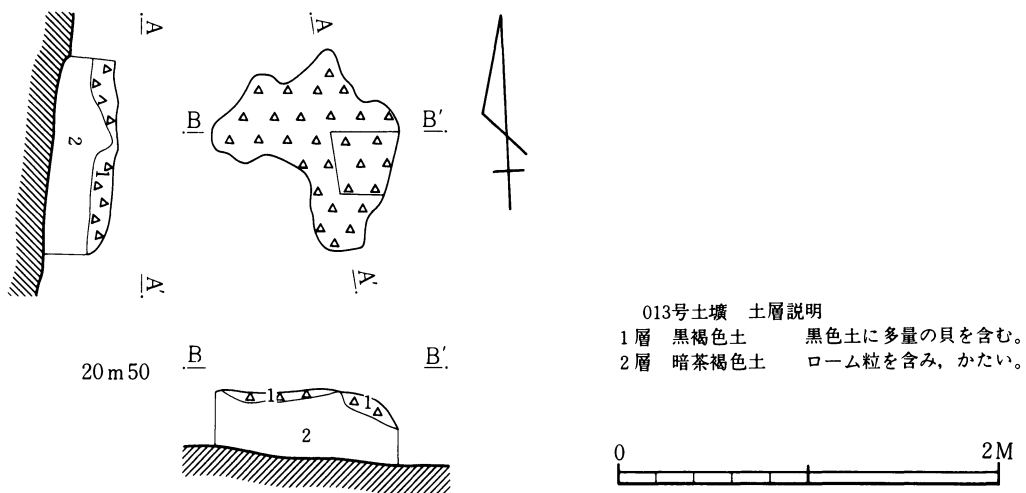
014 号住居跡と重複しており、住居跡を切っている。土壙内覆土は 4 層に分けられる。焼土粒・炭化物を若干含む。

平面形は、 1.35×0.8 m で、深さ 0.3 m を計る。壁面はゆるやかに立ち上がり、底面は水平でない。遺物の出土はなかった。

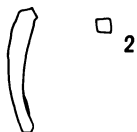
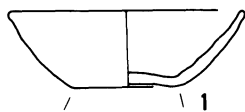
013 号土壙 (第 166 図)

008 号住居跡と 004 号住居跡の中間地点で検出調査された。貝がブロッソ状に検出されたが、本来は覆土に貝を含む土壙と推察される。

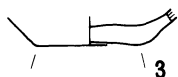
平面形は、 1×1 m、深さ 0.5 m と推測される。ハマグリ・シオフキ・アサリ・キサゴ・ウミニナ・オキアサリ・カガミガイ・カキを含む。貝以外の遺物は土師器片が数点出土したが、実測はできなかった。



第166図 013号土壙実測図



005(04)号土壙出土遺物



010(08)号土壙出土遺物



008(13)号土壙出土遺物



第167図 005(04)・008(13)・010(08)号土壙出土遺物実測図

第44表 土壙出土遺物表 (第164~167図)

() 復元

番号 (土壙)	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1 (05)	坏	口縁一部欠く。	12.3 5.4 4.0	底部回転糸切り。内・外面ヨコナデ。粘土塊成形。	暗黒褐色	01。
2 (05)	釘	面端を欠く。	長3.3 幅0.3 厚0.3	先端が細くなり、やや湾曲する。		06。(434)。
3 (10)	坏	底部のみ。	— 5.3 残1.5	紐積み。外・内面ヨコナデ。底部回転糸切り。	暗茶褐色	良好。
4 (08)	坏	底部のみ。	— 8.8 残1.3	粘土紐成形。底部周囲ヨコヘラケズリ。内面回転ナデ。	暗褐色	良好。D13-03。
5 (08)	坏	底部	— 6.8 残2.4	底部周囲ヨコヘラケズリ。内面ナデ。外面ヨコナデ。底部糸切り。	暗褐色	良好。D13-04。

(4) その他の遺構と遺物

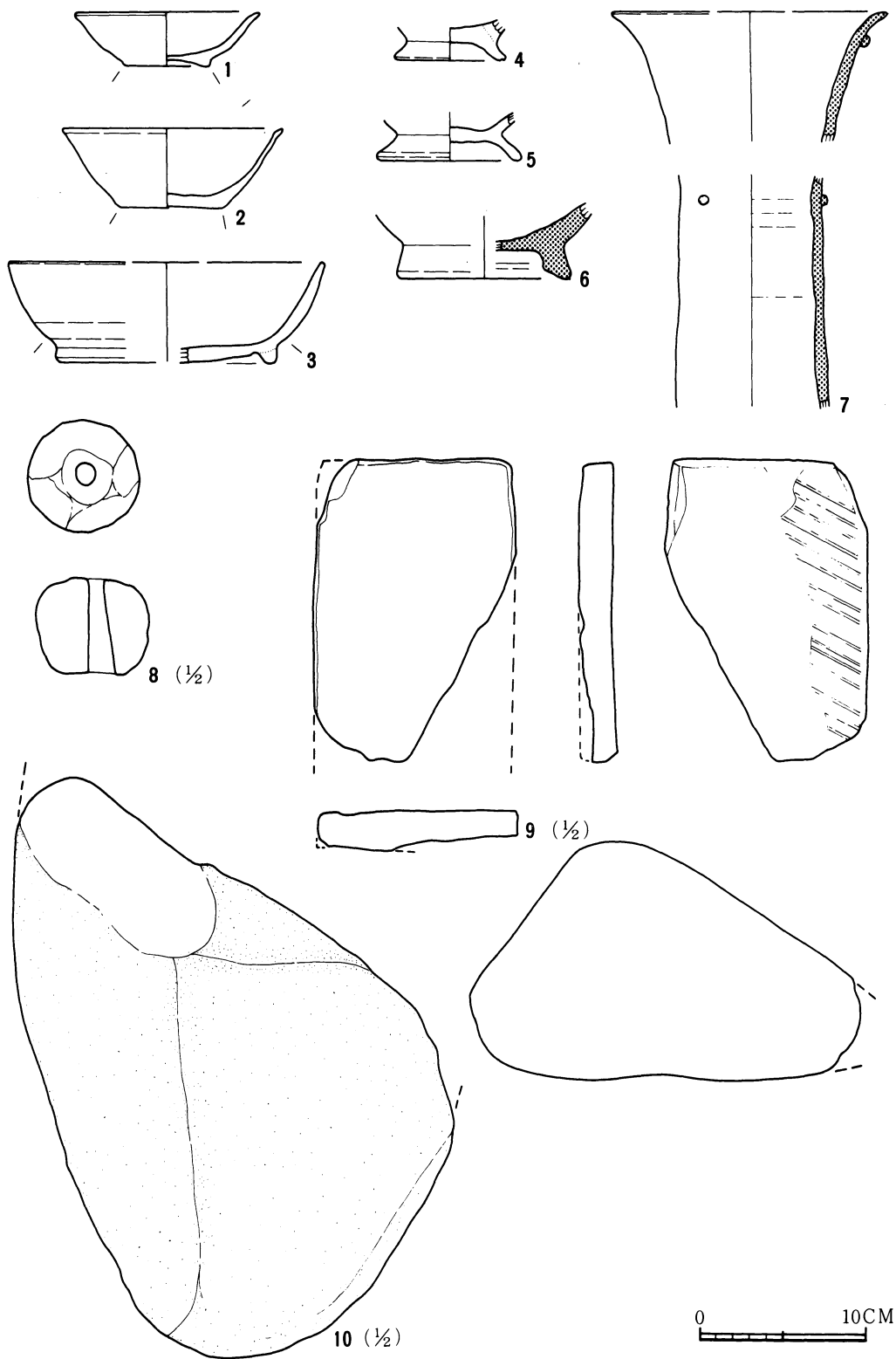
土製品・石製品 (第168図)

表採によって得られた資料である。1・2はロクロ整形の坏である。3は高台をもつ坏で大型品である。7は須恵器で、長頸壺の頸部と思われる。9は硯と思われ、裏面には製作痕がみられる。

第45表 表採遺物(土製品・石製品) (第168図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/3	10.9 5.0 3.2	体部回転ヨコナデ。底部回転糸切り。	暗黒褐色	良好。15。
2	坏	1/3	13.1 5.9 4.7	外・内面ナデ。底部糸切り。	明黄褐色	良好。
3	高台	底部1/3。 坏部の一部。	(19.8) 12.9 残5.8	外・内面回転ナデ。外面下位ヨコヘラケズリ。底部(高台)ヨコナデ。底面ヘラケズリ。張り付け高台。	明黒褐色	石英粒を多く含むが良好。
4	高台 付塊	高台のみ	— 6.2 2.0	ヨコナデ整形。内面ナデ。	暗褐色	良好。
5	高台	高台のみ	— 8.8 残2.9	塊底部に糸切り痕あり。外・内面磨減多い。	暗茶褐色	砂質だが良好。
6	高台 付壺	高台の一部	— 10.0 残3.5	外・内面ヨコ回転ナデ。内面底に自然釉あり。	暗灰青色	良好。須恵器。
7	長頸壺	頸部	11.2 — 残21.0	紐積み。外面は丁寧なナデ。内面は雑なナデ。径5mm程の円形付文あり。	暗灰褐色	良好。須恵器。
8	土玉	完形	長 2.8 最大径3.4	焼成良好。外面はナデ整形。	暗褐色	00。

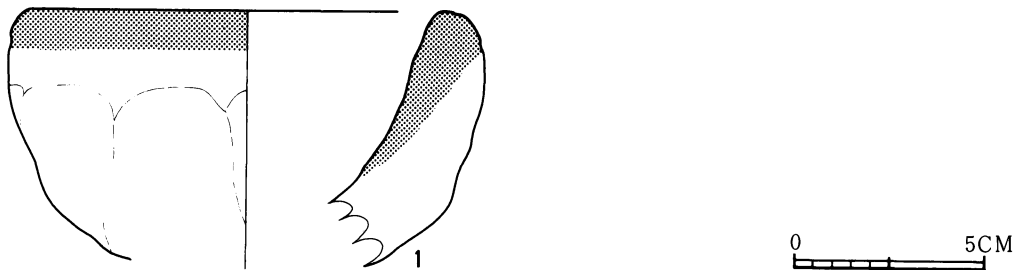


第168図 観音塚遺跡表採遺物実測図（土器・石器）

9	硯	4/5	長8.7 幅6.0 厚1.1	表面に使用による擦痕あり。裏面には作成時の擦痕あり。	暗黒青色	00。
10	砥石	1/2	幅13.0 — 長17.0	自然石利用。裏面にくぼみあり。	暗灰褐色	00。

埴埴 (第169図)

2 E区から表採された。2片に分かれており接合する。約1/2が残存する。外径約125 mm, 高さ約60 mm, 内径約90 mm, 深さ約50 mmで碗状を呈す。底は丸底と思われる。粘土紐による成形で、外面は指頭、ヘラ削りによる整形を加えている。色調は、内面と口縁下10 mmほどの外面及び底部外面が暗灰黒色を呈し、還元作用の強かったことがうかがわれる。外面のほかの部分には暗黄赤褐色を呈し、断面は黄赤褐色を呈す。材質は砂と粘土を混ぜたものである。



第169図 観音塚遺跡表採遺物実測図 (埴埴)

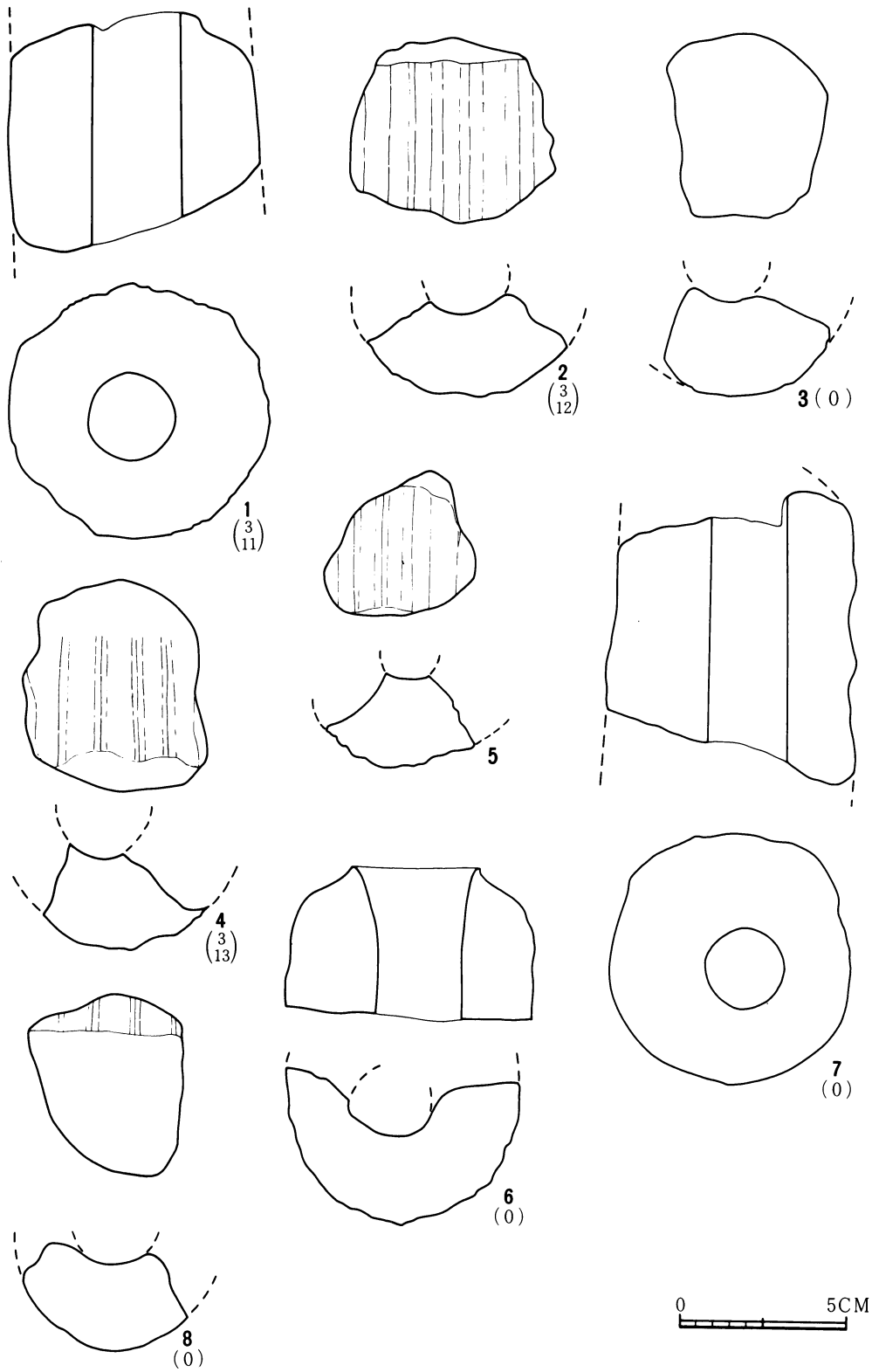
第46表 表採遺物 (埴埴) (第169図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	埴埴	1/2	12.5 6.5 残6.5	粘土紐による成形。外面は指頭による整形。内面は熱により剝離がみられる。全体に厚いつくりでしっかりしている。	暗黄赤褐色 外面は 暗灰黒色	

羽口 (第170図)

表採及び003号住居跡、鍛冶跡から出土したものである。完形品はない。6は先端部分がガラス質化していてすべて磨滅がはげしい。1～5の表面には縦方向に沈整様の凹凸がある。6・7は鍛冶跡から出土している。同一個体と思われる。これら羽口は、002号土壙から出土した羽口と外径・内径ともにほぼ同じである。6・7が鍛冶跡に伴う羽口とすれば、観音塚遺跡で得られた羽口は鍛冶工房に伴うものと推察されよう。



第170図 観音塚遺跡出土遺物実測図(羽口) (出土住居跡)
(遺物番号)

第47表 羽口表 (第170図)

() 復元

番号	器形	遺存度	法 量	成形・整形・調整	色調	備 考(接合関係)
1	羽口	面端を欠く。	径 7.7 孔径2.6	先端に近い部分と思われる。一部環元して青灰色化している。表面に凹凸あり。	青灰色	砂質。51。(003号住居跡、11)
2	羽口	1/4	— 孔径推定 2.2	先端は環元のための青灰色化している。外面にタテの沈線状の凹線あり。	断面暗赤褐色	砂質。57。(003号住居跡、12)
3	羽口	1/5	— —	先端の外面は青灰色。鉄滓の付着あり。内・外面ともに磨減多い。	青灰色	80。
4	羽口	1/5	— —	先端は環元され青灰色化している。外面タテに沈線状の凹線あり。	断面暗赤褐色	砂質。53。(003号住居跡、13)
5	羽口	1/5	孔径2.1 —	外面に沈線上の凹線がみられる。	暗赤褐色	446。
6	羽口	1/4	先端孔3.8 —	外面に指頭による押しあり。先端はガラス質化している。	暗赤褐色	242。(鍛冶跡)
7	羽口	面端を欠く。	径 7.2 孔径3.3	6と同一個体か。	暗赤褐色	242。(鍛冶跡)
8	羽口	1/5	— —	外面は環元して赤褐色化している。	断面暗褐色	砂質。

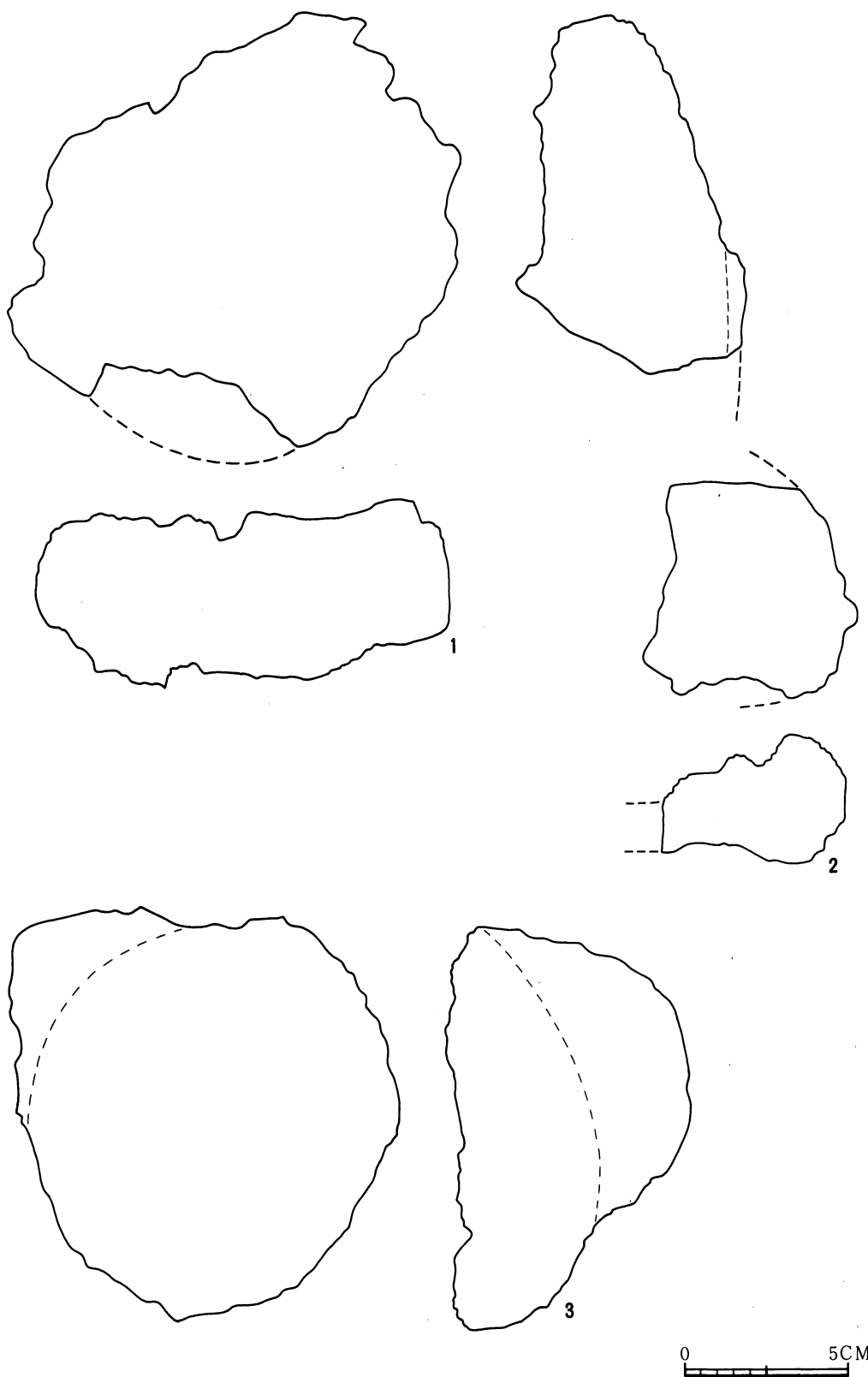
坳形滓 (第171図)

3点を図化した。小破片は相当数にのぼる。1・3は、006号住居跡の覆土から出土したが、詳細は不明である。直径は両者とも12cm強であり、鍛冶炉の内径が推察される。一方、2は1・3にくらべて小型である。また、鍛冶炉出土の2(第154図)も小型である。12cm前後の坳形滓と、7～8cm前後の坳形滓の存在が考えられる。

第48表 坳形滓表 (第171図)

() 復元

番号	器形	遺存度	法 量	成形・整形・調整	備考(出土住居跡)
1	坳形滓	1/2	径12.7 厚 4.8	表面に赤サビが浮き出しており、鉄分の含有の多いことが推測される。	00, 006号住居跡。
2	坳形滓	1/4	— —	外縁は厚くなっている。上面にはサビが若干みられる。	00。
3	坳形滓	完形	径12.2 厚 4.3	底部に炉材と思われる砂の付着がみられる。	447。006号住居跡。



第171図 観音塚遺跡表採遺物実測図（坑形滓）

第4節 小 結

観音塚遺跡で検出調査された遺構は、竪穴住居跡19軒、鍛冶跡1基、土壙13基であった。これらの遺構はすべてが奈良・平安時代に属するが、遺構の重複がみられ、数期にわたり集落が営まれていたことが推察される。

住居跡 実測図を掲載できた遺物は約120個体であったが、復元実測によるものが多かった。出土した土器群の器種構成は、土師器では坏・埴・壺・甕形土器で、須恵器では坏・蓋・長頸壺・高台付坏・甕形土器であった。調査区が斜面に立地しているためか流入した遺物が多く、住居跡の時期決定には参考にしかない遺物も多い。図化できた土器群を概観すると、時間的幅が大きいことに気づく。たとえば、半球状の埴形土器や足高台坏形土器がみられることなどである。本節も倉田氏の編年表を参考に、各住居跡の位置付けを行いたい。

- II期 004・005・008・017号住居跡
- III期 007・010・012・018・019号住居跡
- IVb期 002・006・009号住居跡
- VI期 016号住居跡
- VII期 001・011号住居跡、鍛冶跡
- VIII期 013・015号住居跡
- X期 001号土壙

このような変遷が考えられる。このことから観音塚遺跡は7世紀前半、7世紀末、9世紀中葉から10世紀中葉の3回にわたり集落が営まれたことがわかる。斜面の調査のために集落全体については不明であるが、台地上の集落の時期も、ほぼこの各期に属するものと推察できる。鍛冶跡からの遺物の出土は少なかったが、VII期に属すると思われる、10世紀初頭に位置づけられるものと推察される。

土壙 13基が検出された。001号土壙は出土遺物などから墓壙と思われる。003号土壙は、壁の状況などから鍛冶跡に関係したものの可能性がある。その他の土壙は、005・010・011号土壙のように方形に近く、底面も平らなものと、楕円形で底面が水平でないものとに分けられる。007号土壙は008号住居跡によって切られており、楕円形を呈す土壙はII期よりも先行する可能性がある。また、方形に近い形状を呈する土壙のうち、005・001号土壙からは遺物が出土しており、両者の間に性格のちがいが認められる。

鍛冶跡 すでに研究紀要7で報告したものである。紀要には大沢正己氏による「千葉県下遺跡出土の製鉄関係遺物の分析調査」が執筆されている。以下に再録するが、図版などは削除した。なお、紀要の各論における計測値の一部を本稿で訂正している。

遺跡は千葉市千葉寺町 720-8 番地他に所在し、平安時代に比定されている。検出された遺構は、住居跡 19、鍛冶跡 1、土壌 13 である。このうち、鍛冶跡は、長さ 3.85 m、幅 2.2 m、深さ 0.25 m の形状で、その中に炉跡が 30×40 cm で確認された。この炉跡周辺からは、椀形鍛冶滓、未成鉄器、鍛造剥片等が出土したので、前者 2 種の調査を行なった。なお、当遺跡では、埴塼片や羽口片が表面採取品として得られている。

1) 鍛冶跡出土鍛錬鍛冶椀形滓

外観：表皮は、や、青味を帯びた黒褐色に一部茶色を混じ、平坦な面にも若干の気泡と粗鬆さをもつ椀形鍛冶滓である。裏面は灰色に鉄錆を発生し、凸レンズ状の形で中央部に気泡を多発する。砂面は青味がかかった茶褐色で緻密質である。大きさ、85×82×26 mm で、重量は 240 g あった。

顕微鏡組織：鉱物組成は白色粒状の多量のヴスタイト (Wüstite: FeO) と、長柱状のファイヤライト (Fayalite: 2 FeO·SiO₂)、それに地の暗黒色のガラス質から構成されている。

化学組成：全鉄分 (Total Fe) は高目で 48.3%、金属鉄 (Metallic Fe) は 0.29%、酸化第 1 鉄 (FeO) が多くて 46.3%、酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) は 17.12% であった。

造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO) は 33.97%、二酸化チタン (TiO₂) は 0.40%、バナジウム (V) 0.02% と両者とも低目である。また、酸化マンガン (MnO) 0.08%、クロム (Cr) 0.01%、硫黄 (S) 0.031%、五酸化リン (P₂O₅) 0.24% と、随伴微量元素はおしなべて低目となっているが、銅 (Cu) のみは 0.013% と高目である。

この鉄滓は、鍛冶滓でも製品加工時の鍛錬鍛冶滓 (小鍛冶滓) であり、製錬滓や精錬鍛冶滓に比べて随伴微量元素は低目となっている。高目成分は、鉄分と銅 (Cu) である。

2) 鍛冶跡出土未成鉄器

外観：長さ 45 mm、最大幅 16 mm、高さ 11 mm の角棒状鉄器半製品である。表面は黒褐色の鉄錆に覆われているが、金属鉄の残留はよく、磁性も強い。重量は 22.05 g であった。

顕微鏡組織：角状鉄器の鍛伸方向に対して直角にサンプリングした組織で、ナイトル腐食 (etching) である。結晶粒は歪を受け齊粒となっていない。焼なましを受けておらず、冷間加工段階で放置されたのであろう。組織写真 (略) の右側は表層近くで、脱炭され炭素含有量は低く純鉄組織である。写真 (略) 左側は、や、黒味を帯びているが、これは炭素量が高目で、パーライト (Pearlite) が認められる。鉄器内部で炭素含有量が濃くなっている。鋼中の非金属介在物は少なく純度の高いものであった。

化学組成：鉄分の残留は非常に良好であり、全鉄分 (Total Fe) が 99.4% あり、このうち、金属鉄 (Metallic Fe) は 98.9% を示す。あとは酸化第 1 鉄 (FeO) で 0.58%、酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) で 0.067% であった。

炭素 (C) 含有量は 0.19% で軟鋼 (C: 0.13~0.20%) レベルである。二酸化硅素 (SiO₂) 0.

15%，酸化マンガン (MnO) 0.01%，硫黄 (S) 0.005%とこれらは非常に低く、五酸化燐 (P₂O₅) 0.080%，銅 (Cu) 0.018%，二酸化チタン (TiO₂) 0.03%，バナジウム (V) 0.01%以下である。原料素材は砂鉄製品と考えられる。

小結

観音塚遺跡出土鉄滓は、製品加工の段階で排出された鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）であり、鍛冶炉の火窟曲面を残す椀形滓であった。鉱物組成は Wustite+Fayalite であり、化学組成は、鉄分 48%代と多く、造滓成分は 40%代、TiO₂0.40%、V 0.02%で両成分は精錬鍛冶滓に比較して約 1/10 以下の低目である。

観音塚鍛錬鍛冶滓は、取香、御幸畑両遺跡出土の精錬鍛冶滓とは明らかに構成成分が異なっている。

半成品の鉄器片は、結晶粒に歪が残っているところから、冷間加工過程で放置されたと推定される。炭素含有量は端部が脱炭を受け、内部に Pearlite を残して、これらの平均値で 0.19%と軟鋼レベルであった。

鍛錬鍛冶滓と鉄器片の成分間の動きを示すと下表の如くなる。

サンプル		成分									
		T.Fe	M.Fe	C	Mno	S	P ₂ O ₅	Cu	Cr	TiO ₂	V
鍛冶址	鍛錬鍛冶滓	99.4	—	—	0.08	0.031	0.24	0.013	0.01	0.40	0.02
	鉄器	99.4	98.9	0.19	0.01	0.005	0.080	0.018	0.002	0.03	<0.01

	区分	全鉄分	金属鉄	酸化第1鉄	酸化第2鉄	二酸化硅素	酸化アルミニウム
		(TotalFe)	(MetallicFe)	(FeO)	(Fe ₂ O ₃)	(SiO ₂)	(Al ₂ O ₃)
1)	鍛錬鍛冶滓	48.3	0.29	46.3	17.12	23.0	6.76
2)	鉄器	99.4	98.9	0.58	0.067	0.15	0.08

酸化カルシウム	酸化マグネシウム	酸化マンガン	二酸化チタン	クロム	硫黄	五酸化燐	炭素
(CaO)	(MgO)	(MnO)	(TiO ₂)	(Cr)	(S)	(P ₂ O ₅)	(C)
3.32	0.89	0.08	0.40	0.01	0.031	0.24	0.10
0.01	0.02	0.01	0.03	0.002	0.005	0.080	0.19

バナジウム	鋼	造滓	造滓成分	TiO ₂
(V)	(Cu)	成分	TotalFe	TatalFe
0.02	0.013	33.97	0.703	0.008
<0.01	0.018	0.26	0.003	0.000

以上が大沢氏の論文の一部である。この分析結果から、本跡は「鍛錬鍛冶工房跡」であることがわかる。今回の調査では、本跡のほかにも 015 号住居跡の床面で火床的な部分が検出されており、製鉄遺構と思われる。003 号土壙も同様のことが考えられる。

紀要において、千葉・市原周辺での製錬炉と思われる遺構の調査例はない旨をのべたが、その後の調査で、市原市押沼大六天遺跡斜面部で箱形炉が調査されており、今後も本地域での製錬遺跡発見の可能性がでてきている。本遺跡は小支谷の北向き斜面に立地しているが、南向き斜面は調査区外となっている。この部分でも遺構の存在が考えられる。原材料の供給については、いまだ未解決な部分が多い。穴沢義功氏の教示によれば、本地域でも山砂に含まれる砂鉄の採集が可能であるという。今後、調査例の増加にともない解決されるものと思われる。

参考文献

石田広美・松村恵司「山田水呑遺跡」(山田遺跡調査会 1977)

倉田義広「千葉市域における奈良・平安時代の土器について」(『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』史館同人 1983)

鈴木定明他「研究紀要 7」(財団法人千葉県文化財センター 1982)

第IV章 山ノ神遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と環境

山ノ神遺跡は、千葉市宮崎町 668-2 番地他に所在する。観音塚遺跡の南東方向で、支谷をさむ対岸に所在する。東西を小支谷により割されており、北方を千葉寺の支谷が割す。遺跡はこのような小支谷により割された小舌状台地に立地している。支谷に向って緩傾斜がつづき、支谷底へは急激に傾斜する。路線と電気施設用地が調査対象地で、他の調査遺跡が細長いのに対して、変則的な形をしている。標高は約 23 m で、調査区内での比高差は約 2 m である。

第2節 調査の方法と経過

(1) グリットの設定

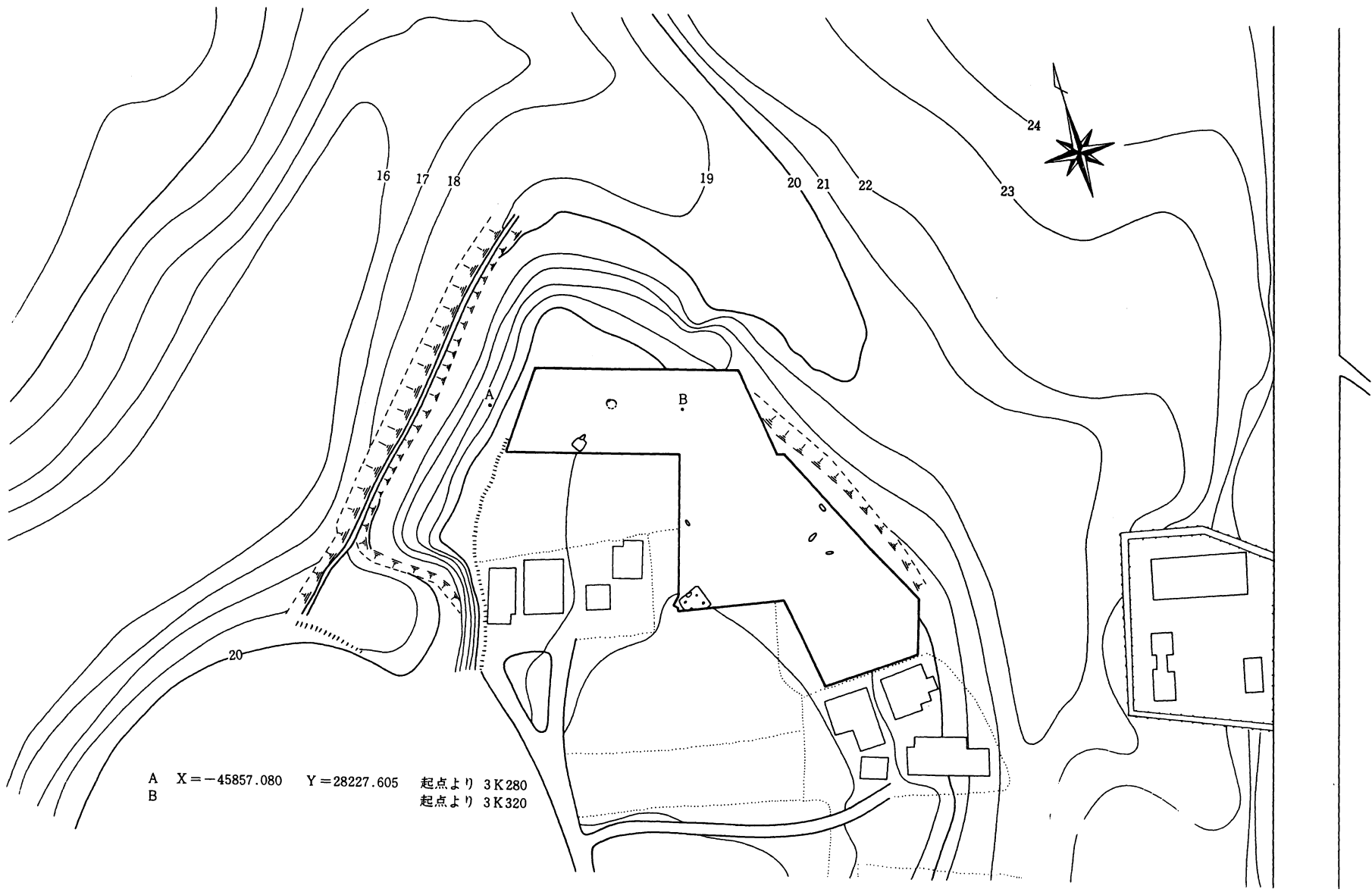
山ノ神遺跡は、起点から 3 k 280 m を A 点、同じく 3 k 320 m を B 点として、凡例 12 の方法で大グリット及び小グリットを設定した。このグリットを基準に調査区全域にグリットを設定した。

(2) 調査の経過

発掘調査は、昭和 53 年 12 月 1 日から昭和 54 年 2 月 20 日まで実施した。区設定ののち、12 月 4 日からトレンチによる調査を開始し、人力ですべての表土を除去した。調査前は畑地であったために、表土除去は順調に進んだ。遺構検出はローム上面で行ったが、結果的には表土層(木根を多く含む)の下面で可能であった。I 層・II 層(第 174 図参照)からは縄文式土器の包含層や集石礫群などが検出された。1 月からは、遺構の調査を開始したが、遺構の分布密度は薄く、調査区内にちらばっている。最後に、先土器時代の確認グリットを設定して調査したが、遺物は検出できなかった。このような経過をたどり、2 月 20 日には現地調査をすべて終了し、3 月 16 日には、千葉県教育委員会文化課の担当者による終了確認が行なわれた。

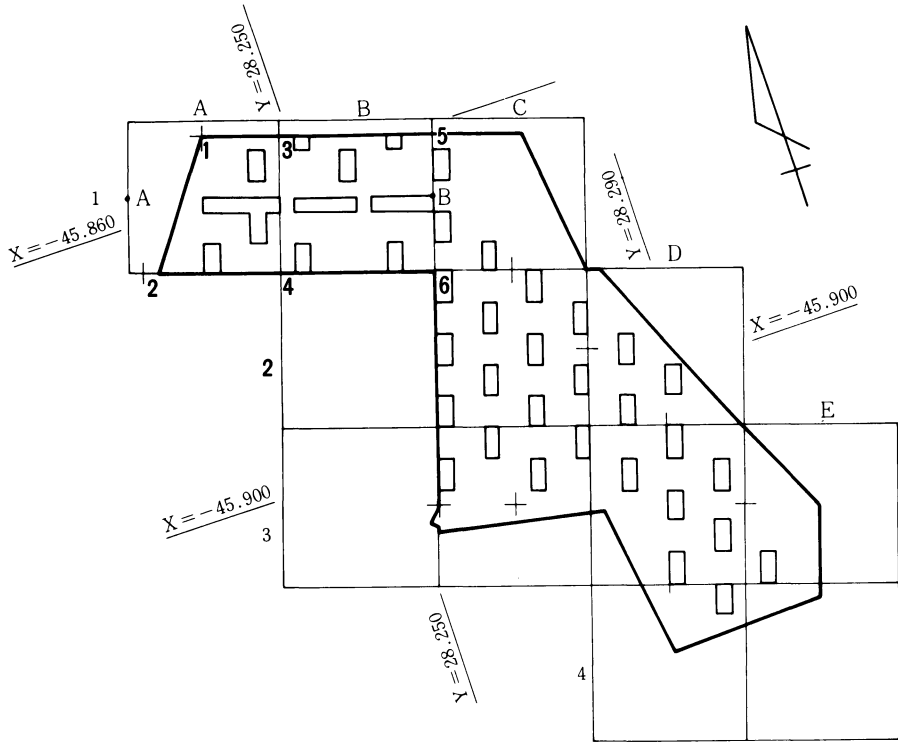
第3節 検出された遺構と遺物

本遺跡で調査された遺構は、竪穴住居跡 3 軒、土壇 4 基、包含層 1、集石礫群 1 であった。遺構は、1 A・1 B・3 C 区から住居跡が各 1 軒、包含層は 3 E 区から、集石礫群は 1 B 区で検出された。土壇は台地縁辺から検出された。



A X = -45857.080 Y = 28227.605 起点より 3K280
 B 起点より 3K320

第172図 山ノ神遺跡調査区・周辺地形図 (1/1,000)



	X	Y
1	-45.852.491	28.239.562
2	-45.867.216	28.226.479
3	-45.855.524	28.249.090
4	-45.872.676	28.243.630
5	-45.861.591	28.268.148
6	-45.878.743	28.262.688

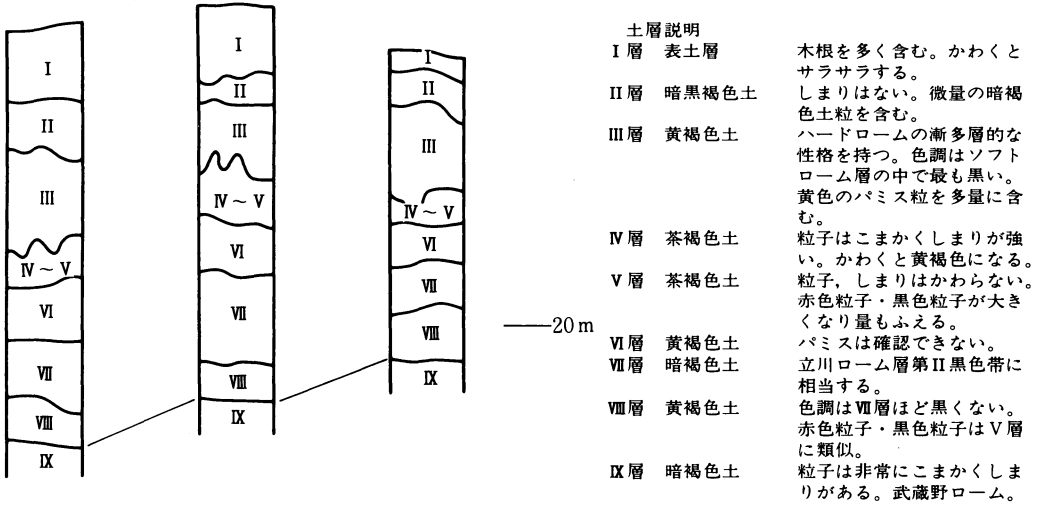
00	10	20	30	40	50	60	70	80	90
01									
02									
03									
04									
05					55				
06									
07									
08									
09									99

第173図 区設定図・プレグリット配置図

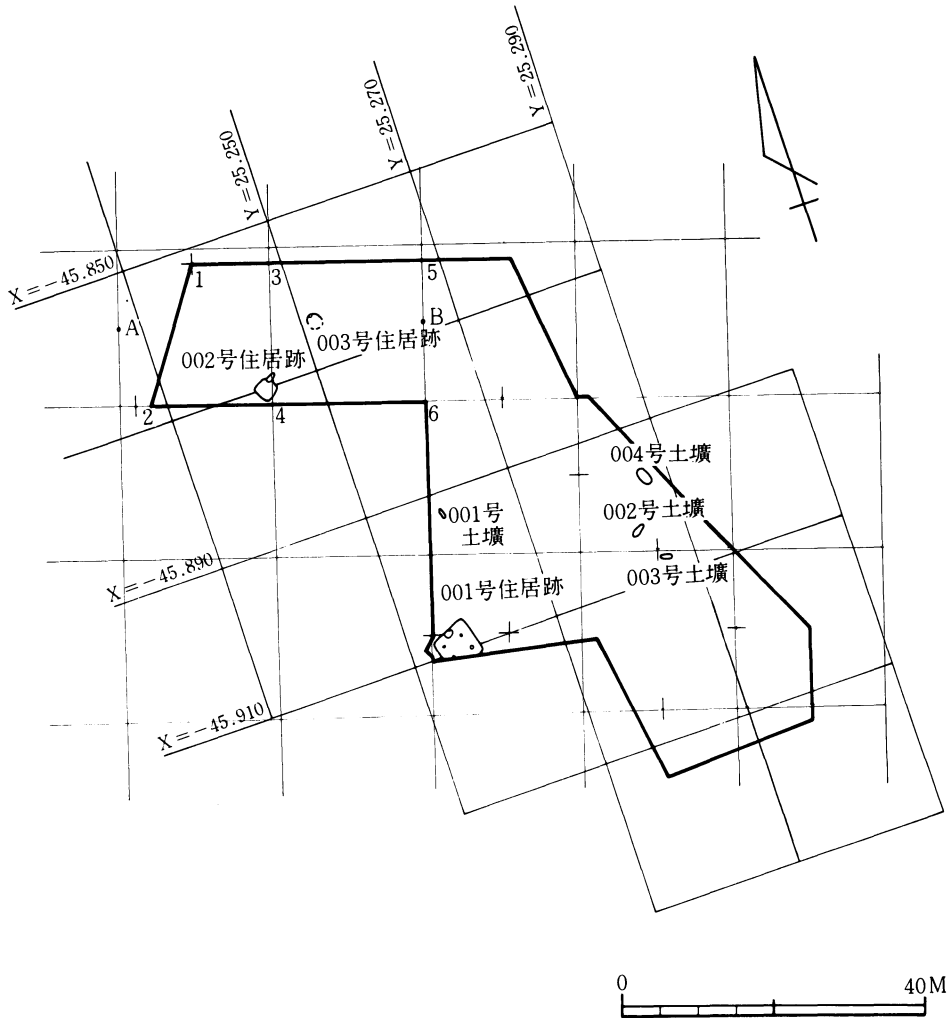
2A-95

3B-00

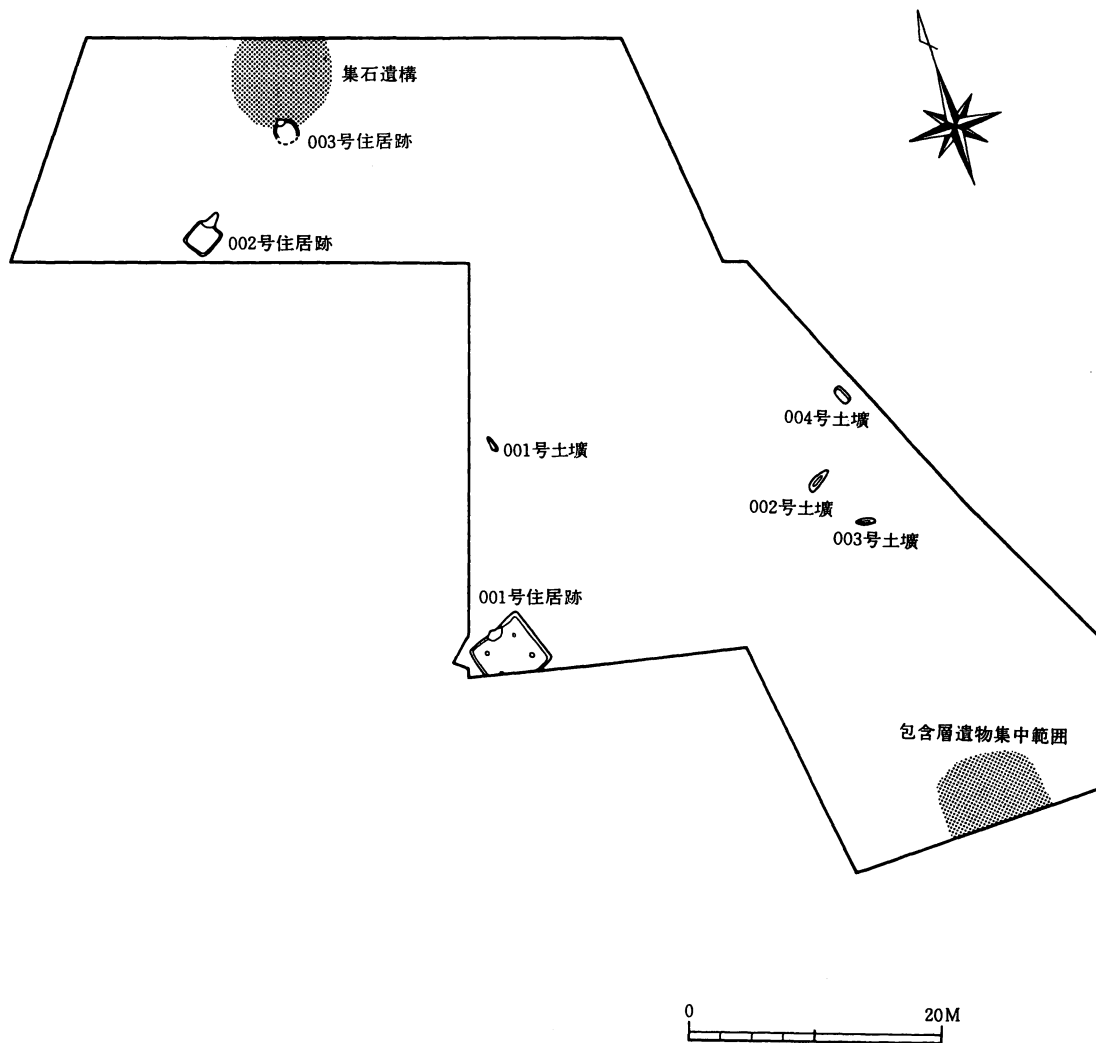
3B-04



第174図 山ノ神遺跡土層柱状図



第175図 遺構配置図・公共座標関係図



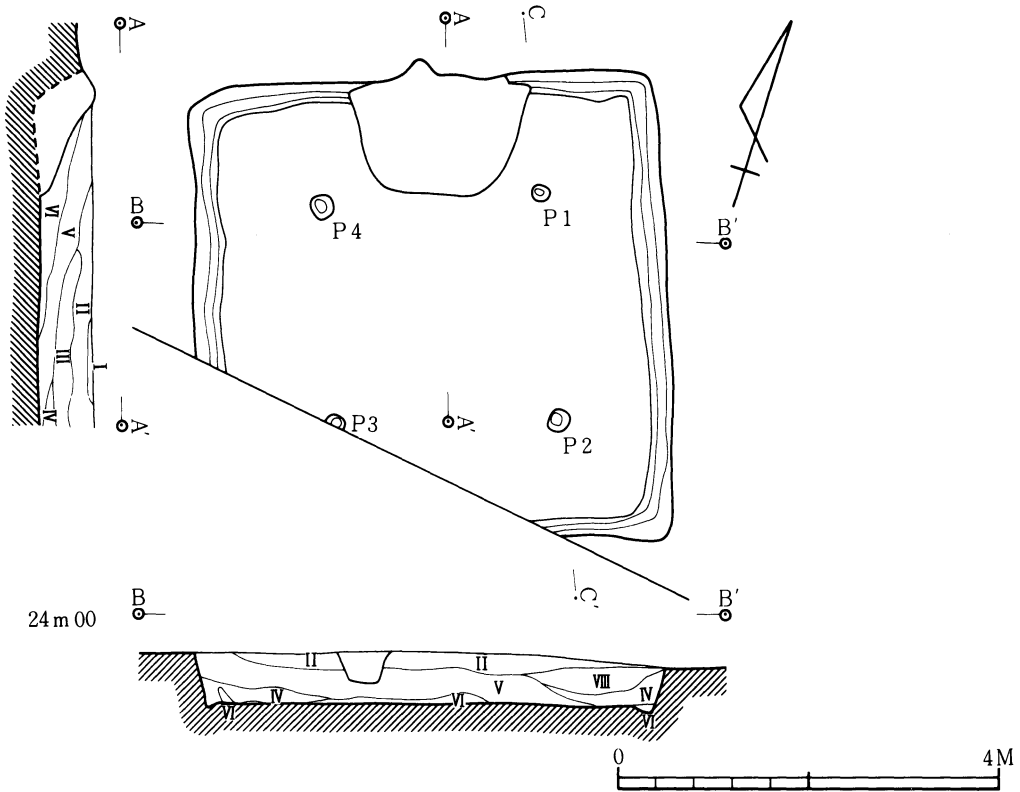
第176図 遺構配置図 (1/500)

(1) 竪穴住居跡

001号住居跡 (第177~180図)

3C区より検出調査された。主軸方位はN-20°-Wである。住居跡内覆土は6層に分けられる。全体に粒子はこまかく、ロームブロック・ローム粒を含んでいる。南壁と西壁の一部は調査区外になり調査できなかった。

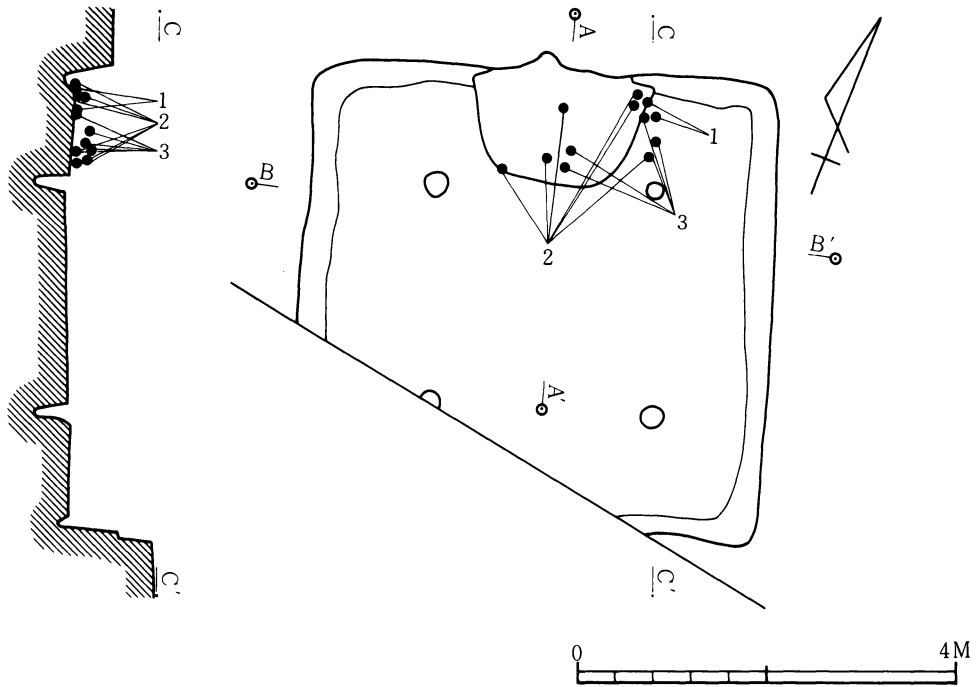
平面形は、4.76×5.02mではほぼ正方形を呈している。床面積は、4.32×4.4mで約19m²を計る。床面はほぼ平らで、床面の標高は約23.1mである。周溝はカマド部分をのぞき全周している。幅は約20cm、深さは3~10cmで一定していない。柱穴は4本検出された。いずれも主柱穴と思われる。4本とも床面での直径は25cm前後で、深さはそれぞれ22, 25, 19, 16cmを計り浅い。壁高は50~60cmである。遺物は3点が図化できた。すべてがカマドの周辺から出土している。



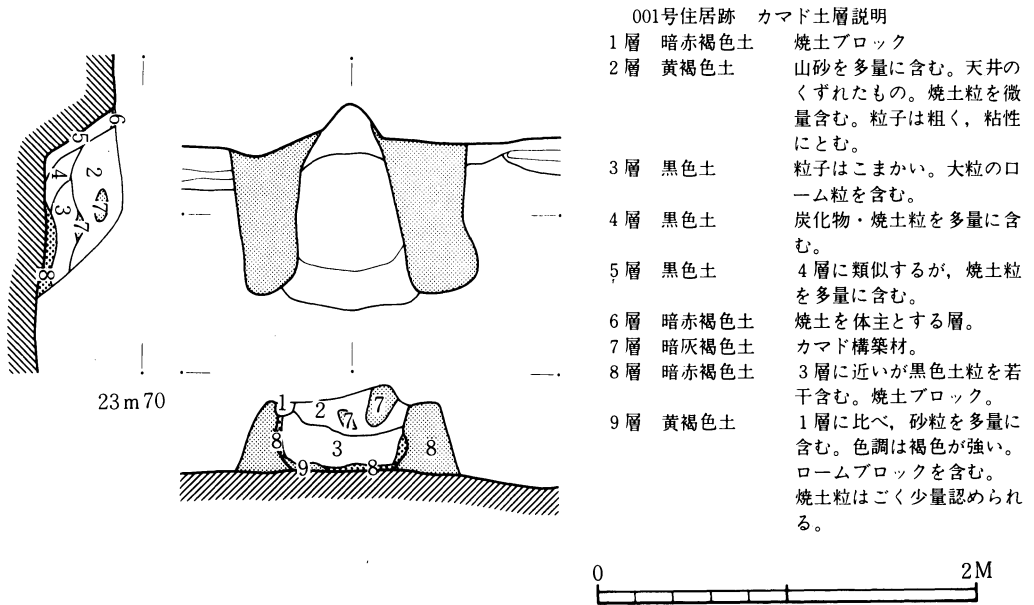
001号住居跡 土層説明	
I層 黒褐色土	粒子はこまかく、しまりない。親指大のロームブロックを多量に含む。
II層 黒褐色土	I層より粒子は粗い。ロームブロックは少なくなり、ローム粒が増える。色調は黒色に近い。
III層 黒褐色土	II層より粒子は粗くなり、ローム粒を多量に含む。
IV層 黒色土	色調は最も黒い。粒子はこまかい。ロームブロックを多量に含む。
V層 黒色土	粒子はこまかくしまりもある。ロームブロック・ローム粒ともにIV層より少ない。山砂・焼土粒を若干含む。
VI層 褐色土	粒子は、こまかい。しまり、粘性がある。

第177図 001号住居跡実測図

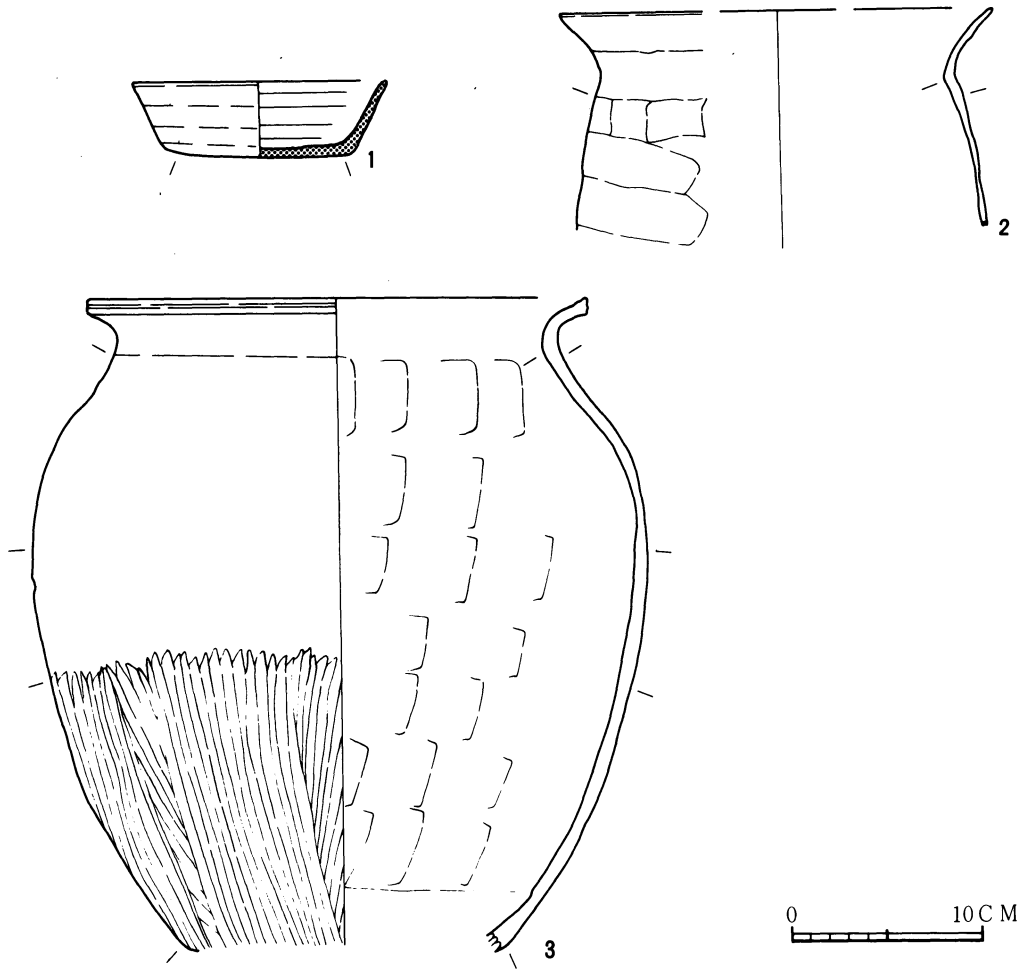
カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅 1.1 m、奥行き 20 cm を計る。カマド内堆積土は 9 層に分けられ、全体に炭化物・焼土粒を含んでいる。カマド袖はしっかりしている。



第178図 001号住居跡遺物出土状況図



第179図 001号住居跡カマド実測図



第180図 001号住居跡出土遺物実測図

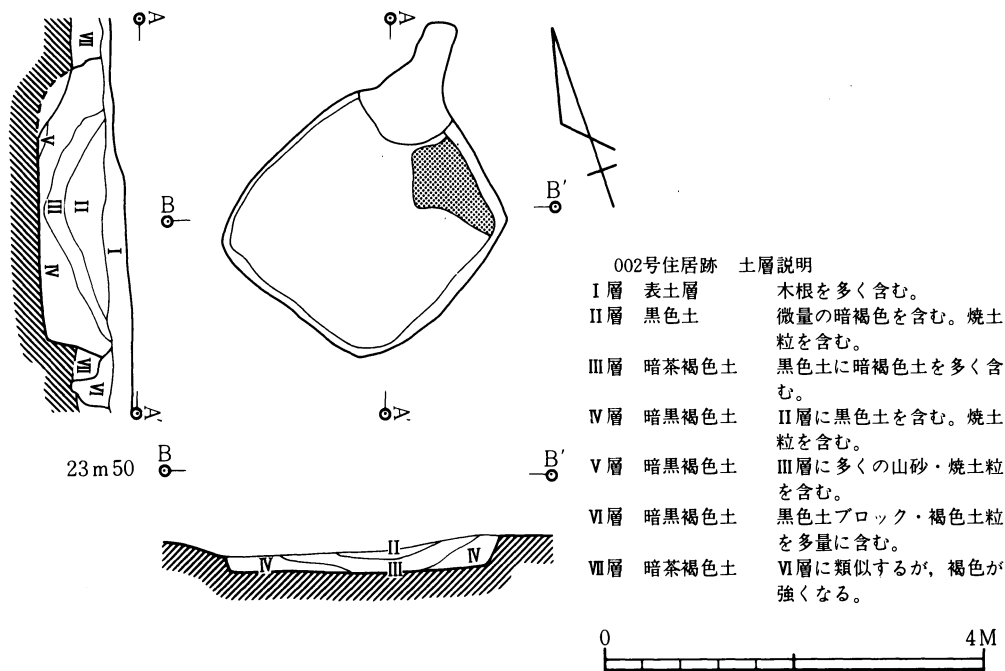
第49表 001号住居跡出土遺物表 (第178・180図)

() 復元

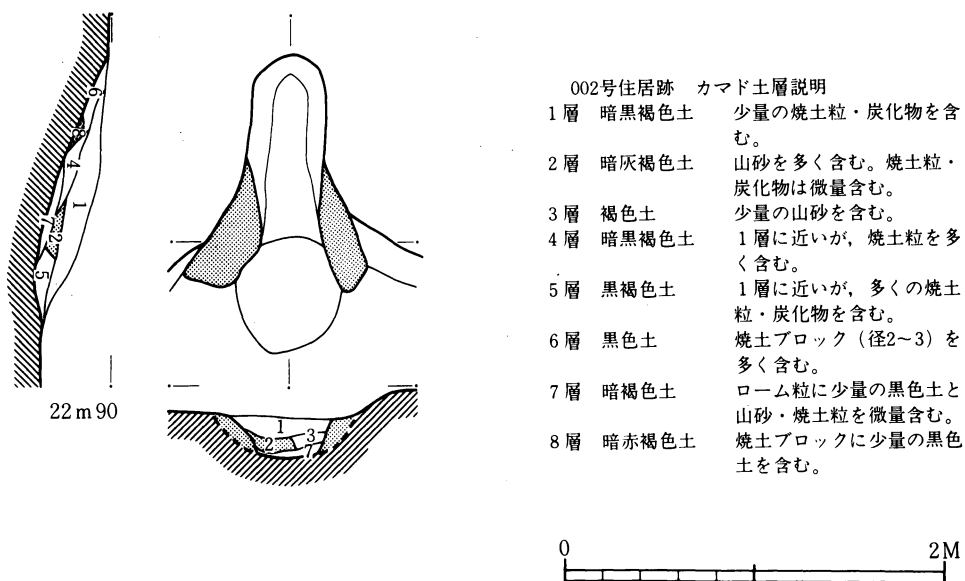
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	口縁部一部 欠く。	13.1 8.4 3.9	粘土紐成形。外・内面回転ナデ。底部へラ整形。	暗灰青色	39, 52。須恵器。
2	甕	1/3	(22.7) — 残11.2	外面上位ヨコヘラケズリ。下位右下りヘラケズリ。内面ナデ。口縁ヨコナデ。	暗茶褐色 煤付着	砂粒を多く含む。61, 45, 47, 48, 50, 51。
3	甕	1/4	26.0 (16.8) 残33.4	粘土紐成形。外面上位ナデ。下位タテミガキ。内面ナデ。口縁部ヨコナデ。	暗黄褐色	良好。石英粒多く含む。49, 40, 41, 48, 53。

002号住居跡 (第181・182図)

1 A区から検出調査された。主軸方位はN-55°-Eである。住居跡内覆土は4層に分けられた。炭化物・焼土粒を若干含んでいる。トレンチ調査の段階で住居跡の存在が確認でき、ローム掘込みは浅かった。第181図のVI層は攪乱と思われる。住居跡の平面プランをVII層上面で確



第181図 002号住居跡実測図



第182図 002号住居跡カマド実測図

認できた可能性があるが、ローム上面まで下げてしまった。覆土は自然堆積の状況を示しているが、短期間での埋没が推察される。

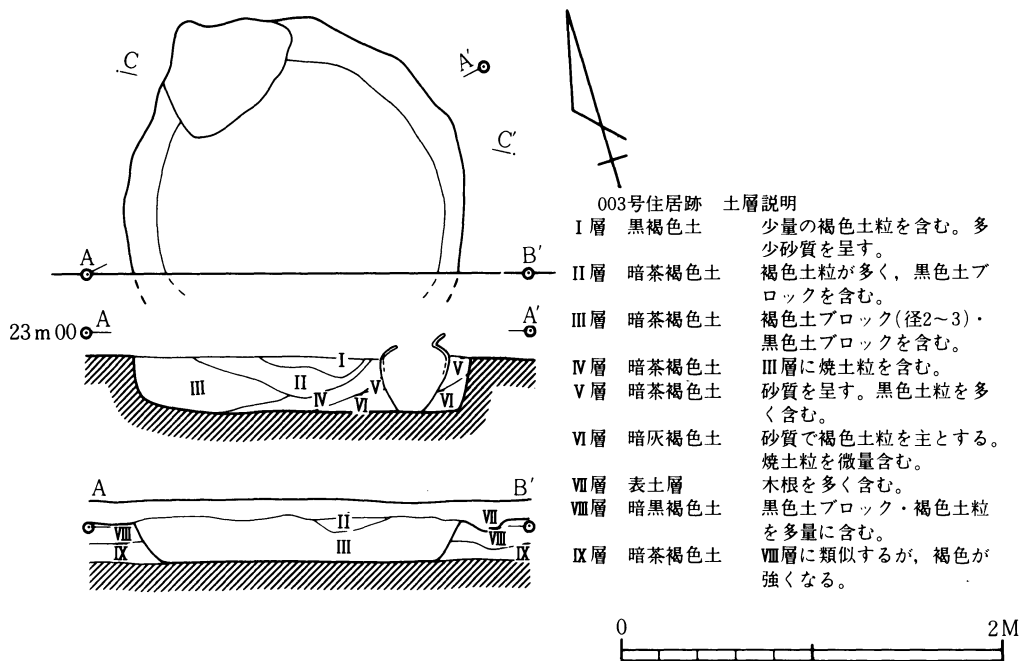
平面形は、 2.2×2.5 m で多少ゆがんだ正方形を呈す。床面積は、 2.1×2.3 m で約 4.8 m² を計る。壁高は約 0.7 m で、床面の標高は、約 22.5 m である。床面は軟弱で掘り形はみられなかった。周溝・柱穴は検出されない。東壁近くには焼土層の堆積がみられた。遺物の出土は少なく、図化できるものはなかった。

カマドは北隅に構築されており、掘込み幅約 85 cm、奥行き約 90 cm を計る。カマド内堆積土は 8 層に分けられた。煙道部はなめらかに立ち上がり、幅にくらべて奥行きの長いカマドである。

003(01)号住居跡 (第183~186図)

1 B区より検出調査された。主軸方位は $N-20^{\circ}-W$ である。住居跡内覆土は 9 層に分けられる。褐色土粒及び黒色土粒を多く含み、しまりはない。集石遺構を切って構築されている。トレンチ調査の段階で、住居跡の存在が確認できていたことが、土層断面の検討からわかった。トレンチにより南側の一部を掘り下げてしまったが全形をうかがうことができる。

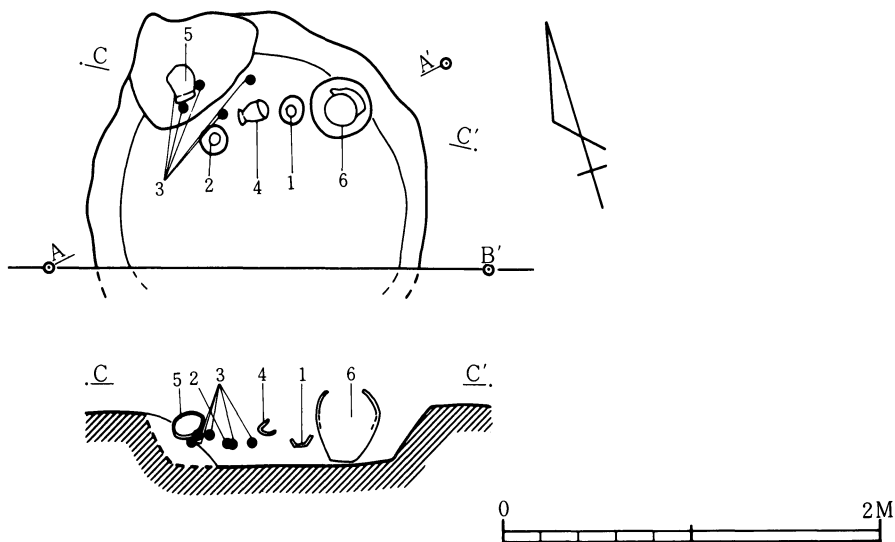
平面形は、半径 1.8 m の円形に近い形状を呈している。壁面の立ち上がりはゆるやかである。床面積は約 10.1 m² を計る。周溝・柱穴という付帯施設は全く検出されなかった。壁高は表土層下端から約 80 cm を計り、床面の標高は、約 22.2 m であった。遺物は 6 点が図化できた。すべ



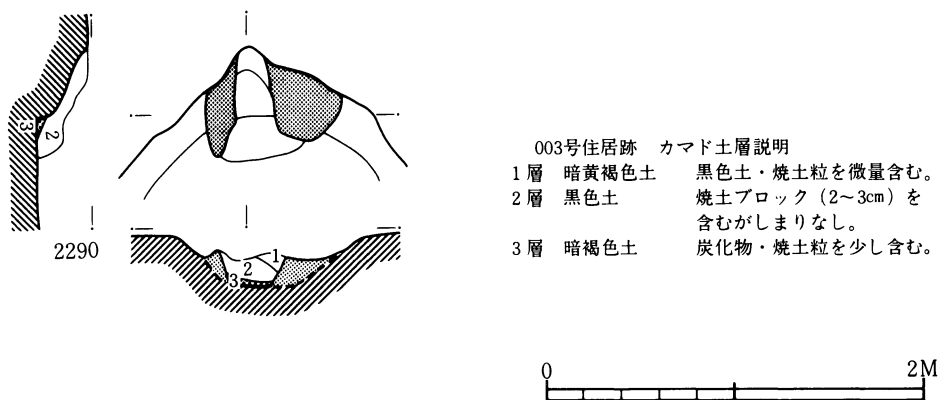
第183図 003(01)号住居跡実測図

て完形に近いものである。特に6の甕は床に置かれた状態であった。他の遺物の床から10cmほど浮いて検出された。

カマドは北側に構築されていた。掘込み幅約72cm、奥行き約20cmである。煙道部の立ち上がりはいったん垂直に立ち上がった後に、ゆるやかに再び立ち上がる。カマド内堆積土は3層に分けられた。覆土は焼土ブロックを多く含んでいる。掘り形は幅が広く、山砂を充塞して袖部をつくっている。



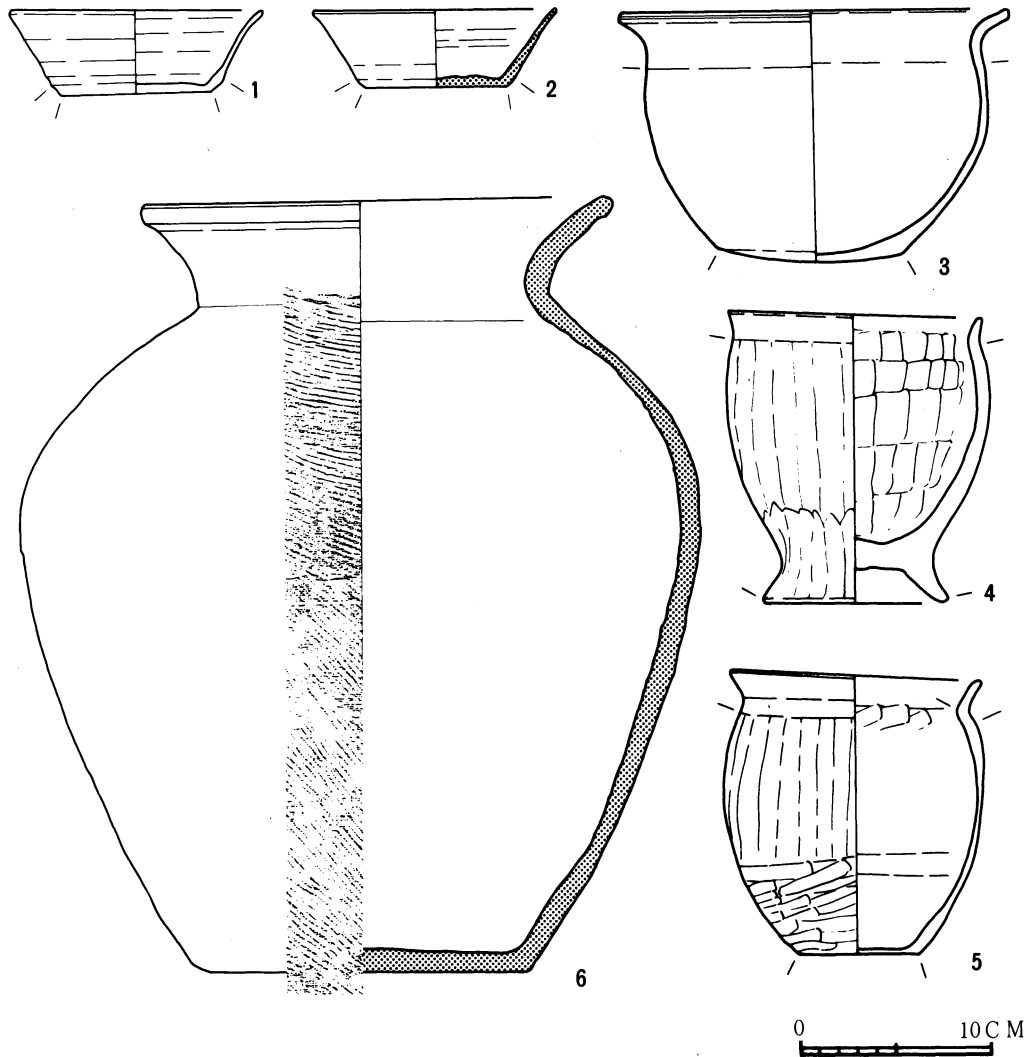
第184図 003(01)号住居跡遺物出土状況図



003号住居跡 カマド土層説明

- 1層 暗黄褐色土 黒色土・焼土粒を微量含む。
- 2層 黒色土 焼土ブロック(2~3cm)を含むがしまりなし。
- 3層 暗褐色土 炭化物・焼土粒を少し含む。

第185図 003(01)号住居跡カマド実測図



第186図 003(01)号住居跡出土遺物実測図

第50表 003号住居跡出土遺物表 (第183~186図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	完形	13.3 7.8 4.5	外・内面回転ナデ。底部回転ヘラケズリ。	暗茶褐色	雲母片は含まない。良好。06。
2	坏	完形	12.8 7.5 4.1	粘土紐積み成形。外・内面回転ナデ。底部周囲ヨコヘラケズリ。底部回転ヘラ切り。	暗青灰色	良好。須恵器。08。

3	鉢	口縁部・胴部の一部を欠く。	20.3 9.6 13.2	粘土紐積み成形。外・内面ナデ。口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	暗黄茶褐色	良好。10, 04, 09, 11, 12, 13。
4	台付甕	完形	13.4 9.6 14.9	粘土紐積み成形。外面2段タテヘラケズリ。脚部外面の一部・内面ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。内面ヨコヘラケズリ。	暗褐色	普通。07。
5	小型甕	完形	13.2 6.4 14.2	粘土紐積み成形。外面・口縁部ヨコナデ。胴部中位下から上へのヘラケズリ。胴部下位左下りケズリ。内面・口縁部・くびれ部ヨコヘラケズリ。中位ヨコナデ。胴部下位、部分的にヘラミガキ。器面のあれ多い。	暗褐色	砂粒多く含むが良好。14。
6	甕	口縁一部欠く。	24.2 16.7 40.0	粘土紐積み成形。外面胴部はヨコタタキ。下位はタタキの後にナデ。内面はナデ。器面に剝離がみられる。断面は、外側暗灰色、内部黒色。	暗灰褐色 断面は黒色	若干の砂を含むが、雲母片を微量含む。須恵質。24, 19。

(2) 土壌 (第187~188図)

001号土壌 (第187図)

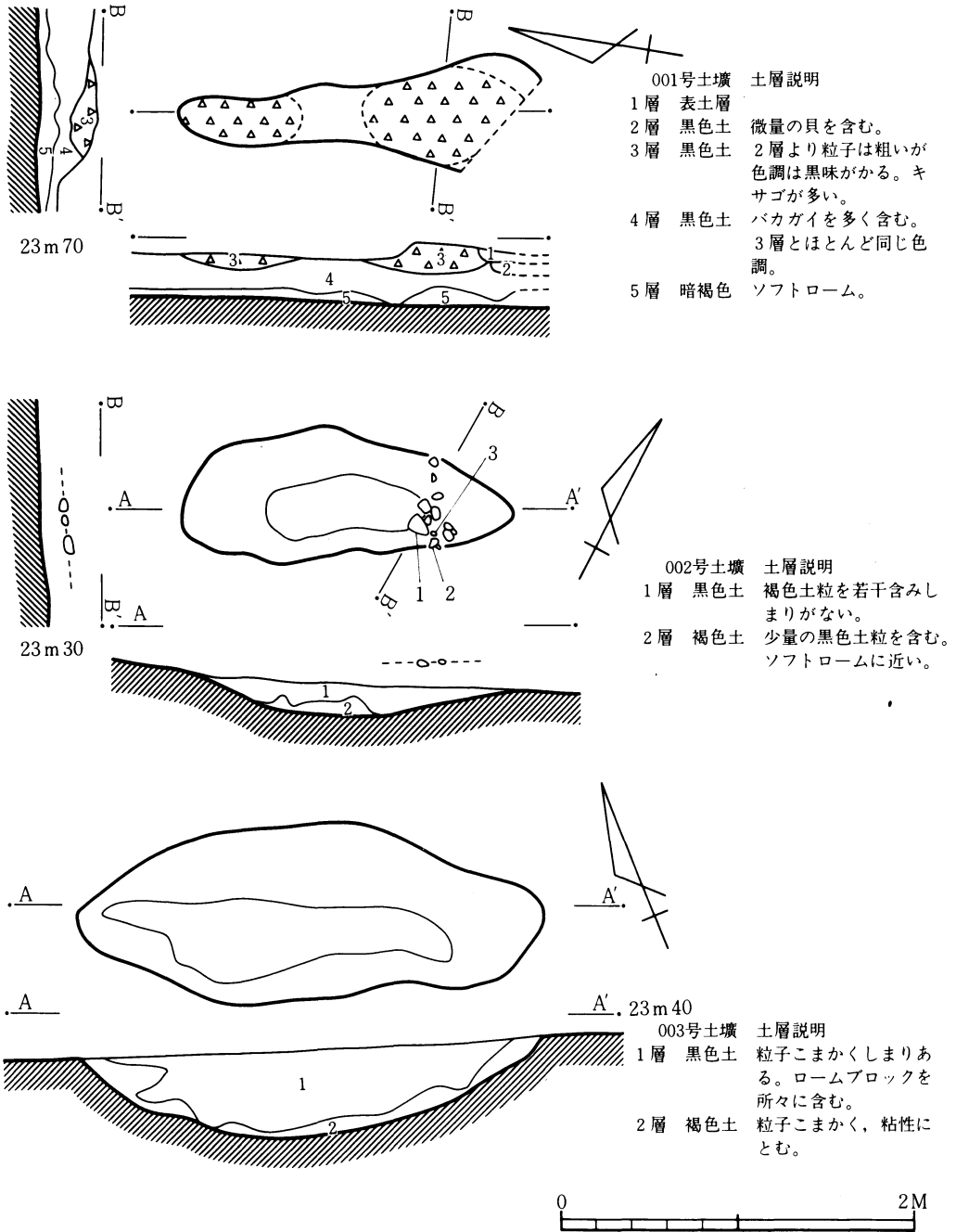
2C区より検出調査された。南側の一部はトレンチ調査の時に掘りすぎて残存しない。土壌の落込みはトレンチの断面では明確に認識できたが、平面的には明瞭には確認できなかった。貝層の乗る4層の上部は縄文時代中期阿玉台式土器を包含する土層であり、本遺構もその段階に属するものと考えられる。5層はソフトローム層である。このことから5層を掘込まない浅い土地に貝を捨てたものと考えられる。貝層はバカガイを含むが、キサゴも多く含んでいる。長軸は約2.1m、短軸は0.3~0.7mであった。他の土壌が台地縁辺にあるのに対して、本遺構は多少入った所から検出された。

002号土壌 (第187図)

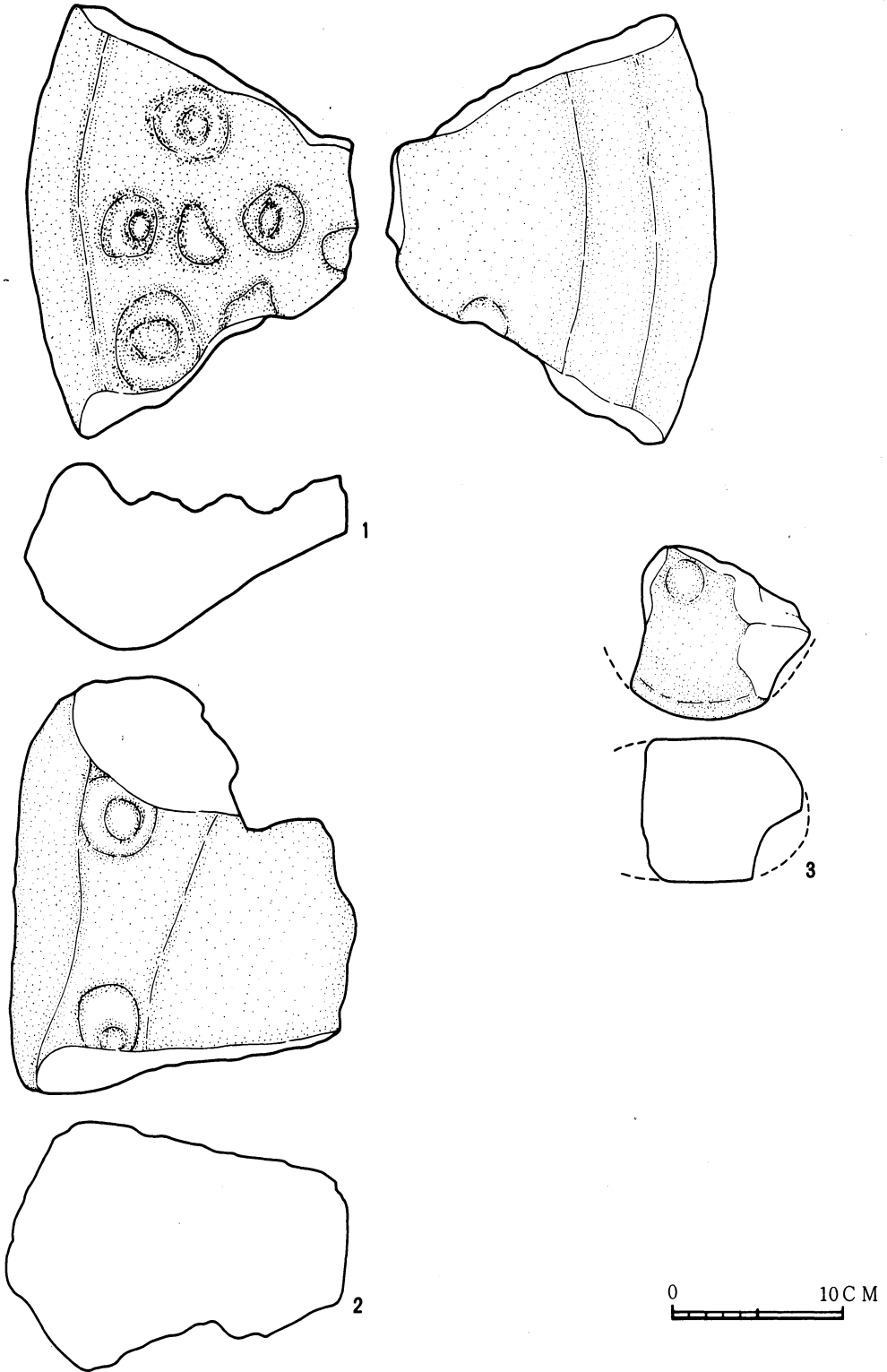
2D区より検出調査された。ソフトローム面で検出されたが、遺物の出土状況からみると、検出面はもう少し上位にあったものと推察される。覆土は2層に分けられ、褐色土粒を含んでいる。長軸1.9m、短軸0.75mを計り、深さはソフトローム上面からは約20cmを計る。遺物出土レベルからは約30cmである。遺物は土壌の東隅から出土しており、他に径10cmほどの礫も出土している。

003号土壌 (第187図)

3 D区より検出調査された。土壌内覆土は2層に分けられる。粘性があり、ロームブロックを含む。1層・2層の境界は明確でなく漸移的に変化する。底面は平らでなくゆるやかに傾斜しながら立ち上がる。長軸2.65 m, 短軸1 mを計り、深さは0.45 mである。遺物の出土はなかった。



第187図 001・002(02)・003号土壌実測図



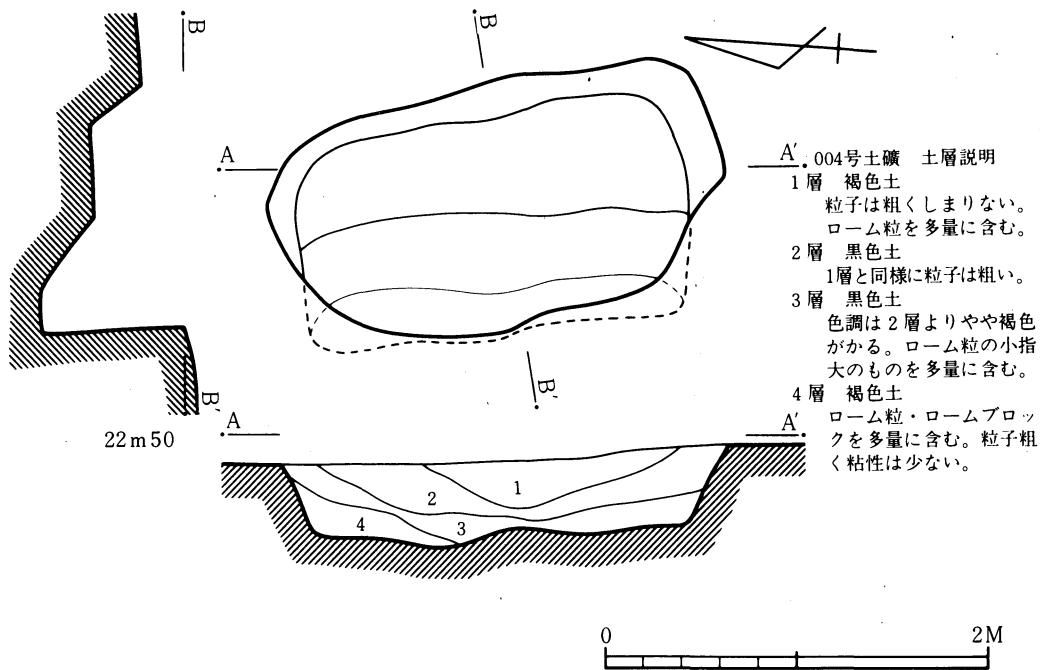
第188図 002(02)号土壙出土遺物実測図

第51表 002号土壙出土遺物表 (第187~188図)

番号	種類	遺存度	長さ 幅 厚さ	形状	備考
1	石皿	1/4	長残 9.5 幅残12.4 厚残 5.0	石皿としての使用ののち、凹石として再利用している。	09.
2	石皿	1/5	長残10.0 幅残12.0 厚残 7.2	石皿。凹石として利用。	06.
3	敲石	1/3	長残 4.6 幅残 4.8 厚残 4.0	敲石。中央部に凹がある。周囲は磨滅している。	12.

004号土壙 (第189図)

2D区の台地縁辺で検出調査された。土壙内覆土は4層に分けられる。全体にローム粒・ロームブロックを含んでいる。底面は2段に掘られており、上段・下段ともに凹凸がみられる。下段は土壙上端よりも内側に入り込んでいる。長軸2.40m、短軸1.3mを計り、深さは上段が30cm、下段が70cmである。

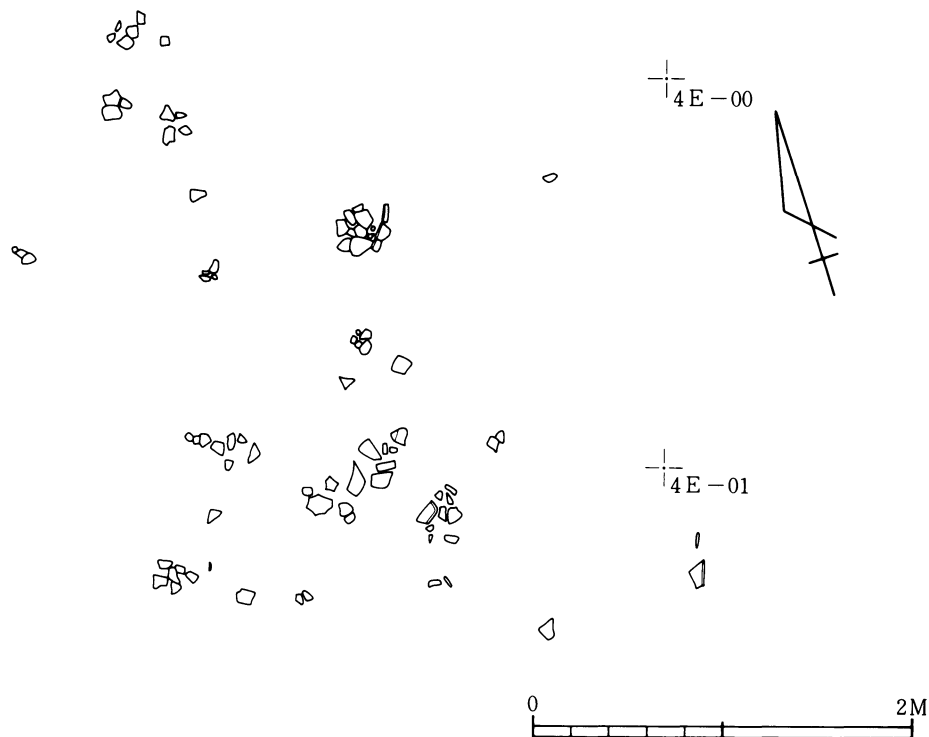


第189図 004号土壙実測図

(3) その他の遺構と遺物

包含層 (第190・192図)

調査区内の全域から縄文式土器片、土師器片が出土したが、特に4D・4E区からは縄文式土器片が集中して出土した。特に4D-91を中心とした5mほどの範囲からが多く、南側は調査区外に続いている。出土層位は第174図のII層に相当するが、II層でも上部と思われる。出土した土器は口径1mに近い大型の浅鉢形土器で、口縁は波状を呈している。



第190図 包含層遺物出土状況図

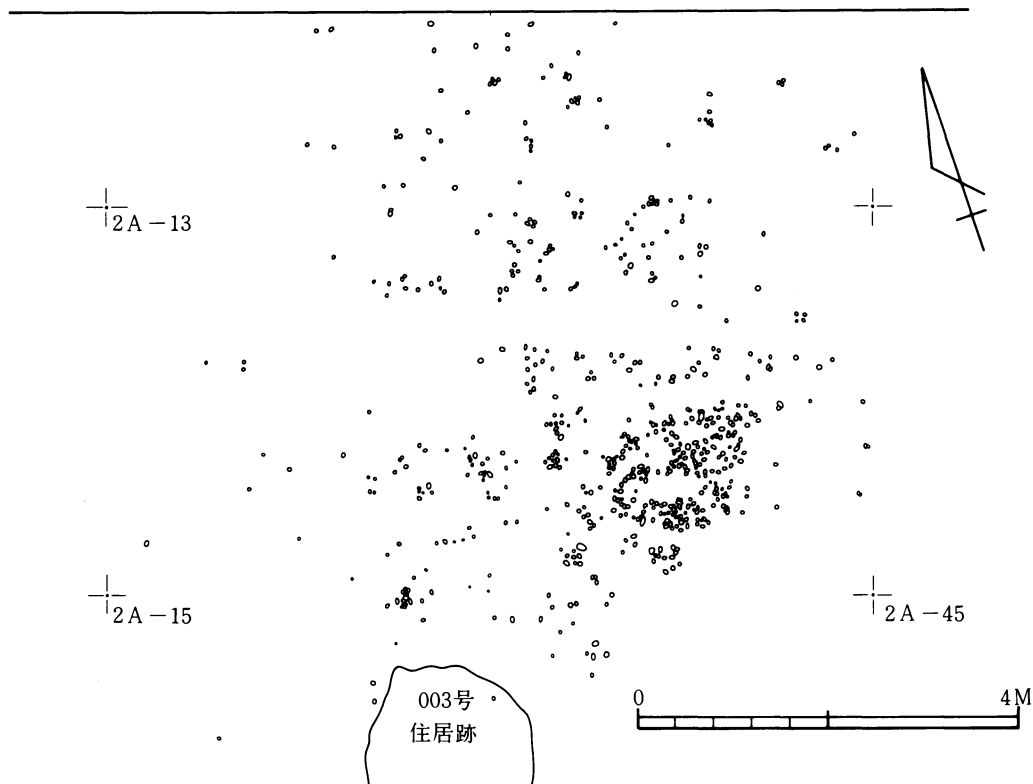
第52表 表採遺物表 (第192図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	高台 付坏	高台部分	— 8.3 残2.0	坏底部回転ヘラ切り。高台張付高台。坏内面黒色ヘラミガキ。暗文あり。	暗褐色	00。
2	釘	両端を欠く。	6.1 0.5 0.8	全体に湾曲している。太いつくり。		04。

集石遺構 (第 191 図)

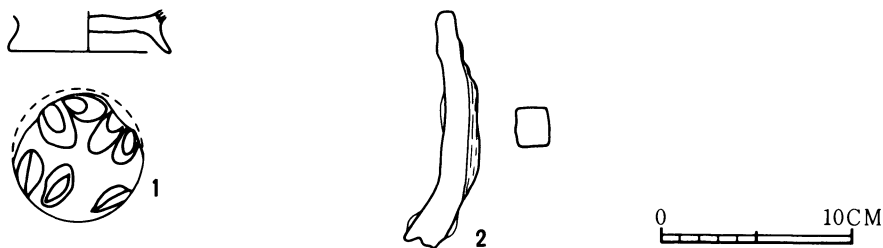
2 A区から表土除去作業中に検出された。2 A-34 を中心として、半径 8 m ほどの範囲で、北側は調査区外に続いているものと思われる。検出された石は、直径 5 ~ 7 cm のものが多い。全面から出土しているものではない。土器片など時期を示すものは出土しなかったが、003 住居跡によって切られている。第 174 図の I・II 層中からの出土であるが、主体は II 層上部からの出土と思われる。



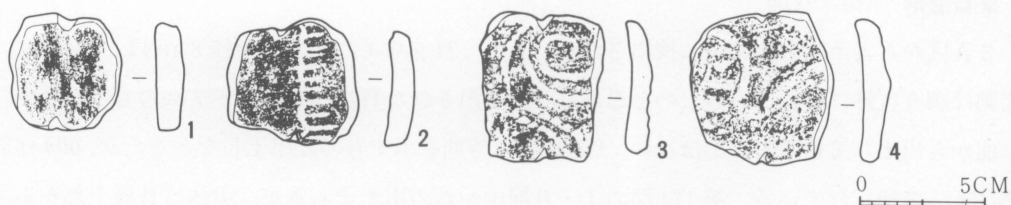
第191図 集石遺構実測図

その他の遺物 (第 192・193 図)

表土層の除去作業中に採集されたもので、192 図の 1 は高台部分のみであるが内面は黒色処理をした後に暗文が施されている。第 193 図の 4 点は阿玉台式土器の土器片錘である。



第192図 山ノ神遺跡表採遺物実測図



第193図 山ノ神遺跡出土土器片錘

第4節 小 結

山ノ神遺跡で検出調査された遺構は、竪穴住居跡3軒、土壇4基、包含層1、集石礫群1であった。それ以外に、包含層と同時期と思われる土器片の出土がみられた。

縄文時代 包含層、集石礫群、土壇とトレンチ調査段階で採集された土器片がこの時代に属す。包含層は4D・4E区で確認されたが、調査区外にも広がっている。出土した遺物は、大型の浅鉢形土器であった。土器片錘と同様に、阿玉台期に属すものと思われる。集石礫群については明確な時期を示す遺物は伴出しなかったが、礫群を検出した土層が第174図のII層上部からであり、阿玉台期に属すものと推察された。土壇は底面が舟底状を呈すものと、深く掘りくぼめられているものとに分けられる。前者には001・002・003号土壇が、後者には004号土壇が含まれる。001号土壇からは貝の出土がみられた。遺構は、第174図のII層を掘り込んでいる。002号土壇は石皿片などが出土しており、遺物の検出状況から同じくII層を掘り込んでいるものと推察される。003号土壇は、形状が002号土壇に類似するが、遺物の出土はなかった。004号土壇は2段に掘り込まれている。遺物の出土はなかったが本期に属すものと推察される。これらのことから、包含層出土遺物・集石礫群・土壇は、縄文時代中期阿玉台期に属すものと考えてよからう。山ノ神遺跡の南方約300mには「オクマンノ貝塚」があり、今回検出調査された縄文時代の遺構・遺物はその貝塚の一部と考えられる。

奈良・平安時代 本期には竪穴住居跡3軒が該当する。001号住居跡は南壁の一部が調査区外にあり、全掘はできなかった。実測図を掲載できた遺物は10個体であったが、うち1点は表採によるものである。002号住居跡からの出土遺物はなく、すべて001・003号住居跡からの出土遺物である。001号住居跡では3点が実測できた。1の須恵器坏形土器は山田水呑遺跡の須恵器坏IV群A類に相当するもので、同じく2の土師器甕形土器は甕形土器A類、3の土師器甕形土器は甕形土器F類に相当すると思われる。これらの土器群は、山田水呑遺跡における第1段階に相当する土器群と考えられる。また倉田氏による編年では第IV期に相当すると考えられる。003号住居跡では特異な遺物の出土状況がみられる。6の甕形土器は床に置かれた状況で出土したが、ほかは約10cmほど浮いて出土している。4は台付甕でいわゆる「武蔵型台付甕」とよばれているものである。1は山田水呑遺跡でIII群D類に分類した土器に相当し、2は同じく須恵器

I群A類に相当する。これらのことから、003号住居跡は001号住居跡よりもやや後出する可能性があるが、8世紀代の後半に位置するものであろう。003号住居跡で図化した遺物はほぼ完形を保っていた。そのうえ6以外の遺物は床面から浮いているとはいえ、同時性を有するセットと考えられる。

参考文献

石田広美・松村恵司「山田水呑遺跡」(山田遺跡調査会 1977)

倉田義広「千葉市域における奈良・平安時代の土器について」(『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』史館同人 1983)

栗本佳弘「宮崎第1遺跡」(『京葉』。千葉県都市公社, 1973)

第V章 大森第一遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と環境

大森第一遺跡は、千葉市大森町463-1番地他に所在する。1973年、京葉道路建設に伴い発掘調査された大森第一遺跡とは同一遺跡である。大森第一遺跡の所在する台地は、宮崎町から浸入する支谷と赤井町・大森町から浸入する支谷によって、東西を劃された舌状台地である。台地はここで、白旗・大巖寺方面と、大森町方面とにわかれる。台地を二分する小支谷をはさんで東側にNo.5荒立遺跡がある。大森第一遺跡の一部はすでに発掘調査が行われており、竪穴住居跡34軒、ピット遺構2、貝ブロック1、溝状遺構1、炭窯2が調査されている。今回の調査はその東側に位置し、東方に向かって緩傾斜している。台地を二分する小支谷からは、最近まで水がわいていたとのことである。標高は約26m、西側支谷底との比高は約16m、東側支谷底との比高は約12mを計る。小支谷との比高は約4mである。

第2節 調査の方法と経過

(1) グリットの設定

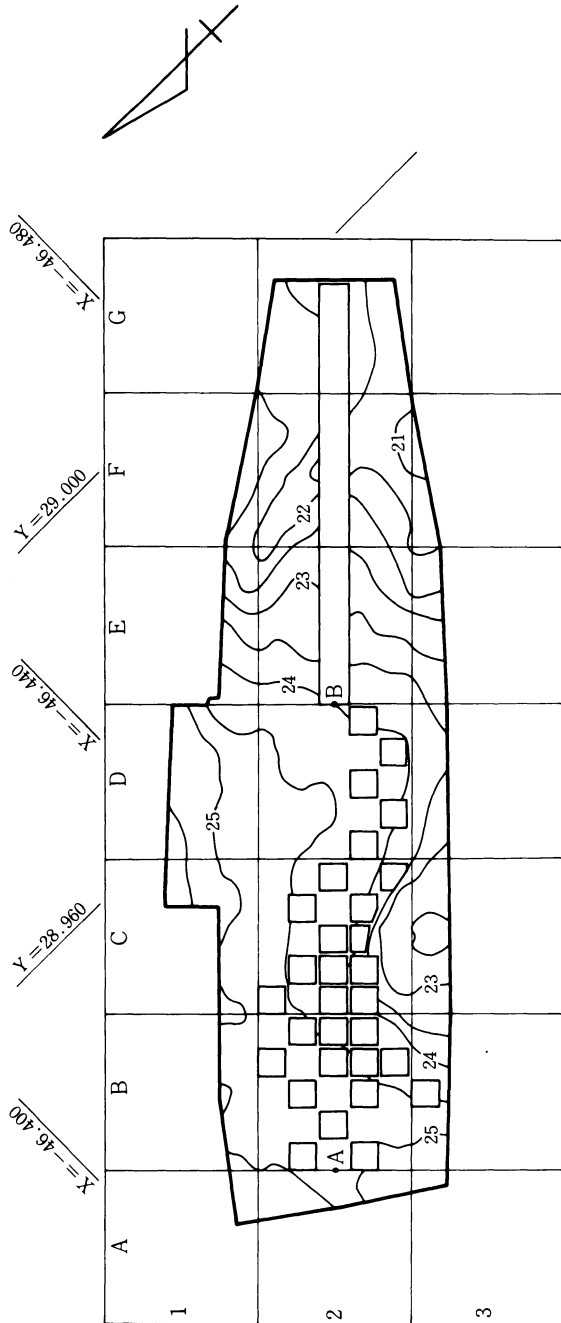
大森第一遺跡は、起点から4k180mをA点、同じく4k240mをB点として、凡例12の方法で大グリット及び小グリットを設定した。このグリットを基準に調査区全域にグリットを設定した。

(2) 調査の経過

発掘調査は、昭和53年5月21日から8月31日まで行われたが、年度途中で工事の設計変更が行われ、昭和54年3月1日から3月15日までの二回にわけて行われた。発掘調査は土塁の調査から実施し、地形測量を終了したのちに、トレンチによる試掘調査を行った。7月4日までに土塁の調査を終了させ遺構の調査を開始した。遺構は暗茶褐色粘質土を掘込んでおり、住居跡内覆土とほぼ同質の土で、遺構の調査は大変むずかしい状況であった。8月25日までは一応の遺構調査を終了し、先土器時代の試掘トレンチ調査も終了した。設計変更による調査は、昭和54年3月1日から表土除去作業を開始した。この期間の調査は工事作業と並行して行われたため、安全対策については十分な対策を講じ、3月15日にはすべての作業を終了した。



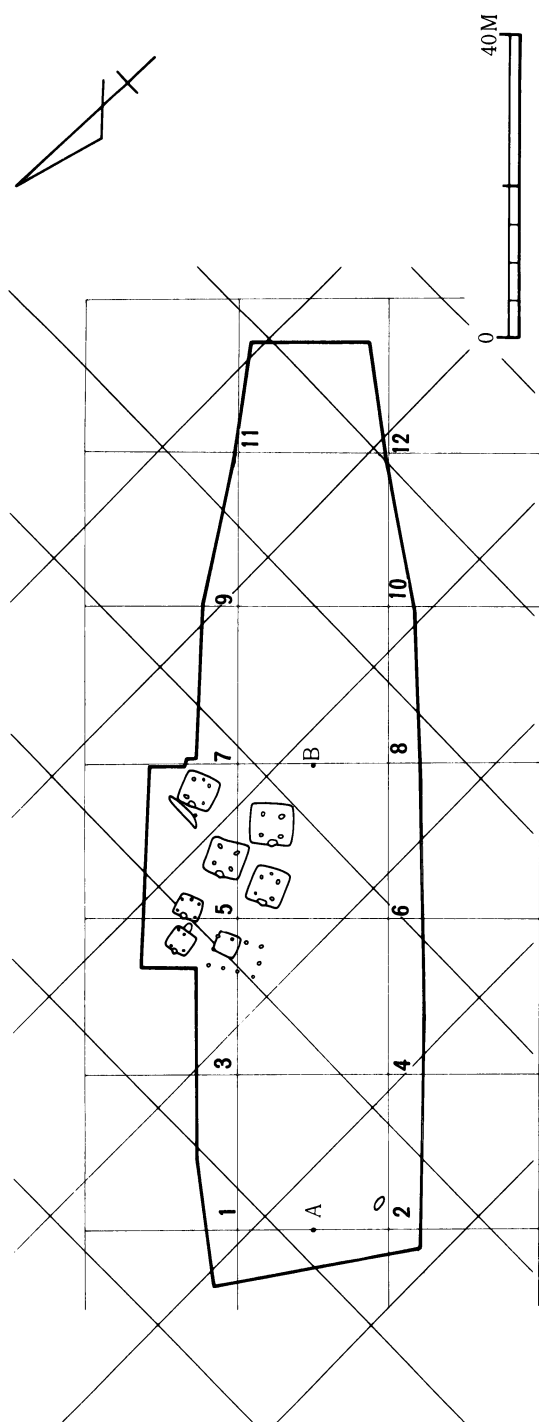
第194図 大森第一遺跡調査区・周辺地形図 (1/1,000)



01	11	21	31	41	51	61	71	81	91
02									
03									
04									
05					55				
06									
07									
08									
09									
10									100

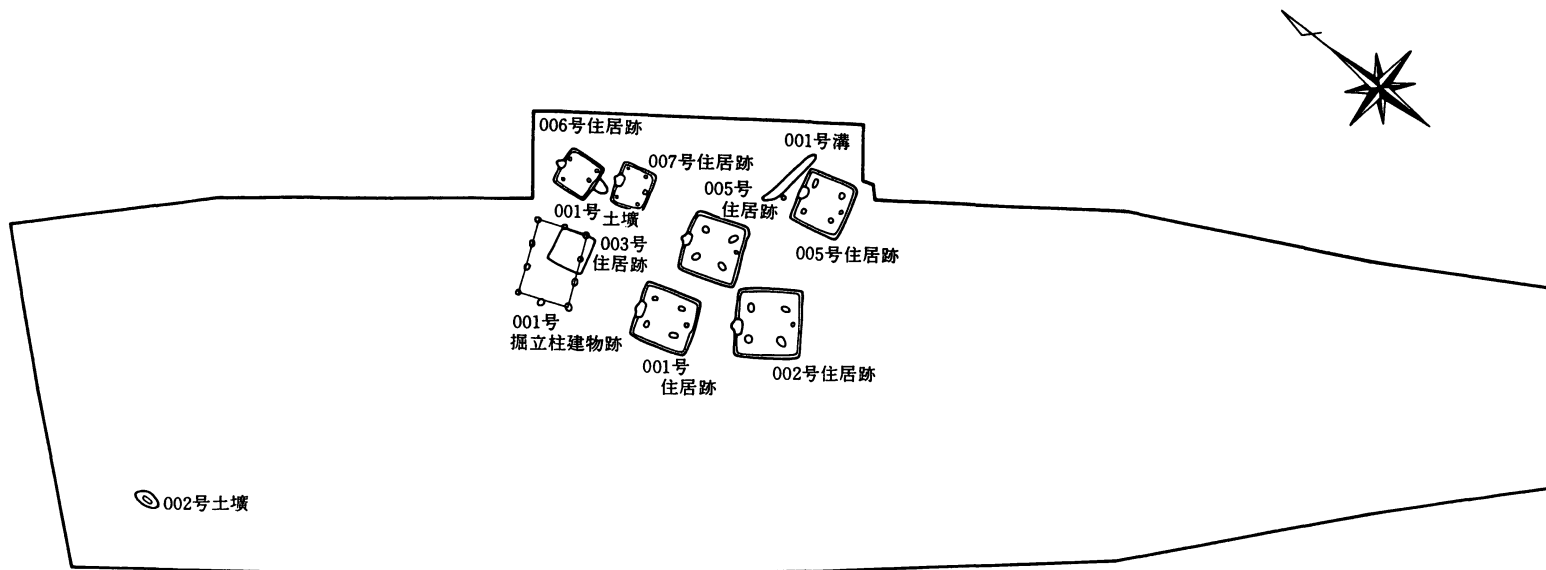


第195図 区設定図・プレグリット配置図



	X	Y	X	Y
1	-46,408.565	28,914.205	6	-46,443.735
2	-46,415.599	28,921.313	7	-46,457.951
3	-46,429.815	28,907.245	8	-46,457.803
4	-46,429.667	28,935.529	9	-46,472.019
5	-46,443.883	28,921.461		

第196図 遺構配置図・公共座標関係図



第197図 遺構配置図 (1/500)

第3節 検出された遺構と遺物

調査は二回に分けて行われ、土塁2本、竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構1、土壇2基が調査された。その他、荒立遺跡方向へ約50mの所に「塚」があり、工事区域外であり調査対象外であったが、削平されてしまったために緊急に調査を行った。調査区内には第195図のように3C区に自然谷が存在しており、このため遺構は1D・2D区に集中してみられた。2節でもふれたが、遺構内覆土は暗茶褐色粘質土で、地山との区別は大変むずかしいものであった。覆土の特徴は若干の焼土粒を含むことと、多少やわらかいことが地山との大きな相違点であった。

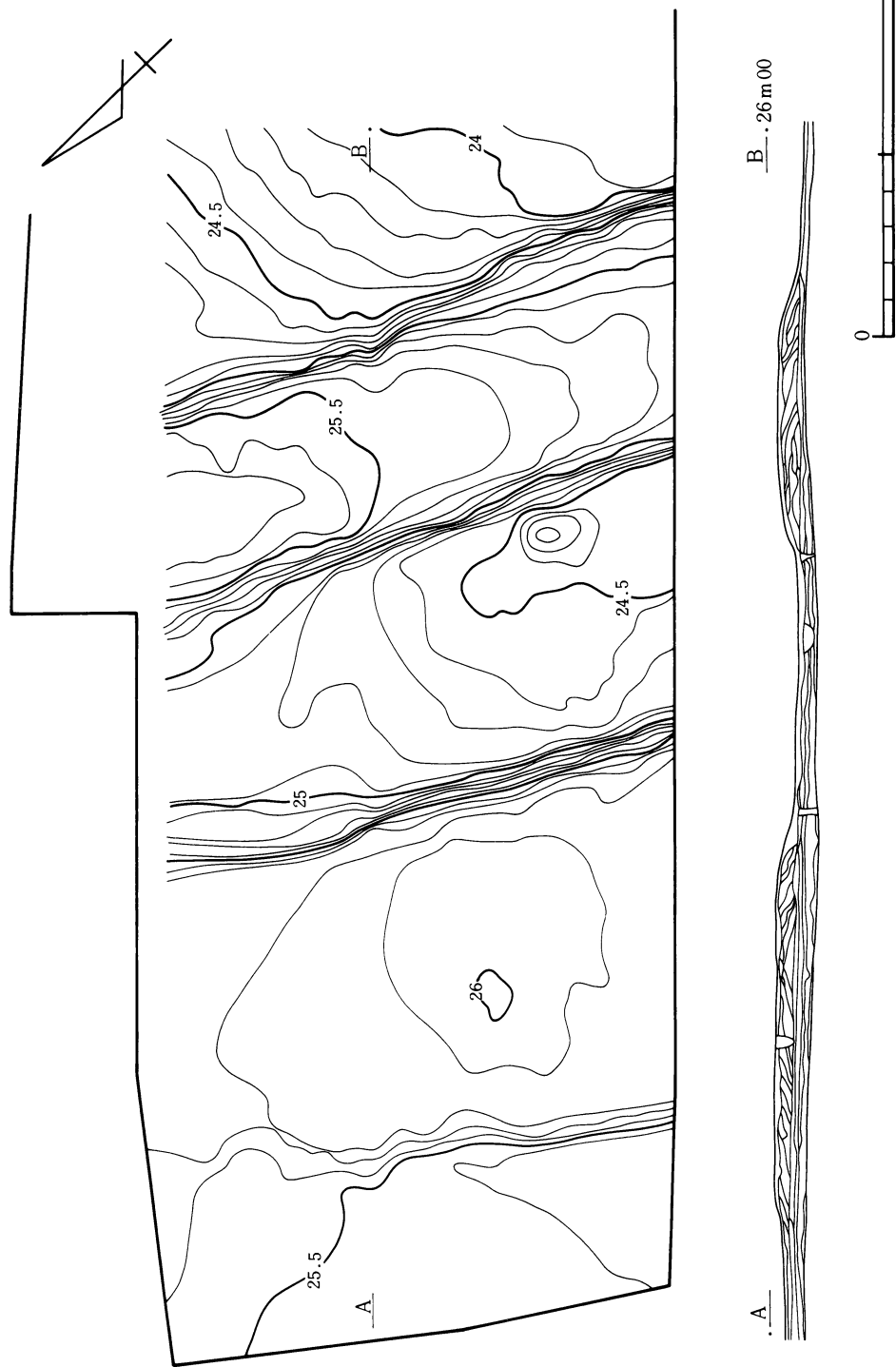
(1) 塚 (第194図, 図版59-1)

調査対象には入っていなかったが、工事により上部が削平されたため急きょ調査を行った。大森第一遺跡との間には小支谷が入っており、最近まで湧水がみられたとのことである。No.6荒立遺跡からゆるやかに傾斜して湧水点に至る場所に立地する。湧水地点の標高は約21mで、塚の所在する場所の標高は約25mである。

調査は、塚のほとんどが削平されていたために、幅50cmのトレンチを十文字に入れて土層の観察を行った。削平の一部はすでにローム層まで達しており塚の痕跡はまったく検出できなかった。排土からも遺物の出土はなかった。地形図によると、裾部が18×13mの長方形に近い形状をしており、上部は7×4mほどで平らのものである。高さは約3mである。湧水点の脇であることから「塚」の可能性はあるが、調査では明確にできなかった。

(2) 土塁 (第198図)

調査区内に、南北にのびる土塁を2本検出した。調査範囲外については、宅地化が進んでおりすでに削平されていると思われ、確認できなかった。西側の土塁は、下端約22m、上端幅約18m、高さ1.5mである。東側の土塁は、下端幅約15m、上端幅約10m、高さ1.5mを計る。2本とも上部は平坦になっているが、これは削平されたためと思われる。盛土は、暗黒褐色土をベースにしており、ロームブロック、ローム粒を含んでいる。また、炭化物、焼土及び貝を含む層もみられる。今回の調査では貝層及び貝ブロックの検出はされていないが、かつて京葉道路建設に伴う調査の時には検出されており、おそらく大森第一遺跡内の他の遺構にあったものと思われる。西側土塁は中央やや東に土山をつくり、それを核として土盛りを行っている。東側の土塁は西端に核をつくり土盛りを行っている。土塁の中間部には、現在のところ土盛りの痕跡はみられなかった。



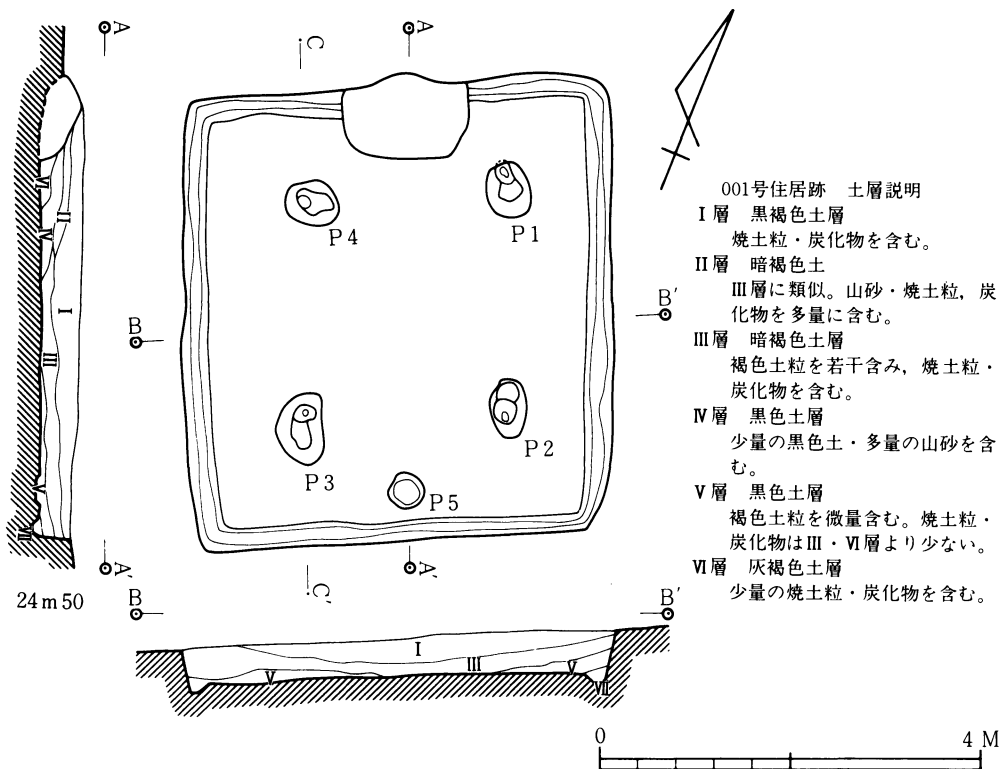
第198图 土壘実測図

(3) 竪穴住居跡

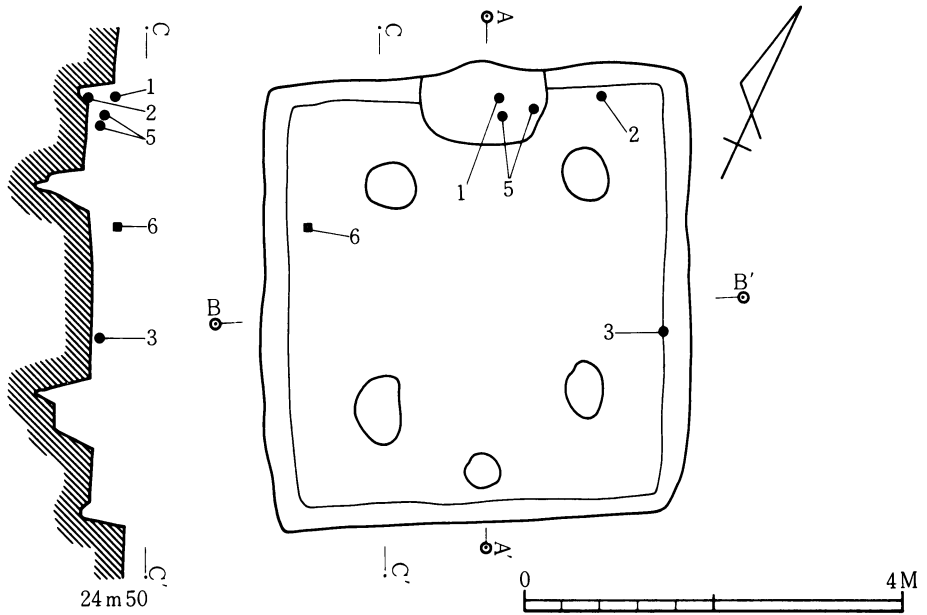
001号住居跡 (第199~202図)

2 D区より検出調査された。主軸方位はN-27°-Wである。住居跡内覆土は6層に分けられる。焼土粒、炭化物を含み粘性の強い土層である。平面形は、4.7×4.5 mでほぼ正方形を呈す。床面積は、4.24×3.96 mで約16.8 m²を計る。壁高は40~50 cmである。床面の標高は、約23.8 mである。周溝は全周している。幅18~22 cmで、深さは10~15 cmを計る。柱穴は6本検出された。P-1、P-2、P-3、P-4が主柱穴であり、4本とも2段に掘られている。深さはそれぞれ48、55、60、55 cmを計る。P-5はカマドの反対側の南壁わきにあり、径40 cmほどの円形を呈し、深さは15 cmと浅い。主柱穴の4本は間隔が約2.1 mと等しい。遺物は6点が図化できた。1・2・4・5は土師器で、3は須恵器、6は刀子である。

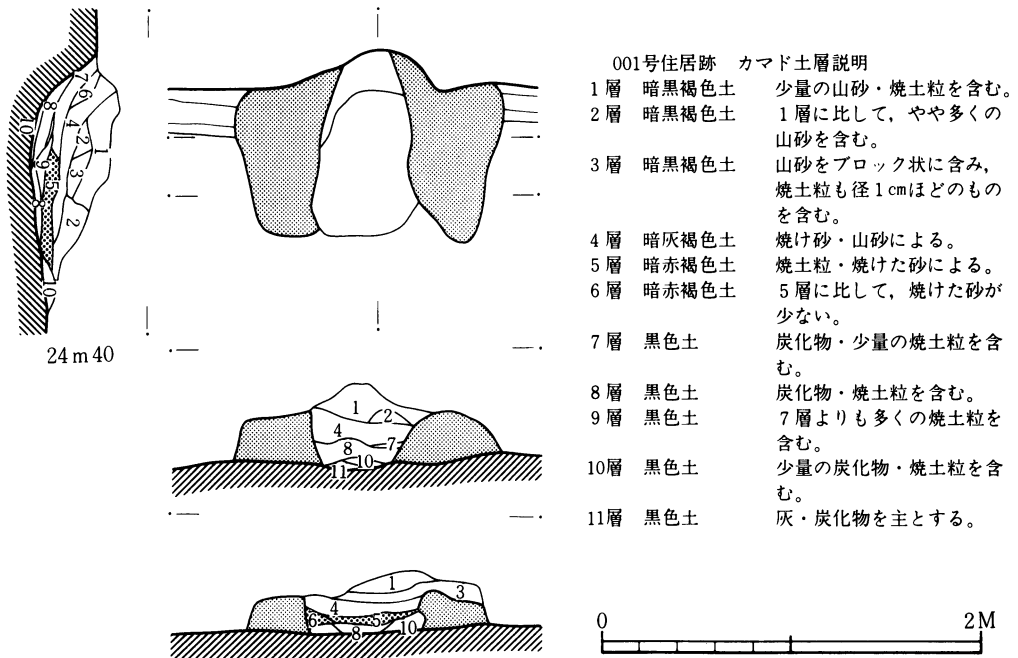
カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅約1.2 m、奥行き約20 cmを計る。袖の幅は広くどっしりとした重量感を示す。カマド内堆積土は11層に分けられるが、基本土層は8層に分けられた。約8 cmの厚さに焼土が堆積していたが、カマド構築材は残存していなかった。



第199図 001号住居跡実測図



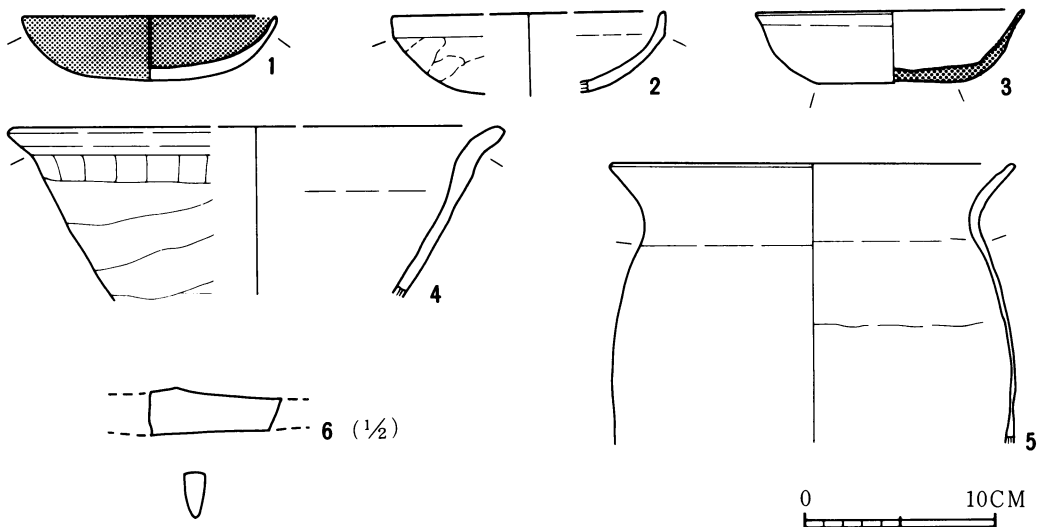
第200図 001号住居跡遺物出土状況図



001号住居跡 カマド土層説明

- | | | |
|-----|-------|-------------------------------|
| 1層 | 暗黒褐色土 | 少量の山砂・焼土粒を含む。 |
| 2層 | 暗黒褐色土 | 1層に比して、やや多くの山砂を含む。 |
| 3層 | 暗黒褐色土 | 山砂をブロック状に含み、焼土粒も径1cmほどのものを含む。 |
| 4層 | 暗灰褐色土 | 焼け砂・山砂による。 |
| 5層 | 暗赤褐色土 | 焼土粒・焼けた砂による。 |
| 6層 | 暗赤褐色土 | 5層に比して、焼けた砂が少ない。 |
| 7層 | 黒色土 | 炭化物・少量の焼土粒を含む。 |
| 8層 | 黒色土 | 炭化物・焼土粒を含む。 |
| 9層 | 黒色土 | 7層よりも多くの焼土粒を含む。 |
| 10層 | 黒色土 | 少量の炭化物・焼土粒を含む。 |
| 11層 | 黒色土 | 灰・炭化物を主とする。 |

第201図 001号住居跡カマド実測図



第202図 001号住居跡出土遺物実測図

第53表 001号住居跡出土遺物表 (第200・202図)

() 復元

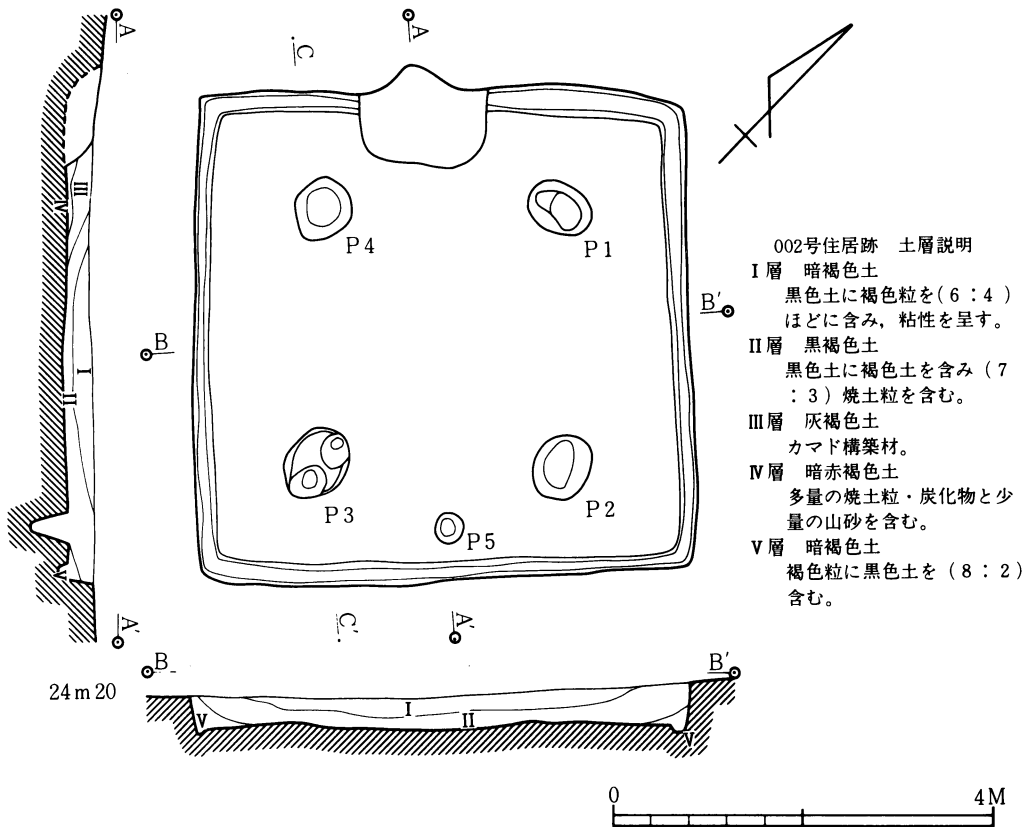
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	2/3	13.2 — 3.4	内面ヘラミガキ。外面上位ヘラミガキ。下位ナデ。	暗褐色	緻密で良好。内外面赤彩あり。233。
2	坏	1/2	(14.2) — 残4.2	外面ヨコヘラケズリ。口縁ヨコナデ。内面ミガキ。器面のアレ多い。	暗黒褐色	緻密で良好。223。底部二次焼成?
3	坏	3/4	14.0 7.2 3.7	紐積み。外・内面ヨコナデ。底部静止ヘラケズリ。	暗灰褐色	小砂粒を含む。225。須恵器。
4	甑?	1/4	(26.0) — 残8.8	外面タテ・ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面ナデ。	暗褐色	良好。53。
5	甕	胴部中位以上・口縁3/4	21.1 — 残14.5	紐積み。口縁部ヨコナデ。外面タテヘラケズリ。内面ナデ。	暗褐色	砂質だがわりに緻密。磨減多い。カマド内出土。
6	刀子	両端を欠く。	長3.4 幅1.2 厚0.6	両端を欠き全形は不明。		53。

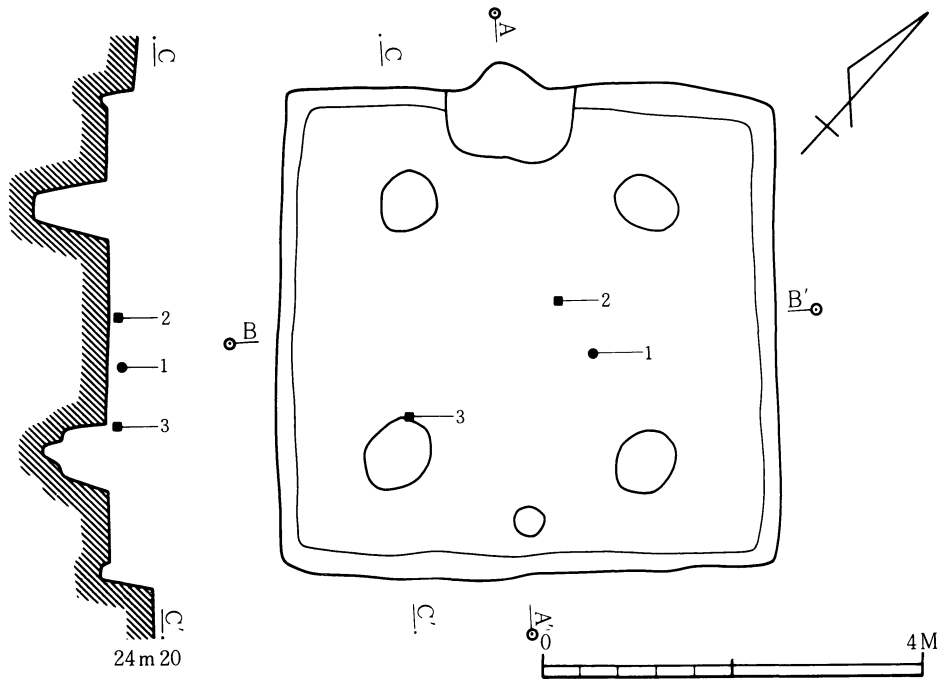
002号住居跡 (第203~206図)

2 D区より検出調査された。001号住居跡の南側約2.5mのところのところに所在する。主軸方位はN-44°-Wである。住居跡内堆積土は5層に分けられる。粘性が強く、焼土粒、炭化物を含む。地山と覆土の土質が類似しており、遺構の検出はむずかしかった。

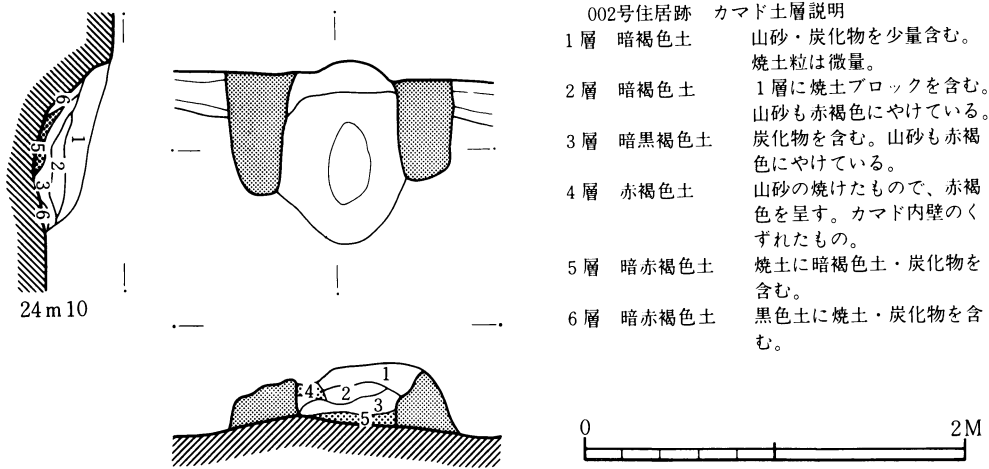
平面形は、5.04×5.2mで横にやや長い形状を呈す。床面積は、4.56×4.88mで約22.3㎡を計る。周溝は全周している。幅10~20cmと一定しないが細い。深さは約10cmである。住居跡のコーナーは90°に近くかくばっている。柱穴は5本検出された。P-1, P-2, P-3, P-4は主柱穴であり、P-1, P-3は2段に掘込まれている。深さはそれぞれ70, 55, 60, 80cmである。P-5はカマドの反対側の南壁わきにあり、深さは35cmを計る。遺物は3点が図化できた。1は土師器で、2・3は刀子片である。遺物の出土は多かったが図化できるものは少なかった。

カマドは、北壁中央のやや左に構築されていた。掘込み幅約1.2m、奥行き約10cmを計る。壁への煙道部の掘込みは浅い。カマド内堆積土は6層に分けられ、焼土粒及び山砂の焼けたものを多く含んでいる。袖部下の床面は若干高くなっていた。



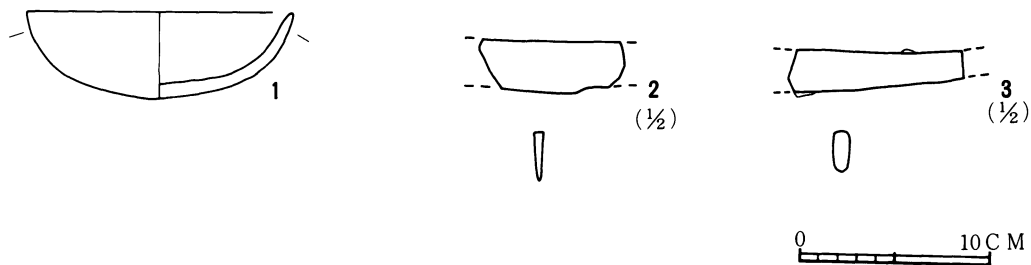


第204図 002号住居跡遺物出土状況図



- 002号住居跡 カマド土層説明
- | | |
|----------|--|
| 1層 暗褐色土 | 山砂・炭化物を少量含む。焼土粒は微量。 |
| 2層 暗褐色土 | 1層に焼土ブロックを含む。山砂も赤褐色にやけている。炭化物を含む。山砂も赤褐色にやけている。 |
| 3層 暗黒褐色土 | 山砂の焼けたもので、赤褐色を呈す。カマド内壁のくずれたもの。 |
| 4層 赤褐色土 | 焼土に暗褐色土・炭化物を含む。 |
| 5層 暗赤褐色土 | 黒色土に焼土・炭化物を含む。 |
| 6層 暗赤褐色土 | |

第205図 002号住居跡カマド実測図



第206図 002号住居跡出土遺物実測図

第54表 002号住居跡出土遺物表 (第204・206図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/3	13.8 — 4.5	外面手持ヘラケズリ。のちミガキ。 内面ミガキ。	暗茶褐色	砂粒を若干含む。239。
2	刀子	両端を欠く。	長3.8 幅1.3 厚0.3	両端を欠き全形は不明。		246。
3	刀子	両端を欠く。	長4.7 幅1.1 厚0.4	両端を欠き全形は不明。基部片と 思われる。		159。

003号住居跡 (第207～209図)

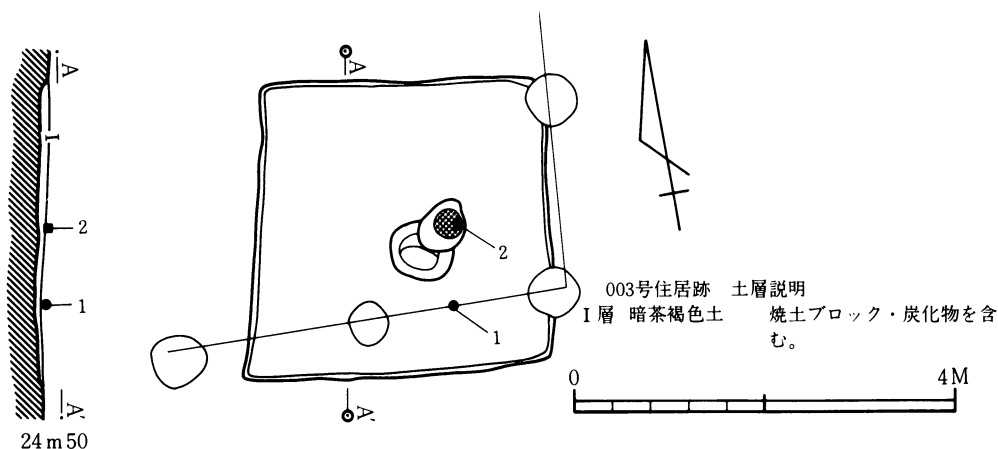
1C区より検出調査された。カマドはなく、中央に炉がある。住居跡よりも工房跡の可能性が強い。覆土は1層が確認されたのみだった。

第55表 003号住居跡出土遺物表 (第207・209図)

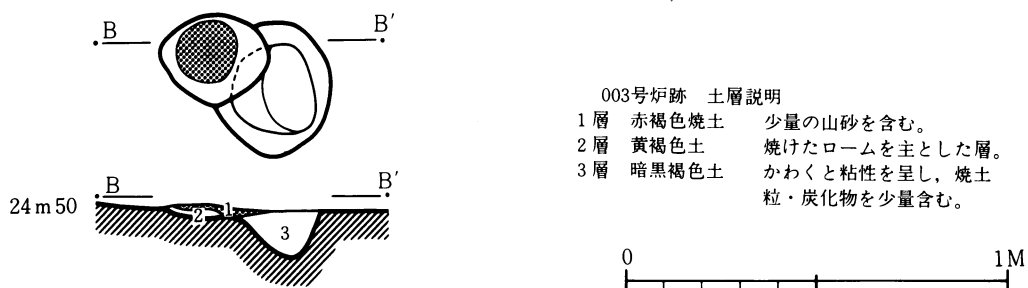
() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	高台坏	体部1/4と、 口縁を欠く。	— 5.0 残2.7	内面ナデ。	外面暗褐色。内面 黒色。	胎土良好。磨滅が多い。 01。
2	刀子	基部を欠く。	長残15.7 幅 1.5 厚 0.4	基部の一部を欠く。刃部はとぎ直し によるためか湾曲している。		

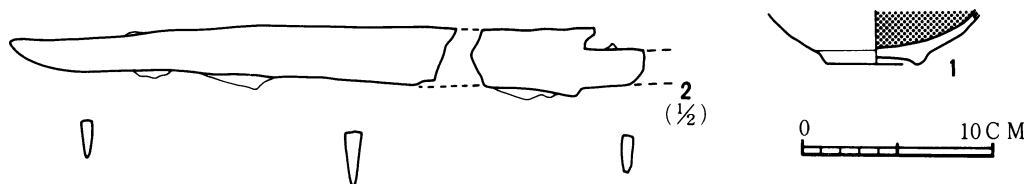
平面形は、一辺が約3 mの正方形を呈す。検出面からの掘込みが浅く、壁の検出も不明瞭であった。001号掘立柱建物跡と重複している。新旧関係は不明である。中央から炉が検出された。30×23 cmで、深さ5 cmを計り、焼土がつまっている。炉の下には土壌が掘られており、覆土には焼土粒や炭化物を含んでいる。遺物の出土は少なかったが、2点が図化できた。1は土師器で内面は黒色処理を施している。2は刀子で、炉の焼土上から出土した。遺構の性格は鍛冶工房の可能性が強い。



第207図 003号住居跡実測図・遺物出土状況図



第208図 003号住居跡炉実測図



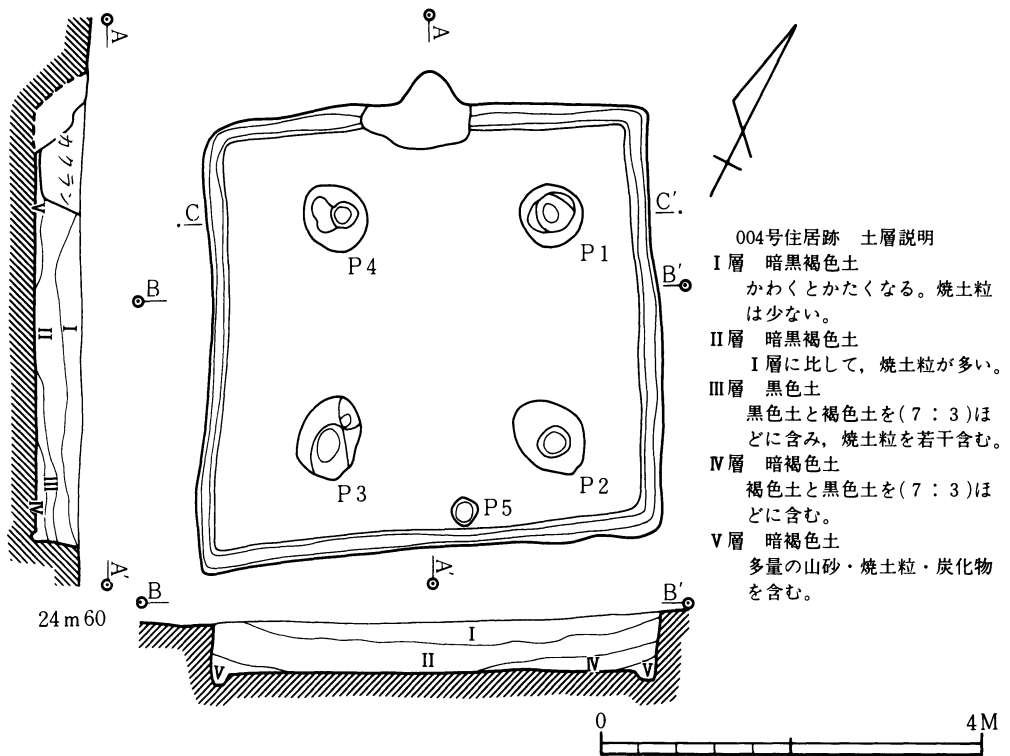
第209図 003号住居跡出土遺物実測図

004号住居跡 (第210～213図)

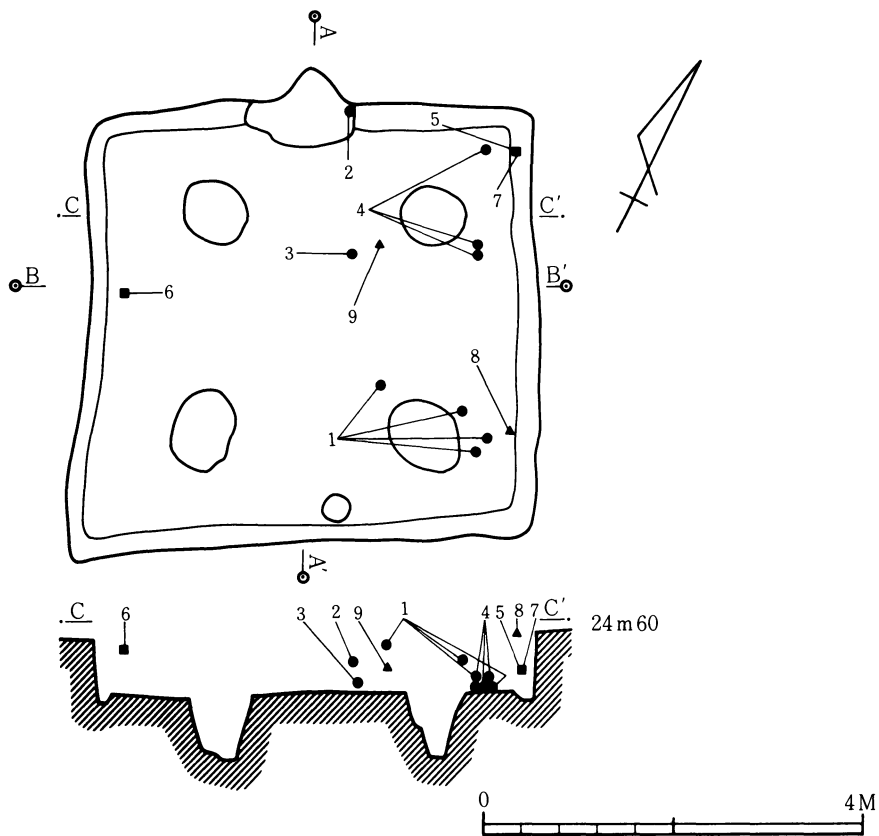
1 D・2 D区にかけて検出調査された。主軸方位はN-28°-Wである。住居跡内覆土は5層に分けられ、全体に粘性が強く、焼土粒・炭化物を含む。カマドの一部に攪乱が入っている。

平面形は、4.5×4.76 mで、南西隅が少し張り出すがほぼ正方形を呈す。床面積は、4.08×4.32 mで約17.7 m²を計る。周溝は全周している。幅は15～20 cm、深さは5～10 cmで一定していない。壁高は45～65 cmを計る。床面の標高は、約23.9 mである。床面はほぼ平坦である。柱穴は5本検出された。P-1、P-2、P-3、P-4が主柱穴である。深さはそれぞれ66、69、69、61 cmを計る。P-5は南壁際にあり深さは約8 cmと浅い。柱穴は住居跡中央に向って長軸をもつ形状を呈す。P-2以外の柱穴は2段に掘込まれている。遺物は9点が図化できた。1～3は須恵器である。3は土師器、5～7は刀子片である。8は凹石で約1/2が残存している。9も凹石である。

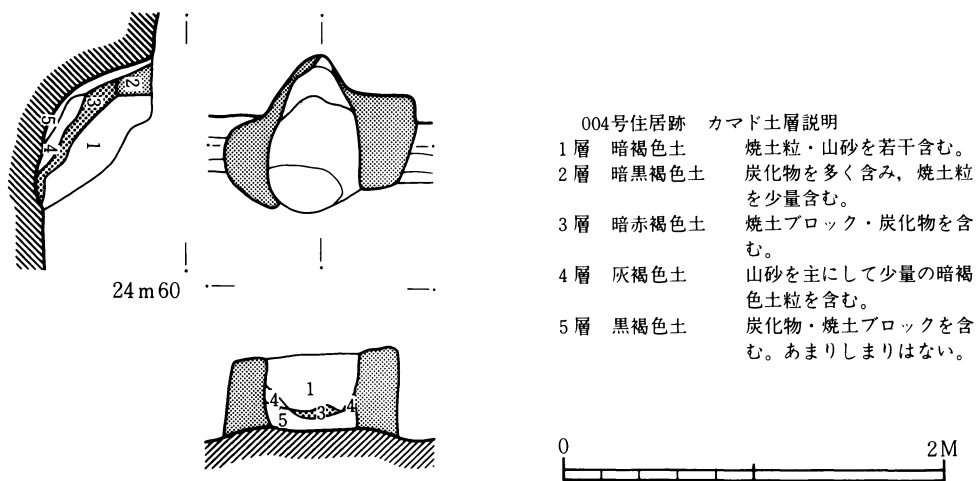
カマドは、北壁中央に構築されていた。掘込み幅80 cm、奥行き30 cmを計る。カマド内堆積土は5層に分けられた。カマド内には厚さ5～10 cmの焼土が堆積している。袖部はしっかりしているが、天井部は残存していなかった。



第210図 004号住居跡実測図



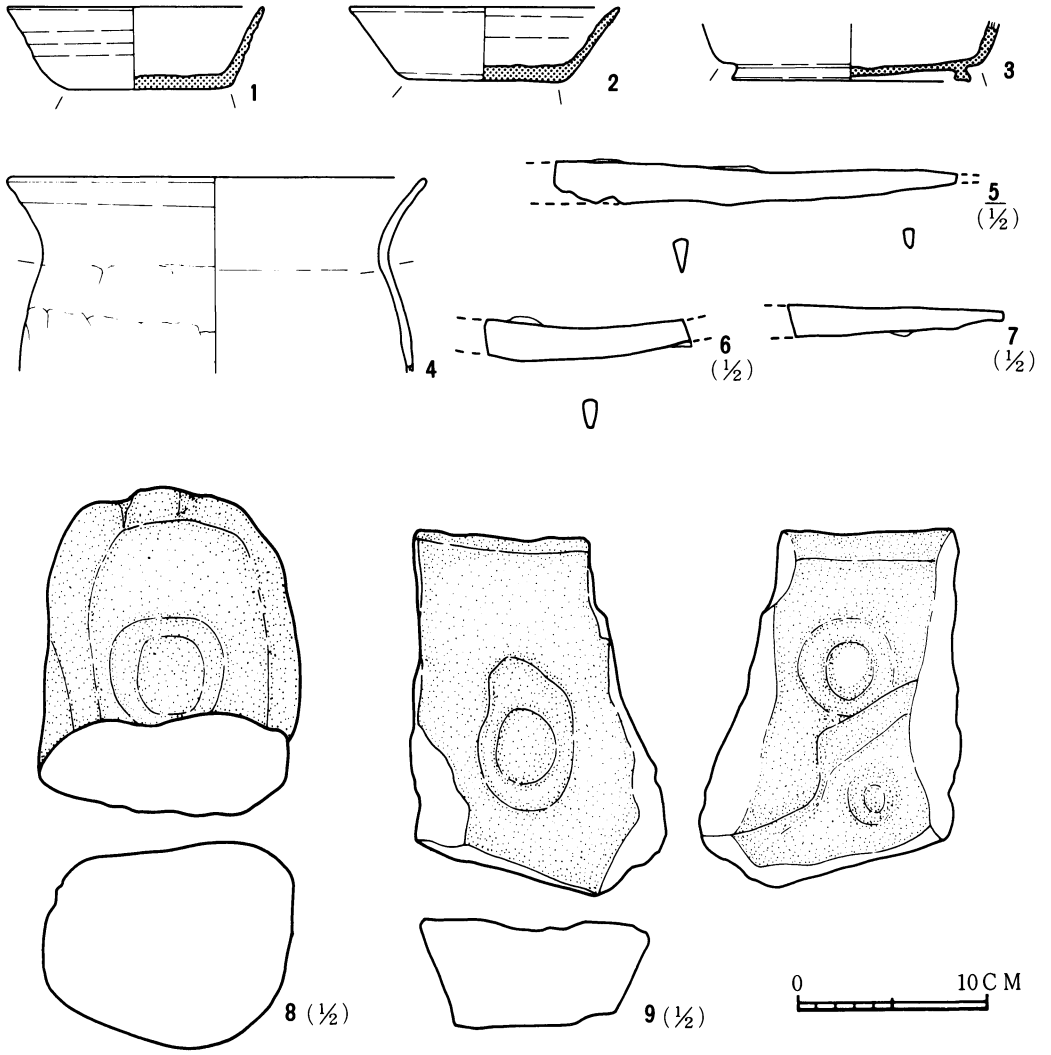
第211図 004号住居跡遺物出土状況図



004号住居跡 カマド土層説明

- 1層 暗褐色土 焼土粒・山砂を若干含む。
- 2層 暗黒褐色土 炭化物を多く含み、焼土粒を少量含む。
- 3層 暗赤褐色土 焼土ブロック・炭化物を含む。
- 4層 灰褐色土 山砂を主にして少量の暗褐色土粒を含む。
- 5層 黒褐色土 炭化物・焼土ブロックを含む。あまりしまりはない。

第212図 004号住居跡カマド実測図



第213图 004号住居跡出土遺物実測図

第56表 004号住居跡出土遺物表 (第211・213図)

() 復元

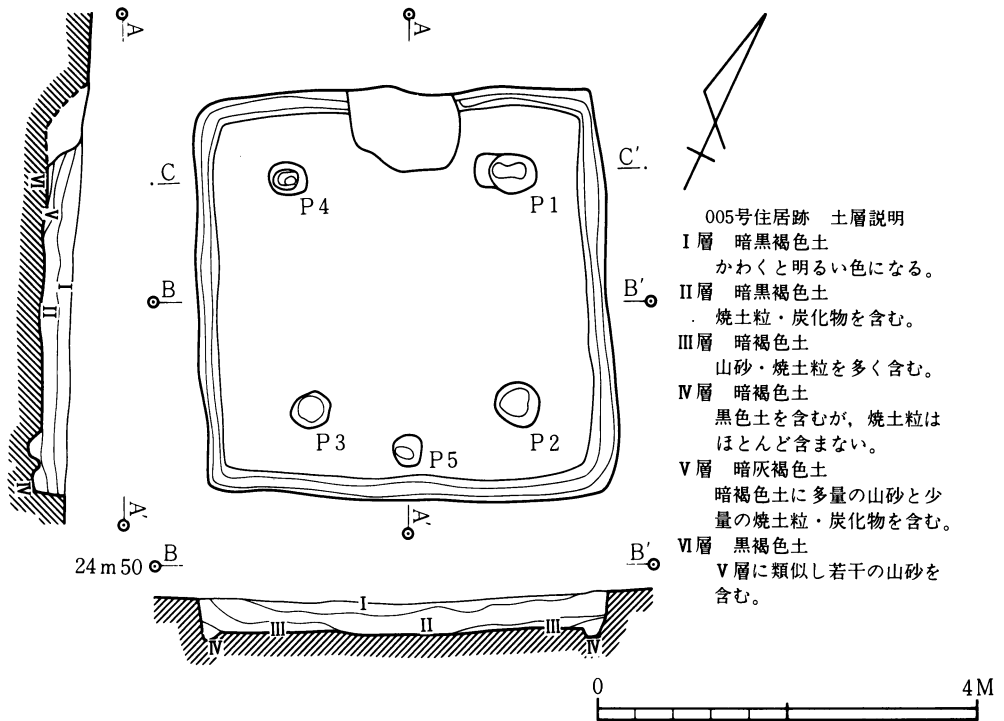
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/3	13.8 8.6 4.3	内外面回転ナデ。底部回転ヘラケズリ。のちヘラ整形。	暗灰黒色	小砂粒を多く含む。105, 41, 96, 98。須恵器。
2	坏	口縁部の一部欠く。	14.3 8.0 3.9	体部外、内面ヨコ回転ナデ。底部粘土紐成形。底部外面ヘラナデ整形。	暗灰黒色	砂質だが良好。190。須恵器。
3	高台付坏	1/3	— 12.3 残2.9	外・内面回転ナデ。底部回転ヘラケズリ。	暗茶褐色	緻密で良好。146。須恵器。
4	甕	口縁1/3	22.1 — 残10.2	口縁部ヨコナデ。外面上位ヨコヘラケズリ。中位左上リヘラケズリ。内面ナデ。	暗茶褐色	砂質で普通。63, 03, 109。
5	刀子	茎部のみ	長残10.6 幅 0.9 厚 0.4	刃部と茎端を欠く。		01。
6	刀子	両端を欠く。	長残 5.4 幅 0.7 厚 0.4	茎部分と思われる。全体に湾曲している。		75。
7	刀子	茎部のみ	長残 5.6 幅 0.7 厚 0.3	茎部分のみ。		01。
8	敲石	1/2	長残 8.3 幅 6.5 厚 5.2	中央に凹をもち、先端は磨滅している。		36。
9	凹石	1/4	長残 9.2 幅残 6.5 厚 2.5	両面とも磨滅して、中央に凹をもつ。		83。

005号住居跡 (第214~217図)

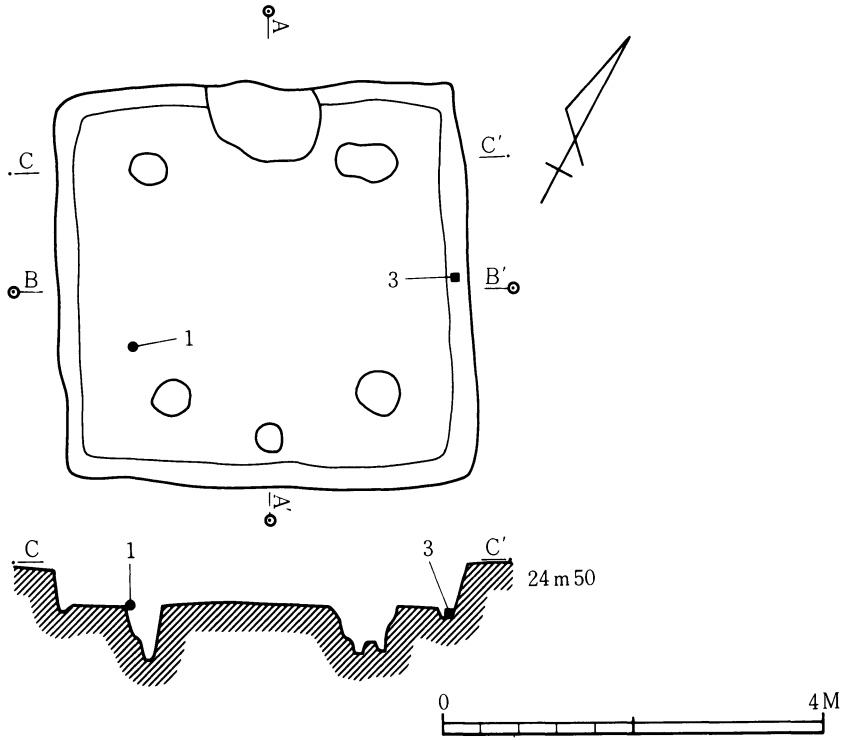
1 D区より検出調査された。南西隅が検出されたため拡張して調査を行った。主軸方位はN-27°-Wである。住居跡内覆土は6層に分けられ、焼土粒・炭化物を含んでいる。

平面形は、4.16×4.32 mではほぼ正方形を呈す。床面積は、3.72×3.88 mで約14.5 m²を計る。床面はカマド手前が多少高いがほぼ水平である。床面の標高は、約23.8 mを計る。周溝は全周する。幅は16~22 cmで、深さは7~10 cmと一定していない。柱穴は5本が検出された。P-1, P-2, P-3, P-4は主柱穴である。P-1は柱穴の重複がみられ、深さはそれぞれが52と42 cmを計る。P-2以下の深さは48, 54, 56 cmである。P-5は南壁わきにあり深さは30 cmを計る。壁高はそれぞれ47, 33, 53, 43 cmである。遺物は3点が図化できた。

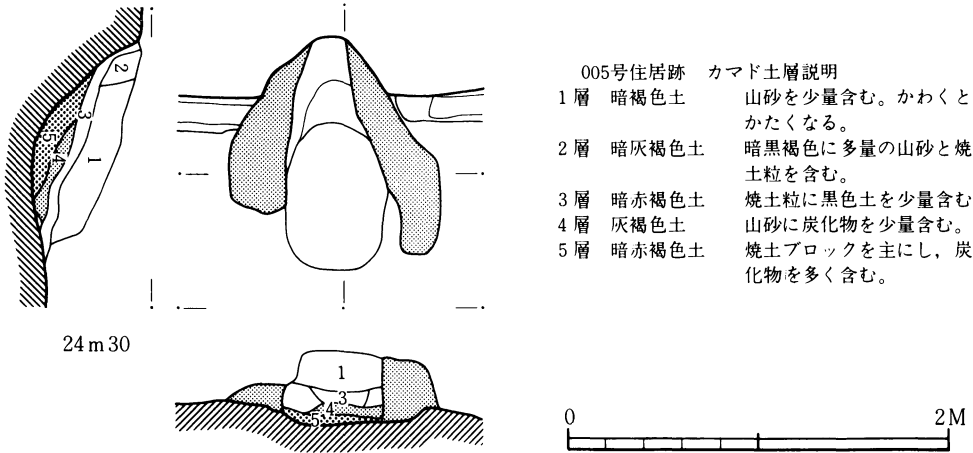
カマドは、北壁中央に構築されている。掘込み幅約66 cm, 奥行き約20 cmである。カマド内堆積土は5層に分けられる。004号住居跡と同様に袖部はしっかりした作りをしている。カマド構築に際して、床面を10 cmほど掘下げたのちに構築している。4層は山砂を多く含むがカマド内壁の崩落したものと思われる。



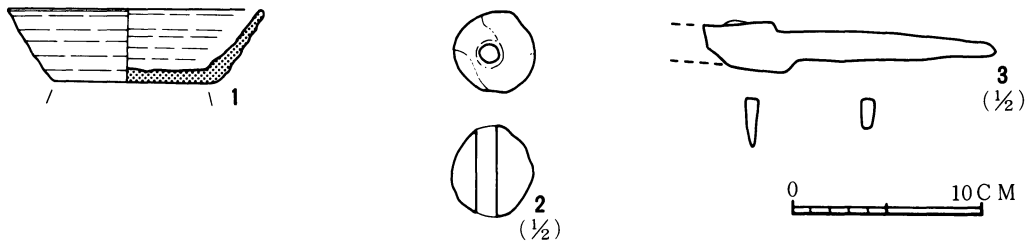
第214図 005号住居跡実測図



第215図 005号住居跡遺物出土状況図



第216図 005号住居跡カマド実測図



第217図 005号住居跡出土遺物実測図

第57表 005号住居跡出土遺物表 (第215・217図)

() 復元

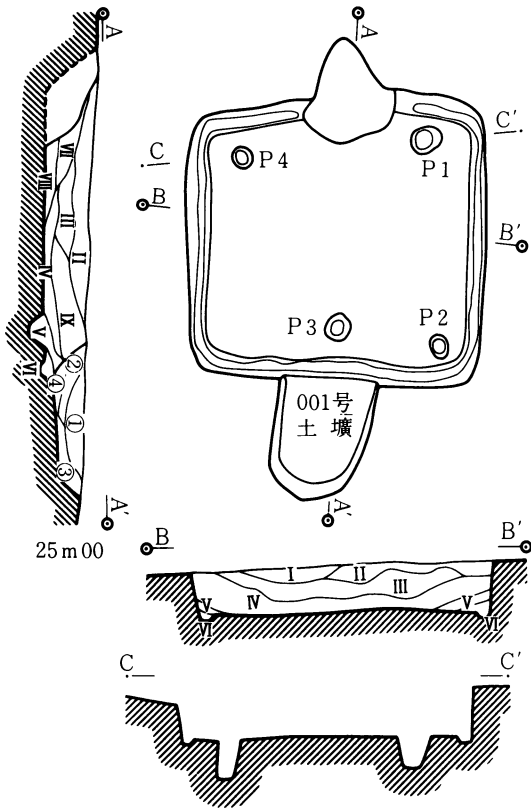
番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	3/4	13.4 8.5 3.9	紐積み成形。体部回転ヨコナデ。底部静止ヘラケズリ。	暗青灰色	砂粒を含む。175。
2	土玉	ほぼ完形	長2.4 短2.2 孔0.6	表面ミガキ、丁寧なつくり。	暗褐色	出土状況不明。00。
3	刀子	刃部を欠く。	長残 7.7 幅 1.2 厚 0.3	刃部を欠く。しっかりしたつくり。		199。

006号住居跡 (第218～219図)

1 C区より検出調査されたもので、3月に調査を行った。001号土壌に切られている。主軸方位はN-24°-Wである。住居跡内覆土は9層に分けられるが、基本土層は5層に分けられ、全体に褐色土粒を含んでいる。

平面形は、3.08×3.16 mでほぼ正方形を呈し、007号住居跡と同様に小型の住居跡である。床面積は、2.5×2.7 mで6.75 m²を計る。壁高は40～50 cmで、床面の標高は、約24.3 mである。周溝はカマド部分をのぞきめぐっている。幅は10～15 cm、深さは5～10 cmである。柱穴は4本検出された。P-1, P-2, P-4は主柱穴と思われるが、P-3は南壁の中央わきにあり、補助柱の可能性が有る。深さはそれぞれ31, 19, 26, 37 cmである。遺物の出土は多かったが図化できるものはなかった。

カマドは、北壁中央に構築されていた。掘込み幅約86 cm、奥行き約50 cmである。カマド内堆積土は5層に分けられ、炭化物を多く含んでいる。カマド袖の下は多少床面が高くなっている。煙道部の立ち上がりは急である。

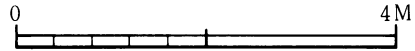


006号住居跡 土層説明

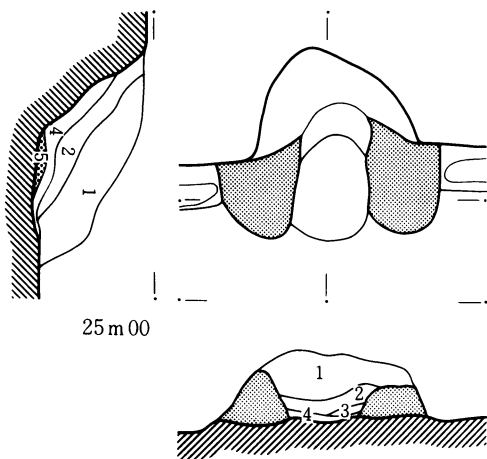
I層	黒色土	粘性を呈す。かわくとボロボロする。焼土粒を少量含む。
II層	暗茶黒色土	I層に少量の暗褐色土を含む。焼土粒はほとんどなし。
III層	暗茶黒色土	II層に類似、焼土粒を若干含む。
IV層	暗黒褐色土	粘質化した褐色土をまだら状に含む。
V層	暗褐色土	黒色が強いが、褐色土を多く含む。焼土粒はない。粘性もほとんどなし。
VI層	暗黒褐色土	粘性強く、山砂・炭化物・焼土粒を含む。
VII層	暗黒灰褐色土	山砂を多く含み、粘性が強い。
VIII層	暗黒褐色土	VII層に近いが、褐色土粒を多く含む。粘性は強い。
IX層	暗茶黒色土	II層に類似、焼土粒・山砂を含む。

001号土壌 土層断面

1層	黒色土	褐色土粒を若干含む。
2層	暗褐色土	褐色土に少量の黒色土を含む。
3層	暗褐色土	2層に類似。褐色土粒を多く含む。
4層	黒色土	粘性を呈し、暗褐色土に黒色土粒を含む。

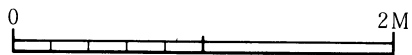


第218図 006号住居跡・001号土壌実測図



006号住居跡 カマド土層説明

1層	黒褐色土	山砂を少量含み、焼土粒・炭化物を微量含む。
2層	黒褐色土	1層に比して、山砂を多く含み、黄灰色がめだつ焼土粒を多く含む。
3層	暗赤褐色土	炭化物を主として、焼土粒・山砂を多く含む。
4層	黒色土	炭化物を多く含み、山砂を少量含む。
5層	暗赤褐色土	3層に類似するが、焼土粒が主となる。



第219図 006号住居跡カマド実測図

007号住居跡（第220～221図）

1 D区より検出調査された。006号住居跡とともに3月に調査を行った。主軸方位はN-28°-Wである。住居跡内覆土は8層に分けられ、粘性を少し呈す。

平面形は、北壁が広い台形を呈す。北壁約3.5m、南壁約2.8mで南北長約3.5mを計る。床面積は、2.64×2.96mで約7.8㎡である。壁高はそれぞれ46、36、37、44cmで、床面の標高は、約24.2mを計る。周溝はカマド部分をのぞきめぐっている。幅12～16cmで、深さ5～10cmを計る。柱穴は5本検出された。P-1、P-2、P-3、P-4は主柱穴である。深さはそれぞれ17、21、34、36cmを計る。P-5はカマドの反対側の南壁中央わきにあり、深さは8.5cmである。遺物の出土は多かったが、図化できるものはなかった。

カマドは、北壁中央に構築されていた。掘込み幅約130cm、奥行き約46cmである。東・南・西壁がほぼ直線的であるのに対し、北壁カマドに向ってやや曲線気味になっている。カマド内堆積土は11層に分けられたが、基本土層は4層に分けられる。カマド内には厚さ5cmほどの焼土層があり、直上をカマド構築材と思われる山砂がおおっている。廃棄されて早い段階で埋没したものと推察される。

(4) 掘立柱建物跡(第222図)

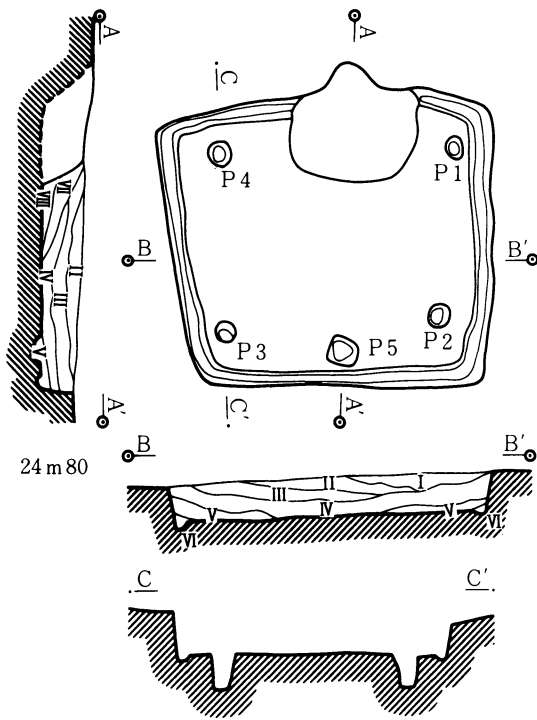
003号住居跡と重複して検出調査された。2間(3.95m)×3間(6.5m)で、主軸方位はN-58°-Wである。掘り形はほぼ円形を呈しているが一定していない。確認面での掘り形の直径は40～55cmを計る。掘り形覆土は3層に分けられ、2層・3層は柱痕に流入した土層と思われる。2層は褐色土層である。3層は2層に類似するが砂質を呈す。柱痕は18～20cmの褐色土として確認できた。大森第一遺跡では掘立柱建物跡の検出調査ははじめてである。

(5) 溝状遺構

001号溝状遺構（第223図）

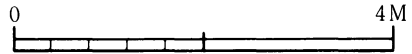
005号住居跡の北側で検出調査された。長さ8.26m、幅約0.5m、深さ0.2～0.25mを計る。覆土は2層に分けられる。粘性の強い土質を呈す。地山と覆土が類似しており、検出はむずかしかった。004号住居跡のカマドで攪乱としたものは、この溝の延長したものの可能性もある。溝は西に向って傾斜しているが、底面はたいらで、壁はゆるやかに立ち上がる。覆土の堆積は一般的な自然堆積をしている。

溝の南側にピットが検出された。50×45cmで、深さ約65cmを計る。覆土は黒色土である。性格は不明である。

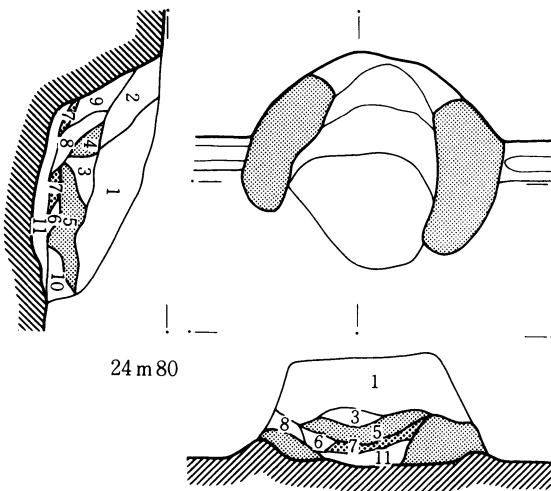


007号住居跡 土層説明

- | | | |
|-------|-------|---|
| I層 | 暗茶褐色土 | 暗黒褐色土に焼土粒を含む。全体に黒色土の粒子を含み、やわらかい。 |
| II層 | 黒茶褐色土 | I層にくらべて、黒色土粒を多く含む。やや粘性を呈し、サラサラする。焼土粒含む。 |
| III層 | 暗茶褐色土 | II層にくらべて径0.1~1mmの暗褐色土粒を含む。 |
| IV層 | 暗黒褐色土 | 粘性は強い。II層に類似。 |
| V層 | 黒色土 | 黒色土を主とする。粘性は強い。 |
| VI層 | 黒色土 | サラサラする黒色土で、粘性は弱い。II層に類似。 |
| VII層 | 茶褐色土 | III層に類似するが、山砂・炭化物・焼土粒を含む。 |
| VIII層 | 茶褐色土 | III層に類似するが、少量の山砂・炭化物を含む。砂質で粘性は弱い。 |

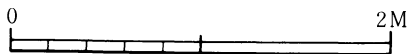


第220図 007号住居跡実測図

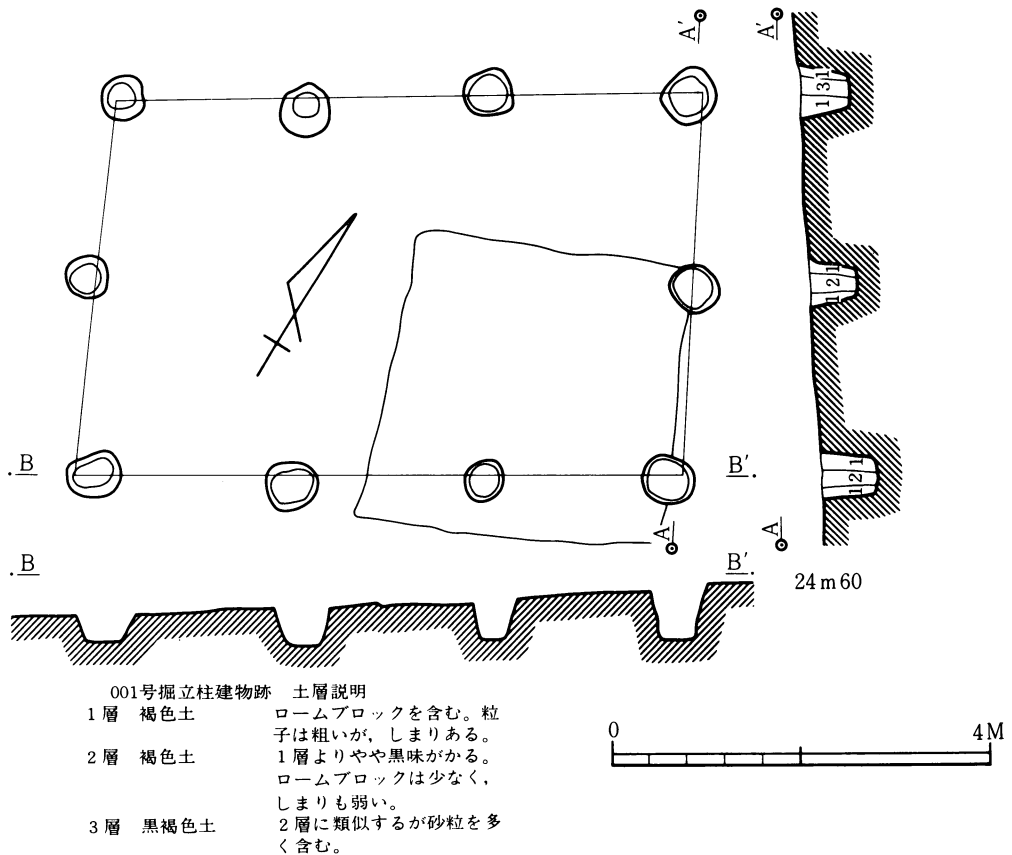


007号住居跡 カマド土層説明

- | | | |
|-----|--------|--------------------------|
| 1層 | 暗黒褐色土 | 多くの山砂・焼土粒・炭化物を含む。 |
| 2層 | 黒色土 | 1層に類似。山砂を多く含み明るい。 |
| 3層 | 暗黒褐色土 | 1層に類似。山砂を多く含む。 |
| 4層 | 暗灰褐色土 | カマド構築材。 |
| 5層 | 暗灰褐色土 | カマド構築材。 |
| 6層 | 黒色土 | 7層に類似するが、やや黒色土を含む。 |
| 7層 | 暗赤褐色土 | 山砂の赤色に変化したものブロック状になっている。 |
| 8層 | 暗灰黒褐色土 | 4層に近いが、焼土粒・炭化物を含む。 |
| 9層 | 暗灰黒褐色土 | 4層に近いが、山砂を多く含み明るい。 |
| 10層 | 黒色土 | II層に類似、やや粘性を呈す。 |
| 11層 | 黒色土 | 炭化物を主体として、少量の山砂を含む。 |



第221図 007号住居跡カマド実測図



第222図 001号掘立柱建物跡実測図

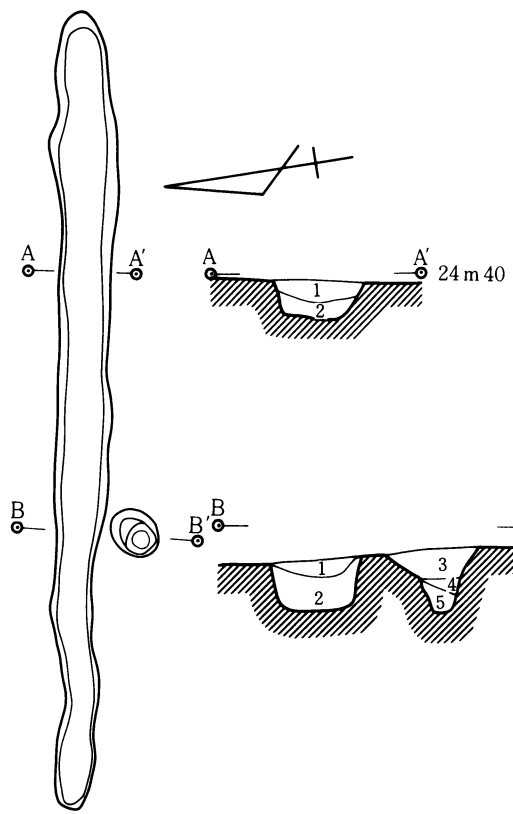
(6) 土壌 (第 218・224 図)

001号土壌 (第 218 図)

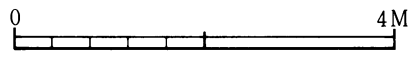
006号住居跡と重複し、住居跡を切っている。平面では新旧関係を確認することはできなかった。遺構内覆土は4層に分けられる。黒色土を含んでおり、粘性を呈す。長軸約1.5m、短軸約1mで、深さ約30cmである。底面はほぼ水平で、壁はゆるやかに立ち上がる。遺物の出土はあったが図化できるものはなかった。

002号土壌(第 224 図)

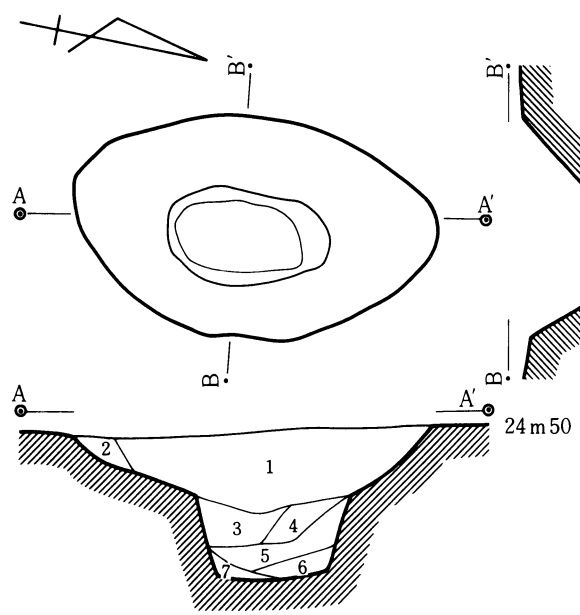
2A区より検出調査された。土壌内覆土は6層に分けられ、ロームブロックを含んでいる。長軸1.95m、短軸1.14m、深さ0.78mを計る。2段の掘込みで、中央部に85×50cm深さ40cmの土壌が掘られている。底面は水平で、ほぼ垂直に立ち上がったのち、ゆるやかに上方へ移行する。遺物の出土はなかった。



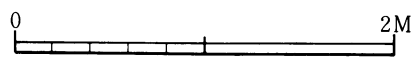
- 001号溝 土層説明
- 1層 暗茶褐色土 チョコレート色で、やや2層にくらべると褐色土が多い。焼土粒を含む。
 - 2層 暗茶褐色土 1層にくらべて黒色土を増す。粘性が強く、かわくとかたくなる。
 - 3層 暗茶褐色土 粘性は4層よりも弱い、粒子はこまかい。
 - 4層 黒色土 粘質を呈し3層5層にくらべるとボソボソする。焼土粒を微量含む。
 - 5層 暗茶褐色 3層に類似する。黒色土が多い。



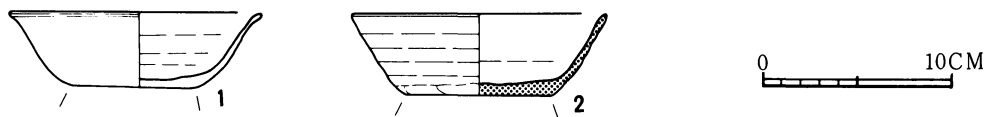
第223図 001号溝実測図



- 002号土壌 土層説明
- 1層 黒褐色土 粒子はこまかくしりある。パミス粒を含み、ロームブロックを若干含む。
 - 2層 褐色土 褐色土粒を主とする。
 - 3層 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。粒子はあらく、粘性・しりりともに弱い。
 - 4層 褐色土 粒子はあらいが、粘性にとむ。
 - 5層 暗褐色土 ロームブロックを主とする。底面から浮いて、バッキン性に入る。
 - 6層 褐色土 4層にくらべ粒子は粗いが粘性は最も強い。色調は茶色がかかる。



第224図 002号土壌実測図



第225図 大森第一遺跡表採遺物実測図

第58表 表採遺物表 (第225図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	1/2	13.2 6.6 4.0	体部回転ヨコナデ。底部回転ヘラ切り。のちヘラ整形。	暗褐色	緻密で良好。03。
2	坏	1/2	13.7 7.8 4.3	体部回転ナデ。底部回転ヘラ切り。底部周囲ヨコヘラケズリ。	暗黒灰色	緻密で砂質。須恵器。01。

(7) その他の遺物

縄文式土器 (第226図)

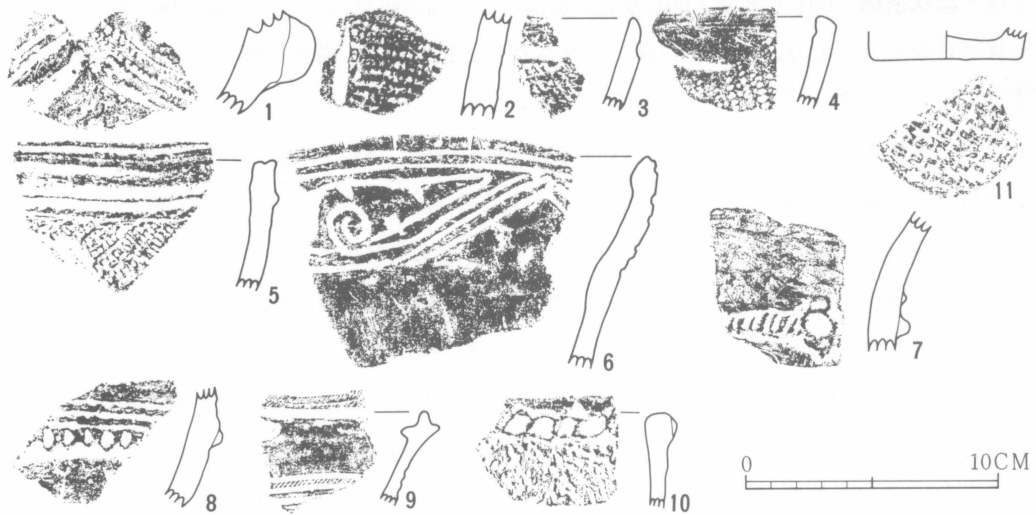
A・B区から出土したものである。本期に属す遺構は検出されなかった。

A類 (1~6)

全体に胎土が荒く、雑な作りのものを一括した。B類にくらべて、沈線や文様の施文にあらさがみられる。1は口縁部片で、少量の雲母片を含む。2・3は胴部・口縁部片で沈線による区画がされている。3・4は口縁部片で、多少開き気味に外返する。5は波状を呈しており、口縁直下に張り付けの突帯をもつ。6は胎土に砂粒を多く含む。外面に沈線による渦巻状の文様が施文される。

B類 (7~11)

全体に丁寧なつくりである。7は大きく外返する口縁部片で、細い隆帯の上にキザミを施している。上下部分は丁寧にミガキを加えている。8は雲母片を含む。外面の隆帯の上にキザミを加えている。9は口唇部・胴外面に縄文を施したあとにミガキを施す。10は粗製の鉢形土器片で、口唇部は押圧を加えている。11は底部片で網代痕がみられる。



第226図 大森第一遺跡出土縄文式土器拓影図

第4節 小 結

大森第1遺跡で検出調査された遺構は、竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡1棟、溝1条、土壇2基、土塁2本と塚であった。ほかに表土層および土塁の盛土内から縄文式土器片を採集した。以下に各時代・遺構に分けて記述し、まとめとしたい。

縄文時代 002号土壇と縄文式土器片が本期に属す。002号土壇からの遺物出土はなかったが、覆土および形状から本期に属すと思われる。縄文式土器片については第3節でふれたが、A類は加曽利E式土器の範疇に、B類は後期初頭堀之内式土器の範疇に含まれると思われる。

奈良・平安時代 本期には竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡1棟などが含まれる。実測図を掲載できた土器は14個体であった。006・007号住居跡からの遺物出土はなかった。遺物を出土した住居跡のうち、003号住居跡をのぞく4軒はほぼ正方形を呈し、柱穴を5本もつなど共通点がみられる。出土した遺物の器種構成は、土師器では埴・坏・甕形土器、須恵器では坏形土器がみられる。半球状を呈する埴形土器の存在や、須恵器坏形土器から、001・002・004・005号住居跡は、8世紀前半に比定できるものと思われる。003号住居跡は、中央に炉をもち、工房跡的な性格をもったものと考えられる。遺物は少なく帰属時期を明確にできないが、10世紀中頃と考えられよう。006・007号住居跡は遺物の出土がなく、時期は不明である。しかし、住居跡の形状や過去の調査例から推測すると、003号住居跡と同時期と考えられる。

掘立柱建物跡 伴出する遺物がなく、帰属時期を明確にできない。003号住居跡における調査時の観察では、住居跡を切って構築されている。このことから、10世紀以降のものと考えられるが、表土層からも該当する時期の遺物出土はない。003号住居跡とさほど時間的な差はないものと考えられる。

土壇・溝状遺構 001号土壇・001号溝状遺構ともに帰属時期は不明である。001号土壇は006号住居跡を切っており、10世紀以降に構築されたと思われる。溝状遺構が004号住居跡カマドを切っているとすれば、8世紀前半以前に構築されていたものと思われる。

土塁 2本の土塁が東・西に並行しているのが確認された。西側の土塁は下端幅約22m、東側の土塁は下端幅約15mで、中間部を含めるとおよそ50mにもなる。土塁の調査はトレンチによる土層観察をおもに行ったが、ロームブロック・焼土及び貝ブロックを含んでいるのみで明確に構築時期を示すものはなかった。盛土内からの遺物の出土は、縄文式土器片・土師器片などであった。土塁の下から奈良・平安時代の住居跡が検出されていることから、土塁はすくなくとも平安時代以降に構築されたことがわかるのみであった。土塁は南北方向に続いており、白旗町から松ヶ丘町へ至る道路にほぼ並行している。そのうえこの道路は大森町と宮崎町の町境にもなっている。これらのことから、この土塁は村などの境として構築されたのではないかという可能性が考えられないだろうか。

さて、千葉市史には、元和二年(1682)に小花和村(現在花輪町)と仁戸名村(現在仁戸名町)との間であらそわれた秣場争論についての史料が収録されている。この争論は、小花和村が秣場の所有を主張して仁戸名村と争ったものである。結果は、仁戸名村の主張が近隣の村々の証言などから認められ、小花和村の主張がしりぞけられたもので、以後野境を互に入らないように裁決している。この秣場は、現在の大網街道の南側にあたり、千葉消防学校の周辺と考えられる。そのうえ、絵図には仁戸名村と小花和村の村境に「野境土手」があったことが記されている。今回の調査で検出された土塁はこの「野境土手」に相当するものと考えてよいと思われる。

参考文献

石田広美・松村恵司「山田水呑遺跡」(山田遺跡調査会 1977)

倉田義広「千葉市域における奈良・平安時代の土器について」(『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』史館同人, 1983)

千葉市史編纂委員会「小花輪村と仁戸名村秣場争論裁許状」(『千葉市史 史料編2 近世』千葉市, 1977)

栗本佳弘「大森第一遺跡」(『京葉』, 千葉県都市公社, 1973)

第VI章 荒立遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と環境

荒立遺跡は、千葉市大森町 514-13 番地他に所在する。No.4 大森第一遺跡と同一台地上に所在しているが、小支谷により割されている。東側は赤井町・大森町から浸入する支谷に面している。谷の対岸には昭和 54 年度に調査を実施したNo.6 谷津遺跡が所在している。調査区は西方に向って緩傾斜している。標高は約 27 m、東側支谷底との比高差は約 12 m である。なお、地元では本地域を「新立（あらだち）」と呼称している。

第2節 調査の方法と経過

(1) グリッドの設定

荒立遺跡は、確認調査実施遺跡として調査が行われた。調査区は、起点から 4 k 420 m を A 点とし、同じく 4 k 500 m を B 点として、凡例 12 の方法で大グリッド及び小グリッドを設定した。

(2) 調査の経過

発掘調査は、昭和 53 年 5 月 8 日から 7 月 13 日まで行われた。トレンチ設定は第 228 図のとおりで、約 24% の試掘トレンチを入れた。その結果、2 G 区から竪穴住居跡と思われる落ち込みを検出したが、他の遺構の検出は皆無であった。トレンチ内出土の遺物も 2 G 区を除くとほとんどなかった。これら成果をもとにして、千葉県教育委員会文化課から竪穴住居跡と思われる落ち込みを中心として、400 m² の本調査の指示が出された。その結果、6 月 19 日から遺構の調査を実施し、7 月 13 日にはすべての作業が終了した。

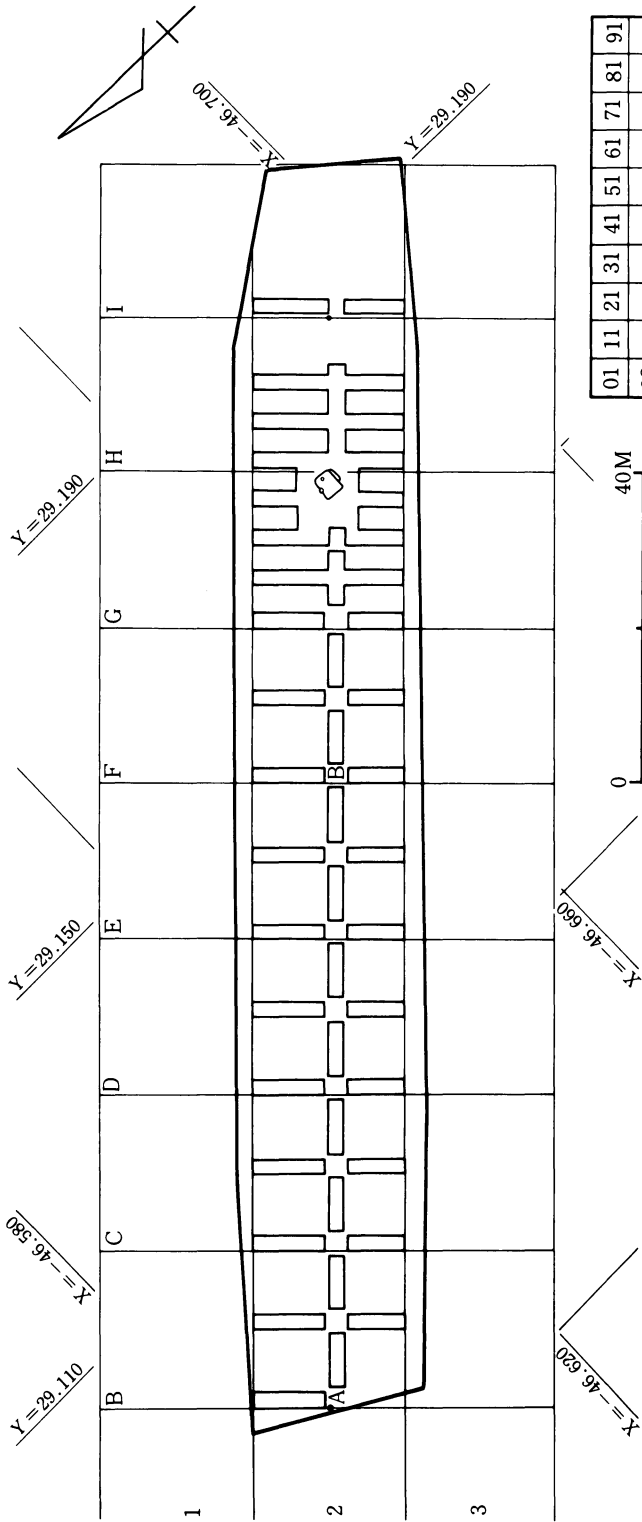
第3節 検出された遺構と遺物

本遺跡で調査された遺構は、竪穴住居跡 1 軒のみであった。住居跡は調査区の東側にあり、台地の最も高い場所に位置する。

001 号住居跡（第 229～232 図）

2 G 区より検出調査された。主軸方位は N-12°-E である。住居跡内覆土は 3 層に分けられる。ローム粒及びロームブロックを含む。南壁に攪乱が入っているが床面までは達していない。

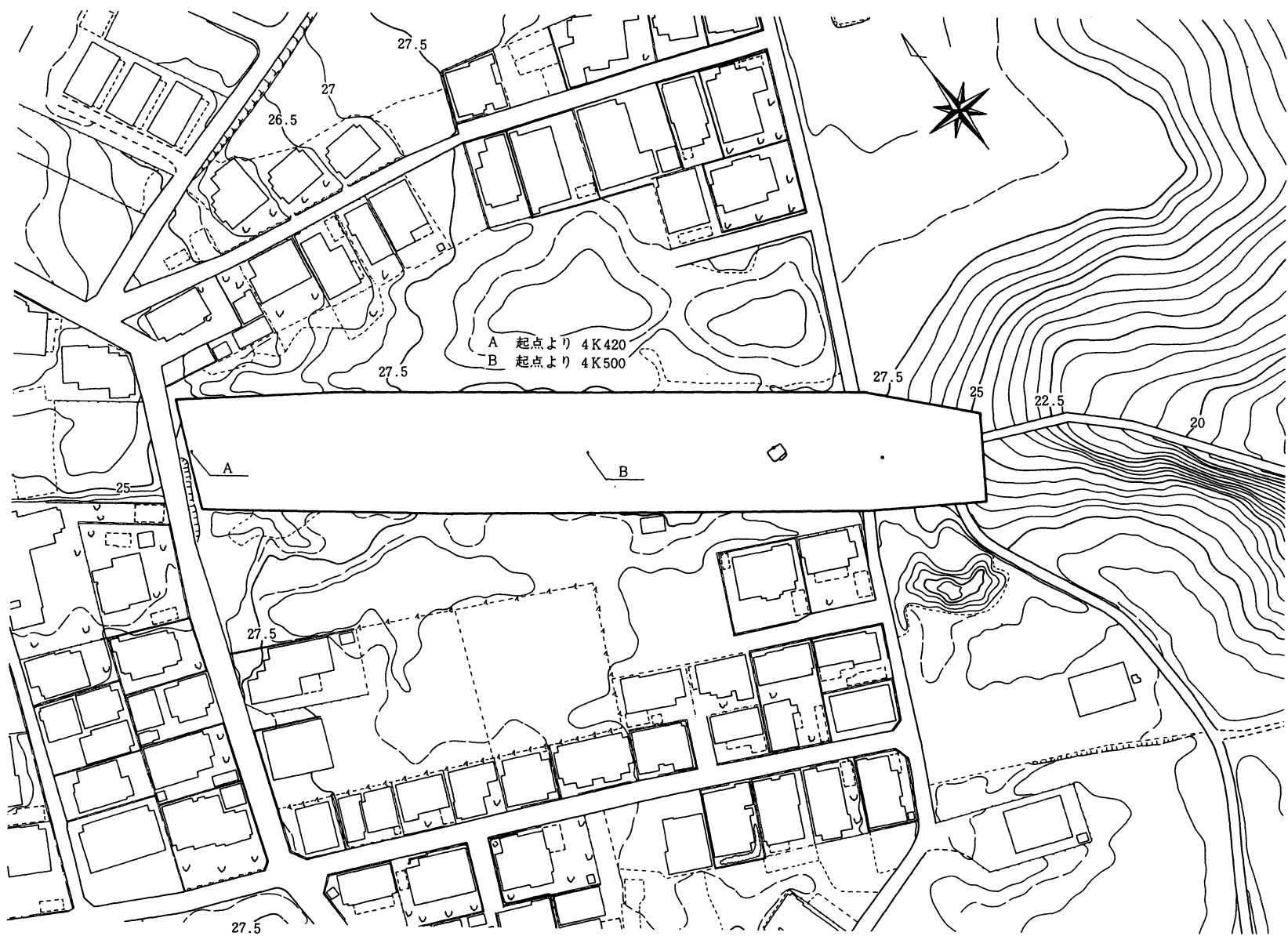
平面形は、3 × 3.68 m で東壁がやや短い形状を呈す。床面積は、2.68 × 3.36 m で約 9 m² を計る。壁高は 35～40 cm で、床面の標高は、約 26.4 m である。周溝は検出されなかった。柱穴は、



01	11	21	31	41	51	61	71	81	91
02									
03									
04									
05					55				
06									
07									
08									
09									
10									100

	X	Y	X	Y	
1	-46,583.861	29,091.264	9	-46,640.105	29,148.156
2	-46,598.084	29,077.203	10	-46,654.328	29,134.095
3	-46,597.922	29,105.487	11	-46,654.166	29,162.379
4	-46,612.145	29,091.426	12	-46,668.389	29,148.318
5	-46,611.983	29,119.710	13	-46,668.227	29,176.602
6	-46,626.206	29,105.649	14	-46,682.450	29,162.541
7	-46,626.044	29,133.933	15	-46,682.288	29,190.825
8	-46,640.267	29,119.872	16	-46,696.511	29,176.764

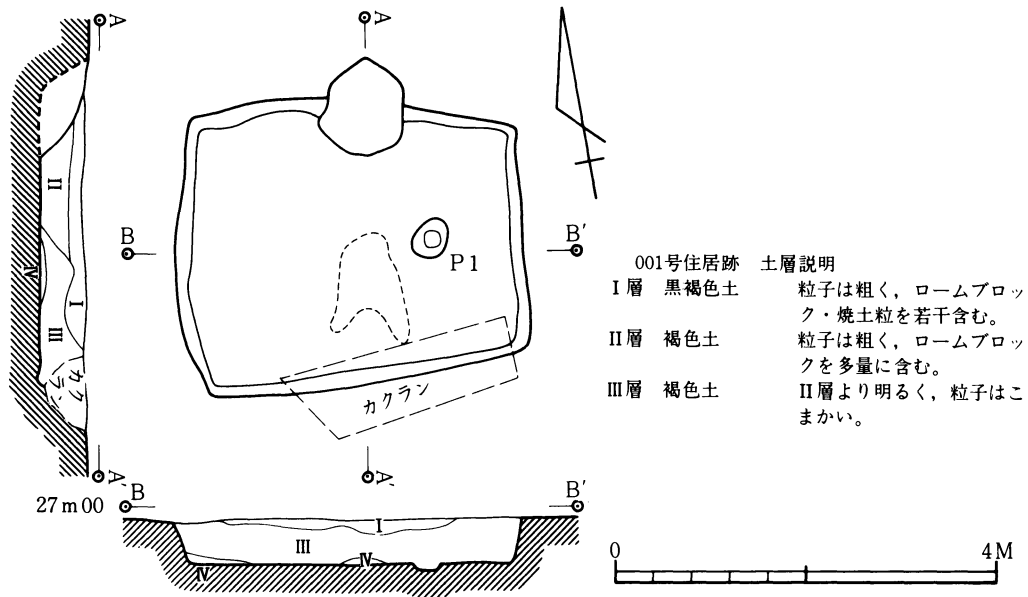
第227図 遺構配置図・トレンチ配置図



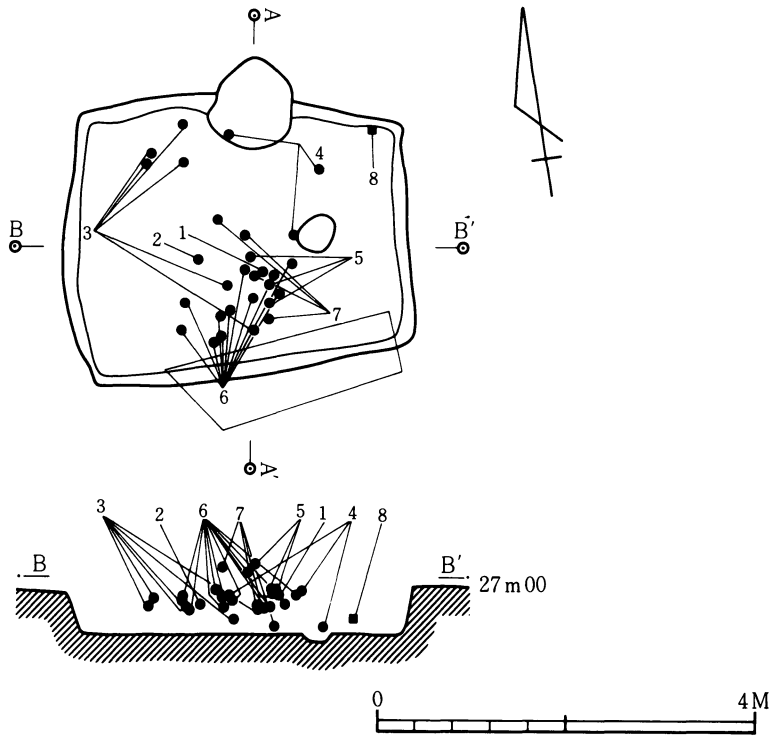
第228図 荒立遺跡調査区・周辺地形図 (1/1,000)

中央やや東側で検出された。直径42×36 cm、深さ約10 cmと浅い。床面はほぼ水平であるが、中央部（破線の範囲）の一部は固くしまっている。壁はゆるやかに立ち上がる。遺物の出土は多く、8点が図化できた。床面から相当浮いた状態で出土しているが、調査範囲内で唯一の住居跡であり、遺構に伴うものと考えてまちがいないと思われる。8は刀子で、刃部に木質部の残存がみられる。

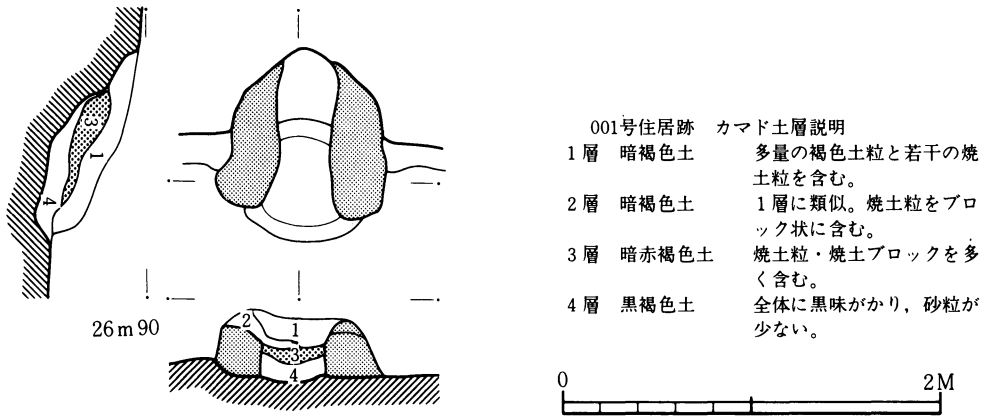
カマドは、北壁中央に構築されていた。掘込み幅約80 cm、奥行き約45 cmを計る。カマド内堆積土は4層に分けられる。カマド構築は直径65 cm、深さ10 cmほどの土壌を掘り、その上に袖を作っている。煙道部はゆるやかに立ち上がり、途中に段をもつ。



第229図 001号住居跡実測図



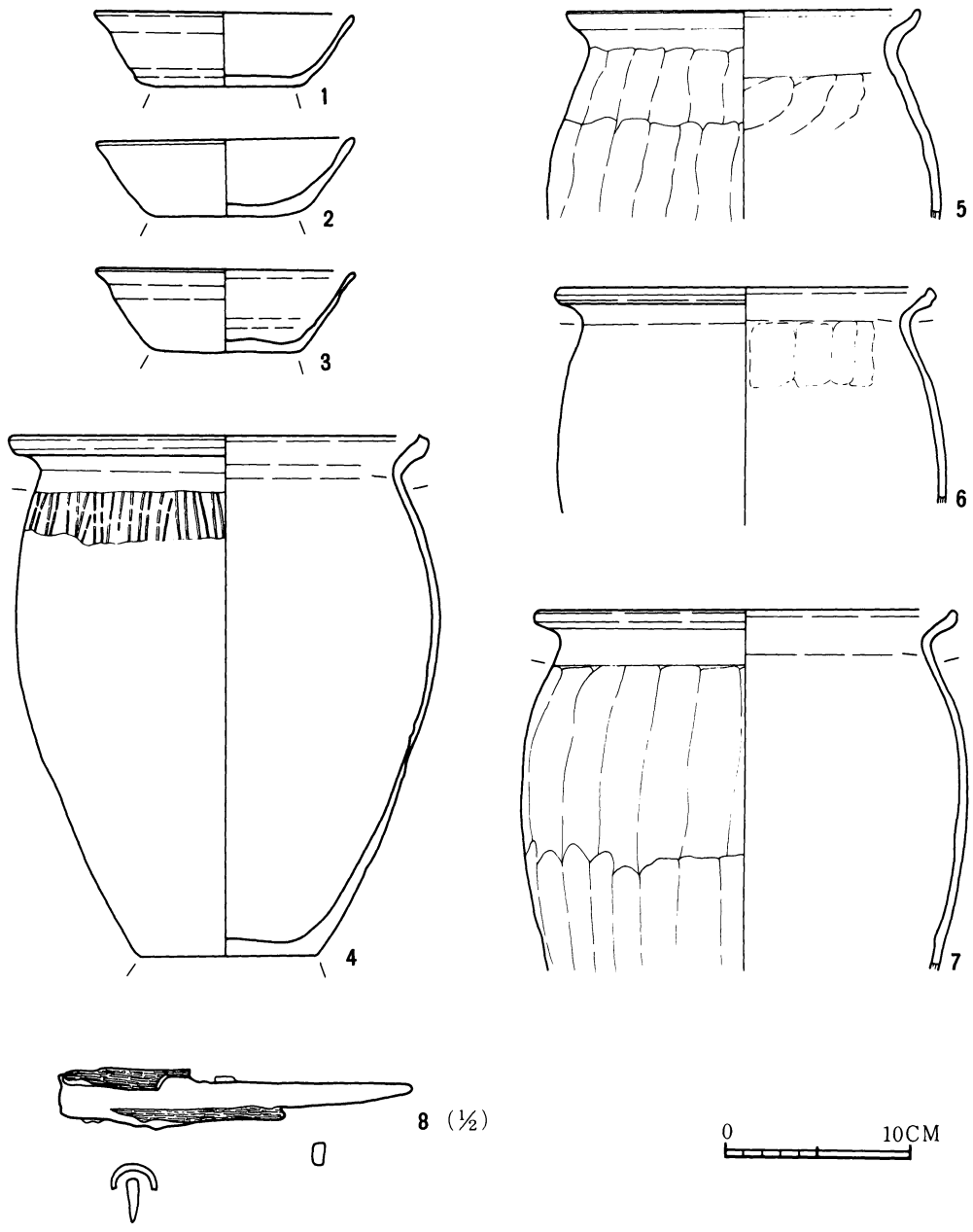
第230図 001号住居跡遺物出土状況図



001号住居跡 カマド土層説明

1層 暗褐色土	多量の褐色土粒と若干の焼土粒を含む。
2層 暗褐色土	1層に類似。焼土粒をブロック状に含む。
3層 暗赤褐色土	焼土粒・焼土ブロックを多く含む。
4層 黒褐色土	全体に黒味があり、砂粒が少ない。

第231図 001号住居跡カマド実測図



第232图 001号住居跡出土遺物実測図

第59表 001号住居跡出土遺物表 (第230・232図)

() 復元

番号	器形	遺存度	口径 法量・底径 器高	成形・整形・調整	色調	備考(接合関係)
1	坏	2/3	13.7 7.4 3.8	周囲ヨコヘラケズリ。外・内面回転ナデ。	暗黄灰褐色	緻密で良好。173。
2	坏	3/4	13.6 7.6 4.1	底部ヘラ整形。周囲ヨコヘラケズリ。外・内面ナデ。	暗茶褐色	緻密で良好。32, 222。
3	坏	1/2	13.7 7.6 4.4	底部静止ヘラ切り。外・内面回転ナデ。	暗褐色	良好。180, 133, 111, 135, 147, 280。
4	甕	口縁の一部を欠く。	21.6 9.6 27.5	紐積み。外面タタキ、のちナデ。口縁部ヨコナデ。胴部下位ヨコヘラケズリ、のちナデ。内面ナデ。	暗黒褐色	良好。272, 46, 52, 53。
5	甕	胴部以下を欠く。	18.6 — 残11.0	紐積み。外面2段のタテヘラケズリ。内面ヨコ指頭ナデ。のちナデ。口縁部ヨコナデ。	暗茶褐色	緻密で良好。09, 88, 232。
6	甕	胴部以下を欠く。	19.6 — 残11.6	紐積み。口縁部ヨコナデ。外面ナデ。内面上位オサエ、下位ナデ。	暗褐色	緻密で良好。10, 40, 44, 85, 178, 188, 201, 209, 216, 234, 257。
7	甕	胴部以下を欠く。	21.9 — 残19.2	紐積み。外・内面ナデ。口縁部ヨコナデ。外面タタキ。	暗黒褐色	良好。274, 28, 243, 259。
8	小刀	刃部を欠く。	長9.5 幅1.2 厚0.3	木質部が残存する。		273。

第4節 小 結

検出調査された遺構は住居跡1軒のみであった。遺跡は東を支谷によって開析され、西を小支谷によって劃されたほそい台地上に所在している。住居跡の検出された位置は、台地で最も高い場所に位置している。本調査前の、試掘トレンチからの遺物出土はほとんどなく、住居跡の検出された周辺から土師器片の出土が多少みられるのみであった。調査範囲は幅約25m、長さ約150mという細長い形状であり、これだけの資料から遺跡全体の性格を把握するのは大変むずかしいことである。出土遺物は、坏形土器3、甕形土器4と刀子である。坏形土器の底部は

整止へラ切りの後に、底部周囲を手持ちへラケズリで整形している。甕形土器は、口唇部が内側につまみあげられた形状を呈しており、口縁外面は多少丸味をおびる。胴部外面はタタキ痕のみられるもの(4)とタテにへラケズリを施したものがみられる。これらの特徴から、住居跡の年代を9世紀後半から10世紀の早い段階に位置づけてよいと思われる。

次に集落としての性格を考えてみたい。調査範囲の問題があるが、調査区内はもちろん調査区外にも住居跡はあっても1～2軒と考えている。中山吉秀氏が提称された「離れ国分」と呼ばれる集落形態に相当するものと考えてよいのではなかろうか。カマドは、北壁中央に構築されており、カマド内には約10cmの厚さで焼土が堆積している。床面は、中央の一部に固くふみかためられた範囲がある。土器の出土、カマドの一定期間の使用と住居跡床面の状況から、本住居跡は生活跡としての性格を有していたことはまちがいない。次に、本住居跡の居住者が日常生活を営んでいた集落の所在が問題になる。西方の小支谷をはさんだ台地上には大森第一遺跡が、東方の支谷をはさんだ台地上には谷津遺跡が所在している。今回の大森第一遺跡の調査では該当する時期の住居跡及び遺物は検出されていない。しいて求めるとすれば、003号住居跡とした遺構が該当するかもしれない。しかし、この遺構は若干新しい様相を呈しており、検討の必要がある。谷津遺跡では、当該期の住居跡は検出されていない。これらのことから推測をすれば、多少の年代差はあるが大森第一遺跡と密接な関係のある住居跡と考えてよからう。

第VII章 まとめ

昭和 53 年度に発掘調査を実施した遺跡の概要は以上のとおりである。本章では、各時代ごとにまとめを行いたい。

先土器時代 荒立遺跡をのぞく 4 遺跡で確認グリットを入れたが、遺物は検出されなかった。

縄文時代 No.1 鷲谷津遺跡, No.3 山ノ神遺跡, No.5 大森第一遺跡で、遺構・遺物が検出された。

No.1 鷲谷津遺跡 早期 井草式土器
稲荷台式土器
茅山式土器

No.3 山ノ神遺跡 中期 阿玉台式土器
土壙
包含層
集石礫群

No.5 大森第一遺跡 中期 加曾利 E 式土器
後期 堀之内式土器
土壙

以上が検出された遺構・遺物である。竪穴住居跡は検出されなかった。遺構は、山ノ神遺跡と大森第一遺跡から土壙・包含層・集石礫群が調査されたにとどまった。山ノ神遺跡は、同一台地上に「オクマンノ（奥万野）貝塚」の所在が知られており、今回調査された遺構・遺物はその貝塚の一部と推定される。中期阿玉台期の遺物が検出され、中期以外の遺物がみられないことから、「オクマンノ貝塚」も同時期と思われる。検出された遺構は、土壙・包含層と集石礫群である。土壙に 2 つのタイプがみられることはすでに述べた。凹石や貝類を出土した土壙は舟底形を呈し、台地縁辺の多少内に入った場所に所在するという共通点をもっている。包含層として検出された土器片は、同一個体のものであり、散在しているが一定範囲から出土している。一般的な「包含層」とはややことなるものと考えてよかろう。意識的に「散在されたもの」と考えることができまいか。集石礫群は、「礫群」と呼んでよいものか問題がある。遺物は出土せず、出土層位から、中期に属するものと推定した。火をうけた痕跡はない。性格は不明である。大森第一遺跡は、1977 年に一部調査し、その報告がされている。報告によると、今回の調査で得たものと同時期の土器片を検出している。貝ブロック以外の遺構は検出されていない。土器片は、中期及び後期に属するものである。001 号土壙は明確に時期を示すものは出土しなかったが、覆土などから本期に含めた。大森第一遺跡での縄文時代の遺構検出ははじめてである。検出された位置は、埋没谷に近い所であった。

鷺谷津遺跡からは土器片だけが出土した。早期の井草式土器・稲荷台式土器・茅山式土器である。台地の緩傾斜面の表土中からであり、遺構は検出されなかったものの、貴重な資料と思われる。

奈良・平安時代 調査を実施した各遺跡から竪穴住居跡及び土壇などが調査された。検出された遺構は以下のとおりである。

- No.1 鷺谷津遺跡 竪穴住居跡 17, 土壇 4, 溝 1。
- No.2 観音塚遺跡 竪穴住居跡 19, 鍛冶跡 1, 土壇 13。
- No.3 山ノ神遺跡 竪穴住居跡 3。
- No.5 大森第一遺跡 竪穴住居跡 7, 掘立柱建物跡 1, 土壇 1, 溝 1。
- No.6 荒立遺跡 竪穴住居跡 1。

以上が検出された遺構である。遺跡・遺構の時期については各章でふれたが、倉田氏の編年区分によると下記のとおりである。

- No.1 鷺谷津遺跡 II・III・IV・V期
- No.2 観音塚遺跡 II・III・IV・VI・VII・VIII・X期
- No.3 山ノ神遺跡 IV期
- No.5 大森第一遺跡 II・VIII期
- No.6 荒立遺跡 VII期

上記の区分でIV期についてはA・B期に分けているがしいてわけなかった。今回の調査で検出された遺構はIV b 期に属するものと思われる。

調査区がせまいため、集落全体の性格を把握するのは不可能にちかい。しかし、今回の調査結果からみると、鷺谷津遺跡・観音塚遺跡では集落が数期にわたり継続して営まれていることがわかる。鷺谷津遺跡は、8世紀前半から9世紀中葉までほぼ継続して営まれている。調査を実施した範囲からみると、一時期あたり約4軒が検出されている。かぎられた範囲の中で一時期あたり4軒の竪穴住居跡が確認されたことは、集落内でも竪穴住居跡の構築場所についてはある程度の規制があったことがうかがえる。観音塚遺跡は、8世紀から11世紀まで断続的にはあるが、遺構が構築されている。鍛冶跡はVII期に属しており、VIII期には同じく鍛冶工房跡と推測される015号住居跡がある。後述するように、千葉寺との関係を考えると、鍛冶作業のための計画的な集落とも考えられる。山ノ神遺跡は、8世紀後半に営まれた集落と思われる。003号住居跡からは「武蔵型台付甕」の出土がみられ、伴出遺物もまとまっており注目にあたいする。大森第一遺跡は、8世紀前半と10世紀代の2度にわたって営まれた集落跡である。掘立柱建物跡を検出できたことは、いままでの大森第一遺跡の調査結果に、新しい知見を加えたことになる。また、003号住居跡とした遺構は、後述するとおり鍛冶跡と思われる。このような遺構の存在は、各集落ごとで鉄製品の加工・再加工を行っていたことをうらざけるものであろう。

荒立遺跡では、10世紀前半と思われる遺構を検出した。「離れ国分」と呼ばれる集落構成である。大森第一遺跡と密接なつながりのある集落と考えておきたい。

以上5遺跡は、旧下総国千葉郡池田郷に所在している。池田郷の範囲については、武田宗久氏によって「千葉市史 第一巻」他でくわしくのべられている。この資料が今後の研究の一助になれば幸いである。

以上、5遺跡の出土遺物についてかんたんなまとめを行ったが、No.4大北遺跡、No.7谷津遺跡、No.8瓜作遺跡の報告とあわせて、将来、再論を行いたい。

製鉄遺跡 No.2 観音塚遺跡、No.5 大森第一遺跡から下記の遺構・遺物が検出された。

No.2 観音塚遺跡 鍛冶跡1、火床をもつ竪穴住居跡1、土壇1、羽口、塊形滓。

No.5 大森第一遺跡 炉をもつ竪穴住居跡1。

以上のとおりであった。大森第一遺跡で検出された遺構からは、工房跡をうらずける遺物は出土しなかったが、炉跡の状況などから小鍛冶跡と推定した。

観音塚遺跡で検出された塊形滓は、調査による所見や大沢正己氏の分析結果から、製品加工の段階で排出された鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）と考えられた。また、分析を実施した鉄器片は、冷間加工過程で放置された半成品と考えられている。これらの結果や、羽口及び鍛造剥片などから、観音塚遺跡における鍛冶跡は、集落内での製品の加工・再加工を行った「鍛錬鍛冶工房跡」と推定されている。一方、鍛冶跡の年代は、出土遺物から10世紀前半と考えられている。観音塚遺跡の所在する「観音塚」附近は、海照山歓喜院青蓮千葉寺の故地とされている。「観音塚」からは「布目瓦」が出土したこともあるという。現在の千葉寺境内からも瓦の出土がみられ、武田宗久氏によると、「千葉寺境内における旧加藍の創立は、考古学上から観察すれば奈良期末ないし初頭」と考えられるという。今回の調査でも011・015号住居跡からは瓦片の出土がみられる。瓦片を出土した竪穴住居跡は鍛冶跡の時期とほぼ同じと思われ、千葉寺と密接な関係のある遺跡と推測できる。

参考文献

倉田義広「千葉市域における奈良・平安時代の土器について」（『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』史館同人、1983）

石田広美・松村恵司『山田水呑遺跡』（山田遺跡調査会、1977）

栗本佳弘『京葉』（千葉県都市公社、1973）

千葉市史編纂委員会『千葉市史 史料編2 近世』（千葉市、1977）

千葉市史編纂委員会『千葉市史 第一巻』（千葉市、1974）

中山吉秀『離れ国分考』（『古代』61、1976）

鈴木定明 他『研究紀要 7』（千葉県文化財センター、1982）

Contents

—Archaeological Investigations of The Washiyatsu Site, The Kannonzuka Site, The Yamanokami Site, The Ômori 1 Site, The Aradachi Site—

Preface

Acknowledgments

Explanatory Notes

Contents

- I Introduction
 - 1 Start of Survey
 - 2 Method of The Investigation
- II Survey of The Washiyatsu Site
 - 1 History and Site
 - 2 Method of The Investigation
 - 3 Remains and Relics
 - 4 Conclusions
- III Survey of The Kannonzuka Site
 - 1 History and Site
 - 2 Method of The Investigation
 - 3 Remains and Relics
 - 4 Conclusions
- IV Survey of The Yamanokami Site
 - 1 History and Site
 - 2 Method of The Investigation
 - 3 Remains and Relics
 - 4 Conclusions
- V Survey of The Ômori I Site
 - 1 History and Site
 - 2 Method of The Investigation
 - 3 Remains and Relics
 - 4 Conclusions
- VI Survey of The Aradachi Site
 - 1 History and Site
 - 2 Method of The Investigation
 - 3 Remains and Relics
 - 4 Conclusions
- VII A Conclusion

Published by

CULTURAL PROPERTIES CENTER OF CHIBA PREFECTURE

1 - 3 - 13, Inohana, Chiba-City, Chiba-Pref.

Telephone 0472-25-6478

We present you a report of archaeology about five sites. The site is situated at Chiba City in Chiba prefecture. The excavation was undertaken between 1978 and 1979. They are located in the upland toward the east coast of Tokyo Bay.

The next list is the result of the research.

Site Name	Found Remains
No. 1 Washiyatsu	17 Dwelling Pits 4 Pits 1 Ditch (All are Historical age.) Other articles were pot-sherds of Igusa type, Inaridai type and Kayama type of Early Jōmon.
No. 2 Kannonzuka	19 Dwelling Pits 1 Smith 13 Pits (All are Historical age.)
No. 3 Yamanokami	3 Dwelling Pits (All are Historical age.) 4 Pits (Middle Jōmon Period.)
No. 5 Ômori I	7 Dwelling Pits 1 Pits 1 Ditch 1 Hottatebashira buildings (There are Historical age.) 1 Pits (Middle Jōmon Period.) 1 Earth revetment (Edo Period) Other articles were pot-sherds of Kasori E type of Middle Jōmon and Horinouchi type of Late Jōmon Period.
No. 6 Aradachi	1 Dwelling (Historical age)

写 真 图 版



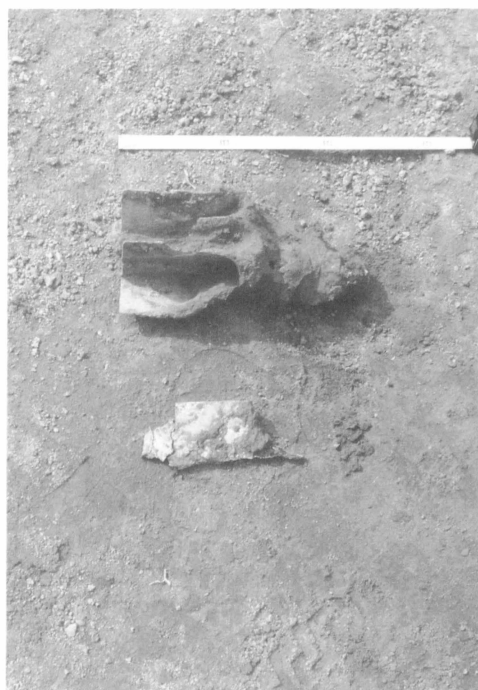
遺跡航空写真



1. 遺跡遠景（南側水田面から）



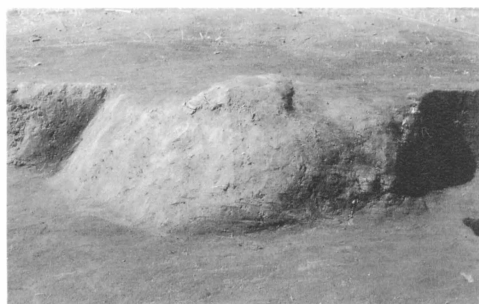
2. 焼夷弾破片検出状況



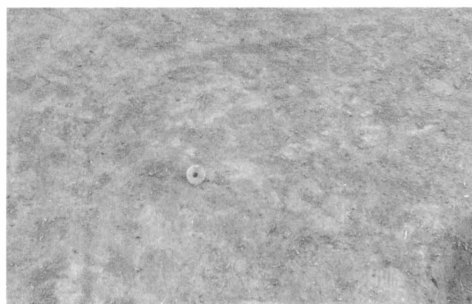
3. 焼夷弾破片



1. 001号住居跡全景



2. 001号住居跡カマド(調査前)



4. 001号住居跡紡錘車出土状況



3. 001号住居跡カマド(調査後)



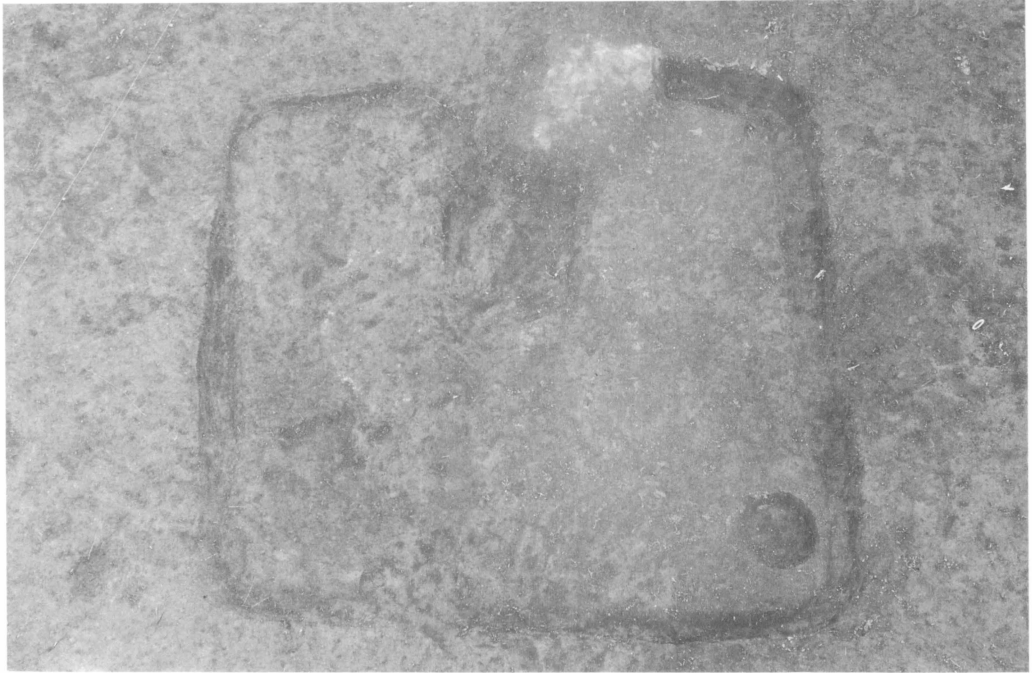
1. 002・003号住居跡全景



2. 002号住居跡カマド（調査前）



3. 003号住居跡カマド（調査後）



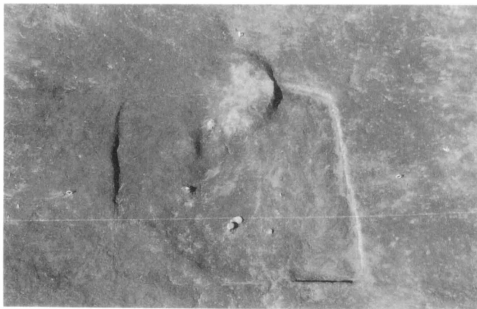
1. 004号住居跡全景



2. 004号住居跡カマド(調査前)



3. 004号住居跡カマド(調査後)



4. 004号住居跡遺物出土状況



1. 005号住居跡全景



2. 005号住居跡遺物出土状況



3. 005号住居跡カマド内遺物出土状況



1. 006号住居跡全景



2. 006号住居跡遺物(8)出土状況



3. 006号住居跡カマド(調査後)



1. 007号住居跡全景



2. 007号住居跡カマド内遺物出土状況



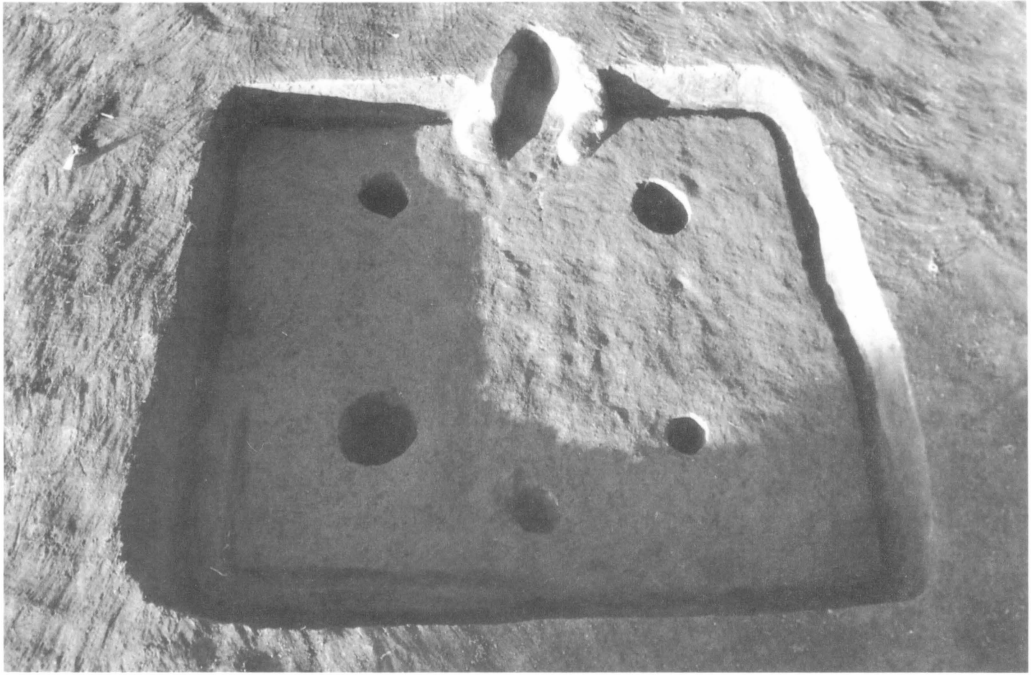
3. 007号住居跡カマド(調査前)



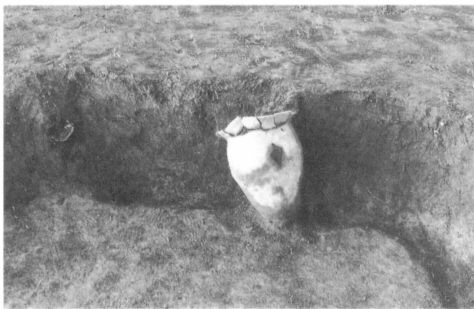
4. 007号住居跡カマド側遺物出土状況



5. 007号住居跡遺物出土状況



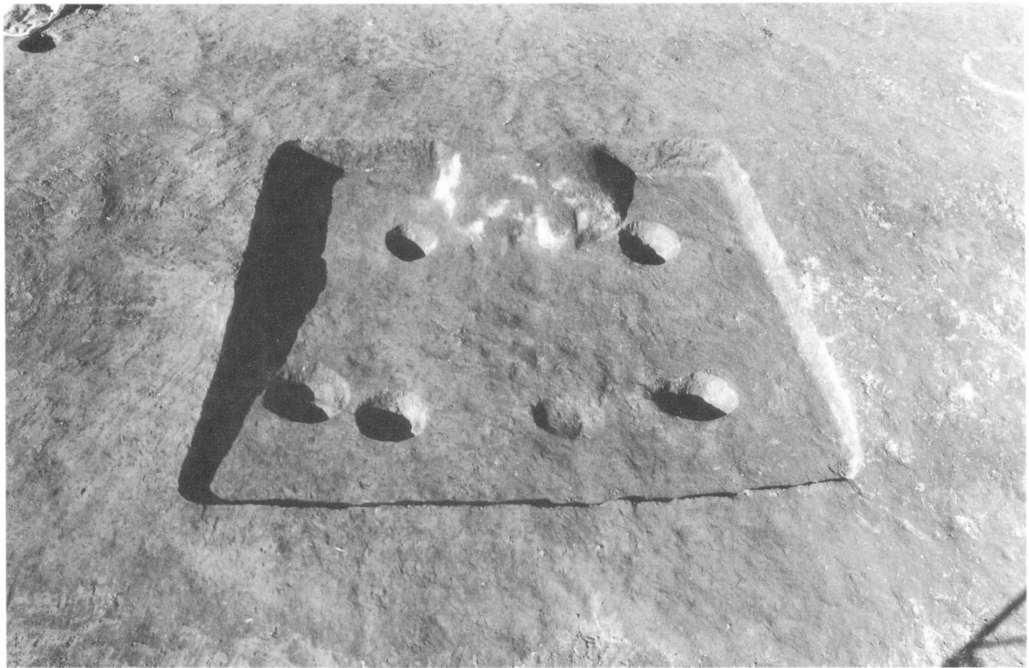
1. 008号住居跡全景



2. 008号住居跡遺物出土状況



3. 008号住居跡カマド内支脚出土状況



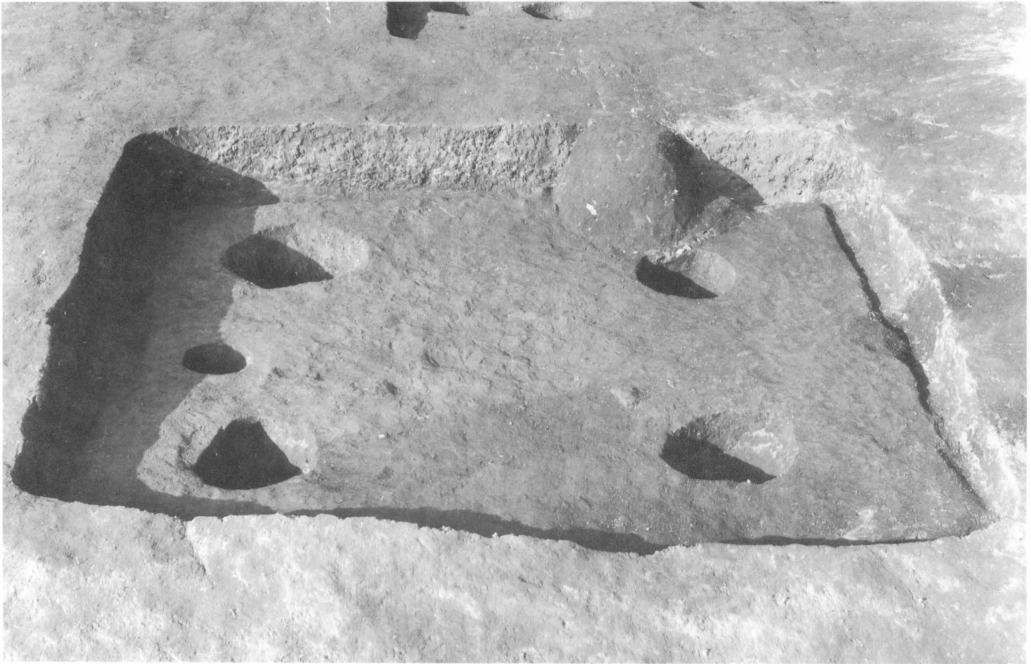
1. 009号住居跡全景



2. 009号住居跡カマド(調査後)



3. 009号住居跡土層断面(A-A')



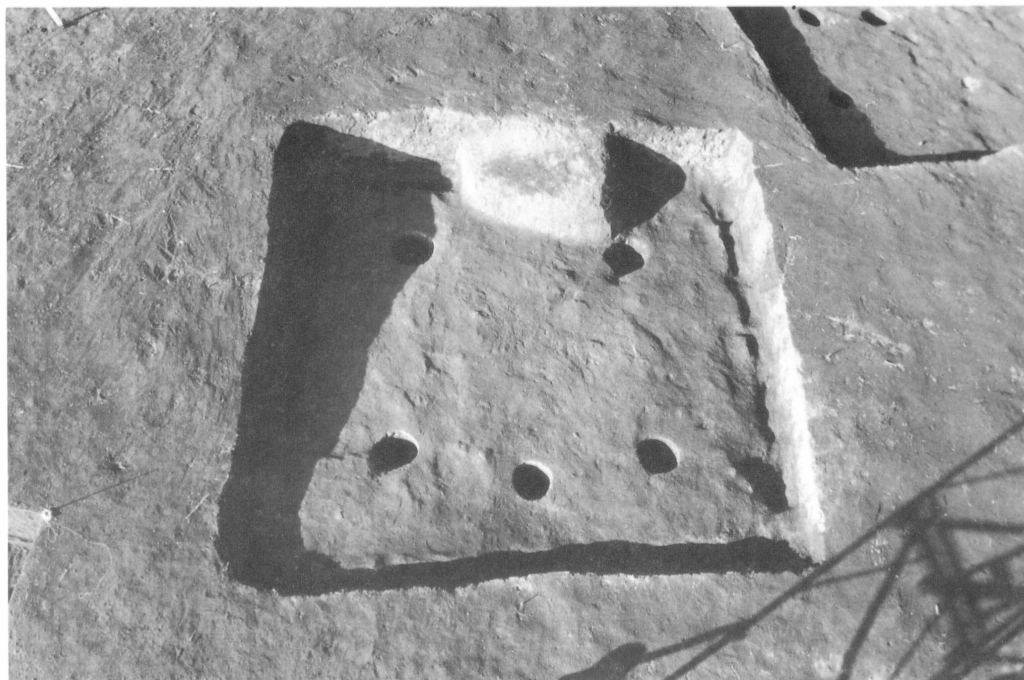
1. 010号住居跡全景



2. 010号住居跡カマド(調査後)



3. 010号住居跡カマド(調査前)



1. 011号住居跡全景



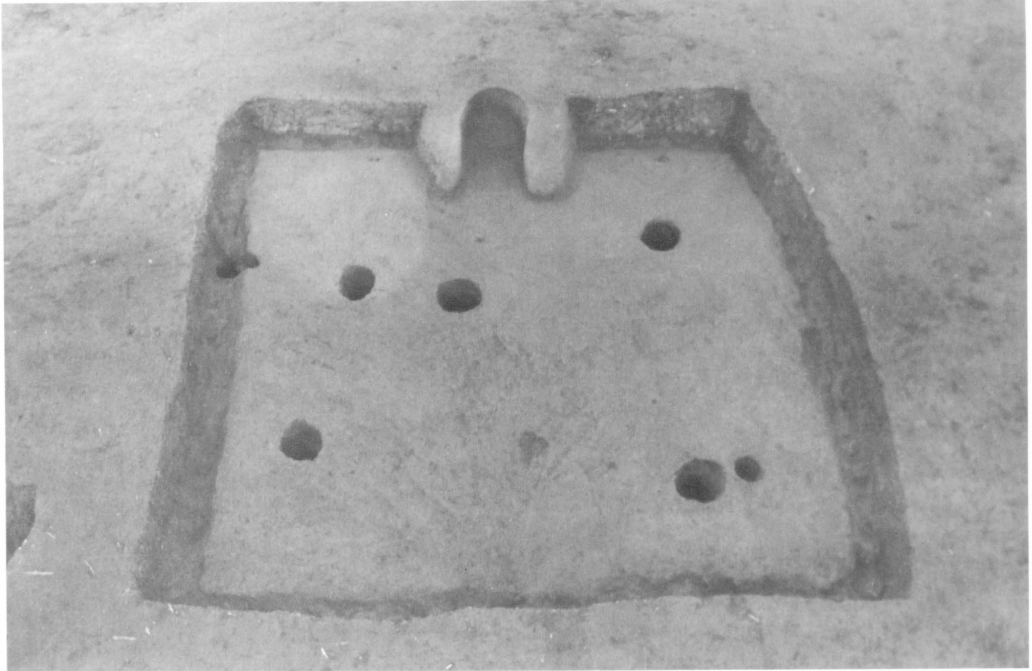
2. 011号住居跡カマド(調査前)



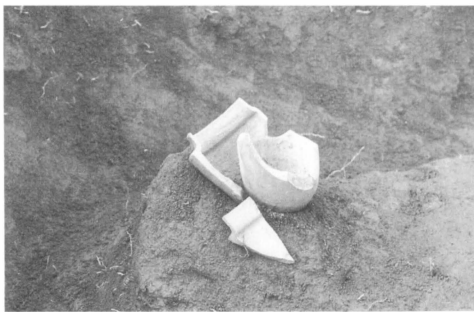
3. 011号住居跡カマド内土層断面



4. 011号住居跡土層断面(A-A')



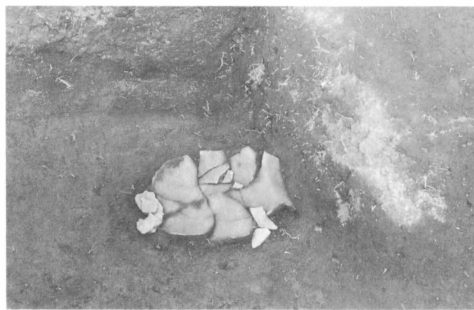
1. 012号住居跡全景



2. 012号住居跡遺物(5)出土状況



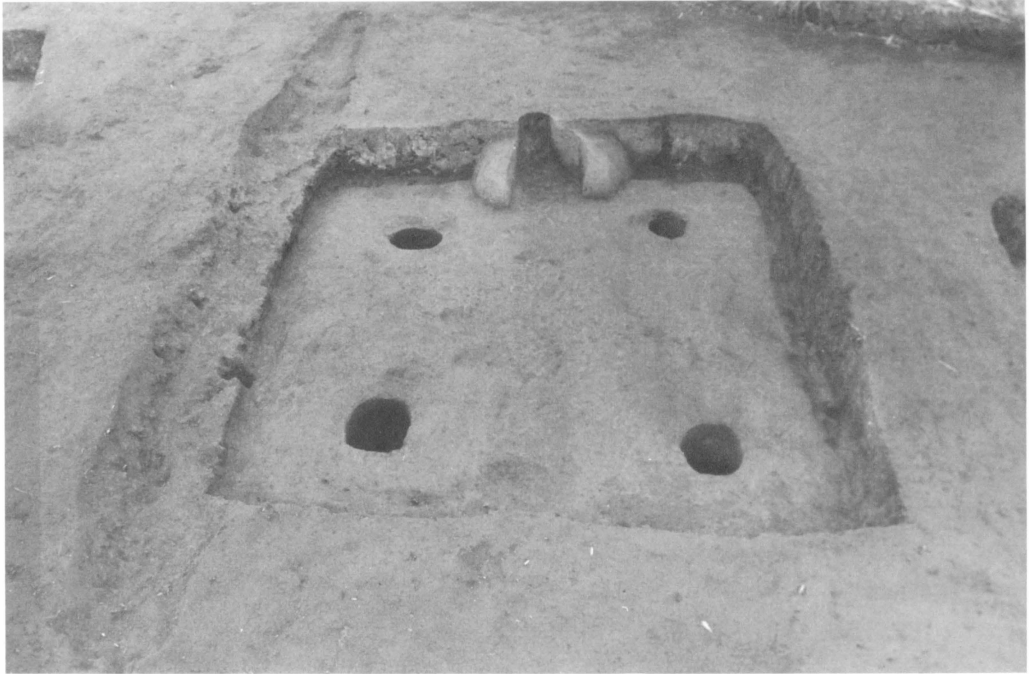
3. 012号住居跡遺物(6)出土状況



4. 012号住居跡遺物(4)出土状況



5. 012号住居跡カマド(調査前)



1. 013号住居跡, 001号溝全景



2. 013号住居跡遺物出土状況



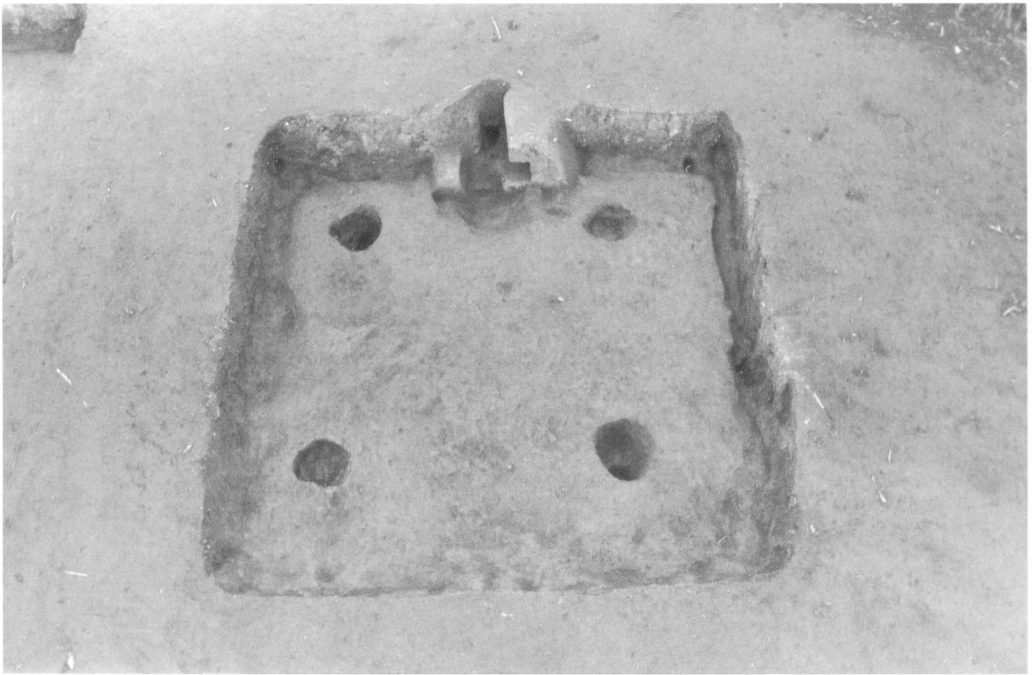
3. 013号住居跡カマド側遺物出土状況



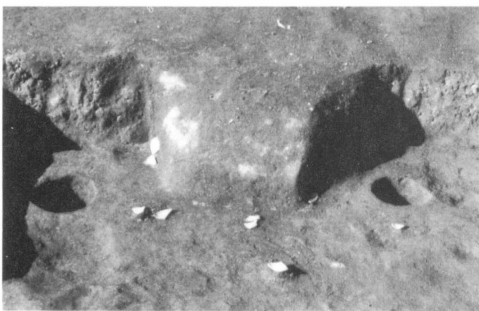
4. 013号住居跡遺物出土状況



5. 013号住居跡カマド(調査後)



1. 014号住居跡全景



2. 014号住居跡カマド(調査前)



3. 014号住居跡カマド土層断面



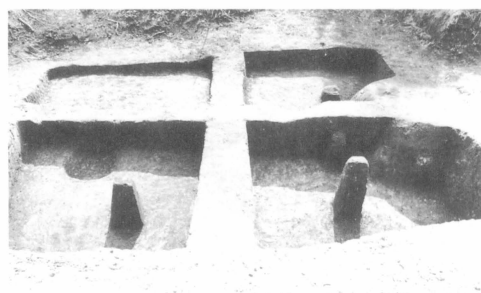
1. 015号住居跡全景



2. 015号住居跡カマド(調査後)



3. 015号住居跡カマド(調査前)



4. 015号住居跡土層断面(A-A)



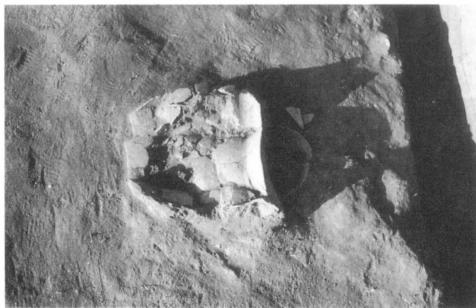
1. 016号住居跡全景



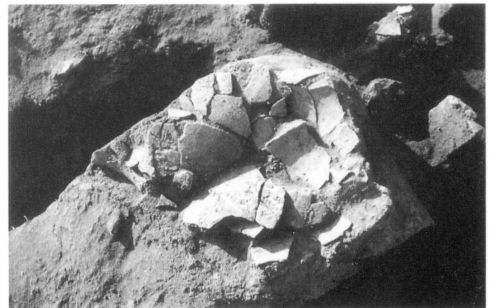
2. 017号住居跡全景



1. 001号土壙全景



2. 001号土壙遺物出土状況



3. 001号土壙遺物出土状況



4. 002・003・004号土壙全景



001
1



001
2



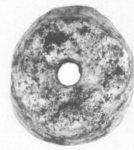
001
3



001
4



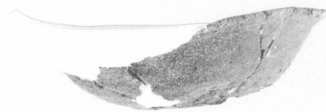
001
5



001
6



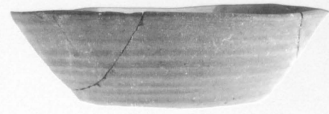
002
3



004
1



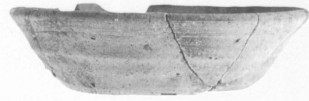
005
1



005
2



005
3



005
4



005
5



005
8



005
6



005
9



005
7



005
10



005
11



005
12



005
14



005
13



006
2



006
6



006
8



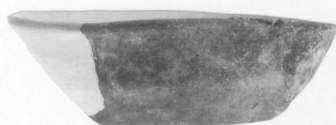
007
1



007
2



007
3



007
5



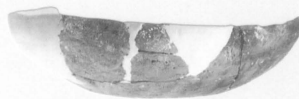
007
6



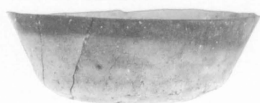
007
10



007
11



008
1



008
3



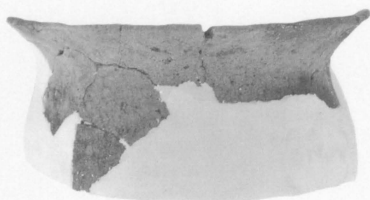
008
2



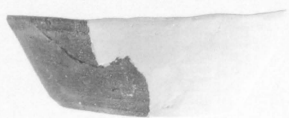
008
4



009
4



010
1



012
1



012
3



008
8



009
1



012
5



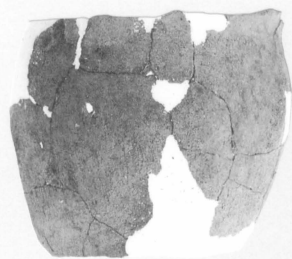
013
1



013
2



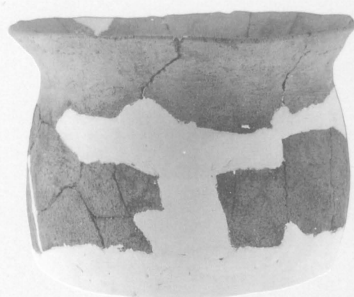
013
3



013
4



013
5



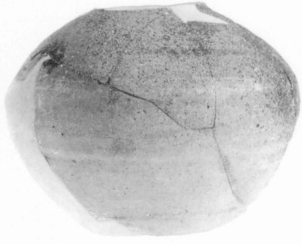
013
6



013
7



013
10



014
1



016
1



016
3



016
5



017
1



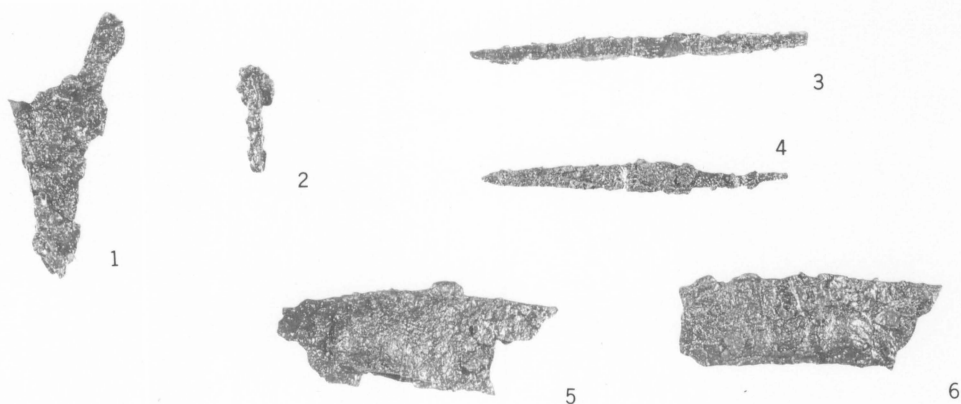
017
2



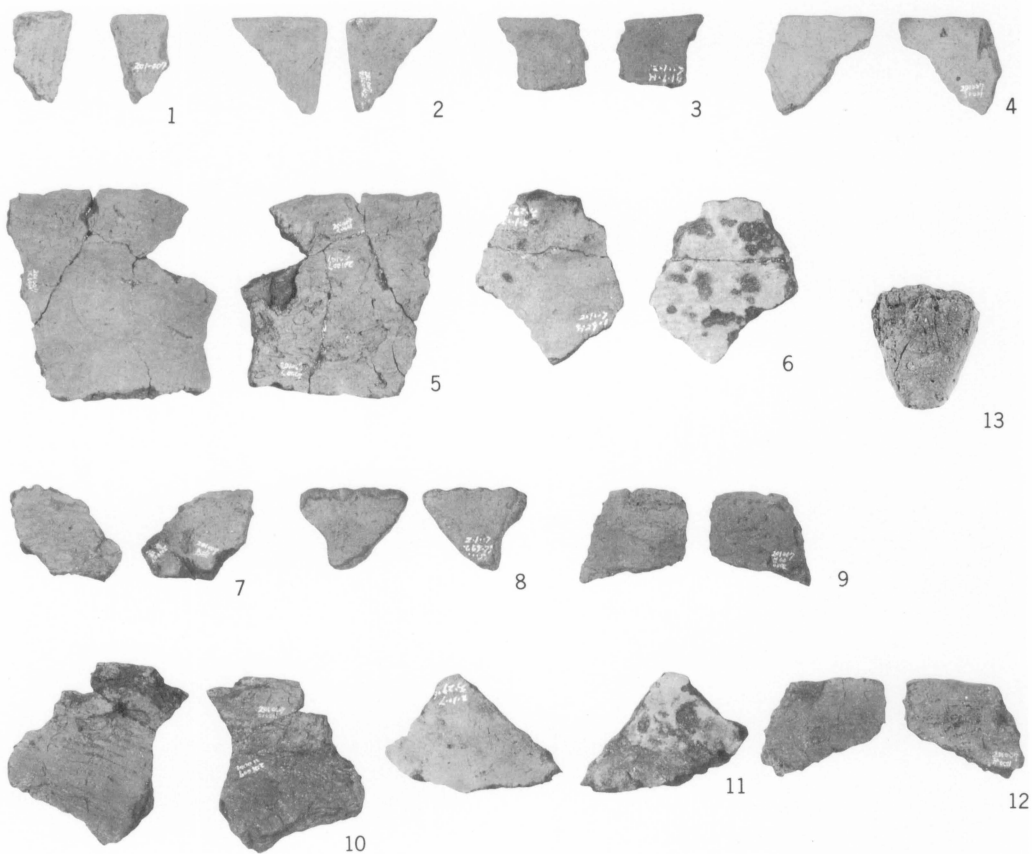
土壇
001号
1



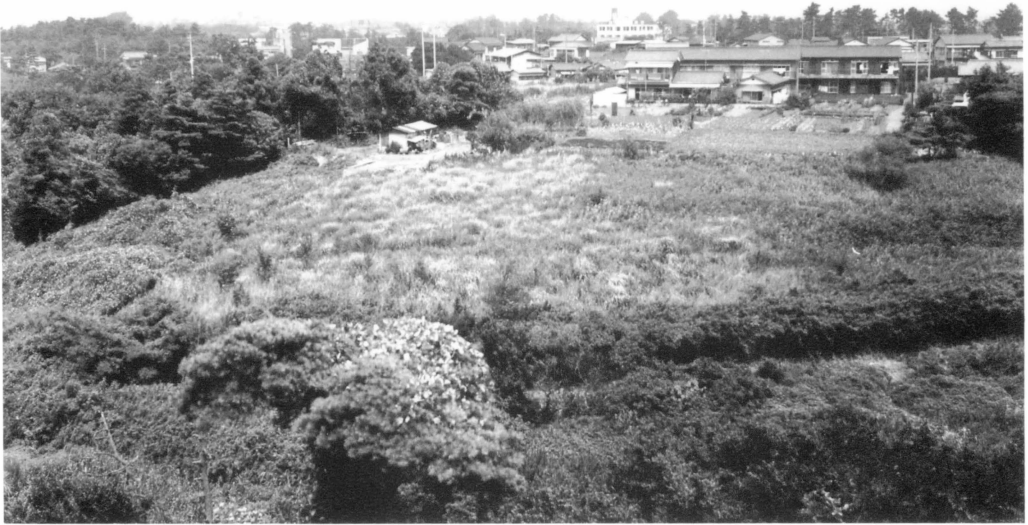
土壇
001号
3



1. 鷺谷津遺跡出土鉄製品 (1・2号住 2～3・11号住)
 (4・12号住 5～6・13号住)



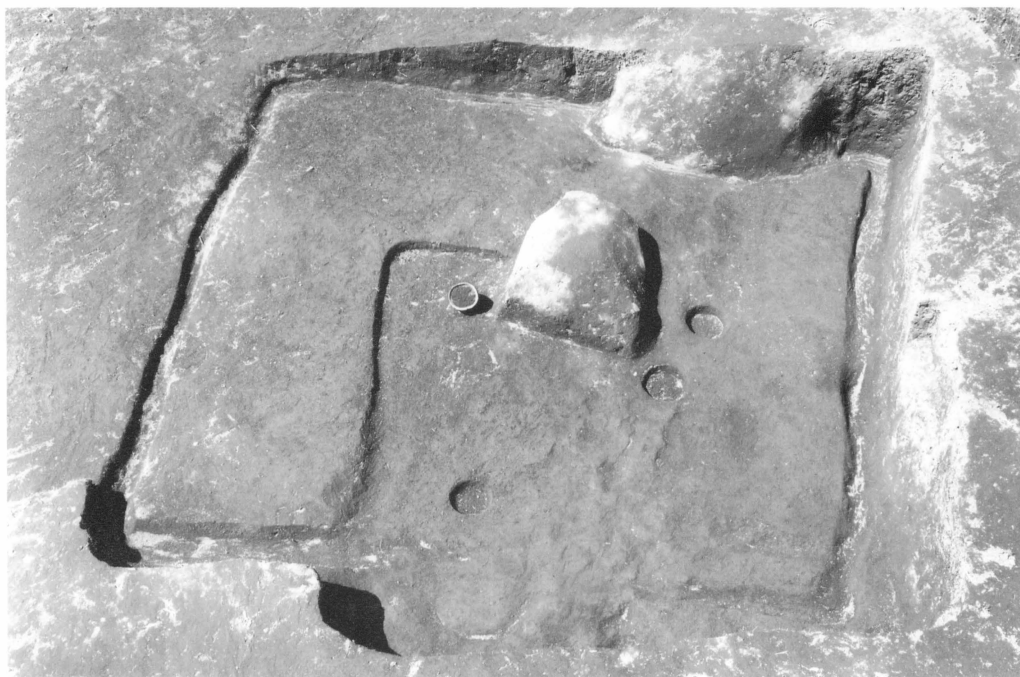
2. 鷺谷津遺跡出土縄文式土器



1. 遺跡遠景(調査前)



2. 遺跡遠景(調査後)



1. 001・002号住居跡全景



2. 001号住居跡遺物出土状況



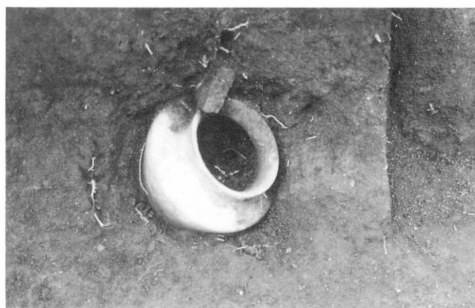
3. 001号住居跡カマド(調査後)



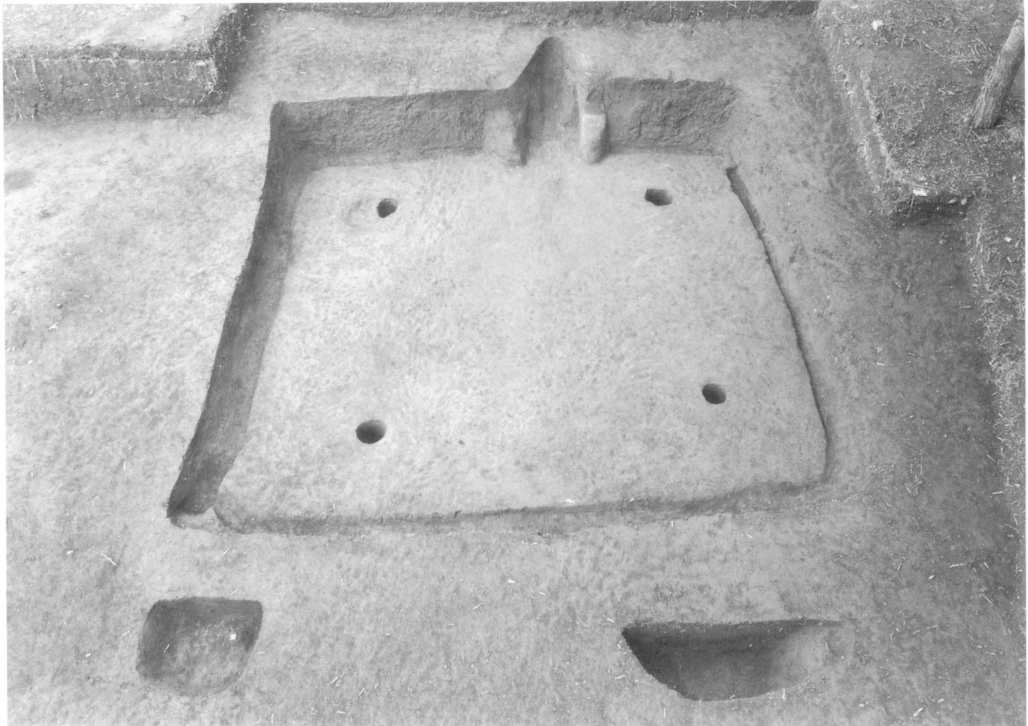
1. 003・004・005・006・007号住居跡，鍛冶跡全景



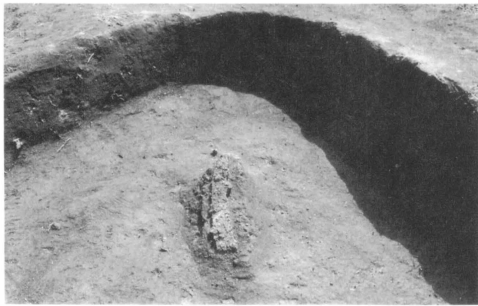
2. 005号住居跡カマド 土層断面



3. 006号住居跡遺物出土状況



1. 008号住居跡全景



2. 008号住居跡遺物出土状況



3. 008号住居跡遺物出土状況



4. 008号住居跡遺物出土状況



5. 008号住居跡カマド内遺物出土状況



1. 009・010号住居跡全景



2. 009号住居跡カマド(調査前)



3. 009号住居跡カマド土層断面



4. 009号住居跡遺物出土状況



1. 011号住居跡遺物出土状況



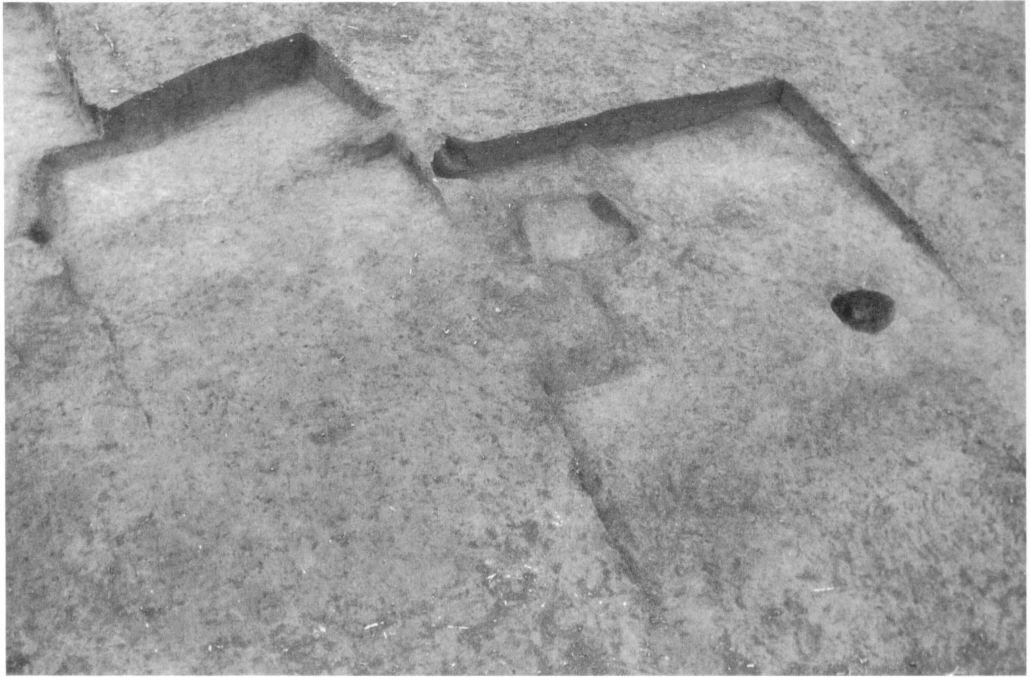
2. 012号住居跡全景



1. 013・014号住居跡全景



2. 015号住居跡全景



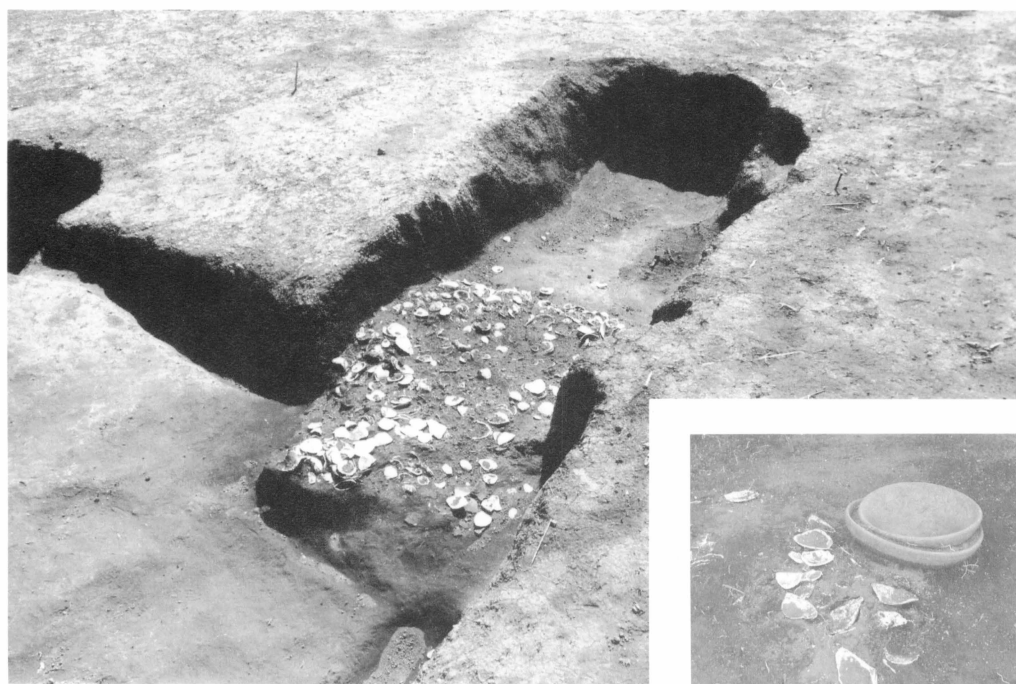
1. 016・017号住居跡全景



2. 018号住居跡全景

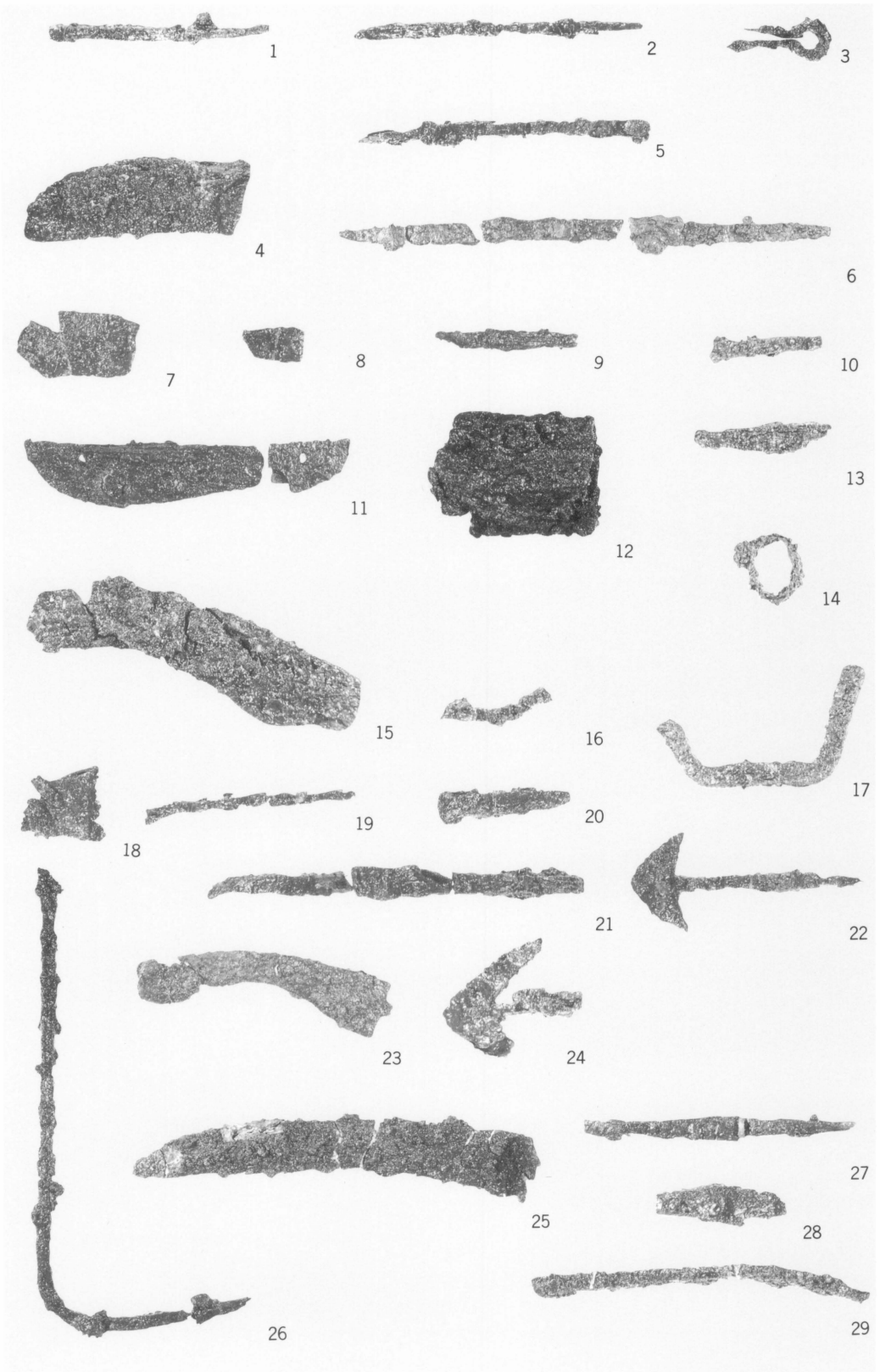


1. 019号住居跡全景

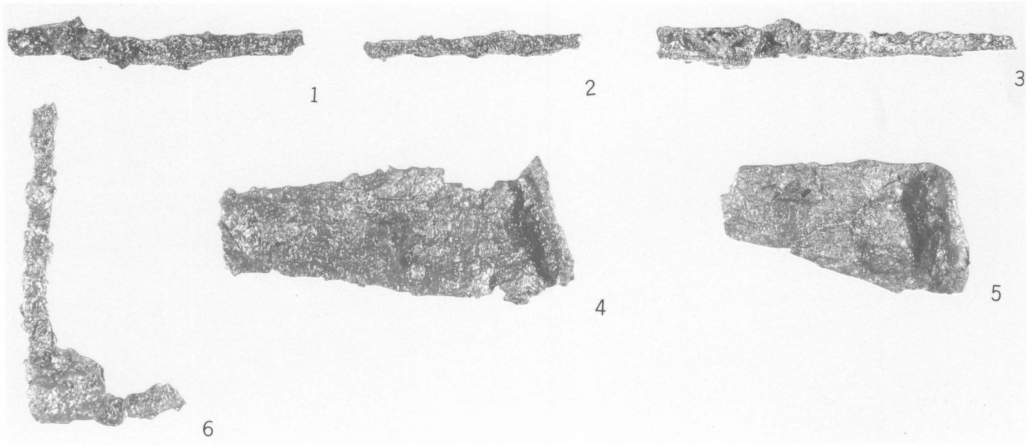


2. 001号土壙全景

3. 001号土壙遺物出土状況



観音塚遺跡出土鉄製品 (1 ~ 6 ・ 3号住 7 ~ 17 ・ 6号住) (21 ~ 22 ・ 5号住 23 ・ 7号住)
 (18 ・ 4号住 19 ~ 20 ・ 鍛冶跡) (24 ~ 25 ・ 8号住 26 ~ 29 ・ 9号住)



1. 観音塚遺跡出土鉄製品

(1・9号住 2～3・12号住)
(4～5・17号住 6・19号住)



2. 作業風景



1. 002号土壙遺物出土状況



2. 003号土壙全景



3. 004号土壙土層断面



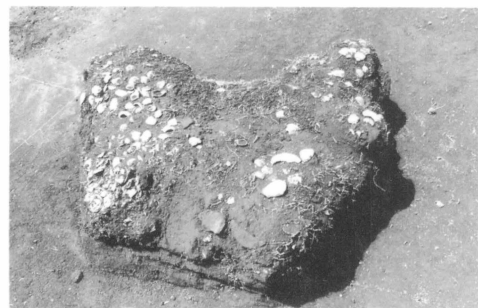
4. 005号土壙土層断面



5. 007号土壙土層断面



6. 010号土壙土層断面



7. 013号土壙全景



001
1



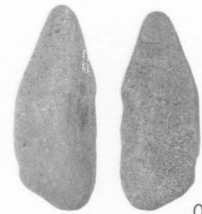
001
4



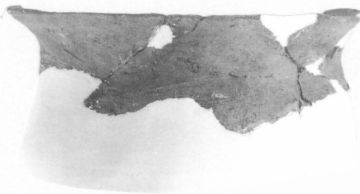
001
5



001
6



001
7



002
1



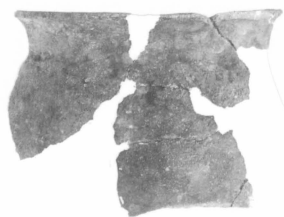
003
2



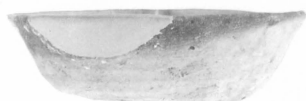
003
3



004
2



005
4



006
1



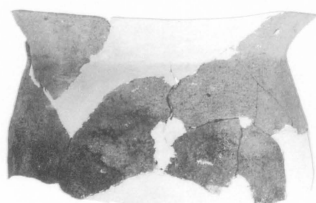
006
4



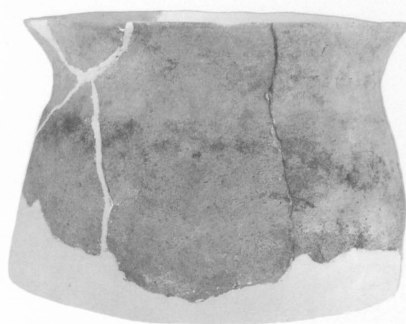
006
5



006
7



006
9



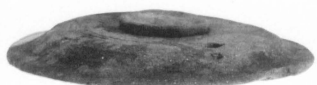
006
10



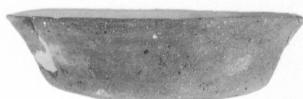
006
12



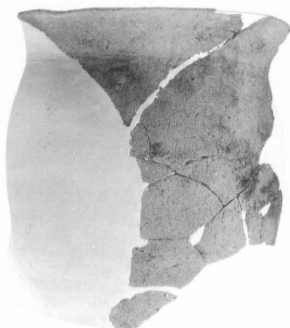
006
14



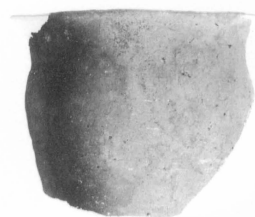
007
3



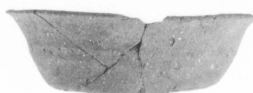
007
1



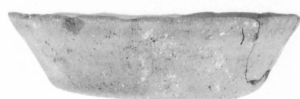
007
7



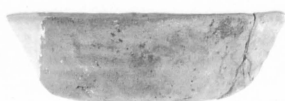
007
8



008
1



008
2



008
3



008
4



008
16



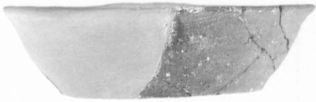
008
17



009
1



009
2



009
3



009
5



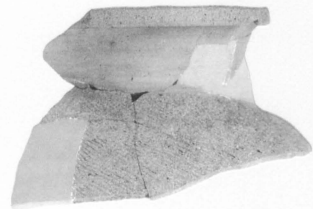
009
6



009
9



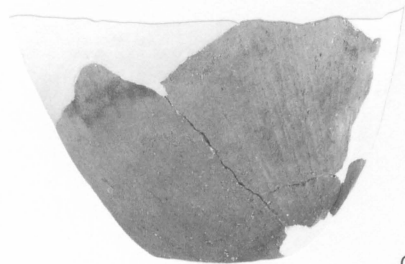
009
12



009
14



009
15



009
16



010
1



010
2



011
1



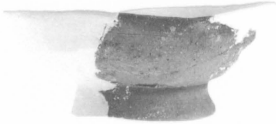
011
4



012
1



012
3



013
1



013
2



015
1



015
2



015
3



015
5



015
8



015
9



016
1



016
2



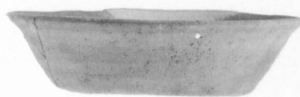
017
2



018
1



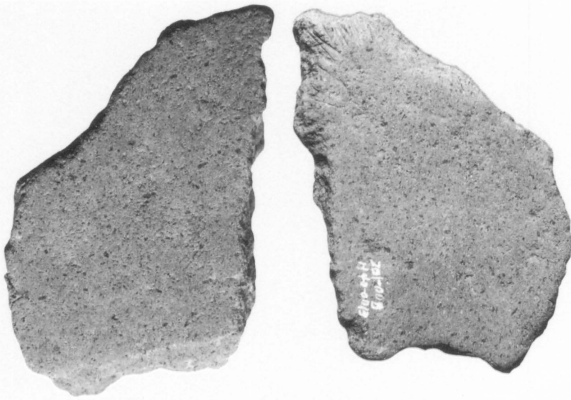
018
8



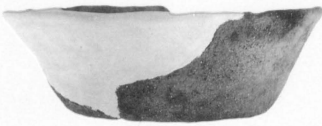
018
2



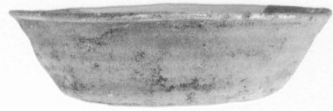
018
5



018
9



019
1



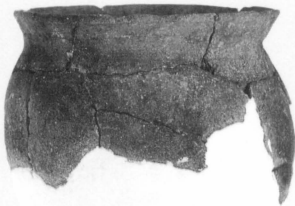
019
2



019
5



019
6



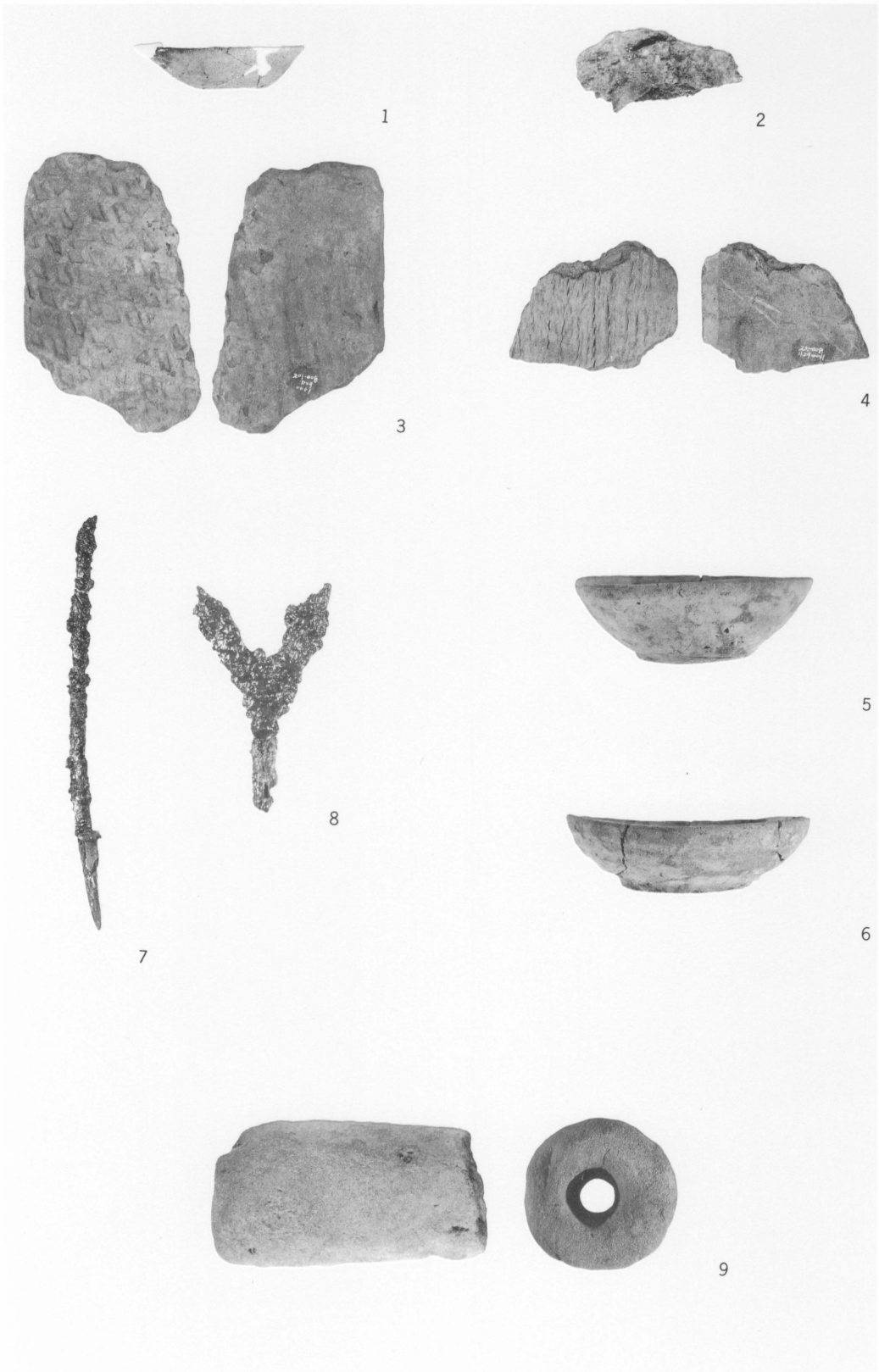
019
6



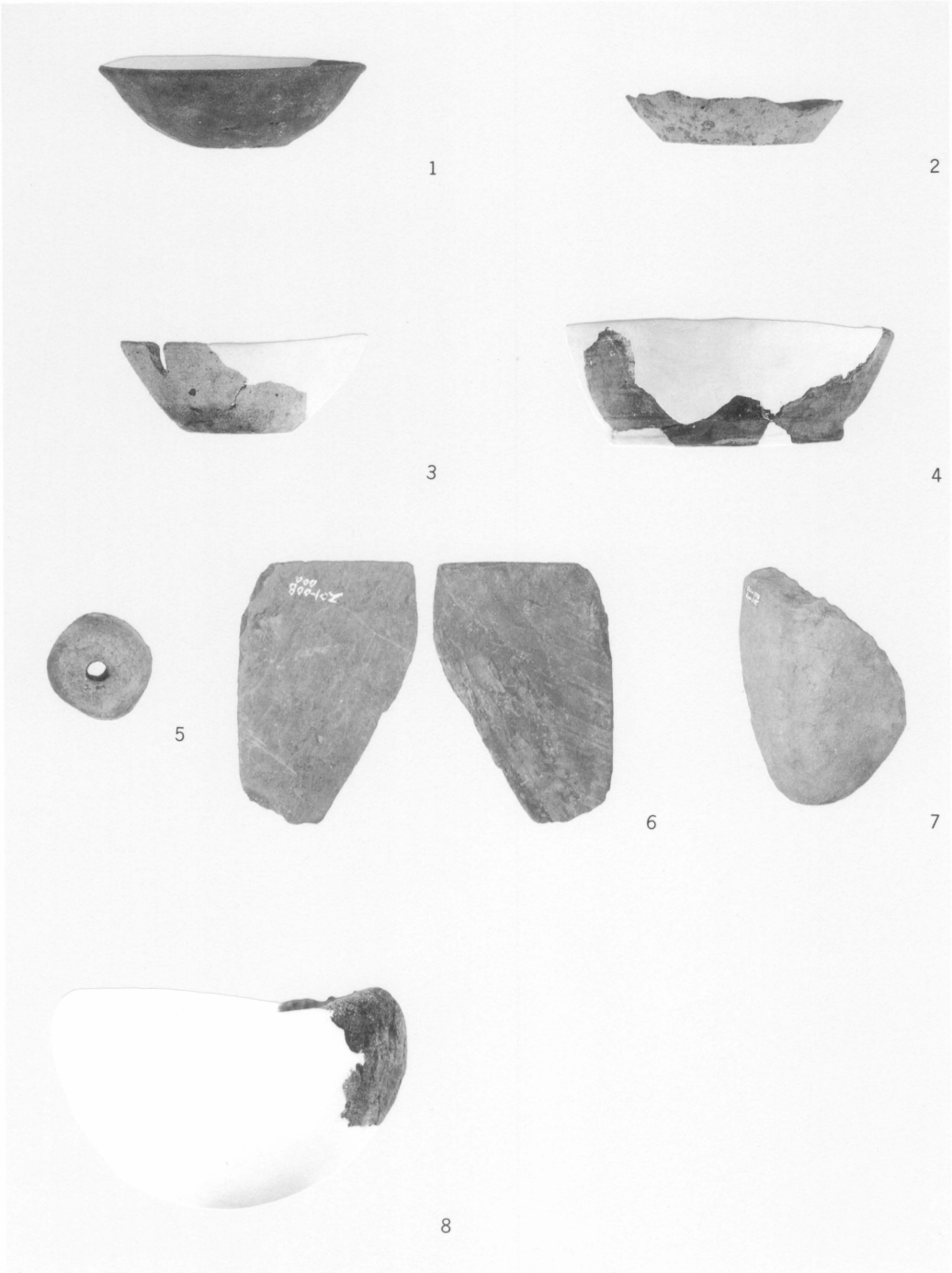
019
9



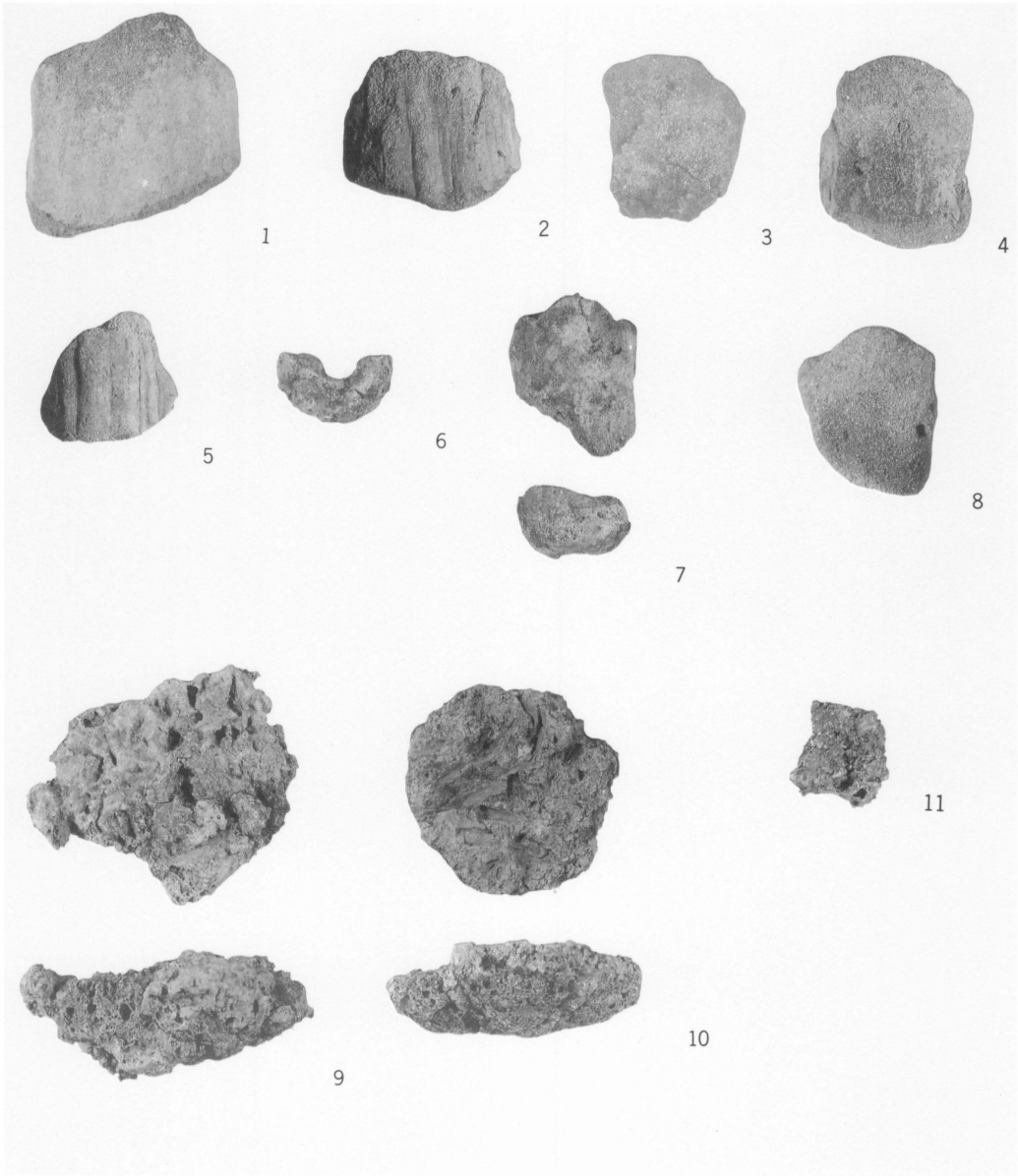
019
10



鍛冶跡(1~2), 瓦(3~4), 001(5~8)・002(9)号土壇出土遺物



観音塚遺跡出土遺物・埴埴 (1・5号土壙 2・8号土壙)
3~8・表採



羽口・埴形滓（羽口 1～8，埴形滓 9～11）



1. 鍛冶跡（調査前）



2. 鍛冶跡（調査中）



4. 鍛冶跡取り上げ作業



3. 鍛冶跡（調査後）



5. 鍛冶跡取り上げ作業



遺跡航空写真



1. 001号住居跡全景



2. 002号住居跡全景



1. 003号住居跡全景



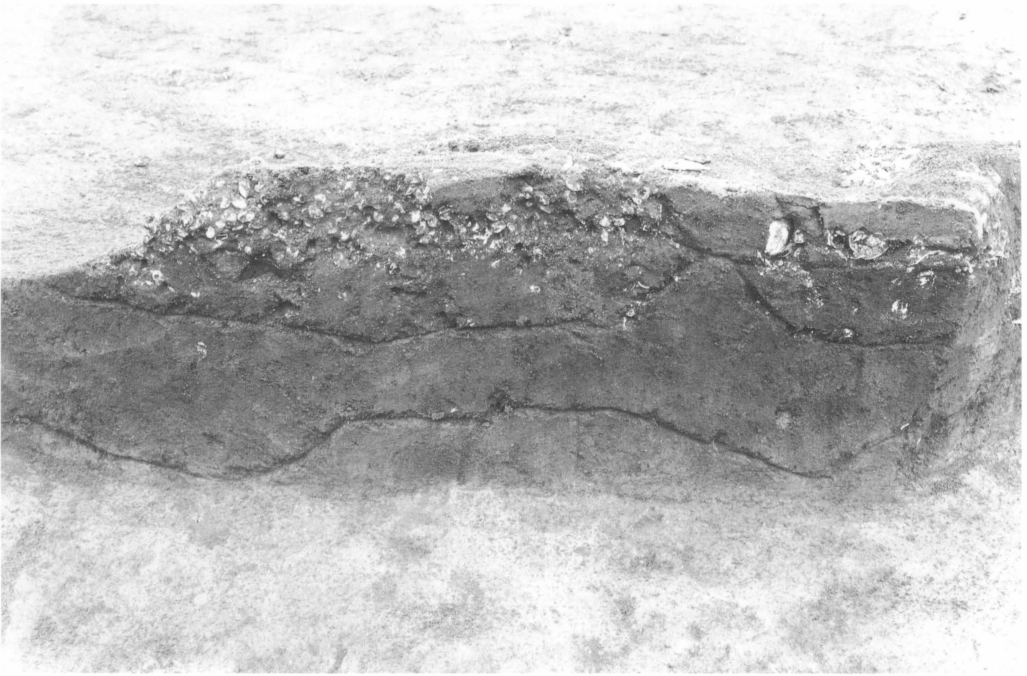
2. 003号住居跡遺物出土状況



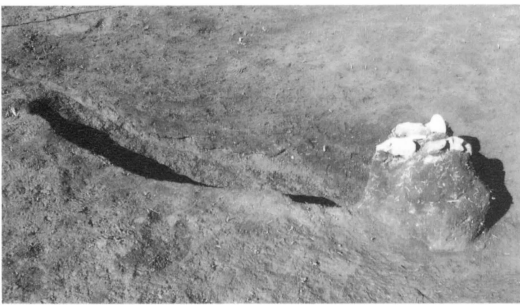
3. 003号住居跡土層断面



4. 003号住居跡カマド(調査後)



1. 001号土壤土層断面



2. 002号土壤土層断面



3. 003号土壤土層断面



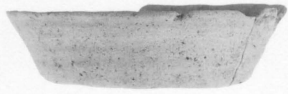
4. 004号土壤土層断面



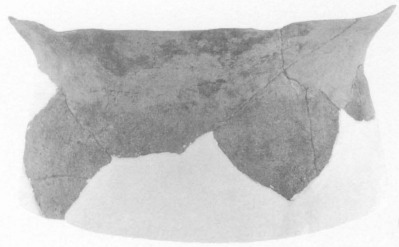
1. 集石遺構全景



2. 包含層遺物出土状況



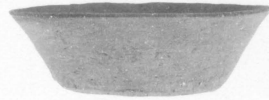
001
1



001
2



003
1



003
2



003
3



003
4



003
5



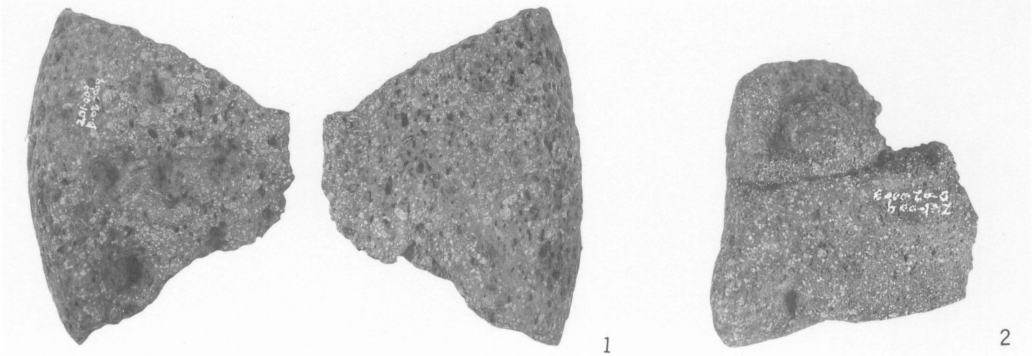
003
6



00
1



00
2



1. 002号土壌出土遺物



2. 遺跡近景（調査前）



遺跡航空写真（1）



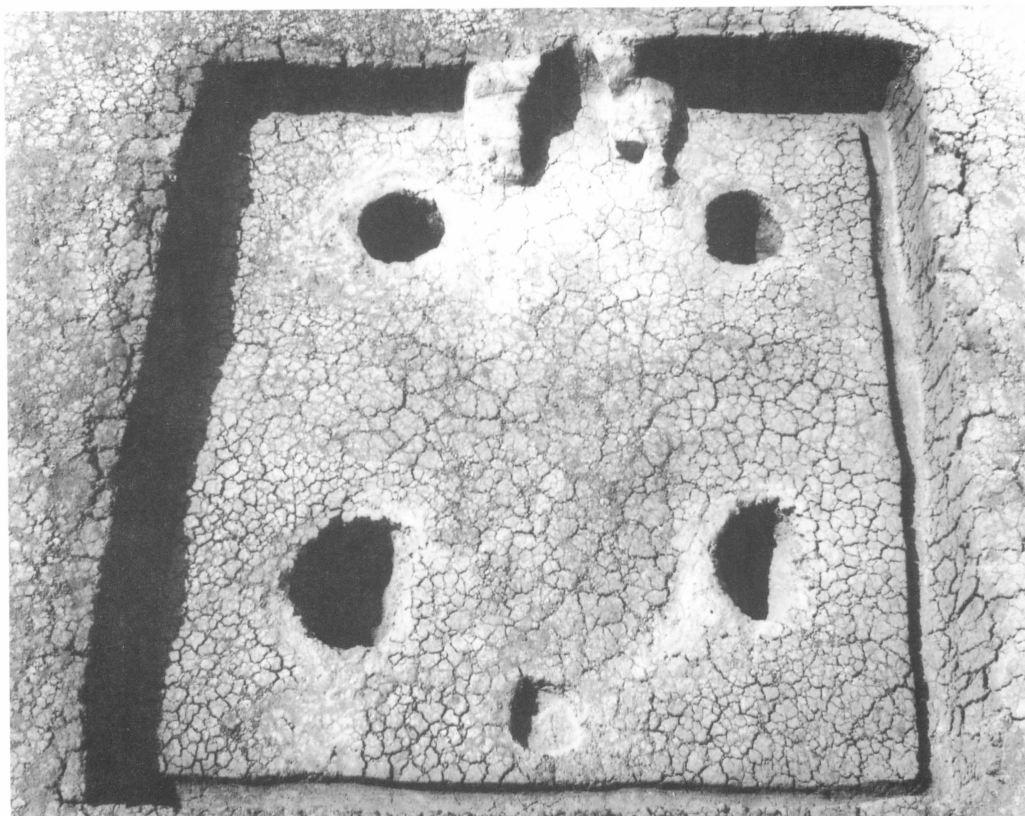
遺跡航空写真(2)



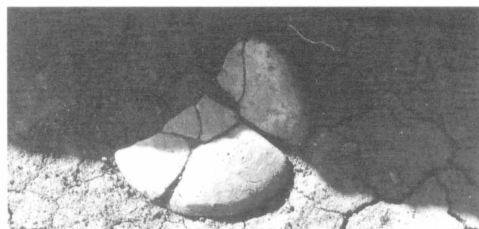
1. 塚全景 (削平後)



2. 土塁土層断面



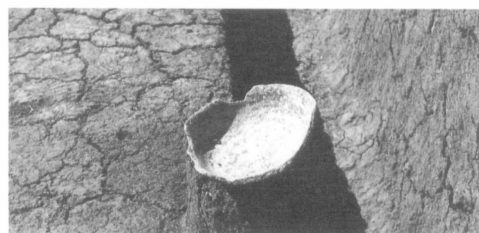
1. 001号住居跡全景



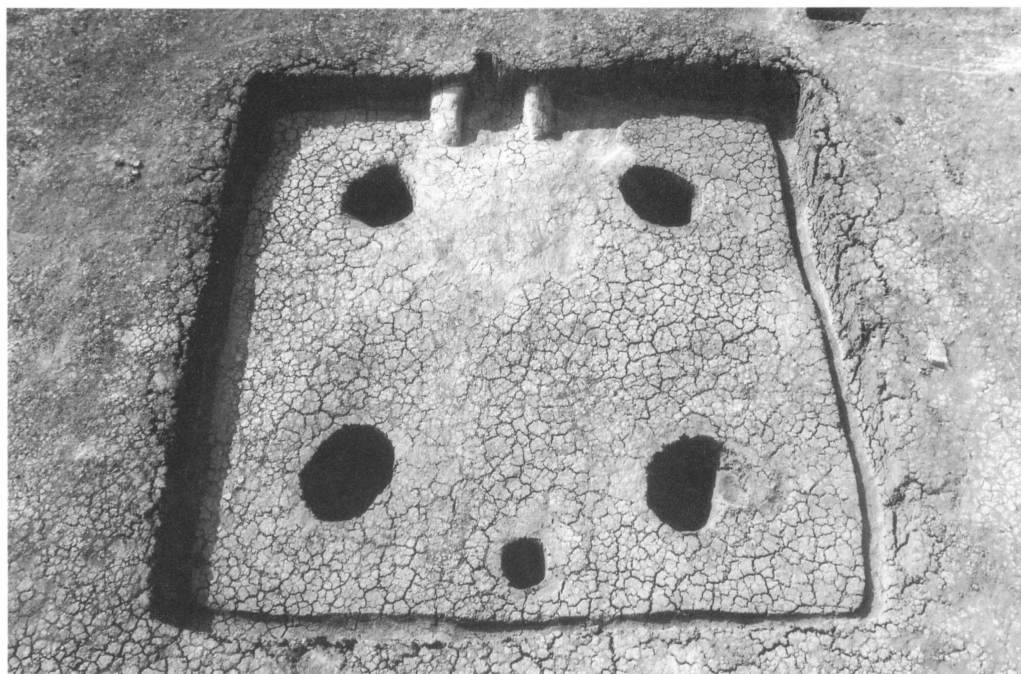
2. 001号住居跡遺物出土状況



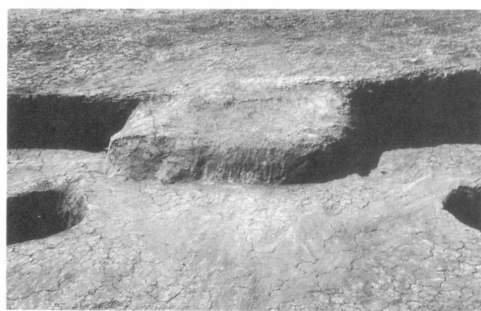
4. 001号住居跡カマド(調査前)



3. 001号住居跡遺物出土状況



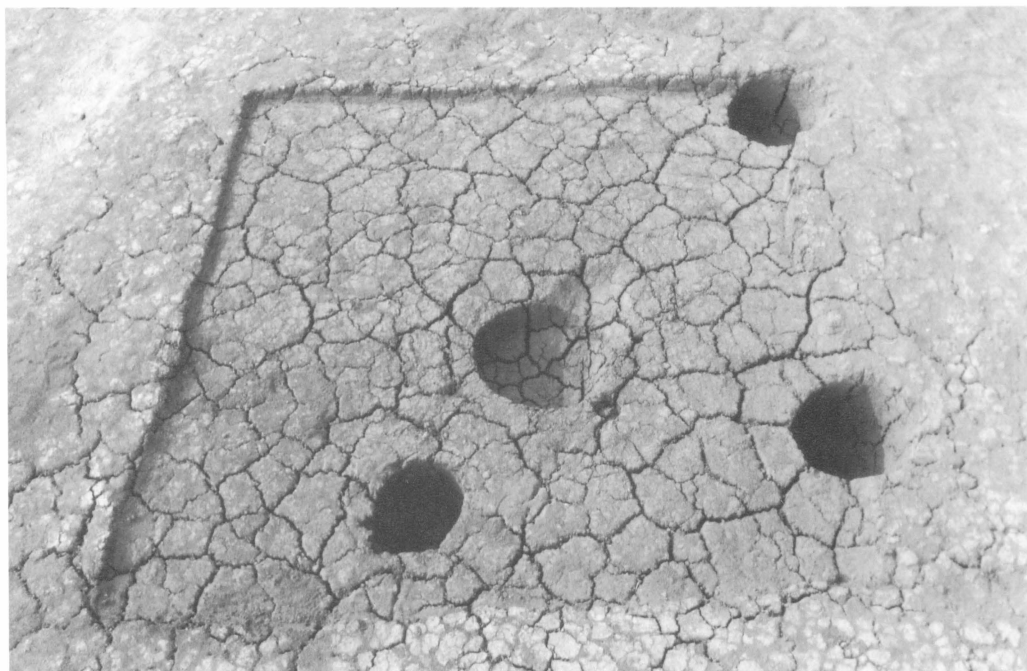
1. 002号住居跡全景



2. 002号住居跡カマド(調査前)



3. 002号住居跡カマド土層断面



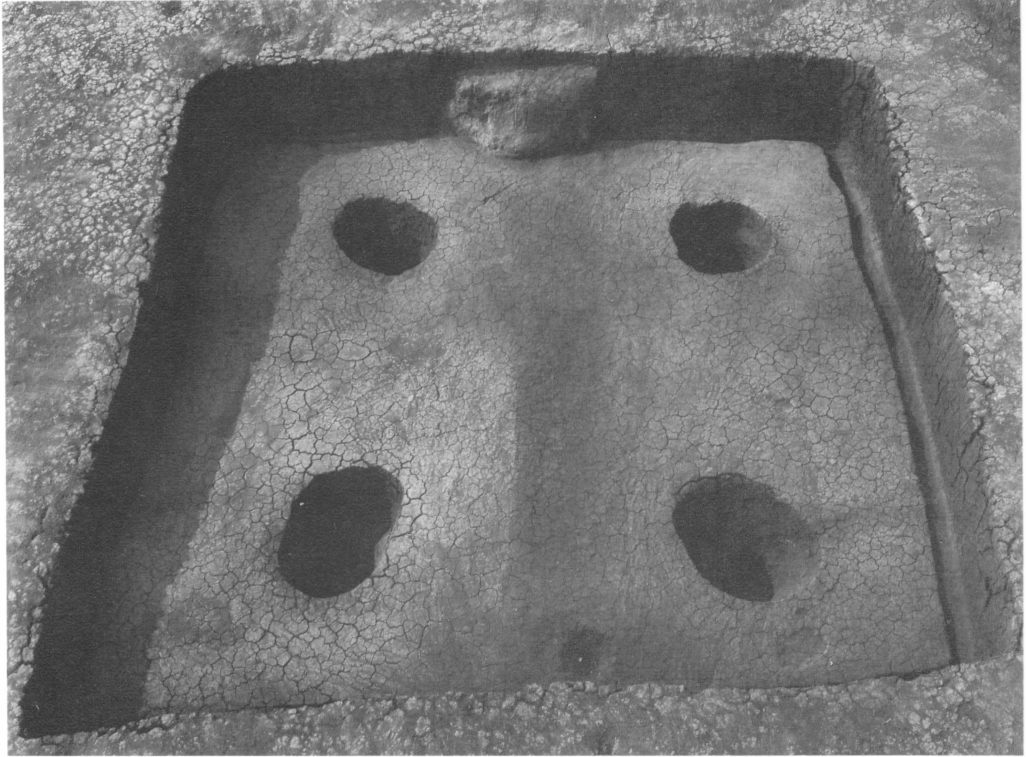
1. 003号住居跡全景



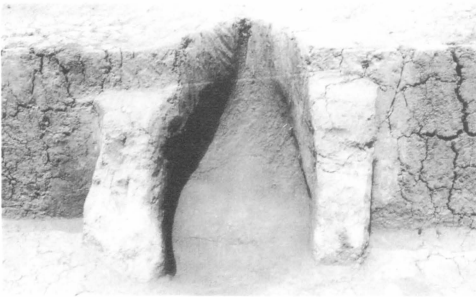
2. 003号住居跡炉・遺物出土状況



3. 003号住居跡炉土層断面



1. 004号住居跡全景



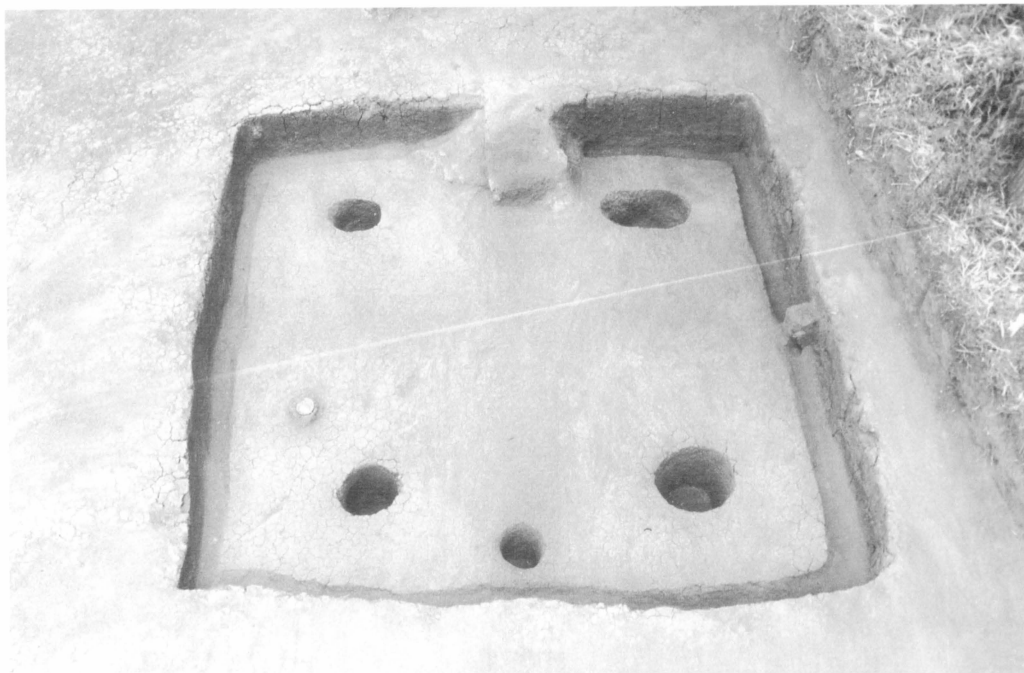
2. 004号住居跡カマド(調査後)



3. 004号住居跡カマド袖内部遺物出土状況



4. 004号住居跡カマド袖内部遺物出土状況



1. 005号住居跡全景



2. 005号住居跡遺物出土状況



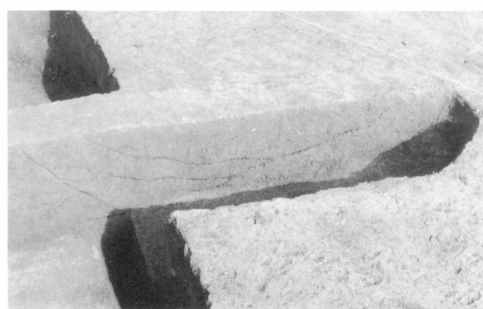
4. 005号住居跡カマド(調査後)



3. 005号住居跡遺物出土状況



1. 006号住居跡・001号土壙全景



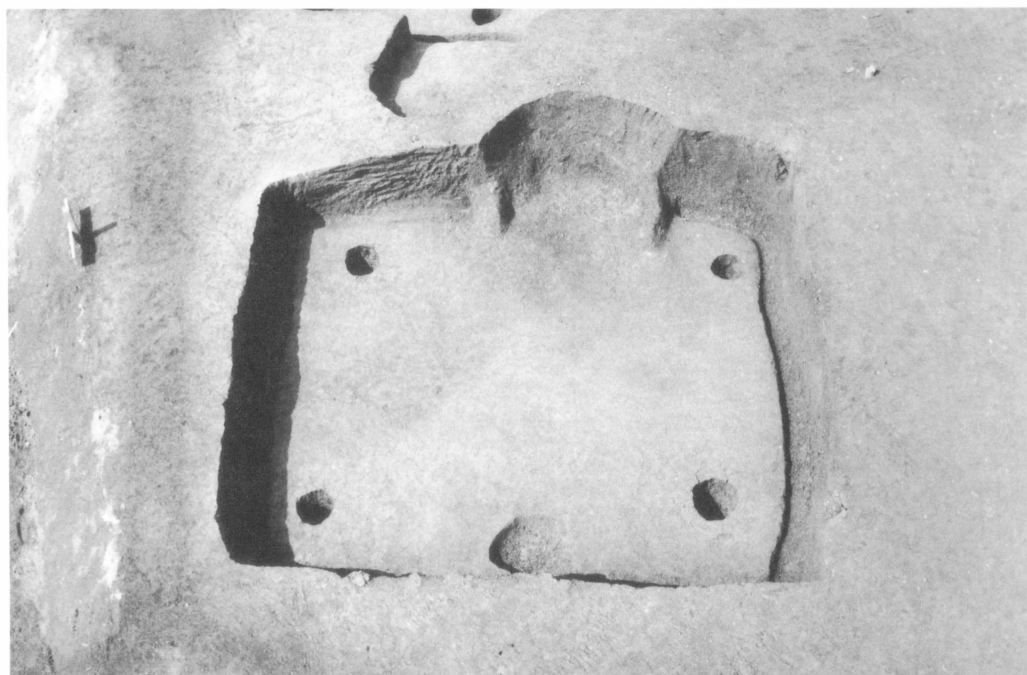
2. 001号土壙土層断面



3. 006号住居跡カマド（調査前）



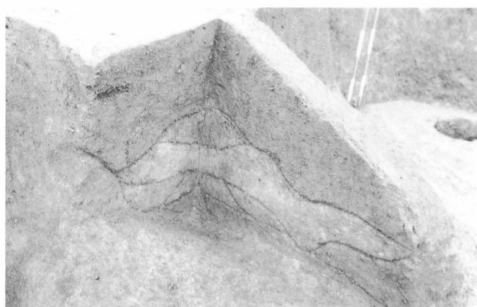
4. 006号住居跡カマド土層断面



1. 007号住居跡全景



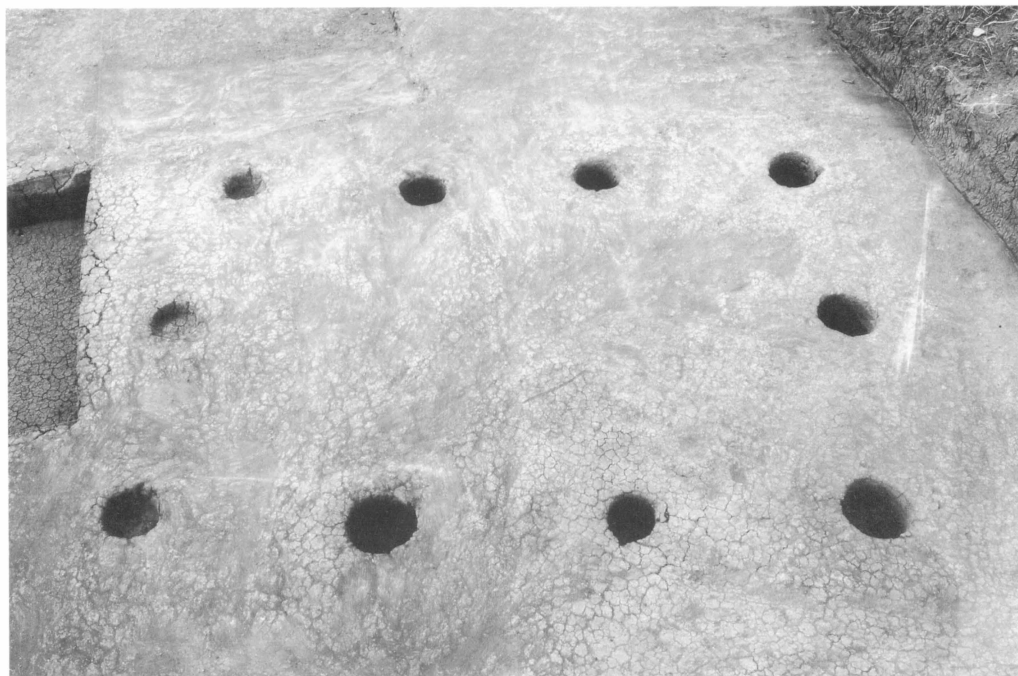
2. 007号住居跡カマド(調査前)



3. 007号住居跡カマド 土層断面



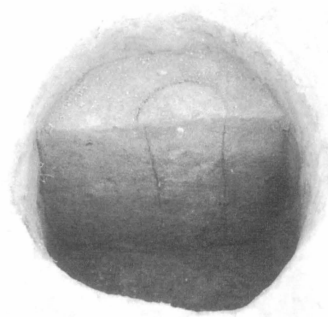
4. 007号住居跡カマド 土層断面



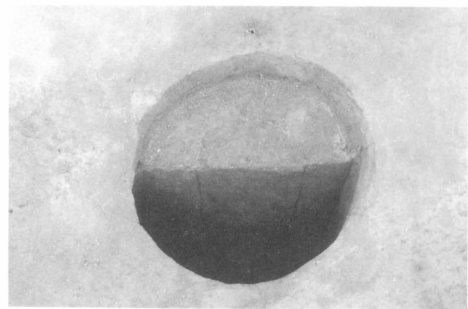
1. 001号掘立柱建物跡全景



2. 001号掘立柱建物跡柱穴土層断面



3. 001号掘立柱建物跡柱穴土層断面



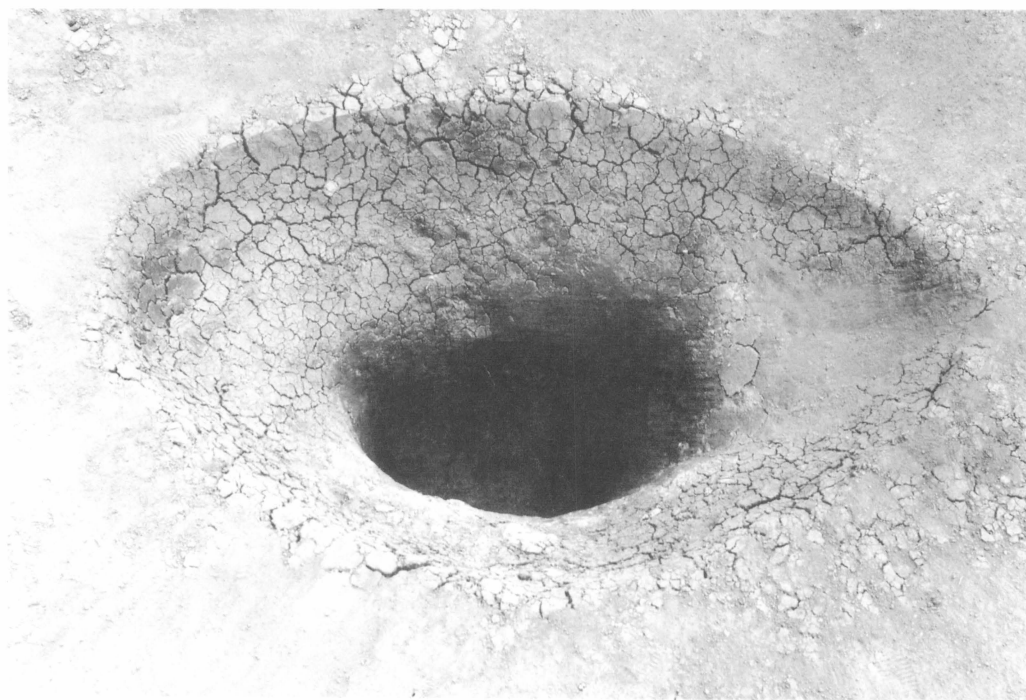
4. 001号掘立柱建物跡柱穴土層断面



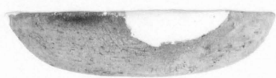
1. 001号溝土層断面(A-A')



2. 001号溝土層断面(B-B')



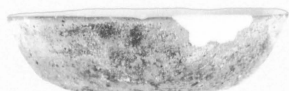
3. 002号土壙全景



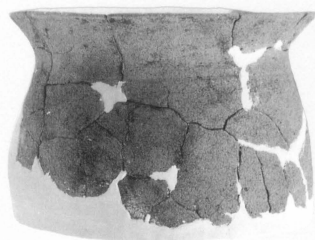
001
1



001
2



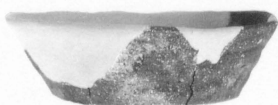
001
3



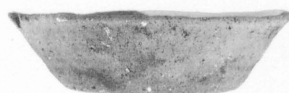
001
5



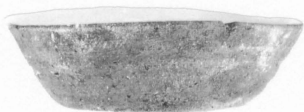
003
1



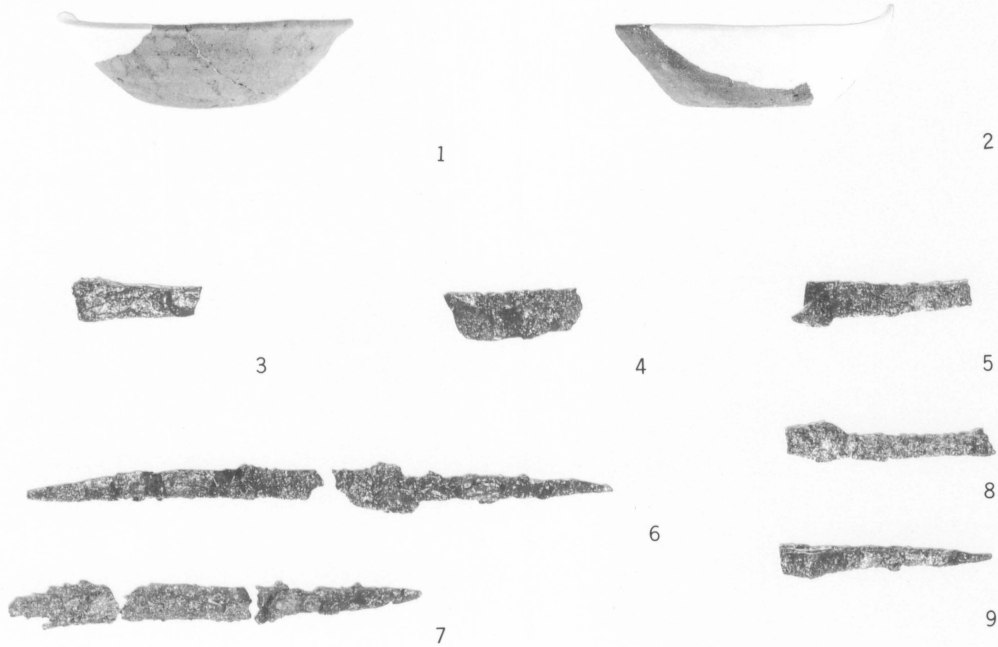
004
1



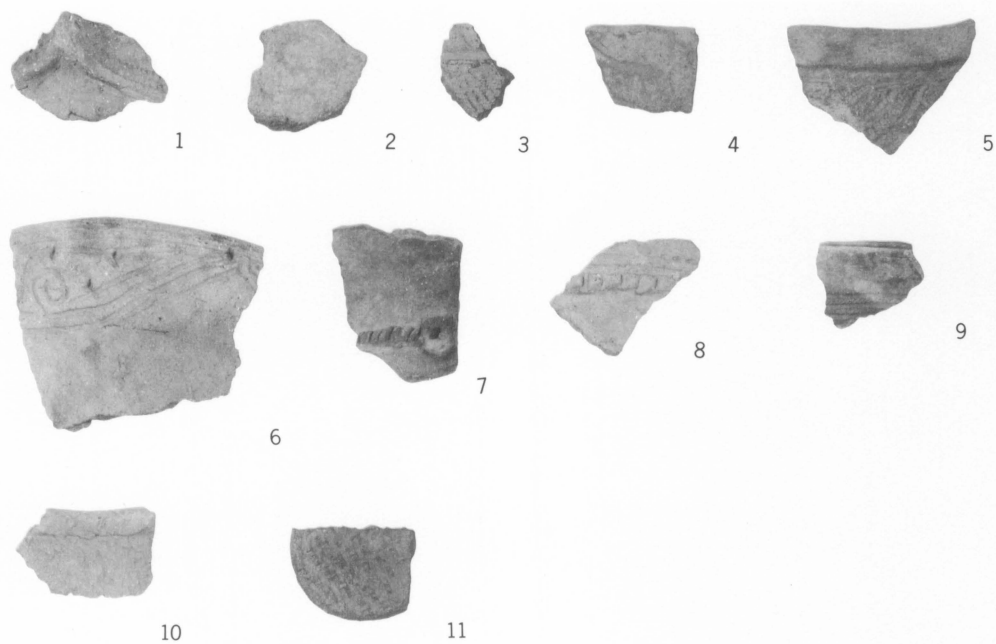
004
2



005
1



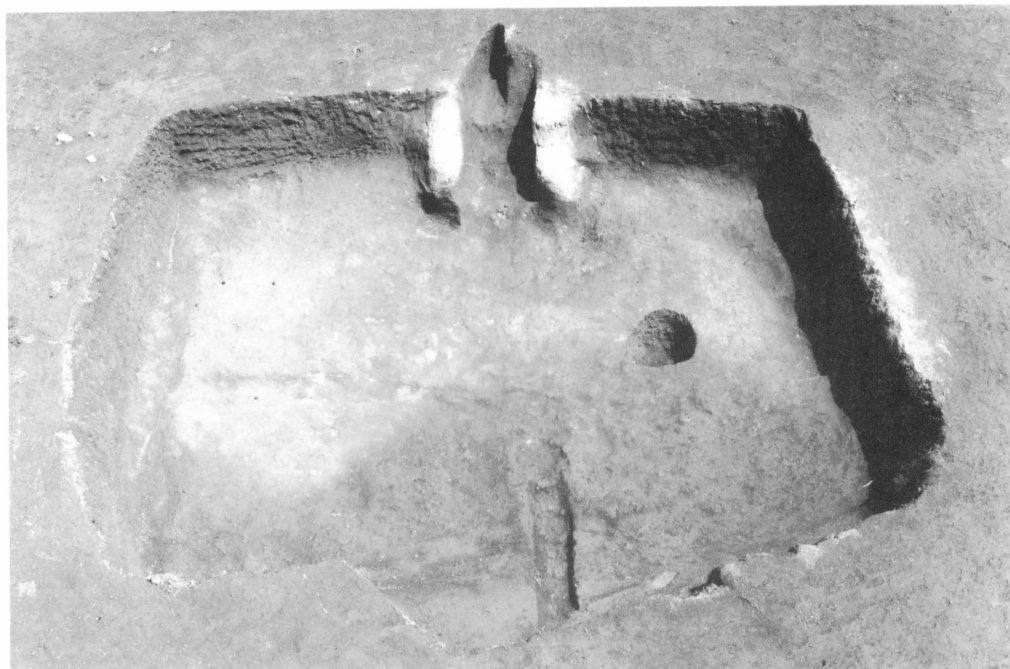
1. 表採遺物・住居跡出土鉄製品
 (1~2・表採 3・1号住)
 (4~5・2号住 6・3号住)
 (7~9・4号住)



2. 大森第一遺跡出土縄文式土器



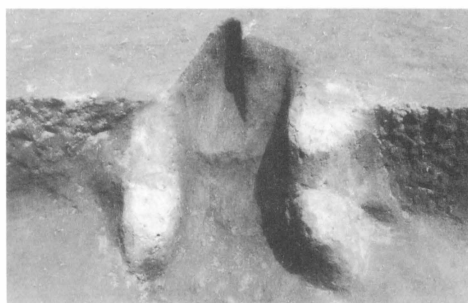
遺跡遠景（試掘調査中）



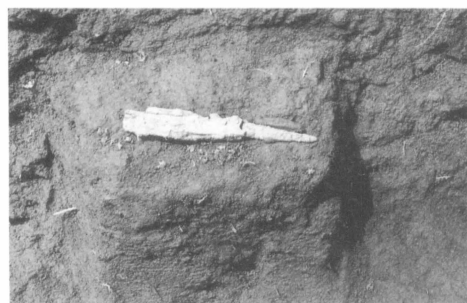
1. 001号住居跡全景



2. 001号住居跡遺物出土状況



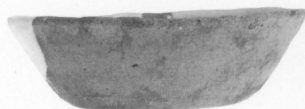
4. 001号住居跡カマド(調査後)



3. 001号住居跡遺物出土状況



001
1



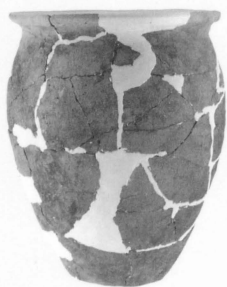
001
2



001
3



001
5



001
4



001
6



001
7



001
8

001号住居跡出土遺物



付図 千葉急行線内遺跡位置図 (1/5,000)

昭和59年 3 月25日 印刷

昭和59年 3 月31日 発行

千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書 I

発行 千葉急行電鉄株式会社

東京都台東区柳橋2-6-2

財団法人 千葉県文化財センター

千葉県千葉市亥鼻1-3-13

TEL 0472 (25) 6478

印刷 有限会社 正文社

千葉市都町2丁目5番5号

TEL 0472 (33) 2235
